神戸市

神出窯跡群Ⅲ

－神出鴨谷１号窯～３号窯・神出梟谷１号窯－

－一般国道１７５号神出バイパス建設事業に伴う発掘調査報告書（１）－

平成23(2011)年２月

兵庫県教育委員会

神戸市

神出窯跡群Ⅲ

－神出鴨谷１号窯～３号窯・神出梟谷１号窯－

－一般国道１７５号神出バイパス建設事業に伴う発掘調査報告書（１）－

平成23(2011)年２月

兵庫県教育委員会

例　言

1　本報告書は一般国道175号神出バイパス建設事業に伴い国土交通省近畿地方整備局の委託を受けて平成14年度に発掘調査を実施した神出窯跡群の発掘調査報告書である。

2　兵庫県教育委員会が発掘調査主体となり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（当時、現兵庫県立考古博物館）の森内秀造・別府洋二・松岡千寿が発掘調査を担当した。

3　兵庫県立考古博物館における遺跡調査番号は下記の通りである。

2001115（平成13年度確認調査）

2002060（平成14年度本発掘調査）

4　遺跡の所在地は下記の通りである。

神戸市西区神出町北字梟谷998－１他・同鴨谷773－４他

5　遺物番号の表示は本文・図版・図面を通して統一した。

6　図示した方位はすべて座標北を示し、水準はＴＰを使用した。国土座標系は第Ⅴ系を使用している。

7　斜面上の距離の測定値については、特に断らない限り水平長ではなく実長を用いた。

8　本報告書については、森内・別府・池田征弘・岡本一秀が分担執筆し、森内が責任編集を行った。また、編集については非常勤嘱託員　柏原美音・杉本淳子・黒岩紀子・高橋朋子・榎真菜美・坂東知奈の協力を得た。

9　遺構写真は調査担当者の撮影によるもので、航空写真は株式会社ジオテクノ関西に撮影委託したものである。また、遺物写真については、株式会社タニグチ　フォトに撮影委託した。

10　整理後の遺物については、兵庫県立考古博物館ならびに同博物館魚住分館に保管している。

11　調査および報告書の作成にあたっては、下記の方々のご指導とご教示を仰いだ。記して感謝の意を表するものである。

上原真人・上村和直・小川真理子・尾野善裕・木立雅朗・木村理恵・小林克也・鈴木久男・大洞真白・千種浩・西岡誠司・浜中有紀・平尾政幸・藤原学・三辻利一・望月精司・森本真一・吉岡康暢・吉川義彦・山本崇・渡辺晃宏（あいうえお順）

本文目次

第１章　調査に至る経緯と調査の経過
　第１節　調査に至る経緯 ……（別府洋二）　1
　第２節　調査の経過 ……（森内秀造・別府）　1
　　１．分布調査
　　２．確認調査
　　３．本発掘調査の経過
　第３節　整理作業の経過 ……（森内）　8

第２章　神出窯跡群について
　第１節　神出窯跡群の立地と規模 ……（池田征弘）　9
　第２節　窯跡の調査 ……（池田）　9

第３章　　遺構
　第１節　鴨谷支群と梟谷支群の立地 ……（森内）　13
　第２節　鴨谷１号窯 ……（森内）　13
　第３節　鴨谷２号窯 ……（森内）　15
　第４節　鴨谷３号窯 ……（森内）　19
　第５節　梟谷１号窯 ……（森内）　23
　第６節　マンボ ……（別府）　25

第４章　出土遺物
　第１節　窯跡群出土遺物の分類とその基準 ……（森内）　27
　第２節　鴨谷１号窯出土遺物 ……（森内）　32
　第３節　鴨谷２号窯出土遺物 ……（森内・池田）　36
　第４節　鴨谷３号窯出土遺物 ……（森内）　41
　第５節　梟谷１号窯出土遺物 ……（森内・池田）　52
　第６節　鴨谷１号窯・２号窯地区出土木製品 ……（別府）　54

第５章　自然科学的分析
　Ⅰ　神出窯跡群鴨谷支群出土炭化材の樹種同定　　小林克也（パレオ・ラボ）……55
　Ⅱ　窯体断面の剥ぎ取り作業　　岡本一秀　……64

第６章　総括
　第１節　神出窯跡群における窯体構造について ……（森内）　67
　第２節　出土遺物の検討 ……（森内）　70
　第３節　瓦の検討 ……（池田）　85
　第４節　まとめ ……（森内）　99

出土遺物一覧表 ……103
抄録（巻末）

遺構図面目次

遺構図面１　調査区全体図
遺構図面２　鴨谷地区全体図
遺構図面３　鴨谷１・２号窯　地区全体図
遺構図面４　鴨谷１号窯　地形測量図
遺構図面５　鴨谷１号窯　地形縦断図
遺構図面６　鴨谷１号窯　窯体埋土層断面図
遺構図面７　鴨谷１号窯　最終操業床面図（第２床面）
遺構図面８　鴨谷１号窯　操業当初床面図（第１床面）
遺構図面９　鴨谷２号窯　地形測量図
遺構図面10　鴨谷２号窯　地形縦断図
遺構図面11　鴨谷２号窯　窯体埋土層平面図・縦断図
遺構図面12　鴨谷２号窯　窯体埋土層横断図
遺構図面13　鴨谷２号窯　窯体　最終床面遺物出土状況
遺構図面14　鴨谷２号窯　窯体縦断面
遺構図面15　鴨谷２号窯　窯体　当初床面
遺構図面16　鴨谷２号窯　窯体　架構痕跡
遺構図面17　鴨谷２号窯　作業場跡
遺構図面18　鴨谷３号窯　地形測量図
遺構図面19　鴨谷３号窯　灰原横断図
遺構図面20　鴨谷３号窯　窯体埋土層断面図
遺構図面21　鴨谷３号窯　窯体図
遺構図面22　鴨谷３号窯　窯体（第１床面・第２床面）
遺構図面23　鴨谷３号窯　窯体図　架構痕跡全体図
遺構図面24　鴨谷３号窯　窯体図　架構痕跡横断図
遺構図面25　鴨谷３号窯　窯体周辺灰原断面図
遺構図面26　鴨谷３号窯　作業場平面図・横断図
遺構図面27　鴨谷３号窯　窯体焚口覆屋柱穴
遺構図面28　梟谷１号窯　地形測量図
遺構図面29　梟谷１号窯　窯体図
遺構図面30　梟谷１号窯　灰原断面図
遺構図面31　梟谷１号窯　瓦出土状況図・埋土層断面図
遺構図面32　梟谷１号窯　瓦列段および窯詰め状況図
遺構図面33　梟谷１号窯　瓦列段
遺構図面34　梟谷１号窯　窯体焚口覆屋柱穴
遺構図面35　マンボ

遺物図面目次

鴨谷 1 号窯

遺物図面 1　窯体出土須恵器
遺物図面 2　灰原出土須恵器 1
遺物図面 3　灰原出土須恵器 2
遺物図面 4　灰原出土須恵器 3
遺物図面 5　灰原出土須恵器 4
遺物図面 6　灰原出土須恵器 5
遺物図面 7　灰原出土須恵器 6
遺物図面 8　灰原出土須恵器 7
遺物図面 9　灰原出土須恵器 8
遺物図面10　灰原出土須恵器 9
遺物図面11　灰原出土須恵器10
遺物図面12　灰原出土須恵器11

鴨谷 2 号窯

遺物図面13　窯体出土須恵器 1
遺物図面14　窯体出土須恵器 2
遺物図面15　窯体出土須恵器 3
遺物図面16　窯体出土須恵器 4
遺物図面17　灰原出土須恵器 1
遺物図面18　灰原出土須恵器 2
遺物図面19　灰原出土須恵器 3
遺物図面20　灰原出土須恵器 4
遺物図面21　灰原出土須恵器 5
遺物図面22　灰原出土須恵器 6
遺物図面23　灰原出土須恵器 7
遺物図面24　灰原出土須恵器 8
遺物図面25　灰原出土須恵器 9
遺物図面26　灰原出土須恵器10
遺物図面27　灰原出土須恵器11
遺物図面28　灰原出土須恵器12
遺物図面29　灰原出土須恵器13
遺物図面30　灰原出土須恵器14
遺物図面31　灰原出土須恵器15
遺物図面32　灰原出土須恵器16
遺物図面33　窯体・灰原出土軒瓦
遺物図面34　灰原出土平瓦 1
遺物図面35　灰原出土平瓦 2
遺物図面36　灰原出土平瓦 3
遺物図面37　灰原出土平瓦 4
遺物図面38　灰原出土平瓦 5
遺物図面39　灰原出土平瓦 6
遺物図面40　灰原出土平瓦 7
遺物図面41　灰原出土平瓦 8
遺物図面42　灰原出土平瓦 9
遺物図面43　灰原 3 ・ 4 区出土鉢（混入）
遺物図面44　焼台 1
遺物図面45　焼台 2
遺物図面46　焼台 3
遺物図面47　焼台 4

鴨谷 3 号窯

遺物図面48　第 1 次操業　第 2 次窯体
　盛土層下灰層出土須恵器・瓦
遺物図面49　第 1 次操業　灰層出土須恵器 1
遺物図面50　第 1 次操業　灰層出土須恵器 2
遺物図面51　第 1 次操業　作業場跡出土須恵器 1
遺物図面52　第 1 次操業　作業場跡出土須恵器 2
遺物図面53　第 1 次操業　作業場跡出土須恵器 3
遺物図面54　第 1 次操業　作業場跡出土須恵器 4
遺物図面55　灰原出土第 1 次操業須恵器 1
遺物図面56　灰原出土第 1 次操業須恵器 2
遺物図面57　灰原出土第 1 次操業須恵器 3
遺物図面58　第 2 次操業窯体
　第 1 床面出土須恵器
遺物図面59　第 2 次操業窯体
　第 1 ～第 2 床面間層出土須恵器 1
遺物図面60　第 2 次操業窯体
　第 1 ～第 2 床面間層出土須恵器 2
遺物図面61　第 2 次操業窯体
　第 1 ～第 2 床面間層出土須恵器 3
遺物図面62　第 2 次操業窯体
　第 2 ～第 3 床面間層出土須恵器 1
遺物図面63　第 2 次操業窯体
　第 2 ～第 3 床面間層出土須恵器 2
遺物図面64　第 2 次操業窯体
　第 3 ・ 4 床面出土須恵器 1
遺物図面65　第 2 次操業窯体
　第 3 ・ 4 床面出土須恵器 2
遺物図面66　第 2 次操業窯体出土須恵器 1
遺物図面67　第 2 次操業窯体出土須恵器 2
遺物図面68　灰原出土第 2 次操業須恵器 1
遺物図面69　灰原出土第 2 次操業須恵器 2
遺物図面70　灰原出土第 2 次操業須恵器 3
遺物図面71　灰原出土第 2 次操業須恵器 4
遺物図面72　灰原出土第 2 次操業須恵器 5

遺物図面73　灰原出土第２次操業須恵器６
遺物図面74　灰原出土第２次操業須恵器７
遺物図面75　灰原出土第２次操業須恵器８
遺物図面76　灰原出土第２次操業須恵器９
遺物図面77　灰原出土第２次操業須恵器10
遺物図面78　灰原出土第２次操業須恵器11
遺物図面79　灰原出土第２次操業須恵器12
遺物図面80　灰原出土第２次操業須恵器13
遺物図面81　灰原出土第２次操業須恵器14
遺物図面82　灰原出土第２次操業須恵器15
遺物図面83　灰原出土第２次操業須恵器16
遺物図面84　灰原出土第２次操業須恵器17

梟谷１号窯

遺物図面85　窯体出土須恵器
遺物図面86　灰原出土須恵器１
遺物図面87　灰原出土須恵器２
遺物図面88　灰原出土須恵器３
遺物図面89　灰原出土須恵器４
遺物図面90　灰原出土須恵器５
遺物図面91　灰原出土須恵器６
遺物図面92　谷堆積土層出土須恵器１
遺物図面93　谷堆積土層出土須恵器２
遺物図面94　窯体出土軒瓦
遺物図面95　窯体・灰原出土軒瓦
遺物図面96　灰原出土軒瓦
遺物図面97　窯体出土丸瓦１
遺物図面98　窯体出土丸瓦２
遺物図面99　窯体出土丸瓦３
遺物図面100　窯体出土丸瓦４
遺物図面101　窯体出土丸瓦５
遺物図面102　窯体出土丸瓦６
遺物図面103　窯体出土丸瓦７
遺物図面104　窯体出土丸瓦８
遺物図面105　谷堆積土層出土丸瓦
遺物図面106　灰原出土丸瓦１
遺物図面107　灰原出土丸瓦２
遺物図面108　灰原出土丸瓦３
遺物図面109　窯体出土平瓦１
遺物図面110　窯体出土平瓦２
遺物図面111　窯体出土平瓦３
遺物図面112　窯体出土平瓦４
遺物図面113　窯体出土平瓦５
遺物図面114　窯体出土平瓦６
遺物図面115　窯体出土平瓦７
遺物図面116　窯体出土平瓦８
遺物図面117　窯体出土平瓦９
遺物図面118　窯体出土平瓦10
遺物図面119　窯体出土平瓦11
遺物図面120　窯体出土平瓦12
遺物図面121　窯体出土平瓦13
遺物図面122　窯体出土平瓦14
遺物図面123　窯体出土平瓦15
遺物図面124　窯体出土平瓦16
遺物図面125　窯体出土平瓦17
遺物図面126　窯体出土平瓦18
遺物図面127　窯体出土平瓦19
遺物図面128　灰原出土平瓦１
遺物図面129　灰原出土平瓦２
遺物図面130　灰原出土平瓦３
遺物図面131　灰原出土平瓦４

鴨谷１・２号地区

遺物図面132　灰原出土木製品

遺構写真図版目次

遺構図版１　ａ）調査区遠景　ｂ）調査区遠景
遺構図版２　調査区近接
遺構図版３　鴨谷１～３号窯全景
遺構図版４　鴨谷１号窯・２号窯全景
遺構図版５　鴨谷３号窯全景
遺構図版６　梟谷１号窯全景
遺構図版７　ａ）鴨谷１・２号窯発掘調査前全景　ｂ）鴨谷３号窯発掘調査前全景
ｃ）鴨谷３号窯作業場跡発掘調査前全景

鴨谷１号窯

遺構図版８　ａ）１号窯検出状況　ｂ）１号窯・２号窯検出状況
遺構図版９　ａ）窯体横断セクション１・２　ｂ）窯体横断セクション１
ｃ）窯体横断セクション２
遺構図版10　ａ）窯体・灰原全景（最終操業面）　ｂ）窯体（最終操業面）
遺構図版11　ａ）窯体排煙部（最終操業時）　ｂ）窯体焼成部～燃焼部（最終操業時）
ｃ）最終操業床面と当初床面
遺構図版12　ａ）最終操業床面～当初床面縦断セクション
ｂ）最終操業床面～当初床面横断セクション１　ｃ）操業当初窯体床面
遺構図版13　ａ）灰原遺物出土状況１　ｂ）灰原遺物出土状況２　ｃ）灰原遺物出土状況３

鴨谷１号窯・鴨谷２号窯

遺構図版14　ａ）１号窯・２号窯検出状況　ｂ）１号窯・２号窯完掘状況
遺構図版15　ａ）１号窯・２号窯全景　ｂ）１号窯・２号窯・作業場跡全景

鴨谷２号窯

遺構図版16　ａ）検出状況　ｂ）窯体完掘状況
遺構図版17　ａ）天井壁落盤状況　ｂ）天井壁落盤状況
ｃ）天井壁落盤状況
遺構図版18　ａ）窯体横断セクション全体　ｂ）窯体横断セクション１
ｃ）窯体横断セクション１～３
遺構図版19　ａ）窯体全景　ｂ）窯体全景
遺構図版20　ａ）窯体全景（第２次床面）　ｂ）窯体左側壁（焼成部下位）
ｃ）窯体左側壁（焼成部上位）　ｄ）窯体左側壁（焼成部中位）
ｅ）窯体右側壁（焼成部上位）
遺構図版21　ａ）第２次床面～第１次床面横断セクション４
ｂ）第２次床面～第１次床面横断セクション５
ｃ）第２次床面～第１次床面縦横断セクション（燃焼部付近）
遺構図版22　ａ）第１次床面　ｂ）第１次床面　ｃ）焚口覆屋柱穴
遺構図版23　ａ）窯体還元面剥ぎ取り後全景　ｂ）窯体断ち割り横断面４（左側壁）
ｃ）窯体断ち割り横断面４（右側壁）
遺構図版24　ａ）窯体右側壁構築材列検出状況　ｂ）窯体右側壁構築材列検出状況
ｃ）窯体右側壁構築材列検出状況
遺構図版25　ａ）構築材２Ｒ５　ｂ）構築材２Ｒ８　ｃ）構築材２Ｒ10
遺構図版26　ａ）窯体左側壁構築材列検出状況　ｂ）窯体左側壁構築材列検出状況
ｃ）窯体左側壁構築材列検出状況
遺構図版27　ａ）構築材２Ｌ３・２Ｌ４　ｂ）構築材２Ｌ３・２Ｌ４　ｃ）構築材２Ｌ３
ｄ）構築材２Ｌ４　ｅ）構築材２Ｌ５　ｆ）構築材２Ｌ９・２Ｌ10
ｇ）構築材２Ｌ12　ｈ）構築材２Ｌ13
遺構図版28　ａ）１号窯・２号窯灰原　ｂ）灰原（ＳＤ01上面）　ｃ）灰原（ＳＤ01上面）
ｄ）灰原（ＳＤ01上面）
遺構図版29　ａ）作業場跡全景　ｂ）作業場跡全景　ｃ）ＳＸ01・ＳＤ01
遺構図版30　ａ）ＳＸ01横断面　ｂ）ＳＤ01セクション１横断面
ｃ）ＳＤ01セクション２横断面

鴨谷３号窯

遺構図版31　ａ）検出状況　ｂ）検出状況
遺構図版32　ａ）窯体検出状況　ｂ）窯体最終面検出状況
遺構図版33　ａ）窯体・灰原土層縦断セクション２（Ｘ０）
ｂ）窯体埋土（天井部）縦断セクション
ｃ）窯体埋土（天井部）横断セクション
遺構図版34　ａ）窯体横断セクション全体　ｂ）窯体右横断セクション
ｃ）窯体右横断セクション・灰原セクション３
遺構図版35　ａ）灰原セクション３　ｂ）灰原セクション１　ｃ）灰原遺物出土状況
遺構図版36　ａ）第２次操業窯体（全景）　ｂ）第２次操業窯体床面
遺構図版37　ａ）窯体第１～最終床面間縦横断セクション
ｂ）窯体第１～最終床面間縦断セクション
ｃ）窯体第１～最終床面間横断セクション
遺構図版38　ａ）窯体第１・２床面俯瞰　ｂ）窯体第１・２床面近接
遺構図版39　ａ）窯体盛土断ち割り断面　ｂ）窯体盛土左側壁断ち割り断面
ｃ）窯体盛土右側壁断ち割り断面
遺構図版40　ａ）窯体構築材列検出状況（左側壁）　ｂ）窯体構築材列検出状況（右側壁）
遺構図版41　ａ）窯体左側壁構築材列部分（３Ｌ４～３Ｌ７）
ｂ）窯体右側壁構築材列部分（３Ｒ２）　ｃ）窯体右側壁と構築材痕
遺構図版42　ａ）構築材３Ｌ７　ｂ）構築材３Ｒ９　ｃ）構築材３Ｌ６
ｄ）構築材３Ｒ８　ｅ）構築材３Ｌ５　ｆ）構築材３Ｒ７
ｇ）構築材３Ｌ４　ｈ）構築材３Ｒ６
遺構図版43　ａ）構築材３Ｌ３　ｂ）構築材３Ｒ５　ｃ）構築材３Ｌ２
ｄ）構築材３Ｒ４　ｅ）構築材３Ｌ１　ｆ）構築材３Ｒ３
ｇ）構築材３Ｒ２　ｈ）構築材３Ｒ１
遺構図版44　ａ）焚口覆屋柱穴　ｂ）焚口覆屋柱穴
遺構図版45　ａ）第２次操業窯体および第１次操業作業場跡全景　ｂ）作業場跡
ｃ）作業場跡建物柱穴群
遺構図版46　ａ）第１次操業作業場跡　ｂ）第１次操業作業場跡流路土器溜まり
ｃ）第１次操業作業場跡流路土器溜まり

梟谷１号窯

遺構図版47　ａ）発掘調査前全景　ｂ）窯体検出状況　ｃ）検出状況全景
遺構図版48　ａ）窯体埋土層横断セクション　ｂ）窯体埋土層縦断セクション
ｃ）窯体埋土層縦横断セクション
遺構図版49　ａ）完掘状況全景　ｂ）窯体床面遺物検出状況
遺構図版50　ａ）窯体瓦列および窯詰め状況　ｂ）窯体瓦列有段状況および瓦窯詰め状況
遺構図版51　ａ）窯詰め状況（全体）　ｂ）瓦間の挟み込み瓦小片　ｃ）窯詰め状況（部分）
遺構図版52　ａ）窯体瓦列有段状況（近接）　ｂ）窯体瓦列有段状況（全景）
遺構図版53　ａ）完掘後全景（正面）　ｂ）完掘後全景（斜め）
遺構図版54　ａ）窯体床面　ｂ）床面断ち割り（縦横断）　ｃ）床面断ち割り（横断）
遺構図版55　ａ）灰原検出状況　ｂ）灰原上層土断面　ｃ）灰原縦断セクション
遺構図版56　ａ）窯体焚口　ｂ）窯体焚口完掘状況　ｃ）　焚口覆屋柱穴
遺構図版57　ａ）谷南壁断面　ｂ）谷流路断面　ｃ）谷北壁断面
遺構図版58　ａ）マンボ開口部　ｂ）マンボ開口部　ｃ）マンボ遠景

鴨谷２・３号窯・梟谷１号窯

遺構図版59　a）鴨谷２号窯　天井窯壁１（内壁面）　b）鴨谷２号窯　天井窯壁１（横断面）
c）鴨谷２号窯　天井窯壁２（内壁面）

遺構図版60　a）鴨谷３号窯　窯体剥ぎ取り断面（全体）・（拡大）
b）鴨谷３号窯　天井窯壁１横断面　c）鴨谷３号窯　天井窯壁２
d）梟谷１号窯　天井窯壁２（内壁面）

遺物写真図版目次

遺物図版１　a）鴨谷１号窯　出土須恵器
b）鴨谷２号窯　出土須恵器
遺物図版２　a）鴨谷３号窯　出土須恵器
b）梟谷１号窯　出土須恵器・瓦
遺物図版３　a）鴨谷２号窯
出土須恵器甕刻書
b）鴨谷３号窯
出土須恵器甕刻書１
c）鴨谷３号窯
出土須恵器甕刻書２
d）鴨谷３号窯
出土須恵器甕刻書３
遺物図版４　鴨谷２号窯・梟谷１号窯出土瓦
遺物図版５　鴨谷１号窯　窯体出土須恵器
遺物図版６　鴨谷１号窯　灰原出土須恵器１
遺物図版７　鴨谷１号窯　灰原出土須恵器２
遺物図版８　鴨谷１号窯　灰原出土須恵器３
遺物図版９　鴨谷１号窯　灰原出土須恵器４
遺物図版10　鴨谷１号窯　灰原出土須恵器５
遺物図版11　鴨谷１号窯　灰原出土須恵器６
遺物図版12　鴨谷１号窯　灰原出土須恵器７
遺物図版13　鴨谷１号窯　灰原出土須恵器８
遺物図版14　鴨谷１号窯　灰原出土須恵器９
遺物図版15　鴨谷１号窯　灰原出土須恵器10
遺物図版16　鴨谷１号窯　灰原出土須恵器11
遺物図版17　鴨谷２号窯　窯体出土須恵器１
遺物図版18　鴨谷２号窯　窯体出土須恵器２
遺物図版19　鴨谷２号窯　窯体出土須恵器３
遺物図版20　鴨谷２号窯　灰原出土須恵器１
遺物図版21　鴨谷２号窯　灰原出土須恵器２
遺物図版22　鴨谷２号窯　灰原出土須恵器３
遺物図版23　鴨谷２号窯　灰原出土須恵器４
遺物図版24　鴨谷２号窯　灰原出土須恵器５
遺物図版25　鴨谷２号窯　灰原出土須恵器６
遺物図版26　鴨谷２号窯　灰原出土須恵器７
遺物図版27　鴨谷２号窯　灰原出土須恵器８
遺物図版28　鴨谷２号窯　灰原出土須恵器９
遺物図版29　鴨谷２号窯　灰原出土須恵器10
遺物図版30　鴨谷２号窯　灰原出土須恵器11
遺物図版31　鴨谷２号窯　須恵器甕刻書
遺物図版32　鴨谷２号窯
窯体・灰原出土軒平瓦
遺物図版33　鴨谷２号窯　灰原出土丸瓦・平瓦
遺物図版34　鴨谷２号窯　灰原出土平瓦１
遺物図版35　鴨谷２号窯　灰原出土平瓦２
遺物図版36　鴨谷２号窯　灰原出土平瓦３
遺物図版37　鴨谷２号窯　灰原出土平瓦４
遺物図版38　鴨谷２号窯　灰原出土平瓦５
遺物図版39　鴨谷２号窯　灰原出土平瓦６
遺物図版40　鴨谷２号窯　焼台１
遺物図版41　鴨谷２号窯　焼台２
遺物図版42　鴨谷２号窯　焼台３
遺物図版43　鴨谷２号窯　焼台４
遺物図版44　鴨谷３号窯　第１次操業
灰層出土須恵器・瓦
遺物図版45　鴨谷３号窯　第１次操業
灰層出土須恵器
遺物図版46　鴨谷３号窯　第１次操業
作業場跡出土須恵器１
遺物図版47　鴨谷３号窯　第１次操業
作業場跡出土須恵器２
遺物図版48　鴨谷３号窯　第１次操業
作業場跡出土須恵器３
遺物図版49　鴨谷３号窯
灰原出土第１次操業須恵器１
遺物図版50　鴨谷３号窯
灰原出土第１次操業須恵器２
遺物図版51　鴨谷３号窯　第２次操業窯体
第１床面（当初）出土須恵器
遺物図版52　鴨谷３号窯　第２次操業窯体

第１～第２床面間層出土須恵器
遺物図版53　鴨谷３号窯　第２次操業窯体
第２～第３床面間層出土須恵器
遺物図版54　鴨谷３号窯　第２次操業窯体
第３・４床面出土須恵器１
遺物図版55　鴨谷３号窯　第２次操業窯体
第３・４床面出土須恵器２
遺物図版56　鴨谷３号窯　第２次操業窯体
第３・４床面出土須恵器３
遺物図版57　鴨谷３号窯
灰原出土第２次操業須恵器１
遺物図版58　鴨谷３号窯
灰原出土第２次操業須恵器２
遺物図版59　鴨谷３号窯
灰原出土第２次操業須恵器３
遺物図版60　鴨谷３号窯
灰原出土第２次操業須恵器４
遺物図版61　鴨谷３号窯
灰原出土第２次操業須恵器５
遺物図版62　鴨谷３号窯
灰原出土第２次操業須恵器６
遺物図版63　鴨谷３号窯
灰原出土第２次操業須恵器７
遺物図版64　鴨谷３号窯
灰原出土第２次操業須恵器８
遺物図版65　鴨谷３号窯
灰原出土第２次操業須恵器９
遺物図版66　鴨谷３号窯
灰原出土第２次操業須恵器10
遺物図版67　鴨谷３号窯
灰原出土第２次操業須恵器11
遺物図版68　鴨谷３号窯
灰原出土第２次操業須恵器12
遺物図版69　鴨谷３号窯
灰原出土第２次操業須恵器13
遺物図版70　鴨谷３号窯
灰原出土第２次操業須恵器14
遺物図版71　鴨谷３号窯　須恵器甕刻書
遺物図版72　梟谷１号窯　窯体出土須恵器
遺物図版73　梟谷１号窯　灰原出土須恵器１
遺物図版74　梟谷１号窯　灰原出土須恵器２
遺物図版75　梟谷１号窯　灰原出土須恵器３
遺物図版76　梟谷１号窯　灰原出土須恵器４
遺物図版77　梟谷１号窯　灰原出土須恵器５
遺物図版78　梟谷１号窯
谷堆積土層出土須恵器１
遺物図版79　梟谷１号窯
谷堆積土層出土須恵器２
遺物図版80　梟谷１号窯
窯体・灰原出土軒丸瓦・軒平瓦
遺物図版81　梟谷１号窯　窯体出土軒丸瓦
遺物図版82　梟谷１号窯
灰原他出土軒丸瓦・軒平瓦
遺物図版83　梟谷１号窯　灰原他出土軒平瓦
遺物図版84　梟谷１号窯　窯体出土丸瓦１
遺物図版85　梟谷１号窯　窯体出土丸瓦２
遺物図版86　梟谷１号窯　窯体出土丸瓦３
遺物図版87　梟谷１号窯　窯体出土丸瓦４
遺物図版88　梟谷１号窯　窯体出土丸瓦５
遺物図版89　梟谷１号窯　窯体出土丸瓦６
遺物図版90　梟谷１号窯　窯体出土丸瓦７
遺物図版91　梟谷１号窯　灰原出土丸瓦１
遺物図版92　梟谷１号窯　灰原出土丸瓦２
遺物図版93　梟谷１号窯　灰原出土丸瓦３
遺物図版94　梟谷１号窯　灰原出土丸瓦４
遺物図版95　梟谷１号窯　窯体出土平瓦１
遺物図版96　梟谷１号窯　窯体出土平瓦２
遺物図版97　梟谷１号窯　窯体出土平瓦３
遺物図版98　梟谷１号窯　窯体出土平瓦４
遺物図版99　梟谷１号窯　窯体出土平瓦５
遺物図版100　梟谷１号窯　窯体出土平瓦６
遺物図版101　梟谷１号窯　窯体出土平瓦７
遺物図版102　梟谷１号窯　窯体出土平瓦８
遺物図版103　梟谷１号窯　窯体出土平瓦９
遺物図版104　梟谷１号窯　窯体出土平瓦10
遺物図版105　梟谷１号窯　窯体出土平瓦11
遺物図版106　梟谷１号窯　窯体出土平瓦12
遺物図版107　梟谷１号窯　窯体出土平瓦13
遺物図版108　梟谷１号窯　窯体出土平瓦14
遺物図版109　梟谷１号窯　窯体出土平瓦15
遺物図版110　梟谷１号窯　窯体出土平瓦16
遺物図版111　梟谷１号窯　窯体出土平瓦17
遺物図版112　梟谷１号窯　窯体出土平瓦18
遺物図版113　梟谷１号窯　窯体出土平瓦19
遺物図版114　梟谷１号窯　窯体出土平瓦20
遺物図版115　梟谷１号窯　灰原出土平瓦１
遺物図版116　梟谷１号窯　灰原出土平瓦２
遺物図版117　梟谷１号窯　灰原出土平瓦３
遺物図版118　鴨谷１号窯・２号窯地区
灰原出土木製品

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　神出窯跡群　鴨谷・梟谷地区調査位置図 …… 3
第３図　神出バイパス用地内発掘調査位置図 …… 4
第４図　平成13年度確認調査トレンチ設定配置図 …… 5
第５図　平成14年度全面発掘調査範囲図 …… 7
第６図　神出窯跡群分布図 ……10
第７図　鴨谷２号窯　焚口覆屋柱穴 ……17
第８図　器種分類図１ ……30
第９図　器種分類図２ ……31
第10図　鴨谷１号窯　器種構成図 ……35
第11図　鴨谷２号窯　器種構成図 ……40
第12図　鴨谷３号窯第１次操業　器種構成図 ……44
第13図　鴨谷３号窯第２次操業　器種構成図１ ……50
第14図　鴨谷３号窯第２次操業　器種構成図２ ……51
第15図　梟谷１号窯　器種構成図 ……53
第16図　鴨谷支群の燃料材等の直径計測の結果 ……57
第17図　架構痕跡からみた窯体構築法の復元図 ……67
第18図　神出鴨谷・梟谷支群出土甕叩き原体比較図１・２ ……72・73
第19図　日輪寺出土遺物図（吉川2008年）……77
第20図　瓷器系須恵器比較図１・２ ……78・79
第21図　壺・鉢類比較図１・２ ……80・81
第22図　神出鴨谷支群・梟谷支群における甕の変化１・２ ……82・83
第23図　軒瓦の種類 ……85
第24図　タタキの種類１ ……86
第25図　タタキの種類２ ……87
第26図　軒丸瓦の変遷 ……93
第27図　軒平瓦の変遷 ……94
第28図　石清水八幡宮出土の瓦 ……96
第29図　土御門烏丸内裏跡出土の瓦 ……96
第30図　四天王寺出土の瓦 ……97
第31図　播磨周辺の窯跡群位置図 ……99
第32図　表層地質図からみた神出窯跡群の立地 ……101
（原図：表層地質図高砂」後藤博弥・井上剛－編纂）

本文写真目次

写真１　試掘トレンチ28 …… 2
写真２　試掘トレンチ６ …… 2
写真３　発掘調査風景 …… 6
写真４　現地説明会風景 …… 6
写真５　木器Ｗ４出土状況 ……14
写真６　木器Ｗ３出土状況 ……18
写真７　梟谷流路断面 ……24
写真８　マンボ入口部 ……25
写真９　マンボ奥部 ……25
写真10　鴨谷支群出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真 ……60
写真11　鴨谷２号窯　窯体断面剥ぎ取り状況 ……65
写真12　鴨谷３号窯　窯体断面剥ぎ取り状況 ……65
写真13　鴨谷３号窯　窯体断面剥ぎ取り搬出と完成状況 ……66

表目次

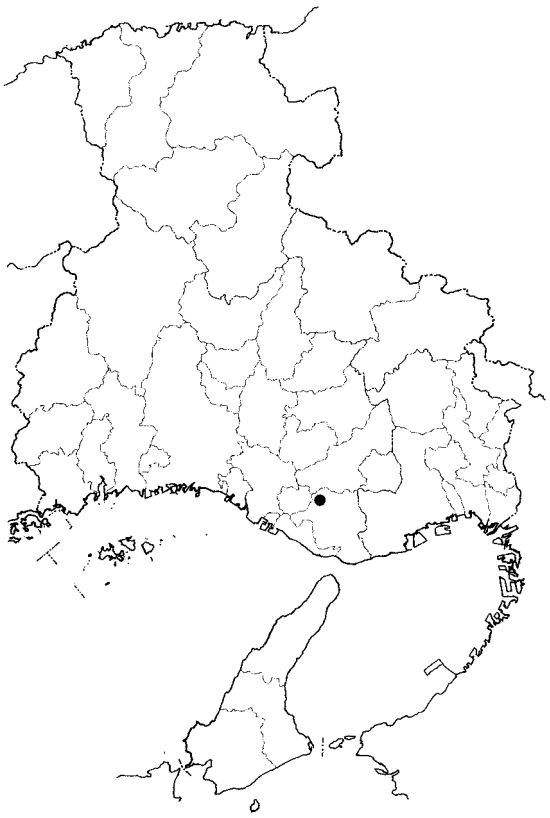
第１表　鴨谷２号窯側壁架構材　計測表 ……16
第２表　鴨谷３号窯側壁架構材　計測表 ……21
第３表　小型供膳器種の分類表 ……29
第４表　鴨谷支群出土炭化材の樹種同定結果一覧 ……55
第５表　鴨谷支群出土炭化材の樹種同定結果一覧 ……61～63
第６表　窯体規模一覧表 ……68
第７表　刻書一覧 ……70
第８表　軒瓦の変遷 ……94

出土遺物一覧表 ……103～122

第１章　調査に至る経緯と調査の経過

第１節　調査に至る経緯

一般国道175号線は兵庫県明石市から京都府舞鶴市を結ぶ南北の主要幹線道である。国土交通省は建設省時代から道路拡幅やバイパス工事を計画して、交通混雑の解消と交通安全の確保を図ってきている。平成４年度から実施している神出窯跡群・神出遺跡の調査や、玉津田中遺跡南大山地点、小野市浄谷遺跡、南山古墳群（兵庫県文化財調査報告第121集）などの遺跡の調査もこれに伴う一連のものである。



第１図　遺跡位置図

第２節　調査の経過

１．分布調査

一般国道175号神出バイパスの北半部の分布調査（遺跡調査番号990129）は、平成11年４月に実施した。三坂神社の北東付近から、北端部の現国道175号に合流する部分までの神出町の北、広谷、小束野にまたがる延長約2.5km、約５万㎡の踏査である。

その結果、須恵器の散布が見られる地点や、周辺の窯跡遺跡と立地条件が似ている地点として№１～３地区を設定した。特に№１地点では谷底で灰原と考えられる遺物包含層の露呈を確認し、須恵器や瓦を採集している。神出窯跡群では最も北西に位置しており、これまでに知られていなかった窯跡である。万堡池小支群と同じく加古川の支流である草谷川に注ぐ谷に立地している。この地点は本調査の際に梟谷１号窯と命名した。

２．確認調査

以上の３地点の確認調査（遺跡調査番号2001115）は平成13年８月７日から10月13日にかけて実施した。北側に位置する神出町広谷の№２・３地点では、地形的に窯跡の存在が推定され、それぞれ５ヶ所、８ヶ所のトレンチを設定したが、遺構・遺物とも検出されなかった。

神出町北に位置する№１地点では45ヶ所のトレンチを設定した。調査前の現状では、ほ場整備の完了した台地部の平坦な水田と、一部を溜池や水路に利用していた谷地形である。水田部では集落や工房などの存在が予想されたが、柱穴などの遺構は検出できなかった。但し、最も南に設定した１・２トレンチからは大量の須恵器や窯壁片が出土した。これは近世以降の陶磁器片とともに出土していることから、

ほ場整備或いはそれ以前の客土であると判断された。近隣の窯が破壊されたものであろう。同様に床土内に大量の須恵器などを入れた状況は、同事業の平成７年度の調査（遺跡調査番号950230）などでも見られ、水田の水はけのために埋められたものであろう。

竹が繁茂していた谷内では、灰原或いは窯焚口部の検出を目論んで斜面裾にトレンチを設定した。谷の最も奥（南東端）は土手で仕切られた溜池であったためトレンチの設定が困難であった。南西向きの斜面裾に設定したトレンチ４では遺物を含まない湿地性の堆積層が検出され、溜池によって斜面裾から谷底まで大きく改変されていることが判明した。北東向きの斜面裾も大きく削られており、その断面にも焼土や灰層は認められなかった。

北東向きの斜面裾の６・７トレンチで灰原を検出し、５トレンチからも大量の須恵器が出土した。出土した須恵器はこれまでに神出窯跡で確認されているものの中でも最も古い様相をもち、さらに大きく２時期に分かれることが判明した。このことから近辺に複数の窯の存在を推定できた。この地点が本発掘調査で検出された鴨谷１・２号窯である。谷の対岸にあたる11・12トレンチからも灰層や須恵器が検出され、別の窯の存在が考えられたが、結果的に、この灰層は鴨谷１・２号窯に伴うものであることが判明した。

９・45トレンチからも灰層や須恵器の包含層が検出され、なかでも甕の破片が多いことが特徴的である。窯本体の存在が想定できる位置に設定した15トレンチでは近代以降の攪乱が広がっており、窯本体も削平されている可能性が考えられた。この地点が本発掘調査で検出された鴨谷３号窯である。

水田や畑地として利用されていた台地部を挟んだ別の谷（梟谷）に設定した28トレンチは、分布調査の際に灰層や窯壁が確認された地点である。トレンチ内で検出された灰層からは大量の瓦や焼土が出土した。この地点が本発掘調査で検出された梟谷１号窯である。谷の下流側に設定した43トレンチからも須恵器が出土している。

さらに北側の台地部や谷斜面にもトレンチを設定したが、窯跡や集落を示すような遺構・遺物は検出されなかった。

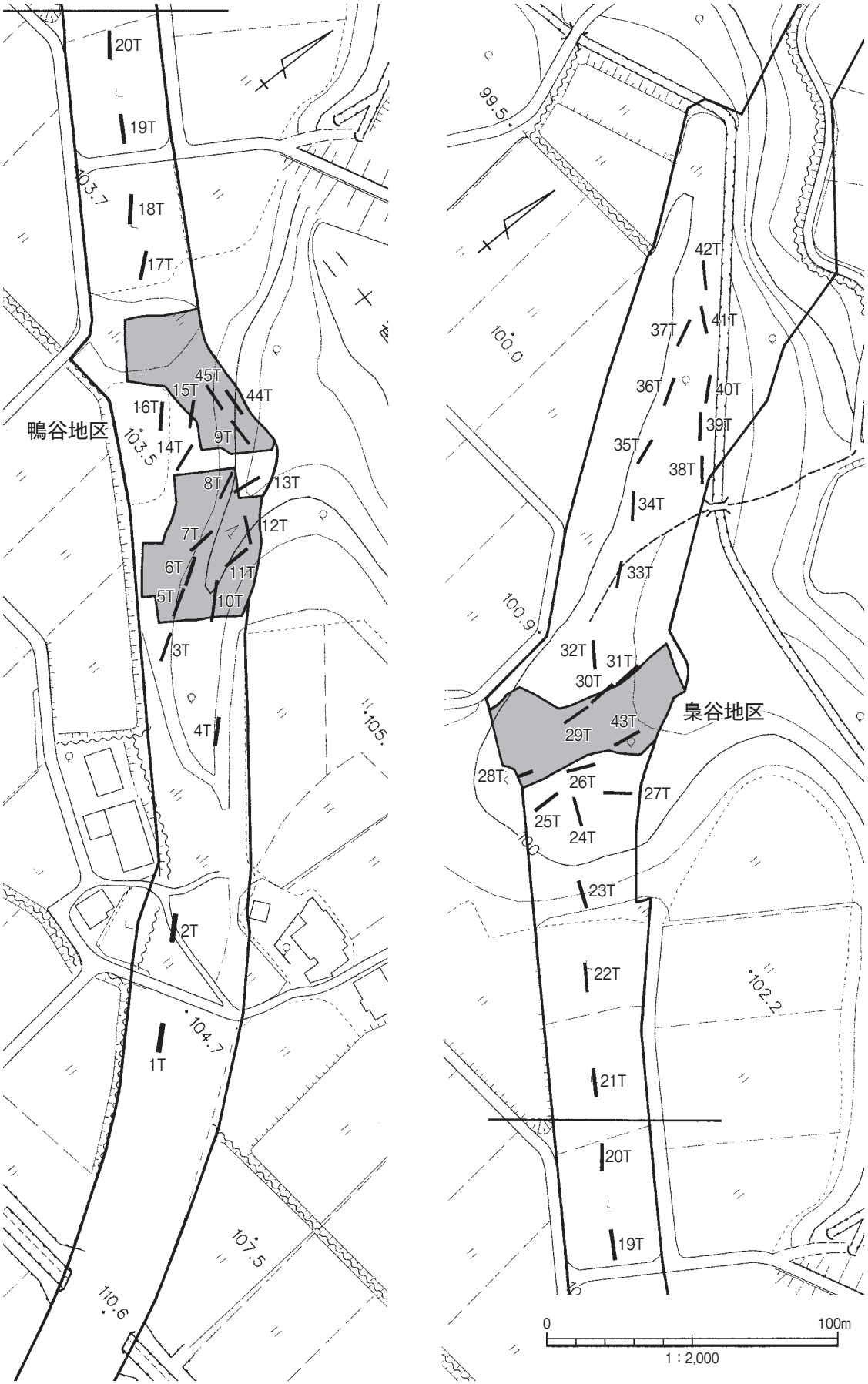
確認調査の結果、南東から北西に向かって開口する谷の支谷に複数の窯跡が存在することが判明した。神出古窯跡群では雄岡山、雌岡山の南裾や西裾、或いは南裾から南西へ延びる谷地形の支谷、東を流れる明石川へと開口する谷の奥部で窯跡が確認されている。ただ万堡池小支群などは北西へ開口する加古川の支流である草谷川に注ぐ谷に立地しており、確認調査で検出された窯跡も同様である。

写真１　試掘トレンチ28

写真２　試掘トレンチ６

第２図　神出窯跡群　鴨谷・梟谷地区調査位置図

第3図　神出バイパス用地内発掘調査位置図



第４図　平成13年度確認調査トレンチ設定配置図

３．本発掘調査の経過

平成13年度の確認調査結果を受けて、国土交通省近畿地方整備局兵庫国道工事事務所より平成14年４月４日付、国近整兵調第３号による依頼を受けて調査を実施した。平成13年度の確認調査では、５・６・７・９・11・12・28・43・45トレンチで灰層ないしは遺物包含層が発見されている。このうち28･43トレンチの地区をⅠ区とし、５・６・７・11・12トレンチ、９・45トレンチの地区をⅡ区として、それぞれ全面調査を実施した。

写真３　発掘調査風景

Ⅰ区では谷部1,514㎡の調査を実施し、１基の須恵器窯跡の調査を実施した。遺跡名は小字名から梟谷１号窯と命名した。なお、発見基数は１基のみであったが、将来周辺から窯跡が発見される可能性を想定して１号窯とした。なお、この地区では梟谷１号窯の窯体の下半部を破壊してマンボ（横井戸）が発見されており、合わせて記録作成を実施した。

写真４　現地説明会風景

Ⅱ区は２つの谷の合流箇所で、５・６・７･11･12トレンチの地区をⅡ－１区、９・45トレンチの地区をⅡ－２地区に分割して地区割りを行った。Ⅱ－１区では２基の須恵器窯跡、Ⅱ－２地区では１基の窯跡が発見され、小字名をとって鴨谷１号・２号窯跡、３号窯跡と名づけた。

平成14年９月18日より発掘作業を開始した。この間、11月14日に航空測量、11月14日に報道発表、11月16日　現地説明会を実施し、平成15年１月15日に全作業を完了した。

調査期間：平成14年９月18日～平成15年１月15日

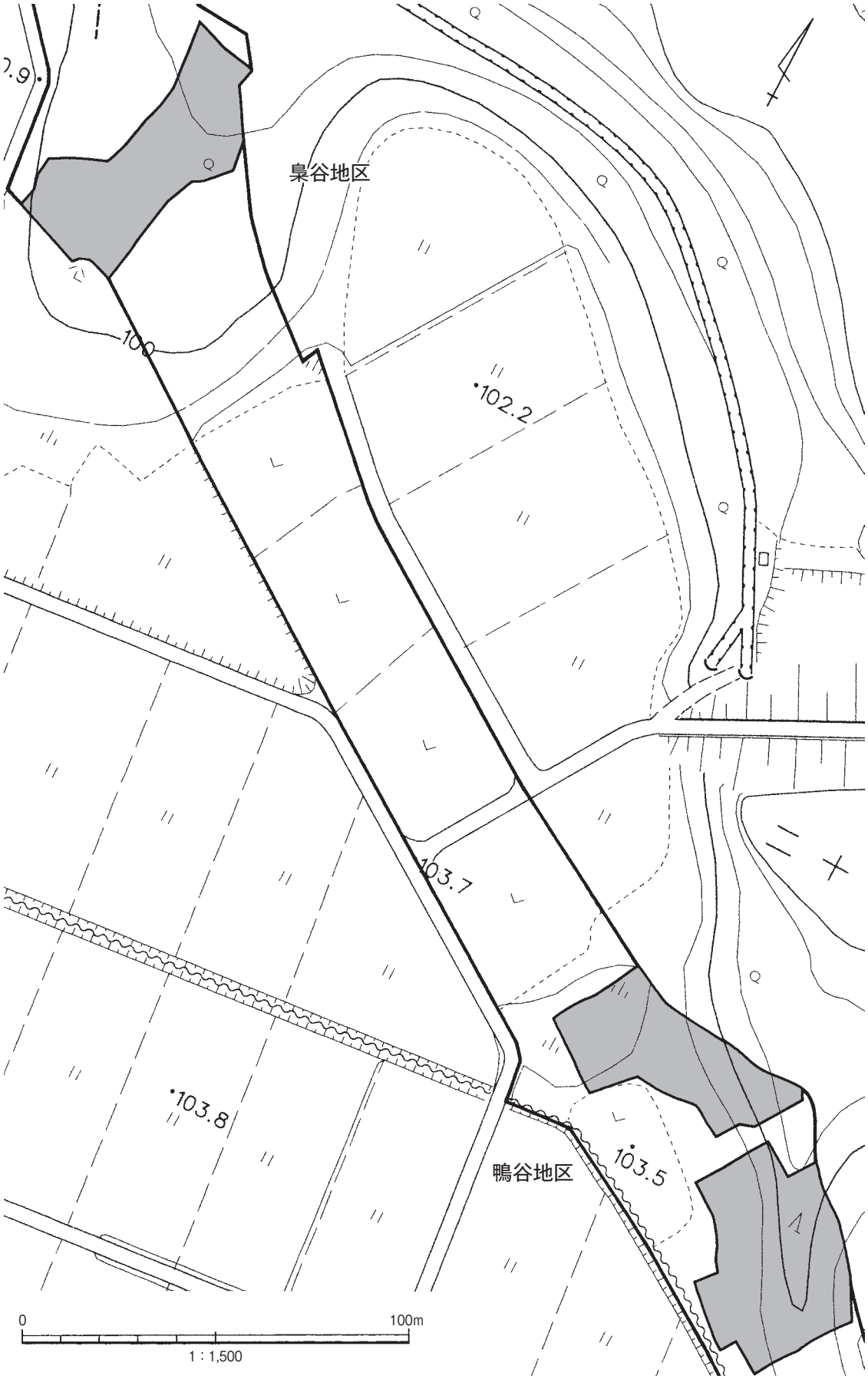
調査面積：鴨谷地区2,712㎡、梟谷地区1,514㎡　計4,226㎡

調査補助員：小谷義男・西本寿子・片山博道・高橋朋子・光井佳代子・岡崎愛子・尼ヶ塚優理・山本絢子

室内作業員：五百蔵道代・習田都起子・丹治淳子・平河明美

作業請負：港建設（株）

空中写真測量委託：株式会社ジオテクノ関西



第 5 図　平成14年度全面発掘調査範囲図

第３節　整理作業の経過

出土コンテナ数は870箱におよぶ。平成16年度より事業を開始し、平成22年度に下記の通り、整理事業の全工程を完了した。

平成16年度　水洗い・ネーミング
平成17年度　接合・補強・実測・拓本
平成18年度　実測・拓本・復元・分析鑑定・金属器保存処理
平成19年度　写真撮影・写真整理・図面補正・トレース・木製品保存処理
平成20年度　トレース
平成21年度　トレース
平成22年度　レイアウト・報告書印刷

実測・トレース担当：黒岩紀子・杉本淳子・高橋朋子・柏原美音・榎真菜美・友久伸子・
佐々木誓子
編集担当：柏原美音・榎真菜美・坂東知奈・友久伸子

第２章　神出窯跡群について

第１節　神出窯跡群の立地と規模

１．位置と立地

神出窯は神戸市西区神出町に所在する。明石海峡に河口を開く明石川を約10㎞北へ遡り、標高120m前後の高位段丘である印南野台地の東端に位置している。台地東端部には雌岡山（標高249.5m）の独立丘陵が存在し、北・南・西からは開析谷が切れ込んでいる。現在、これらの開析谷は谷をせき止めて溜池が多く設けられ、谷の端部は圃場整備などにより埋没してしまったものも多い。

２．窯の分布と規模

窯はこれらの丘陵や谷の地形を利用して東西３㎞、南北２㎞の範囲に広がっており、現在までに80基程度確認されている。各窯は数基のまとまり（支群）をもって存在することが多いが、大きく見ると老ノ口、田井、南、雌岡山の大きく４つの地区に区分できる。また窯の背後の平坦地では掘立柱建物群や粘土採掘坑等が検出され、工房跡と推定される遺跡が広がっている。

第２節　窯跡の調査

神出窯は昭和40年代に山口卓也氏、真野修氏により初めて紹介され（山口1971、真野1971）、発掘調査は昭和52年度の神戸市教育委員会による茶山１号窯の調査以降、多くの調査が行われている。主として発掘調査が行われた窯跡について取り上げる。

老ノ口地区

北西より切れ込む開析谷とその支谷に沿って位置している。老ノ口、宮ノ裏、万堡池、鴨谷、梟谷支群などが含まれる。

老ノ口支群は西側へ切れ込む支谷の北斜面に位置している。昭和58年と昭和59年に神戸市教育委員会によって調査され、６基の窯体と３基分の灰原が検出されている（神教1986・1987）。12世紀後半の須恵器・瓦が出土している。

宮ノ裏支群は南側へ切れ込む支谷の最奥部に位置している。昭和56年度に神戸市教育委員会によって調査され、４基の窯体（煙管状窯１基を含む）とその灰原が調査されている（神教1983）。12世紀後半の須恵器・瓦が出土している。

鴨谷支群は宮ノ裏支群と同じ支谷の約300m北側に位置している。平成14年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所によって調査され、３基の窯体とその灰原が検出されている（兵埋2003）。10世紀初頭前後～11世紀の須恵器・瓦が出土している。

梟谷支群は鴨谷・宮ノ裏支群の所在する支谷より北側に位置する支谷に位置している。平成14年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所によって調査され、１基の窯体と灰原が検出されている（兵埋2003）。11世紀の須恵器・瓦が出土している。神出窯のなかでは瓦の専焼（少なくとも最終操業時には）が行われたことが明白な唯一の窯である。

第 6 図　神出窯跡群分布図

万堡池支群は老ノ口支群や宮ノ裏支群などが所在する谷より北側に位置する別の主谷の北斜面に位置している。１基の窯体（調査は検出のみ）と複数基分の灰原が検出されている（神教1990）。11･12世紀の須恵器・瓦が出土している。窯体は鴨谷支群と同様に大型である。

田井地区

西より切れ込む開析谷とその支谷に沿って位置している。堂の前、田井裏、釜ノ口、池の下、芝垣内などの支群が含まれる。

堂の前支群は主谷の北斜面に位置している。昭和57年度に神戸市教育委員会によって調査され、８基の窯体（煙管状窯１基を含む）が検出されている（神教1985）。12世紀前半の須恵器･瓦が出土している。

田井裏支群は北側に切れ込む支谷の斜面に位置している。昭和57年度に神戸市教育委員会によって調査され、１基の窯体と別の１基分の灰原が検出されている（神教1985）。12世紀前半の須恵器･瓦が出土している。

釜ノ口支群は主谷の南斜面に位置している。昭和56年度に神戸市教育委員会によって調査され、７基の窯体が検出されている（神教1983）。12世紀代の須恵器･瓦が出土している。また、平成７年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が窯背後の平坦地の調査を行い、ロクロピットをもつ掘立柱建物跡など工房跡と考えられる遺構群を検出している（兵埋1996）。

池の下支群は主谷の南斜面に位置している。昭和57年度に神戸市教育委員会によって調査され、２基の窯体が検出されている（神教1985年）。12世紀後半の須恵器・瓦が出土している。

芝垣内支群は主谷の北斜面に位置している。平成９年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所によって調査が行われ、１基分の灰原が検出されている（兵埋1998b）。10世紀の須恵器が出土している。

南地区

南より切れ込む開析谷とその支谷に沿って位置している。垣内支群、苅屋谷池支群などの支群が含まれる。

垣内支群は北側に切れ込む支谷の最奥部に位置している。平成６年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所により調査が行われ、８基の窯体と灰原やロクロピットをもつ掘立柱建物跡など工房跡と考えられる遺構群を検出している（兵埋1998a）。12世紀代の須恵器・土師器・瓦が出土している。

苅屋谷池支群は主谷の北斜面に位置している。発掘調査は行われていないが、溜池内に窯体１基と灰原が複数箇所露出しており、妙見山麓遺跡調査会と兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所によってそれぞれ、測量及び遺物の採集が行われている。13世紀の須恵器が採集されている（兵埋1998a、妙見山麓遺跡調査会2006）。

雌岡山地区

雌岡山の麓の斜面に位置している。茶山支群、大池北支群、拍子ヶ池支群などが含まれる。

茶山支群は雌岡山南麓の斜面に位置している。昭和52年度に神戸市教育委員会によって調査され、１基の窯体（煙管状窯）が検出された。12世紀前半の須恵器・土師器・瓦が出土している。

大池北支群は雌岡山南麓の斜面に位置している。昭和63年度に妙見山麓遺跡調査会によって調査が行われ、３基の窯体が検出されている。13･14世紀の須恵器･瓦が出土している（妙見山麓遺跡調査会2006）。

拍子ヶ池支群は雌岡山の南斜面に位置する。昭和63年度に妙見山麓遺跡調査会によって調査が行われ、２基分の灰原が検出されている。採集された瓦の中に建久５年（1194）頃に重源によって建立された浄土寺の瓦が採集されている（真野1974）。

参考文献

本文中では神戸市教育委員会を神教、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所を兵埋と略す。

神戸市教育委員会1983 『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会1985 『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会1986 『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会1987 『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会1990 『昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報』

中村善則1986 「神出古窯址群茶山１号窯」『神戸市立博物館だより』No.16

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所1998ａ『神出窯跡群』

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所1996 『平成７年度年報』

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所1998 『平成９年度年報』

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2003 『平成14年度年報』

真野修1971 「神出古窯址群の須恵器生産形態」『武陵史学』第５巻第１号　武陽史学会

真野修1974 「雌岡山周辺の古窯址－神出古窯址群－」『神戸古代史』１－３　神戸古代史研究会

妙見山麓遺跡調査会1986 『神出』

妙見山麓遺跡調査会1987 『神出1986』

妙見山麓遺跡調査会1990 『神出Ⅲ』

妙見山麓遺跡調査会2006 『神出Ⅳ』

森田稔1986 「東播系中世須恵器生産の成立と展開」『神戸市立博物館研究紀要』第３号

森田稔1988 「神出古窯址群の発掘成果」『神戸の歴史』第19号

森田稔1995 「中世須恵器」中世土器研究会編『概説中世土器・陶磁器』

山口卓也1971 『老の口窯跡遺跡調査概要』

第３章　遺構

第１節　鴨谷支群と梟谷支群の立地

印南野台地を開削して西の加古川に注ぐ草谷川上流には多くの谷が開析しており、神出町北から同町広谷に所在する谷もその１つである。広谷という地名が示す通り、この谷は草谷川の支谷群のなかでは比較的大きな開析谷の１つで、谷の一部をせき止めて城ヶ谷池やその上にある二十番池などいくつかの溜池が設けられている。この谷からはさらにいくつかの枝谷に分かれるが、この枝谷に今回調査を実施した窯跡が構築されている。発見された窯跡名はそれぞれ谷の小字名をとって鴨谷１～３号窯および梟谷１号窯の名称を与えた。

鴨谷は城ヶ谷池の上流側の二十番池に開口する谷である。鴨谷には東から開析してくる谷と南西方向から台地を開析する東西２つの谷があり、この２つの谷が合体して二十番池に注ぐ。西の谷には３号窯、東の谷には１号窯・２号窯が構築されている。また、梟谷は城ヶ谷池に開口する南北方向に走る小さな枝谷で、開口部付近からおよそ150mはいったところで水田化され、その下に埋没している。梟谷１号窯は谷の開口部付近からおよそ100mはいった地点のやや傾斜の緩い西側斜面に構築されている。

第２節　鴨谷１号窯

１．窯の立地

窯が構築されている鴨谷は小さく蛇行しており、遺構図面３に示した等高線の形状が示す通り、尾根型と谷型の斜面形状が連続しており、等高線の幅が混み合った極急斜面が多い。このなかで、本窯は表面傾斜が28°前後で起伏のない南側の斜面地を選んで構築されている。窯の構築が可能な立地箇所が限られていることは、時代の下る２号窯が同じ箇所を選んで構築されていることからもわかる。

２．窯体

窯の形態と規模

窯体の大半を地上に架構する地上窯体構築式窯（以下、地上式窯と略）で、窯体の左右の斜面は窯体構築時の架構土等の採土により窪地状の地形を呈している。窯体長は、実長で5.10m、水平長で6.00mを測る。床幅は焚口で1.05m、燃焼部（ＹＮ５ライン）1.15m、焼成部中央（ＹＮ４ライン）1.00m、焼成部先端（ＹＮ２ライン）で0.95mを測り、わずかに先端部がすぼまる砲弾形の平面プランをもつ。床面積は6.4㎡である。床面はほぼ直線的に立ち上がり傾斜角度は燃焼部では27°、焼成部で17°を測り、全体の平均斜度は27°である。標高は排煙部で102.10m、焚口で99.30mである。従って、窯体実効高は、2.80mとなる。焚口と谷基底部との比高差は3.5m前後である。焚口前には前庭部が設けられているが、その延長は１m程度である。

窯体内部の状況

燃焼部の範囲は焚口側から奥に約２mはいった付近までで、焼成部との境にはわずかに段がある。傾斜角度は17°で、壁面の残存高は最も高いところで0.35mを測る。

焼成部の長さは3.1mを測る。床面は斜面とほぼ同じ27°の角度で直線的に伸び上がるが、先端部付近

では角度を変え直上方向上方に立ち上がる。恐らく上向きの排煙部が取り付くものと思われる。側壁・床面ともに青灰色を呈するが、焼結の程度はきわめて弱い。

床面は基本的に上下２枚あるが、上層床面（第２次床面）は重層範囲が床面にとどまっておらず、排煙部にも及んでいることから、部分的な補修ではなく、窯体そのものの全面的な作り替えが行われた可能性もある。また、上層床面についても右側壁上方（ＹＮ２ライン～ＹＮ３ライン付近）では床から側壁にかけての部分的な補修の痕跡が認められる。また、下層床面（第１次床面）は還元層の厚みがきわめて薄く、遺物の包含点数も少なかったので、２次床面の改修時に清掃を受けた可能性がある。なお、窯体右側壁下から炭化した構築材の痕跡が右側壁に４箇所発見されている。

３．灰原

灰原は１号窯の焚口から楕円形状に広がる。灰原の広がりは斜面から谷底まで及ぶが、灰原中央付近および灰原末端部については谷道や水利工事等によって失われている。

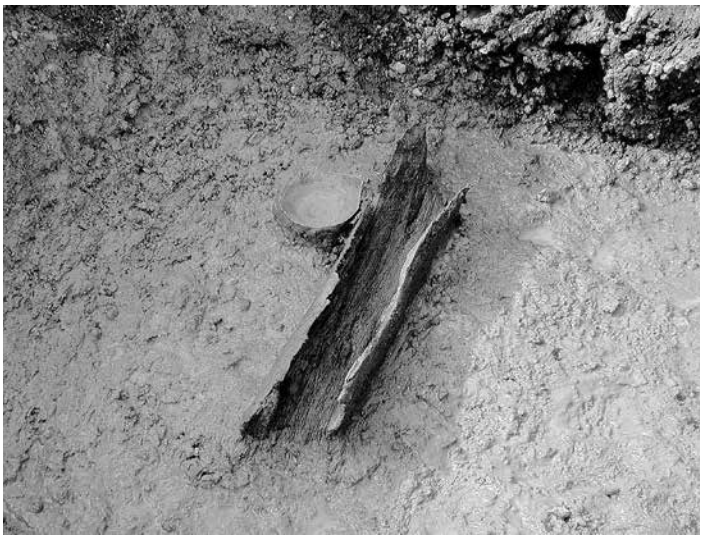


写真５　木器Ｗ４出土状況

１号窯の斜面上に広がる灰原のうち東側区域の灰層は１号窯の純粋層であるが、西側区域では２号窯の灰原が及んでおり、両窯の灰層が混じりあっている。また、１号窯前面の谷基底部は本来の基底面よりも深くなっており、この断面は遺構図面５に示したように、垂直の南壁に沿って１号窯の灰層が堆積し、その上に２号窯の灰層が堆積している。南壁がほぼ垂直な形状を呈している点と、底面までの深さが本来の谷基底面よりも深いという点からみて明らかに人為的に掘られたものと判断できる。掘り下げの東端部が溜池の水利工事で失われているので正確な規模は不明であるが、東西長はおよそ８ｍ、幅２ｍ前後、深さ0.5ｍ前後である。掘り下げの時期については１号窯段階に行われたと考えるのが自然であるが、当該遺構の場合、２号窯操業期に掘削が行われたと考えることも可能である。すなわち、１号窯の灰層を切って下に深く掘り下げた場合、２号窯開始早々にこの掘り込みの肩口付近に存在した１号窯灰層が掘り込み内に滑り落ちて最下層に堆積することは現象面として充分あり得ることである。しかしながら、遺構写真図版13b掲載写真のように東端の底面中央から１号窯の遺物がまとまって出土している状況は、掘り下げが１号窯操業時に行われた可能性の方が高いことを示しており、ここでは谷部の掘削は１号窯操業時に行われ、２号窯操業時に浚渫（再掘り下げ）が行われたものと判断しておく。

掘り下げの目的としては谷水の確保が第１にあげられる。あるいは窯体架構には水を含んだ粘土が必要であるから、粘土採取と水溜めの用途目的を兼ねた行為の結果である可能性もある。なお、掘り込み部の底面から１号窯の須恵器類とともに写真５のような木製品も出土している。（木製品の詳細は54頁に記載）

第３節　鴨谷２号窯

１．立地

１号窯の西に約５ｍ離れた地点に構築されている。前節で述べた通り、立地する谷は尾根型と谷型の斜面形状が連続しており、等高線の幅が混み合った極急斜面が多い。地上窯体架構式窯（以下、地上式窯と略）はその構築上の特性から斜面勾配がそのまま床面傾斜となり、斜面勾配に大きく左右される。本窯は表面傾斜が28°前後で起伏がなく、加えておよそ11.0ｍの窯体長をもつ２号窯を構築することが可能な斜面長をもつ箇所が選ばれて構築されている。

２．窯体

窯の形態と規模

地上式の窯で、地山を0.4m前後掘り下げて窯床を作り、窯体架構部を地上に作るが、架構部は落盤して原形を留めない。窯体先端部はわずかに削平されており、排煙部構造については不明であるが、床面が先端部でやや上向きに角度を変えていることから上向きの排煙部をもつものと思われる。窯体の残存長は、実長で11.85m、水平長で10.20ｍを測る。床幅は焚口（ＹＮ９ライン）で2.50m、燃焼部（ＹＮ８ライン）2.70m、焼成部中央（ＹＮ６ライン）2.80m、焼成部先端（ＹＮ0.5ライン）で1.20ｍを測り、床幅がほとんど変わらない寸胴形の平面プランをもつ。床面はほぼ直線的に立ち上がり、傾斜角度は焼成部で23°を測り、全体の平均斜度は24°である。標高は排煙部付近で102.40m、焚口で97.80ｍを測る。窯体の実効高は4.60ｍで、床面積は26.1㎡である。また、焚口と谷基底部からの比高差は約１ｍである。

天井壁崩落土

前述の通り、窯体のほとんどを地上に構築する地上式構造の窯である。地上式構造であるために落盤した窯壁片は窯体外の地表面にはみ出して堆積しており、しかも窯体規模が大きいために左右の側壁から２ｍ～４ｍ離れた範囲にまで大きく広がる。窯体内には多数の窯壁の落盤土が堆積していた。そのほとんどが天井窯壁で、大きな単位で落下している。最大のものは1.5m×1.6mあり、一気に天井部が落下したことがわかる。遺構図版59に示したのはこの最大の天井壁のうちＹＮ８ライン断面にかかった部分を切断して取り上げた窯天井壁で、内壁側を表にして写真撮影してある。写真でわかるように内壁全体に径５㎝前後の太さの枝木の痕跡が残されている。枝木はすべて窯体主軸と同じ方向に並んでおり、天井の架構方法示す痕跡として貴重である。同様の痕跡を残す天井窯壁は梟谷１号窯でも検出されており、この痕跡については第６章で一括して検討を行う。

窯体内部の状況

床面は焚口付近からほぼ直線的に立ち上がるので燃焼部と焼成部の境の傾斜変換点はなく両者の区分は明瞭ではない。ただ、ＹＮ６ライン付近から焚口側にかけての床面は上下２面に分かれ、下の床面はＹＮ８ラインの手前から焚口にかけてわずかに舟底状に窪んでいるので、焚口から２ｍくらい奥に入った付近までが一応の燃焼部の範囲ではないかと思われる。２ｍの長さは一見長すぎるようにもみえるが、このくらい規模の大きな窯では必要な長さであり、同等の規模と推定される鴨谷３号窯の燃焼部長もほぼ同じである。なお、上の床面と下の床面の間には厚さ0.4m～0.45mの埋土層があり、遺物や窯壁片を包含している。下面の平面プランは長楕円形を呈しており、一見舟底状土坑に見えるが、床面は赤く焼けており、床面から連続して灰層が延びるので当初床面と判断してよく、最終床面は嵩上げが行われて

いることになる。なお、最終操業時の焚口には左壁側から中心に向かって赤い酸化層の帯が検出された。その先端部は主軸線よりも30㎝手前までで、窯焚き時に焚口の左右に粘土を置いて、中央の投薪口を残して焚口幅を狭めた痕跡と判断される。

焼成部と燃焼部の境をＹＮ７ラインとすると焼成部の長さは８ｍとなる。先端部は現代の溝で削平を受けているが、両側壁の収束状況と床面の立ち上がりの状況からみて、削平部はごくわずかと推定される。床面の先端の傾斜はそれまでの直線ラインからわずかに傾斜を上向きに変えており、上向きの排煙口をもつものと思われる。また、窯体先端部からＹN4.3ライン付近まで床面に厚さ２～３㎝の灰の堆積層が認められた。焼成部床面には窯体先端部と左右の側壁際に須恵器の破損品や焼台などの遺物が残されており、残されていた遺物の位置は焼成部の主軸線を通路部として窯出しを行ったことを示している。

架構痕跡

両側壁には架構材の痕跡が残されていた。架構材は３号窯と同じく先端が尖った直径数㎝の打ち込み杭の形状を呈する。架構材の痕跡は２Ｌ３のように側壁部に空洞化して残存するものもあるが、大半が床面に丸い杭状の輪郭を残し、その下に炭化材の形で残されている。

架構痕跡の検出状況は、遺構図面16および第１表に示した通りである。左側に18箇所、右側に12箇所検出できたが、杭間の広く開いている箇所もある。この場合は、本来存在していたにもかかわらず、検出できなかったか、痕跡が滅失しているものと考えられる。最小の間隔が20㎝であるからおよそ20㎝～30㎝の間隔で打たれていると判断してよい。架構痕跡は２Ｌ１と２Ｒ１を架構部の焚口側の起点として、２L13、２R12までほぼ一直線上に並ぶ。左側壁に関しては２L13から２L14まで、右側壁については２R12より先にはそれぞれ痕跡は発見されていないが、本来は存在したはずである。架構痕跡の配列状況をみると、左側壁と右側壁はＹＮ４ライン付近まで、2.7m前後の幅をもって平行関係を保ちながら一直線に延び、ＹＮ４ラインより先はそれぞれ内向きに方向を変えて排煙部付近まで直線的に延びていることがわかる。このことから２Ｌ１と２Ｒ１を起点とする杭の直線的配列はＹＮ２ライン付近で一旦終了し、それより先は２L14を終点とする新たな架構材の直線的配列がくるものと思われる。右側壁についても２L14に該当する痕跡は検出されていないが、左側壁の２Ｌ３と同様の架構材の配列がくるものとみてよい。また、２L15～２L18は２Ｌ１と２Ｌ２の内側にある杭の配列であり、焚口の修復に伴う２次的な架構材の配列の可能性が高い。なお、架構材の傾斜角度は70°～75°である。

第１表　鴨谷２号窯側壁架構材　計測表

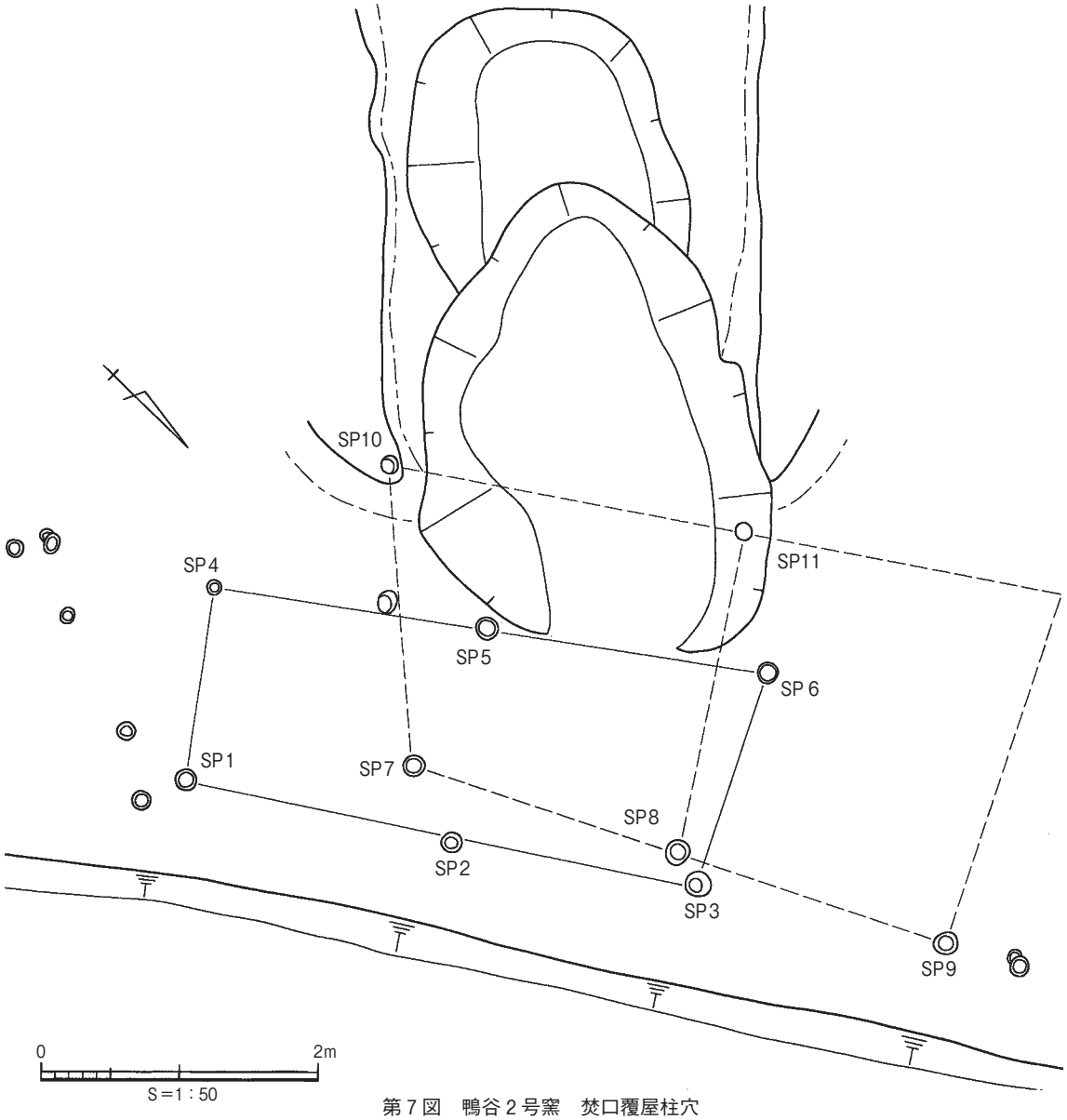
番号	角度	痕跡長	間隔（中心間）	痕跡の形状
２Ｌ１	70°	－		基部炭化（径５㎝）
			80㎝	
２Ｌ２	80°	－		基部炭化（径５㎝）
			68㎝	
２Ｌ３	70°	23㎝		上部空洞化（径７㎝）、下部炭化
			34㎝	
２Ｌ４	69°	33㎝		上部空洞化（径５㎝）、下部炭化
			92㎝	
２Ｌ６	75°	－		基部炭化（径６㎝）
			38㎝	
２Ｌ７	69°	－		空洞化（径７㎝）
			57㎝	
２Ｌ８	72°	－		基部炭化（径７㎝）
			45㎝	
２Ｌ９	70°	－		基部炭化（径５㎝）
			24㎝	
２Ｌ10	68°	－		基部炭化（径５㎝）
			40㎝	
２Ｌ11	64°	－		基部炭化（径９㎝）
			30㎝	
２Ｌ12	70°	－		基部炭化（径６㎝）
			44㎝	
２Ｌ13	60°	－		基部炭化（径３㎝）
２Ｌ14	90°	－		基部炭化（径10㎝）
２Ｌ15	－	－		基部炭化
２Ｌ16	－	－		基部炭化
２Ｌ17	－	－		基部炭化
２Ｌ18	－	－		基部炭化

※２Ｌ５は横方向の炭化材であり、縦方向の骨組み材(杭)ではないので除外した。

番号	角度	痕跡長	間隔（中心間）	痕跡の形状
２Ｒ１	75°	５㎝		基部炭化（径５㎝）
			76㎝	
２Ｒ２	75°	６㎝		基部炭化（径４㎝）
			28㎝	
２Ｒ３	70°	７㎝		基部炭化（径４㎝）
			78㎝	
２Ｒ４	－	－		基部炭化（径10㎝）
			64㎝	
２Ｒ５	70°	10㎝		基部炭化（径５㎝）
			36㎝	
２Ｒ６	65°	９㎝		基部炭化（径６㎝）
			40㎝	
２Ｒ７	－	－		基部炭化（径７㎝）
			70㎝	
２Ｒ８	72°	８㎝		基部炭化（径８㎝）
			34㎝	
２Ｒ９	78°	10㎝		基部炭化（径８㎝）
			20㎝	
２Ｒ10	63°	８㎝		基部炭化（径４㎝）
			24㎝	
２Ｒ11	68°	10㎝		基部炭化（径５㎝）
			62㎝	
２Ｒ12	65°	７㎝		基部炭化（径３㎝）

3．前庭部

窯体前には東西約７m、南北2.5m前後の広さの平坦部が設けられており、この平坦部から20個余りのピットが検出された。これらのピット群からSP１～SP６の構造物１およびSP７～SP11の構造物２の２棟の構造物の存在が想定される。ともに１間×２間の規模の構造物で、同じ構造物は鴨谷３号窯や梟谷１号窯でも発見されている。柱間は２m前後で、柱穴掘り方の径は10㎝～18㎝、深さ11㎝～30mである。構造物は焚口前の雨避けを目的とした天井を掛けただけの壁のない庇程度の焚口の覆屋と判断してよい。構造物２（焚口覆屋２）は南西の柱穴１箇所を欠くが、木の根のよる撹乱があり消失して検出できなかった可能性が高い。また、焚口との位置関係から構造物２は最終操業期、構造物１（焚口覆屋１）は操業当初期に設けられた可能性が高い。



第７図　鴨谷２号窯　焚口覆屋柱穴

４．灰原

焚口から谷に向かって扇形に広がるが、東側の灰原域は１号窯の灰原西域に及んでおり、両窯の灰原域が重なる。斜面裾部が水利工事等により削られており、灰原の一部が失われている。谷基底部にはSD01を中心に多数の遺物が出土した。遺物は須恵器片と多数の焼台があり、窯詰めのたびに製作され、再利用されずに遺棄された状況が窺える。また、西側灰原域での出土遺物は大半が２号窯のものであるが、１号窯のものも含まれる。なお、谷部の灰原の灰層から遺物図面43に掲載した別時期の神出産の片口鉢数点が出土した。土坑状の掘り込みがあった可能性もあるが、灰層中のことであり、遺構としては検出できなかった。

５．外部施設

SD01

第２節で述べた通り、１号窯前面の谷基底面に掘り込み遺構が存在する。この掘り込みの埋土については、南壁側に１号窯の遺物層が残存する以外はすべて２号窯の遺物層である。この掘り込み遺構は前節で述べた通り、２号窯時の遺構の可能性もあるものの、１号窯操業時の遺構と判断した。この場合、２号窯操業時に掘り込み部の浚渫（再掘り下げ）が行われたことになる。１号窯の遺物が南壁側に集中していることは、浚渫の際に取り残された状況を示す。

SD01はこの掘り込み部を起点として、北側の斜面裾に沿って東から西に貫流する流路であり、本来、谷の基底部を流れる谷流路を北側の斜面裾を開削して、北側の斜面際に寄せた人為流路である。上流からの谷水を一旦掘り込み部で受け、溢水を下流側に流すという仕組みを設けていると思われる。西側の終点については近年の水利に係る谷底部の掘り下げ工事で消失している。流路幅は1.7m～２m前後で、深さは0.4m～0.5mである。なお、掘り込み部底面から建築部材と思われる木製品W３が出土している。

作業場

西側域の南側斜面裾部がカットされて平坦地が作り出されている。また、SD01はSX01の東付近から北側の斜面裾部に沿って平坦地を迂回するような形で開削されており、作業スペースの確保を意図した結果であることは明らかである。平坦部は延長25m、幅10m前後の規模であるが、近年の水利工事によって削平を受けており、深く掘られた２つの土坑以外の遺構は検出されなかった。このうちSX01は短径1.30m、長径2.00m、深さ0.95mの土坑で、壁は垂直に掘られ、底面の中心部にくぼみを持つ。埋土から２号窯の瓦などの遺物が出土している。また、SX02は短径2.20m、長径3.70m、深さ0.75mの土坑で、同じく壁は垂直に掘られている。土坑内からは２号窯のほかに１号窯の遺物も出土している。遺構の性格としては、下層の湧水帯を掘り込んだ井戸的な性格を考えたい。恐らく単なる窯の構築等に必要な水の確保であれば、SD01の一部を深く掘り下げればことが足りるが、この場合濁水が混じることになり、生活用水の確保のために、SD01とは別に設けたものと考えたい。

写真６　木器W３出土状況

第４節　鴨谷３号窯

東向き斜面に構築されている。この東向き斜面は以前の土取り工事によって大半が削り取られており、窯体は燃焼部を中心とした下方部位が約3.5m残されている程度であった。出土遺物はヘラ切りの杯Bを主体とする遺物群と糸切りの平高台椀を主体とする遺物群の２相あり、前者の遺物を含んだ灰層が残存する窯体の下から検出されている。このことから残存する窯体は第２次操業窯体であり、第１次操業窯体の灰原を切って構築されていることがわかる。以下その詳細を述べる。

第１次操業窯

１．窯体

灰原の一部のみで、窯体は残存しないが、説明の都合上、消失した窯体を第１次操業窯体と呼称する。第１次操業窯体の存在を示すものとして第２次操業窯体の盛土層の下から窯体周囲に広がる灰層がある。この灰層は鴨谷１号窯と同じヘラ切りの杯を中心とした遺物群を包含しており、糸切りの椀を中心とした第２次操業窯体の遺物群とは明らかに様相が異なっており、第１次操業窯体の灰原を切って構築されと判断した。第１次操業窯体については斜面が土取りによって削平されていることもあり、その痕跡は全く残されていない。後述の通り、第１次操業の遺物は１号窯と同じ型式の遺物群であること、第２次操業に見られる大型の甕等の焼成は行っていないことから１号窯と同規模かやや大きい程度の窯体規模と推定される。また、窯体の位置は扇形に広がる灰原の形状から第２次操業窯体のＹＥ２ラインよりわずかに上方の位置に存在していたものと判断される。

２．灰原

第１次操業の灰原は第２次操業の灰原と重複しているので、正確な範囲は不明であるが、第２次操業窯体のＹＥ２ライン付近から扇形に広がり、下方では第２次操業の灰原の下に潜り込む。灰原を横断するＸＮ５ライン断面の第13層は第１次操業の遺物を中心とした灰層であるが、第２次操業の遺物も混入しており、第１次操業の純粋な灰層ではない。その上の第12層は間層のように見えるが、後述の通り、第２次窯体の崩落土であり、第１次操業と第２次操業を分ける間層は確認できなかった。この間層の不存在は第１次操業と第２次操業の間に時間的な空白がないことを示すものである。

３．作業場跡

３号窯が存在する谷は南方向から大きく向きを変えて東に延びる。この東に延びる谷は幅が狭く、本来の断面はV字形状を呈する谷であるが、斜面の裾を削り、その発生土を利用して谷底を埋めて幅５ｍ前後、延長30m余りの規模の平坦部を作り作業場を設けている。同時に北側斜面の裾部を削って、本来中央を流れていた流路を北側の斜面裾に寄せており、北側の斜面の一部に流路の開削跡と思われる痕跡が残されているが、流路そのものは近年の水路開削によって失われている。谷の開口部近くにはやや湾曲した土坑状の土器溜りが検出されているが、この箇所では谷の北側斜面が南側にせり出しており、前記流路の残存部と思われる。この土器溜まりからは第１次操業の遺物が出土しており、この作業場が第１次操業時に形成された可能性が高いことを示す。

作業場として使用された痕跡を示すものに、南斜面側に検出されたピット群がある。ピットは東西方向に並んで３個検出されており、桁行き２間の掘立て建物の柱穴と思われるが、建物というより壁のな

い天井を掛けただけの小屋掛け程度の代物であろう。柱間は２ｍ～2.2mである。柱穴そのものは検出されなかったが、堀り方の径は40㎝～50㎝、残存の深さは20㎝～30㎝である。北側に展開する柱群は盛土分の流失により残存していないが、谷幅から判断して梁行きは１間分しかないと判断される。この作業場の造成は、前述の通り、土器溜りの遺物群の様相から３号窯第１次操業期に行われたものと思われる。なお、轆轤ピットや粘土溜めなど製作に関わる痕跡は検出できなかった。

第２次操業窯

１．窯体

窯の形態と規模

上記の通り、残存する窯体は第１次操業窯の灰原を切って窯底を作り、地上に窯体を構築した地上式の窯（地上窯体架構式窯）である。窯体の大半は削平を受けて残存せず、わずかに焼成部下位から燃焼部のみが残存していた。残存長は3.50mであるが、窯体幅は2.35mあり、大型の窯と推定される。焚口は谷の基底部にあり、焚口は本来であればもう少し高い位置にあるはずであるので、わざわざ最も低い位置に設けているということは窯体長が斜面長に制約されていると判断できる。斜面の高さは、東側斜面で標高103m、谷基底面の標高は99.0mあり、両者の比高差は４ｍである。窯体床面の平均斜度は22°であるので、これをもとに窯体長の復元を試みると、窯体長は10.5m（実長）となる。この窯体長は２号窯とほぼ同じである。床幅は焚口のＹＥ４でライン2.20m、ＹＥ２ラインで2.35mを測る。

窯体内埋土

窯体内には２号窯と同じく大きな天井壁の落盤塊が認められた。この天井壁は遺構図版55で示した通り、その厚みは約35㎝以上で、内壁部の還元層の厚みは20㎝前後である。このうち、スサ混じりの粘土層は内壁側の10㎝程度認められるのみで、その外側には認められない。従って、その外側の土は保護土ということになり、窯体の両外側に残る盛土は、盛土というよりも保護土の最下部が残存したものである。

窯体内部の状況

床面は基本的には４面認められる。最上面を第２次操業窯の第３・４床面（以後、２－３・４床面と略)、その下の中間の床面を第２次操業窯の第２床面（以後、２－２床面と略)、最下面を第２次操業窯の第１床面（以後、２－１床面と略）とする。

２－３・４床面は第15層～17層をベースとした最終操業の床面である。還元面の広がりはＹＥ３ライン付近までで、それより焚口のＹＥ５ライン付近まではその広がりは認められない。従ってＹＥ５ラインからＹ３Ｅライン付近まで約２ｍが燃焼部の範囲となる。床面および埋土から多数の椀・甕片が出土した。傾斜角度は19°を測る。

２－２床面は第23層・第26層をベースとする床面である。遺構図版37に示したように、椀*5809*と*5810*が甕片（*5815*）の上に、伏せて置いたような状態で検出されている。いずれも完形品であり、意識的に置かれた可能性もある。埋土である第16層･17層は多数の須恵器のほか窯壁片を含んでおり、特にＹＥ３ライン付近では20㎝大の窯壁塊も認められる。

２－１床面（当初床面）

２－２床面の下に広がる当初床面である。埋土である第23層は多くの窯壁片のほか、焼土・須恵器を

含み、第26層は炭・焼土を含む。還元面の広がりはＹＥ2.4mラインまででそれよりやや舟底状の形態をとる。

側壁の架構痕跡

左右の側壁に架構骨組み材の痕跡を検出した。架構材（骨組み材）は側壁面に空洞となって残されており、末端は炭化して残存する。いずれも径は５㎝前後で、先端部が尖った杭の形状を呈しており、70°～75°の角度で斜めに打たれている。架構材の間隔は約20㎝である。それぞれが側壁内に埋まっているように見えるが、背側に貼られた粘土が杭と杭の隙間から内側に迫り出してきたもので、架構材が壁の内側に塗りこめられたものではない。左右側壁の架構材の痕跡の詳細をまとめたのが第２表で、遺構図面23・24と合わせてみると次のことが指摘できる。

まず、左側壁では３Ｌ１から３Ｌ９、右側壁では３Ｒ１から３R10までの架構材痕が一直線上に並ぶ。杭の間隔は20㎝が基本であるが、３Ｌ６－３Ｌ７間が25㎝、３Ｌ７－３Ｌ８間15㎝、３Ｒ１－３Ｒ２間23㎝、３Ｒ２－３Ｒ３間18㎝、３Ｒ６－３Ｒ７間25㎝、３Ｒ７－３Ｒ８間15㎝というように、20㎝にならないものもある。しかしこの場合25㎝の杭間の次が15㎝の杭間となっており、２つの杭間をあわせると40㎝となり、２で割れば20㎝である。もちろん20㎝とういう数字に意味があるわけではなく、たまたま適当と判断した杭の間隔が20㎝という数字になったに過ぎない。また、ＹＥ3.5ライン付近に窯体埋土を含む窯体断面の剥ぎ取り作業を事前に実施したために、左側壁の３Ｌ８～３Ｌ９間と右側壁の３Ｒ９～３R10間に存在したと思われる痕跡が失われている。３Ｌ８と３Ｌ９の間隔は60㎝あり、杭間を20㎝と想定すると２本の杭が存在することになる。３Ｒ９～３R10については45㎝の間隔があるが、その次の３Ｒ８と３Ｒ９の間隔が15㎝であるので、45㎝の間隔を25㎝と20㎝に分割すれば、１本の杭の存在が想定される。

杭の配列は左側壁では３Ｌ１～３Ｌ９、右側壁では３Ｒ１～３R10までが一直線上に並び、３Ｌ９と３R10を結ぶ横ラインまでが架構部と考えられる。３R10と３R11および３L11については上記の骨組みにかかる架構材ではなく仮設天井か焚口部の構築に関わる補助材と思われる。側壁の還元面の範囲および天井の落盤塊はともにＹＥ４ラインまで、上記架構痕跡の検出範囲と一致する。

架構材は、壁面では70°の角度であるのに対して、基部では垂直に近い角度を示しているものが多い。この現象はまっすぐに打ち込まれた架構材が架構粘土の重圧と乾燥収縮によって内側に撓んだものと理解される。従って右側壁の３R10から３Ｒ１を結ぶラインは、平面図では３Ｒ３・３Ｒ４・３R10がライン上から外れているように見えるが、基部のラインは一直線に通る。

第２表　鴨谷３号窯側壁架構材　計測表

番号	角度	痕跡長	間隔（中心間）		痕跡の形状
３Ｌ１	75°	10㎝			上部空洞化（径７㎝）、基部炭化
３Ｌ２	70°	10㎝	20㎝		上部空洞化（径５㎝）、基部炭化
３Ｌ３	75°	11㎝	20㎝		上部空洞化（径５㎝）、基部炭化
３Ｌ４	89°	17㎝	20㎝		上部空洞化（径５㎝）、基部炭化
３Ｌ５	75°	17㎝	20㎝		上部空洞化（径４㎝）、基部炭化
３Ｌ６	71°	30㎝	20㎝		上部空洞化（径５㎝）、基部炭化
３Ｌ７	70°	25㎝	25㎝		上部空洞化（径５㎝）、基部炭化
３Ｌ８	－	－	15㎝		基部炭化
（３Ｌ8′）	－	－	60㎝	（20㎝）	推定存在（トレンチ掘削により痕跡消失）
（３Ｌ8″）	－	－		（20㎝）	推定存在（トレンチ掘削により痕跡消失）
３Ｌ９	－	5.0㎝		（20㎝）	空洞化（径３㎝）
３L10	－	－	20㎝		基部炭化
３L11	－	－			基部炭化

番号	傾斜角度	痕跡長	間隔（中心間）		痕跡の形状
３Ｒ１	75°	12㎝			空洞化（径５㎝）
３Ｒ２	70°	10㎝	23㎝		空洞化（径５㎝）
３Ｒ３	67°	7㎝	18㎝		空洞化（径３㎝）
３Ｒ４	70°	22㎝	20㎝		上部空洞化（径５㎝）、基部炭化
３Ｒ５	83°	22㎝	20㎝		上部空洞化（径６㎝）、基部炭化
３Ｒ６	74°	22㎝	18㎝		上部空洞化（径４㎝）、基部炭化
３Ｒ７	70°	25㎝	25㎝		上部空洞化（径４㎝）、基部炭化
３Ｒ８	90°	40㎝	15㎝		上部空洞化（径５㎝）、基部炭化
３Ｒ９	90°	42㎝	15㎝		上部空洞化（径５㎝）、基部炭化
（３Ｒ9′）	－	－	45㎝	（25㎝）	推定存在（トレンチ掘削により痕跡消失）
３R10	－	－		（20㎝）	基部炭化
３R11	－	－			基部炭化

3. 前庭部

焚口前から方形に並んだ６個のピットが検出されている。掘立て柱の構造物であるが、天井を掛けただけの壁のない庇程度の構造物であろう。この構造物は南側の梁間が1.9mであるのに対して北側のそれは2.5mであり、北に向かって柱間が広がる形態となっている。これは北に向かって広がる谷の幅に左右されたと思われる。構造物の性格としては窯焚き時の雨避けの壁のない庇程度の焚口の覆屋と考えられる。同様の構造物は鴨谷２号窯、梟谷１号窯からも発見されている。柱穴の掘り方の径は10㎝～16㎝、深さはSP６が30㎝と深いが、他は12㎝～18㎝である。

4. 灰原

窯体の焚口が谷の基底部と同じ高さにあるため、窯体前の作業スペースと谷水の通り道の確保のために窯体内から掻き出された灰は背後の斜面および窯体の左右の斜面に掻き上げられている。

窯体左右の斜面上の灰原の状況をみると、第２次操業の停止後の窯体崩落土が灰層の上を覆い、そのまま谷の基底部方向に流れている。ＸＮ５セクションの土層断面の第12層がこの窯体崩落土の堆積土層である。谷基底部にも灰層の堆積が認められるが、この灰層は本来背後の斜面に掻き上げた灰層がずり落ちてきたものである。例えば、Ｘ０ラインセクション（窯体主軸セクション）の断面を見た場合、最上層の第７層は灰層ではあるが、窯体埋土の上に堆積しており、明らかに東側にかきあげられた灰層が西側に向かって滑り落ちて堆積したものである。また、ＸＮ５セクションの土層も同様である。前述の通り、第12層は操業停止後の窯体崩落層である。その上に堆積している第10層の灰層は堆積の順序が逆転しているように見えるが、背後の斜面から滑り落ちてきた灰層と考えると説明がつく。

第５節　梟谷１号窯

１．窯の立地

窯が所在する梟谷はV字形の南北方向に走る小さな谷であるが、小さく蛇行する谷地形を呈する。このため谷斜面のほとんどは等高線の混み合った急傾斜面となっており、１号窯跡はこのうち傾斜が比較的緩く、窯体長を長く取ることができる凸形地形の箇所を選んで構築されている。窯体の下半分は近代に行われたマンボ掘削時に削平されて残存しない。

２．窯体

窯の形態と規模

地上式の窯（地上窯体架構式窯）で、窯体の大半を地上に構築しており、側壁の残存高は最も高いところで0.5mである。窯体の下半分がマンボ工事により削平され、上半分の6.4mのみが残存していた。斜面裾部に焚口の左側壁の一部が残存しており、全長は12m（実長）と推定される。窯体幅はＹＥ６ラインで2.1m、先端部のＹＥ３ラインで1.7mを測る。平面プランは先にむかって窄まる砲弾形の平面プランを呈する。

窯体内埋土

窯壁まじりの赤褐色土が窯体内に堆積していた。天井窯壁は細かいブロック片に砕けているが、その一部に鴨谷２号窯と同様の枝木の痕跡が残されていた。埋土中から完形品の*8501*が出土した。

窯体内部の状況

床面からは瓦が遺構写真図版49に示した状態で出土した。残存瓦はすべて平瓦である。この平瓦を取り上げると、同図版50に示したような瓦を並べて作られた階段が13列検出された。使用の瓦は丸瓦を主体とするが、平瓦も含まれる。段の幅は平瓦１枚分の約30㎝で、階段の高さは約10㎝である。13列の階段のうち第４列・第５列・第８列で窯詰めされた平瓦の一部が取り残された状態で検出された。このうち、第５列目では窯詰めが良好な状態で残されていた。平瓦の窯詰め方法は２枚の瓦を一組として向かい合わせに置いていく合掌式が通例であるが、本例の場合は平瓦の凸面と凹面を組み合わせて置き、間に瓦の小片を挟んでいる。小片の挟み込みは各瓦の間に隙間を作り、焔の通りをよくして瓦同士の密着による弊害を除去し、焼きムラのない均質な仕上がりを目指した工夫である。第５列では50㎝の間に16枚の瓦が置かれていた。第５列での床面幅は2.0mであるので、列全体では64枚の平瓦の窯詰が可能である。ちなみに合掌式の置き方では平瓦の反り幅が５㎝であるので、床面幅を同じ２ｍとすると40枚の窯詰め枚数となり、前者の置き方に比べて６割の窯詰め枚数となる。

窯体内に残されていた瓦はすべて平瓦で、灰原出土の瓦も同様である。出土丸瓦はすべて階段への転用品であり、本窯では生産されていない。従って、丸瓦は別窯での焼成品となる。窯体内に遺棄されていた平瓦の量はおびただしく、焼成に失敗した可能性が高い。平瓦はいずれも縦に裂けて破損しているので、失敗の要因は瓦の製作技法によるものではなく、焼成にあるものと考えられる。間接的には上記の窯詰めが影響している可能性もある。

階段が設けられているのは焼成部上位の4.5mのみでそれより下方には設けられていない。その痕跡も認められないので、もともとから作られていなかった可能性が高い。恐らくは焼成部上位では瓦、下

位では須恵器が焼成されていた可能性が高い。また、瓦列を形成する階段の下に還元面が広がっており、当初は須恵器焼成専用で無段であったことがわかる。この状況は後述の通り、灰原での瓦を含む上層灰層と須恵器のみを包含する下層灰層の存在状況と一致する。また、側壁部に修復の痕跡が残されているが、須恵器焼成から瓦陶焼成への移行期に大きく修復が行われた可能性が高い。このことは灰原における上下灰層の間の間層の存在からも窺える。

3．前庭部

焚口前から８つのピットが検出された。このうち方形に並んだ６個のピットは鴨谷２号窯・同３号窯で検出されている掘立て柱の構造物の柱穴と考えられる。天井を掛けただけの壁のない庇程度の焚口の覆屋である。この構造物は南側の梁間が1.9mであるのに対して北側のそれは2.5mであり、北に向かって柱間が広がる形態となっている。これは北に向かって広がる谷の幅に左右されたと思われる。柱穴の掘り方の径は14㎝～16㎝、深さは15㎝～23㎝である。

4．灰原

灰原右前方部はマンボ造成時に削平されてしまっている。灰原の堆積土は大きく分けて４層あり、間層の第３層黄褐色土層を挟んで上下に灰層が存在する。上層灰層は瓦を含んでいるが、下層灰層は層厚が薄く須恵器のみで瓦を含んでいない。

5．谷流路

梟谷は断面Ｖ字形の谷である。この谷はマンボ造成等で大きく改変されている。写真７にみえる土手状の堆積土はマンボ掘削時の排出土であり、その下に幅２ｍ前後の流路が走る。この流路は窯灰原の東側斜面裾部を開削しS字状に蛇行しながら北の城ヶ谷池に向かう。この流路は窯操業時のものではなく後世に人為的に掘り下げられたものである。本来の谷の基底面は南側では灰原の末端部、北側では写真７の中央寄りのやや高くなった位置（Ｖ字底面）にある。

写真７　梟谷流路断面

第６節　マンボ

梟谷の南端部、谷頭近くの西側斜面に横穴が掘られていた。横穴は北東方向に開口しており、斜面に対して斜め方向に掘られており、梟谷１号窯の窯体下半部分を大きく破壊していた。

開口部分前面は上幅約７ m、長さ約14mの大きさで開渠して掘削されており、湾曲しながら谷底の地形へと続いている。谷底部は約4.5mの幅で、底が平坦になるように掘削されており、標高は93.7mを越えない。横穴の開口部の標高は93.4mである。谷底には更に幅２m前後の溝が蛇行するように走るが、この溝は横穴を越えて更に谷頭へと続いているため、別の時期のもの或いは自然流路であろう。

横穴開口部付近の開渠部では、底付近の両側に幅0.3m程の小段を設け、更に深さ0.5m程掘削して底を平坦に掘削している。底平坦面の幅は約３mを測る。

横穴の開口部は、高さ2.7m、最大幅1.2mを測り、礫が多く混じるシルト層を掘り込んでおり、壁面の一部には砂層となる部分も見られた。内部は開口部から約15m奥まで確認したが、非常に狭くなり、崩落の危険があるため、それ以上の侵入や内部の掘削は行っていない。

横穴内部は、開口部から10m地点付近で一旦天井が緩やかに高くなった後、下がりはじめ、検測できた最奥部では１mほど低くなる。底に堆積した埋土も高くなっており、最奥部では穴の高さは0.5mより低くなる。10m地点付近では天井はドーム状を呈しているため高さも上がり、同時に幅も約２mと広くなる。７m地点付近では幅約1.7mで、天井も緩やかに湾曲した平天井である。両壁は直線的に掘削されているが、13m地点付近から緩やかに左へと曲がっており、幅も狭くなるようである。

この横穴は通称「マンボ」や「マンポ」と呼ばれており、周辺の台地上に用水を導く導水施設である。地元の方の話によれば、更に数十メートル先に開口していたそうであるが、ほ場整備の際に失われたそうである。この部分は開渠部ではなく、掘削の利便や維持管理のための竪穴かもしれない。但し、このマンボは傾斜の設計ミスにより水が流れなかった、との話も伺った。

梟谷の谷筋も開渠部として大きく水路状に掘削されていたが、谷尻部の調査区外に土堤状の高まりが残り、その上を現在のコンクリート製の水路が走っている。この谷を溜池として一旦水かさを上げ、マンボへと導水したものかもしれない。但し、開口部の両側に設けられた小段がこの導水施設の保守点検の便を考えて設置されたものであるなら、水深は0.5m程度と考えられる。

写真８　マンボ入口部

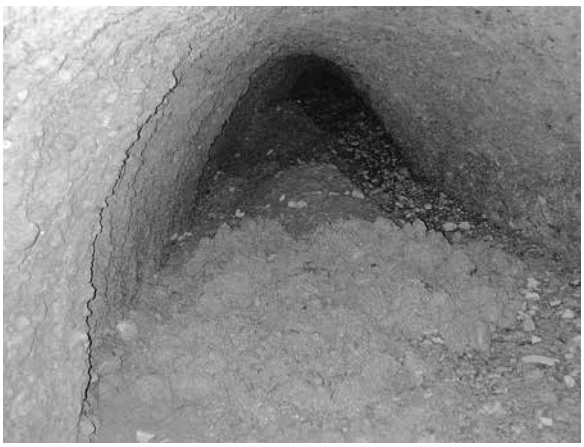


写真９　マンボ奥部

マンボ内の埋土堆積も同程度のものである。

「マンボ」とは、人工的に作られた地下水路の名称であり、その名称は坑道を意味する間歩（マブ）に由来するといった説、或いはオランダ語が語源であるなどの説がある。九州から秋田県まで日本各地に残されており、特に三重県、愛知県、岐阜県には多く残されており、三重県で記録に残る最も古いものは寛永13（1636）年にまで遡るとされる。

神出のある印南野台地は、明石川・加古川・美嚢川及び播磨灘に囲まれた台地である。平清盛がこの台地を新京の候補地としたが、水の利便の悪さから廃案となったことからも知られるように、水利の便が悪く、古くから耕地として利用できなかった。近世に入り明石川や伊川からの用水や溜池灌漑によって部分的ではあるが可耕地が増え、貞享２（1685）年明石藩主、松平直明が神出の開墾に着手している。美嚢川に注ぐ志染川の支流である山田川・淡河川からの導水は、明和８（1771）年以降、たびたび地元の有力者によって測量・設計が計画されたが、工事着工までには至らなかった。凶作や地租改正等により地元が困窮する中、ようやく明治21（1888）年淡河川疎水工事が着工され、28ヶ所のトンネル工事も含めて明治24年に完成したが、翌年豪雨により被災。翌明治26年に復旧した。明治43（1910）年には山田川疎水工事に着手、大正８（1919）年までに支線水路、溜池工事が完成している。

昭和24～37年にかけて、県営の農業水利改善事業として淡河川・山田川の工事が行われている。更に昭和45年から平成５年には、国営東播用水事業として水道用水供給を含めた地域総合開発事業として、３基のダム工事や神出大池・大鳥喰池・鍋谷池などの溜池工事等と共に、マンボの改修工事も行われている。

以上のように、①明治21年から明治26年（1888～1893）の淡河川疎水工事、②明治43年から大正８年（1910～1919）の山田川疎水工事、③昭和24年から37年（1949～1962）の県営事業、④昭和45年から平成５年（1970～1994）の国営東播用水事業、と主として四時期に分かれており、地元の要望が藩や県、国を動かした用水事業の歴史がこの印南野台地には残されている。但しこの他にも地元民間の工事としての溜池からの小規模なマンボも存在している。

神出の皐谷に残されていたマンボはいつ頃掘られたものであろうか。出土遺物がなく、発掘調査で得られた資料からは不明である。また、支線や小規模なマンボの史料は残されていない可能性が高い。三重県鈴鹿市では昭和に入ってから作られたマンボが存在するが、数は少なく、明治時代のものが最も多く確認されている。前述の④の時期では既存のマンボの改修が主体で新設の可能性は低い。また、③の時期でも素掘りのものは少なくなっているだろう。明治時代中期から大正時代に淡山疎水に関連して作られた可能性が高いものと思われる。

参考文献

神吉和夫　1993「水利用できごろロジー」『ＳＵＩＴＥ　ひょうご水の文化誌』兵庫県企画部

森本真一　『印南野台地の農業用水利施設『マンボ』について』明石市立文化博物館

兵庫県淡河川山田川土地改良区　1990『兵庫県淡河川山田川疎水百年史』

兵庫県農林水産部農地整備課　1989『兵庫の土地改良史』兵庫県

第４章　出土遺物

第１節　窯跡群出土遺物の分類とその基準

最も古い段階の鴨谷１号窯跡から最も新しい段階の梟谷１号窯まで４基の窯跡から５時期の遺物が出土しており、７・８世紀以来の伝統的古代器種・瓷器系器種・中世器種の３器種形態が認められる。具体的な器種変化や技法変化については第６章で詳述しており、ここではその前提となる器種分類の基準について明示しておきたい。

まず、器種名については、まず、７～８世紀の伝統的器種の系譜を引くものについては、旧奈良国立文化財研究所の分類名称に従い、９世紀以降の瓷器系器種を中心とした新しい器種については新たな分類名称を用いる。また、同一器種におけるヘラ切りから糸切りへの底部切り離し手法変化については、ヘラ切りをｈ類とし、糸切りをｉ類として区分した。また、壺類など径の広い底部については、ヘラ切りが底部周縁のみに限られて全体に及んでいない。その詳細については第６章に譲るが、厳密にいえば切り離しではなく、ロクロから起こす行為であり、ヘラ切りや糸切りとは区分してｊ類としておく。

そのほか、各器種において細分が必要な場合はⅠ類・Ⅱ類あるいは１類・２類というようにローマ数字や算用数字を適宜使用して仮区分を図った。その分類を第３表および第８図・第９図に示す。

杯A

底部が平底の７世紀以来の伝統的な小型供膳器種である。底部の切り離しはヘラ切りを基本的とするが、糸切りのものも少数あるので、ヘラ切りのものを杯Ahとし、糸切りの杯Aiとして区分する。

杯B

ヘラ切りの底部に輪高台を付した７世紀以来の伝統的な小型供膳器種である。一般的な杯Bの時代的変化は、時代が新しくなるにしたがって、器高が高くなるとともに口径に対して底径が小さくなり、高台が底部周縁に付く傾向をもつ。外形的には椀形態との区分が難しいものもあるが、体部が直線的であり、口縁部の外反が認められない点、高台の高さが低く断面が方形で外方への踏ん張りがない点において、次に述べる椀Aと区分する。

椀A

輪高台をもつ椀を椀Aとする。瓷器の形態を模した新しい器種であり、体部が丸みをもち、口縁部が外反するという特徴のほか、高台が高く外側に踏ん張るという特徴をもつ。この３点において、古代的器種の杯Bの最終形態とは異なる。また、椀Aには底部の切り離しがヘラ切りのものと糸切りのものがあり、それぞれを椀Ah、椀Aiとして区分した。さらに、椀Ah、椀Aiの双方に沈線をもつ１類ともたない２類があり、椀Ah１・椀Ah２・椀Ai１・椀Ai２の４種に分類した。

椀C

平高台をもつ椀を椀Cとする。椀Aとともに瓷器系器種の１つである。椀Cには底部の切り離しがヘラ切りのものと糸切りのものがある。『相生市・緑ヶ丘窯址群』・『志方窯跡群Ⅰ』『志方窯跡群Ⅱ』等の報告書ではヘラ切りのものを椀Bまたは椀bの分類名称を与えていたが、今回の分類において、ヘラ切りのものをｈ類、糸切りのものをｉ類として区分したことにより、ヘラ切りの平高台をもつものを椀Ch、糸切りの平高台をもつものを椀Ciとする。また、糸切りの椀Ciには、椀Aと同様、沈線をもつ１類とも

たない２類があり、椀Ci1・椀Ci2の２種に細分した。

小皿Ai

口径10㎝前後、器高２㎝～３㎝の糸切りの小型皿である。

台付皿・托状形皿

皿に輪高台または平高台を付すものを台付皿とする。輪高台をもつものを台付皿Aとし、ヘラ切りの底部に輪高台をもつものを台付皿Ah、糸切りの底部に輪高台を付すものを台付皿Aiとする。また、平高台をもつものを台付皿Cとする。このうち、ヘラ切りの平高台をもつものを台付皿Chとし、糸切りのものを台付皿Ciとするが、台付皿Chは今回の調査では該当資料がない。なお、外見的には高い平高台を付した台付皿のように見えるが、底部内面が大きくくぼむものを托状形皿として区分する。

鉢D

口縁部が「く」の字状に屈曲する鉢である。いわゆる「こね鉢」と通称される東播磨産須恵器の代表的器種である片口鉢はこの鉢Dを祖形として器形変化したもので、今回の出土資料でその変化の過程をたどることができる。従って、ここでは８世紀以来の輪高台をもつ原形の鉢DをⅠ類とし、底部形態が糸切りの平高台に変化した鉢DをⅡ類とした。そのうえで、DⅡ類のうち、体部がⅠ類の形態を受け継ぐ初期段階のものをDⅡ１とし、DⅡ１形態の口径が拡大化したものをDⅡ２とした。このうち、片口をもたない段階のものをDⅡ2aとし、さらに口縁部の屈曲が少なくなり、片口が普通化した段階のものをDⅡ2bとした。

壺N

倒卵形の体部にラッパ状に開く頸部をもつ壺を壺Nとする。このうち突帯も耳をもたないものを壺NⅠとし、体部に突帯と耳を有するものを壺NⅡとする。後者は播磨特有の器種であり、２本突帯と両耳をもつものを「双耳壺」と呼称してきたが、当該窯跡群においては、突帯が２本から１本となり、最終的には左右の耳が消失し１本突帯のみとなる変化をたどるので、「双耳壺」の総称名は適さない。従って、ここでは、突帯がなく耳のみを左右に設けるものを壺NⅡ０（神出窯には該当なし）とし、沈線若しくは沈線と１本突帯を巡らす初現期のもの（神出窯には該当なし）をNⅡ１、２本突帯と両耳をもつ従来の双耳壺を壺NⅡ２とする。さらに、底部の形態が糸切り底となり、突帯と耳が変化したものを壺NⅢとし、このうち１本突帯で左右に耳を有するものを壺NⅢ１、１本突帯で耳を消失したものを壺NⅢ２とする。

壺A

短頸壺である。四方に耳を配するものと持たないものがある。前者は体部を叩き整形を施すのが特徴である。

壺L

８世紀代の壺Lの底部は輪高台を有するが、当該窯では輪高台をもつｈ類のものはなく、すべて平高台である。この平高台はロクロから取り外す際に底部周縁にヘラを差し込んでおこすｊ類のものと糸切りのｉ類のものがある。

壺M

小型の壺である。平底の底部に短く外反する頸部もつ。ヘラ切りのｈ類と糸切りのｉ類がある。

水瓶

卵形の体部に細長い頸部をもつ。

鉢A（鉄鉢）

平底の底部を持つものと輪高台を付すものがある。

風字硯

傾斜硯の１つで、硯頭部が丸く硯尻が「ハ」の字状に開く。楢崎分類では風字硯に５型式設定されているが、本窯跡群出土の風字硯は中央を突帯で仕切る第３型式の二面硯である。

平瓶

扁平な把手を有し、平底で肩のはった体部を有する。１号窯のみの出土である。

甕

甕の口縁の形態にはいくつかに分類できるが、基本的に次の３種に大きく分類した。底部の形態には丸底のほかに平底もあるが、分類には反映させていない。また、当該窯跡群においては、叩き工具は連続する時期の窯の間で継続使用されていることが叩き目の分類で判明しており、下記の甕の口縁形態とは別に叩き目の分類を行っている。叩き目については第６章第２節に分類表を掲載している。

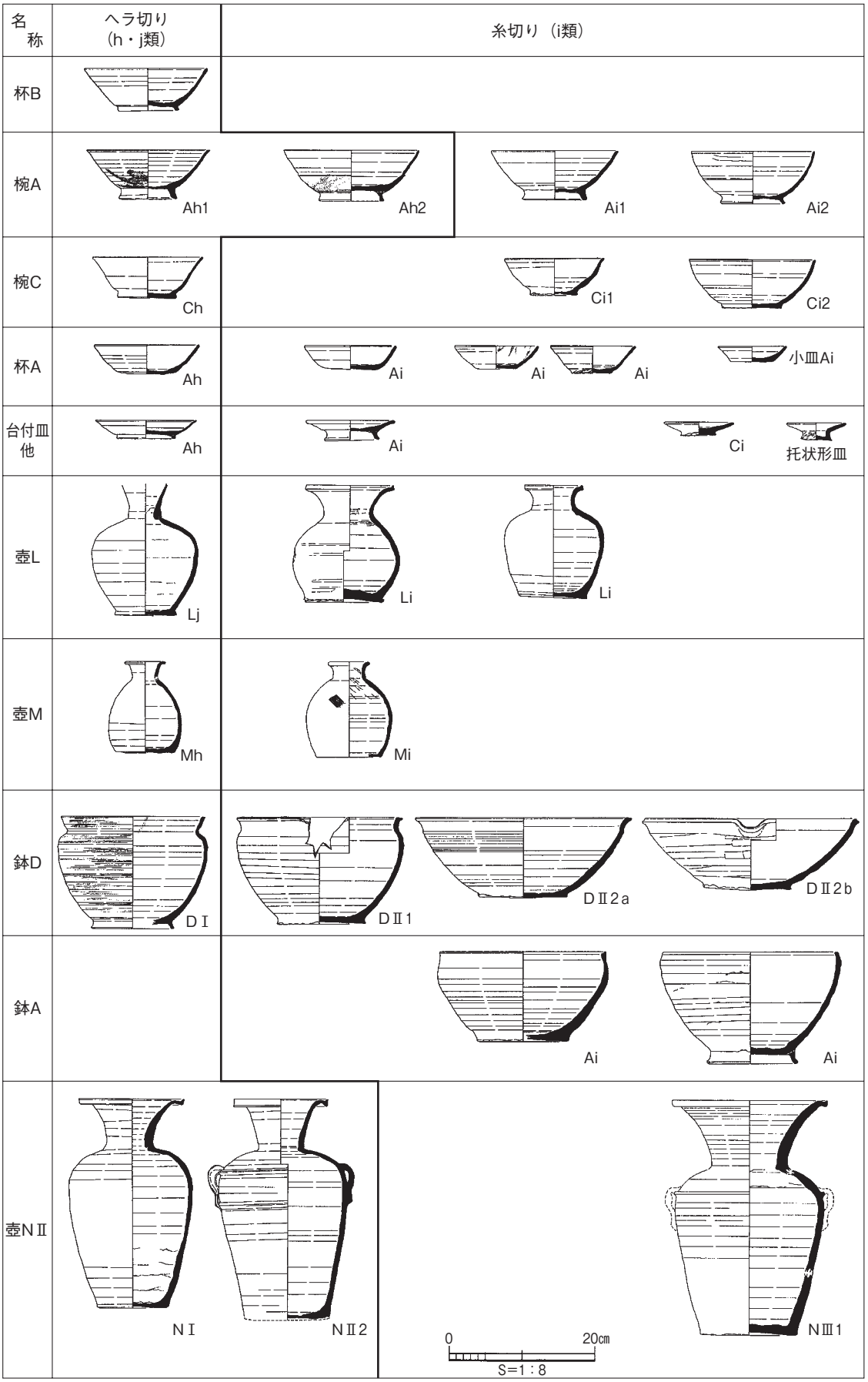
A　大きく「く」の字状に外反する長い口頸部をもつ。口縁端部を上方につまみ上げるタイプのもと口縁下端部を下方に引き出すタイプがある。

B　頸部が直立し口縁部をL字状に屈曲させる。口縁端部を上方につまみ上げるタイプのものと口縁下端部を下方に引き出すタイプがある。

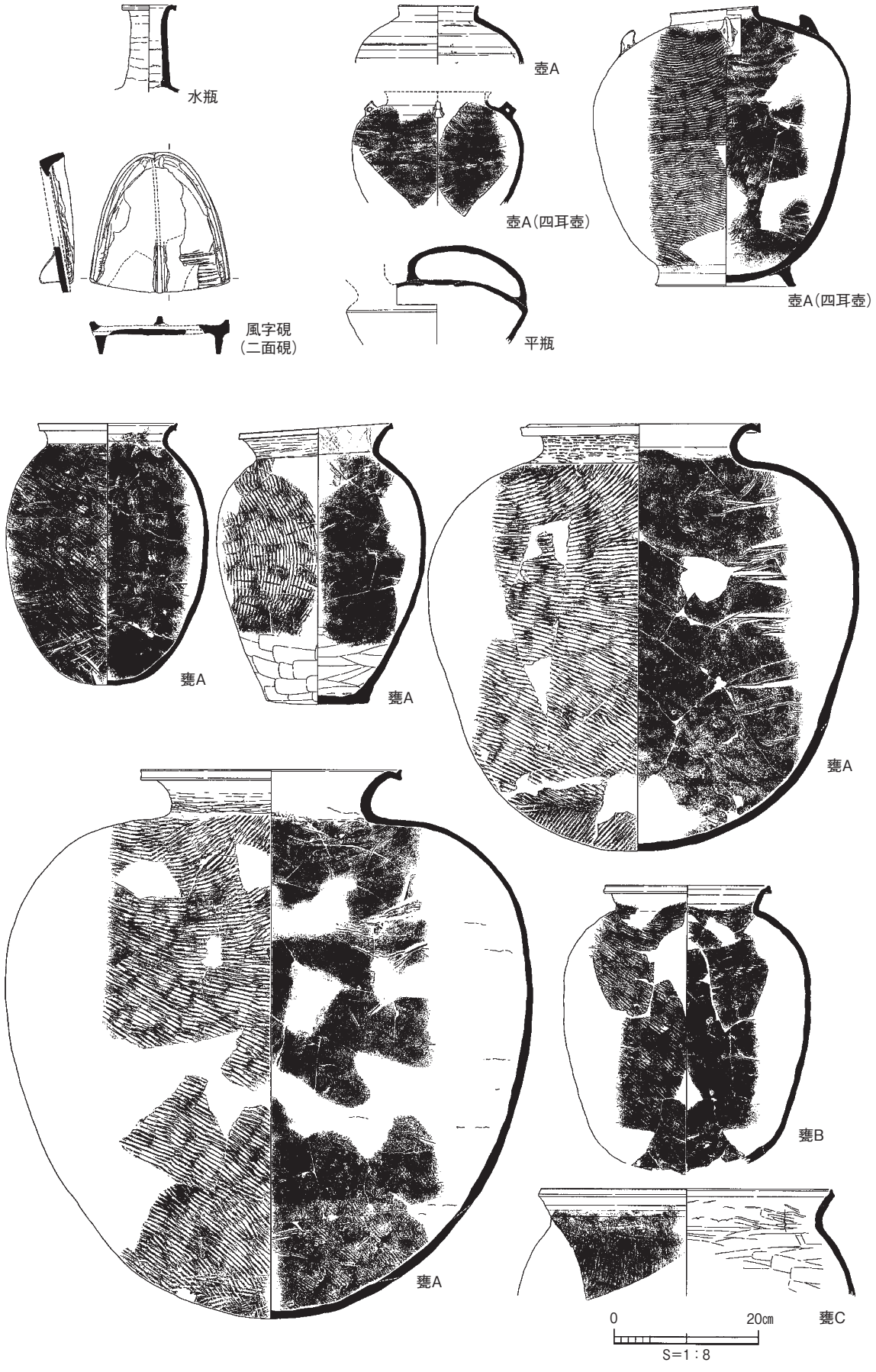
C　肩の張りのない広口の甕である。

第３表　小型供膳器種の分類表

器種名	分類	分類内容			鴨谷１号窯	鴨谷３－１号窯	鴨谷３－２号窯	鴨谷２号窯	臬谷１号窯
		底部の形態	切り離し	体部					
杯A	Ah	平底	ヘラ切り(h)		●	●	●	×	×
	Ai		糸切り(i)		×	×	●	●	×
杯B		輪高台	ヘラ切り(h)		●	●	×	×	×
椀A	Ah1	輪高台	ヘラ切り(h)		●	●	×	×	×
	Ah2			削り出しの段(２類)	●	●	×	×	×
	Ai1		糸切り(i)		×	×	●	少量	少量
	Ai2			沈線(２類)	×	×	●	少量	不明
椀C	Ch	平高台	ヘラ切り(h)		●	?	×	×	×
	Ci1		糸切り(i)		×	?	●	●	●
	Ci2			沈線(２類)	×	×	●	●	●
台付皿	Ah	輪高台	ヘラ切り(h)		●	●	×	×	×
	Ai		糸切り(i)		×	×	●	?	?
	Ci	平高台	糸切り(i)		×	×	●	●	●
小皿	Ai	平底	糸切り(i)		×	×	×	●	●


名称
ヘラ切り（h・j類）
糸切り（i類）
杯B
椀A
Ah1
Ah2
Ai1
Ai2
椀C
Ch
Ci1
Ci2
杯A
Ah
Ai
Ai
Ai
小皿Ai
台付皿他
Ah
Ai
Ci
托状形皿
壺L
Lj
Li
Li
壺M
Mh
Mi
鉢D
DⅠ
DⅡ1
DⅡ2a
DⅡ2b
鉢A
Ai
Ai
壺NⅡ
NⅠ
NⅡ2
NⅢ1
0
20㎝
S=1：8

第8図　器種分類図1



第 9 図　器種分類図 2

第２節　鴨谷１号窯出土遺物

１号窯の廃絶後にわずか西５ｍに構築された２号窯の影響を受けて１号窯の灰原は大きく撹乱されており、灰層からは２号窯の遺物と混在して出土している。また、１号窯の位置から離れた２号窯の灰原からも１号窯の遺物が出土する。１号窯はヘラ切りの遺物群が主体であり、古代的器種が残存しているのに対して２号窯は糸切りの遺物群が主体である。こうした観点から２号窯の灰原から出土しているものであっても１号窯の遺物群の特徴を示しているものについては１号窯の遺物として取り扱った。

窯体出土

杯Ah（*0101～0109*）

ヘラ切りの平底の杯である。口径に対して底径が小さいために体部の外傾度がやや低く、体部は大きく開くように斜め上方に立ち上がる。口径12㎝～15㎝、底径7.9㎝～8.5㎝、器高3.1㎝～4.1㎝。

杯B（*0110・0111*）

回転ヘラ切りの底部に低い輪高台を付す。輪高台はわずかに外方に踏ん張り、体部は斜め上方に直線的に立ち上がる。*0110*は口径16.9㎝、底径8.1㎝、器高5.9㎝である。

灰原出土

台付皿Ah（*0201～0205*）

ヘラ切りの浅い皿の底部に輪高台を付す。*0201*のように底部の中央寄りに高台を付すものと*0202*のように底部の周縁に付すものがある。輪高台断面は*0201*のような三角形のものと*0202*のように断面方形のものがある。*0204*と*0205*は２号窯灰原からの出土である。口径は14㎝台である。

杯Ah（*0206～0223*）

平底の杯で、底部にはヘラ切り痕を残す。口径12.8㎝～15.3㎝、底径6.8㎝～9.4㎝、器高3.1㎝～4.3㎝。大半は口径に対して底径が小さいために体部は大きく開くように斜め上方に立ち上がる。*0216・0217*のように底径が広く、外傾度が他に比べてやや高いものもある。*0206・0207・0214・0218～0220*は２号窯灰原からの出土である。

杯B（*0301～0315*）

回転ヘラ切りの底部に低い輪高台を付す。輪高台はわずかに外方に踏ん張り、体部は斜め上方に直線的に立ち上がる。*0301*のように口径13.6㎝の小型のものもあるが、大半は口径15㎝～16㎝台のものである。*0310・0313*は２号窯灰原からの出土である。

椀Ah1（*0316・0317*）

ヘラ切りの底部に外側に踏ん張る高台をもつ。少量存在する。このうち*0316*は２号窯灰原からの出土で、体部が丸みを帯び、口縁部は外反する。

椀Ah2（*0401～0414*）

ヘラ切りの底部に輪高台を付す。高台は高く、外側に踏ん張る。口径は16㎝～19㎝台で、杯Bより一回り大きい。体部は直線的に立ち上がり、外面中央部に削り出しの段をもつ。*0408*と*0414*は２号窯灰原からの出土である。

椀Ch1（*0415*～*0420*）

ヘラ切りの平高台をもつ。体部は直線的で体部内面に段をもつ。*0416*以下は底部のみであるが、内面にナデ調整が行われていることから椀Chと判断した。*0417*と*0418*は２号窯灰原からの出土である。

鉢ＤⅠ（*0501*～*0509*）

「く」の字形に屈曲する頸部をもつ。いずれも底部を欠くが、３号窯出土の*5609*のような輪高台をもつものと判断される。図では片口をもつものが２点しか掲載されていないが、*5003*以下は口縁を欠いた破片から起した図であり、基本的には片口を有する。*0508*は口縁部が直立し、体部が膨らむ。*0501*と*0504*・*0506*は２号窯灰層に含まれていたものを１号窯の遺物として判断して抽出したものである。*0508*は２号窯の窯体右横の窯壁溜りから出土したものであり、２号窯の製品の可能性もあるが、形態から一応１号窯の製品としておく。

壺Mh（*0601*）

ヘラ切りの平底の底部をもつ。体部は下膨れで口頸部は外半する。体部下半はヘラ削りで仕上げ、外面全体に蔓草様の文様が描かれている。

平瓶（*0602*～*0603*）

*0602*と*0604*はSD01の西端より出土したものである。*0602*は把手部分が完存しているので*0604*の把手部とは別個体である。ともに把手には綾杉の文様を施し、肩部には片葉の芦様の文様を施す。口縁部と底部を欠く。*0603*は灰原３区からの出土であるが、*0602*と*0604*のどちらかの破片の一部と考えられる。

四耳壺（*0701*～*0709*）

短く直立する口縁部をもつ。共蓋の痕跡はない。口縁端面は平坦で、端部は外側に突出する。肩部には紐通しの穿孔を有する方形の耳を４箇所に配する。外面は*1104*や*1106*の甕と同じ叩き工具を使用している。*0701*・*0702*・*0704*・*0706*・*0709*は２号窯灰原からの出土である。

壺A（*0710*）

口径8.1㎝。底部を欠くが、輪高台をもつものと思われる。口縁端部は丸く納める。共蓋の痕跡はない。

鉢・壺（*0711*・*0712*）

ともに上部を欠く。*0711*は倒卵形の体部をもち、鉢ＤⅠの底部の可能性がある。*0712*はヘラ切りの底部に輪高台を付す。体部は直線的に立ち上がるので、鉢ＤⅠの底部の可能性は低く、器形については不明である。

水瓶（*0801*）

２号窯灰原からの出土であるが、その形状から１号窯の製品の可能性が高いと判断した。細長い頸部をもち、口縁部はL字形に屈曲し、端部を上方につまみ上げる。*0803*のような倒卵形の体部がつくものと思われる。同様の器種は３号窯からも出土（*7301*）しているが、３号窯の頸部は高さが低く、やや裾広がりの形態になっている。

壺Lh（*0802*～*0804*）

卵形の体部に口縁部が外反する頸部をつける。底部は平高台風に仕上げる。体部外面はヘラ状工具で仕上げるが、内面に粘土ひもの痕跡を残す。*0802*は頸部と体部の接合痕跡が明瞭に残る。粘土円盤の上に体部を積み上げており、底部外面の周縁部には、ヘラ切りの回転痕を残す。*0803*は底部外面に火襷のあとが顕著に残る。水瓶の体部の可能性がある。

壺N口縁（*0805*・*0806*）

大きく外半する口頸部をもち、口縁端部は上方に立ち上がる。いずれも頸部と体部の接合痕跡が明瞭に残る。口径は14.2㎝を測るが、体部を欠いており、壺NのⅠ類かⅡ類かは不明である。

壺NⅠ（*0807～0809*）

突帯および耳を持たないものをＮ１とする。頸部と体部の接合痕跡が明瞭に残る。粘土円盤の上に粘土紐を積み上げて成形する。体部内面に粘土紐の痕跡を残すが、内外面とも叩きの痕は確認できない。体部下半は回転ヘラ削りを行う。底部は平底で、周縁には幅５㎜のヘラによる切り離し痕が残る。切り離し痕は周縁のみで全体には及んでいない。ヘラ状工具の差し込み痕跡が中心部まで残っており、周縁をヘラ切りした後、ヘラを差し入れて轆轤から起こしたことがわかる。*0809*は口径14.5㎝、器高28.9㎝である。

壺NⅡ1（*0901～0906・1001～1005*）

２本突帯付双耳壺である。頸部は２段接合である。*0904・0905*は体部外面に格子状の叩きを施すが、*1003・1004*の体部には叩きの痕跡が認められない。いずれも体部下半は回転ヘラ削りを行う。内面に粘土紐の痕跡を残す。*0901*は２本の突帯の間に×印の連続文を施す。耳の形態はいくつかのタイプがある。１つ目は*0903*のように棒状のままのもの、２つ目は*0902*のように棒状にした粘土紐の両側端を内側に寄せて真ん中に溝を作るもの、３つ目は*0904・0905・1003～1005*のように板状にした粘土紐の両側端を内側に折り曲げ、下端部にかけて絞っていき三角形状の形態にするものである。*1003～1005*の耳は細長であるのに対して、*0904･0905*の耳は上端が広く、上半部を環状にして体部に貼り付けている。*1003～1005*の体部が叩き痕を残さないのに対して*0904・0905*のそれは叩き痕を有するという違いもあり、作り手が異なっている可能性が高い。いずれも底部の成形法は壺ＮⅠと同じで、壺ＮⅠと同様、底部外面周縁には幅５㎜のヘラによる整形の痕が残る。

甕A（*1105・1106・1201～1203・1205*）

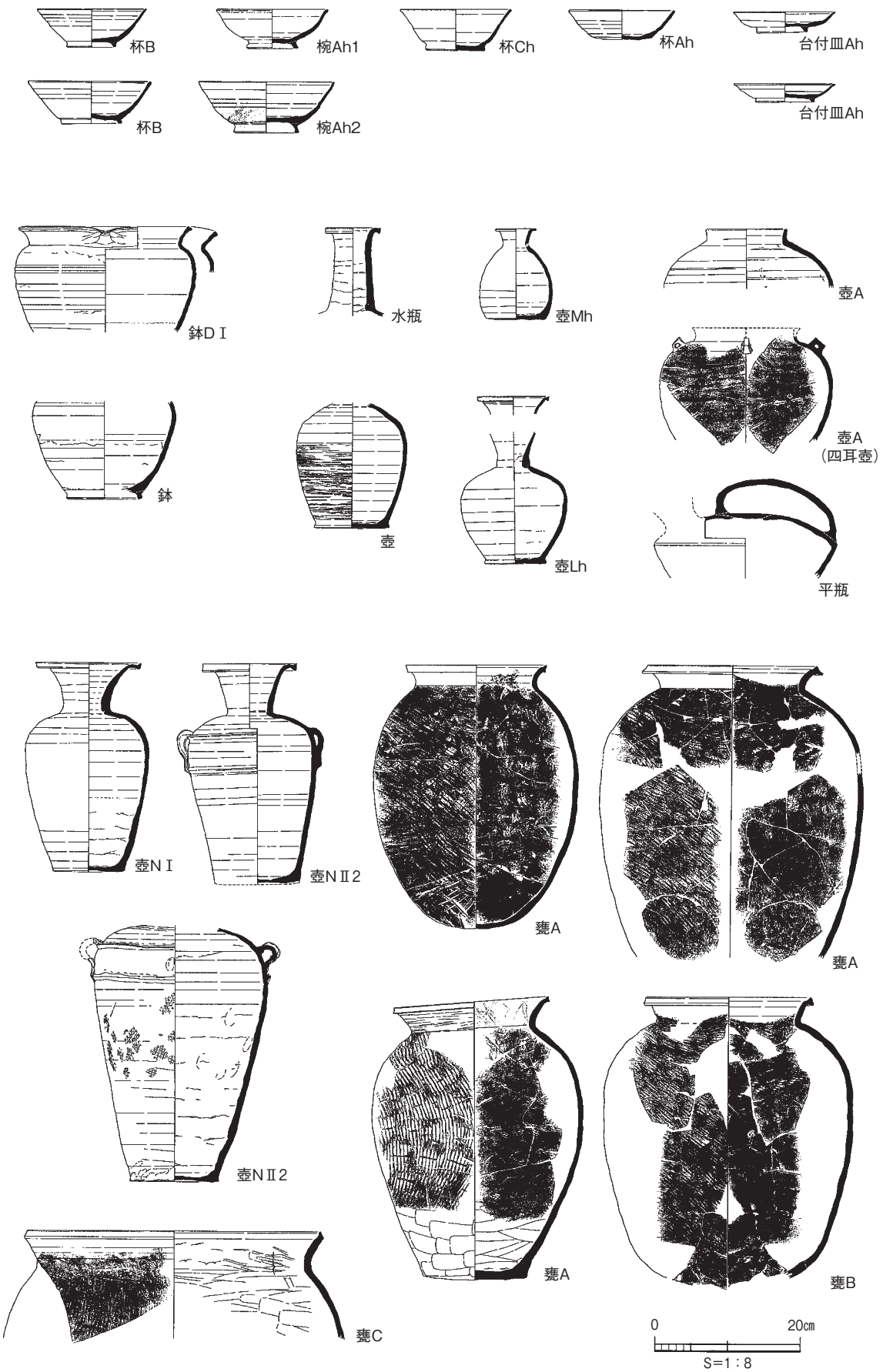
頸部が「く」の字状に外反する形態の甕である。*1106*の頸部は他に比べて短く、甕Bとの中間的な形態である。端部を上方に摘み上げるもの（*1105・1106*）と口縁下端部を下方に突出させるもの（*1201～1205*）がある。*1105*は平底で、体部下部の内外面に削り仕上げが行われている。叩き目の種類は横方向に１本の条線を有する叩き目ａタイプ（*1105*）、横方向に１本の条線を有するが、やや溝幅の狭い叩き目ｂタイプ（*1201・1202*）、比較的広い溝幅をもち、梯子段のような横方向の条線をもつｃタイプ（*1106・1203*）、比較的広い溝幅をもつが、横方向の条線をもたないｄタイプ（*1204・1205*）がある。（叩き目の分類については第６章参照）

甕B（*1102～1104・1204*）

短く直立して立ち上がる頸部から口縁部がL字状に大きく外反する形態の甕である。端部を上方に摘み上げる。*1103・1104*の叩き目はｃタイプである。

甕C（*1101*）

口径40.4㎝。広口の甕である。体部の膨らみはほとんどない。口縁部は内傾する。縦方向の叩き目を施す。叩き目はｄタイプである。



第10図　鴨谷１号窯　器種構成図

第３節　鴨谷２号窯出土遺物

窯体出土

小皿Ai（*1301～1309・1614*）

底部糸切りの小皿である。体部が直線的に立ち上がり、底部と体部の境が明瞭なものが大半であるが、*1306*のように体部が丸みをもち、体部と底部の境が不明瞭なものがある。口径は９㎝～12㎝、底径５㎝～７㎝を測るが、器高については、高さ２㎝前後の低い一群（*1301・1305・1306・1308*）と３㎝弱の器高の高い一群（*1302～1304・1307・1614*）の２群がある。*1301～1309*が窯体最終床面、*1614*が燃焼部下層床面からの出土である。

椀Ci1（*1310～1323・1601～1609*）

回転糸切りの平高台をもつ椀である。体部は湾曲し、口縁部が外反する。高台の高さは５㎜前後であるが、高台側面の調整は行われておらず、糸切りによる粘土のはみ出しの痕跡を残したものが多い。*1310～1315・1321～1323*のような口径が12㎝～13㎝台で、器高が５㎝前後の小型の一群と*1316～1320*のような口径16㎝台、器高６㎝余りの大型の一群がある。*1310～1323*は窯体最終床面、*1601～1609*が燃焼部下層床面からの出土である。

椀Ci2（*1401～1408・1610*）

回転糸切りの平高台をもつ一群で、体部外面に沈線を有する。体部は椀Ci1よりも全体的に丸みを帯びており、底部内面に段をもつ。高台側面の調整は行われていない。体部の沈線は*1401～1404*のように細く引かれているものと*1405～1408*のように幅広く引かれているものがある。口径14.8㎝～15.9㎝、底径5.4㎝～5.8㎝、器高4.6㎝。*1401～1408*は窯体最終床面、*1610*は燃焼部下層床面からの出土である。

椀Ai1（*1409～1411*）

窯体最終床面からの出土である。糸切りの底部に輪高台を貼り付ける。体部は直線的で、高台は高く外側に踏ん張る。

椀Ai2（*1611～1613*）

燃焼部下層床面からの出土である。体部は湾曲し口縁部は直上方向に立ち上がる。糸切りの底部に外側に踏ん張る輪高台を貼り付ける。体部中央には沈線を巡らす。

壺NⅡ2（*1501・1502*）

窯体最終床面からの出土である。壺ＮⅡ２（２本突帯付き双耳壺）の口縁部で、ともに大きく外反する口縁部をもつが、口縁端部は*1501*がシャープに仕上げるのに対して*1502*は丸く仕上げている。

鉢底部（*1503*）

鉢ＤⅠ等の底部と思われる。窯体焚口前の灰層からの出土資料であるが、鉢ＤⅠとすれば１号窯からの混入品の可能性が高い。

鉢DⅡ2a（*1504・1505*）

窯体最終床面からの出土である。鉢ＤⅡ1の口径を広くした形態である。口縁端面は平坦で、端部を外側に引き出す。口縁部外面は横ナデを施すが、屈曲の程度は弱い。底部は平高台状に見えるが、高台の意識はなく、単に厚みがあるという程度である。底部の切り離しは糸切りである。体部外面は板状工具による調整痕が残り、内面には削りの痕跡が残る。

甕A（*1506～1508*）

口縁部の破片と体部上半部の破片が出土している。*1508*の叩き目は溝幅の狭いｆタイプである。

灰原出土

小皿Ai（*1701～1721*）

底部糸切りの小皿である。口径は９㎝～12㎝台、底径５㎝～７㎝台を測るが、高さ２㎝前後の低い一群（*1701～1711・1713～1715*）と３㎝弱の器高の高い一群（*1717～1721・1712*）の２群がある。*1721*は一見平高台の様に見えるが、切り離しおよびその後の整形が不十分なだけである。

杯Ai（*1722*）

底部の切り離しは回転糸切りである。口径13.6㎝、器高3.0㎝、底径7.3㎝で、前記小皿Aiの一群よりも大振りである。小皿に含めることも可能であるが、３号窯における*6505～6507・7114・7115*等の系譜をひくものと判断し杯Aの一群に含めた。

椀Ai1（*1723～1730*）

糸切りの底部に外側に踏ん張る輪高台を貼り付ける。体部は直線的なものが多い。*1723*のような口径14.3㎝の小型のものと*1727*のような口径16.9㎝の大型のものの２種ある。

椀Ci1（*1801～1824*）

回転糸切りの平高台をもつ一群である。*1821*のような口径15.5㎝、器高6.5㎝の大型のものもあるが、口径12㎝～14㎝台、器高５㎝前後の小型品が中心である。体部は湾曲し、口縁部が外反する。底部内面に段をもつ。高台の高さは５㎜前後であるが、かなり低いものもある。高台側面は糸切りによる粘土のはみ出し痕が残るものが多い。

椀Ci2（*1901～1921*）

回転糸切りの平高台をもつ一群で、体部外面に沈線を有する。沈線は体部中央に細く引かれている。体部は椀Ci1よりも全体的に丸みを帯びており、底部内面に段をもつ。口径15㎝、器高５㎝台のものが中心で、椀Ci1の一群よりもひとまわり大きいものが主体である。高台の高さは５㎜前後で、高台側面は糸切りによる粘土のはみ出し痕が残るものが多い。

壺NⅡ2（*2001～2006*）

２本突帯付きの双耳壺である。大きく外反する口縁部をもつが、口径は体部径とほぼ等しい。体部は叩きで成形した後に横方向のナデ調整を施すが、叩きの溝の部分が完全に消されずに痕跡として残る。体部内面はナデ調整を施しているが、当て具の痕跡を残すもの（*2002*）や粘土紐の痕を残すものがある。*2006*の底部周縁部には手持ちのヘラによる切り離しの痕跡が残る。肩部には板状にした粘土紐の側面を挟んで下方を絞り込んだやや縦長の三角形状の耳を左右に貼り付けている。

壺Li（*2101・2102*）

*2101*は短く立ち上がる頸部に外反する口縁部をもつ。口縁端部はわずかに上方につまみ上げる。底部には回転糸切り痕を残す。*2102*は口縁部を欠いており、体部の形状も*2101*とは異なっているので、*2101*のような口頸部をもつかどうかは不明であるが、一応壺Lに含めておく。

壺Mi（*2104・2105*）

底部は平底で回転糸切りの痕が残る。卵形の体部に短く外反する口縁部をもつ。

壺Ai（*2103・2106*）

*2106*は口頸部が短く立ち上がる短頸壺である。口縁部端面は平坦で外側に突出させる。体部は大きく膨らむ。頸部周縁には共蓋の痕跡は認められない。*2103*は口縁部を欠くが、口径が広いので短頸壺と判断した。底部外面には回転糸切り痕を残す。

土師質甕（*2107～2109*）

砂粒多く、煮水容器として意識的に土師質に仕上げている。*2107・2108*は長胴形の甕で、口縁端部は内傾する。体部外面を叩きで成形している。

風字硯（*2201～2207*）

硯面中央に縦方向の突帯を設けて硯面を２分した二面硯である。硯尻部分には横方向の摺り目がある。硯背には２脚設けている。脚には*2206*のような円柱形のタイプと*2201*のような前方を刳った長方形のタイプがある。

鉢ＤⅡ1（*2501・2502*）

口縁部が「く」の字状に屈曲する鉢ＤⅠを原形とし、次の鉢ＤⅡ2への形態変化の過渡的形態の鉢である。口径に対して器高が高く、静止糸切りの平高台をもつ。口縁端面が平坦で、器壁が厚い。内面には板状工具での調整痕が残る。*2502*は口縁部がほぼ全周残るが、片口が設けられた痕跡は認められない。*2501*が口径27.3㎝、器高17.8㎝。*2502*が口径22.8㎝、器高17.3㎝を測る。

鉢ＤⅡ2a（*2301～2308・2401～2407*）

鉢ＤⅡ1の口径を広くした形態である。口縁端面は平坦で、端部を外側に引き出す。口縁部外面は横ナデを施すが、屈曲の程度は弱い。底部は平高台状に見えるが、高台の意識はなく、単に厚みがあるという程度である。底部の切り離しは糸切りによるが、回転糸切りによるものと静止糸切りによるもの（*2302・2304・2407*）がある。体部外面は板状工具による調整痕が残り、内面には削りの痕跡が残る。*2404*はほぼ完形であるが、片口は認められない。また、２号窯から鉢の片口部は採集されていないので、 鉢ＤⅡ2aが片口を有していないのは明らかである。

鉢Ａ（*2503*）

静止糸切りの底部に外方に踏ん張る高い高台をもつ。

壺ＮⅡ2底部切り離し片（*2505*）

幅２㎝前後、厚さ１㎝前後の弧状形態の破片で、内径は18㎝、外径は14㎝を測る。上面側及び内側面にはヘラ切りの痕を残すが、外側面及び下面側にはその痕跡は認められない。その形状からみて*2005・2006*のような壺ＮⅡ底部の成形時の切り離し片と考える。すなわち*2005*のような底部が窄まる壺は、当初は寸胴形に作られたのち、底部周辺の壁を切り落として形作られる。全体を均等に削り、形を整えるためには、目安が必要であり、恐らくは底面より１㎝上の辺りにヘラ状工具で切り目を同じ深さで１周させた後に、この切り目の深さを目安にして体部下半の成形を行ったものと考える。当該資料はこの切り目より下に残され、最終的に体部に沿ってヘラ状工具で切り離された部位と判断される。

壺底部（*2504*）

鉢*2503*と同様の静止糸切りの底部に外方に踏ん張る高い高台をもつが、底径が15.0㎝とやや大きい。上部形態は不明であるが、短頸壺の可能性がある。

甕Ａ（*2601～2603・2701・2702・2801・2802・2901～2904・3001・3002*）

口径20㎝～30㎝前後の小型甕の一群（*2601～2603・2701・2702・2801・2802*）と口径35㎝前後の中型甕（*2901～2903*）、口径40㎝前後の大型甕（*2904・3001・3002*）がある。口縁部の形態には、口縁端部を

つまみ上げるものと口縁下端部を下方に引きだすタイプのものがあり、前者のタイプには*2603・2701・2702・2901・2902・3001・3002*があり、後者のタイプのものには*2601・2602・2903・2904*がある。叩き目はｆタイプとｇタイプがある。ｆタイプのものには*2702・2902・2904*など、ｇタイプのものには*2901・2903・3001・3002*などがある。

刻書甕（*3101・3201*）

出土甕にはヘラ書きの刻書が発見されている。*3101*は最大径68.2㎝の大型甕で、肩部に「王作上宮御料」の刻書がある。叩き目はｇタイプである。*3201*は「王□」の刻書をもつ破片である。下の文字列を有する破片は失われているが、*3101*と同じ文字が刻まれていると思われる。*3101・3201*ともに叩き目はｇタイプである。

瓦

鴨谷２号窯では窯体と灰原から軒平瓦、丸瓦、平瓦が若干量出土している。

軒平瓦（*3301・3302*）

軒平瓦は２点出土している。灰原から出土している。瓦当部と平瓦部の接合は包み込み式である。瓦当文様は１種類（NH1）確認できる。中心に縦線が入り、左右に唐草が展開する均整唐草文である。瓦当面の外周には界線が廻らされている。

丸瓦（*3303・3304*）

出土した丸瓦は非常に少ない。灰原から出土したもののみである。丸瓦部凹面に布目が認められず、丸瓦部凸面が無文であるもの（ⅡG類）のみである。

平瓦（*3401～4203*）

窯体・灰原から出土している。良好な個体はほとんどなく、窯体から出土したものは少ない。

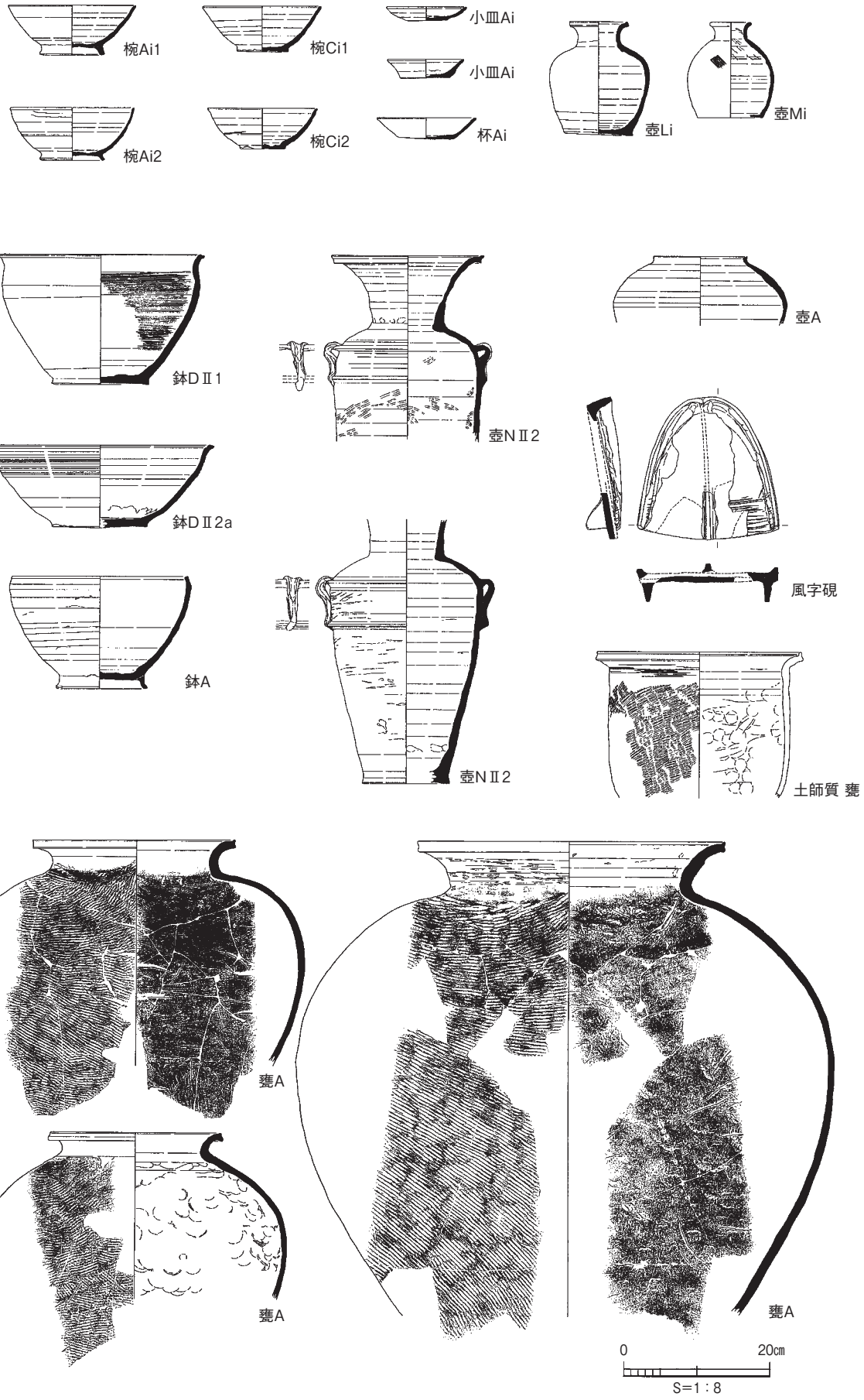
凹面に布目が認められるもの（Ⅰ類）と認められないもの（Ⅱ類）がある。Ⅰ類の凸面には格子タタキ（Ａ１類）と平行タタキ（Ｆ３類）、Ⅱ類の凸面には平行タタキ（Ｆ１・２類）、一文字タタキ（E類）、無文（G類）のものがある。Ⅱ類の凸面には平行タタキ（Ｆ１・２類）のものが多い。

焼台（*4401～4404・4501～4505・4601～4604・4701～4706*）

窯体や灰原から大量の焼台が出土しており、製品の形状や窯体内の窯詰め位置によって、いくつかの異なる種類の焼台が製作されている。*4501～4505*は小型で扁平なタイプである。*4401～4404*は底面が勾配をもつが、やや偏平な形状のタイプで、窯詰め時にその場で作られたものと思われ、側面に手で押さえた痕跡が残されている。*4601～4604・4701～4706*は円錐形の焼台で、側面はきれいに整形されており、窯詰めの前にあらかじめ製作された可能性が高い。このうち*4601～4604*の上面径が15㎝前後、*4701～4706*のそれは10㎝前後である。

片口鉢（*4301～4305*）

２号窯の谷部灰原の下層等からまとまって出土しているが、当該時期の製品ではない。口縁端部を平坦に仕上げ、断面が方形のもの（*4301・4302*）、口縁端部が肥厚し、口縁下端部が下方に突出するもの（*4303*）、口縁端部が肥厚するもの（*4304*）、口縁端部を上方につまみ上げるもの（*4305*）があり、口縁部の形態は様々である。いずれも底部は回転糸切りである。



第11図　鴨谷２号窯　器種構成図

第４節　鴨谷３号窯

第１次操業灰層（第２次操業窯体盛土下・窯体右灰原）

杯B（*4801・4802・4805・4906*）

ヘラ切りの底部に輪高台を貼り付ける。輪高台は小さく外側に踏ん張る。*4802*は体部が湾曲して立ち上がり、口縁端部を外反させる。口径は13㎝～14㎝台である。

椀Ah2（*4804・4904・4905・4907～4909*）

ヘラ切りの底部に輪高台を貼り付ける。輪高台は高く外側に踏ん張る。体部中央には削り出しの段を巡らす。口径17㎝～22㎝台で、杯Bより一回り大きい。このうち、*4909*は口径22.3㎝の大型品で、口縁部は外反し体部中央には段をもつが、削り出しがやや浅いため不明瞭になっている。*4907・4908*は底部のみで体部を欠くが、高い高台の形状から椀Ah2類と判断した。

杯Ah（*4803・4901～4903*）

底部の切り離しはヘラ切りである。体部は湾曲して斜め上方に立ち上がる。口縁端部は外反する。

鉢X（*4910*）

口径26.8㎝、器高9.7㎝の大型品である。端面は平坦で、端部が外方に突出する。高台脇はヘラ削り調整を行う。内面には重ね焼きの剥離痕跡を残す。

小壺底部（*4806*）

径5.8㎝の底部のみの破片で底部外面にヘラ切り痕が残る。同様の器形には作業場の土器溜りから出土の*5602*がある。*5602*は中央に穿孔をもっており、当該資料についても穿孔されている可能性がある。器形については不明である。

甕A（*4807*）

口縁部のみの破片である。口径は39.3㎝で、頸部は大きく外反し、端部を上方につまみあげる。

壺NⅡ2（*4808・4809・4810・4912*）

*4808・4809*は壺ＮⅠの可能性もあるが、ここでは２本突帯付き双耳壺の壺ＮⅡ2の口縁部としておく。*4810*は口縁部と底部および耳を欠くが、２本突帯付双耳壺の壺ＮⅡ2である。体部上半に平行叩き痕を残すが、下半部はヘラ削りが行われている。*4912*は壺ＮⅡ2の底部で、平行叩きを行った後に体部下半にヘラ削りを施しており、削り残しの叩き目の一部が残る。

平瓦（*4811*）

凹面に布目をもち、凸面のタタキは平行文（Ｆ３類）である。端面・両端縁・側面・両側縁にヘラケズリが施されている。布目は１㎝に７～８本程度である

壺A蓋（*4911*）

口径15.1㎝。口縁端部は外方に突出する。天井はヘラ削りが行われているが、つまみのある中心部を欠いている。

甕（*5001～5006*）

いくつかの異なる叩き原体をもつ甕片が存在する。このうち*5002・5005・5006*はｂタイプの叩き目で鴨谷１号窯*1202*と同じ原体の可能性が高い。*5004*はｃタイプの叩き目で、鴨谷１号窯*1203*と同じ原体の可能性が高い。*5001*はｇタイプ・*5003*はｆタイプの叩き目である。（叩き目の分類については第６章参照）

第１次操業作業場跡

杯Ah（*5101～5103*）

底部の切り離しはヘラ切りである。体部は湾曲して立ち上がる。火襷が顕著に残る。

杯B（*5104～5109*）

体部は直線的に立ち上がり、高台は短く踏ん張る。口径は14㎝～15㎝台である。

台付皿Ah（*5110*）

口縁部を欠くが、体部の開き具合から皿と判断した。底部の切り離しはヘラ切りである。

椀Ah2（*5111～5116*）

体部中央には削り出しの段を巡らし、ヘラ切りの底部に輪高台を貼り付ける。輪高台は高く外側に踏ん張る。削り出しの段は体部の下半部にある。体部の下半部はやや丸みをもつが、上半部は直線的で外方に開く。

注口（*5201*）

残存長9.0㎝の注口部であるが、器形本体を欠く。*7301*の水瓶のような器形の注口になる可能性がある。外面全体に横方向のヘラ削り仕上げを行う。

鉢DⅠ（*5202*）

底部のみで体部を欠く。*6013*のような鉢DⅠの底部と考えられる。

壺NⅡ2（*5203～5207・5301～5304*）

口縁部から底部まで全体を復元できるものはなかった。*5203・5204*はともに大きく外反する口縁部をもつ。*5206・5207・5301～5304*は体部外面に平行の叩きを施した後、上半部をナデ調整、下半部は横方向のヘラ削りを施す。耳は板状の粘土紐の側面を挟んで下部を絞り込んで細長い三角形状にしている。底部は粘土円盤作りで、底部外面の周縁にはヘラによる切り離し痕が残る。

甕A（*5401・5402*）

口頸部が大きく外反する。口縁端部を上方につまみあげるが、下端部はわずかに下方に引き出す。頸部に叩きの痕を残す。*5401*は肩部に叩き目を縦方向に施す。叩き目はｂタイプである。

甕（*5403～5406*）

異なる叩きの原体をもつ甕片を抽出したものである。*5403*は第２次操業窯体出土の*6301*と同じａタイプの叩き目である。*5405・5406*は１号窯*1202*、３号窯第１次操業灰層*5002・5005・5006*と同じｂタイプの叩き目である。*5404*の叩き目は３号窯第１次操業灰層*5004*と同じｃタイプの叩き目である。

第１次操業須恵器（第２次操業灰原出土）

灰原出土資料のうち、ヘラ切りのものをすべて第１次操業時のものとして抽出した。

杯Ah（*5501～5512*）

底部の切り離しはヘラ切りである。体部はやや丸みをもち、火襷が顕著に残る。*5501～5508*のように口径13㎝～14㎝台、器高３㎝台の器高の低い一群と*5509～5512*のように口径16㎝～17㎝台、器高５～６㎝台の器高の高い一群があるが、後者の器高の高い一群は椀Ａh1の高台を付す前の体部形態である。

杯B（*5513～5518*）

ヘラ切り底部に輪高台を付す一群のうち、高台の高さが低いタイプのものを杯Bとした。体部の腰部分がやや湾曲するが、体部は直線的である。口縁部はわずかに外反する。高台はわずかに踏ん張る。

椀Ah1（*5519～5520*）

ヘラ切り底部に輪高台を付す一群のうち、高台が高く踏ん張る高台をもつ点において*5513～5518*の杯B群とは区分した。口径は17㎝台で杯B群より一回り大きい。

椀Ah2（*5521～5524*）

椀Ａh1の体部外面に削り出しの段を設けた一群である。体部下半が丸みをもち、上半部はやや直線的である。内面はコテ状工具で仕上げている。高台は高く踏ん張る。

壺Mh（*5601・5603*）

いずれも口頸部、あるいは体部以上を欠く。底部はヘラ切りである。

小壺底部（*5602*）

中央部に穿孔があるが、上部を欠いているので器形については不明である。同様の器形をもつものには第１次操業灰層出土の*4806*がある。

壺Lh（*5604*）

底部のみで、体部を欠くが、壺Lの器形になるものと思われる。高台は平高台形態で、周縁にヘラ切りの痕跡を残す。

鉢？（*5606*）

平底の器形であるが、全体の器形は不明である。直口形の鉢の可能性もある。

壺A（*5607*）

体部のみで、口縁部および底部を欠くが、口頸部が短く立ち上がる壺Aと考えておく。体部内外面とも板状工具で調整を行っている。

鉢DⅠ（*5605・5609・5610*）

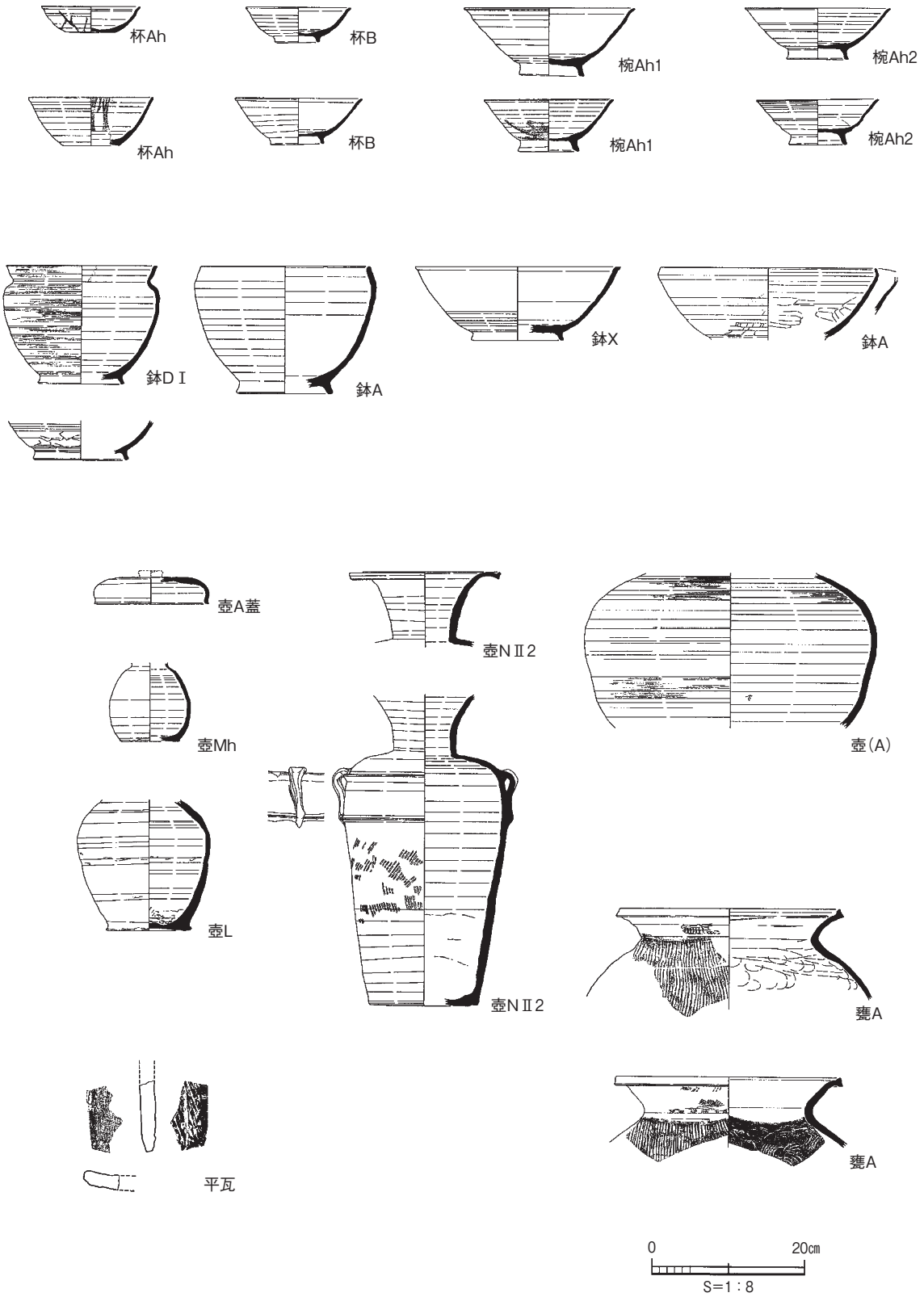
*5609*はヘラ切りの底部に輪高台を付す。外面全体に板状工具で器面調整を行っている。口縁端面は平坦である。*5605*は小片であるが、形状から鉢ＤⅠに含めた。*5610*は片口をもつ口縁部片である。

鉢A（*5608・5611・5612*）

*5608*は口縁部を短く内傾させるが、底部の形態については不明である。*5612*は２号窯出土の*2503*と共通する鉢形態である。但し、*2503*が糸切りであるのに対して、*5612*の底部は高台周辺のみで大半を欠くが、ヘラ切りの可能性が高い。

甕A（*5701～5704*）

口頸部を長く「く」の字状に外反させ、口縁部を上方につまみあげる。体部に縦方向の叩き目を残す。叩き目はｂタイプである。



第12図　3号窯第1次操業　器種構成図

第２次操業窯体

当該窯体には、少なくとも４枚の床面の重なりがあり、下層から順に、Ａ－第１床面（当初床面・最下床面）・第22層（第１床面埋土層）、Ｂ－第２床面（第22層上面）・第23層および第26層（第２床面埋土層）、Ｃ－第３床面・第17層（第３床面埋土層）、Ｄ－第４床面・第８層（第４床面埋土層）の４つに区分して遺物を取り上げた。

Ａ－第１床面（当初床面・最下床面）・第22層

杯Ah（*5801*・*5802*・*5806*・*5807*）

いずれも底部の切り離しはヘラ切りである。体部はやや丸みをもち、口縁部は外反する。

壺NⅡ2（*5803*）

口径13.8㎝の壺ＮⅡ2の口縁である。頸部はラッパ状に立ち上がり口縁部は水平に開く。第23層・26層から突帯および耳をもたない壺ＮⅠの体部片*6014*が出土しているので、壺ＮⅠの口縁の可能性もあるが、ここでは壺ＮⅡ2の口縁部として扱う。

甕（*5804*・*5805*・*5808*）

5804・*5805*・*5808*・*5815*は体部片で、*5804*・*5805*はｂタイプの叩き目、*5808*・*5815*はｆタイプの叩き目である。（叩き目の分類については第６章参照）

Ｂ－第２床面（第22層上面）

（１）第22層上面

椀Ci2（*5809*）

糸切りの平高台をもち体部に沈線を巡らす。体部は丸みをもち、口縁部は直上方向に立ち上がる。高台側面もていねいにヘラで調整を行う。全体に非常にていねいな作りである。口径11.8㎝、5.7㎝。完形品である。

椀Ci1（*5810*）

口径11.3㎝、器高4.7㎝の小型の完形品である。糸切りの平高台をもつが、椀Ci2（*5809*）とは対照的に非常に稚拙なつくりで、体部の成形は手づくねによる。

壺Li（*5811*）

底部片のみである。底部は回転糸切りである。

杯Ah（*5812*）

いずれも底部の切り離しはヘラ切りで、体部と底部の境が丸く不明瞭である。

甕A（*5813*～*5815*）

5813・*5814*は口縁部の小片で、外反する口頸部をもち、口縁端部はつまみ上げる。*5815*は体部片で、ｇタイプの叩き目をもつ。

（２）第23層・第26層（第２床面埋土層）

杯Ah（*5901*～*5904*）

いずれも底部の切り離しはヘラ切りである。体部はやや丸みをもち、口縁部は外反する。*5901*のように体部と底部の境が丸く不明瞭なものもある。

椀Ci1（*5905*～*5916*）

糸切りの平高台をもつ一群である。口径12㎝～13㎝台、器高５㎝台の小型品が中心である。体部はや

や直線的に立ち上がる。高台と体部との境はヘラ等で整形が行われ、高台と体部は明瞭に区分されている。高台の高さは５㎜前後で、高台断面はヘラ等で整形されているために台形状を呈する。

椀Ci2（*6001～6007*）

平高台をもつ一群で、体部外面に細い沈線を有する。体部は椀Ci1よりも全体的に丸みを帯びている。底部内面に段をもつ。口径13㎝台の小型のものと15㎝～17㎝台の大型のものがある。高台の形状は椀Ci1と同じである。

椀Ai1（*6008～6011*）

回転糸切りの底部に外側に踏ん張る輪高台をもつ。体部は直線的である。

壺NⅠ・NⅡ（*6012・6013*）

*6013*は突帯と耳をもたない壺ＮⅠの体部である。体部には叩きは施されていない。３号窯で唯一の壺ＮⅠの破片である。*6012*は大きく外反する壺Nの口縁である。ここでは壺NⅡの口縁として扱う。

鉢DⅡ1（*6014・6015*）

体部が湾曲するもの（*6015*）とやや直線的なもの（*6014*）がある。

甕（*6101～6103*）

異なる叩きの原体をもつ甕片を抽出したものである。*6101*はｆタイプの叩き目である。*6102・6103*はａタイプの叩き目と思われる。内面はいずれも青海波の当て具痕が残る。

C－第３床面・第17層（第３床面埋土層）

杯Ah（*6201～6205*）

口径13㎝～14㎝台、器高３㎝台、底径７㎝～８㎝台の平底の杯である。底部の切り離しはヘラ切りによる。体部はやや丸みをもち、口縁部は外反する。

椀Ci1（*6206～6210*）

糸切りの平高台をもつ一群である。口径13㎝台、器高５㎝台の小型品が中心である。体部はわずかに湾曲しながら立ち上がる。*6206*は口径11.9㎝で体部が丸みをもち、口縁部が直上方向に立ち上がる。高台と体部との境はヘラ等で整形が行われ、高台と体部は明瞭に区分されている。高台の高さは５㎜で、高台と体部との境がヘラ等で整形されているために高台断面は台形状を呈する。

椀Ci2（*6211～6214*）

平高台をもつ一群で、体部外面に細い沈線を有する。体部は椀Ci1よりも全体的に丸みを帯びている。底部内面に段をもつ。高台の形状は椀Ci1と同じである。*6211～6213*は口径13㎝台であるのに対して、*6214*は口縁部を欠くが、17㎝前後の一回り大きい口径をもつものと思われる。

椀Ai1（*6215・6216*）

回転糸切りの底部に外側に踏ん張る輪高台をもつ。体部は*6215*が直線的であるが、*6216*は丸みをもつ。

台付皿Ci（*6217*）

平高台をもつ径9.1㎝の小型の皿である。底部の切り離しは糸切りである。

台付皿Ai（*6218*）

口径9.7㎝の浅い皿に外方に踏ん張る輪高台を付す。底部の切り離しは糸切りである。

鉢DⅡ1（*6219・6220*）

*5219*は体部下半が湾曲し口縁部は直上方向に立ち上がる。鉢Aと鉢DⅡの中間的な形態である。*6220*

は口縁部が外反し口縁端面が平坦で外方に突出する。体部外面は板状工具による整形の痕跡が残る。

壺N（*6221*）

壺NIもしくは壺NⅡの口縁部である。

甕（*6301～6305*）

異なる叩きの原体をもつ甕片を抽出したものである。*6301*はｅタイプ、*6302*・*6303*はａタイプ、*6304*はｆタイプの叩き目、*6305*は底部付近の破片で、叩き同士の重なりにより判別が難しい。内面はいずれも青海波の当て具痕が残る。

D－第４床面・第８層（第４床面埋土層）

椀Ci1（*6401～6404*）

糸切りの平高台をもつ一群である。口径12㎝台、器高５㎝台の小型品が中心である。体部は湾曲し、口縁部が外反する。底部内面に段をもつ。高台の高さは３㎜前後である。

椀Ci2（*6405～6412*）

平高台をもつ一群で、体部外面に細い沈線を有する。体部は椀Ci1よりも全体的に丸みを帯び、底部内面に段をもつ。口径15㎝～17㎝、器高７㎝前後のものが中心で、椀Ci1の一群よりもひとまわり大きい。高台の高さは５㎜前後で、高台断面はヘラ等で整形されているために台形状を呈する。

椀Ai1（*6413～6419*）

回転糸切りの底部に外側に踏ん張る輪高台をもつ。体部は直線的であるが、*6419*のように体部が丸みをもって立ち上がり、口縁端部が内傾するものもある。

杯Ai（*6501～6504*）

口径11㎝台、器高３㎝、底径5.5㎝前後の小型の平底の杯で、底部は糸切り底である。口径に対して底径が小さく体部は直線的で斜め上方に立ち上がる。

杯Ah（*6505～6507*）

口径13㎝～14㎝台、器高３㎝台、底径７㎝～８㎝台の平底の杯で、底部の切り離しはヘラ切りによる。*6501*は体部が直線的に立ち上がるが、*6506*・*6507*の体部はやや丸みをもち、口縁部は外反する。

鉢DⅡ1（*6508～6511*）

口縁部が「く」の字状に屈曲する鉢ＤⅠを原形とし、次の鉢ＤⅡ2への過渡的形態の鉢である。口径21㎝～27㎝台、器高13㎝台、底径11㎝～12㎝台で、口径に対して器高が高く、回転糸切りの平高台をもつ。口縁端面は平坦で外側に突出する。器壁が厚く、外面には板状工具での調整痕が残る。*6510*は口縁部に片口が付く。*6511*も片口の一部と思われる痕跡がわずかに残されており、*6508*・*6509*も残存片の範囲では認められないが、片口をもつものと思われる。

壺NⅡ2（*6601～6603*）

２本突帯付きの双耳壺である。いずれも破片のみで*6601*・*6602*はラッパ状に開く口頸部片である。*6603*は体部に叩きの痕跡を残す。

土師質甕（*6604*）

広口の口縁部をもつ。肩の張らない甕である。口縁端部は内側に傾く。

壺L（*6605*）

口縁部、底部ともに欠くが、形態から壺Lと判断した。

壺A（*6606*）

叩きを施して成形した甕形態に直立する口頸部を設けた四耳壺である。耳にはいずれも穿孔がある。底部には外側に踏ん張る高台を付す。共蓋の痕跡は認められない。

甕A（*6701～6705*）

いずれも頸部が大きく外反し、口縁端部を直上につまみ上げる。頸部には叩き目を残す。*6705*は底部から体部にかけての破片である。体部と底部の境には横方向に叩き締めを行っている。*6701*のような口径29㎝の小型のものと*6703*のような口径40㎝の中型甕や*6704*のような口径62㎝の大型甕がある。

灰原

椀Ci1（*6801～6824*）

糸切りの平高台をもつ椀である。口径13㎝台、器高５㎝台の小型の一群である。体部はやや直線的に立ち上がる。高台の高さは５㎜前後で、高台と体部との境がヘラ等で整形されているために高台断面は台形状を呈する。

椀Ci2（*6901～6920*）

椀Ci1に沈線を巡らした一群である。体部は椀Ci1よりも全体的に丸みを帯びている。底部内面に段を有する。沈線は体部下半に細く引かれている。*6915*のような口径12㎝台の小型品はごく少数で、口径15㎝～17㎝台、器高６㎝～７㎝台の大型品が主体である。高台の形状は椀Ci1と同じである。

椀Ai1（*7001～7024*）

椀Ci1の底部周縁に粘土紐を貼り付けて輪高台とする。体部はわずかに丸みをもつものもあるが、直線的である。口径15㎝～16㎝の大型品が主体である。輪高台側面はヘラで整形しており、底部内面には椀Cのような段はほとんど認められない。

椀Ai2（*7101～7112*）

椀Ci1の底部周縁に粘土紐を貼り付けて輪高台とし、体部に沈線を巡らす。高台側面はヘラで整形している。体部は丸みをもち、口縁部は直上方向に立ち上がる。底部内面には椀Cのような段は認められない。内面はコテ状工具で調整している。高台は外側に踏ん張る。

台付皿（*7113*）

口径11.7㎝の小型の台付皿である。糸切り底に高さ１㎝の輪高台を貼り付ける。

杯Ai（*7114～7116*）

糸切り底の平底杯である。口径12㎝前後の小型のもの（*7114・7115*）と口径15.2㎝の大型のもの（*7116*）がある。

壺NⅡ2（*7201～7205*）

２つのタイプがある。１つ目は*7201*のタイプで体部径に対して口径が小さいもの、２つ目は*7202・7203*のタイプで口径が体部の径と等しいかそれ以上のものである。後者は体部が和蝋燭形状にすぼまり、耳も上端が広い三角形を呈する。*7204・7205*も形状から後者の口縁部形態が考えられる。*7201*は第１次操業時の壺NⅡ2の可能性が高い。

水瓶（*7301・7306・7307・7309・7319・7320*）

裾広がりの頸部にL字状に大きく外反する口縁部をもつ。*7306・7307*も水瓶の口縁に含めたが、*7308*の小型壺の口縁の可能性もある。全体が復元できるものはなかったが、体部については倒卵形で頸部径の

小さな*7309・7319・7320*にその可能性がある。なお、当該資料については第２次操業時の遺物群に含めているが、第１次操業時の遺物群の可能性もある。

壺（*7316・7317*）

底部が糸切り平高台の一群である。水瓶または壺Lの底部になると思われる。

壺M（*7302～7305*）

卵形の体部に短く外反する口縁部をもつ。*7305*は口縁部が垂下するが、一応壺Mに含めた。

壺（*7308*）

扁平な体部に細い頸部をもつ。*7302～7307*までの口縁部が考えられる。

壺Li（*7310～7315・7318*）

やや扁平な体部にやや広口の口頸部をもつ。底部は回転糸切りの平高台をもつ。やや肩がはるもの（*7310～7313*）と肩の張りがないもの（*7314*）がある。また、口縁部は上方に摘み上げるものと*7012*のように垂下させるものがある。*7318*は体部が扁平で、肩部に稜をもつ。一応壺Lに含めた。

風字硯（*7401～7404*）

すべて破片で、全体を復元でいるものはなかった。*7401・7403*は右硯頭部で、側面はヘラ削りで仕上げられている。*7402*は右硯尻部で立ち上がりの縁帯を設け、硯背部に脚を設ける。*7404*も硯尻部で、立ち上がりの縁帯を設ける。脚は硯尻両側縁に設け、その間をつなぐ形で横位の脚を設けている。横位の脚は中央部が刳られ、前面には「ハ」の字に組み合わせたヘラによる刻み列がある。

人形（*7405*）

粘土紐を棒状に丸めて細工を施して人形を形作っている。左右は粘土を貼り付けて手を形付けているが、右手は剥落しており、接着のために体部に掘った浅い溝が痕跡として残されている。顔部には粘土粒が付着しており、意図的に貼り付けられたものとすると鼻を表現していることになる。目については判別できなかった。頭は２つ割りにされた粘土粒を貼り付けており、髻を表現している可能性もある。裾部は横に広がり、指で押さえられている。

鉢DⅡ1（*7501～7508*）

「く」の字状に外反する口縁部をもつ。口縁端面は平坦で外側に突出する。体部は丸みをもち、外面は板状工具で調整が行われている。底部は糸切りの平高台を有するが、回転糸切りのもの（*7503*）と静止糸切りのもの（*7504・7506～7508*）がある。

鉢A（*7509*）

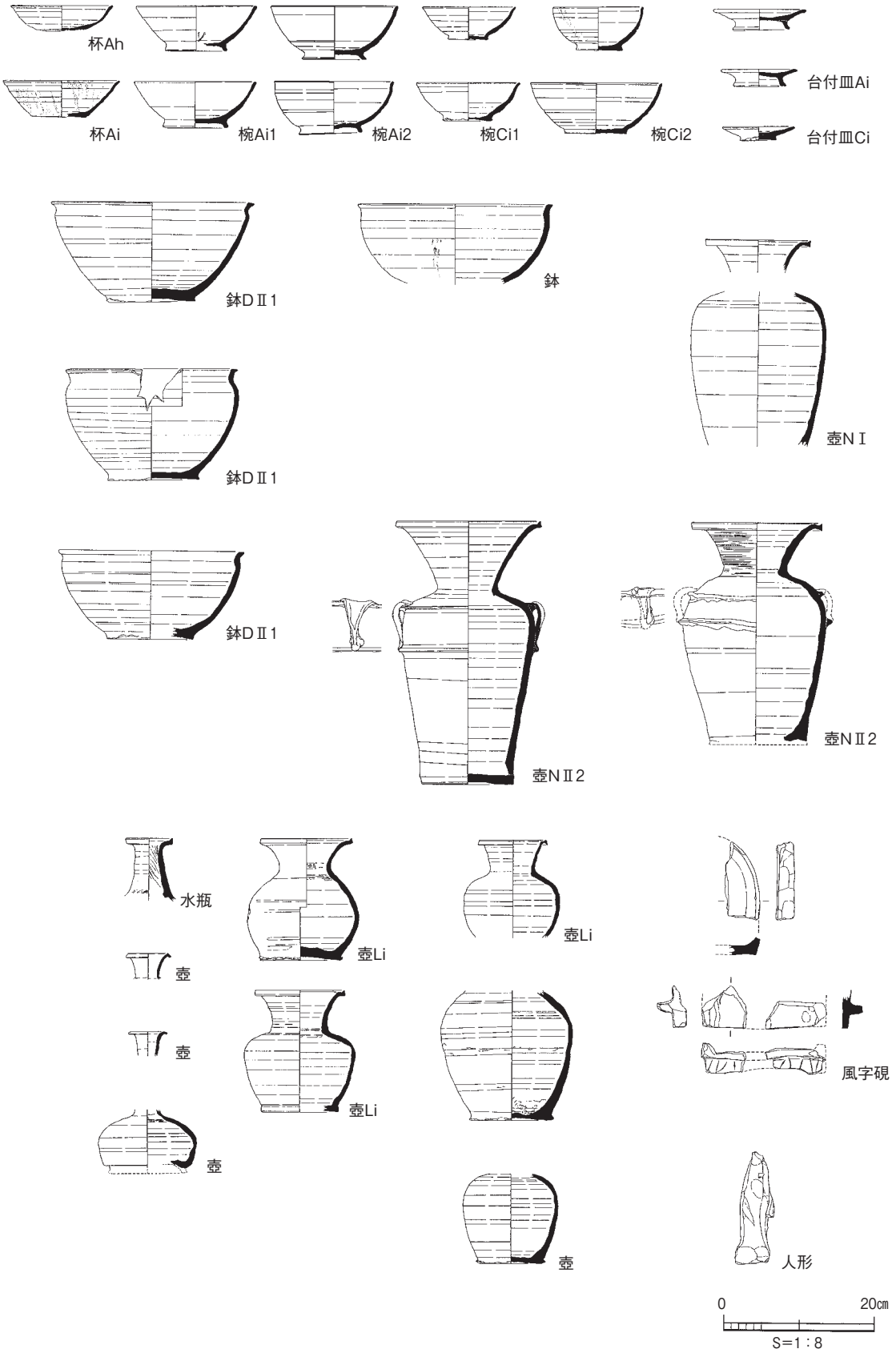
口縁部は内傾し、端面は平坦である。底部の切り離しは回転糸切りである。

甕A（*7601・7602・7701・7702・7801・7802・7901・7902・8001・8002・8101・8102・8201・8202*）

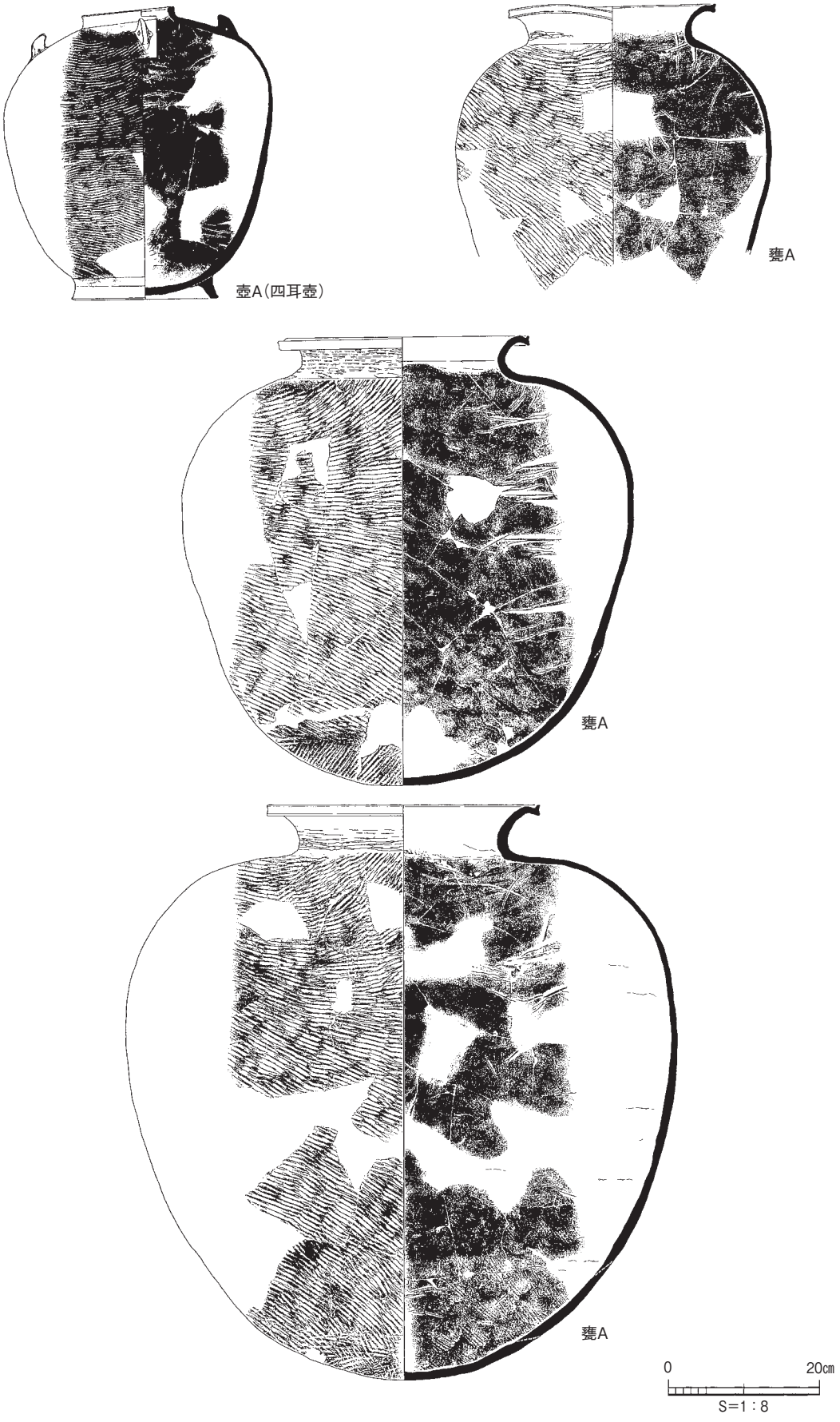
頸部は大きくL字形に外反し、口縁端部を直上につまみ上げる。口径30㎝前後の小型甕（*7601・7602*）と口径30㎝～35㎝の中型甕（*7701・7702・7801*）と口径35㎝～42㎝の大型甕（*7802・7901・7902・8001・8002・8101・8102*）と口径45㎝以上の特大甕（*8201・8202*）がある。叩き目の種類はｆタイプとｇタイプがある。ｆタイプの叩き目を有するものには*7901・8002・8303*があり、その他はｇタイプの叩き目を有する。

甕刻書（*8301・8302・8401・8402*）

いずれも破片である。*8301*は「□料」、*8402*は「□〔田ヵ〕殿御料」、*8401*は「□屋□」の文字が刻まれている。*8302*は記号か文様で刻書ではない。いずれも叩き目の種類はｆタイプである。



第13図　鴨谷３号窯　第２次操業器種構成図１



第14図　鴨谷３号窯第２次操業　器種構成図２

第５節　梟谷１号窯

窯体・灰原出土遺物

小皿Ai（*8501・8505・8801～8811*）

底部糸切りの小皿である。体部は直線的に立ち上がり、底部と体部の境は比較的明瞭である。口径は10cm前後が中心で、器高は２cm前後の低いものが大半であるが、*8501・8505・8805*のように2.5cm前後のやや高いものも存在する。*8501・8505*が窯体出土、*8801～8811*が灰原からの出土である。

托状形皿（*8502・8812*）

底部糸切りの托状形の小皿である。朝顔形に開く体部をもつ。ロクロ成形の際に両手で底部周囲を絞ったために、体部と底部の間は屈曲し、底部は高台状の形態を呈する。体部外面にはこのときの絞り目痕が残されている。*8502*が窯体出土、*8812*が灰原からの出土である。

椀Ci1（*8503・8504・8509～8516・8701～8721*）

糸切りの平高台をもつ椀である。体部は湾曲して立ち上がるが、外面には沈線を施さない。底部内面は体部との境に小さな段をもつ。平高台は高さがほとんどなく、切り離しのままで高台側面の整形は行われていない。*8718・8721*のように口径が15cm～16cmの大振りのものもあるが、大半は口径が13cm～14cm前後である。*8503・8504*は窯体内、*8509～8516*は焚口、*8701～8721*は灰原からの出土である。

椀Ci2（*8517～8520・8601～8621*）

糸切りの平高台をもつ椀のうち体部に沈線を巡らす一群である。*8601～8603*のように、口径が14cm代の小振りのものもあるが、大半は口径15cm～16cm台の大振りのものが中心で、椀Ci1とは口径の大小の数量比率は逆である。体部は湾曲して立ち上がる。底部は糸切りの平高台をもつが、高さはほとんどなく、切り離しのままである。*8517～8520*が窯体焚口、*8601～8621*が灰原からの出土である。

椀Ai（*8722～8726*）

糸切りの底部に輪高台を貼り付ける。いずれも体部を欠くので、体部の沈線の有無は不明である。灰原からの出土である。

鉢DⅡ2b（*8508・8521・8901～8910*）

鉢DⅡのうち口縁が大きく開く２型の一群であるが、鴨谷２号窯とは異なり、片口を有するｂタイプの鉢である。口縁部周縁をなでてわずかに屈曲させる。口縁部端面は平坦である。底部の切り離しは回転糸切りで、わずかに平高台の形態を残す。*8508・8521*が窯体、*8901～8910*が灰原からの出土である。

壺NⅢ1（*8506・8507・8815・8816*）

壺NⅢのうち、１本突帯で、両耳をもつ１型（１本突帯付き双耳壺）の一群である。口径は20cm～24cmで、ラッパ状に大きく開き、口縁部に対してやや寸詰まりの低い体部をもつ。底部の切り離しは回転糸切りである。*8506・8507*は窯体、*8815・8816*は灰原からの出土である。

壺（*8813・8817*）

*8813*は口径8.8cmの直口の口縁をもつが、器形は不明である。*8817*は体部下半を欠くが、鴨谷２号窯*2101*に近い形態となると思われる。

土師質甕（*8814*）

口径11.4cmの小型甕である。

甕A（*8818・9001～9005・9101～9103*）

いずれも頸部は大きく「く」の字状に外反し、端部を上方につまみあげる。口縁端部は*9001*や*9002*のように丸く納めるものもある。叩きは頸部に及ぶ。口径20㎝台の小型甕（*9001～9003*）、口径30㎝台の中型甕（*9004*）、口径37.8㎝の大型甕（*9005*）がある。底部は丸底であるが、*8616*のような平底もある。

瓦

梟谷１号窯では焼成中に失敗したようで、部分的に窯詰めのまま平瓦が窯体内に残存していた。丸瓦は階段の構築材として利用されていた。灰原からも丸瓦・平瓦が出土している。

軒丸瓦

瓦当文様は蓮華文のみである。窯体から２点、灰原から２点出土している。１種類の文様の可能性が高いが、残存状況が良くないため弁数をはじめ詳細は判然としない。単弁か複弁かもはっきりしない。

軒平瓦

軒平瓦は灰原から４点出土している。瓦当部と平瓦部の接合は包み込み式である。

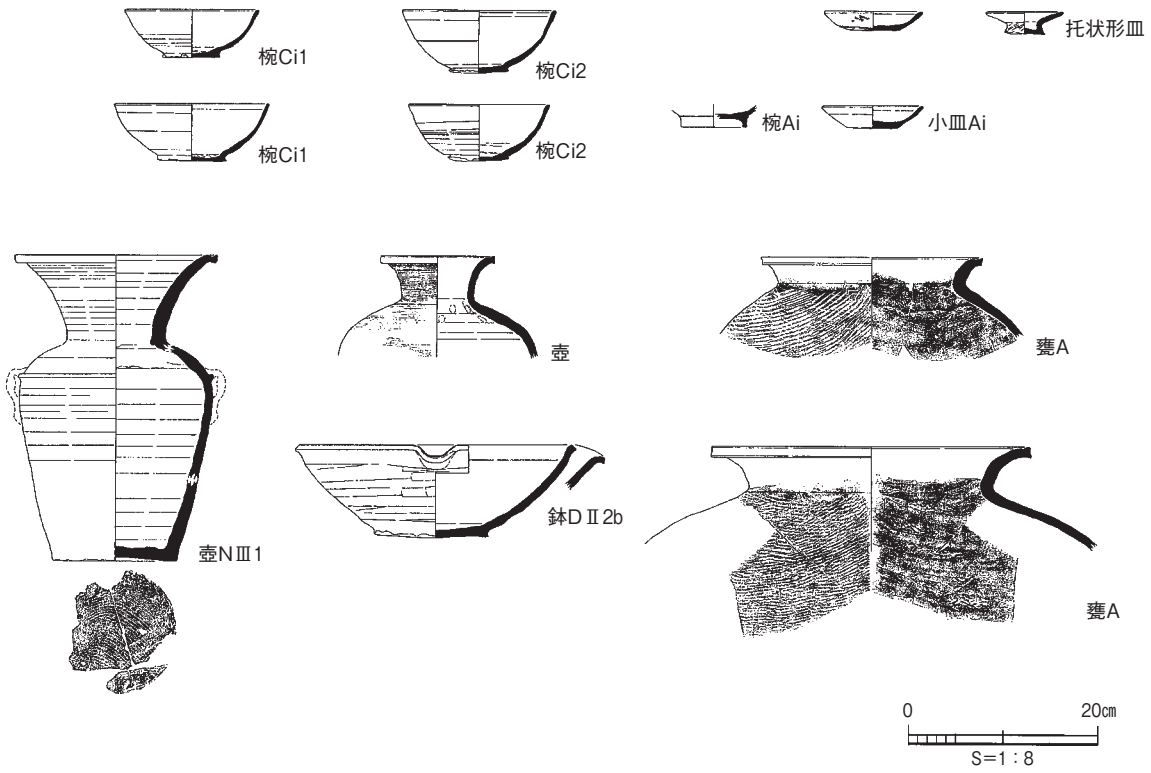
瓦当文様は２種類（ＮＨ１・２）確認できる。ＮＨ１が１点、ＮＨ２が３点である。いずれも中心に縦線が入り、左右に唐草が展開する均整唐草文である。瓦当面の外周には界線が廻らされている。ＮＨ１は小破片である。

丸瓦

窯体・灰原から出土している。窯体床面の階段の構築材として利用されたものが多い。

凹面に布目が認められるもの（Ⅰ類）と認められないもの（Ⅱ類）があり、窯体ではⅠ類が少ない。

凸面のタタキはⅠ類では十字文のもの（Ｂ１・３・４類）と無文のものがある。Ⅱ類では格子文のもの（Ａ２類）、十字文のもの（Ｂ１・３類）、×字文＋平行文（Ｄ類）、平行文（Ｆ２類）、無文（Ｇ類）のものがある。



第15図　梟谷１号窯器種構成図

平瓦

窯体・灰原から出土している。窯体床面に窯詰めのまま放棄されたものが多い。

凹面に布目が認められるもの（Ⅰ類）と認められないもの（Ⅱ類）があり、窯体ではⅠ類が少ない。

凸面のタタキはⅠ類では十字文のもの（B１・２・３類）と無文（G類）のものがある。Ⅱ類では格子文のもの（A３類）、十字文のもの（B１・３・５類）、十字文＋平行文（C類）、×字文＋平行文（D類）、平行文（F２類）、無文（G類）のものがある。圧倒的に十字文のもの（B１・３類）のものが多い。

谷底出土遺物

谷の堆積土中から出土した遺物群である。別の窯の混入品も含まれている可能性もあると思われるので、参考資料としてあげておく。谷底からの出土遺物には椀A（*9201*～*9207*）、鉢DⅡ（*9208*）、風字硯（*9209*）、壺NⅡ（*9210*～*9216*）、甕（*9301*～*9304*）がある。

第６節　鴨谷１号窯・２号窯地区出土木製品

木製品はすべて鴨谷１号窯の前面の谷底から出土している。W１の下駄とW２の部材は、重機掘削の際に上層の有機質層から出土した。またW３・４の建築部材や木樋は灰原下層の砂層や最下層の砂礫層から出土している。鴨谷２号窯操業段階で谷底を大きく改変していることからW１・２は窯廃絶後の時期のものである。W３は鴨谷２号窯の遺物に伴って出土しており、W４は鴨谷１号窯の遺物に伴って出土している。

W１は、隅丸方形の平面形をもつ連歯下駄である。後半部分のみ残存している。樹種同定は行っていないが、環孔材の広葉樹柾目材を丁寧に加工している。幅は8.8㎝、厚さは0.75㎝を測り、歯の高さは0.9㎝と比較的低い。歯は後の欠損部があり、残存部には磨耗が認められるが、もともと低い歯をもつものであろう。歯の直前の両側に円形の２孔がやや位置をずらして穿たれている。孔周辺の摩耗は顕著ではない。

W２は、針葉樹板目材を用いた板状の部材である。長さ23.2㎝、幅5.1㎝、厚さ1.0㎝を測る。表面は角を面取りし、丁寧に仕上げているが、裏面は刃幅４㎝以上の手斧状の工具痕が一部残り、方向をやや変えて更に細かい調整痕が見られる。裏面が見えないように組み合わされたものであろう。長軸方向に長い長方形の孔が２ヶ所穿たれており、孔の内面には工具痕が残っている。両長辺に沿って３ヶ所ずつ直径0.15㎝ほどの円形の小孔が見られるが、位置は整っていない。孔の最上部は直径0.3㎝ほど窪んでおり、釘を打った痕跡かもしれない。

W３は、残存長79.2㎝、最大径11.5㎝の針葉樹丸太材の両端部に「コ」字形の切り込みを入れたもので、端部、器表面とも風化が著しいため、工具痕、調整痕は残存していない。幅約３㎝の切り込みの内面は平滑であるが、両端部では方向がやや食い違っている。樹心部は細く貫通しているが、クラックによるものかもしれない。建築部材を転用して湿地の足場としたものであろうか。

W４は、残存長66.0㎝、最大径13.5㎝の針葉樹丸太材の一側面を、深さ10㎝近く溝状に抉って樋状に作ったもので、樹心部まで抉って取り去っている。器表面は著しく風化しており、加工痕は残存していない。立ち上がりの側面の両端部近くには隅丸方形あるいは長円形の大きな穿孔が見られる。穿孔の内面は平滑である。一方の穿孔は幅4.5㎝、高さ2.2㎝の大きさで、孔内には年輪に沿った方向に更に直径１㎝ほどの穿孔が見られ、直角に曲がって外面に抜けている。別部材と組み合わせるためのものか、補修のためか不明である。木樋と考えているが、出土状況は現位置を保った状態ではなく、W３と同様に足場材に転用したものであろう。

第５章　自然科学的分析

Ⅰ　神出窯跡群・鴨谷支群出土炭化材の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

１．はじめに

神出窯跡群は神戸市西区神出町に所在する、平安時代から鎌倉時代にかけて操業が行われていた須恵器古窯址群である。当窯跡群では100基以上の窯跡が存在したと考えられており、備前焼･丹波焼などの中世六古窯とともに、我が国の中世窯業を代表する生産地の一つである。今回調査が行われた鴨谷支群では３基の窯跡が検出され、窯体内や灰原からは炭化材が出土した。ここではそれら炭化材の樹種同定を行った。

２．試料と方法

同定試料は、１号窯跡の灰原から４点、２号窯跡の窯体から18点と焚口から２点、灰原から33点の計53点、３号窯跡は窯体から３点と灰原から65点の計68点の、総計で125点の炭化材である。窯跡の年代については、１号窯跡が10世紀前半、３号窯跡がそれに続く時期、２号窯跡は11世紀代に操業が行われていたと考えられている。そのため鴨谷支群では１号窯跡→３号窯跡→２号窯跡と、順次築窯されていたと考えられている。

計測が可能な試料について、復元直径と残存半径、残存年輪数の計測を行った。復元直径の計測は１㎝刻みの同心円に試料を当てて直径を求めた。残存放射半径は、試料で残存している半径を直接計測し、残存半径内の年輪数を計測したものを残存年輪数とした。

炭化材の樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台に両面テープで貼り付けた。その後乾燥させ、イオンスパッタにて金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製　VE-9800）にて検鏡および写真撮影を行った。なお同定試料の残りは、兵庫県立考古博物館に保管されている。

３．結果

同定の結果、広葉樹のコナラ属アカガシ亜属（以下アカガシ亜属と呼ぶ）とコナラ属クヌギ節（以下クヌギ節と呼ぶ）、コナラ属コナラ節（以下コナラ節と呼ぶ）、カエデ属、ネジキの５分類群が産出した。クヌギ節が最も多く83点、コナラ節が36点、ネジキが４点、アカガシ亜属とカエデ属が各１点産出した。同定結果を第４表に、第５表に一覧を示す。

次に同定された材の特徴を記載し、各樹種の走査型電子顕微鏡写真を示す。

（１）コナラ属アカガシ亜属

Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*

ブナ科　写真10　１a-１c（No.21）

大型の道管が単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向

第４表　鴨谷支群出土炭化材の樹種同定結果

樹種／遺構	１号窯跡	２号窯跡			３号窯跡		合計
	灰原	窯体	焚口	灰原	窯体	灰原	
コナラ属アカガシ亜属					1		1
コナラ属クヌギ節	4	15	2	26		36	83
コナラ属コナラ節				7		29	36
カエデ属		1					1
ネジキ		2			2		4
合計	4	18	2	33	3	65	125

柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬、強靭で耐水性があるが、切削加工は困難である。

（2）コナラ属クヌギ節　*Quercus* sect. *Aegilops*　ブナ科　写真10　2a- 2c・3a（No.42・88）

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で切削などの加工はやや困難である。

（3）コナラ属コナラ節　*Quercus* sect. *Prinus*　ブナ科　写真10　4a- 4c（No.57）

年輪のはじめに大型の道管が1～2列並び、晩材部では径を減じた壁が薄くて角張った道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なミズナラの材は、やや重くて強靭だが切削加工はやや難しい。

（4）カエデ属　*Acer*　カエデ科　写真10　5a- 5c（No.20）

中型の道管が単独ないし2～3個複合してやや疎に散在する散孔材である。木部繊維の壁の厚さの違いで雲紋状の文様が木口面にみられる。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、単列のものと幅3～5列程度のものがみられる。

カエデ属にはイタヤカエデやウリハダカエデなどがあり、代表的なイタヤカエデは各地に普通にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工はやや困難である。

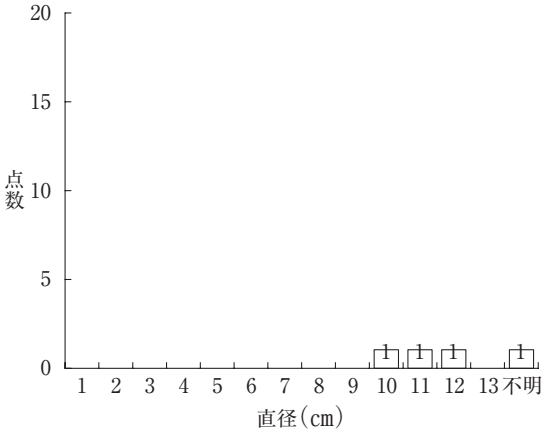
（5）ネジキ　*Lyonia ovalifolia*（Wall.）Drude subsp. *neziki*（Nakai et H.Hara）H.Hara　ツツジ科　写真10　6a- 6c（No.18）

小型の道管がほぼ単独で、密に散在する散孔材である。道管は年輪の終わりで径を減じる傾向がみられる。道管は10～20段程度の階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端2～4列が直立となる異性で、1～3列となる。

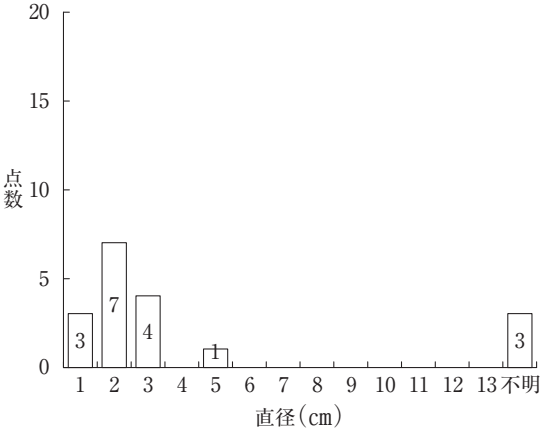
ネジキは山形県、岩手県以南の本州、四国、九州の疎林や岩場などに生育する落葉小高木である。材は重硬であるが、ねじれが多くて加工は困難である。

4．考察

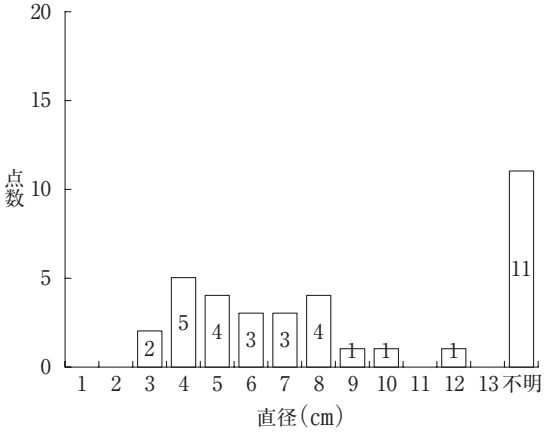
同定の結果、クヌギ節とコナラ節が際立って多く産出した。同定試料の用途については、窯体を構築する為の構築材と、燃料材の2種類が想定される。2号窯跡と3号窯跡の窯体から出土した炭化材は構築材、1号窯跡と2号窯跡、3号窯跡の焚口部と灰原から出土した炭化材は燃料材であると考えられる。構築材の同定結果は、2号窯跡では18点中クヌギ節が15点、ネジキが2点、カエデ属が1点産出し、3号窯跡ではネジキが2点、アカガシ亜属が1点産出している。燃料材の同定結果は1号窯跡ではクヌギ節が4点産出し、2号窯跡はクヌギ節が28点、コナラ節が7点産出した。また3号窯跡ではクヌギ節が36点、コナラ節が29点産出した。構築材では、2号窯跡はクヌギ節が多いがカエデ属やネジキも利用され、3号窯跡では試料数が少ないため一概には述べられないが、アカガシ亜属とネジキのみの産出でクヌギ節やコナラ節は産出しなかった。一方燃料材では、各窯跡を通してクヌギ節とコナラ節だけが産出した。構築材と燃料材での樹種構成の相違は、炭化材の用途ごとの選択性が反映している可能性が高い。



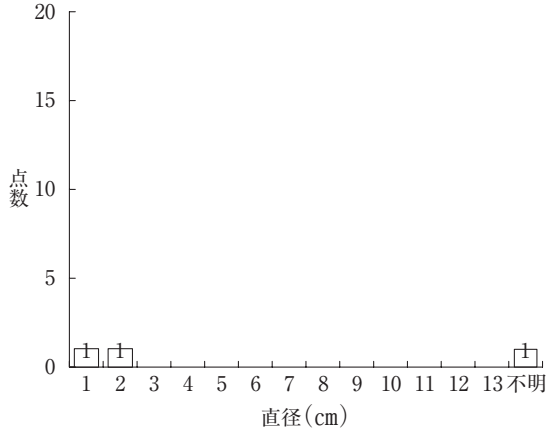
16−1図　１号窯跡燃料材の復元直径



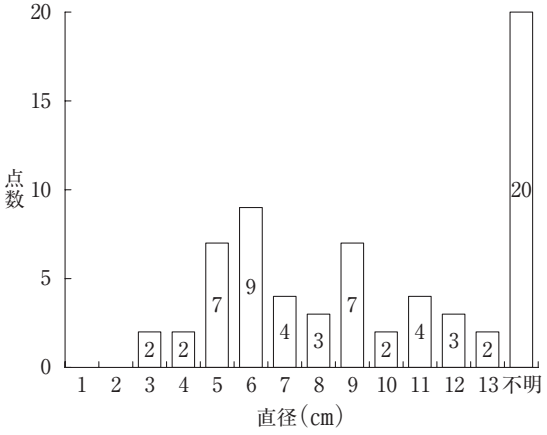
16−2図　２号窯跡構築材の復元直径



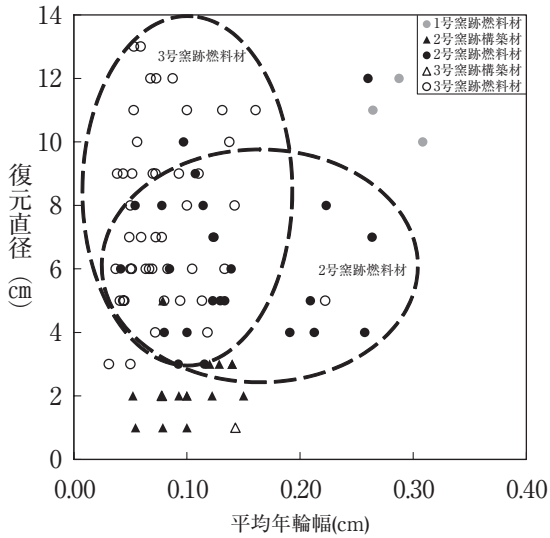
16−3図　２号窯跡燃料材の復元直径



16−4図　３号窯跡構築材の復元直径



16−5図　３号窯跡燃料材の復元直径



16−6図　平均年輪幅と復元直径

第16図　鴨谷支群の燃料材等の直径計測の結果

復元直径の計測結果（第16図）では、構築材と燃料材で差がみられた。２号窯跡、３号窯跡の構築材では、復元直径で１～３㎝の炭化材が多く確認でき、１号窯跡燃料材では試料数が少ないが10～12㎝、２号窯跡燃料材では３～10㎝、３号窯跡燃料材では３～13㎝の炭化材が確認できた。２号窯跡燃料材の復元直径では４㎝に試料数のピークがみられ、５～８㎝にも一定量の炭化材が確認できた。また３号窯跡の炭化材では、６㎝に試料数のピークがみられ、次いで５㎝、９㎝にも多くの試料が確認できた。

また、残存半径と残存年輪数を割って求めた平均年輪幅と復元直径についてみてみた（16－6図）。試料数が多かった２号窯跡と３号窯跡では、２号窯跡の燃料材は直径３～８㎝で平均年輪幅は0.05～0.3㎝辺りに多くの分布がみられ、３号窯跡の燃料材は直径３～13㎝、平均年輪幅は0.05～0.2㎝辺りに多くの分布がみられた。

構築材の直径はいずれも細く、枝材が利用されていたと考えられる。鴨谷支群の窯跡の窯体構築方法は、窯体の左右の壁に沿って材を斜めに打ちこみ、桟木を通して合掌組のような骨組みを作り、横木を通して棚を作るという工法である棚置法Aが想定されている。そのため、構築材には耐久性などに優れた材が必要となる。今回の同定で産出したアカガシ亜属とクヌギ節、コナラ節、カエデ属、ネジキは重硬で耐久性に優れた樹種であり、そのために構築材として用材選択されたと考えられる。

燃料材でクヌギ節とコナラ節のみが利用されていたのは、クヌギ節とコナラ節が、火力は高くはないが火持ちが良いという性質をもつためであると考えられる。復元直径の計測結果からは、試料数のバラつきがあるため一概には言えないが、２号窯跡と３号窯跡では、３号窯跡の方が若干太い燃料材を利用していた可能性が考えられる。また平均年輪幅と復元直径についてみると、２号窯跡と３号窯跡では２号窯跡のほうが炭化材の平均年輪幅が広かった。

一般的に樹木は、陽光に多く当たるもの（２次林など）が年輪の間隔が広くなる。２号窯跡と３号窯跡の燃料材の樹種はクヌギ節とコナラ節であり、植種別の年輪幅の間隔の誤差も少ないと考えられる。そのため２号窯跡と３号窯跡の平均年輪幅の差は、燃料材の伐採場所の森林環境の差である可能性がある。窯跡の操業順では、３号窯跡の操業後に２号窯跡の操業が行われる。先行する３号窯跡では平均年輪幅が0.05～0.2㎝、直径が６㎝にピークがみられる３～13㎝の材を使用し、２号窯跡では３号窯跡よりも平均年輪幅が広くて直径が細い材を使用していた。この直径と年輪幅の差は、遺跡周辺で燃料材が伐採されていたという前提でと考えると、３号窯跡の燃料材のほうが、より原生林に近い森林で伐採されたと考えられる。また２号窯跡操業時の森林は、３号窯跡の伐採によってある程度森林が開けた所に生育した可能性が考えられる。

そして燃料材の供給原たる窯跡周辺の森林環境についてである。花粉分析が行われていないため周辺森林の様子を正確は捉えられないが、クヌギ節とコナラ節が周辺に多く産出していた可能性が考えられる。しかし構築材でアカガシ亜属やカエデ属、ネジキが産出したのを踏まえると、遺跡周辺の森林はクヌギ節やコナラ節の純林が成立していたとは考えにくい。そのため当窯跡周辺では、多様な種が生育する森林が成立していたと考えられる。

以上の事を踏まえて、鴨谷支群の森林環境と開発について考えてみる。３号窯操業時には、遺跡周辺の森林は先行して開発などは行われておらず、クヌギ節やコナラ節が卓越するが多様な種も生育する未開の森林であったと考えられる。なお１号窯跡操業時の様相は試料が少なく不明であるが、３号窯跡操業時の森林状況と同程度であった可能性が考えられる。それらの森林の中より構築材にはアカガシ亜属やネジキなどの重硬な材の枝などを伐採し、燃料材には３～13㎝の幹材を伐採して利用していたと考え

られる。２号窯跡操業時には、先行する開発によって多少森林が開け、成長の良いクヌギ節やコナラ節が生育していた、多様な種の生育する森林が広がっていたと考えられる。それらの森林より、クヌギ節やカエデ属、ネジキなどの枝材を構築材として伐採し、３～８㎝程度の幹材を伐採して燃料材として利用していたと考えられる。しかし鴨谷支群では、各窯跡の時期の森林環境をみても、燃料材や構築材の構成樹種に大きな変化はみられなかった。そのため鴨谷支群での人為による森林開発は、自然植生の回復力とのバランスを取りながら行われていた、またはクヌギ節やコナラ節の植林が行われていた可能性が考えられる。

兵庫県域では、同時期の窯跡での燃料材の分析例は、兵庫県三田市に所在する相野古窯跡群にみられる。10世紀台に操業が行われていた古城山１号窯、中池ノ内１号窯、西谷地１号窯、西谷地２号窯、寄合谷窯跡では、スギと、アカガシ亜属を含めたカシ類が多く産出している（嶋倉、1992）。神出古窯址は比較的平野部よりに立地するのに対し、相野古窯跡群は内陸部の丘陵地帯に立地している。そのため遺跡周辺の植生が異なり、燃料材の構成樹種も異なっていたと考えられる。

また燃料材の直径の計測は、７世紀後半～８世紀初頭に操業が行われていた、山形県高畠町に所在する高安窯跡群と、７世紀後半～７世紀末に操業が行われていた、愛知県瀬戸市に所在する、猿投窯の丁子田窯跡・市ヶ洞１号窯跡、６世紀後半に操業が行われていた、福岡県大野城市に所在する、牛頸窯跡群の梅頭４次１号窯跡でみられる（小林、2010）。それらの窯跡では燃料材の樹種と復元直径による分析から、窯業形態や規模などの相違によって、樹種による強い選択を行わず、材の太さによる選択が行われる高安窯型の伐採、樹種による強い選択と材の太さによる選択が行われる猿投窯型の伐採、樹種と太さでの選択が顕著でなく、皆伐に近い形の伐採が行われていたと想定される牛頸窯型の伐採などと、森林伐採の形態が異なることが述べられている。

当窯跡群では、樹種による強い選択性と、太さによる選択性が確認できた。そのため前述の伐採形態に当てはめると、猿投窯型の森林伐採に近い様相であると考えられる。ただし、猿投窯型の伐採では萌芽更新での育林も想定されているが、芽更新に適した樹木は10～15年生程度の幼木ないし若木である。当窯跡で出土した炭化材は年輪の詰まった成木が多く、萌芽更新には適さないと考えられる。そのため当遺跡では、樹木から落下した種子が発芽しておこる天然更新などが起こっていた可能性が考えられる。

引用文献

小林克也（2010）須恵器窯業での森林利用の一考察．窯跡研究会編「古代窯業の基礎知識」：759-770，真陽社．

嶋倉巳三郎（1992）三田市相野窯跡群出土の炭化材の樹種．兵庫県教育委員会編「相野古窯跡群　本文編」：527-534，兵庫県教育委員会．

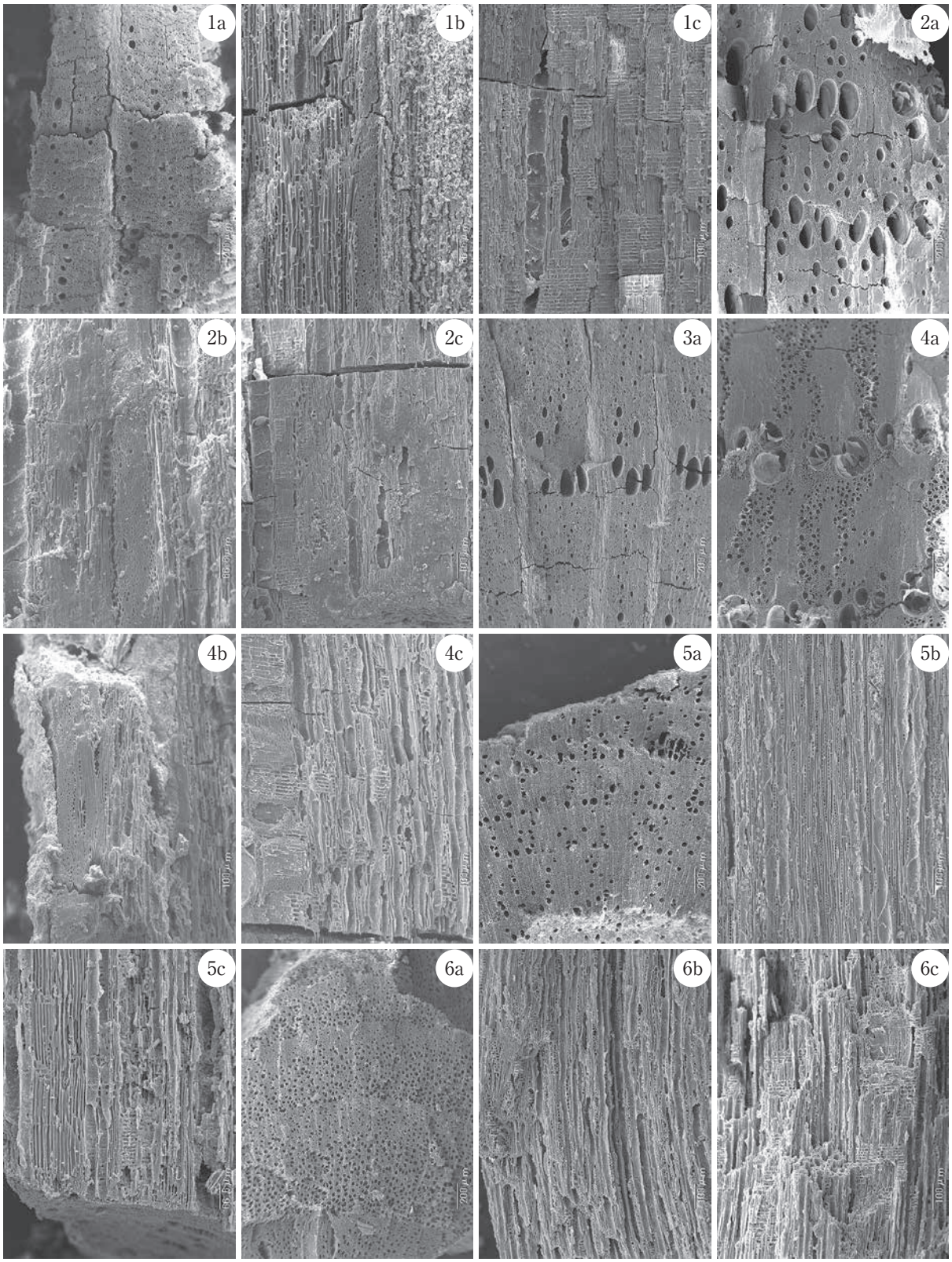


写真10　鴨谷支群出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. コナラ属アカガシ亜属（No.21）　2a-2c. コナラ属クヌギ節（No.43）　3a. コナラ属クヌギ節（No.88）
4a-4c. コナラ属コナラ節（No.57）　5a-5c. カエデ属（No.20）　6a-6c. ネジキ（No.18）
a: 横断面・b: 接線断面・c: 放射断面

第５表　鴨谷支群出土炭化材の樹種同定結果一覧

遺物No.	遺構名	出土部位	種　類	出土箇所	樹　種	残存半径（cm）	残存年輪数	平均年輪幅（cm）	復元直径（cm）
1	１号窯跡	灰原	燃料材	下段　最下層砂礫	コナラ属クヌギ節	2.9	28	0.10	－
2	１号窯跡	灰原	燃料材	Ｌ１第１層　赤黄礫混じり	コナラ属クヌギ節	4.6	16	0.29	12
3	１号窯跡	灰原	燃料材	Ｌ１第１層　赤黄礫混じり	コナラ属クヌギ節	3.7	14	0.26	11
4	１号窯跡	灰原	燃料材	Ｌ１第１層　赤黄礫混じり	コナラ属クヌギ節	3.7	12	0.31	10
5	２号窯跡	窯体	構築材	２Ｒ６	コナラ属クヌギ節	1.4	10	0.14	3
6	２号窯跡	窯体	構築材	２Ｌ４	コナラ属クヌギ節	1.1	14	0.08	5
7	２号窯跡	窯体	構築材	２Ｌ３	コナラ属クヌギ節	0.9	7	0.13	3
8	２号窯跡	窯体	構築材	２Ｌ13	コナラ属クヌギ節	1.1	9	0.12	2
9	２号窯跡	窯体	構築材	２Ｌ10	コナラ属クヌギ節	1.4	10	0.14	3
10	２号窯跡	窯体	構築材	２Ｌ18	コナラ属クヌギ節	1.1	14	0.08	1
11	２号窯跡	窯体	構築材	２Ｌ５	コナラ属クヌギ節	1.3	14	0.09	2
12	２号窯跡	窯体	構築材	２Ｒ10	コナラ属クヌギ節	0.9	6	0.15	2
13	２号窯跡	窯体	構築材	２Ｒ７	コナラ属クヌギ節	1.2	10	0.12	3
14	２号窯跡	窯体	構築材	２Ｌ９	コナラ属クヌギ節	1.0	10	0.10	2
15	２号窯跡	窯体	構築材	２ｌ12	コナラ属クヌギ節	0.7	9	0.08	2
16	２号窯跡	窯体	構築材	２ｌ11	コナラ属クヌギ節	1.2	23	0.05	2
17	２号窯跡	窯体	構築材	２Ｌ17	ネジキ	0.6	6	0.10	2
18	２号窯跡	窯体	構築材	２Ｒ５	ネジキ	0.5	5	0.10	1
19	２号窯跡	窯体	構築材	２Ｒ11	コナラ属クヌギ節	0.5	7	0.07	－
20	２号窯跡	窯体	構築材	２Ｒ３	カエデ属	0.6	11	0.05	1
21	３号窯跡	窯体	構築材	３Ｒ１	コナラ属アカガシ亜属	1.0	7	0.14	1
22	３号窯跡	窯体	構築材	３Ｒ２	ネジキ	0.7	9	0.08	2
23	３号窯跡	窯体	構築材	３Ｒ６	ネジキ	0.3	6	0.05	－
24	２号窯跡	窯体	構築材	６区Ｌ　灰原（新）	コナラ属クヌギ節	3.1	52	0.06	－
25	２号窯跡	窯体	構築材	６区Ｌ　灰原（新）	コナラ属クヌギ節	－	－	－	－
26	２号窯跡	焚口部	燃料材	６区Ｌ　灰原（新）	コナラ属クヌギ節	1.8	11	0.16	－
27	２号窯跡	焚口部	燃料材	横Ｌ　上段灰原	コナラ属クヌギ節	0.8	7	0.11	8
28	２号窯跡	灰原	燃料材	２区　下層礫層	コナラ属クヌギ節	－	－	－	－
29	２号窯跡	灰原	燃料材	３区　群４	コナラ属クヌギ節	－	－	－	－
30	２号窯跡	灰原	燃料材	３区南　灰層	コナラ属クヌギ節	1.5	13	0.12	3
31	２号窯跡	灰原	燃料材	３区南　灰原（新）	コナラ属クヌギ節	1.2	7	0.17	－
32	２号窯跡	灰原	燃料材	３区　上段灰原（新）	コナラ属クヌギ節	2.2	17	0.13	5
33	２号窯跡	灰原	燃料材	３区　上段灰原（新）	コナラ属クヌギ節	1.8	7	0.26	4
34	２号窯跡	灰原	燃料材	３区　上段灰原（新）	コナラ属クヌギ節	1.3	4	0.33	－
35	２号窯跡	灰原	燃料材	３－４区　上段灰原２回目	コナラ属クヌギ節	3.2	23	0.14	6
36	２号窯跡	灰原	燃料材	３－４区　上段灰原２回目	コナラ属クヌギ節	1.5	11	0.14	－
37	２号窯跡	灰原	燃料材	３－４区　上段灰原２回目	コナラ属クヌギ節	2.1	17	0.12	－
38	２号窯跡	灰原	燃料材	３－４区　群４下層	コナラ属クヌギ節	2.1	11	0.19	4
39	２号窯跡	灰原	燃料材	３－４区　群３下層	コナラ属クヌギ節	2.7	22	0.12	5
40	２号窯跡	灰原	燃料材	３－４区　ヨコアゼ北	コナラ属クヌギ節	3.2	24	0.13	5
41	２号窯跡	灰原	燃料材	３－４区　ヨコアゼ北	コナラ属クヌギ節	3.3	61	0.05	8
42	２号窯跡	灰原	燃料材	５区　群２	コナラ属クヌギ節	2.4	58	0.04	6
43	２号窯跡	灰原	燃料材	Ｌ５区　サブトレ	コナラ属クヌギ節	3.2	33	0.10	10
44	２号窯跡	灰原	燃料材	Ｌ６区　灰原（新）	コナラ属クヌギ節	1.1	7	0.16	－
45	２号窯跡	灰原	燃料材	Ｌ６区　灰原（新）	コナラ属クヌギ節	5.2	20	0.26	12
46	２号窯跡	灰原	燃料材	Ｌ６区　灰原（新）	コナラ属コナラ節	2.2	26	0.08	6

遺物No.	遺構名	出土部位	種　類	出土箇所	樹　種	残存半径(cm)	残存年輪数	平均年輪幅(cm)	復元直径(cm)
47	2号窯跡	灰原	燃料材	Ｌ６区　灰原（新）	コナラ属コナラ節	1.5	15	0.10	4
48	2号窯跡	灰原	燃料材	主軸アゼ第４層	コナラ属クヌギ節	2.8	36	0.08	8
49	2号窯跡	灰原	燃料材	下層トレンチ　暗褐色シルト③	コナラ属クヌギ節	1.8	4	0.45	－
50	2号窯跡	灰原	燃料材	上段Ｌ　赤褐色最下層	コナラ属クヌギ節	2.1	8	0.26	－
51	2号窯跡	灰原	燃料材	下部灰原より上層（一部灰原）	コナラ属コナラ節	1.6	15	0.11	－
52	2号窯跡	灰原	燃料材	盛土Ｒ	コナラ属クヌギ節	1.2	13	0.09	3
53	2号窯跡	灰原	燃料材	東北斜面　炭層	コナラ属クヌギ節	1.2	15	0.08	4
54	2号窯跡	灰原	燃料材	群１灰原５区（ＳＤ01）	コナラ属クヌギ節	2.9	13	0.22	8
55	2号窯跡	灰原	燃料材	群１灰原５区（ＳＤ01）	コナラ属コナラ節	2.9	27	0.11	9
56	2号窯跡	灰原	燃料材	群１灰原５区（ＳＤ01）	コナラ属クヌギ節	1.7	8	0.21	4
57	2号窯跡	灰原	燃料材	群１灰原５区（ＳＤ01）	コナラ属コナラ節	3.1	25	0.12	7
58	2号窯跡	灰原	燃料材	群１灰原５区（ＳＤ01）	コナラ属コナラ節	3.2	26	0.12	7
59	2号窯跡	灰原	燃料材	群１灰原５区（ＳＤ01）	コナラ属コナラ節	2.3	11	0.21	5
60	2号窯跡	灰原	燃料材	群１灰原５区（ＳＤ01）	コナラ属クヌギ節	2.9	11	0.26	7
61	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１上層　３－201	コナラ属コナラ節	1.1	6	0.18	－
62	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１上層　３－203	コナラ属コナラ節	3.7	53	0.07	9
63	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１上層　３－203	コナラ属コナラ節	5.2	88	0.06	13
64	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１上層　３－203	コナラ属クヌギ節	2.3	23	0.10	11
65	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１上層　３－203	コナラ属クヌギ節	5.1	96	0.05	13
66	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１上層　３－217	コナラ属クヌギ節	1.3	14	0.09	－
67	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１上層　３－219	コナラ属クヌギ節	－	－	－	－
68	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１上層　３－241	コナラ属コナラ節	3.4	78	0.04	9
69	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１上層　３－241	コナラ属コナラ節	2.6	28	0.09	9
70	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１上層　３－241	コナラ属コナラ節	2.2	16	0.14	10
71	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１上層　３－241	コナラ属コナラ節	2.1	24	0.09	12
72	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１上層　３－247	コナラ属コナラ節	1.9	37	0.05	6
73	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１中層　３－272	コナラ属クヌギ節	3.3	66	0.05	8
74	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１中層　３－273	コナラ属クヌギ節	2.5	42	0.06	7
75	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１中層　３－273	コナラ属クヌギ節	1.3	35	0.04	6
76	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１中層　３－291	コナラ属クヌギ節	1.4	22	0.06	－
77	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１下層　３－239	コナラ属クヌギ節	1.4	22	0.06	6
78	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１下層　３－258	コナラ属クヌギ節	1.2	8	0.15	－
79	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１下層　３－259	コナラ属コナラ節	3.5	48	0.07	12
80	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１下層　３－267	コナラ属コナラ節	2.7	51	0.05	11
81	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１下層　３－267	コナラ属コナラ節	3.4	47	0.07	9
82	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１下層　３－267	コナラ属コナラ節	3.2	62	0.05	9
83	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１下層　３－267	コナラ属コナラ節	2.8	73	0.04	9
84	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１下層　３－267	コナラ属コナラ節	2.9	40	0.07	7
85	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１下層　３－267	コナラ属コナラ節	2.8	50	0.06	10
86	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１下層　３－327	コナラ属コナラ節	1.1	11	0.10	－
87	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１下層　３－408	コナラ属コナラ節	2.6	53	0.05	7
88	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ１最下層　３－326	コナラ属クヌギ節	4.5	28	0.16	11
89	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ２東肩上層灰層　３－322	コナラ属クヌギ節	1.2	2	0.60	－
90	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ２下層灰層	コナラ属クヌギ節	2.0	18	0.11	－
91	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ２下層西層	コナラ属コナラ節	0.7	9	0.08	7
92	3号窯跡	灰原	燃料材	Ｒ２下層灰層	コナラ属クヌギ節	2.7	39	0.07	6

遺物No.	遺構名	出土部位	種　類	出土箇所	樹　種	残存半径(cm)	残存年輪数	平均年輪幅(cm)	復元直径(cm)
93	3号窯跡	灰原	燃料材	L 2下層　3－250	コナラ属クヌギ節	2.7	19	0.14	8
94	3号窯跡	灰原	燃料材	L 2下層　3－250	コナラ属クヌギ節	3.2	29	0.11	9
95	3号窯跡	灰原	燃料材	L 2下層　3－250	コナラ属クヌギ節	2.3	23	0.10	8
96	3号窯跡	灰原	燃料材	L 2上段　3－209	コナラ属クヌギ節	1.6	17	0.09	5
97	3号窯跡	灰原	燃料材	L 2上層　3－232	コナラ属コナラ節	1.2	24	0.05	6
98	3号窯跡	灰原	燃料材	L 1下層　3－282	コナラ属クヌギ節	2.1	47	0.04	5
99	3号窯跡	灰原	燃料材	L 1下層　3－296	コナラ属クヌギ節	1.7	15	0.11	5
100	3号窯跡	灰原	燃料材	L 1中層　3－219	コナラ属クヌギ節	2.4	29	0.08	6
101	3号窯跡	灰原	燃料材	L 1上層　3－218	コナラ属クヌギ節	1.4	5	0.28	－
102	3号窯跡	灰原	燃料材	L 1中層　3－196	コナラ属コナラ節	2.2	25	0.09	－
103	3号窯跡	灰原	燃料材	L 1　3－294	コナラ属クヌギ節	0.6	21	0.03	－
104	3号窯跡	灰原	燃料材	R 2東肩　3－1	コナラ属クヌギ節	1.5	12	0.13	－
105	3号窯跡	灰原	燃料材	R 2上層　3－204	コナラ属クヌギ節	1.1	3	0.37	－
106	3号窯跡	灰原	燃料材	R 2上層　3－261	コナラ属クヌギ節	1.4	28	0.05	3
107	3号窯跡	灰原	燃料材	R 2上層　3－265	コナラ属クヌギ節	2.1	48	0.04	5
108	3号窯跡	灰原	燃料材	R 2上層　3－265	コナラ属クヌギ節	1.1	27	0.04	5
109	3号窯跡	灰原	燃料材	R 2上層　3－270	コナラ属クヌギ節	0.8	18	0.04	－
110	3号窯跡	灰原	燃料材	R 2東　流土層　3－275	コナラ属コナラ節	2.1	36	0.06	－
111	3号窯跡	灰原	燃料材	R 2上層　3－279	コナラ属コナラ節	4.0	59	0.07	12
112	3号窯跡	灰原	燃料材	R 2東肩上層灰層　3－309	コナラ属クヌギ節	2.1	16	0.13	11
113	3号窯跡	灰原	燃料材	R 2東肩上層灰層　3－315	コナラ属コナラ節	1.5	7	0.21	－
114	3号窯跡	灰原	燃料材	R 2中層　3－320	コナラ属コナラ節	1.8	25	0.07	4
115	3号窯跡	灰原	燃料材	R 2東肩上層灰層　3－336	コナラ属クヌギ節	1.2	15	0.08	5
116	3号窯跡	灰原	燃料材	R 2東肩上層　3－348	コナラ属クヌギ節	1.3	11	0.12	4
117	3号窯跡	灰原	燃料材	R 2下層　3－405	コナラ属コナラ節	2.7	15	0.18	－
118	3号窯跡	灰原	燃料材	R 1～R 2セク⑩土層　3－377	コナラ属クヌギ節	0.9	29	0.03	3
119	3号窯跡	灰原	燃料材	R 1～R 2　3－379	コナラ属コナラ節	－	－	－	－
120	3号窯跡	灰原	燃料材	R 1～R 2　3－381	コナラ属クヌギ節	2.6	39	0.07	6
121	3号窯跡	灰原	燃料材	R 1～R 2　3－386	コナラ属コナラ節	2.0	15	0.13	6
122	3号窯跡	灰原	燃料材	R 1～R 2⑩層　3－394	コナラ属コナラ節	1.4	5	0.28	－
123	3号窯跡	灰原	燃料材	R 1～R 2⑩層　3－396	コナラ属コナラ節	1.2	14	0.09	－
124	3号窯跡	灰原	燃料材	L 1中央縦セクション　3－292	コナラ属クヌギ節	2	9	0.22	5
125	3号窯跡	灰原	燃料材	中央縦断セクション⑬層　3－374	コナラ属クヌギ節	2.3	22	0.10	6

Ⅱ　窯体断面の剥ぎ取り作業

岡　本　一　秀

１．はじめに

遺構の土層断面の薄層標本の剥ぎ取りは、土層の堆積状況を後に検討や、展示を行う上で非常に有効な手法である。須恵器の窯の場合、土層観察用の畦の剥ぎ取りを行えば、現地での調査が終了してからでも、窯の操業中にどのぐらいの回数で床面や天井部、壁を補修されていたかなど、詳細に調査することが可能となる。

現地で剥ぎとりを行った断面は、鴨谷２号窯と３号窯の窯体横断面、それぞれ１面ずつである。

２．２号窯の剥ぎ取り作業

２号窯の剥ぎ取り対象断面は高さ50㎝、幅３ｍで、断面は乾燥しており、窯壁はかなり焼けていて堅い。（写真11－1）

①作業に当たっては剥ぎ取る断面以外の床面などに樹脂がかかってもすぐに取れるように高分子ポリエチレングリコール（PEG4000）を熱湯でといてペースト状にしたものを塗りつけて養生した。（写真11－2）

②硬い土層を剥ぎ取るため、剥ぎ取り用樹脂NR51を断面に刷毛で塗布する。（写真11－3）

③一通り断面に樹脂を塗り終わってから裏打ち用のガーゼを貼り付ける。（写真11－4）

④ガーゼの上からトマックNR51をもう一度塗布する。

結果：PEG4000は、うまく離型剤として機能した。反応が早かったせいか、裏打ちのガーゼと樹脂がくっついていない部分があった。

３．３号窯の剥ぎ取り作業（１回目）

３号窯の剥ぎ取り対象断面は、高さ１ｍ、幅５ｍである。全体的に粘質土で少し柔らかい。（写真12－1）

①剥ぎ取り用樹脂NR51を断面に刷毛で塗布する。（写真12－2）

②一通り断面に樹脂を塗り終わってから裏打ち用のガーゼを貼り付ける。（写真12－3）

③ガーゼの上からNR51をもう一度塗布し、一晩おく。

④前日貼り付けた樹脂を剥ぎ取る。（写真12－4）

結果：断面の上のほうは比較的しっかりと剥ぎ取れたが、下の方は剥ぎ取れてない部分が多かった。

現場に見学に来られた神戸市埋蔵文化財センターの保存処理担当の千種氏より、剥ぎ取られた土の厚さが薄いのは、断面に水分が多かったためNR51となじまなかったのが原因ではないかとご教示をいただいた。対処方法としては、水分と相性のいいNS10を使うことと、２回目の塗布には強度が強いNR51を用いると良いのではとアドバイスをいただいた。このためもう１度剥ぎ取りを実施することにした。

11－1　2号窯　剥ぎ取り断面（作業前）

11－2　2号窯　剥ぎ取り　PEGによる養生

11－3　2号窯　剥ぎ取り用樹脂塗布作業

11－4　2号窯　剥ぎ取り裏打ち用樹脂塗布

写真11　鴨谷2号窯　窯体断面剥ぎ取り状況

12－1　3号窯　剥ぎ取り断面（作業前）

12－2　3号窯　剥ぎ取り用樹脂塗布

12－3　3号窯　剥ぎ取り裏打ち

12－4　3号窯　剥ぎ取り作業

写真12　鴨谷3号窯　窯体断面剥ぎ取り状況

4．３号窯の剥ぎ取り作業（２回目）

①剥ぎ取り用樹脂NS10を断面に刷毛で塗布する。今回はガーゼの幅の単位で樹脂の塗布と裏打ちの作業を繰り返した。完全に裏打ちが終わってから噴霧器で樹脂に水分を与え、反応を促した。

②NS10が硬化し、断面が乾いているのを確認してからガーゼの上からNR51をもう一度塗布して一晩おく。

③前日貼り付けた樹脂を剥ぎ取る。

結果：NS10はNR51に比べて接着強度が弱いので、結果を危惧したが、前回に比べると土層や土器のくっつき具合は良好であった。

今回剥ぎ取った断面は、魚住分館に持ち帰った後、パネルに貼り付けて展示・公開できるように仕上げた。（写真13－2）

5．作業の結果

最初の剥ぎ取りがうまくいかなかったのは、窯体に堆積した土層が、思ったより水分を含んでおり、変性エポキシ樹脂系のNR51がうまくなじまなかったが原因であり、２回目がうまくいったのは、水分と反応する変性ポリウレタン樹脂系のNS10を最初に使用したためと考えられる。

13－１　３号窯　剥ぎ取り後搬出作業

13－２　パネル完成状況

写真13　鴨谷３号窯　窯体断面剥ぎ取り搬出と完成状況

第６章　総括

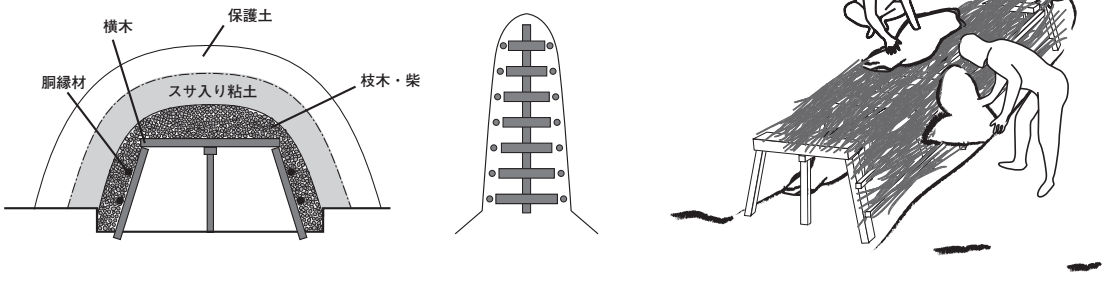
第１節　神出窯跡群における窯体構造について

１．架構痕跡からみた窯構築法の検討

今回、発掘調査を実施した窯跡はすべて窯体を地上に架構する地上式（地上窯体架構式）の窯構造である。地上式の窯は平安時代の播磨および西摂津で発達した窯構造であるが、近年の発掘調査では京都府亀岡市篠窯跡群[註1]・大津市上仰木窯（木立1999年）や東北の諸窯においても地上式構造の窯跡構造が採用されている。また、陶邑窯跡群（中村1976年）や加古川市神野大林窯跡群（篠宮他2010年）など古墳時代の窯群においても地上式の窯が存在しており、古墳時代においても一過性とはいえ、その存在が認められる。一方、地上式窯の架構痕跡は播磨諸窯をはじめ各地の窯跡群で発見されているが、架構痕跡の検出にとどまり、架構方法の復元にまで至っていないのが現状である。今回の調査では、側壁および床面に残存した架構材跡や埋土層内の天井壁など良好な架構痕跡が発見されたので、以下、その概要とこれらの痕跡資料をもとに地上式窯の構築法案を提示しておきたい。

鴨谷２号窯及び同３号窯の側壁および床面から検出された架構材跡の架構材の検出データは第16頁第１表、第21頁第２表に示している。ともに検出された架構材は先端部が尖った丸木材で、床面から10㎝前後の深さまで打ち込まれている。架構材の何本かは床面下で炭化した状態で検出されており、小林克也氏の分析（第５章Ⅰ）によると、炭化材の種類はコナラ属クヌギ節、同コナラ節、カエデ属、ネジキで、残存年輪は最大で23年の結果が示されている。架構材の残存径は３号窯では５㎝前後であるが、２号窯の床平面で検出された架構材痕跡の径は７㎝～８㎝あり、最大のものは10㎝に達する。一方、架構痕跡の間隔は２号窯・３号窯ともに平均約20㎝で、両側壁の架構痕跡は側壁に沿ってほぼ一直線に並ぶ。２号窯の構築材は内側に向かって約70°前後の角度で斜めに打たれている。これに対して３号窯では、壁面の構築材の角度は70°を示すものが多いが、その基部は垂直に近い角度を示しており、この現象はまっすぐに打ち込まれた架構材が架構粘土の重圧と乾燥収縮によって内側に撓んだものと理解される。

次に、遺構に残された架構痕跡ではないが、遺構写真59に示したように、鴨谷２号窯・鴨谷３号窯・梟谷１号窯の天井内壁に枝木の痕跡が残されていた。鴨谷２号窯の天井壁では内壁全体に直径５㎝前後の太さの枝木の痕跡が広がる。これらの枝木はいずれも窯体主軸と同じ方向に並んでおり、この状況は窯体の主軸と同じ方向に枝木を重ねて置き、その上に天井架構土を置いたことを示す[註2]。



第17図　架構痕跡からみた窯体構築法の復元図

以上、上記の架構痕跡から想定できる構築方法は第17図に示した構築法である。すなわち、まず、窯体の平面プランを地表に描き、平面プランに基づいて約20㎝程度地山を堀下げて窯床を作る。側壁に沿って20ｃｍ間隔に丸木材を打ち込み、胴縁材で杭を繋ぎ、左側壁と右側壁の胴打ち材に横木を架け渡して棚を作る。次に過荷重による棚のたわみ防止のため、下から主軸線上に棟木をあてがい支保工材で支える。こうして造作した骨組の両側壁から棚部にかけて枝木等を重ねてアーチ状に覆う。この後にスサ入りの粘土を貼り付け、さらに保護土で窯全体を覆い、乾燥させる。乾燥後に架構材を焼き切るという手順になる(註3)。

２．神出窯跡群における窯体構造の特徴と規模の変遷

窯の形態は４基とも地上式の窖窯である。窯体構造の特徴はいずれも燃焼部はわずかにくぼむが、半地下式窯のような燃焼部と焼成部を分ける明確な傾斜変換点がなく、床面は焚口から窯体先端部まで直線的に立ち上っていく。排煙部については地上の架構部全体が残存していないのでその形態は不明であるが、鴨谷１号窯および鴨谷２号窯では、先端部の傾斜がやや上向きに角度を変えているので上向き形の排煙口をもっていた可能性が高い。

次に床の平面形状について操業順に述べると、まず、鴨谷１号窯は、窯体長5.1m、焼成部幅1.15mの小型窯で、奥に向かって次第に窄まる砲弾形の形状を呈する。続く鴨谷３号窯第２次窯体の窯体規模は窯体長が推定10.5m、焼成部部幅2.35mの大型窯である。全体的な形状については不明であるが、残存する燃焼部に限れば、１号とは逆に焚口の方が狭く奥に向かって広がる平面形状をもつ。鴨谷２号窯は窯体長11.85m、焼成部幅2.70mの大型窯で、焼成部上位まではほぼ同じ幅の寸胴形の形状を呈するが、焼成部上位を過ぎた辺りから先窄まりとなる。梟谷１号窯については窯体下半分が失われているが、窯体長が12mと推定される大型窯で、上半分の床面の状況は鴨谷２号窯とほぼ同じであることから、床面全体の平面形状も鴨谷２号窯とほとんど変わらないと思われる。

続いて傾斜角度について述べる。傾斜角度は鴨谷１号窯が平均27°であるのに対して、鴨谷３号窯･鴨谷２号窯では22°～24°、梟谷１号窯では18°～20°である。床面傾斜は立地する斜面傾斜に左右されるので、一概には言えないが、床面傾斜は、全体として時代が下るにつれてゆるくなる傾向が認められる。なお、神出窯跡群の南東地区に位置する神出垣内支群（池田・岡本他1998年）は12世紀前半から後半にかけての窯跡群で、このうち最も古い同支群１号窯は窯体長11.38m、焼成部幅1.94m、床面傾斜18°～20°であるのに対して、これより下る同支群５号窯は窯体長8.2m、焼成部幅1.44m、床面傾斜13°～15°となり、12世紀後半代以降になると、傾斜が20°以下になることが指摘されている。

第６表　窯体規模一覧表

項目		鴨谷１号窯	鴨谷３号窯第２次	鴨谷２号窯（当初）	梟谷１号窯
長さ	窯体長	5.10m	推定10.50m	10.85m	推定12m
	焼成部長	3.10m	−	8.25m	−
	燃焼部長	2.00m	2.70m	2.60m	−
幅	焚口幅	1.05m	2.15m	2.50m	推定2.5m
	燃焼部幅	1.15m	2.20m	2.70m	−
	焼成部幅	1.00m	2.35m	2.80m	2.10m
	奥壁幅	0.95m	−	1.75m	1.70m
床面傾斜	燃焼部	17°	0°～21°	27°	−
	焼成部	27°	23°	23°	20°
	平均斜度	27°	22°	24°	18°
標高	排煙部	102.10m	推定103m	102.40m	99.25m
	燃焼部	99.30m	99.0m	97.80m	95.00m
床面積		6.4㎡	推定21㎡	26.1㎡	推定25㎡
実効高		2.80m	推定４m	4.60m	推定4.25m

以上のことから神出窯跡群における窯体規模は、窯体長

５ｍの規模に始まり、一旦大型化した後[註4]、再び小型化に向かうが、同時に傾斜角度も緩くなるという変化を辿ることがわかる。詳細についてはここでは本旨ではないので省略するが、神出窯跡群における窯の規模や構造の問題について簡単な指摘をしておきたい。地上式窯の場合、斜面をほとんど掘り下げずに窯を構築するために、斜面長と表面傾斜角度などの立地条件が窯の規模等に直接影響を与える。神出初期の窯は台地縁辺部の草谷川に開口するやや深い谷に構築されるが、時代が下るにつれて台地の内部域に移動する。奥部では、ごく浅い谷がほとんどで、このような立地では傾斜が緩やかで窯体長の短い規模の窯を構築せざるを得ないという地形的制約を受けやすい。しかし、その反面、窯の集団規模が大きくなり、瓦などの製品の大量生産を図るために、多数の小型窯を並べて行う同時操業は、鴨谷のような狭い谷では不向きであるが、内部域の浅い谷域では対応が可能である。特に瓦の場合は傾斜の緩い小型の窯での生産が可能であり、急傾斜の斜面は必要としない。従って、神出窯の窯の構造の変化は生産規模の拡大と関わるものと推察される。

註

註１　篠大谷３号窯　2004年～2006年　大阪大学考古学研究室調査。未報告

註２　同様の痕跡が仙台市の与兵衛沼窯跡群においても発見されている。
渡辺弘美「仙台市与兵衛沼窯跡群の発掘調査」『古代窯業の森林利用技術』東北芸術工科大学文化財保存技術センター 2008年

註３　枝木等を重ねて骨組を覆うのは、アーチを形づくる目的もあるが、結果的に枝木にクッションの役割を果たさせている。すなわち、窯体を形づくる粘土の壁材は乾燥により大きく全体が内側に収縮するが、骨組材そのものは収縮しないので、枝木の重ねによるクッションがないと乾燥途中に骨組材が突っ張りとなって粘土壁そのものが地表から浮き上がった状態になってしまうからである。

註４　鴨谷２号窯とほぼ同時期の神出万堡池窯は窯体長については不明であるが、幅2.8m前後の大型窯で、鴨谷２号窯と同規模と推定される。

参考・引用文献

木立雅朗他『仰木遺跡発掘調査概報Ⅰ（遺構編）平安時代須恵器窯跡の発掘調査』（立命館大学文学部学芸員課程研究報告第８冊）1999年　立命館大学文学部

中村浩『陶邑Ⅰ』大阪府教育委員会　1976年

篠宮正・岡田章一・西口圭介・森内秀造他『神野大林窯跡群』2010年　兵庫県教育委員会

久保弘幸・池田征弘・岡本一秀『神出窯跡群』兵庫県教育委員会　1998年

森内秀造「半地下式天井架構式窯と地上窯体架構式窯の構築法復元」『古代窯業の基礎研究』2010年　窯跡研究会

渡辺弘美「仙台市与兵衛沼窯跡群の発掘調査」『古代窯業の森林利用技術』東北芸術工科大学文化財保存技術センター 2008年

第２節　出土遺物の検討

１．刻書土器について

鴨谷２号窯と同３号窯から刻書のある須恵器片が出土している。確実に刻書と判断できるのは５点で、その一覧を第７表に示す。刻書はいずれも甕のみに認められ、このうち、末尾に「御料」と刻まれるものが*3101*と*8402*の２点、末尾に「□料」の文字が刻まれるものが*8301*の１点存在する。*8301*の「料」の文字は左側が欠けて判読できないが、「御」の字の右側のつくりの「卩（ふしづくり）」と見なせば、*8301*も末尾に「御料」の文字が刻まれていることなる。また、*3201*も「王」と判読することができるならば、*3101*と同じ「王作上宮御料」の文字が刻まれている可能性が高い。従って、*3201*・*8301*も含めるならば５点のうち４点に「御料」の文字が刻書されていることになる。「御料」とは供給物品の総称または皇室の財産並びに所属の土地のことを指す。

続いて文全体が唯一完結している*3101*の「王作上宮御料」の刻書について検討する。２号窯の「王作上宮御料」については、「上」を動詞として見なして‘たてまつる’とも読むことができるが、「上」と「宮」を１つにして「上宮」と読み、「王作」を「上宮」にかかる修飾とみなして「王作上宮」という固有名詞と捉えた方が整合性があるように思われる。それでは「王作上宮」を固有名詞と考えた場合、「王作上宮」とはどこを指すか。王は皇胤の身分を指す称であり、宮は皇族の御殿を示すので、いずれかの皇胤の御殿を指している可能性が高いものと思われる。また、３号窯の「□［田ヵ］殿御料」の「殿」は貴人の尊称あるいは貴人の宅という意味をもつ。従って、刻書の内容は「王作上宮」、「□［田ヵ］殿」への御用（の甕である）というような納め先を明記したものと考える。「王作上宮」、「□［田ヵ］殿」が、いずれの邸宅を指すのか、具体名は今のところ不明であるが、製品の供給先が一般的な相手方だけではないことが明らかである。３号窯の操業年代が10世紀半ばから後半頃、２号窯の操業年代を11世紀前後と考えているが、神出窯の成立を考える上で、少なからぬ意味をもつ。製品の供給先の考古学的追求と文献による研究によって「王作上宮」、「□（田ヵ）殿」の所在が明らかになれば、神出窯の研究が大きく発展する可能性をもつ刻書と考える。

第７表　刻書一覧

出土窯	報告番号	記載内容	器種・位置
鴨谷２号窯 灰原	*3101*	王作上宮御料	甕体部肩
鴨谷２号窯 SD01	*3201*	［王ヵ］ □	甕体部破片
鴨谷３号窯 灰原	*8301*	□料	甕体部破片
鴨谷３号窯 表土	*8401*	□屋□	甕体部破片
鴨谷３号窯 灰原	*8402*	［田ヵ］ □殿御料	甕体部破片

２．甕の叩き目からみた窯の構築順序

同じ窯跡群内で複数基の窯から同じ叩き目あるいは当て具痕をもつ甕が発見されることがある（森内・藤田2006年）。この場合、複数の窯が同時操業の場合は当然想定できることである。ところが、生産品に時期差が認められる場合は、世代間で道具が引き継がれたか、また、同一工人が何年か後に新たに窯を別に構築した場合においても同じ工具を引き続き使用したことになる。従って、短期・長期は別にして、窯の構築順序にとどまらず、生産の連続性が追認できるという点においてきわめて有効である。当該窯跡群においても、いくつかの特徴的な叩き目が認められたので、第18図に鴨谷１号窯・同２号窯・同３

号窯の出土甕の叩き目文様を窯の操業順に一覧にした。もちろん、すべてを網羅しているものではなく、特徴的な文様をａ類からｆ類まで分類して抽出したものである。

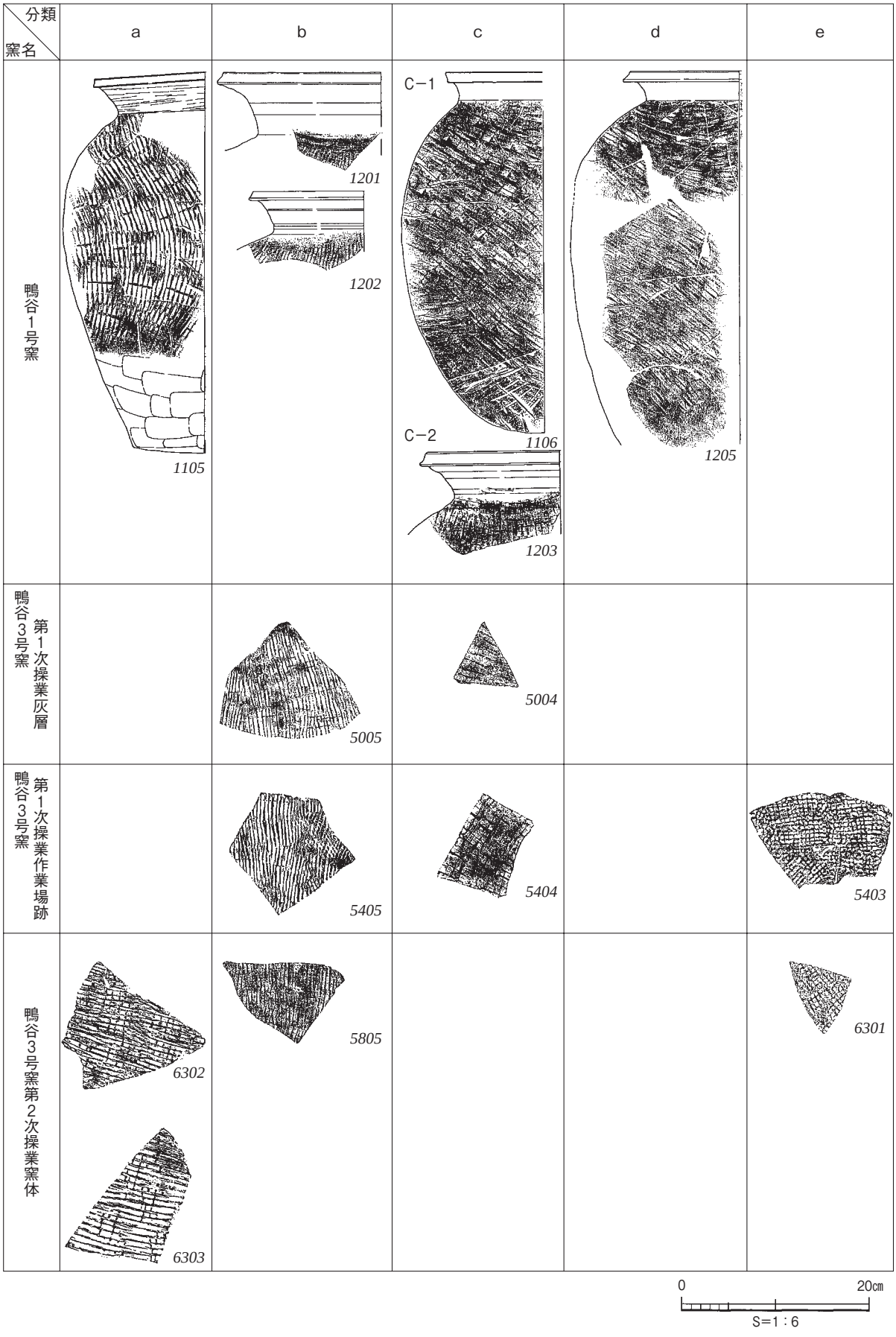
まず、ａ類とｂ類は、横方向に１本の条線を有する特徴的な叩き目である。ａ類が広い溝幅をもつのに対してｂ類の溝幅はやや狭い。ａ類については、鴨谷１号窯、鴨谷３号窯第２次操業（以下、鴨谷３－２次窯と略）窯体第２床面及び第３床面埋土層出土甕に見られる。ｂ類の叩き目は１号窯、鴨谷鴨谷３－１次窯灰層、同作業場土器溜まり、同３－２次窯体の当初床面出土甕に見られる。

ｃ類とｄ類は比較的広い溝幅をもつ叩き目で、同じ板材を使用していた可能性が高い。ｃ類が梯子段のような叩き目をもつのに対して、ｄ類は横方向の条線をもたない。ｃ類は鴨谷１号窯の甕*1106*と甕*1203*に確認できるが、甕*1203*が正格子的な要素が強いようにもみえ、両者が同一の叩き目かどうかは判断できないので仮に甕*1106*をｃ１、甕*1203*をｃ２として分類しておく。このうちｃ２類の叩き目は鴨谷３－１次窯灰原、同作業場土器溜まり出土甕に見られるが、鴨谷１号窯のｃ２類の叩き目と同一の可能性が高いものの断定には至らない。ｄ類は鴨谷１号窯のみに見られる。

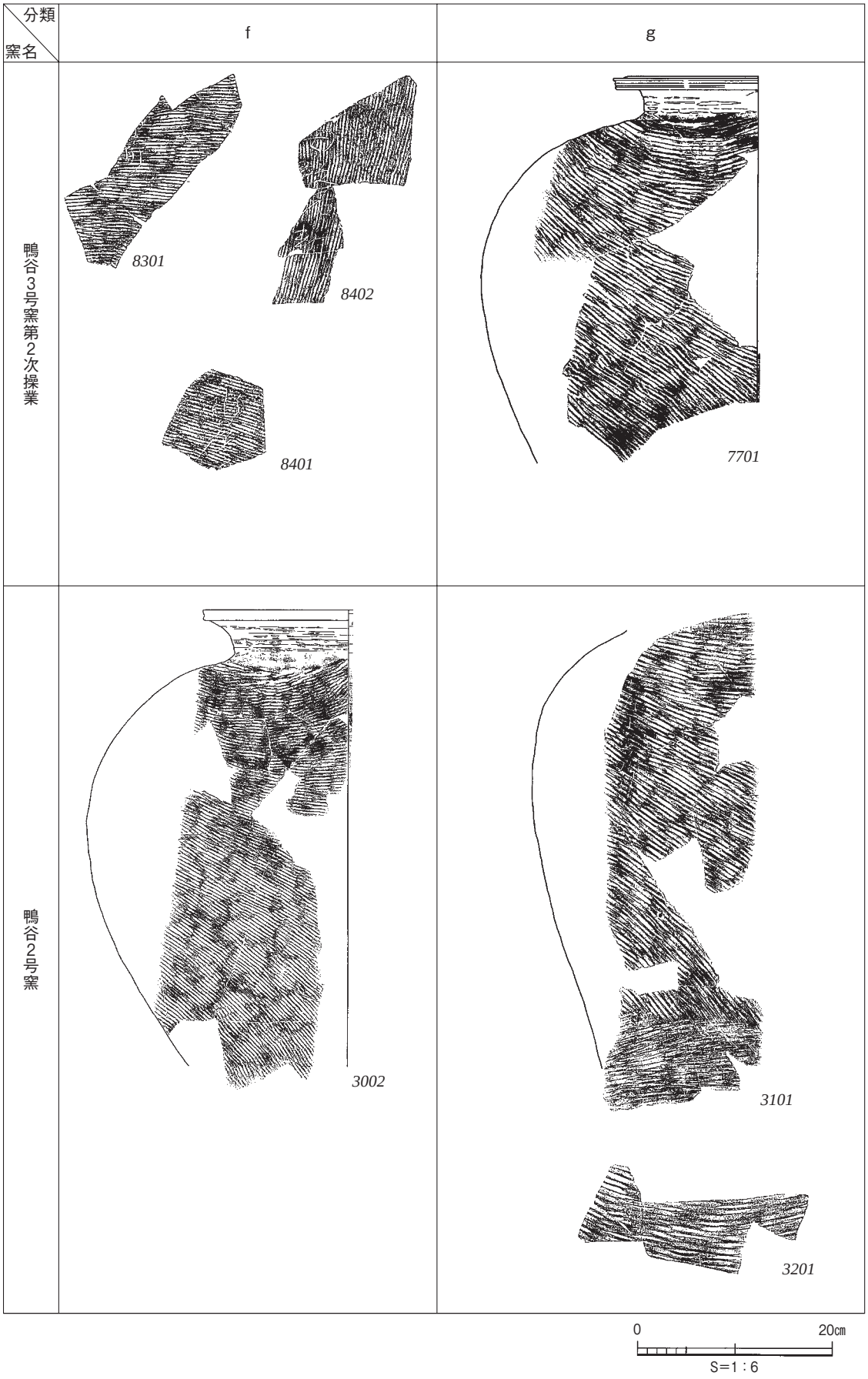
ｅ類は目の細かい格子の叩き目で、鴨谷３－１次窯の作業場土器溜まり、同３－２次窯体の第３床面埋土層出土甕に見られる。

ｆ類とｇ類はともに平行叩き目文で、横方向の条線はもたない。前者は溝幅が狭いのに対して、後者のそれは幅が広く、ともに鴨谷３－２次窯体・灰原、鴨谷２号窯の大半の甕に見られる。但し、鴨谷３号窯第１次操業灰原からｆ類とｇ類の可能性のある甕破片（*5001*・*5003*）も出土している。

以上が、ａ類からｆ類の叩き目の概要である。すでに述べた通り、実測遺物を中心に特徴的な文様を抽出したものであり、出土すべてにあたったものではないという制約はあるが、上記の点から次のことが指摘できる。まず、ａ類・ｂ類が鴨谷１号窯から鴨谷３－２次窯体にまで、ｃ類が鴨谷１号窯と鴨谷３－１次窯操業段階までそれぞれ認められることは、鴨谷３－１次窯・２次業での甕の製作にあたって鴨谷１号窯と同じ叩き工具が継続使用されたことになり、両窯の生産の連続性を示す。また、ｇ類とｆ類についても鴨谷３－２次窯と鴨谷２号窯双方に認められるので、同じく鴨谷３－２次窯と鴨谷２号窯の生産の連続性を示す。従って、鴨谷１号窯から鴨谷３－１次窯・２次窯、鴨谷２号窯までの操業が１本の線でつながることになる。この３基４時期の窯の操業列の間に別窯がはいる可能性もないわけではないが、複数種の叩き工具がそれぞれの窯に引き継がれている状況からはやや難しいように思われる。また、梟谷１号窯の甕については２号窯の甕の叩き目と同じ種類の叩き目をもつが、明確に同一とは断定できない。



第18図の１　神出鴨谷・臯谷支群出土甕叩き原体比較図１



第18図の２　神出鴨谷・臯谷支群出土甕叩き原体比較図２

２．出土須恵器の特徴と変化

今回の調査では４基の窯跡から５時期の遺物が出土している。窯跡出土の遺物の様相はヘラ切りを主体とした古代的器種を保持している窯跡と瓷器系器種を主体とした器種構成をもつ窯跡および中世窯業への萌芽的器種をもつ３つの形が認められる。これら遺物の様相から、操業の年代を順に並べると、鴨谷１号窯→同３号窯第１次操業（以下鴨谷３－１次窯と略）→同３号窯第２次操業（以下鴨谷３－２次窯と略）→同２号窯→梟谷１号窯となり、梟谷１号窯を除く鴨谷１号窯以下の窯は先項で述べた甕の叩き工具の継続使用の点から連続した時間の中で生産が行われたものと判断しており、ここでは時代的な変遷を踏まえて器種ごとに形態的特徴とその変化をみておきたい。

杯・椀類の変化

古代的器種残存の代表的器種としては杯Bが上げられるが、鴨谷１号窯･鴨谷３－１次窯出土の杯Bはともに蓋を伴っていない。器形的には口径に対して底径が小さくなるという椀形の特徴が顕著であり、杯Bとしての最終末段階に位置づけられる。鴨谷１号窯と鴨谷３－１次窯の杯Bを比較すると、鴨谷３－１次窯の方が口径に対して底径が小さく体部の湾曲化が顕著であり、椀Ahに近い形態となっている。

瓷器系の標識器種としては椀Aと椀Cがある。椀Aについては、高台が高く、体部が丸みをもつという特徴がある。鴨谷１号窯では体部に削り出しの段のある２類の椀Ah2のみで、椀Ah1は確認できない。鴨谷３－１次窯段階では椀Ah1、椀Ah2ともに存在する。鴨谷３－２次窯段階になると糸切り手法が導入され、糸切り底に輪高台が付される。沈線をもたない椀Ai1と沈線をもつ椀Ai2ともに存在するが、体部の丸みが強くなり、体部中央の削り出しの段は沈線に変化する。椀Ai1･椀Ai2ともに鴨谷２号窯段階にも存在するが、椀C類が主体となり、数は激減する。また、梟谷１号窯においても椀Aiはごく少量出土しており、わずかながらも生産が行われている。但し、梟谷１号窯出土の椀Aiは底部のみで、体部全体を知ることができるものはなく、底部片が１類のものであるか２類のものであるかは不明である。

平高台をもつ椀Cは鴨谷１号窯においてごく少量認められる。鴨谷１号窯出土の椀Chはすべてヘラ切りの椀Chであるが、この椀Chは続く鴨谷３－１次窯の灰層等からは発見されていない。椀Cは鴨谷３－２次窯段階になるとすべて糸切りの椀Ciに替わり、以後、椀の主体器種となる。沈線をもたない椀Ci1と沈線をもつ椀Ci2ともに存在するが、椀Ci1は小型で体部が直線的であるのに対して、椀Ci2は大型で丸みをもつ。高台側面については、３－２次窯段階ではヘラやナデによって調整が行われ断面が台形状を呈するが、鴨谷２号窯段階になると、高台は低く、側面の調整はなくなり、糸切りによる粘土のはみ出しのままの状態のものが数多く見られるようになる。梟谷１号窯では高台の意識が一層希薄となり、省略化の傾向はいっそう顕著になる。

杯・皿類の変化

杯Bとともに７・８世紀の供膳具の代表的器種である平底の杯Ahは鴨谷１号窯から鴨谷３－２次窯の最終段階まで存続するが、鴨谷３－２次窯最終操業段階では糸切りの杯Aiに替わる。この杯Aiは小型のもので、底径が小さい。鴨谷２号窯段階になると、この杯Aiを原形として小皿Aiが出現し、以降神出窯の中心器種の１つとなる。

台付皿Aは鴨谷１号窯段階ではヘラ切りの底部に輪高台を付す。鴨谷３－２次窯段階では糸切りの底部に輪高台を付し、小型化する。また、糸切り平高台の台付皿Ciは鴨谷３－２次窯段階から出現する。小型である。底部内面に段をもつ托状形皿Ciは梟谷１号窯のみ出土している。

壺Nの変化

鴨谷１号窯では突帯をもつ壺ＮⅡ2ともたない壺ＮⅠの両者が認められる。壺ＮⅠは３号窯第２次操業窯体中から出土しているが、次の鴨谷２号窯には出土がない。一方、壺ＮⅡ2は３号窯第１次、第２次、鴨谷２号窯に認められるが、時代が下るにつれて、体部の調整が粗くなり、また、口縁部が大きく開くようになる。底部は円盤作りで、底部周縁部のみヘラ切りを行った後、中心部に向けてヘラを差し込んで製品を轆轤からはずしている。壺ＮⅡ2は梟谷１号窯段階では突帯が２本から１本となり、底部の切り離しは糸切り手法に替わる。この段階の壺を壺ＮⅢとして壺ＮⅡ2とは区分した。

鉢Dの変化

神出窯を代表する片口鉢の鉢は鴨谷１号窯の鉢ＤⅠを祖形として形態変化したものである。鴨谷３－１次窯段階では鉢ＤⅠの底部形態が輪高台から糸切りの平高台に替わり、同時に器壁が厚くなる。この段階のものを鉢ＤⅡ1として区分した。この鉢ＤⅡ1は２号窯にも存続するが、少量であり、替わりに口径を広くした鉢ＤⅡ2aが出現し、鴨谷２号窯の鉢の主体を占める。但し、この鉢ＤⅡ2aはＤⅡ1とは異なり、片口を設けていない。片口をもつ鉢ＤⅡ2bの出現は梟谷１号窯段階に入ってからであり、以後、神出窯の代表的器種となる。

甕の変化

短く立ち上がる甕Bおよび広口の甕Cは鴨谷１号窯のみに認められる。甕Aは口縁部が大きく外反する甕で、４基の窯に認められるが、時代が下るにつれて口縁部が次第に水平に開く傾向を示す。口縁端部は上方につまみあげるタイプのものと下方に引き出すものがあり、この２つのタイプは鴨谷２号窯段階まで続く。甕の生産は鴨谷３号窯以降量産化の傾向が顕著である。鴨谷３号窯・鴨谷２号窯では口径20㎝～30㎝の小型甕、30㎝～35㎝の中型甕、35㎝～40㎝前後の大型甕を生産しているが、中型甕、大型甕の比率が高い。なお、３号窯における甕の出土量は遺物コンテナ約250箱に達し、３号窯全体の遺物量（約300箱）のおよそ85％を占める。

その他の器種の変化

古代の残存器種としては平瓶と水瓶・壺Lがある。平瓶は鴨谷１号窯からの出土のみである。水瓶は鴨谷３号窯段階まで存続する。壺Lは全体が復元できたものがないので変化については辿るのは難しいが、鴨谷３号窯の*7313*と鴨谷２号窯の*2101*が壺Lとすると大きく形を変えていることになる。また、風字硯（二面硯）が鴨谷３号窯以降の窯に認められる。

３．出土須恵器の年代について

（１）播磨地域周辺における瓷器系器種の導入期の様相

播磨は平安時代における一大須恵器生産地であり、多くの窯跡群が所在している。ここでは播磨各地の資料との比較を通して、神出鴨谷１号窯～３号窯および梟谷１号窯の操業年代を検討したい。

第29図は各地の瓷器系器種の初現期の資料を一覧にしたものである。この図をみると２つのパターンがあることがわかる。１つは杯B蓋の残存期に瓷器系器種が導入される相野窯跡群（岡崎他1992年）・相生窯跡群（森内1995年）パターンであり、もう１つは杯B蓋の消失後に瓷器系器種が導入される志方窯跡群（森内他2000年・森内他2001年）・神出窯跡群パターンである。この２パターンの存在について、（１）杯B蓋等の旧来の器種を遅くまで保持している地域と旧来の器種の一部を早くに放棄した地域という地

域差と考えるか、(２)瓷器系器種の導入時期に違いあるという時期差と考えるかという２通りの考え方ができる。ここでは、こうした２つの考えができるということを前提として瓷器系須恵器の出現期の様相から検討しておきたい。

まず、相野窯跡群・相生窯跡群パターンについてみておく。相野窯跡群（以下、相野窯と略）は三田市に所在する窯跡群で、旧摂津国に属するが、丹波・播磨との国境に位置する。相生窯跡群（以下、相生窯と略）は播磨西部の相生市から龍野市の丘陵部に分布する窯跡群である。瓷器系器種の導入期の窯跡としては、相野窯では向上・古城１号窯、相生窯では西後明23号窯・同41号窯がある。ともに瓷器系器種の導入初期段階では同じ器種様相を示すが、その後の展開は以下の通り、異なる様相を呈する。

(１)平高台をもつ椀Cについては相野窯・相生窯ともに、導入期には糸切り技法も同時にもたらされるが、相野窯では向上・古城１号窯段階において、糸切り技法が導入されたにもかかわらずヘラ切り技法を用い、以降の窯もヘラ切り手法を踏襲し、糸切り技法は採用されていない。これに対して、相生窯では西後明23号窯の糸切りグループと西後明41号窯のヘラ切りグループの２つが併存するが、やがてすべて糸切りとなる。

(２)体部中央に削り出しの段・沈線をもつ２類の椀Ch2･Ci2は相野窯では向上・古城１号窯から一貫して生産され、中心器種の１つとなっているが、相生窯では緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯など糸切り初期段階の窯にごく少量存在するのみで、ほとんど生産されていない。体部中央に突帯を巡らす突帯椀（３類）は相野窯では向上・古城１号窯段階に存在（椀Ai3）し、最終段階まで存続するもののごく少量の生産にとどまっているのに対して、相生窯での初現（椀Ci3）は緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯と時期的にやや下るものの、以後、相生の特徴的な器種となる。沈線をもつ２類の椀と突帯をもつ３類の椀は恐らく金属器写し、あるいは仏具（二器）を祖形として出現したと思われるが、その後の展開は沈線を主体とする相野窯と突帯を主体とする相生窯と２つの地域の窯群に分かれることになる。

次に、志方窯跡群（以下、志方窯と略する）と神出窯跡群（以下、神出窯と略する）の初現期の瓷器系器種の様相について検討する。両窯群における瓷器系の椀Cの初現窯は志方窯においては中谷２号窯・３号窯、神出窯では鴨谷１号窯である。志方窯の中谷２号窯・３号窯ではヘラ切りと糸切りが併用され、志方窯では以降の窯も糸切りとヘラ切り技法を併用している。これに対して、神出窯では鴨谷１号窯ではヘラ切り技法を踏襲しているが、鴨谷３－２号窯以降すべて糸切りに変わる。次に、器種についてみると志方窯・神出窯ともに椀Cの体部に沈線または段を有しない１類と有する２類が存在するが、志方窯の中谷２号・３号窯の２類は削りだしの段であるのに対して、鴨谷３－２次窯の２類は沈線である。椀Aの初現は、志方窯では投松２号２次操業窯、神出窯では鴨谷１号窯であるが、神出窯においては糸切り導入後の鴨谷３－２次窯以降は次第に数を減じる傾向にある。また、投松２号第２次操業窯・神出窯ともに椀A体部に沈線または削り出しの段を有する２類が存在するが、神出窯では、鴨谷１号窯･鴨谷３－１次窯段階までは削り出しの段で、以降は沈線となる。投松２号２次操業窯の場合は沈線である。

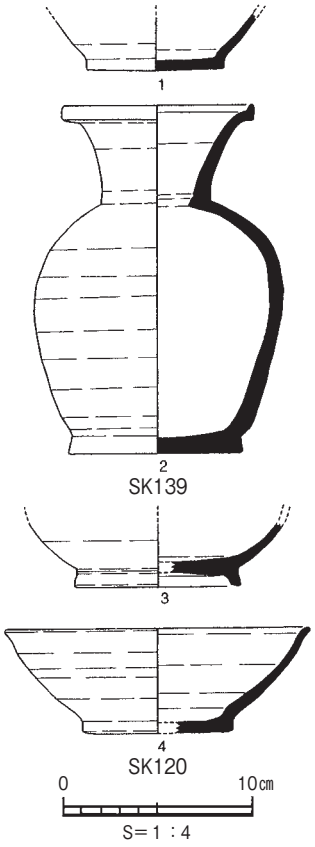
以上が瓷器系器種導入期の様相である。上記の通り、沈線を主体とする相野窯と突帯を主体とする相生窯と２つの地域の窯群に分かれるが、志方窯、神出窯は沈線を有する２類の椀が中心であり、３類の突帯椀Ai3類の存在はないので、この２つの窯群は相野系の窯群といえる。そこで、以下、瓷器系器種導入期の相野窯と志方窯および神出窯の器種比較を通して並行関係を見ておきたい。志方窯の投松２号第２次操業窯の器種としては杯B、椀Ai2があるが、杯B蓋は存在しない。平高台の椀C類は含まれていな

いが、器種構成は古城山１号窯と共通する。次の中谷２号窯・３号窯は杯Bと椀Cが併存するが、椀Cには糸切り（椀Ci）・ヘラ切り（椀Ch）の両者が存在し、椀Ci体部には削り出しの段をもつ２類も含まれている。器種構成は相野窯の古城１号窯と共通する。一方、神出窯では鴨谷１号窯と鴨谷３－１次窯が古城山１号窯とほぼ同じ器種構成をもち、続く鴨谷３－２次窯は相野窯のヘラ切りに対して、糸切りという違いはあるが、古城１号窯と共通する器種構成をもつ。

（２）遺物からみた神出窯操業年代の検討

相野窯における須恵器編年では、向上・古城１号窯が９世紀第４四半期、古城山１号窯が10世紀第１四半期、古城１号窯が10世紀第２四半期の年代比定が行われている。志方窯の投松２号２次操業窯・神出窯の鴨谷１号窯と古城山１号窯に併行関係があると考えると10世紀第１四半期頃、続く志方窯の中谷２号窯・３号窯・神出窯鴨谷３号第２次操業窯と古城１号窯が併行関係にあると考えると10世紀第２四半期頃の年代がそれぞれ与えられるが、志方窯と神出窯の並行関係、あるいは相生窯・東播北部窯を含めてのクロスチェックを充分行っていないので、現時点では１つの目安に過ぎない。

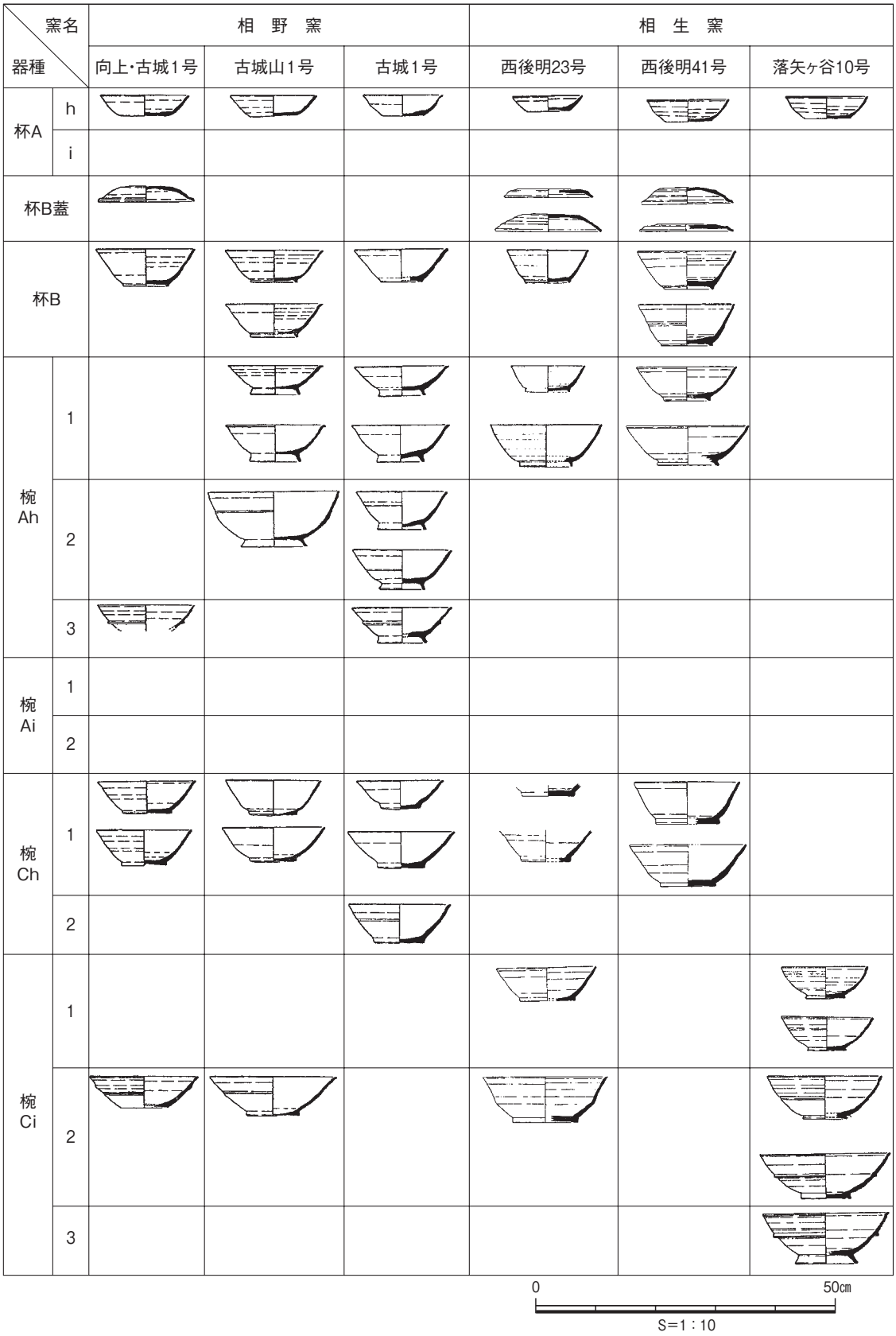
ところで、近年調査が行われた神戸市内の日輪寺遺跡において（吉川2008年）SK120とSK139から第19図に示した年代の参考となる遺物が出土している。SK139からはヘラ切りの平高台をもつ土師器椀⑴と須恵器壺⑵とともに初鋳が907年の「延喜通宝」の可能性の高い銭貨が出土している。また、SK120から緑釉陶器⑶とヘラ切り平高台をもつ須恵器椀⑷が出土している。調査報告書ではともに10世紀代前半の可能性が高いと報告されている。日輪寺遺跡は神出窯を南にわずかに下ったところにある。このうち壺⑵については神出産と見なすことも可能であるが、椀⑷については、形態的には鴨谷１号窯のものよりは、定形化した志方窯の中谷２・３号窯の方が近い。従って、もし須恵器椀⑷が中谷２・３号窯段階のものとすると、中谷２・３号窯段階の年代は10世紀前半頃に比定されることになる。従って、瓷器系器種導入期の鴨谷１号窯、志方窯中谷２・３号窯の操業時期については、およそ10世紀前葉を中心とする年代幅の中にあると思われる。いずれにせよ、年代の確定に至るには今後の資料の増加を待っての検討に委ねざるを得ない。



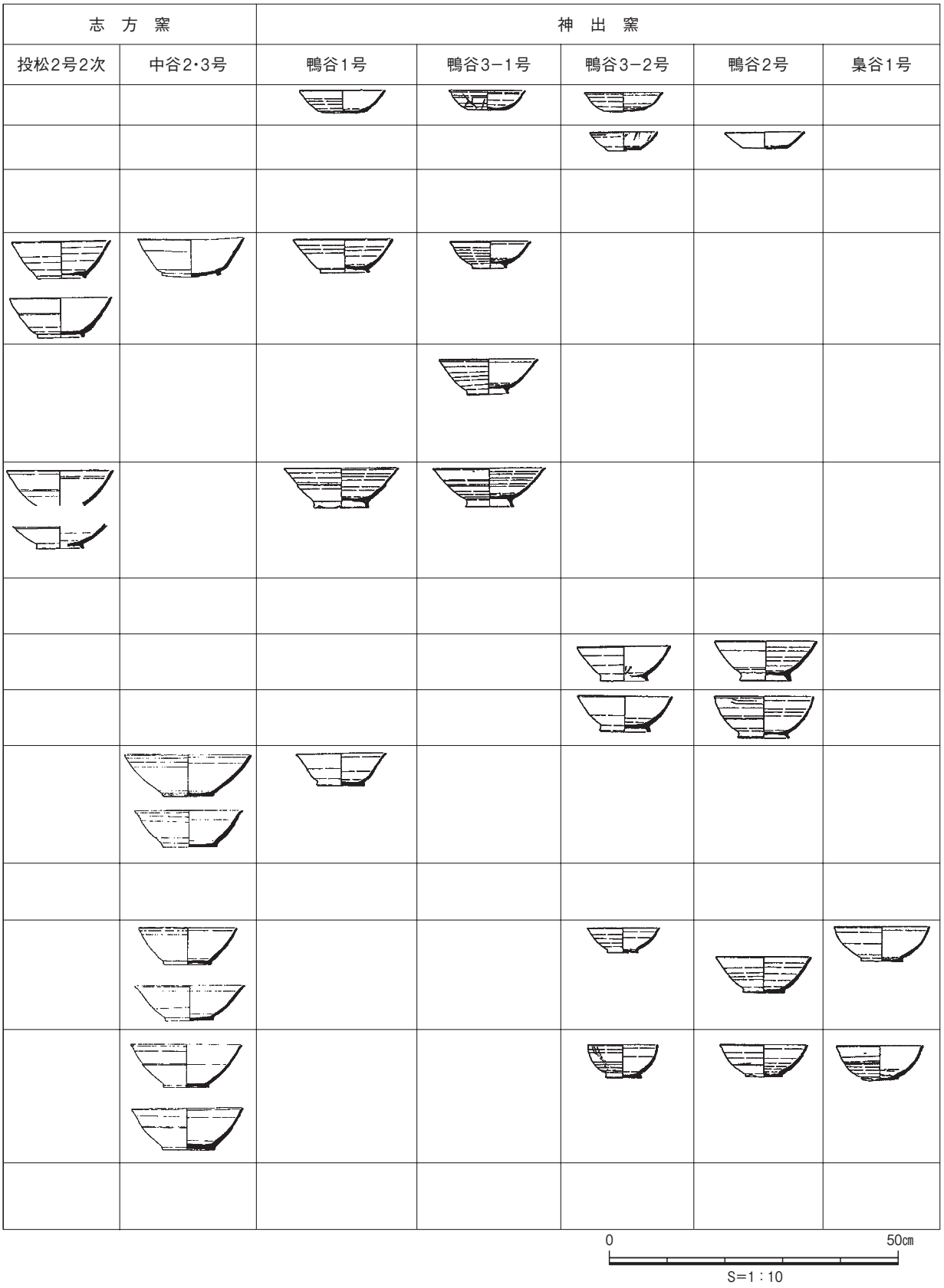
第19図　日輪寺出土遺物図
（吉川2008年）

また、鴨谷２号窯の操業年代については、鴨谷３号窯が10世紀中葉頃に中心年代があるとすると、生産の連続性から10世紀後葉から11世紀前後に中心年代が求められるが、出土瓦の年代が11世紀第３四半期とされており、須恵器の年代観と齟齬がある。但し、瓦については、鴨谷２号窯段階と特定できる資料は在地以外で出土しているのは平安宮朝堂院跡例１点のみである。須恵器から想定される年代との齟齬を考えると、延久４年（1172）造営時を遡る11世紀前半の時期である可能性を含めて、今後とも十分な検討が必要であろう。

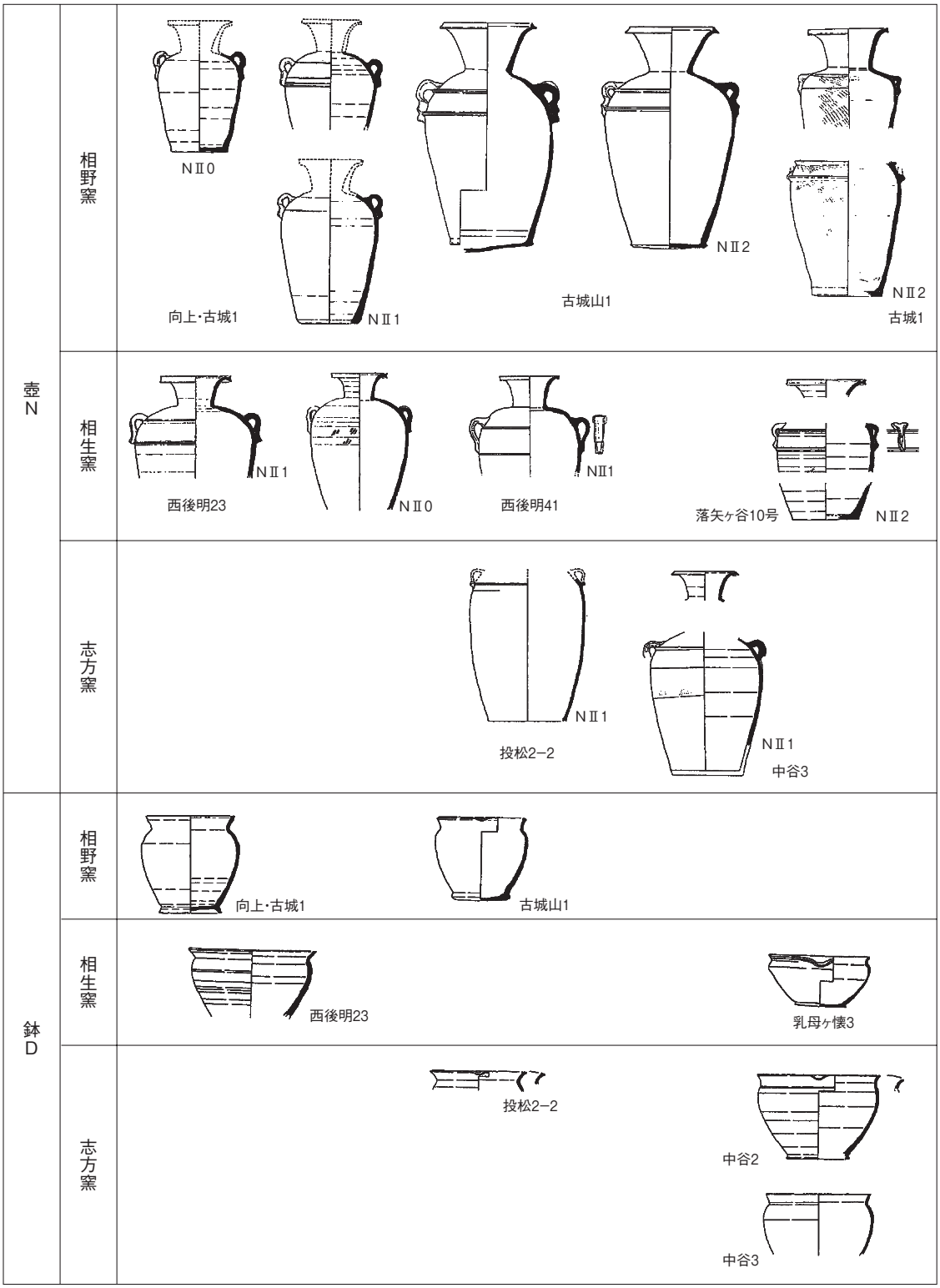
梟谷１号窯の操業年代については出土瓦と平安宮民部省跡出土瓦との同笵関係から12世紀初頭に求められることはほぼ確実で、須恵器の年代観とも齟齬はない。



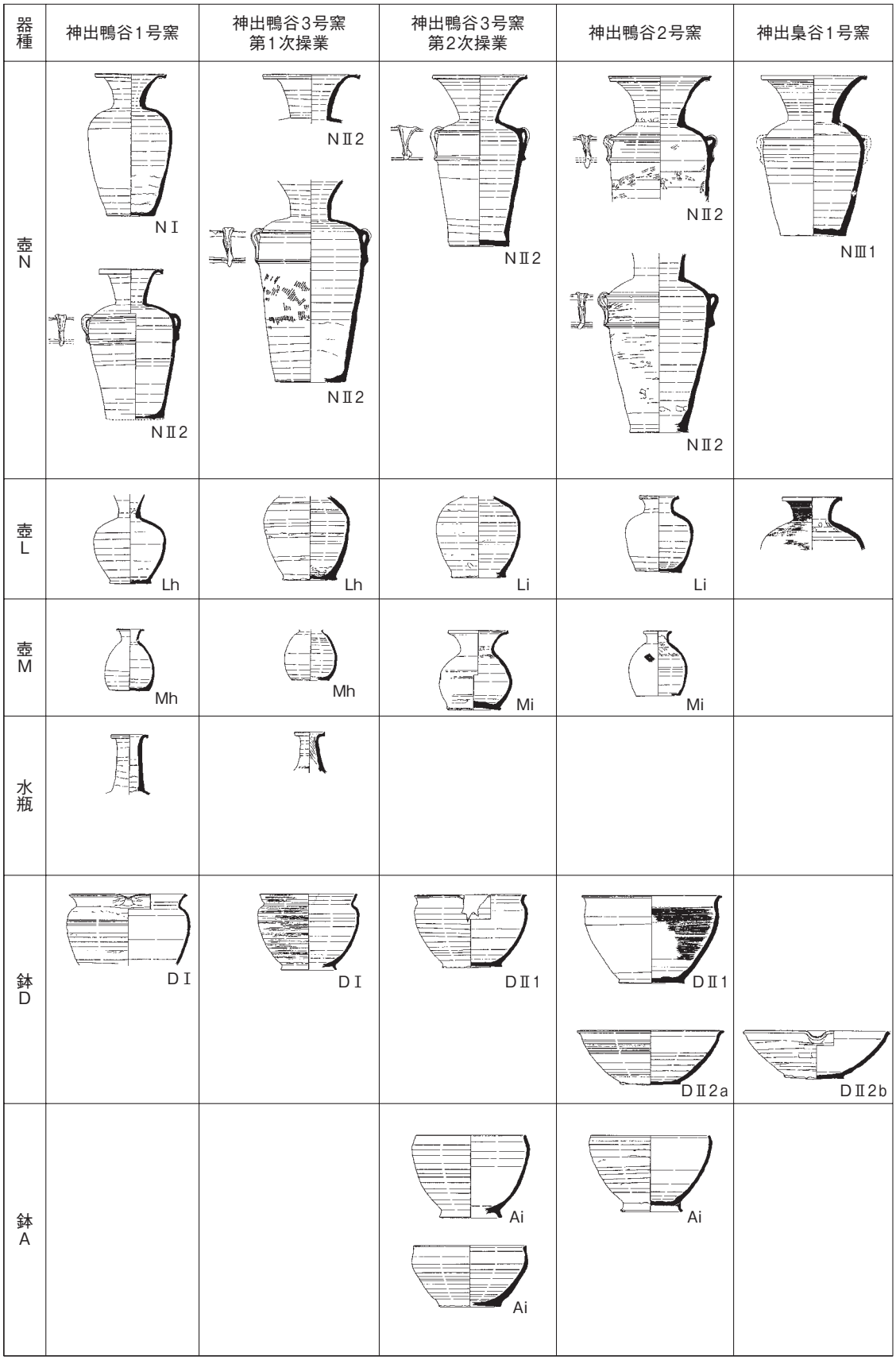
第20図の１　瓷器系須恵器比較図１



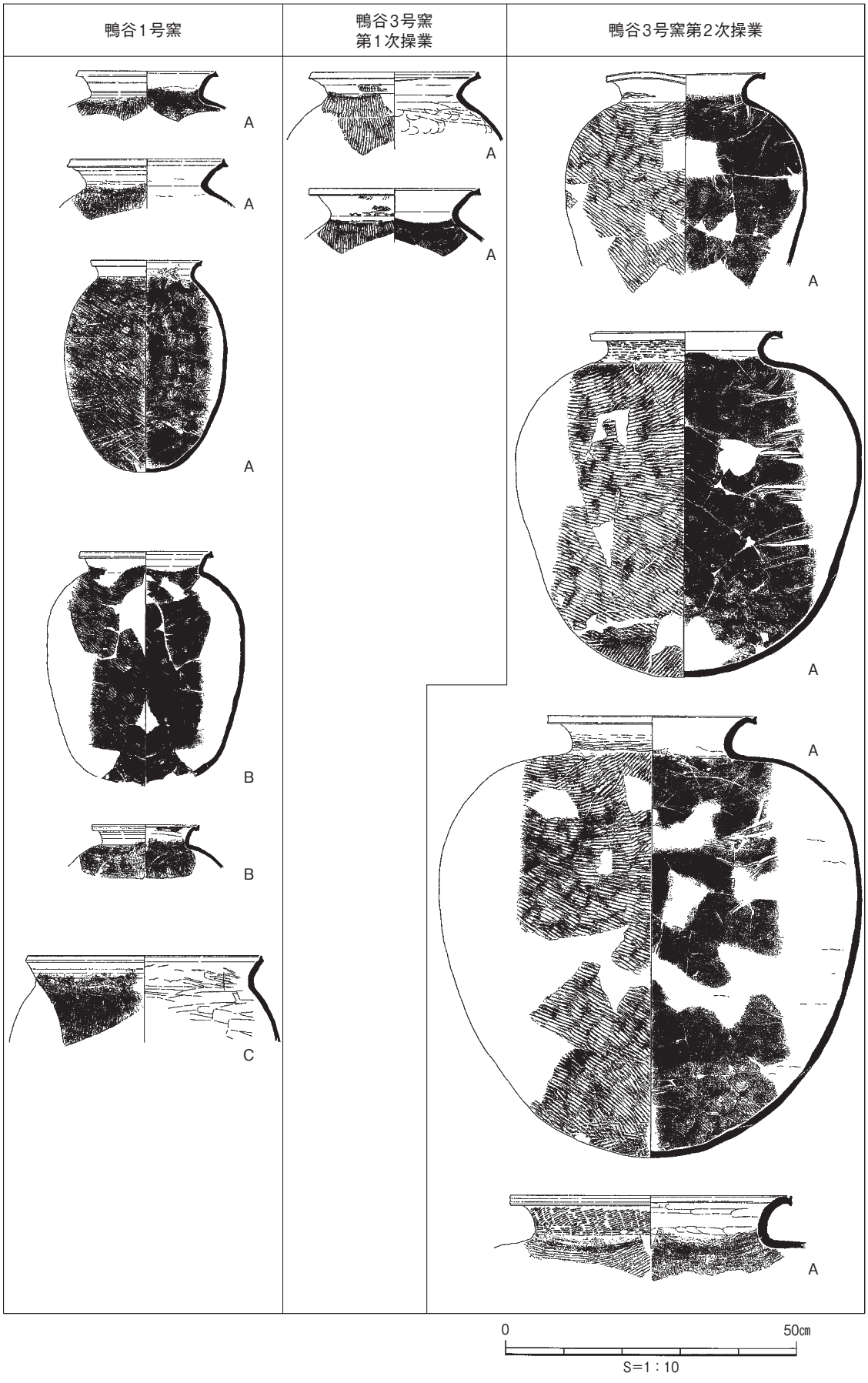
第20図の２　瓷器系須恵器比較図２



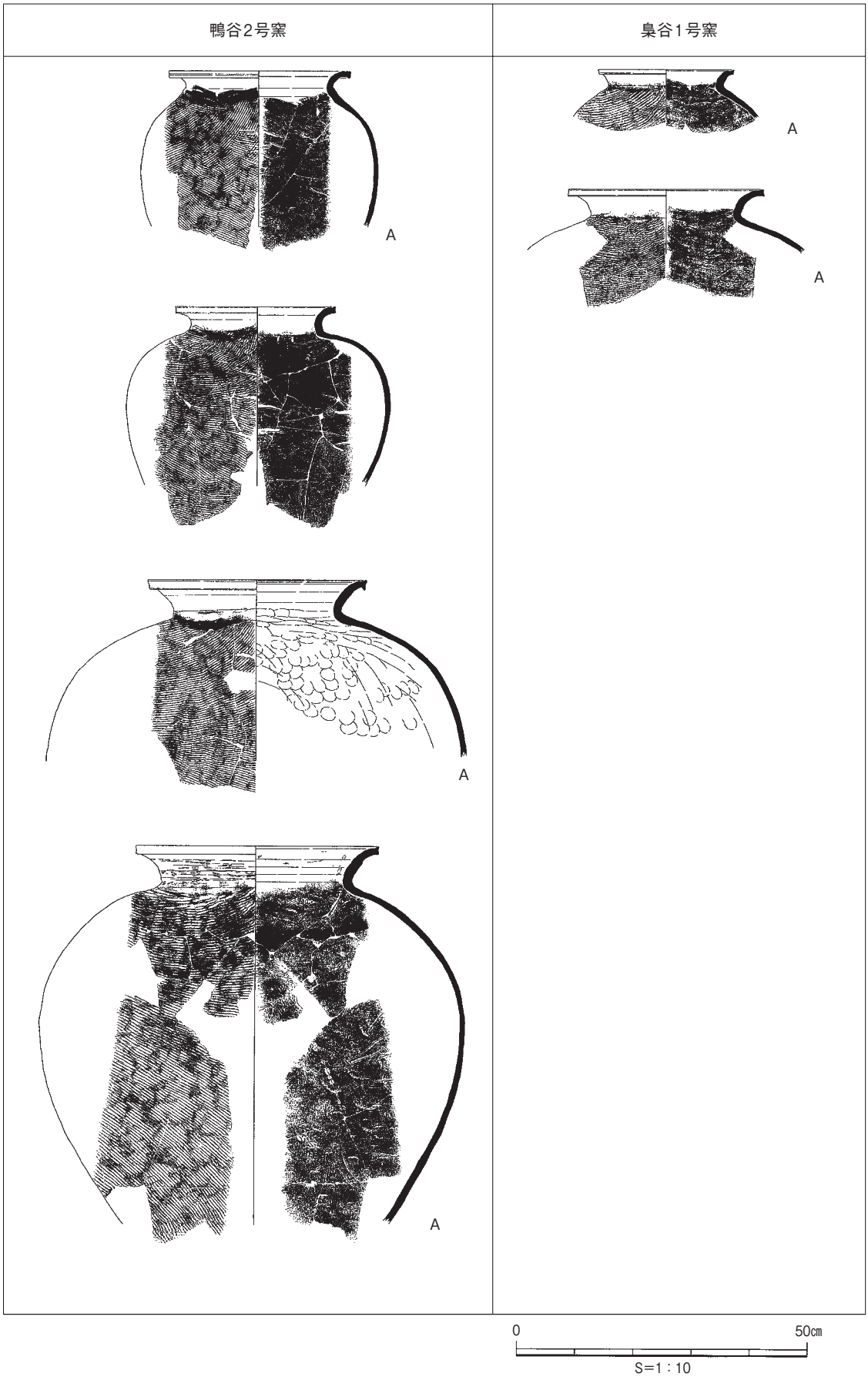
第21図の１　壺・鉢類比較図１



第21図の２　壺・鉢類比較図２



第22図の１　神出鴨谷支群・臬谷支群における甕の変化１



第22図の２　神出鴨谷支群・梟谷支群における甕の変化２

註１　本報告書に於ける器種分類名称と相野窯・志方窯・相生窯の報告書に於ける器種分類名称対比は以下の通りである。

神出杯B⇒相野：杯B、志方：（投松２号２次窯）椀a1・椀a2、相生：杯B

神出Ah1⇒相野：椀A、（志方椀a1）、相生椀A　　神出椀Ah2⇒相野：椀C３、志方：椀a2

神出椀Ai1⇒該当なし　神出椀Ai2⇒相野椀C３　　神出椀Ai3（該当なし）⇒相野：椀D、相生：突帯椀

神出椀Ch1⇒相野：椀B、志方：椀b　神出椀Ch2⇒相野：椀C１

神出椀Ci1⇒志方：椀C１、相生：椀C１　神出椀Ci2⇒相野：椀C２、志方：椀C２、相生：椀C２

註２　ＳＫ120について、吉川義彦氏によれば、出土遺物は周辺に散乱していた遺物が土坑内に再堆積した可能性が高いとされ、須恵器と緑釉陶器が同じ遺構から出土している点では貴重であるが、一括遺物とするには問題があると報告されている。

参考・引用文献

森内秀造・藤田淳『汁谷窯跡群・汁谷遺跡』兵庫県教育委員会 2006年

岡崎正雄他『相野古窯跡群』 兵庫県教育委員会　1992年

西口和彦・森内秀造『相生市・緑ヶ丘窯址群』 兵庫県教育委員会　1986

森内秀造『相生市・緑ヶ丘窯址群Ⅱ』兵庫県教育委員会　1995

森内秀造・仁尾一人・岡本一秀・高木芳文他『志方窯跡群Ⅰ－中谷支群－』兵庫県教育委員会 2000年

森内秀造・仁尾一人・岡本一秀他『志方窯跡群Ⅱ－投松支群－』兵庫県教育委員会 2001年

吉川義彦『日輪寺遺跡発掘調査報告書』2008年　関西文化財調査会

第３節　瓦の検討

瓦は鴨谷２号窯、鴨谷３号窯、梟谷１号窯で出土している。鴨谷２号墳では窯体と灰原から軒平瓦、丸瓦、平瓦が若干量出土している。鴨谷３号窯からは灰原から平瓦が１点のみ出土しているにすぎない。梟谷１号窯では焼成に失敗したようで、窯詰めのまま平瓦が窯体内に残存していた。丸瓦は階段の構築材として利用されていた。灰原からも丸瓦・平瓦が出土している。

出土した瓦には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦がある。これらの瓦の共通する特徴として、窖窯で焼成されているため、須恵器と同様に色調が青灰色で焼成が硬質のものが多い。

１．軒丸瓦

梟谷１号窯からしか出土していない。

瓦当文様は蓮華文のみである。１種類の文様の可能性が高いが、残存状況が良くないため弁数をはじめ詳細は判然としない。*9401*・*9502*は単弁か複弁かもはっきりしない。

9401　瓦当文様は蓮華文であるが、残存部は少ない。丸瓦部は凸面に縦方向の粗いナデ、凹面に回転ナデが施されている。窯体から出土したものである。

9501　瓦当文様は単弁蓮華文である。丸瓦部はⅡG類で、凸面に回転ナデ、凹面に縦方向ナデが施されている。灰原から出土したものである。

9502　瓦当文様は弁間の突線が存在しない部分があることから、複弁に見えるが、*9503*のように部分的に弁間の突線が存在しないものもあることから単弁蓮華文とも考えられる。灰原から出土したものである。

9503　瓦当文様は単弁蓮華文と考えられるが、弁間の突線が存在しない部分がある。瓦当裏面の縁部が盛り上がった部分にヘラケズリが施されている。灰原から出土したものである。

２．軒平瓦

鴨谷２号窯で２点、梟谷１号窯で４点出土している。瓦当部と平瓦部の接合は包み込み式である。

瓦当文様は２種類（ＮＨ１・２）確認できる。いずれも中心に縦線が入り、左右に唐草が展開する均

9501

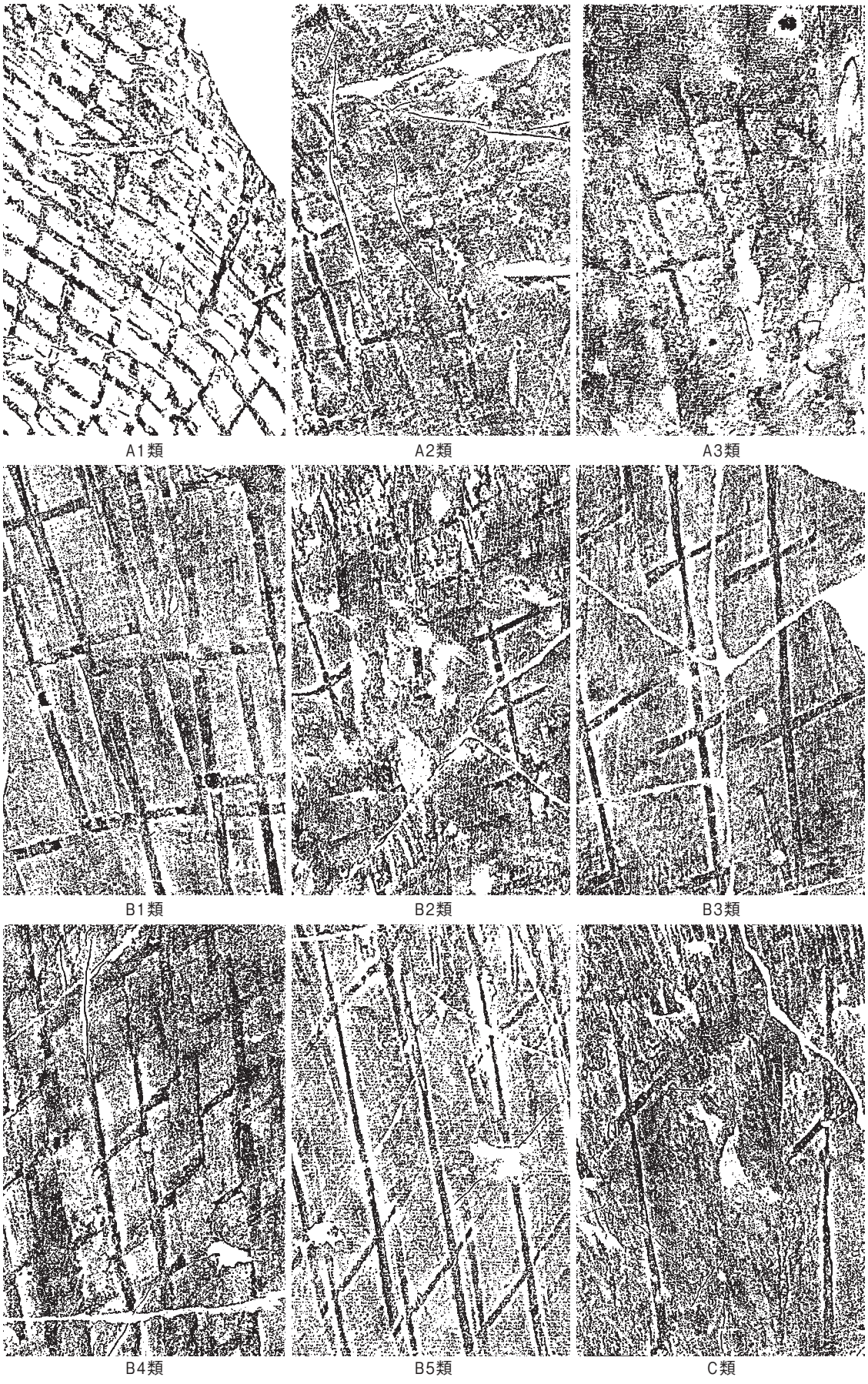
9502

9503

NH1

NH2

第23図　軒瓦の種類

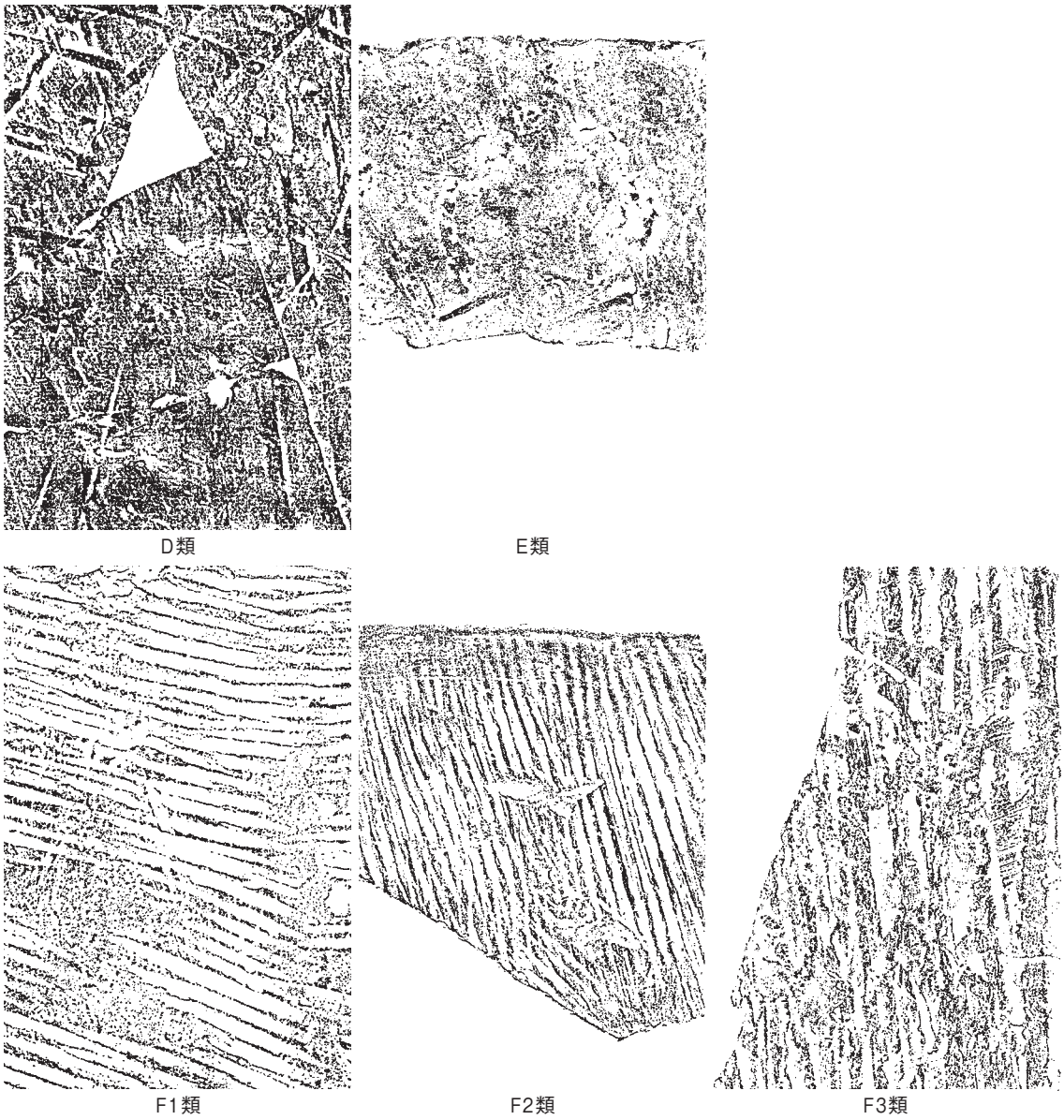


A1類　A2類　A3類

B1類　B2類　B3類

B4類　B5類　C類

第24図　タタキの種類1



第25図　タタキの種類２

整唐草文である。瓦当面の外周には界線が廻らされている。

ＮＨ１は中心から両方に３つの下向きの蕨手が配され、外側に３つの上向きの蕨手が連なっている。右半の文様にのみ点状の子葉が２箇所認められる。鴨谷２号窯（*3301・3302*）と梟谷１号窯（*9604*）で出土している。*3301・3302*は顎部下端、瓦当部上面にヘラケズリが施されている。接合する平瓦はⅡＦ１類である。

ＮＨ２は中心から両方に３つの下向きの蕨手が配され、外側に５つの上向きの蕨手が連なっている。梟谷１号窯灰原（*9601～9603*）でのみ出土している。顎部下端および瓦当上面に*9602・9603*はヘラケズリが施され、*9601*は横方向のナデが施されている。接合する平瓦は*9601*がⅡＢ３類、*9602*がⅡ類、*9603*がⅡＢ類である。

3．丸瓦・平瓦の分類

凹面、凸面に残存する痕跡により分類を行う。

凹面　布目の有無によって分類を行う。

Ⅰ類　凹面に布目が付着するもの。

Ⅱ類　凹面に布目が付かないもの。ナデが施されて、調整台の痕跡が消されるものも多いが、完全に消されているものは多くない。

凸面　施されるタタキの種類によって分類を行う。（第24・25図）

A類　格子タタキ　格子の形、大きさにより細分する。

Ａ１類　幅１㎝、長さ1.5㎝の斜格子

Ａ２類　幅1.2㎝、長さ2.2㎝の正格子

Ａ３類　幅２㎝、長さ2.4㎝の正格子

B類　十字タタキ　縦方向の直線に交差して横線が加えられるものである。横線は２本確認できるものが多い。横線の交差角度や線間の間隔などにより細分する。

Ｂ１類　横線は右下がりで、交差角度は80°である。横線の間隔はよく分からない。

Ｂ２類　横線は右上がりで、交差角度は80°である。線間は2.2㎝である。

Ｂ３類　横線は右上がりで、交差角度は70°である。横線は３本確認でき、線間は上が5.8㎝、下が5.0㎝である。

Ｂ４類　横線は右上がりで、交差角度は60°である。線間は3.2㎝である。

Ｂ５類　横線は右上がりで、交差角度は上の横線が60°、下の横線が45°である。線間は8.0㎝である。

C類　十字タタキ＋平行タタキ　平行タタキの後Ｂ５類の十字タタキが施される。

D類　×字タタキ＋平行タタキ　平行条線の上に×字が入れられたタタキである。

E類　一字タタキ　一文字状の線のみが確認できるタタキである。

F類　平行タタキ　平行タタキの間隔により細分する。

Ｆ１類　条線５本の幅が２㎝程度である。

Ｆ２類　条線５本の幅は1.6㎝である。

Ｆ３類　条線５本の幅は4.0㎝である。タタキ板は使用によりかなり乱れており、部分的に斜めの線が入れられている。

G類　無文　無文タタキが施されているものとナデが施されているものがあるが。明瞭に分別することは難しい。

4．丸瓦

平瓦に比べると丸瓦の出土数は少ない。梟谷１号窯の窯体床面の階段の構築材として利用されたものが多い。全て玉縁式で、玉縁部は回転ナデが施されている。丸瓦部は側面部内縁が接地するものがほとんどで、側面が接地するものはわずかである。長さ33㎝前後のものが多い。最小は長29.3㎝、最大は37.0㎝である。

鴨谷２号窯

出土した丸瓦は非常に少ない。灰原から出土したもののみで、ⅡG類のみである。

ⅡG類（*3303・3304*） *3303*は丸瓦部凸面に無文タタキと思われる痕跡、丸瓦部凹面に調整台（あるいは内型）の痕跡が認められる。*3304*は丸瓦部凹凸面に横方向のナデが施されている。玉縁部に釘孔が穿たれていることから軒丸瓦の丸瓦部である可能性が高い。

梟谷１号窯

窯体　　窯体床面の階段の構築材として利用されたものが多い。

ⅠＢ３類（*9702*） 丸瓦部側面・丸瓦部端面はヘラケズリが施されている。布目は１㎝に10本程度である。

ⅠＢ４類（*9701*） 丸瓦部凸面はタタキの後ナデられており、指紋が付着している。丸瓦部側面はヘラケズリ後ナデ、丸瓦部端面はヘラケズリが施されている。布目は粗く１㎝に５・６本程度である。

ⅡＡ２類（*10001・10002・10101・10102*） 丸瓦部凸面はタタキの後ナデられている。凹面は中央付近に縦方向のナデが施され、側縁付近に調整台の板の痕跡が残っている。*10101・10102*では丸瓦部上端に調整台の端の型がくっきりと見られる。丸瓦部側面・丸瓦部端面はヘラケズリ後ナデが施されたものが多い。

ⅡＢ３類（*10201*） 凹面は横方向ナデ後、中央付近に縦方向のナデが施され、側縁付近に調整台の板の痕跡が残っている。丸瓦部側面はヘラケズリ後ナデが施されている。丸瓦部端面は粗くナデが施され、雑な仕上げである。

ⅡD類（*9801・9802・9901・9902*） 丸瓦部凸面はタタキの後ナデられている。凹面は調整台の板の痕跡が残り、*9802・9901*は粘土紐の接合痕が認められる。丸瓦部側面・丸瓦部端面はヘラケズリが施された後、縁部にナデを施したものが多い。

ⅡＦ２類（*10202*） 凹面は横方向ナデ後、中央付近に縦方向のナデが施され、側縁付近に調整台の板の痕跡が残っている。丸瓦部側面・丸瓦部端面はヘラケズリ後ナデが施されている。

ⅡG類（*10301・10302・10401*） 凹凸面とも縦方向のナデが施されている。丸瓦部側面・丸瓦部端面はヘラケズリ後ナデが施されている。

灰原

ⅠＢ１類（*10601*） 丸瓦部側面はヘラケズリが施され、内外縁は縦方向のナデが施されている。丸瓦部端面はナデが施され、内縁に面取りが施されている。布目は１㎝に６・７本程度である。

ⅠＢ３類（*10501～10503*） 丸瓦部側面はヘラケズリが施されている。布目は１㎝に６・７本程度である。

ⅠG類（*10602・10603*） 凸面は無文タタキで木目が残る。*10602*は凹面の玉縁に近い部分に一部ナデが施された部分がある。丸瓦部側面はヘラケズリが施され、内外縁は縦方向のナデが施されている。丸瓦部端面は横方向のナデが施されている。布目は１ ㎝に13本程度である。*10603*は丸瓦部側面にヘラケズリが施され、内外縁は面取りがなされている。

ⅡＢ１類（*10701*） 凹面は横方向のナデが施され、丸瓦部の上端には型の痕跡がくっきりと付いている。丸瓦部側面はヘラケズリ後ナデが施され、内外縁は縦方向のナデが施されている。

ⅡＦ２類（*10702・10703*） 丸瓦部側面はヘラケズリ後ナデが施され、内外縁は縦方向のナデが施されている。*10702*は凹面に横方向のナデ、*10703*は凹面に縦方向のナデが施されている。

ⅡG類（*10801・10802*） *10801*の凸面の筋状の痕跡は無文タタキの木目と思われる。凹面は横方向のナデ後縦方向のナデが施されている。一部ではさらにその上から横方向のナデが施されている。丸瓦部端面は横方向のナデが施されている。丸瓦部側面はヘラケズリ後ナデが施され、内外縁は縦方向のナデが施されている。*10802*の凹凸面は縦方向のナデが施されている。丸瓦部端面は横方向のナデが施されている。丸瓦部側面はヘラケズリ後ナデが施され、内外縁は縦方向のナデが施されている。

5．平瓦

丸瓦に比べると平瓦の出土数は多い。鴨谷２号窯、鴨谷３号窯、梟谷１号窯から出土している。鴨谷３号窯からは灰原から１点のみの出土である。鴨谷２号窯からは窯体と灰原から出土しているが、良好な個体は少なく、量も多くない。梟谷１号窯では窯体内に一部窯詰めのまま平瓦が放棄された状態で出土していたため、良好な個体が非常に多い。長さは31㎝台、幅24㎝前後のものが多い。

鴨谷３号窯

灰原　　灰原から１点出土している。

ＩＦ３類（*4811*） 端面・両端縁・側面・両側縁にヘラケズリが施されている。布目は１㎝に７～８本程度である。

鴨谷２号窯

窯体　　窯体内から出土した平瓦は少ない。

ＩＡ１類（*3401*） 端面・凹面側端縁・側面・凹面側側縁にヘラケズリが施されている。布目は１㎝に６本程度である。

ＩＦ３類（*3402*） 端面・凹面側端縁・側面・凹面側側縁・凸面側側縁にヘラケズリが施されている。布目は１㎝に５～７本程度である。

ⅡＦ１類（*3501*） 端部はヘラケズリが施されている。

ⅡG類（*3502・3503*） *3502*は凸面にタタキ後ナデが施され、凹面には調整台の木目の痕跡が認められる。側面にヘラケズリが施されている。*3503*は凸面にナデが施され、凹面にはナデが施され、調整台の木目の痕跡はほとんど認められない。側面・端面にヘラケズリが施されている。

灰原　　若干量の遺物は出土しているが、良好な個体はほとんどない。

ＩＡ１類（*3603*） 側面･凹面側側縁にヘラケズリが施されている。布目は１㎝に４～７本程度である。

ＩＦ３類（*3601・3602*） 端面・凹面側端縁・側面・凹面側側縁・凸面側側縁にヘラケズリが施されている。布目は１㎝に６～８本程度である。

ⅡＦ１類（*3604・3605・3701・3702・3704・3705・3801～3804・3901～3903・4001～4003*） 凹面はヨコナデが施されている。調整台に彫られた斜め方向の線の痕跡が残るものも多く認められる（*3604・3605・3701・3702・3704・3801～3804*）。側面・端面にはヘラケズリが施されているが、調整時にケズリの面がたわんだり、おしつぶされたものが多く認められる。側縁・端縁を面取りしたものはほとんどなく、端面にケズリ後ヨコナデが施されたものがある（*3704・3803*）。

ⅡＦ２類（*3703・3903*） 側面・端面にはヘラケズリが施されている。*3703*は凹面にヨコナデ後、側面

寄りタテナデが施されている。*3903*は凹面にヨコナデ後、側面寄りタテナデが施されている。

ⅡE類（*4004・4005*） 側面・端面にはヘラケズリが施されている。側面のヘラケズリがやや上方を向いているのが特徴的である。*4004*は凹面に調整台に彫られた斜め方向の線の痕跡が残り、*4005*はタテナデが施されている。

ⅡG類（*4101～4103・4201～4203*） 側面・端面にはヘラケズリが施されている。凸面は無文タタキの痕跡が残るものが多く、凹面には調整台の木目痕の上にタテもしくは斜め方向のナデが施されているものが多い。

梟谷１号窯

窯体　　窯体内に一部窯詰めのまま平瓦が放棄された状態で出土していたため、良好な個体が非常に多い。縦方向や粘土紐の接合痕にそって横方向に裂けたものが多く見られる。温度の急激な変化によりひずんだためと思われる。Ⅰ類は非常に少ない。

ⅠＢ２類（*10901*） 凹面は布目の後、部分的にナデが施されている。端部は明瞭な面をもたず、丸味をもち、ヨコナデが施されている。側面はヘラケズリが施されている。布目は１㎝に11・12本程度である。

ⅠG類（*10902*） 凸面はやや荒れた木目の無文タタキである。端部は明瞭な面をもたず、丸味をもち、ヨコナデが施されている。側面はヘラケズリが施されている。布目は１㎝に９～11本程度である。

ⅡＢ３類（*11001・11002・11101・11102・11201・11202・11301・11302・11401・11402・11501・11502・11601・11602・11701*） 凹面にはヨコナデ後、調整台の木目の痕跡が認められる。端部は上側が明瞭な面をもたず、丸味をもち、ヨコナデが施されて、下側は明瞭な面をなし、ヨコナデが施されている。側面はヘラケズリの後側縁部にナデが施されたものが多い。

ⅡＢ５類（*11702・11801・11802・11901・11902・12001・12002・12101・12102・12201・12202・12301・12302*） 技法的な特徴はⅡＢ３類と同様である。

ⅡC類（*12401・12402*） Ｆ２類の平行タタキの後にＢ５類の十字タタキで叩いたものと思われる。技法的な特徴はほぼⅡＢ３類と同様である。凹面側側縁にはナデが施されていない。

ⅡＡ３類（*12501*） 凹面には調整台の木目痕の後、ナデが施されている。端部は上側が明瞭な面をもたず、丸味をもち、強くヨコナデが施されている。下側は明瞭な面をなし、ヨコナデが施されている。側面はヘラケズリの後ナデが施されている。

ⅡD類（*12502*） 技法的な特徴はほぼⅡＢ３類と同様である。凹面には調整台の木目痕の後縦方向のナデが施されている。

ⅡＦ２類（*12601*） 凹面はヨコナデ後タテナデが施されている。端部は上側が明瞭な面をもたず、丸味をもち、ヨコナデが施され、下側は明瞭な面をなし、ヨコナデが施されている。側面はヘラケズリの後ナデが施されている。

ⅡG類（*12602・12701・12702*） 凸面にナデが施されている。凹面は調整台の木目痕が残り、*12602・12702*は木目痕後タテナデが施されている。端部は上側が明瞭な面をもたず、丸味をもち、ヨコナデが施され、下側は明瞭な面をなし、ヨコナデが施されている。側面はヘラケズリが施され、*12701・12702*はケズリ後ナデが施されている。

灰原　　窯体に比べてⅠ類のものがⅡ類に匹敵するほど多い。主に窯体内で出土していない型式を取り

上げる。

ＩＢ３類（*12801・12901*） 端部は上側が明瞭な面をもたず、丸味をもち、ヨコナデが施され、下側は明瞭な面をなし、ヨコナデが施されている。側面はヘラケズリ後ナデが施されている。布目は１㎝に８～10本程度である。

ＩＢ１類（*12802*） 端部は上側が明瞭な面をもたず、丸味をもち、ヨコナデが施され、下側は明瞭な面をなし、ヨコナデが施されている。側面はヘラケズリ後ナデが施されている。布目は１㎝に10・11本程度である。

ＩG類（*12902・13001*） 凸面は無文タタキが施されている。凹面は布目の後ヨコナデが施されている。布目は１㎝に11～13本である。端部は上側が明瞭な面をもたず、丸味をもち、ヨコナデが施され、下側は明瞭な面をなし、ヨコナデが施されている。側面はヘラケズリ後ナデが施されている。

ⅡＢ１類（*13002*） 凹面はヨコナデ後タテナデが施されている。端部は上側が明瞭な面をもたず、丸味をもち、ヨコナデが施され、下側は明瞭な面をなし、ヨコナデが施されている。側面はヘラケズリ後ナデが施されている。

ⅡG類（*13101*） 凸面は無文タタキ後タテナデが施されている。凹面はヨコナデ後タテナデが施されている。端部は上側が明瞭な面をもたず、丸味をもち、ヨコナデが施され、下側は面をなし、ヨコナデが施されている。

６．軒瓦の変遷

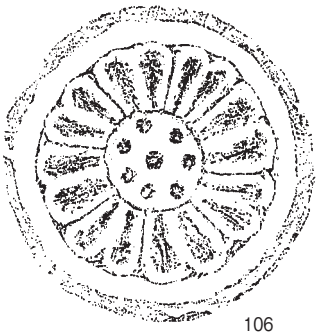
（１）軒丸瓦

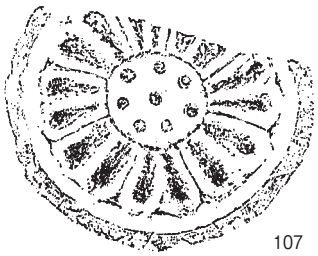
梟谷１号窯出土のものは瓦当文様が断片的で、複弁か単弁かはっきりしないものである。近似する文様のものとして白水遺跡（神戸市教育委員会1999）、平安宮民部省（平安博物館1977）、神出窯田井裏支群（神戸市教育委員会1985、丹治1987）、神出窯池の下支群（神戸市教育委員会1985）、神出窯万堡池支群（神戸市教育委員会1990）出土のものが挙げられる（第26図）。

白水遺跡出土のものは複弁八葉蓮華文で、珠文が１＋７である。各蓮弁の広さは不均一である。蓮弁の端と周縁の間の隙間が広い。瓦当裏面の周縁際が堤状に盛り上がり、ヘラケズリが施されている。蓮弁が周縁に向かって低くなるもの（106）と、周縁に向かって高くなるもの（107）がある。蓮弁や蓮子の配置は同一であり、笵キズも一致することから、前者から後者に笵の彫り直しが行われたものと思われる。神出窯万堡池支群出土例と同笵とされ、神出窯の製品と考えられる。ただし、万堡池支群出土例については実見していないため彫り直し前のものか後のものかは確認できていない。梟谷１号窯出土例（*9503*）と比べると、梟谷１号窯出土例が蓮弁と周縁の間に隙間がなく、蓮弁が単弁になった部分がある点は異なるが、複弁の蓮弁部分の形状を見ると非常に酷似している。

平安宮民部省出土例では基本的には複弁であるが、部分的に単弁となっている。蓮弁の端と周縁が接合している。中房部などに笵キズが多く認められる。瓦当裏面には堤状の盛り上がりは認められず、ナデ調整がなされている。蓮弁の形状や蓮子の配置は白水遺跡出土例と一致しており、同笵の可能性が高いものと思われる。梟谷１号窯出土例と比べると蓮弁に単弁と複弁の部分があり、蓮弁の端と周縁が接合している点が共通している。しかしながら瓦当裏面の形状・調整は異なっている。蓮弁については白水遺跡出土例を介して比較すると、残念ながら共通の部分が残存していないようである。

神出窯田井裏支群例では完全に単弁化している。蓮弁の端と中房の端に突線が加えられている。残存


106

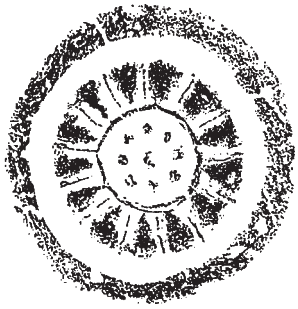

107

白水遺跡

神出窯臬谷1号窯

平安宮民部省跡

神出窯田井裏支群


神出窯堂ノ前支群

第26図　軒丸瓦の変遷

部が少ないためやや明瞭ではないが、蓮弁・蓮子の配置が白水遺跡出土例と一致しているように見える。瓦当裏面はわずかに堤状に盛り上がり、ナデが施されている。神出窯池の下支群例では文様は神出窯田井裏支群例と同様であるが、蓮弁の端が切り縮められている。蓮子部分には笵キズが進んでいる（平安宮民部省例と一致するようである)。瓦当裏面には堤状の盛り上がりが存在する。

検討できる良好な個体が少なく、笵キズで確認できる部分もほとんどないが、上記に検討したことからすると白水遺跡106→白水遺跡107→神出窯臬谷１号窯・平安宮民部省→神出窯田井裏支群→神出窯池の下支群の順に瓦笵に彫り直しを行い、長期間利用された可能性が考えられる。

なお、神出窯田井裏支群では他に同文のものが存在する。蓮弁の端の突線がまっすぐ連なり全体で円弧をなしている。瓦当面が完存する神出窯堂ノ前支群例では蓮弁が単弁13葉で、蓮子が１＋８である。

（２）軒平瓦

鴨谷２号窯、臬谷１号窯から出土した軒平瓦の瓦当文様はいずれも中心に縦線が入り、左右に唐草が展開する均整唐草文である。

ＮＨ１は鴨谷２号窯、臬谷１号窯、白水遺跡（神戸市教育委員会1999)、日輪寺遺跡（神戸市教育委

第27図　軒平瓦の変遷

員会2002・2008)、二ッ屋遺跡（神戸市教育委員会2008)、平安宮朝堂院跡（平安博物館1977)、平安宮民部省跡（平安博物館1977）などで出土している。

鴨谷２号窯例では中心の縦線は下の界線に接続しない。左端部に笵キズがある。平安宮朝堂院跡では中心の縦線は下の界線に接続しない。白水遺跡出土例（109）は板状の製品に文様が押されている。左端部に笵キズが認められる。

日輪寺遺跡第７次（563)、二ッ屋遺跡では中心の縦線は下の界線に接続する。二ッ屋遺跡では右側の

第８表　軒瓦の変遷

軒丸瓦		軒平瓦NH１		軒平瓦NH２	
万堡池支群	白水遺跡106	鴨谷２号窯	白水遺跡、平安宮朝堂院跡		
	白水遺跡107		二ッ屋遺跡、日輪寺遺跡		
臬谷１号窯	平安宮民部省跡	臬谷１号窯	平安宮民部省跡	臬谷１号窯	
田井裏支群				田井裏支群	
池の下支群				池の下支群	土御門烏丸内裏

唐草の巻きが１カ所強い部分が存在する。

平安宮民部省跡例では左端部のキズが拡大し、笵が大きく割れてずれている。

ＮＨ１は鴨谷２号窯→二ッ屋遺跡（→）平安宮民部省跡と笵の彫り加え、笵キズの増加が認められるようである。

ＮＨ２は梟谷１号窯、神出窯田井裏支群（神戸市教育委員会1985）、神出窯池の下支群（神戸市教育委員会1985）、平安宮民部省跡（平安博物館1977）、平安京土御門烏丸内裏跡（渡辺・南1983）、石清水八幡宮（星野2000）で出土している。

梟谷１号窯例では笵キズは少ないが、神出窯田井裏支群例では笵キズが増加している。神出窯池の下支群例や平安京土御門烏丸内裏跡では笵の木目がはっきり見える。

ＮＨ２は梟谷１号窯→神出窯田井裏支群→神出窯池の下支群・平安京土御門烏丸内裏跡と笵の状況が変化しているものと思われる。

ＮＨ１、ＮＨ２の順番に作られ、さらに神出窯堂ノ前支群ではさらに新たな型式のものが認められる（神戸市教育委員会1985）。また、茶山支群出土例では中心の縦線をもつが、唐草の展開の上下が逆である（中村1986）。文様的にはＮＨ１に先行するように見えるが、消費地での出土状況ではかならずしも古い段階に位置づけることはできない。

７．丸瓦・平瓦の変遷

（１）丸瓦

鴨谷２号窯ではほとんど出土していないため、変化はよくわからない。梟谷１号窯での特徴としては平瓦と共通のタタキが多く認められることである。Ⅱ類のものが多い点は、以後12世紀前半までの状況と同様である。

（２）平瓦

鴨谷２号窯ではⅡ類のものが多いが、Ⅰ類のものも一定量存在する。側縁、端縁にヘラケズリが施されるものが多い。Ⅱ類では平行タタキのものが多くみられ、凹面に斜め方向の線が彫られた調整台の痕跡が認められるものがある。

梟谷１号窯ではⅡ類のものが多いが、Ⅰ類のものも若干存在する。ただし、鴨谷２号窯と異なり、粘土紐の接合痕が認められるものがあることから、成形は粘土紐の巻き上げで行われた可能性が高い。側面、端面にナデが施されているものが多い。Ⅱ類では十文字文のタタキのものが多く見られる。

８．瓦の供給地とその年代

鴨谷２号窯段階の瓦が出土しているのは在地では神戸市西区の明石川流域に所在する白水遺跡で、やや時期が下がると考えられるのは日輪寺遺跡と二ッ屋遺跡である。白水遺跡は地名に名を残す「延命寺」に関連する遺跡、日輪寺遺跡も現存する日輪寺に関連する遺跡と考えられ、二ッ屋遺跡は日輪寺遺跡に隣接する持仏堂をもつ居館遺跡である。このように早い段階から在地における供給が確認できる。

この段階での在地以外への供給は平安宮朝堂院跡でのみ確認できる。近年、播磨産瓦の京都・奈良への利用の開始が11世紀第３四半期頃とされること（上原2006）から、天喜６年（1058）に焼亡し、延久４年（1072）に落成した後三条天皇による大極殿の再建に関連するものであることが最も有力な候補と

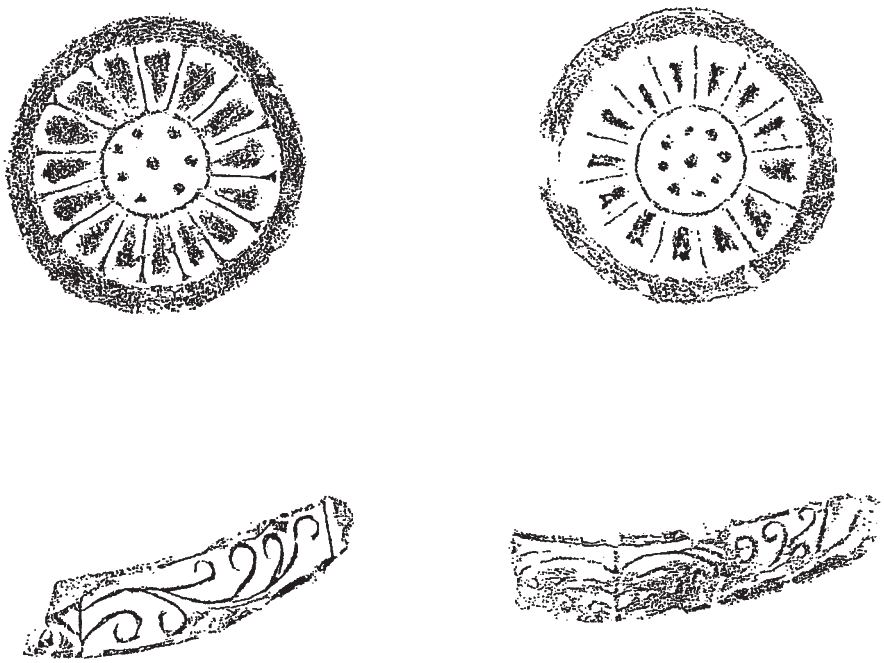
第28図　石清水八幡宮出土の瓦

第29図　土御門烏丸内裏跡出土の瓦

して挙げられる。

梟谷１号窯段階のものは平安宮民部省跡で出土している。Ｂ１類の平瓦が出土していることも注目される（平安博物館1977）。嘉承２年（1107）の地震被害直後の築地修造用と推測されている（戸田・松井1976）。

神出窯田井裏支群・神出窯池の下支群段階のものは石清水八幡宮、平安京土御門烏丸内裏跡出土のも



第30図　四天王寺出土の瓦

のが相当すると考えられる。石清水八幡宮ではＮＨ２に加えて、神出窯茶山支群と同笵の軒平瓦、その他の中心の縦線をもつタイプの軒平瓦、複数の種類の単弁蓮華文軒丸瓦などが採集されている（14研究会「王権とモニュメント」2007、星野2000）。但馬守平正盛の造進により天永３年（1112）に供養された大塔に所用された可能性が考えられている（中村1986）。

平安京土御門烏丸内裏跡ではＮＨ２、神出窯茶山支群と同笵の軒平瓦、その他の中心の縦線をもつタイプの軒平瓦、単弁15葉蓮華文軒丸瓦で蓮子が１＋７のものなどが出土している。永久元年（1117）年に造営され、大治４年（1129）にも修造が行われている（渡辺・南1983、植山2000）。四天王寺では単弁13葉蓮華文軒丸瓦で蓮子が１＋８のもの（神出窯堂ノ前支群同笵）、単弁15葉蓮華文軒丸瓦で蓮子が１＋７のもの、複数型式の中心の縦線をもつタイプの軒平瓦が出土している（四天王寺文化財管理室1986）。大治２年（1127）の記事に年来、四天王寺別当行尊大僧正によって新造修理がなされたことが記されている（棚橋1989）。

10. まとめ

鴨谷２号窯は11世紀第３四半期頃、梟谷１号窯は12世紀初頭と考えられる。鴨谷３号窯から１点ではあるが平瓦が出土していることから、それを遡る時期から瓦の生産が行われていたと考えられる。

軒丸瓦については改笵を繰り返しながら、長期間同じ笵が使用された。ＮＨ１は笵割れが進んだため、梟谷１号窯段階でＮＨ２の瓦笵が新たに作られた。神出窯田井裏支群以降では笵の数を増やして、生産が行われたと考えられる。

参考文献

上原真人2006 「院政期平安宮－瓦から見た－」『院政期の内裏・大内裏と院御所』

植山茂2000 「平安京土御門烏丸内裏跡出土瓦について」『朱雀』 第12集

神戸市教育委員会1985 『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会1990 『昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会1999 『白水遺跡第　4次　埋蔵文化財発掘調査報告書』

神戸市教育委員会2002 『日輪寺遺跡発掘調査報告書』

神戸市教育委員会2008 『日輪寺遺跡第10・11・12次発掘調査報告書』

四天王寺文化財管理室1986 『四天王寺古瓦聚成』

14研究会「王権とモニュメント」2007 『京都大学所蔵古瓦図録Ⅱ』

棚橋利光1989 『四天王寺年表』

丹治康明1987 「東播磨における瓦生産」『中近世土器の基礎研究Ⅲ』

戸田秀典・松井忠春1976 「平安宮推定民部省跡の発掘調査」『平安博物館研究紀要』 第６輯

中村善則1986 「神出古窯址群茶山１号窯」『神戸市立博物館だより』 Ｎｏ.16

平安博物館1977 『平安京古瓦図録』

星野猷二2000 『塩沢家蔵瓦図録』

渡辺誠・南博史1983 『平安京土御門烏丸内裏跡－左京一條三坊九町－』

第４節　まとめ

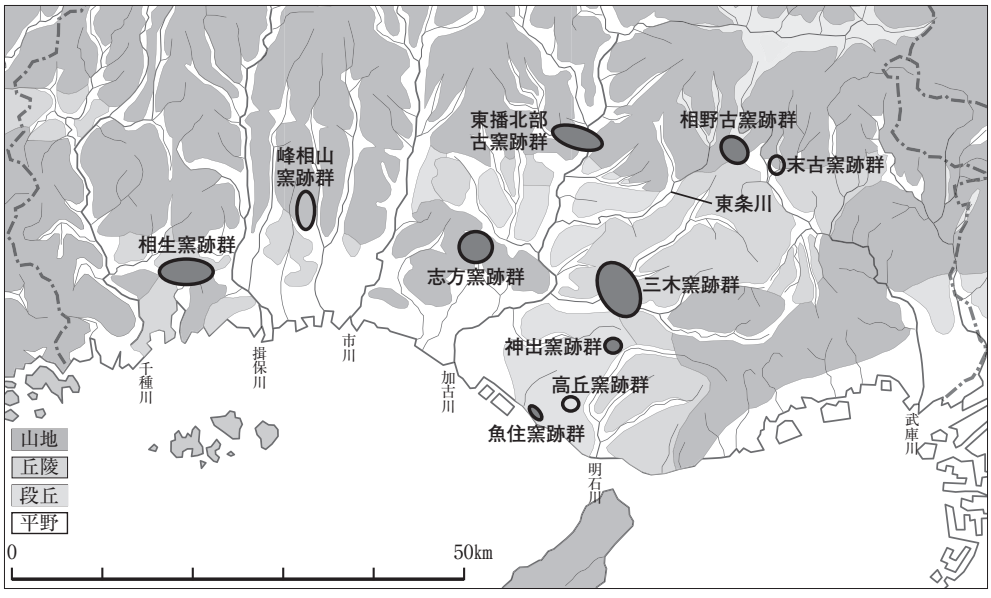
１．神出窯の操業の開始と年代

今回の調査では４基の窯跡から５時期の遺物が出土している。神出窯跡群は鉢・甕に代表される中世窯業地として知られている。今回調査を実施した４基の窯跡はいわゆる鉢・甕・瓦を中心とした東播磨産須恵器定着以前の窯群である。今回の調査によって、神出窯における開窯時期が10世紀前葉まで遡ることが明らかになり、また、中世窯業形態が成立するまでの過程を知ることができた。具体的には言えば、４基の窯は甕の叩き目の系譜や器種構成からほぼ時代的に連続して生産が行われたと推測され、この間、生産器種はヘラ切りを主体とした第１段階の古代的器種の残存形態から第２段階の瓷器系器種の導入定着、さらに第３段階の鉢・甕を主体とした形態への移行という過程を窺うことができる。

各窯の操業年代については、鴨谷１号窯が10世紀前葉、鴨谷３号窯が10世紀中葉、鴨谷２号窯が10世紀後葉～11世紀前後（瓦の年代では11世紀第３四半期頃）、梟谷１号窯は12世紀初頭に中心時期を想定しているが、確定には至っておらず、今後の資料の増加を待って改めて検討が必要と考える。

２．神出窯成立期の器種について

播磨および播磨周辺の窯で、瓷器系の器種を早くに導入する窯群としては、三田市の相野窯、相生市の相生窯がある。これらの窯群における特徴的な器種としては、沈線椀（２類）と突帯椀（３類）があるが、相野窯では沈線椀が特徴的な器種、相生窯では突帯椀が特徴的な器種として位置づけられる。平成４年（1992年）に刊行された『相野古窯跡群』では沈線椀が東播系須恵器に継承される器種と記述されている。その後の調査で、加古川市の志方窯・加古川上流の西脇市から加東市にまたがる東播北部窯跡群も沈線椀の生産を行っていることが明らかとなり、神出窯も含めて加古川流域の窯跡群全体が相野系の窯群と位置づけることができる。瓷器系器種が相野窯から直接伝えられたかどうかについては今後検討していかなければならないが、もし、相野窯からの伝来と仮定するならば、相野窯からは加古川支流の東条川を下るか、あるいは篠山市今田町を抜けて現国道372号線のルートをたどれば、加古川に至る



第31図　播磨周辺の窯跡群位置図

ことができる。また、国道372号線は篠窯跡群が所在する亀岡市が起点でもあることから、篠窯跡群に瓷器系の源流を求めることも可能であり、今後、東播磨諸窯の瓷器系器種の出現の有り方については篠窯まで範囲を拡大して検討を行う必要性もある。(註1)

3．出土瓦の供給先と年代について

鴨谷2号窯の生産瓦は在地では白水遺跡など明石川流域の遺跡、在地以外では平安宮朝堂院跡へ供給されている。梟谷1号窯の生産瓦は平安宮民部省跡に供給されており、これら供給先の遺構年代から瓦の年代観では、鴨谷2号窯の操業年代は11世紀第3四半期頃、梟谷1号窯は12世紀初頭と考えられるが、鴨谷2号窯の操業年代については、須恵器の年代観では11世紀第3四半期頃までは下り得ず、半世紀前後の年代のずれがある。鴨谷2号窯段階と特定できる資料は在地以外で出土しているのは平安宮朝堂院跡例1点のみである。須恵器の年代観との齟齬を考えると、延久4年（1172）造営時を遡る11世紀前半の時期である可能性を含めて、須恵器・瓦ともに今後の充分な検討が必要であろう。

4．神出窯の成立と展開

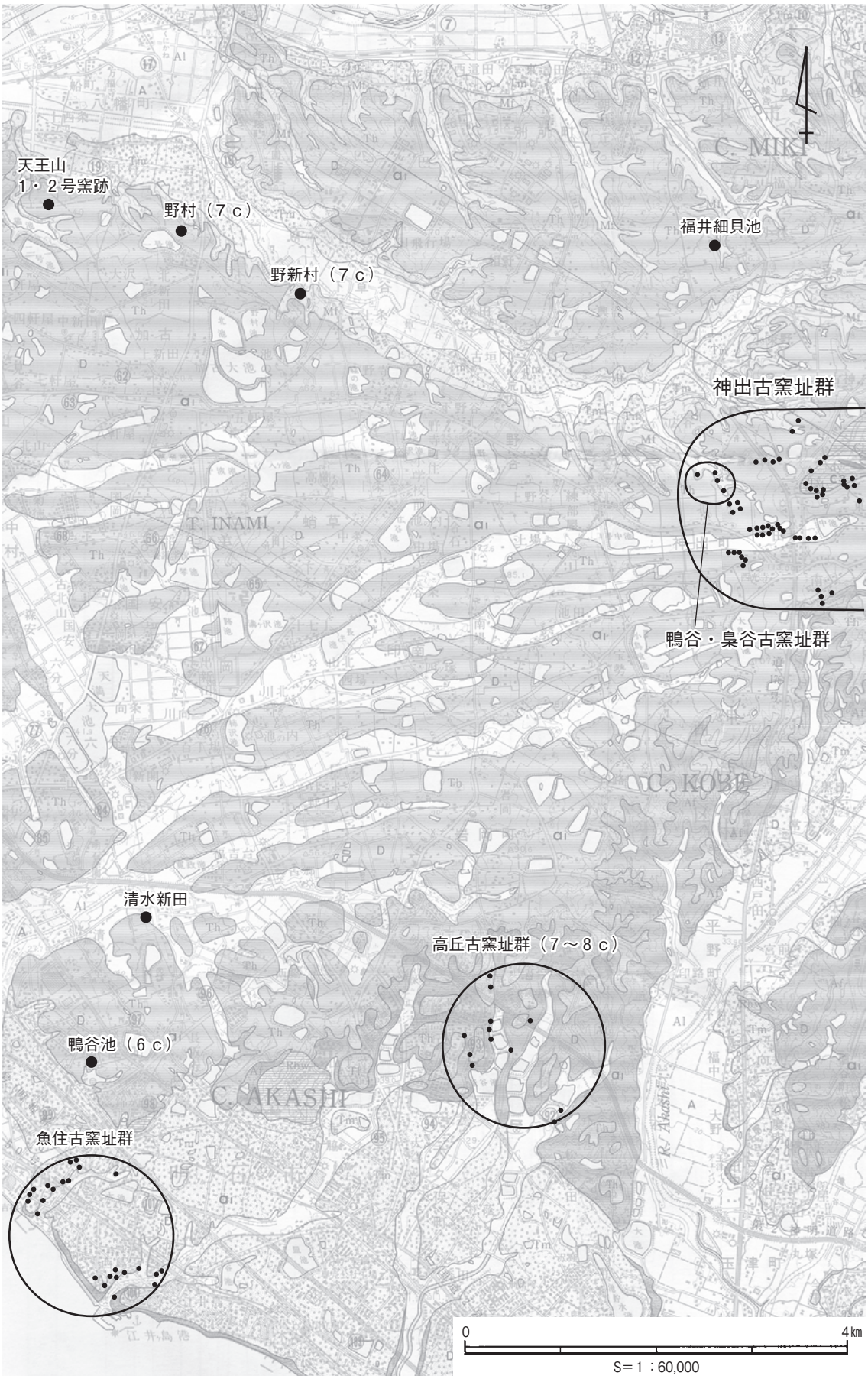
鴨谷2号窯および鴨谷3号窯からは「王作上宮御料」や「□（田ヵ）殿御料」などの刻書をもつ甕片が出土している。皇族や貴族層等の邸宅への納め先を明記した可能性が高いと考える。鴨谷3号窯・鴨谷2号窯は中甕・大甕を大量に生産しており、官からの要求に基づいて生産を行ったことを窺わせる。特に鴨谷2号窯は神出窯における瓦生産の初現期の窯で、生産瓦が平安宮朝堂院跡に供給されており、梟谷1号窯の生産瓦についても平安宮民部省跡に供給されている。これらのことから甕や瓦の生産が中央からの要求により行われた可能性が高いことを示す。院政期には播磨守による成功活動の一環として造寺造営が行われ、その延長線上で神出・三木・林崎・魚住等で瓦生産が行われている。播磨国はそれ以前の天延元年（973）の薬師寺の復興、永承元年（1046）の興福寺諸堂僧坊の復興にあたって他の諸国ともに造営を命じられている。鴨谷支群に於ける甕生産の増大や瓦生産の開始が造寺国制と直接結びつくかどうかは不明であるが、いずれにしても平安中期以降の令制収取体制の崩壊に伴う物品調達の有り方を示すものとして注目してよく、中世神出窯の成立を考えるうえで重要な資料と考える。

5．窯体構造について

調査が行われた4基の窯はいずれも地上窯体架構式（地上式）の窯である。このうち、鴨谷2号窯および同3号窯では地上式窯の窯体構築法を復元する手がかりとなる架構痕跡が良好な状態で残されていた。これらの痕跡資料から構築法の復元を試みたが、あくまでも試案である。窯体の調査にあたっては架構材の痕跡や窯体埋土の観察も必要かと考える。今後、こうした調査事例の増加を待って窯体の構築法について改めて検討を加えたい。

註1

鴨谷支群における糸切りの椀類の出現は鴨谷3号窯第2次操業からである。鴨谷1号窯・3号窯第1次操業でのヘラ切りから糸切りへの大転換が行われたことになる。3号窯第1次操業と第2次操業の関係については叩き原体の継続および灰原における間層の不存在から連続性が明白である。第1次操業灰原および作業場では大半の器種がヘラ切りであった。わずかに糸切りのものも含まれていたが、形態的に糸切り初期のものではないと見なしたので混入と判断し除外した。従って、糸切りのものも少量存在する可能性もなくはないが、少なくとも鴨谷支群では3号窯第2次操業段階で一気に糸切りに転換したことは確実である。この点においてヘラ切り主体の相野窯とは異なる様相をみせており、別の技術系譜を考慮する必要があるかもしれない。



第32図　表層地質図からみた神出窯跡群の立地（原図：「表層地質図高砂」後藤博弥・井上剛一編纂）

参考・引用文献

岡崎正雄他『相野古窯跡群』　兵庫県教育委員会　1992年

西口和彦・森内秀造『相生市・緑ヶ丘窯址群』　兵庫県教育委員会　1986

森内秀造『相生市・緑ヶ丘窯址群Ⅱ』兵庫県教育委員会　1995

久保弘幸･池田征弘･岡本一秀『神出窯跡群－神出浄水場拡張工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』兵庫県教育委員会　1998年

森内秀造・池田征弘・仁尾一人他『久留美・跡部窯跡群』兵庫県教育委員会　1999年

森内秀造・仁尾一人・岡本一秀他『志方窯跡群Ⅰ－中谷支群－』兵庫県教育委員会　2000年

森内秀造・仁尾一人・岡本一秀他『志方窯跡群Ⅱ－投松支群－』兵庫県教育委員会　2001年

片山博道「平高台椀の基礎的研究」『考古学の視点　兵庫発信の考古学　間壁葭子先生喜寿記念論文集』2009年

森内秀造「窯跡の調査と研究」『田辺昭三先生古稀記念論文集』2002年

窯跡研究会編『古代窯業の基礎研究－須恵器の技術と系譜－』2010年　真陽社

出土遺物一覧表

鴨谷１号窯

報告番号	図面番号	写真図版番号	器種	大きさ(cm)			出土遺構
				口径	器高	底径	
0101	1	5	杯Ah	(12.4)	3.5	(8.3)	窯体R３区／埋土
0102	1	5	杯Ah	(13.5)	3.1	(8.6)	窯体L３区／埋土
0103	1	5	杯Ah	(14.1)	3.9	(7.9)	窯体第２次床面／土器２
0104	1	5	杯Ah	(15.0)	3.4	8.5	窯体燃焼部／埋土
0105	1	5	杯Ah	(14.9)	3.9	8.2	窯体燃焼部／埋土
0106	1	5	杯Ah	−	−	(8.5)	窯体L３区／埋土
0107	1	5	杯Ah	14.5	4.1	8.2	窯体第１次床面
0108	1	5	杯Ah	(14.8)	3.9	8.2	窯体第２次床面／土器３
0109	1	5	杯Ah	(15.0)	3.9	9.1	窯体焚口／埋土
0110	1	5	杯B	16.9	5.9	8.1	窯体第２次床面／土器４
0111	1	5	杯B	(15.8)	−	−	窯体L３区／埋土
0201	2	6	台付皿Ah	(14.1)	(2.8)	6.5	灰原２区下／最下層
0202	2	6	台付皿Ah	(14.8)	3.5	8.9	灰原２区上／黒極細砂
0203	2	6	台付皿Ah	−	−	6.3	灰原１区
0204	2	6	台付皿Ah	−	−	7.0	灰原４区北
0205	2	6	台付皿Ah	−	−	(7.1)	灰原６区
0206	2		杯Ah	(12.8)	3.3	6.8	２号窯主軸セクション（灰原L・R区）
0207	2		杯Ah	(13.9)	3.7	7.3	灰原３区上
0208	2		杯Ah	(14.0)	3.5	8.2	灰原２区下／最下層砂礫
0209	2		杯Ah	(14.0)	4.1	7.2	灰原２区下／第５層褐灰細砂礫混
0210	2		杯Ah	(14.2)	3.1	8.1	灰原３区下／下層砂礫
0211	2	6	杯Ah	(14.2)	4.2	7.9	灰原２区下／第５層褐灰細砂礫混
0212	2		杯Ah	(14.3)	3.6	8.4	灰原２区下／最下層砂礫
0213	2	6	杯Ah	(14.4)	3.9	8.2	灰原２区下／第５層褐灰細砂礫混
0214	2		杯Ah	(14.5)	3.6	8.4	SD01セクション１
0215	2	6	杯Ah	(14.0)	13.5	(8.1)	灰原２区下／第５層褐灰細砂礫混
0216	2	6	杯Ah	(14.9)	3.7	(9.4)	灰原２区下／トレンチ
0217	2		杯Ah	(15.2)	4.0	(8.6)	灰原２区上／黒極細砂
0218	2		杯Ah	(13.4)	4.2	(8.0)	灰原４区／下層黒シルト
0219	2	6	杯Ah	(12.9)	4.1	7.5	確認調査06トレンチ
0220	2	6	杯Ah	(13.8)	3.9	7.2	確認調査06トレンチ
0221	2	6	杯Ah	14.8	3.8	8.0	灰原２区下／最下層砂礫
0222	2	6	杯Ah	15.0	4.3	8.4	灰原２区上／黒極細砂
0223	2	6	杯Ah	15.3	3.7	7.9	灰原２区下／第５層褐灰細砂礫混
0301	3		杯B	(13.6)	5.8	(7.9)	２号窯灰原SD01
0302	3		杯B	(15.0)	5.2	6.6	灰原２区下／最下層砂礫
0303	3	7	杯B	(15.7)	(4.9)	8.0	灰原２区下／最下層砂礫
0304	3		杯B	(15.9)	4.9	8.6	２号窯主軸セクション（灰原３・４区）
0305	3		杯B	(15.6)	5.2	(8.4)	灰原２区下／最下層砂礫
0306	3		杯B	(15.7)	5.2	8.2	灰原２区下／第５層褐灰細砂礫混
0307	3	7	杯B	(16.0)	(5.5)	8.0	灰原２区下／第５層褐灰細砂礫混
0308	3		杯B	(16.1)	5.5	(7.8)	灰原２区下／最下層砂礫
0309	3	7	杯B	16.8	6.1	8.3	灰原２区下／下層砂礫
0310	3	7	杯B	(16.9)	6.2	8.3	灰原３区上／２層
0311	3	7	杯B	(16.5)	5.3	7.3	灰原２区下／第５層褐灰細砂礫混
0312	3	7	杯B	(16.8)	5.7	8.3	灰原２区下／最下層砂礫
0313	3	7	杯B	15.8	5.6	7.8	灰原４区／下層黒シルト
0314	3	7	杯B	(16.4)	(5.4)	7.1	灰原２区上／黒極細砂

報告番号	図面番号	写真図版番号	器種	大きさ(cm)			出土遺構
				口径	器高	底径	
0315	3	7	杯B	(16.6)	5.6	8.2	灰原２区下／第５層褐灰細砂礫混
0316	3		椀Ah1	(15.1)	5.4	7.2	灰原３区上
0317	3		椀Ah1	(15.2)	12.1	(8.7)	灰原２区上／黒極細砂
0401	4	8	椀Ah2	(16.7)	6.7	(8.1)	灰原２区上／黒極細砂
0402	4		椀Ah2	(16.5)	5.6	8.0	灰原２区下／第５層褐灰細砂礫混
0403	4	8	椀Ah2	(17.7)	6.2	(7.2)	灰原２区下／下層砂礫
0404	4	8	椀Ah2	(18.8)	6.7	(9.0)	灰原２区下／下層シルト
0405	4	8	椀Ah2	(19.2)	(7.2)	9.2	灰原２区上／黒極細砂
0406	4	8	椀Ah2	(19.4)	7.5	(9.8)	灰原２区上／黒極細砂
0407	4		椀Ah2	(18.8)	−	−	灰原２区上／黒極細砂
0408	4		椀Ah2	−	−	8.6	灰原４区／下層黒シルト
0409	4		椀Ah2	−	−	(8.6)	灰原２区下／第５層褐灰細砂礫混
0410	4		椀Ah2	−	−	(8.9)	灰原２区下／第５層褐灰細砂礫混
0411	4		椀Ah2	−	−	(8.8)	表土掘削
0412	4	8	椀Ah2	(18.4)	(6.3)	(8.4)	灰原２区下／最下層砂礫
0413	4	8	椀Ah2	18.7	8.5	8.4	灰原２区上／黒極細砂
0414	4	8	椀Ah2	(19.4)	6.9	9.5	灰原３区上／２層
0415	4	8	椀Ch1	(15.2)	5.7	7.8	灰原２区下／第５層褐灰細砂礫混
0416	4	8	椀Ch1	−	−	(9.8)	灰原２区上／黒極細砂
0417	4	8	椀Ch1	−	−	(7.5)	灰原２区上／黒極細砂
0418	4	8	椀Ch1	−	−	9.4	灰原６区（SD01）
0419	4	8	椀Ch1	−	−	9.4	灰原３区下／下層砂礫
0420	4		椀Ch1	−	−	(8.4)	灰原２区下／灰色シルト
0501	5	9	鉢DⅠ	(23.0)	−	−	灰原４区／下層黒シルト
0502	5	9	鉢DⅠ	(22.9)	−	−	灰原２区上／黒極細砂
0503	5	9	鉢DⅠ	(17.9)	−	−	灰原２区上／黒極細砂
0504	5	9	鉢DⅠ	(19.4)	−	−	２号窯灰原３・４区／下層
0505	5	9	鉢DⅠ	(18.9)	−	−	灰原２区上／黒極細砂
0506	5	9	鉢DⅠ	(21.2)	−	−	灰原４区／下層黒シルト
0507	5	9	鉢DⅠ	(21.0)	−	−	灰原２区下／最下層砂礫
0508	5		鉢DⅠ	(21.8)	−	−	灰原２区下／第５層褐灰細砂礫混
0509	5		鉢DⅠ	(20.4)	−	−	２号窯西横の窯壁だまり
0601	6	10	壺Mh	(4.8)	(12.6)	8.1	灰原３区下／下層砂礫
0602	6	10	平瓶	−	−	−	SD１セクション１の北側／溝底面
0603	6	10	平瓶	−	−	−	灰原３区下／黒褐色土
0604	6	10	平瓶	−	−	−	SD１セクション１の北側／溝底面
0701	7	11	壺A（四耳壺）	−	−	−	灰原４区／下層
0702	7	11	壺A（四耳壺）	(13.2)	−	−	灰原３・４区／下層
0703	7		壺A（四耳壺）	12.0	−	−	灰原２区下／下層礫層
0704	7	11	壺A（四耳壺）	(12.2)	−	−	灰原４区／黒褐極細砂
0705	7		壺A（四耳壺）	(12.5)	−	−	１号窯東／灰原３・４区
0706	7		壺A（四耳壺）	(12.7)	−	−	２号窯主軸セクション（灰原L・R区）
0707	7	11	壺A（四耳壺）	−	−	−	１号窯灰原L１区
0708	7	11	壺A（四耳壺）	−	−	−	灰原２区下／第５層褐灰細砂礫混
0709	7	11	壺A（四耳壺）	−	−	−	２号窯　北西下部
0710	7	11	壺A	10.2	−	−	灰原２区下
0711	7	11	鉢DⅠ？	−	−	5.2	灰原２区下／トレンチ
0712	7	11	壺	−	−	11.2	灰原３区上
0801	8	12	水瓶	7.4	−	−	２号窯主軸セクション（灰原３・４区）
0802	8	12	壺L	−	−	8.7	灰原２区下／第５層褐灰細砂礫混

報告番号	図面番号	写真図版番号	器種	大きさ(cm)			出土遺構
				口径	器高	底径	
0803	8	12	壺L	−	−	10.4	灰原２区下／第５層褐灰細砂礫混
0804	8		壺L	(9.9)	−	−	灰原３区／灰原上層　灰色シルト
0805	8		壺N	14.2	−	−	灰原２区下／第５層褐灰細砂礫混
0806	8		壺N	(14.2)	−	−	灰原１区／灰色砂礫
0807	8	12	壺NI	−	−	10.0	灰原２区下／最下層砂礫
0808	8	12	壺NI	−	−	11.4	灰原２区下／最下層砂礫
0809	8	12	壺NI	(14.5)	28.9	9.9	灰原２区下／最下層砂礫
0901	9	14	壺NⅡ2	−	−	−	北側斜面灰層
0902	9	14	壺NⅡ2	−	−	−	灰原１区
0903	9	14	壺NⅡ2	−	−	−	灰原３区／下層砂礫層
0904	9	14	壺NⅡ2	−	−	−	灰原２区下／第５層褐灰細砂礫混
0905	9	13	壺NⅡ2	−	−	20.4	灰原４区下／最下層砂礫
0906	9		壺NⅡ2	−	−	13.0	灰原４区下／最下層砂礫
1001	10		壺NⅡ2	(19.3)	−	−	灰原２区下／第５層褐灰細砂礫混
1002	10		壺NⅡ2	(18.6)	−	−	灰原２区下／下層礫層
1003	10	13	壺NⅡ2	13.0	(残30.3)	(11.8)	灰原２区下／第５層褐灰細砂礫混
1004	10	14	壺NⅡ2	14.3	−	−	灰原２区下／第５層褐灰細砂礫混
1005	10		壺NⅡ2	−	−	−	灰原３区／灰原上層　灰色シルト
1101	11	15	甕C	(40.4)	−	−	灰原２区下／最下層砂礫
1102	11	16	甕B	23.0	−	−	灰原２区下／最下層砂礫
1103	11		甕B	22.0	−	−	灰原２区下／第５層褐灰細砂礫混
1104	11	16	甕B	(18.6)	−	−	灰原３・４区／下層
1105	11	15	甕A	21.3	38.9	14.3	灰原４区／下層黒シルト
1106	11	15	甕A	(19.3)	(36.3)	−	灰原２区下／第５層褐灰細砂礫混
1201	12		甕A	34.0	−	−	灰原２区下
1202	12	16	甕A	24.0	−	−	灰原１区
1203	12	16	甕A	(26.4)	−	−	灰原３・４区／下層
1204	12	16	甕B	(22.7)	(38.4)	−	灰原３・４区／下層
1205	12	16	甕A	23.2	−	−	灰原２区下／下層砂礫

鴨谷２号窯

報告番号	図面番号	写真図版番号	器種	大きさ(cm)			出土遺構
				口径	器高	底径	
1301	13		小皿Ai	9.4	3.2	6.8	窯体５区
1302	13	17	小皿Ai	10.4	2.6	6.7	窯体床面62
1303	13	17	小皿Ai	11.1	2.7	6.6	窯体１・２区
1304	13	17	小皿Ai	(11.0)	2.9	6.4	窯体１・２区
1305	13	17	小皿Ai	10.0	2.4	5.5	窯体焚口
1306	13	17	小皿Ai	10.8	1.9	5.7	窯体床面63
1307	13	17	小皿Ai	11.2	3.0	6.7	窯体床面
1308	13		小皿Ai	(12.2)	2.2	(7.1)	窯体４区／埋土
1309	13		小皿Ai	(11.6)	2.9	7.4	窯体床面61
1310	13	17	椀Ci1	12.4	(4.9)	5.2	窯体１・２区
1311	13	17	椀Ci1	13.5	4.9	6.0	窯体焚口
1312	13	17	椀Ci1	13.1	4.7	5.3	窯体１・２区
1313	13	17	椀Ci1	13.2	4.8	6.2	窯体燃焼部下層床面
1314	13	17	椀Ci1	(13.8)	5.2	5.9	窯体床面68
1315	13	17	椀Ci1	(13.7)	5.0	(5.3)	窯体１・２区
1316	13		椀Ci1	(16.3)	6.1	7.3	窯体燃焼部下層床面

報告番号	図面番号	写真図版番号	器種	大きさ(cm)			出土遺構
				口径	器高	底径	
1317	13		椀Ci1	(15.1)	6.2	(7.4)	窯体燃焼部下層床面
1318	13	17	椀Ci1	15.8	6.2	7.2	窯体燃焼部下層床面
1319	13	17	椀Ci1	16.3	6.0	7.3	窯体燃焼部下層床面
1320	13	17	椀Ci1	16.1	6.2	7.2	窯体燃焼部下層床面
1321	13	17	椀Ci1	13.0	5.2	6.2	窯体燃焼部下層床面
1322	13	17	椀Ci1	13.3	4.6	4.8	窯体床面69
1323	13	17	椀Ci1	13.3	5.2	6.9	窯体燃焼部下層床面
1401	14	18	椀Ci2	(14.8)	5.6	5.7	窯体床面60
1402	14	18	椀Ci2	15.5	5.5	5.8	窯体1・2区
1403	14	18	椀Ci2	15.9	5.6	5.4	窯体床面56
1404	14	18	椀Ci2	(14.4)	(4.6)	5.8	窯体6区L焚口灰層
1405	14	18	椀Ci2	(13.5)	7.2	6.1	窯体燃焼部下層床面
1406	14		椀Ci2	14.5	5.7	6.8	窯体燃焼部下層床面
1407	14		椀Ci2	(16.8)	6.5	7.3	窯体燃焼部下層床面
1408	14		椀Ci2	17.1	6.6	7.9	窯体燃焼部下層床面
1409	14	18	椀Ai1	(17.4)	6.7	9.0	窯体燃焼部下層床面
1410	14		椀Ai1	−	−	8.7	窯体6区L焚口灰層
1411	14		椀Ai1	−	−	8.0	窯体燃焼部下層床面
1501	15		壺NⅡ2	15.8	−	−	窯体6区
1502	15		壺NⅡ2	21.6	−	−	窯体燃焼部下層床面
1503	15		壺鉢	−	−	13.0	窯体燃焼部下層床面
1504	15	18	鉢DⅡ2a	27.5	10.9	11.0	窯体1・2区
1505	15		鉢DⅡ2a	(32.6)	(10.7)	(14.2)	窯体内32
1506	15	18	甕A	(25.2)	−	−	窯体燃焼部下層床面
1507	15	18	甕A	(21.7)	−	−	窯体1・2区
1508	15	18	甕A	−	−	−	窯体床面36
1601	16	19	椀Ci1	(13.7)	5.4	6.2	窯体燃焼部下層床面
1602	16	19	椀Ci1	14.6	5.8	6.9	窯体燃焼部下層床面
1603	16		椀Ci1	15.2	6.0	7.0	窯体燃焼部下層床面
1604	16	19	椀Ci1	15.4	6.0	7.6	窯体燃焼部下層床面
1605	16	19	椀Ci1	15.8	6.4	8.0	窯体燃焼部下層床面
1606	16	19	椀Ci1	16.0	5.9	7.6	窯体燃焼部下層床面
1607	16	19	椀Ci1	13.1	5.0	6.1	窯体燃焼部下層床面
1608	16	19	椀Ci1	13.8	5.8	6.5	窯体燃焼部下層床面
1609	16	19	椀Ci1	15.5	6.4	7.6	窯体燃焼部下層床面
1610	16	19	椀Ci2	11.2	4.9	5.4	窯体燃焼部下層床面
1611	16	19	椀Ai2	(16.4)	6.6	(8.4)	窯体燃焼部下層床面
1612	16	19	椀Ai2	(17.0)	7.2	8.4	窯体燃焼部下層床面
1613	16		椀Ai2	−	−	(7.6)	窯体燃焼部下層床面
1614	16	19	小皿Ai	10.7	2.5	6.3	窯体燃焼部下層床面
1701	17	20	小皿Ai	9.85	2.0	6.2	2号窯灰原L
1702	17	20	小皿Ai	10.5	1.9	5.7	窯体6区焚口灰層
1703	17	20	小皿Ai	10.4	1.7	7.1	灰原3・4区
1704	17	20	小皿Ai	(10.9)	2.1	5.3	灰原2区下トレンチ
1705	17	20	小皿Ai	(9.8)	1.8	6.9	SD01
1706	17		小皿Ai	(10.0)	1.7	6.0	2号窯灰原／灰色シルト
1707	17		小皿Ai	(10.1)	1.9	6.1	灰原5区
1708	17	20	小皿Ai	(10.1)	1.5	6.8	灰原3・4区
1709	17	20	小皿Ai	(10.4)	2.0	(5.2)	灰原2区下
1710	17		小皿Ai	(10.4)	1.8	6.1	灰原4区北

報告番号	図面番号	写真図版番号	器種	大きさ(cm)			出土遺構
				口径	器高	底径	
1711	17		小皿Ai	(10.3)	1.5	5.7	灰原９区／灰色シルト
1712	17		小皿Ai	(10.5)	2.0	(7.1)	灰原６区（SD01）
1713	17	20	小皿Ai	10.7	2.0	5.5	灰原３区北
1714	17		小皿Ai	(10.7)	1.8	5.5	２号窯灰原３区上
1715	17		小皿Ai	(10.8)	2.0	6.2	２号窯灰原L・R区
1716	17		小皿Ai	(10.8)	2.5	(6.2)	灰原６区（SD01）
1717	17	20	小皿Ai	(10.9)	2.6	6.6	灰原５区（SD01）
1718	17		小皿Ai	(11.2)	2.6	(6.9)	灰原３・４区
1719	17	20	小皿Ai	(11.3)	2.4	(6.8)	灰原３区上
1720	17		小皿Ai	(11.7)	2.8	(6.3)	北東斜面裾部／灰層
1721	17	20	小皿A	12.2	3.2	5.7	２号窯西横の窯壁だまり
1722	17	20	杯Ai	(13.6)	3.0	7.3	灰原５区（SD01）
1723	17		椀Ai1	(14.3)	6.0	7.8	２号窯灰原R１区
1724	17		椀Ai1	(16.4)	5.9	8.8	２号窯灰原R１区
1725	17		椀Ai1	(16.8)	6.4	(8.9)	２号窯灰原R１区
1726	17	20	椀Ai1	(16.8)	6.0	(8.1)	２号窯灰原R２区
1727	17	20	椀Ai1	(16.9)	7.0	8.8	北側斜面裾部／灰層
1728	17		椀Ai1	(18.0)	7.0	(10.3)	灰原３・４区SD01
1729	17		椀Ai1	−	−	8.7	灰原２区下／灰色砂レキ
1730	17	20	椀Ai1	−	−	8.4	窯体
1801	18		椀Ci1	(11.9)	4.2	4.7	灰原５区（SD01）
1802	18		椀Ci1	(12.4)	4.7	(6.1)	灰原４区
1803	18		椀Ci1	(12.7)	4.6	5.3	灰原３区
1804	18		椀Ci1	(12.8)	4.6	5.3	灰原３・４区
1805	18	21	椀Ci1	12.9	5.0	5.2	灰原５区（SD01）
1806	18	21	椀Ci1	13.2	5.4	5.4	SD01
1807	18		椀Ci1	(13.2)	5.1	5.4	灰原５区
1808	18	21	椀Ci1	13.4	4.8	5.3	灰原６区（SD01）
1809	18	21	椀Ci1	13.4	5.1	4.9	灰原５区
1810	18	21	椀Ci1	13.5	4.9	5.5	灰原２区下
1811	18	21	椀Ci1	13.5	5.1	6.0	２号窯主軸セクション（灰原３・４区）
1812	18	21	椀Ci1	13.6	5.1	5.2	灰原５区
1813	18		椀Ci1	(13.6)	5.0	5.2	灰原５区（SD01）
1814	18		椀Ci1	13.6	4.8	5.9	２号窯灰原
1815	18		椀Ci1	13.7	4.9	6.1	灰原５区（SD01）
1816	18		椀Ci1	13.7	4.8	5.6	灰原３区上
1817	18	21	椀Ci1	13.9	4.9	6.1	灰原５区（SD01）
1818	18		椀Ci1	(14.2)	5.1	6.2	灰原３・４区
1819	18	21	椀Ci1	14.4	5.1	6.2	灰原３区南
1820	18		椀Ci1	(14.5)	5.5	7.4	灰原３区
1821	18		椀Ci1	15.5	6.5	7.4	２号窯灰原L・R
1822	18	21	椀Ci1	12.3	4.7	4.2	１号窯主軸セクション／灰原第３層
1823	18	21	椀Ci1	(13.1)	4.5	4.8	灰原３・４区
1824	18	21	椀Ci1	13.8	4.8	4.8	灰原４区
1901	19	22	椀Ci2	15.2	5.6	6.3	灰原３・４区
1902	19		椀Ci2	15.2	6.0	6.3	灰原５区
1903	19	22	椀Ci2	15.4	5.7	6.0	灰原６区（SD01）
1904	19	22	椀Ci2	15.4	6.2	6.3	灰原３・４区
1905	19	22	椀Ci2	15.5	5.6	5.4	灰原６区（SD01）
1906	19	22	椀Ci2	15.5	6.0	6.8	灰原２区下／下層礫層

報告番号	図面番号	写真図版番号	器種	大きさ(cm)			出土遺構
				口径	器高	底径	
1907	19	22	椀Ci2	15.5	5.2	5.5	2号窯灰原L1区
1908	19		椀Ci2	15.5	5.8	(6.3)	1号窯主軸セクション／灰原第3層
1909	19	22	椀Ci2	15.6	5.8	6.2	灰原2区下／最下層礫層
1910	19	22	椀Ci2	(15.8)	6.1	6.1	1号窯主軸セクション／灰原第3層
1911	19		椀Ci2	15.8	5.7	6.4	灰原3区トレンチ
1912	19	22	椀Ci2	15.8	5.8	6.3	灰原3・4区
1913	19		椀Ci2	15.9	5.6	6.1	1号窯主軸セクション／灰原第3層
1914	19		椀Ci2	15.9	6.0	6.0	2号窯灰原L・R区
1915	19		椀Ci2	(16.0)	5.9	6.3	灰原3区
1916	19	22	椀Ci2	16.1	6.9	6.3	灰原2区下／下層黒灰シルト
1917	19	22	椀Ci2	16.1	6.1	7.2	灰原2区下／下層礫層
1918	19	22	椀Ci2	16.2	6.4	6.7	2号窯灰原L・R区
1919	19	22	椀Ci2	15.3	6.0	6.4	灰原2区下／下層礫層
1920	19	22	椀Ci2	15.9	5.6	6.2	谷部灰原
1921	19	23	椀Ci2	16.1	6.8	6.7	灰原5区
2001	20	23	壺NⅡ2	22.8	−	−	灰原6区（SD01）
2002	20	23	壺NⅡ2	20.6	−	−	北東斜面裾部／灰層
2003	20		壺NⅡ2	−	−	−	2号窯　灰原の下の土器
2004	20		壺NⅡ2	−	−		灰原R2区
2005	20	23	壺NⅡ2	−	−	(12.0)	2号窯灰原L1区
2006	20	23	壺NⅡ2	−	−	13.7	灰原6区（SD01）
2101	21	24	壺Li	7.8	15.7	9.4	灰原5区（SD01）
2102	21	24	壺Li	−	−	9.8	2号窯の下部
2103	21		壺A	−	−	11.4	東側斜面
2104	21		壺M	5.6	−	−	SD01セクション2
2105	21	24	壺Mi	5.1	13.0	(9.1)	2号窯灰原L・R区
2106	21		壺A	(12.8)	−	−	灰原3・4区
2107	21	24	土師質甕	(28.0)	−	−	灰原5区
2108	21	24	土師質甕	25.8	−	−	灰原5区（SD01）
2109	21		土師質甕	30.0	−	−	灰原6区（SD01）
2201	22	25	風字硯	長さ19.5	脚高2.6	硯尻幅19.4	2号窯灰原L区
2202	22		風字硯	−	−	−	北側斜面裾部／灰層
2203	22	25	風字硯	−	−	−	2号窯の下部
2204	22	25	風字硯	−	−	−	東側斜面
2205	22	25	風字硯	−	−	−	2号窯主軸セクション（灰原L・R区）
2206	22	25	風字硯（脚）	−	−	−	灰原2・3区上
2207	22	25	風字硯（脚）	−	−	−	灰原3・4区
2301	23		鉢DⅡ2a	(28.6)	(11.5)	(11.6)	灰原2区下／下層黒灰シルト
2302	23	26	鉢DⅡ2a	29.6	10.9	13.5	灰原3・4区
2303	23		鉢DⅡ2a	28.1	11.3	10.3	灰原6区（SD01）
2304	23		鉢DⅡ2a	(31.6)	11.7	12.7	SD01
2305	23	26	鉢DⅡ2a	27.7	12.4	(12.2)	灰原5区（SD01）
2306	23		鉢DⅡ2a	(25.7)	11.6	(14.4)	灰原5区（SD01）
2307	23	26	鉢DⅡ2a	27.2	11.6	11.6	SD01
2308	23	26	鉢DⅡ2a	30.1	12.7	14.4	灰原6区（SD01）
2401	24		鉢DⅡ2a	(24.8)	−	−	灰原2区下／最下層砂礫
2402	24	27	鉢DⅡ2a	28.8	13.1	11.6	灰原5区（SD01）
2403	24		鉢DⅡ2a	27.6	12.5	(12.1)	SD01
2404	24	27	鉢DⅡ2a	29.0	11.2	11.6	灰原5区（SD01）
2405	24	27	鉢DⅡ2a	28.1	11.8	12.1	灰原6区（SD01）

報告番号	図面番号	写真図版番号	器種	大きさ(cm)			出土遺構
				口径	器高	底径	
2406	24		鉢DⅡ2a	(28.6)	11.1	(6.3)	灰原３・４区
2407	24	27	鉢DⅡ2a	30.5	11.3	12.2	SD01
2501	25	26	鉢DⅡ1	(27.3)	17.8	13.5	２号窯　上段灰原
2502	25		鉢DⅡ1	22.8	17.3	(13.4)	灰原３・４区
2503	25	26	鉢A	24.0	20.3	12.7	１号窯主軸セクション／灰原第３層
2504	25		壺	−	−	15.0	灰原３・４区
2505	25		壺N底部切り離し片	−	−	−	灰原６区
2601	26	28	甕A	(23.5)	−	−	SD01
2602	26	28	甕A	25.2	−	−	灰原６区（SD01）
2603	26		甕A	(27.8)	−	−	灰原６区（SD01）
2701	27	28	甕A	(31.8)	−	−	SD01
2702	27	28	甕A	26.9	−	−	灰原６区（SD01）
2801	28	28	甕	−	−	−	灰原５区
2802	28	28	甕	−	−	−	灰原６区（SD01）
2901	29		甕A	34.3	−	−	灰原５区
2902	29		甕A	36.2	−	−	灰原５区
2903	29		甕A	36.2	−	−	灰原６区（SD01）
2904	29	30	甕A	38.0	−	−	灰原６区（SD01）
3001	30	29	甕A	37.5	−	−	２号窯主軸セクション（灰原３・４区）／第４層
3002	30	29	甕A	41.6	−	−	SD01・窯体１・２区
3101	31	30･31	甕（刻書）	−	−	−	２号窯　焚口下部
3201	32	31	甕（刻書）	−	−	−	SD01
3301	33	32	軒平瓦	長さ(25.1)	幅7.0	厚さ1.6	灰原３区（南）
3302	33	32	軒平瓦	長さ(4.2)	幅(10.0)	厚さ3.9	２号窯灰原（谷部）
3303	33	33	丸瓦	長さ(10.0)	幅(10.2)	厚さ1.2	灰原３・４区
3304	33	33	丸瓦	長さ(5.6)	幅(4.7)	厚さ1.4	２号窯灰原
3401	34	33	平瓦	長さ(14.3)	幅27.2	厚さ1.9	窯体内20
3402	34	33	平瓦	長さ(10.8)	幅(18.9)	厚さ1.7	窯体内51
3501	35	34	平瓦	長さ(16.5)	幅(13.6)	厚さ1.7	窯体内70
3502	35	34	平瓦	長さ(15.5)	幅(14.8)	厚さ1.3	窯体内71
3503	35	34	平瓦	長さ(14.0)	幅(12.7)	厚さ1.4	窯体１・２区
3601	36	34	平瓦	長さ(17.4)	幅(10.6)	厚さ2.4	作業場西端
3602	36	34	平瓦	長さ(9.2)	幅(8.2)	厚さ2.3	灰原６区西南
3603	36	34	平瓦	長さ(10.7)	幅(14.6)	厚さ1.9	SD01
3604	36	35	平瓦	長さ(11.6)	幅(14.6)	厚さ1.3	灰原３・４区
3605	36	35	平瓦	長さ(8.5)	幅(13.5)	厚さ1.4	灰原５区
3701	37	35	平瓦	長さ(14.3)	幅(15.4)	厚さ1.4	灰原５区
3702	37	35	平瓦	長さ(13.1)	幅(10.2)	厚さ1.3	灰原５・６区
3703	37	35	平瓦	長さ(13.7)	幅(12.4)	厚さ1.1	２号窯灰原（谷部）
3704	37	35	平瓦	長さ(11.9)	幅(10.8)	厚さ1.3	２号窯灰原（谷部）
3705	37	36	平瓦	長さ(10.2)	幅(13.4)	厚さ1.4	２号窯灰原Ｒ２
3801	38	36	平瓦	長さ(14.6)	幅(12.7)	厚さ1.5	灰原６区（SD01）
3802	38	36	平瓦	長さ(18.3)	幅(22.3)	厚さ1.6	灰原５区（SD01）
3803	38	36	平瓦	長さ(9.0)	幅(12.0)	厚さ1.4	SD01
3804	38	36	平瓦	長さ(8.0)	幅(7.1)	厚さ1.8	SX01
3901	39	37	平瓦	長さ(23.5)	幅23.3	厚さ1.6	灰原３・４区
3902	39	37	平瓦	長さ(14.9)	幅(9.7)	厚さ1.8	灰原３・４区
3903	39	37	平瓦	長さ(12.1)	幅(18.3)	厚さ1.2	灰原３・４区
4001	40	37	平瓦	長さ(9.8)	幅(15.3)	厚さ1.3	２号窯灰原（谷部）
4002	40	37	平瓦	長さ(13.6)	幅(18.1)	厚さ1.2	２号窯灰原（谷部）トレンチ

報告番号	図面番号	写真図版番号	器種	大きさ(cm)			出土遺構
				口径	器高	底径	
4003	40	38	平瓦	長さ(15.9)	幅(12.2)	厚さ1.3	2号窯灰原（谷部）
4004	40	38	平瓦	長さ(8.9)	幅(12.0)	厚さ1.3	SD01
4005	40	38	平瓦	長さ(15.4)	幅(13.3)	厚さ1.3	北側斜面裾部／灰色砂礫
4101	41	38	平瓦	長さ(15.8)	幅(13.2)	厚さ1.3	灰原6区
4102	41	38	平瓦	長さ(12.0)	幅(17.5)	厚さ1.4	2号窯灰原（窯体6区）
4103	41	39	平瓦	長さ(14.8)	幅(12.3)	厚さ1.3	灰原5区
4201	42	39	平瓦	長さ(11.8)	幅(10.4)	厚さ1.4	2号窯灰原
4202	42	39	平瓦	長さ(13.0)	幅(12.7)	厚さ1.4	SD01
4203	42	39	平瓦	長さ(8.4)	幅(13.9)	厚さ1.2	灰原5区（SD01）
4301	43		片口鉢	19.1	6.5	6.7	灰原3・4区
4302	43		片口鉢	(29.2)	11.2	9.0	灰原3区
4303	43		片口鉢	(30.8)	11.1	10.8	灰原3・4区
4304	43		片口鉢	(29.6)	−	−	灰原3・4区
4305	43		片口鉢	(27.4)	11.5	(9.8)	谷底　灰原3区（1・2号窯間）
4401	44	40	焼台	−	−	−	2号窯　焚口
4402	44	40	焼台	−	−	−	窯体床面48
4403	44	40	焼台	−	−	−	窯体床面30
4404	44	40	焼台	−	−	−	窯体床面44
4501	45	41	焼台	−	−	−	窯体床面46
4502	45	41	焼台	−	−	−	窯体
4503	45	41	焼台	−	−	−	窯体
4504	45	41	焼台	−	−	−	窯体床面7
4505	45		焼台	−	−	−	窯体床面4
4601	46	42	焼台	−	−	−	窯体床面6
4602	46	42	焼台	−	−	−	窯体
4603	46	42	焼台	−	−	−	窯体床面1
4604	46	42	焼台	−	−	−	窯体床面40
4701	47	43	焼台	−	−	−	窯体第2次床面下埋土
4702	47	43	焼台	−	−	−	窯体1・2区
4703	47	43	焼台	−	−	−	窯体
4704	47		焼台	−	−	−	窯体
4705	47	43	焼台	−	−	−	窯体第2次床面下埋土
4706	47		焼台				窯体第2次床面下埋土

鴨谷3号窯

報告番号	図面番号	写真図版番号	器種	大きさ(cm)			出土遺構
				口径	器高	底径	
4801	48	44	杯B	−	−	7.6	第2次窯体盛土層下灰層
4802	48	44	杯B	13.6	4.6	5.9	第2次窯体盛土層下灰層
4803	48	44	杯Ah	(14.4)	3.6	(7.2)	第2次窯体盛土層下灰層
4804	48	44	椀Ah2	(19.3)	−	−	第2次窯体盛土層下灰層
4805	48	44	杯B	(14.4)	−	−	第2次窯体盛土層下灰層
4806	48		壺	−	−	(5.8)	第2次窯体盛土層下灰層
4807	48		甕A	(39.3)	−	−	第2次窯体盛土層下灰層
4808	48	44	壺N	(17.8)	−	−	第2次窯体盛土層下灰層
4809	48	44	壺N	(16.4)	−	−	第2次窯体盛土層下灰層
4810	48	44	壺NⅡ2	−	−	−	第2次窯体盛土層下灰層
4811	48	44	平瓦	長さ(9.3)	幅(4.7)	厚さ2.0	第2次窯体盛土層下灰層
4901	49	45	杯Ah	(12.8)	3.5	(6.7)	第2次窯体右横横断セクション／灰層

報告番号	図面番号	写真図版番号	器種	大きさ(cm)			出土遺構
				口径	器高	底径	
4902	49	45	杯Ah	(14.7)	3.6	(8.1)	第2次窯体右横横断セクション／灰層
4903	49	45	杯Ah	−	(2.6)	7.5	第2次窯体右横横断セクション／灰層
4904	49	45	椀Ah2	(17.8)	−	−	第2次窯体右横横断セクション／灰層
4905	49		椀Ah2	(21.9)	−	−	第2次窯体右横横断セクション／灰層
4906	49	45	杯B	−	−	7.8	第2次窯体右横横断セクション／灰層
4907	49	45	椀Ah	−	−	7.6	第2次窯体右横横断セクション／灰層
4908	49		椀Ah(2)	−	−	(8.4)	第2次窯体右横横断セクション／灰層
4909	49	45	椀Ah2	(22.3)	8.9	8.5	第2次窯体右横横断セクション／灰層
4910	49	45	鉢X	(26.8)	9.7	(12.2)	第2次窯体右横横断セクション／灰層
4911	49	45	壺A蓋	15.1	−	−	第2次窯体右横横断セクション／灰層
4912	49	45	壺NⅡ2	−	−	(14.5)	第2次窯体盛土層下灰層
5001	50		甕	−	−	−	第2次窯体盛土層下灰層
5002	50	45	甕	−	−	−	第2次窯体盛土層下灰層
5003	50		甕	−	−	−	第2次窯体盛土層下灰層
5004	50	45	甕	−	−	−	第2次窯体右横横断セクション／灰層
5005	50	45	甕	−	−	−	第2次窯体盛土層下灰層
5006	50	45	甕	−	−	−	第2次窯体盛土層下灰層
5101	51	46	杯Ah	(12.2)	3.8	(7.2)	第1次操業　作業場土器溜まり
5102	51	46	杯Ah	(12.3)	3.4	(7.6)	第1次操業　作業場土器溜まり
5103	51	46	杯Ah	(13.4)	3.4	(7.3)	第1次操業　作業場土器溜まり
5104	51	46	杯B	(14.7)	5.1	(8.1)	第1次操業　作業場土器溜まり
5105	51	46	杯B	(15.6)	6.1	(7.0)	第1次操業　作業場土器溜まり
5106	51	46	杯B	−	−	(8.0)	第1次操業　作業場土器溜まり
5107	51	46	杯B	−	−	(6.2)	第1次操業　作業場土器溜まり
5108	51		杯B	−	2.5	(7.3)	第1次操業　作業場土器溜まり
5109	51	46	杯B	−	−	(7.5)	第1次操業　作業場土器溜まり
5110	51	46	台付皿Ah	−	−	(6.9)	第1次操業　作業場土器溜まり
5111	51	46	椀Ah2	(16.0)	6.0	7.6	第1次操業　作業場土器溜まり
5112	51	46	椀Ah2	−	−	8.2	第1次操業　作業場土器溜まり
5113	51	46	椀Ah2	16.4	6.3	(8.7)	第1次操業　作業場土器溜まり
5114	51	46	椀Ah2	−	−	8.0	第1次操業　作業場土器溜まり
5115	51		椀Ah2	−	−	(6.9)	第1次操業　作業場土器溜まり
5116	51	46	椀Ah2	−	−	(7.9)	第1次操業　作業場土器溜まり
5201	52	47	注口	−	−	−	第1次操業　作業場土器溜まり
5202	52		鉢DⅠ	−	−	(12.6)	第1次操業　作業場土器溜まり
5203	52		壺N(Ⅱ2)	(20.6)	−	−	第1次操業　作業場土器溜まり
5204	52	47	壺N(Ⅱ2)	(19.6)	−	−	第1次操業　作業場土器溜まり
5205	52		壺NⅡ2	−	−	−	第1次操業　作業場土器溜まり
5206	52	48	壺NⅡ2	−	−	12.4	第1次操業　作業場土器溜まり
5207	52	47	壺NⅡ2	−	−	(14.3)	第1次操業　作業場土器溜まり
5301	53		壺NⅡ2	−	−	(13.4)	第1次操業　作業場土器溜まり
5302	53	48	壺NⅡ2	−	−	(13.8)	第1次操業　作業場土器溜まり
5303	53	47	壺NⅡ2	−	−	13.7	第1次操業　作業場土器溜まり
5304	53	47	壺NⅡ2	−	−	(12.6)	第1次操業　作業場土器溜まり付近
5401	54		甕A	29.6	−	−	第1次操業　作業場土器溜まり
5402	54	48	甕A	40.0	−	−	第1次操業　作業場土器溜まり
5403	54	48	甕	−	−	−	第1次操業　作業場土器溜まり
5404	54		甕	−	−	−	第1次操業　作業場土器溜まり
5405	54	48	甕	−	−	−	第1次操業　作業場土器溜まり
5406	54	48	甕	−	−	−	第1次操業　作業場土器溜まり

報告番号	図面番号	写真図版番号	器種	大きさ(cm)			出土遺構
				口径	器高	底径	
5501	55	49	杯Ah	(13.6)	3.6	7.1	灰原L１区
5502	55		杯Ah	(13.6)	4.2	(7.1)	灰原セクション１（XS５）
5503	55	49	杯Ah	13.4	3.7	7.6	灰原R２区
5504	55	49	杯Ah	(13.6)	3.6	7.8	灰原R２区東肩
5505	55		杯Ah	(13.8)	3.4	(7.0)	灰原L１区
5506	55		杯Ah	(14.8)	3.1	(7.1)	灰原L１区
5507	55		杯Ah	(14.7)	3.8	(7.6)	灰原L１区
5508	55		杯Ah	(13.9)	3.8	(6.1)	灰原B断面第４層
5509	55		杯Ah	−	−	(7.6)	灰原セクション３（XN５）第13層
5510	55		杯Ah	−	−	(8.7)	灰原セクション３（XN５）第13層
5511	55		杯Ah	(16.2)	6.3	(7.6)	灰原セクション３（XN５）第13層
5512	55		杯Ah	(17.5)	5.0	(8.0)	灰原R１区
5513	55		杯B	(13.3)	5.2	(6.6)	灰原R２区
5514	55	49	杯B	(14.5)	6.3	7.6	灰原R２区
5515	55	49	杯B	(14.7)	6.4	(7.7)	灰原R１区
5516	55		杯B	(16.7)	6.1	7.1	灰原セクション３（XN５）第13層
5517	55	49	杯B	(15.5)	5.7	(7.0)	灰原R２区東肩
5518	55		杯B	−	(5.1)	(7.6)	灰原セクション３（XN５）第13層
5519	55	49	椀Ah1	(17.0)	7.0	8.0	灰原R２区
5520	55	49	椀Ah1	(17.3)	6.0	(8.8)	灰原R２区東肩
5521	55		椀Ah	−	−	(7.7)	灰原セクション３（XN５）第13層
5522	55		椀Ah2	(19.0)	6.7	(8.2)	灰原セクション３（XN５）第13層
5523	55		椀Ah2	(17.6)	6.5	8.3	灰原R２区
5524	55		椀Ah2	(16.0)	7.4	8.3	灰原R１区
5601	56	50	壺Mh	−	(10.3)	(7.9)	灰原セクション３（XN５）第13層
5602	56	49	壺	−	−	(7.1)	確認トレンチ45
5603	56	49	壺Mh	−	−	(8.3)	灰原R２区東
5604	56	49	壺Lh	−	−	(10.1)	灰原R２区
5605	56	50	鉢DⅠ	(14.9)	−	−	灰原R１区
5606	56		鉢？	−	−	(14.5)	灰原R１区
5607	56	50	壺A？	−	−	−	灰原セクション３（XN５）第10層
5608	56	50	鉢A	(28.1)	−	−	灰原R２区東肩
5609	56	50	鉢DⅠ	(19.1)	15.4	(11.4)	灰原R２区・第１次操業　作業場土器溜まり付近
5610	56	50	鉢DⅠ	(25.9)	−	−	灰原セクション２（X０・中央）第10層
5611	56	50	鉢A	−	−	(15.5)	灰原セクション３（XN５）第７層
5612	56	50	鉢A	(22.0)	16.7	(12.8)	灰原L１区
5701	57	50	甕A	(28.8)	−	−	灰原R１区
5702	57		甕A	30.2	−	−	灰原L１区
5703	57		甕A	29.4	−	−	灰原R１区
5704	57		甕A	(35.0)	−	−	灰原セクション３（XN５）第10層
5801	58		杯Ah	(13.8)	3.3	6.6	第１床面
5802	58		杯Ah	(13.1)	3.6	(6.8)	第１床面
5803	58	51	壺N(Ⅱ2)	(13.8)	−	−	第１床面
5804	58	51	甕	−	−	−	第１床面
5805	58	51	甕	−	−	−	第１床面
5806	58		杯Ah	(10.7)	3.4	(7.2)	第１床面
5807	58		杯Ah	(14.4)	3.6	(6.9)	第１床面
5808	58	51	甕	−	−	−	第１床面
5809	58	51	椀Ci2	11.8	5.7	6.2	第２床面
5810	58	51	椀Ci1	11.3	4.7	6.1	第２床面

報告番号	図面番号	写真図版番号	器種	大きさ(cm)			出土遺構
				口径	器高	底径	
5811	58	51	壺Li	−	−	10.0	第2床面
5812	58	51	杯Ah	(13.3)	3.4	6.8	第2床面
5813	58	51	甕A	(29.8)	−	−	第2床面埋土層
5814	58		甕A	(27.8)	−	−	第2床面埋土層
5815	58	51	甕	−	−	−	第2床面埋土層
5901	59	52	杯Ah	(13.2)	3.4	6.8	第2床面埋土層
5902	59		杯Ah	(13.5)	4.4	(7.4)	第2床面埋土層
5903	59		杯Ah	(10.7)	3.4	(5.5)	第2床面埋土層
5904	59		杯Ah	(13.4)	(3.9)	(8.1)	第2床面埋土層
5905	59		椀Ci1	(12.7)	4.4	(6.7)	第2床面埋土層
5906	59		椀Ci1	(12.2)	5.2	(2.9)	第2床面埋土層
5907	59		椀Ci1	(12.6)	5.2	(6.7)	第2床面埋土層
5908	59		椀Ci1	(13.2)	5.2	6.5	第2床面埋土層
5909	59		椀Ci1	(13.3)	5.2	6.7	第2床面埋土層
5910	59		椀Ci1	(13.5)	5.8	7.4	第2床面埋土層
5911	59		椀Ci1	(13.9)	5.0	7.0	第2床面埋土層
5912	59	52	椀Ci1	13.5	5.1	6.7	第2床面埋土層
5913	59	52	椀Ci1	(13.1)	5.1	7.0	第2床面埋土層
5914	59		椀Ci1	13.2	4.5	8.5	第2床面埋土層
5915	59		椀Ci1	(13.8)	5.2	7.0	第2床面埋土層
5916	59	52	椀Ci1	12.2	4.3	5.4	第2床面埋土層
6001	60		椀Ci2	(13.2)	5.1	6.5	第2床面埋土層
6002	60		椀Ci2	(13.9)	5.7	6.4	第2床面埋土層
6003	60		椀Ci2	(13.5)	6.2	(7.1)	第2床面埋土層
6004	60		椀Ci2	−	−	8.5	第2床面埋土層
6005	60		椀Ci2	(17.2)	6.8	(8.2)	第2床面埋土層
6006	60		椀Ci2	(16.8)	6.4	8.5	第2床面埋土層
6007	60		椀Ci2	(15.5)	5.7	(7.1)	第2床面埋土層
6008	60		椀Ai1	(16.2)	6.0	8.0	第2床面埋土層
6009	60	52	椀Ai1	(15.9)	6.2	8.7	第2床面埋土層
6010	60		椀Ai1	(15.7)	6.1	8.2	第2床面埋土層
6011	60		椀Ai1	−	−	7.6	第2床面埋土層
6012	60		壺N	(18.6)	−	−	第2床面埋土層
6013	60	52	壺NⅠ	−	−	−	第2床面埋土層
6014	60		鉢DⅡ1	(26.4)	−	−	第2床面埋土層
6015	60		鉢DⅡ1	(24.9)	−	−	第2床面埋土層
6101	61	52	甕	−	−	−	第2床面埋土層
6102	61	52	甕	−	−	−	第2床面埋土層
6103	61	52	甕	−	−	−	第2床面埋土層
6201	62		杯Ah	(14.8)	3.5	(7.5)	第3床面
6202	62		杯Ah	(13.6)	3.4	7.1	第3床面
6203	62	53	杯Ah	13.6	3.7	(7.5)	第3床面
6204	62		杯Ah	(14.8)	3.5	(7.8)	第3床面
6205	62		杯Ah	(14.5)	(3.4)	(8.3)	第3床面
6206	62		椀Ci1	(11.9)	5.0	(6.5)	第3床面
6207	62		椀Ci1	(13.4)	5.2	6.2	第3床面
6208	62	53	椀Ci1	(13.8)	5.3	(6.2)	第3床面
6209	62		椀Ci1	(14.2)	5.0	(7.4)	第3床面
6210	62		椀Ci1	−	−	6.1	第3床面
6211	62		椀Ci2	(13.4)	5.4	6.8	第3床面

報告番号	図面番号	写真図版番号	器種	大きさ(cm)			出土遺構
				口径	器高	底径	
6212	62	53	椀Ci2	(13.8)	5.5	7.2	第3床面
6213	62		椀Ci2	(12.8)	5.5	6.6	第3床面
6214	62		椀Ci2	−	−	8.7	第3床面
6215	62		椀Ai1	(16.0)	6.2	8.1	第3床面
6216	62		椀Ai1	(16.5)	7.4	7.7	第3床面
6217	62	53	台付皿Ci	9.1	1.9	4.9	第3床面
6218	62	53	台付皿Ａｉ	9.7	2.3	7.0	第3床面
6219	62	53	鉢DⅡ1	(19.6)	−	−	第3床面
6220	62		鉢DⅡ1	(27.3)	−	−	第3床面
6221	62		壺N	(14.8)	−	−	第3床面
6301	63	53	甕	−	−	−	第3床面
6302	63	53	甕	−	−	−	第3床面
6303	63	53	甕	−	−	−	第3床面
6304	63	53	甕	−	−	−	第3床面
6305	63	53	甕	−	−	−	第3床面
6401	64		椀Ci1	(12.5)	5.2	(5.6)	第4床面
6402	64	54	椀Ci1	(12.8)	5.3	6.0	第4床面
6403	64	54	椀Ci1	(12.9)	5.2	5.8	第4床面
6404	64	54	椀Ci1	12.8	5.9	6.4	第4床面
6405	64		椀Ci2	(15.6)	6.7	7.2	第4床面
6406	64		椀Ci2	(16.3)	6.7	7.2	第4床面
6407	64		椀Ci2	(16.8)	6.3	(7.6)	第4床面
6408	64		椀Ci2	(17.0)	6.4	7.8	第4床面
6409	64		椀Ci2	(15.5)	6.5	7.4	第4床面
6410	64	54	椀Ci2	(15.3)	6.4	7.8	第4床面
6411	64	54	椀Ci2	(15.3)	6.7	7.0	第4床面
6412	64	54	椀Ci2	(17.1)	7.0	(7.8)	第4床面
6413	64		椀Ai1	(14.8)	6.2	18.3	第4床面
6414	64		椀Ai1	(15.5)	5.9	8.1	第4床面
6415	64		椀Ai1	(15.5)	6.4	(8.4)	第4床面
6416	64	54	椀Ai1	(16.1)	6.5	8.4	第4床面
6417	64	54	椀Ai1	(15.3)	6.4	8.1	第4床面
6418	64	54	椀Ai1	(15.5)	6.0	8.6	第4床面
6419	64		椀Ai1	(18.5)	8.0	9.2	第4床面
6501	65	55	杯Ａｉ	(11.8)	3.3	5.4	第4床面
6502	65		杯Ａｉ	(10.6)	3.0	6.1	第4床面
6503	65	55	杯Ａｉ	11.4	3.2	5.5	第4床面
6504	65	55	杯Ａｉ	(11.5)	3.8	5.7	第4床面
6505	65	55	杯Ah	(13.6)	3.5	8.1	第4床面
6506	65	55	杯Ah	(13.4)	3.3	(7.3)	第4床面
6507	65	55	杯Ah	(14.4)	3.4	(8.6)	第4床面
6508	65	55	鉢DⅡ1	25.1	14.8	12.6	第4床面
6509	65		鉢DⅡ1	(27.0)	−	−	第4床面
6510	65	55	鉢DⅡ1	21.3	14.7	12.2	第4床面
6511	65	55	鉢DⅡ1	25.3	13.4	11.8	第4床面
6601	66	56	壺NⅡ2	(18.9)	−	−	第4床面
6602	66		壺NⅡ2	(17.0)	−	−	第4床面
6603	66	56	壺NⅡ2	−	−	−	第4床面
6604	66		土師質甕	(21.2)	−	−	第4床面
6605	66	56	壺L	−	−	−	第4床面

報告番号	図面番号	写真図版番号	器種	大きさ(cm)			出土遺構
				口径	器高	底径	
6606	66	56	壺A（四耳壺）	12.0	38.7	19.5	第４床面
6701	67		甕A	(28.8)	−	−	第４床面
6702	67		甕A	−	−	−	第４床面
6703	67		甕A	(62.0)	−	−	第４床面
6704	67	56	甕A	(40.0)	−	−	第４床面
6705	67	56	甕	−	−	−	第４床面
6801	68		椀Ci1	(11.5)	5.7	(5.2)	灰原Ｌ１区
6802	68		椀Ci1	(11.6)	5.5	6.6	灰原Ｌ１区
6803	68		椀Ci1	(11.7)	(5.9)	5.6	灰原Ｒ２区
6804	68	57	椀Ci1	(12.2)	5.1	7.0	灰原Ｒ２区
6805	68	57	椀Ci1	(12.3)	5.2	6.5	灰原セクション２（Ｘ０・中央）第８層
6806	68		椀Ci1	(13.5)	5.0	5.3	灰原セクション２（Ｘ０・中央）第８層
6807	68	57	椀Ci1	(12.8)	5.0	6.0	灰原Ｒ２区東肩
6808	68	57	椀Ci1	12.8	6.2	6.2	灰原Ｒ２区
6809	68	57	椀Ci1	(12.8)	5.3	6.5	灰原Ｒ２区
6810	68		椀Ci1	(13.0)	5.3	(6.5)	灰原Ｌ１区
6811	68	57	椀Ci1	13.0	5.4	7.2	灰原Ｒ２区
6812	68	57	椀Ci1	13.0	5.2	7.1	灰原Ｒ２区
6813	68	57	椀Ci1	13.2	5.3	6.1	灰原Ｌ１区
6814	68	57	椀Ci1	13.1	5.3	6.7	灰原Ｒ２区
6815	68	57	椀Ci1	13.0	5.4	6.6	灰原Ｒ１区
6816	68		椀Ci1	13.2	5.7	6.4	灰原Ｒ２区
6817	68		椀Ci1	(13.1)	5.1	6.3	灰原Ｌ１区
6818	68		椀Ci1	(13.5)	5.4	6.6	灰原Ｌ１区
6819	68	57	椀Ci1	13.3	5.0	6.0	灰原Ｒ１区
6820	68		椀Ci1	(13.6)	5.4	6.0	灰原セクション２（Ｘ０・中央）第８層
6821	68	57	椀Ci1	14.1	5.0	6.5	灰原セクション３（ＸＮ５）第７層
6822	68	57	椀Ci1	12.4	5.4	5.8	灰原Ｒ２区
6823	68	57	椀Ci1	12.6	4.8	6.6	灰原Ｒ１区
6824	68	57	椀Ci1	(13.3)	5.1	6.8	灰原セクション３（ＸＮ５）第７層
6901	69		椀Ci2	(13.7)	6.0	(6.3)	灰原Ｌ１区
6902	69	58	椀Ci2	14.0	7.1	(7.1)	灰原Ｒ１区
6903	69	58	椀Ci2	(15.1)	5.9	7.3	灰原Ｒ２区東肩
6904	69	58	椀Ci2	(15.1)	6.2	7.5	灰原Ｌ１区
6905	69	58	椀Ci2	(15.2)	6.2	(7.2)	灰原Ｒ１区
6906	69	58	椀Ci2	(15.5)	6.0	6.6	灰原セクション２（Ｘ０・中央）第７層
6907	69		椀Ci2	(15.4)	5.8	7.3	灰原セクション２（Ｘ０・中央）第10層
6908	69	58	椀Ci2	(15.6)	6.5	7.6	灰原セクション２（Ｘ０・中央）第13層
6909	69	58	椀Ci2	(16.0)	6.2	7.3	灰原Ｒ２区
6910	69		椀Ci2	(15.8)	6.6	6.5	灰原Ｌ１区
6911	69	58	椀Ci2	(16.4)	6.4	(8.7)	灰原Ｒ２区東肩
6912	69		椀Ci2	(16.0)	6.4	7.8	灰原　Ｌ１とＲ１のセクション
6913	69		椀Ci2	16.2	6.6	7.5	灰原Ｒ２区東肩
6914	69		椀Ci2	(16.1)	6.1	8.3	灰原Ｒ２区
6915	69	58	椀Ci2	(12.5)	5.4	5.9	灰原Ｌ１区
6916	69		椀Ci2	(16.4)	6.4	(7.8)	灰原Ｌ１区
6917	69		椀Ci2	(17.6)	7.3	8.2	灰原Ｒ２区東肩
6918	69	58	椀Ci2	(15.0)	6.9	(6.5)	灰原Ｌ２区
6919	69	58	椀Ci2	(16.4)	5.0	7.3	灰原Ｌ１区
6920	69	58	椀Ci2	(17.9)	6.6	8.0	灰原Ｌ１区

報告番号	図面番号	写真図版番号	器種	大きさ(cm)			出土遺構
				口径	器高	底径	
7001	70	59	椀Ai1	15.7	6.4	7.6	灰原L１区
7002	70	59	椀Ai1	(15.2)	6.4	(7.8)	灰原R１区
7003	70	59	椀Ai1	(15.2)	6.6	9.1	灰原R２区
7004	70	59	椀Ai1	(15.3)	6.1	7.8	灰原R２区
7005	70	59	椀Ai1	15.4	6.1	8.5	灰原R２区
7006	70	59	椀Ai1	15.8	6.6	8.3	灰原L１区
7007	70	59	椀Ai1	15.2	7.0	7.8	灰原R１区
7008	70		椀Ai1	(15.4)	6.3	8.5	灰原L１区
7009	70	59	椀Ai1	(15.8)	6.0	7.8	灰原R２区
7010	70	59	椀Ai1	(15.8)	6.1	8.4	灰原R１区
7011	70	59	椀Ai1	(16.0)	5.8	8.8	灰原R２区
7012	70		椀Ai1	(16.2)	6.0	9.2	灰原R２区
7013	70		椀Ai1	(16.0)	6.7	(6.4)	灰原R１区
7014	70	59	椀Ai1	(16.0)	6.5	7.5	灰原R１区
7015	70		椀Ai1	(16.4)	6.7	7.9	灰原R１区
7016	70		椀Ai1	(16.4)	6.1	8.0	灰原R２区
7017	70		椀Ai1	(16.5)	6.4	7.7	灰原R１区
7018	70	59	椀Ai1	16.8	6.7	8.7	灰原R２区
7019	70		椀Ai1	(16.9)	6.9	8.6	灰原R２区
7020	70		椀Ai1	(16.9)	6.1	8.5	灰原L１区
7021	70		椀Ai1	(17.7)	6.2	(8.6)	灰原R１区
7022	70	59	椀Ai1	14.4	5.7	7.8	灰原セクション２（X０・中央）第８層
7023	70	59	椀Ai1	(15.4)	6.8	8.6	灰原R２区
7024	70	59	椀Ai1	15.3	5.8	7.5	灰原セクション３（XN５）第10層
7101	71	60	椀Ai2	16.1	7.1	8.3	灰原R２区
7102	71		椀Ai2	(16.3)	7.0	7.4	灰原R２区東肩
7103	71	60	椀Ai2	(16.2)	6.8	(7.5)	灰原R２区
7104	71	60	椀Ai2	(16.6)	7.1	(8.7)	灰原R２区
7105	71	60	椀Ai2	(16.6)	7.1	8.5	灰原R２区
7106	71		椀Ai2	(16.9)	7.8	9.0	灰原R２区
7107	71	60	椀Ai2	17.2	7.8	(8.4)	灰原R２区
7108	71		椀Ai2	−	−	7.2	灰原R１区
7109	71		椀Ai2	−	−	(8.0)	灰原R２区東肩
7110	71	60	椀Ai2	(17.6)	6.6	(8.2)	灰原R２区
7111	71	60	椀Ai2	(15.5)	6.9	8.2	中央横断セクション
7112	71		椀Ai2	(17.0)	6.5	8.2	焚口右横　横断セクション
7113	71	60	台付皿Ai	11.7	2.8	7.6	灰原セクション２（X０・中央）第10層
7114	71	60	杯Ａｉ	(11.9)	3.4	5.8	灰原L１区
7115	71	60	杯Ａｉ	(12.5)	3.4	6.6	灰原セクション３（XN５）第３層
7116	71	60	杯Ａｉ	(15.2)	5.0	7.2	灰原R２区
7201	72	61	壺NⅡ2	−	28.7	11.2	灰原R２区
7202	72	62	壺NⅡ2	(18.9)	34.6	(12.2)	灰原セクション２（X０・中央）第７層
7203	72	62	壺NⅡ2	17.2	(28.9)	13.0	灰原セクション３（XN５）第10層
7204	72	61	壺NⅡ2	−	(33.8)	15.2	灰原セクション２（X０・中央）第７層
7205	72	61	壺NⅡ2	−	−	11.2	灰原L１区
7301	73	63	水瓶	6.1	−	−	灰原L１区
7302	73		壺M？	(5.6)	−	−	確認トレンチ45
7303	73		壺M？	(3.9)	−	−	第１次操業作業場付近
7304	73	63	壺M？	4.2	−	−	灰原R１区
7305	73	63	壺M？	5.3	−	−	灰原R１区

報告番号	図面番号	写真図版番号	器種	大きさ(cm)			出土遺構
				口径	器高	底径	
7306	73		水瓶？	(6.0)	−	−	灰原R２区東
7307	73		水瓶？	(6.9)	−	−	灰原セクション３（XN５）第10層
7308	73	63	壺	−	−	−	灰原L１区
7309	73	63	水瓶？		−	(9.2)	灰原R１区
7310	73	64	壺Li	10.9	−	−	灰原R２区東肩
7311	73	64	壺Li	11.2	−	−	灰原R２区東肩
7312	73	63	壺Li	(9.4)	−	−	灰原R２区
7313	73	64	壺Li	11.8	16.1	(10.3)	灰原R２区
7314	73	64	壺Li	(12.0)	15.0	11.2	灰原セクション３（XN５）第10層
7315	73	64	壺Li	−	−	−	灰原R２区
7316	73		壺	−	−	(7.8)	灰原R１区
7317	73		壺	−	−	9.8	灰原R１区
7318	73	63	壺Li？	−	−	(9.8)	灰原R２区
7319	73		水瓶？	−	−	(11.1)	灰原R２区
7320	73	63	水瓶？	−		11.2	灰原R２区東肩
7401	74	65	風字硯	−	−	−	灰原
7402	74	65	風字硯	−	−	−	灰原L１区
7403	74	65	風字硯	−	−	−	灰原L１区
7404	74	65	風字硯	−	−	−	灰原R２区
7405	74	65	人形	−	高さ7.5	−	灰原R１区
7501	75		鉢DⅡ1	(24.3)	11.7	11.6	灰原L１区
7502	75		鉢DⅡ1	(19.7)	−	−	灰原L１区
7503	75	66	鉢DⅡ1	(24.7)	12.3	(12.2)	灰原L１区
7504	75		鉢DⅡ1	(18.2)	(11.0)	(11.0)	灰原R２区東端
7505	75		鉢DⅡ1	(27.9)	−	−	灰原L１区
7506	75	66	鉢DⅡ1	(24,3)	12.9	13.0	灰原R１区
7507	75	66	鉢DⅡ1	−	−	(13.1)	灰原L１区
7508	75	66	鉢DⅡ1	−	−	11.8	灰原
7509	75	66	鉢A	(22.8)	12.4	(12.8)	灰原R２区
7601	76	67	甕A	27.4	−	−	灰原R１区
7602	76	67	甕A	30.3	−	−	灰原セクション３（XN５）第10層
7701	77	67	甕A	29.8	−	−	灰原セクション３（XN５）第10層
7702	77	68	甕A	34.8	−	−	灰原L２区
7801	78	68	甕A	33.2	59.0	−	灰原R１区
7802	78		甕A	37.9	−	−	灰原R２区東肩
7901	79		甕A	(40.8)	−	−	灰原R１区
7902	79	69	甕A	40.9	−	−	灰原セクション３（XN５）第10層
8001	80	70	甕A	(41.4)	−	−	灰原L１区
8002	80	70	甕A	(41.7)	−	−	灰原R１区
8101	81	70	甕A	(36.1)	76.2	−	灰原セクション３（XN５）第10層
8102	81		甕A	−	−	−	灰原R１区
8201	82	70	甕A	(49.0)	−	−	灰原L１区
8202	82		甕A	46.4	−	−	灰原L１区
8203	82	70	甕A	42.0	−		灰原L２区
8301	83	71	甕（刻書）	−	−	−	灰原R１区
8302	83	71	甕（刻書）	−	−	−	灰原R１区
8401	84	71	甕（刻書）	−	−	−	表土
8402	84	71	甕（刻書）	−	−	−	灰原R１区

梟谷１号窯

※黒色土＝灰層

報告番号	図面番号	写真図版番号	器種	大きさ(cm)			出土遺構
				口径	器高	底径	
8501	85	72	小皿Ａｉ	10.5	2.4	5.4	窯体内
8502	85	72	台付皿Ｃｉ	7.9	1.9	4.4	窯体内
8503	85	72	椀Ci1	(14.9)	4.7	(5.2)	窯体内
8504	85	72	椀Ci1	(12.6)	5.1	5.2	窯体内
8505	85	72	小皿Ａｉ	10.1	2.4	6.3	窯体内
8506	85		壷N	(19.7)	−	−	窯体内
8507	85		壷N	(19.8)	−	−	窯体２区セクション
8508	85		鉢D2	(27.9)	−	−	窯体内
8509	85		椀Ci1	(12.7)	4.3	5.8	最終操業時の焚口
8510	85		椀Ci1	(12.9)	5.1	5.5	灰原Ｒ２区赤褐色土
8511	85		椀Ci1	(13.4)	4.9	5.4	最終操業時の焚口
8512	85		椀Ci1	(13.2)	5.3	(5.4)	最終操業時の焚口
8513	85		椀Ci1	(13.7)	4.8	4.9	最終操業時の焚口
8514	85	72	椀Ci1	(13.2)	5.2	5.4	最終操業時の焚口
8515	85		椀Ci1	(13.9)	5.0	(6.3)	最終操業時の焚口
8516	85		椀Ci1	(15.0)	4.8	(6.4)	灰原Ｌ２区赤褐色
8517	85	72	椀Ci2	(15.6)	5.9	(6.7)	最終操業時の焚口
8518	85	72	椀Ci2	(15.6)	6.0	6.2	最終操業時の焚口
8519	85	72	椀Ci2	(15.9)	5.8	6.0	灰原Ｒ２区赤褐色土
8520	85		椀Ci2	(14.9)	−	−	灰原Ｌ２区赤褐色土
8521	85		鉢D2	(24.0)	−	−	灰原Ｌ２区赤褐色土
8522	85		壷N	(16.0)	−	−	最終操業時の焚口
8601	86		椀Ci2	(14.3)	5.4	6.0	灰原Ｌ１区黒色土
8602	86		椀Ci2	(14.4)	6.5	(5.2)	灰原主軸セクション　赤褐土上面
8603	86	73	椀Ci2	14.6	5.7	5.1	灰原Ｌ１区上層灰層（黒色土）
8604	86	73	椀Ci2	15.0	5.6	6.2	灰原Ｒセクション　褐･黒色土(灰層)
8605	86		椀Ci2	(15.1)	5.7	5.5	灰原Ｌ１区黒色土
8606	86		椀Ci2	(15.2)	5.8	5.7	灰原Ｌ１区
8607	86	73	椀Ci2	(15.2)	5.9	6.0	灰原
8608	86	73	椀Ci2	(15.3)	6.1	6.7	灰原Ｒ１区上層灰層
8609	86		椀Ci2	(15.4)	6.0	6.5	灰原Ｌ１区黒色土
8610	86		椀Ci2	(15.5)	5.6	6.6	灰原Ｒセクション
8611	86	73	椀Ci2	(15.6)	5.7	6.0	灰原Ｌ２区黒色土
8612	86	73	椀Ci2	(15.6)	6.1	5.6	灰原縦断セクション最上層灰層
8613	86	73	椀Ci2	(15.6)	5.7	(5.2)	灰原Ｌ２区黒色土上面
8614	86		椀Ci2	(15.7)	6.1	6.0	灰原Ｌ１区黒色土
8615	86	73	椀Ci2	(16.0)	6.1	(5.7)	灰原Ｌ１区黒色土
8616	86		椀Ci2	(16.0)	5.9	6.4	灰原Ｒ１区黒色土
8617	86		椀Ci2	(16.4)	6.4	6.1	灰原Ｌ１区黒色土
8618	86	73	椀Ci2	(16.5)	5.4	(6.7)	灰原
8619	86	73	椀Ci2	14.8	6.0	6.6	灰原Ｌ１区黒色土
8620	86	73	椀Ci2	15.7	6.1	5.9	灰原Ｌ１区黒色土
8621	86	73	椀Ci2	(16.2)	6.7	6.3	灰原Ｌ１区黒色土
8701	87		椀Ci1	(12.4)	4.6	4.7	灰原Ｌ１区黒色土
8702	87	74	椀Ci1	12.5	5.0	4.9	灰原Ｌ１区黒色土
8703	87	74	椀Ci1	12.6	5.1	4.6	灰原Ｌ１区黒色土
8704	87		椀Ci1	(12.7)	5.6	5.5	灰原縦断セクション
8705	87		椀Ci1	(12.8)	5.1	5.6	灰原Ｌ１区上層灰層（黒色土）

報告番号	図面番号	写真図版番号	器種	大きさ(cm)			出土遺構
				口径	器高	底径	
8706	87		椀Ci1	(12.9)	5.2	5.1	灰原L１区黒色土
8707	87		椀Ci1	(13.3)	4.7	(5.7)	灰原L１区黒色土
8708	87	74	椀Ci1	13.4	4.5	5.8	灰原
8709	87		椀Ci1	13.4	5.2	5.0	灰原Lセクション　褐・黒色土
8710	87		椀Ci1	(13.6)	5.2	5.6	灰原L１区黒色土
8711	87	74	椀Ci1	(13.8)	5.2	5.6	灰原L１区最上層灰層
8712	87		椀Ci1	(13.8)	5.2	(5.4)	灰原L１区上層灰層
8713	87		椀Ci1	(13.9)	5.2	5.2	灰原L－１上層灰層
8714	87		椀Ci1	(13.9)	5.8	5.5	灰原L１区黒色土
8715	87	74	椀Ci1	14.0	5.4	5.5	灰原L１区黒色土
8716	87		椀Ci1	(14.0)	4.8	5.2	灰原R１区上層灰層
8717	87	74	椀Ci1	14.1	5.2	5.5	灰原Rセクション　褐･黒色土(灰層)
8718	87		椀Ci1	(15.5)	6.7	6.4	灰原L１区黒色土
8719	87	74	椀Ci1	(13.9)	5.2	6.1	灰原Rセクション　褐･黒色土(灰層)
8720	87	74	椀Ci1	(14.6)	5.8	5.4	灰原R１区上層灰層
8721	87	74	椀Ci1	16.2	6.2	7.3	灰原Rセクション　褐･黒色土
8722	87	74	椀Ai	－	－	(7.0)	灰原L２区黒色土上面
8723	87	74	椀Ai	－	－	(8.6)	灰原L２区黒色土上面
8724	87	74	椀Ai	－	－	(8.0)	灰原L２区黒色土上面
8725	87		椀Ai	－	－	(7.0)	灰原L２区黒色土上面
8726	87	74	椀Ai	－	－	(8.1)	灰原L２区黒色土上面
8801	88		小皿Ai	(9.6)	2.0	(5.7)	灰原L１区黒色土
8802	88		小皿Ai	(9.7)	2.0	(5.0)	灰原L１区黒色土
8803	88		小皿Ai	(9.7)	2.0	(6.0)	灰原L１区黒色土
8804	88		小皿Ai	(10.6)	2.0	(6.6)	灰原L１区黒色土
8805	88		小皿Ai	(10.9)	2.5	(6.0)	灰原L１区黒色土
8806	88		小皿Ai	(10.9)	2.2	(5.3)	灰原L１区黒色土
8807	88		小皿Ai	(11.2)	1.4	5.8	灰原L１区黒色土
8808	88		小皿Ai	(11.9)	2.2	(5.6)	灰原黒色土
8809	88		小皿Ai	(10.0)	1.6	(5.2)	灰原L１区
8810	88	75	小皿Ai	10.1	2.0	5.2	灰原黒色土
8811	88	75	小皿Ai	10.2	2.1	5.2	灰原L１区黒色土
8812	88	75	托状形皿	(7.5)	2.6	3.9	灰原L１区
8813	88		壺	(8.8)	－	－	灰原L１区
8814	88	75	土師質壺？	(11.4)	－	－	灰原L１区
8815	88	75	壺N皿1	(21.4)	(32.3)	(13.3)	灰原L２区黒色土上面
8816	88		壷N Ⅲ1	(23.8)	－	－	灰原表土
8817	88	75	壷	12.0	－	－	灰原L１区黒色土
8818	88		甕	－	－	(16.4)	灰原Lセクション　褐･黒色土
8901	89	76	鉢DⅡ2b	(26.3)	(8.8)	(12.6)	灰原
8902	89	76	鉢DⅡ2b	(26.2)	9.4	12.0	灰原L２区黒色土上面
8903	89	76	鉢DⅡ2b	(29.0)	9.8	12.2	灰原L２区黒色土
8904	89	76	鉢DⅡ2b	(24.8)	－	－	灰原L２区黒色土上面（赤褐色土）
8905	89	76	鉢DⅡ2b	(20.9)	－	－	灰原L１区上層灰層
8906	89	76	鉢DⅡ2b	－	－	12.5	灰原L１区黒色土
8907	89	76	鉢DⅡ2b	－	－	－	灰原L２区赤褐色土
8908	89		鉢DⅡ2b	－	－	(11.1)	灰原L２区（東端溝）２層　灰褐色土
8909	89		鉢DⅡ2b	－	－	(10.6)	灰原L２区（東端溝）２層　灰褐色土
8910	89		鉢DⅡ2b	－	－	(10.6)	灰原L１区黒色土上面
9001	90	77	甕	(23.7)	－	－	灰原Lセクション　褐･黒色土

報告番号	図面番号	写真図版番号	器種	大きさ(cm)			出土遺構
				口径	器高	底径	
9002	90	77	甕	24.0	−	−	灰原Rセクション　褐･黒色土(灰層)
9003	90	77	甕	(23.5)	−	−	灰原L２区黒色土上面
9004	90	77	甕	(33.6)	−	−	灰原表土
9005	90		甕	(37.8)	−	−	灰原R１区上層灰層
9101	91	77	甕	−	−	−	灰原表土
9102	91	77	甕	−	−	−	灰原L１区黒色土
9103	91	77	甕	−	−	−	灰原L１区黒色土
9201	92	78	椀Ai	−	−	(7.3)	谷底（中央部）
9202	92	78	椀Ai	−	−	(8.0)	谷底
9203	92		椀Ai	−	−	(8.3)	谷底　溝中央
9204	92	78	椀Ai2	−	−	(7.8)	谷底　溝中央
9205	92	78	椀Ai2	−	−	(7.5)	谷底　溝中央
9206	92	78	椀Ai2	−	−	(7.0)	谷底　溝中央
9207	92	78	椀Ai	−	−	(7.9)	谷底　溝　北
9208	92	78	片口鉢	−	−	−	谷底　溝中央
9209	92	78	風字硯	−	−	−	谷底　溝　北
9210	92	78	壺N	(16.5)	−	−	谷底　溝２（マンボ以西）
9211	92	78	壺N	(20.8)	−	−	谷底
9212	92	78	壺NⅡ2	−	−	−	谷底
9213	92	78	壺NⅡ2	−	−	−	谷底
9214	92	78	壺NⅡ2	−	−	−	谷底
9215	92	78	壺NⅡ2	−	−	−	谷底
9216	92		壺N	−	−	12.0	谷底
9301	93	79	甕	30.6	−	−	谷底
9302	93	79	甕	44.2	−	−	谷底
9303	93	79	甕	44.6	−	−	谷流路下層
9304	93	79	甕	−	−	20.0	谷底
9401	94	80, 81	軒丸瓦	長さ(31.3)	幅15.4	厚さ1.3	窯体内
9501	95	80, 81 82	軒丸瓦	長さ(21.8)	幅15.8	厚さ1.4	窯体内
9502	95	80	軒丸瓦	長さ(8.3)	幅(5.1)	厚さ1.5	灰原表土
9503	95	80, 82	軒丸瓦	長さ(3.1)	幅(11.5)	厚さ(3.1)	黒色土上面（赤褐色土）
9601	96	80, 82	軒平瓦	長さ(24.3)	幅(16.5)	厚さ1.4	谷流土層
9602	96	80, 83	平瓦	長さ(8.7)	幅(10.0)	厚さ1.4	灰原L２区黒色土上面
9603	96	80, 83	軒平瓦	長さ(11.7)	幅(12.5)	厚さ3.8	谷流路下層
9604	96	80, 83	軒平瓦	長さ(1.2)	幅(4.2)	厚さ1.8	灰原最上層灰層
9701	97	84	丸瓦	長さ37.5	幅16.4	厚さ2.1	窯体内
9702	97	84	丸瓦	長さ33.6	幅15.9	厚さ1.5	窯体内
9801	98	85	丸瓦	長さ31.3	幅14.3	厚さ1.7	窯体内
9802	98	85	丸瓦	長さ33.3	幅14.6	厚さ1.5	窯体内
9901	99	86	丸瓦	長さ32.5	幅13.9	厚さ1.4	窯体内
9902	99	86	丸瓦	長さ31.9	幅14.7	厚さ1.3	窯体内
10001	100	87	丸瓦	長さ34.3	幅14.7	厚さ1.8	窯体内
10002	100	87	丸瓦	長さ31.9	幅14.9	厚さ1.5	窯体内
10101	101	88	丸瓦	長さ33.3	幅14.6	厚さ1.2	窯体内
10102	101	88	丸瓦	長さ32.2	幅14.8	厚さ1.3	窯体内
10201	102	89	丸瓦	長さ33.2	幅16.0	厚さ1.4	窯体内
10202	103	89	丸瓦	長さ33.2	幅14.7	厚さ1.7	窯体内
10301	103	90	丸瓦	長さ33.5	幅15.4	厚さ1.6	窯体内
10302	103	90	丸瓦	長さ31.6	幅15.6	厚さ1.6	窯体内

報告番号	図面番号	写真図版番号	器種	大きさ(cm)			出土遺構
				口径	器高	底径	
10401	104	91	丸瓦	長さ29.4	幅14.7	厚さ1.0	窯体内
10501	105	91	丸瓦	長さ(25.3)	幅14.5	厚さ1.7	灰原L 1 区黒色土
10502	105	92	丸瓦	長さ(11.5)	幅(7.9)	厚さ1.7	灰原L 2 区黒色土上面
10503	105	92	丸瓦	長さ(12.9)	幅11.3	厚さ1.1	谷流土層
10601	106	92	丸瓦	長さ(14.9)	幅15.2	厚さ1.8	灰原R 1 区上層灰層
10602	106	92	丸瓦	長さ35.3	幅13.6	厚さ1.4	灰原L 1 区黒色土
10603	106	93	丸瓦	長さ(18.9)	幅14.4	厚さ1.5	灰原L 2 区黒色土上面
10701	107	93	丸瓦	長さ(14.7)	幅14.5	厚さ1.6	灰原L 1 区黒色土
10702	107	93	丸瓦	長さ(19.2)	幅15.1	厚さ1.6	灰原R 1 区上層灰層
10703	107	94	丸瓦	長さ(12.0)	幅(10.5)	厚さ1.7	灰原
10801	108	94	丸瓦	長さ(19.0)	幅(13.3)	厚さ1.3	灰原L 1 区黒色土
10802	108	94	丸瓦	長さ(22.5)	幅14.7	厚さ1.6	灰原R 1 区上層灰層
10901	109	95	平瓦	長さ(26.6)	幅(16.9)	厚さ1.2	窯体内
10902	109	95	平瓦	長さ(29.0)	幅25.0	厚さ1.1	窯体内
11001	110	96	平瓦	長さ33.1	幅24.7	厚さ1.3	窯体内
11002	110	96	平瓦	長さ32.8	幅23.8	厚さ1.4	窯体内
11101	111	97	平瓦	長さ32.9	幅24.0	厚さ1.2	窯体内
11102	111	97	平瓦	長さ32.3	幅24.2	厚さ1.2	窯体内
11201	112	98	平瓦	長さ32.3	幅24.4	厚さ11.3	窯体内
11202	112	98	平瓦	長さ32.0	幅24.4	厚さ1.3	窯体内
11301	113	99	平瓦	長さ31.9	幅24.6	厚さ1.3	窯体内
11302	113	99	平瓦	長さ31.9	幅24.5	厚さ1.3	窯体内
11401	114	100	平瓦	長さ31.8	幅23.9	厚さ1.2	窯体内
11402	114	100	平瓦	長さ31.7	幅23.5	厚さ1.3	窯体内
11501	115	101	平瓦	長さ31.7	幅23.8	厚さ1.2	窯体内
11502	115	101	平瓦	長さ31.3	幅24.3	厚さ1.2	窯体内
11601	116	102	平瓦	長さ31.1	幅23.8	厚さ1.4	窯体内
11602	116	102	平瓦	長さ30.1	幅(19.5)	厚さ1.2	窯体内
11701	117	103	平瓦	長さ32.8	幅(16.4)	厚さ1.0	窯体内
11702	117	103	平瓦	長さ33.3	幅24.7	厚さ1.1	窯体内
11801	118	104	平瓦	長さ32.4	幅24.3	厚さ1.3	窯体内
11802	118	104	平瓦	長さ32.1	幅24.1	厚さ1.2	窯体内
11901	119	105	平瓦	長さ32.1	幅23.4	厚さ1.2	窯体内
11902	119	105	平瓦	長さ31.7	幅24.5	厚さ1.2	窯体内
12001	120	106	平瓦	長さ31.7	幅23.6	厚さ1.2	窯体内
12002	120	106	平瓦	長さ31.5	幅23.9	厚さ1.2	窯体内
12101	121	107	平瓦	長さ31.2	幅23.0	厚さ1.3	窯体内
12102	121	107	平瓦	長さ31.0	幅24.3	厚さ1.0	窯体内
12201	122	108	平瓦	長さ30.8	幅24.4	厚さ1.1	窯体内
12202	122	108	平瓦	長さ30.4	幅24.0	厚さ1.2	窯体内
12301	123	109	平瓦	長さ30.1	幅22.6	厚さ1.3	窯体内
12302	123	109	平瓦	長さ29.0	幅23.6	厚さ1.1	窯体内
12401	124	110	平瓦	長さ30.5	幅23.1	厚さ4.2	窯体内
12402	124	110	平瓦	長さ29.5	幅23.5	厚さ1.2	窯体内
12501	125	111	平瓦	長さ30.7	幅(16.0)	厚さ1.7	窯体内
12502	125	111	平瓦	長さ30.0	幅25.4	厚さ1.2	窯体内
12601	126	112	平瓦	長さ38.8	幅(19.2)	厚さ1.6	窯体内
12602	126	112	平瓦	長さ(33.5)	幅26.6	厚さ6.8	窯体内
12701	127	113	平瓦	長さ34.2	幅(15.6)	厚さ1.1	窯体内
12702	127	113	平瓦	長さ31.2	幅(10.1)	厚さ1.2	窯体内

12801	128	114	平瓦	長さ40.3	幅25.5	厚さ1.4	灰原R１区上層灰層
12802	128	114	平瓦	長さ38.6	幅26.7	厚さ1.7	灰原R１区上層灰層
12901	129	115	平瓦	長さ28.6	幅23.4	厚さ1.2	灰原L１区黒色土
12902	129	115	平瓦	長さ38.4	幅(18.2)	厚さ1.8	灰原L２区黒色土上面
13001	130	116	平瓦	長さ(22.1)	幅29.1	厚さ1.8	灰原縦断セクション
13002	130	116	平瓦	長さ32.5	幅24.4	厚さ1.3	灰原L１区黒色土
13101	131	117	平瓦	長さ38.1	幅28.8	厚さ1.8	灰原L１区黒色土

鴨谷１・２号窯地区出土木製品

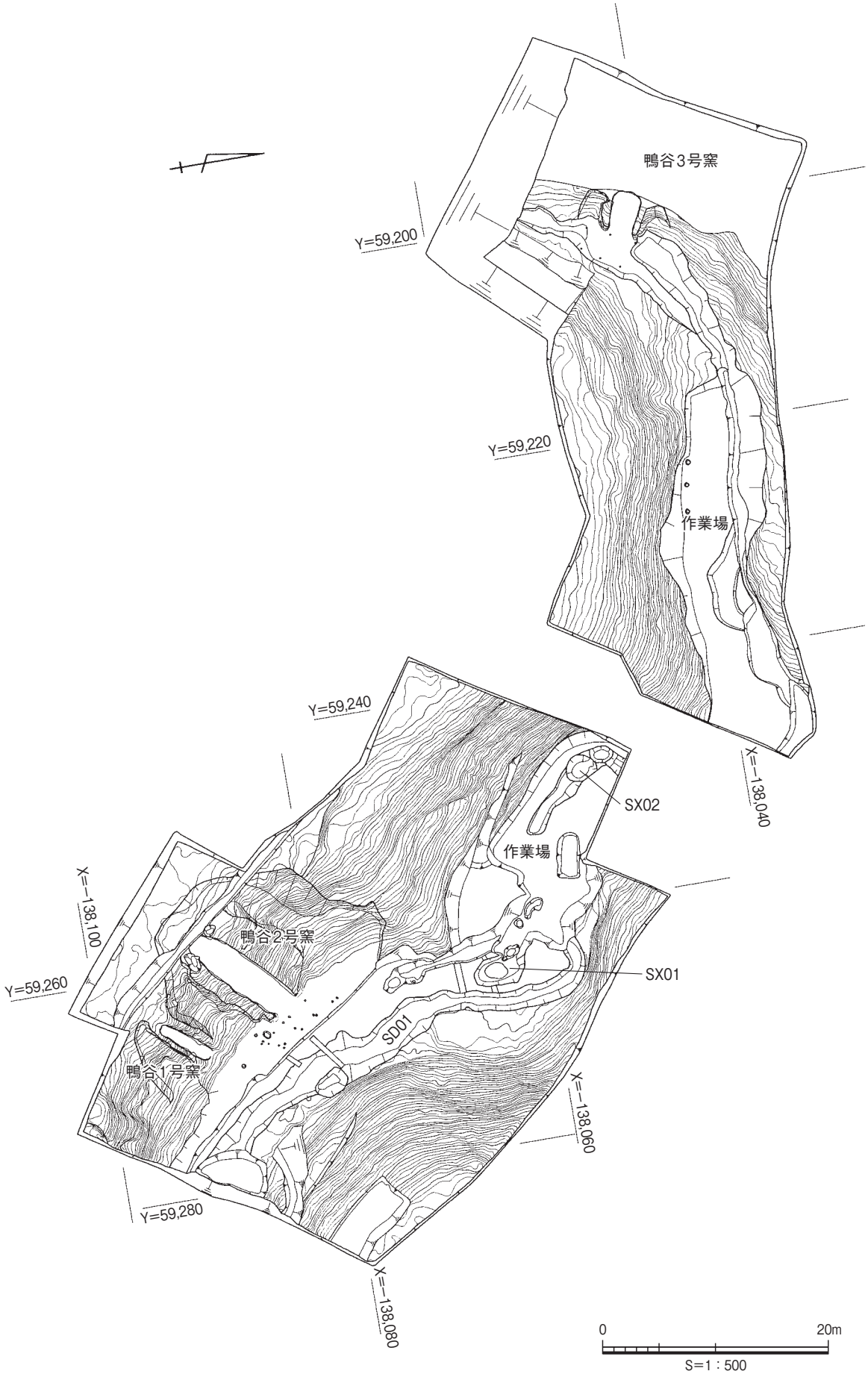
報告番号	図面番号	写真図版番号	器種	大きさ(cm)			出土遺構
				口径	器高	底径	
W１	132	118	連歯下駄	長さ9.1	幅8.8	厚さ (歯)1.7 (断)0.8	１号窯の前（谷部）
W２	132	118	板状部材	長さ23.2	幅5.1	厚さ1.0	１号窯の前（谷部）
W３	132	118	建築部材	長さ79.2	幅11.5	厚さ10.7	灰原２区下／下層砂礫
W４	132	118	樋	長さ66.0	幅13.5	厚さ13.4	灰原２区下／最下層砂礫

遺 構 図 面

巣谷地区
鴨谷地区
地ノ谷池
二十番池
100.9
102.1
100
102.2
103.7
92.4
103.8
103.5
104.4
104.4
100
105
0
100m
1：2,000

調査区全体図

遺構図面 2



鴨谷地区全体図

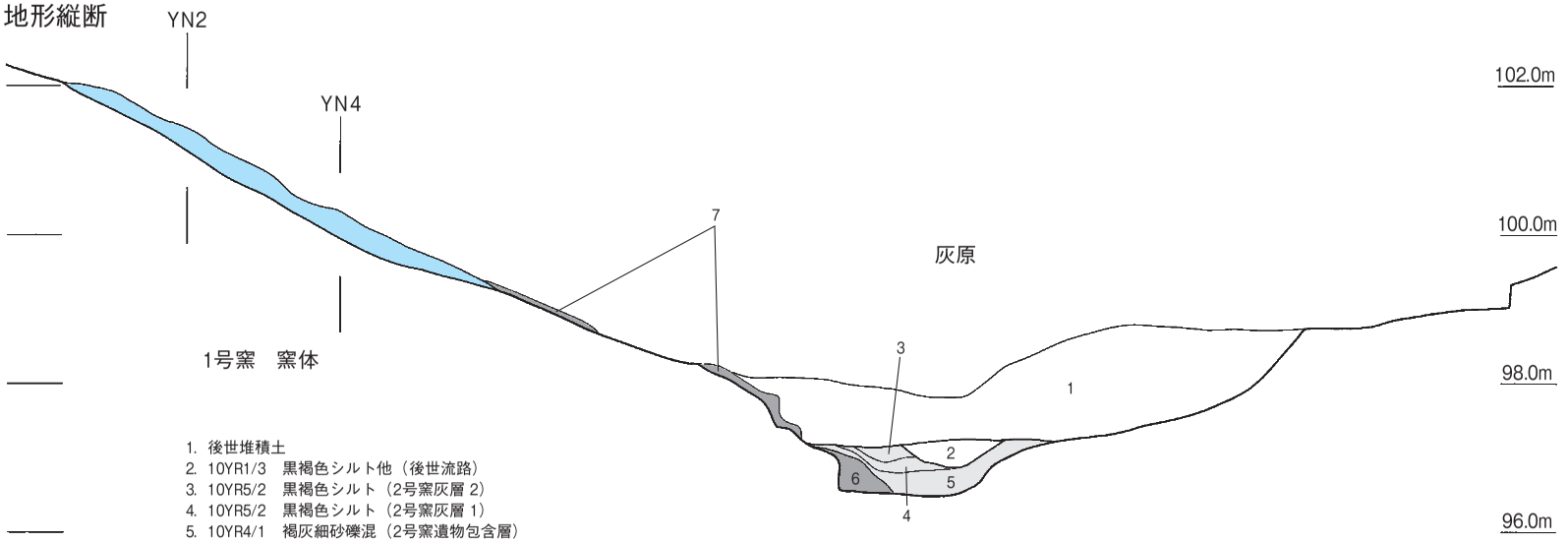
鴨谷１・２号窯　地区全体図

101.0m
A
B'
100.0m
99.0m
C
A'
B'
C'
98.0m
99.0m
A
102.0m
A'
B
101.0m
B'
0
5m
S=1 : 100

鴨谷 1 号窯　地形測量図

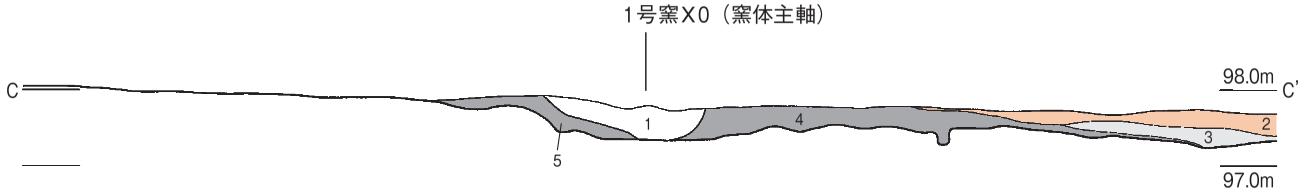
鴨谷１号窯　地形縦断図

地形縦断



1. 後世堆積土
2. 10YR1/3　黒褐色シルト他（後世流路）
3. 10YR5/2　黒褐色シルト（2号窯灰層 2）
4. 10YR5/2　黒褐色シルト（2号窯灰層 1）
5. 10YR4/1　褐灰細砂礫混（2号窯遺物包含層）
6. 10YR4/3　にぶい黄褐色砂質シルト（1号窯灰層）
7. 1号窯灰層

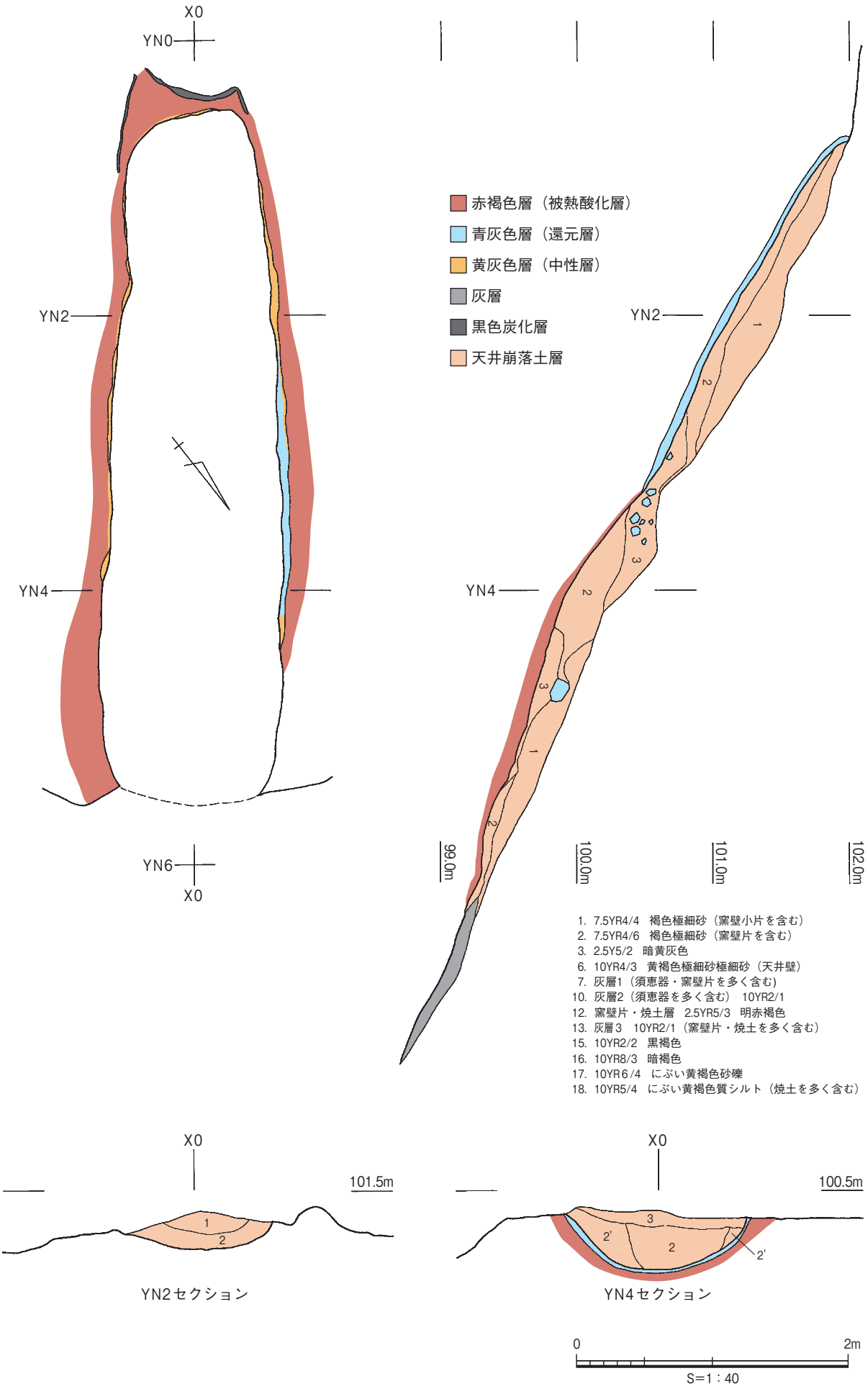
灰原横断



1. 攪乱
2. 10YR3/4　暗褐色V・F・S（2号窯窯体崩落流土層）
3. 10YR3/4　褐色V・F・S（2号灰層）
4. 10YR2/1　黒V・F・Sシルト質（1号窯灰層と2号窯灰層の混合層）
5. 1号窯灰層

青灰色層（還元層）
天井崩落土層
灰層

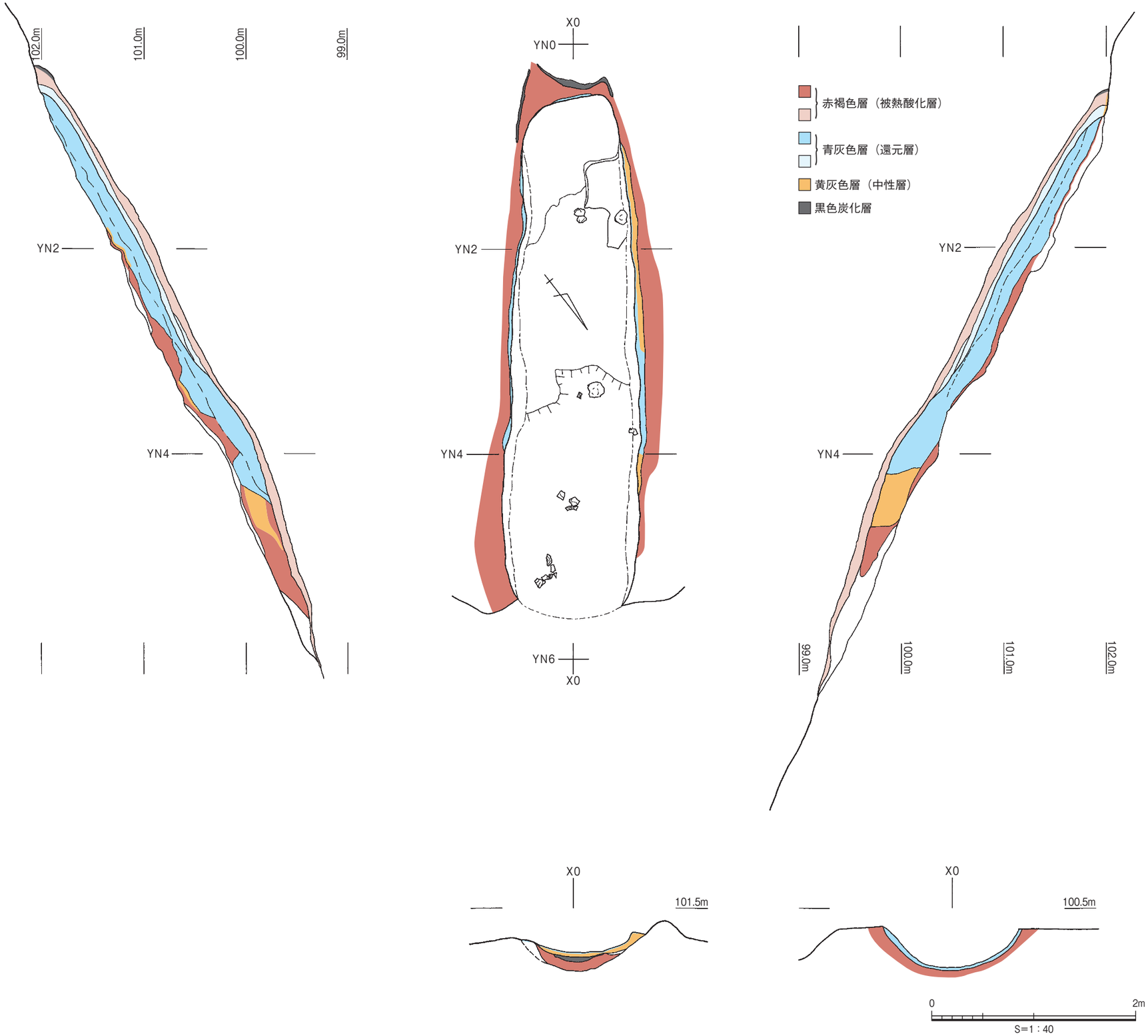
0　5m
S=1：100



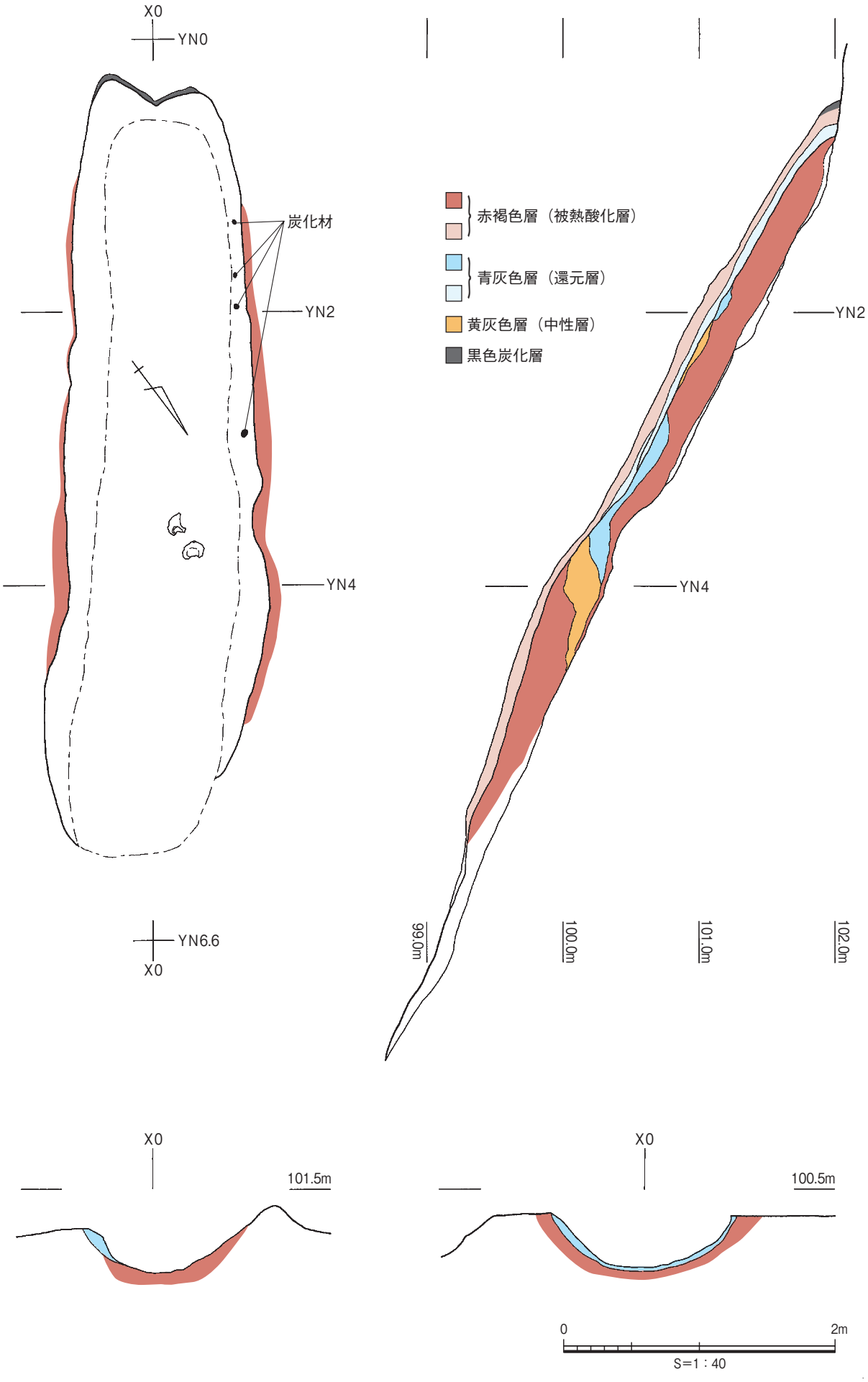
YN2セクション

YN4セクション

鴨谷１号窯　窯体埋土層断面図



鴨谷 1 号窯　最終操業床面図（第 2 床面）

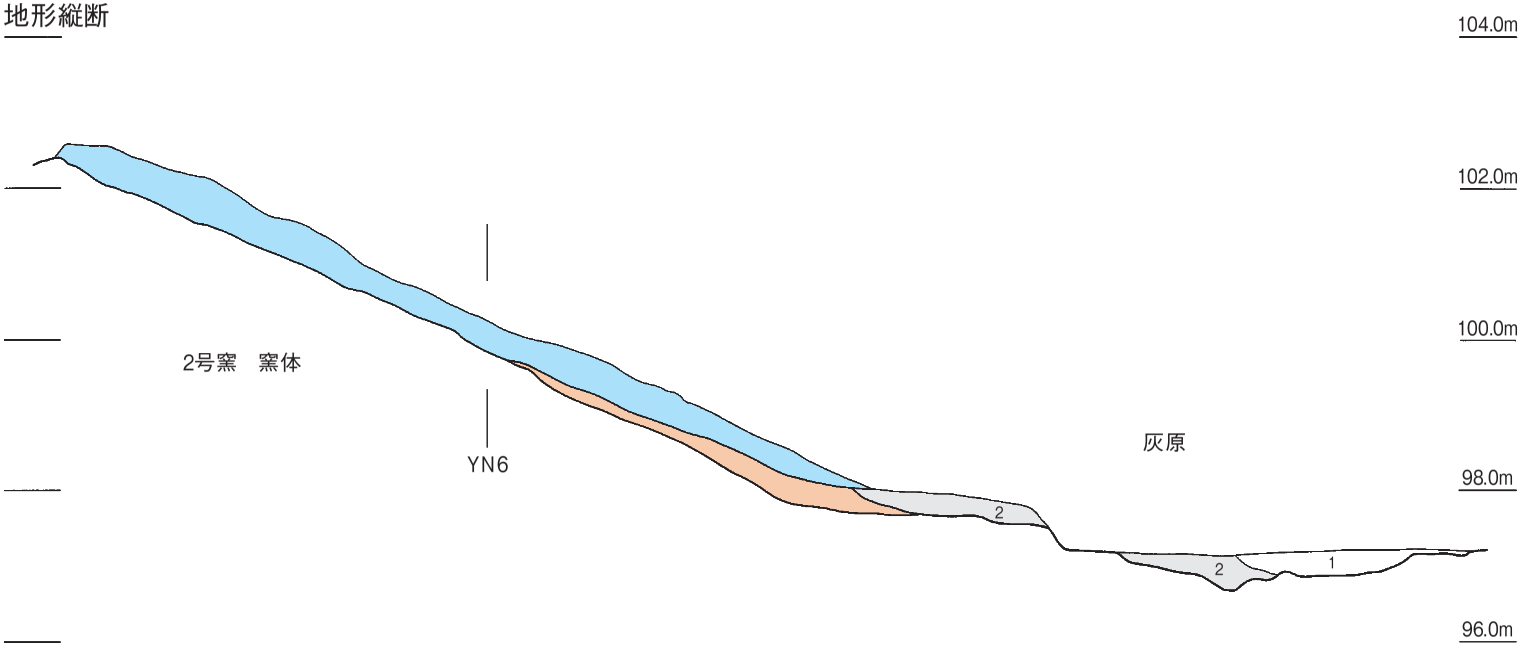


鴨谷 1 号窯　操業当初床面図（第 1 床面）

鴨谷 2 号窯　地形測量図

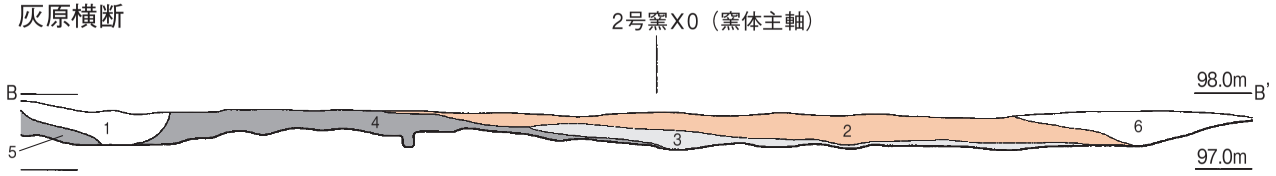
鴨谷２号窯　地形縦断図

地形縦断



1. 10YR1/3　黒褐色シルト他（後世流路）
2. 2号窯灰層

灰原横断

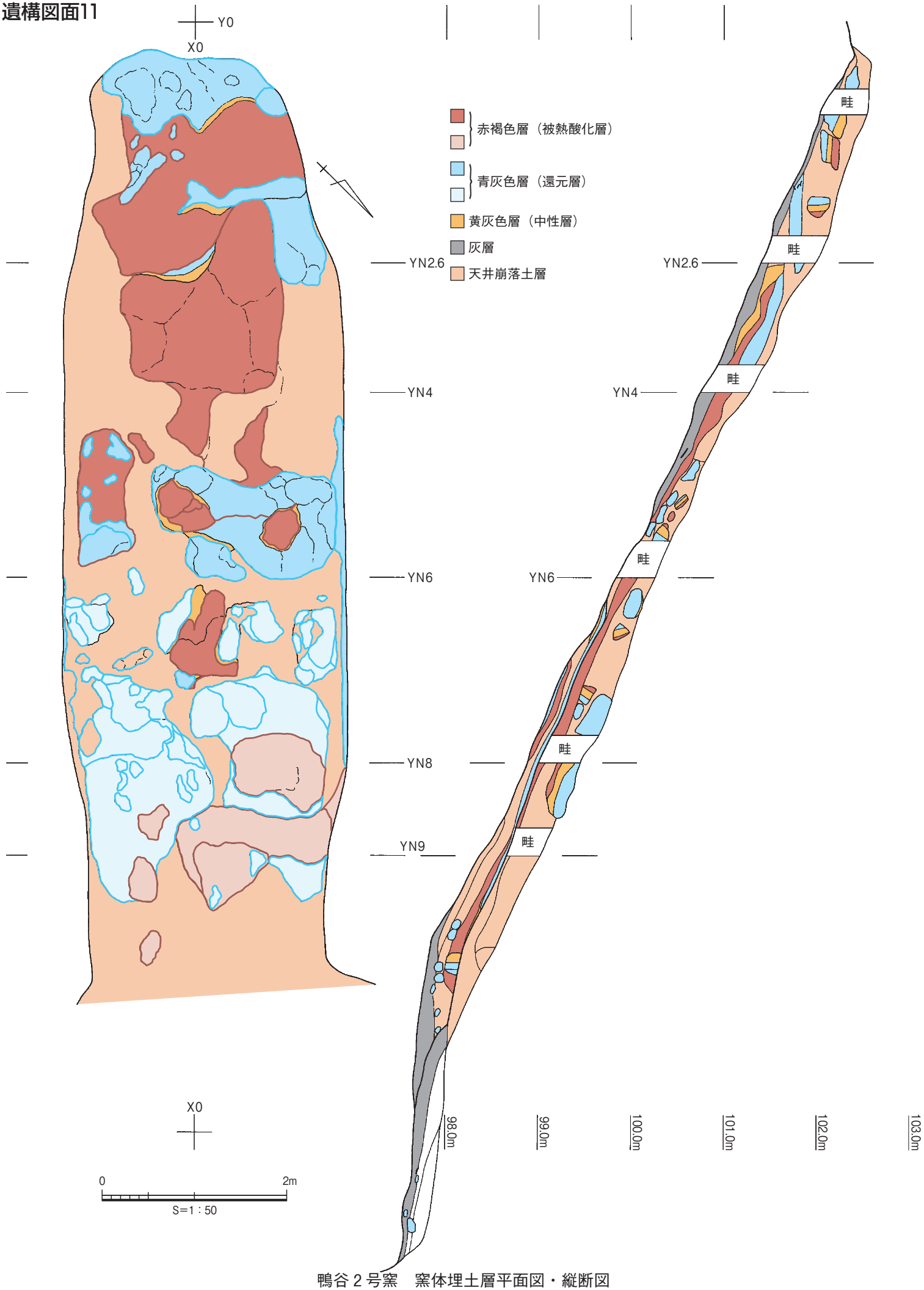


1. 撹乱
2. 10YR3/4　暗褐色V・F・S（2号窯窯体崩落流土層）
3. 10YR3/4　褐色V・F・S（2号灰層）
4. 10YR2/1　黒V・F・Sシルト質（1号窯灰層と2号窯灰層の混合層）
5. 1号窯灰層
6. 10YR3/3　暗褐色V・F・S

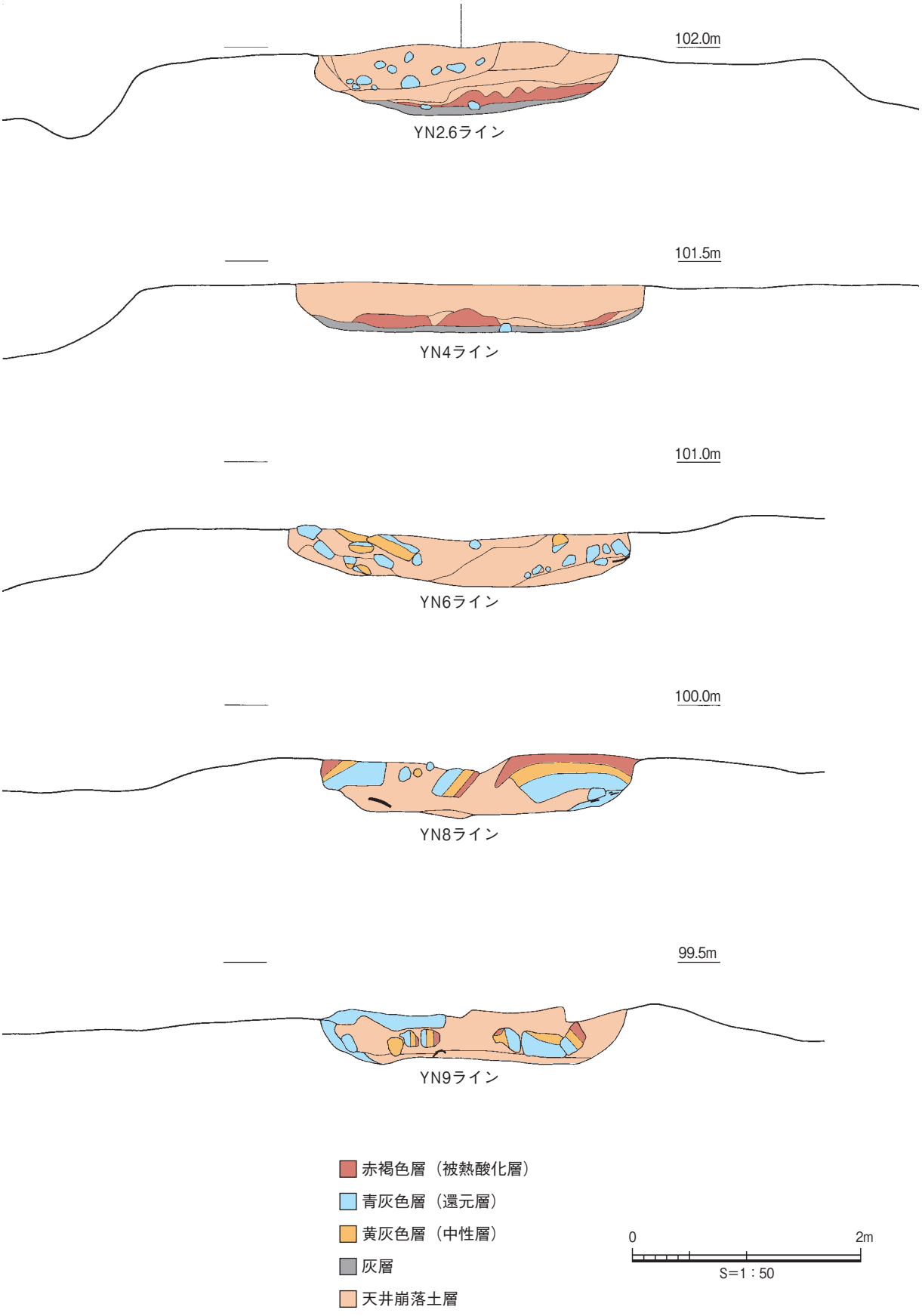
青灰色層（還元層）
灰層
天井崩落土層

0　5m
S=1：100

遺構図面11

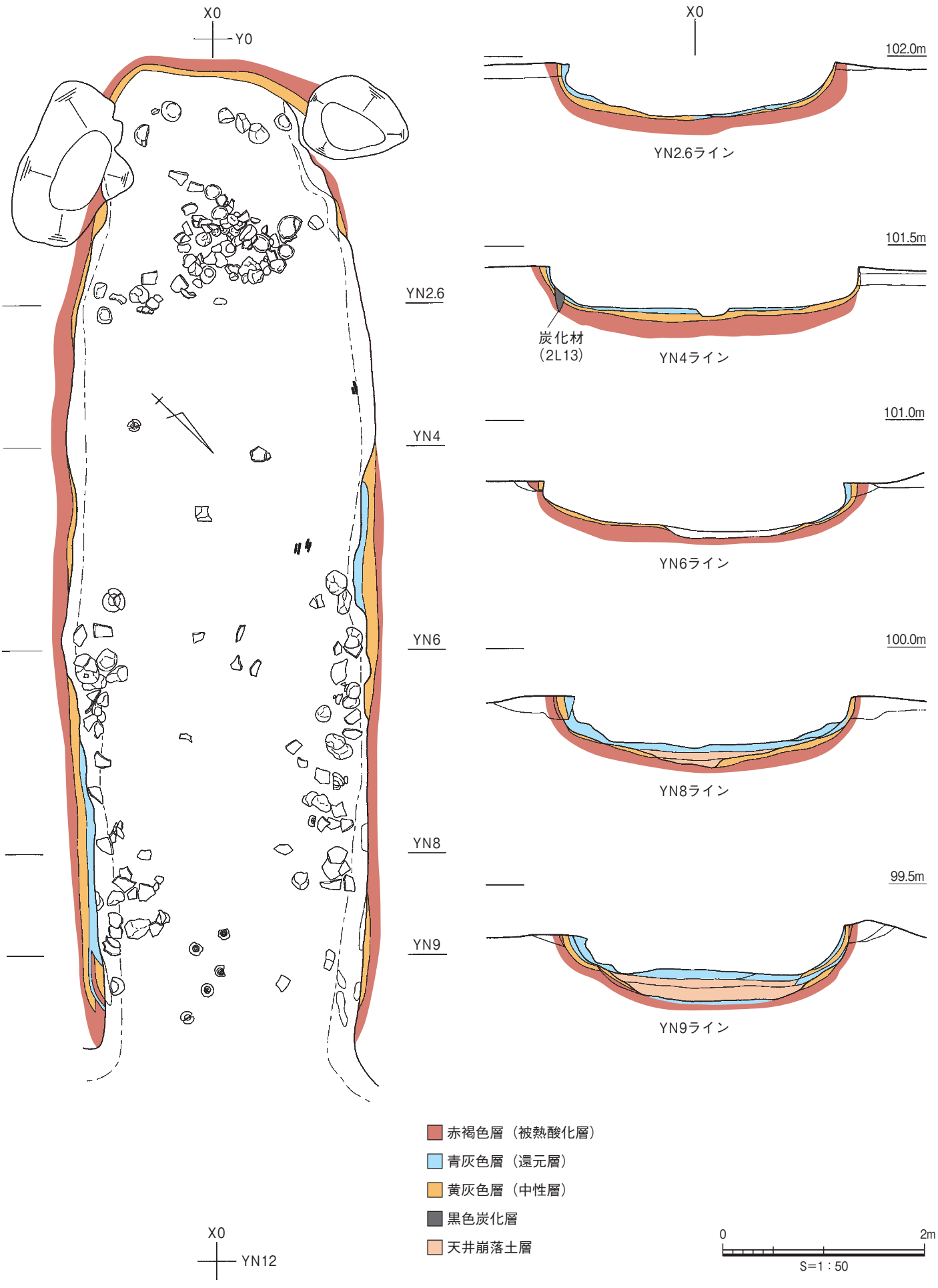


鴨谷２号窯　窯体埋土層平面図・縦断図

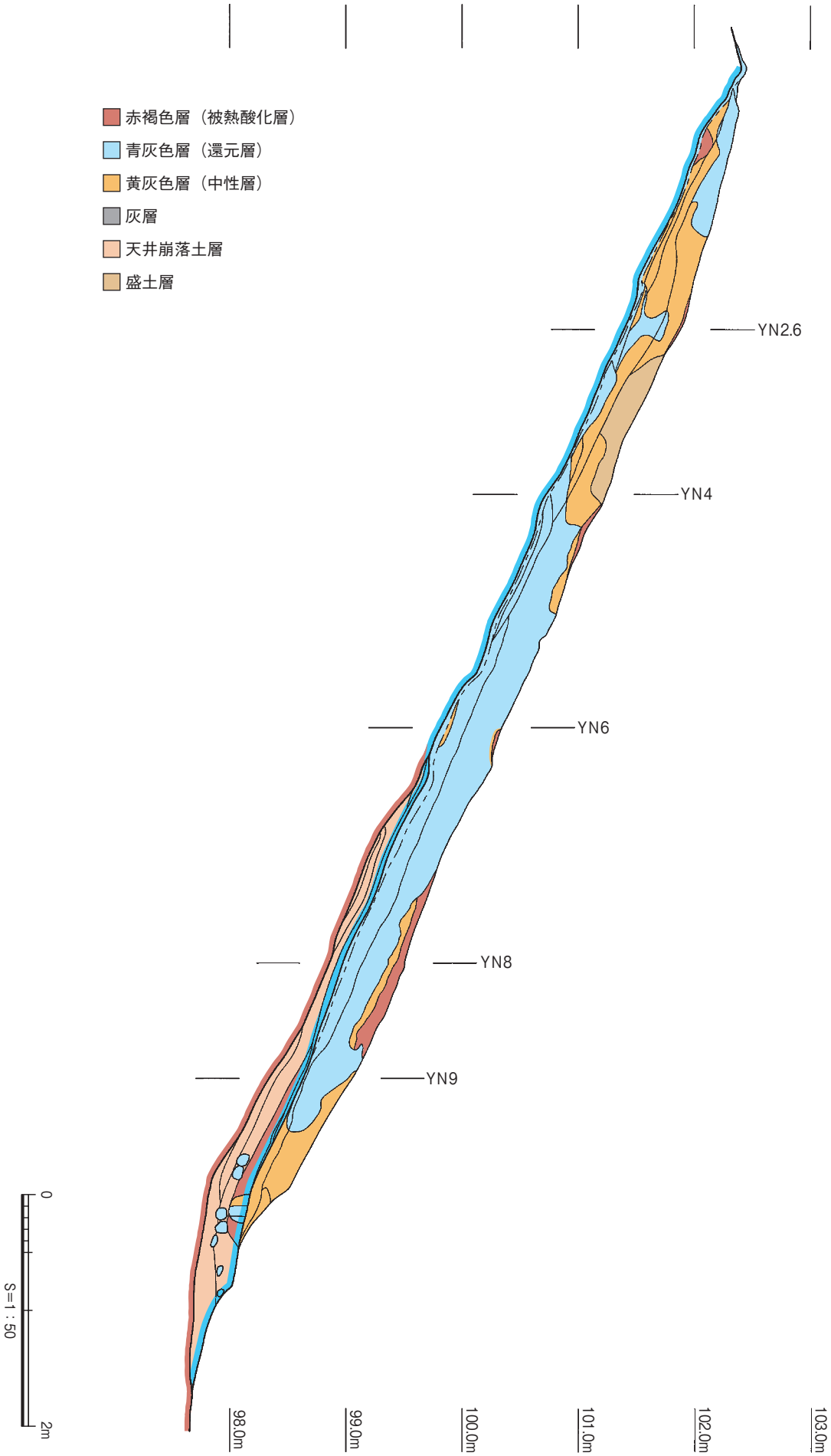


鴨谷２号窯　窯体埋土層横断図

遺構図面13

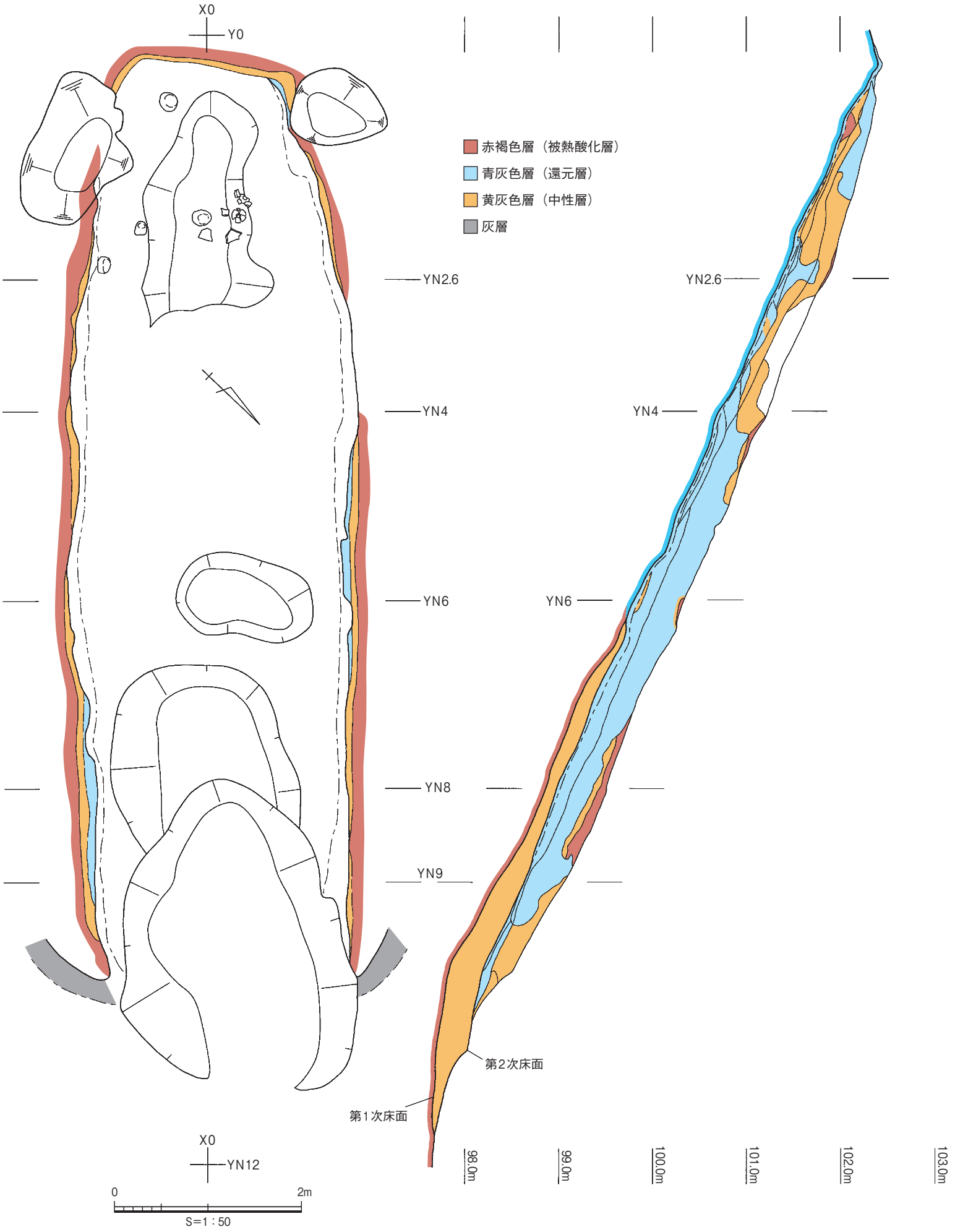


鴨谷２号窯　窯体最終床面遺物出土状況

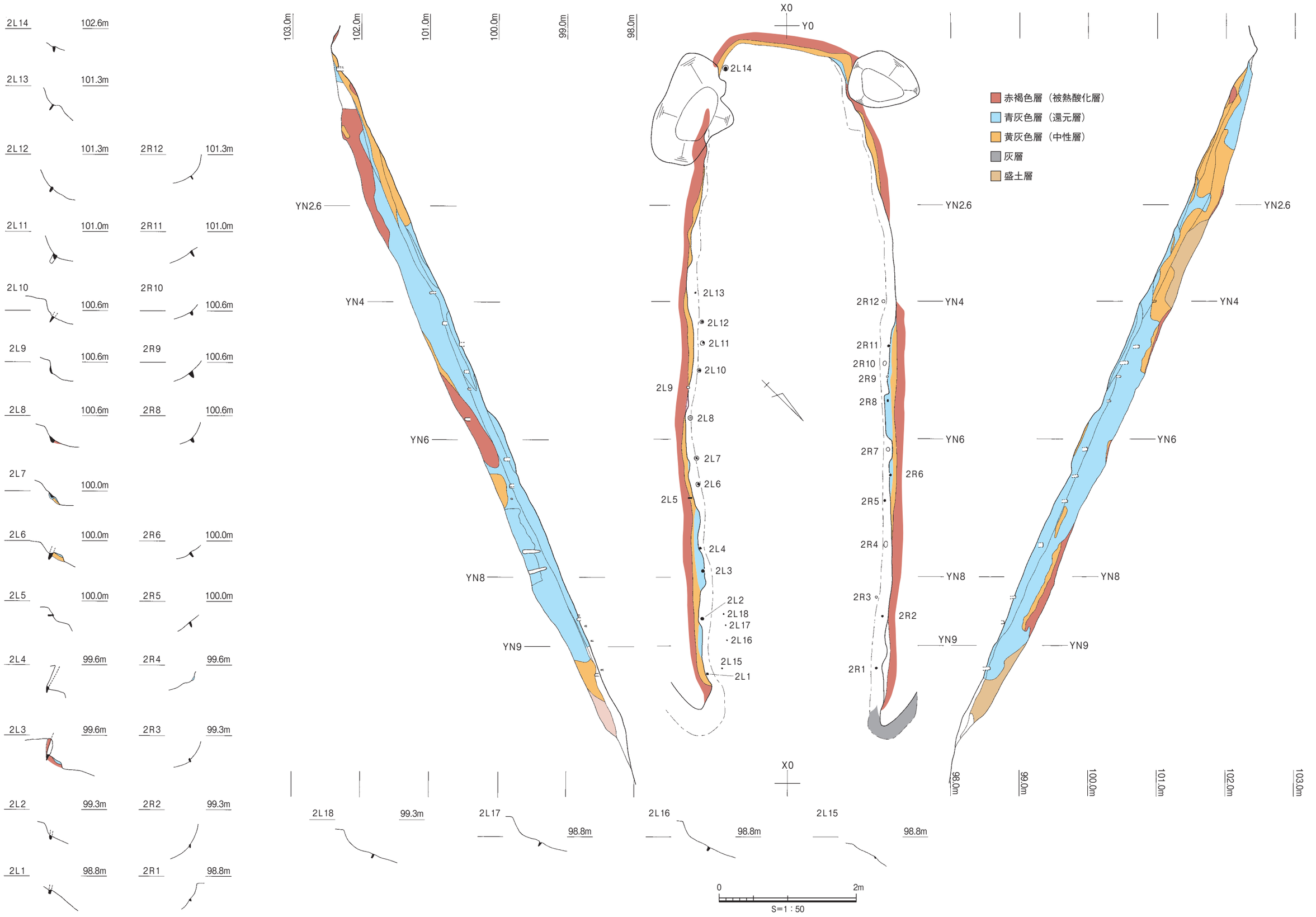

赤褐色層（被熱酸化層）
青灰色層（還元層）
黄灰色層（中性層）
灰層
天井崩落土層
盛土層
YN2.6
YN4
YN6
YN8
YN9
98.0m
99.0m
100.0m
101.0m
102.0m
103.0m
0
2m
S=1：50

鴨谷 2 号窯　窯体縦断面

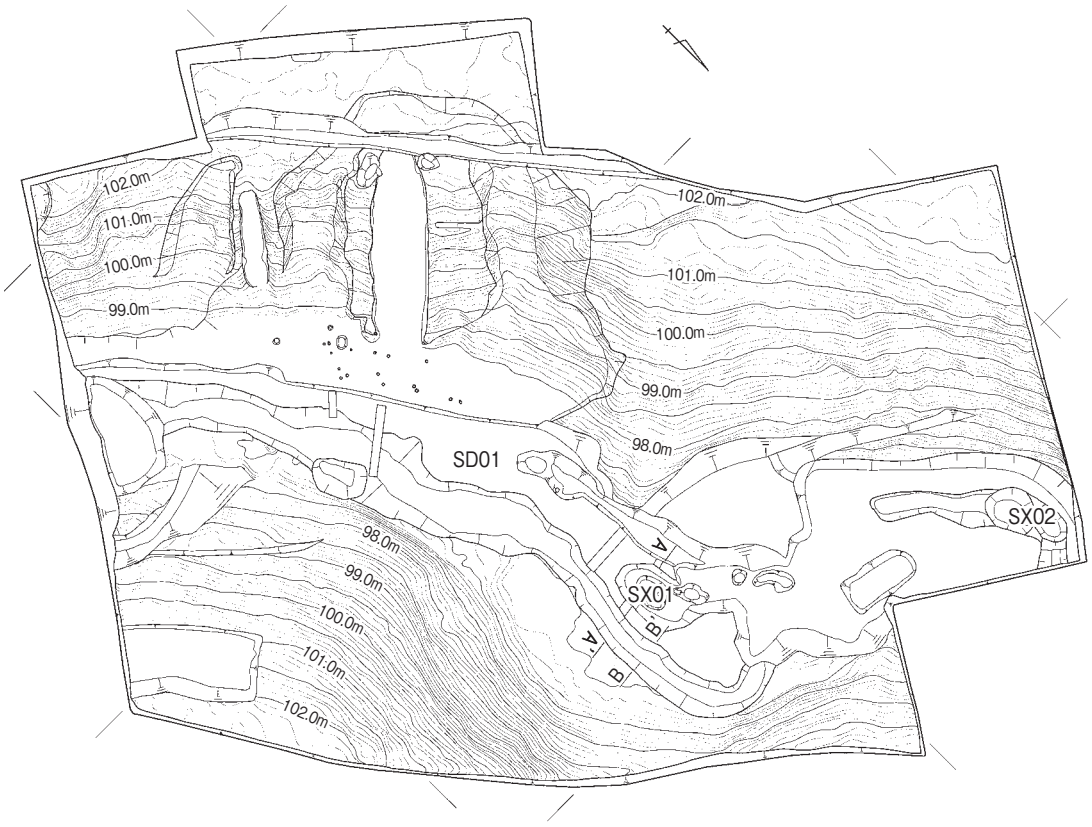
遺構図面15

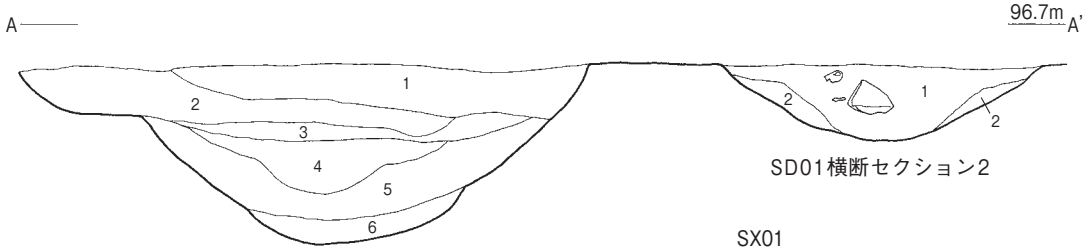


鴨谷２号窯　窯体　当初床面



鴨谷２号窯　窯体　架構痕跡

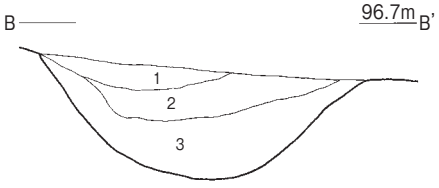




SX01

SD01横断セクション2

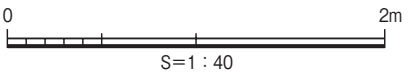
SX01
1. 10YR3/3　暗褐色シルト（礫混じり）
2. 10YR4/2　灰黄褐色極細砂（祖砂～中礫多し）
3. 10YR5/2　灰黄褐色極細砂（シルト質）
4. 10YR4/2　灰黄褐色祖砂（中礫混じり）
5. 10YR3/2　黒褐色粘土
6. 10YR4/1　黄灰色中礫
7. 10YR5/6　黄褐色細砂（中礫多し）
8. 10YR7/8　黄橙色極細砂（シルト質）



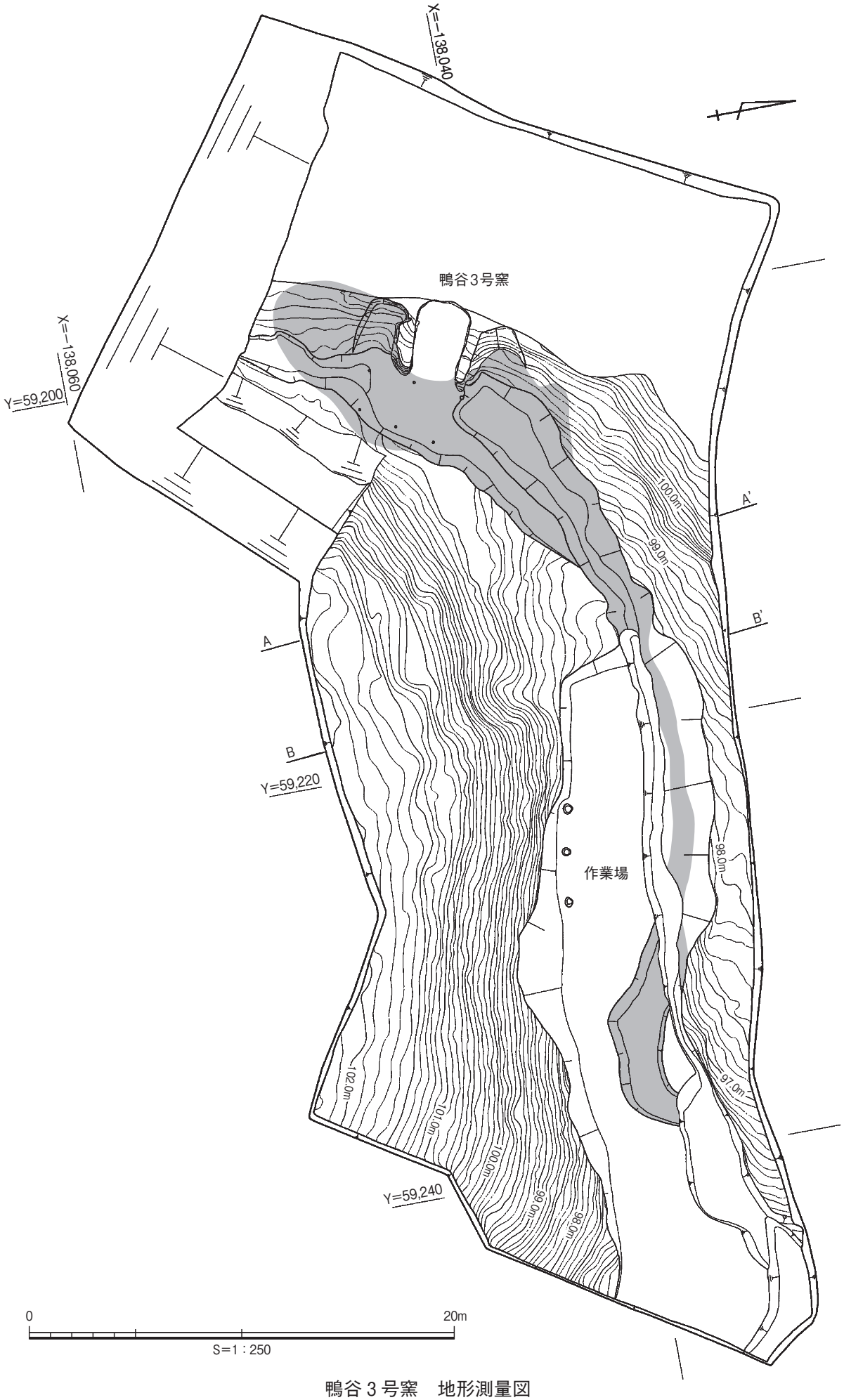
SD01 横断セクション1

SD01 横断セクション2
1. 10YR4/2　灰黄褐色V・F・S細砂（礫多く含む）
2. 10YR5/6　黄褐色V・F・S

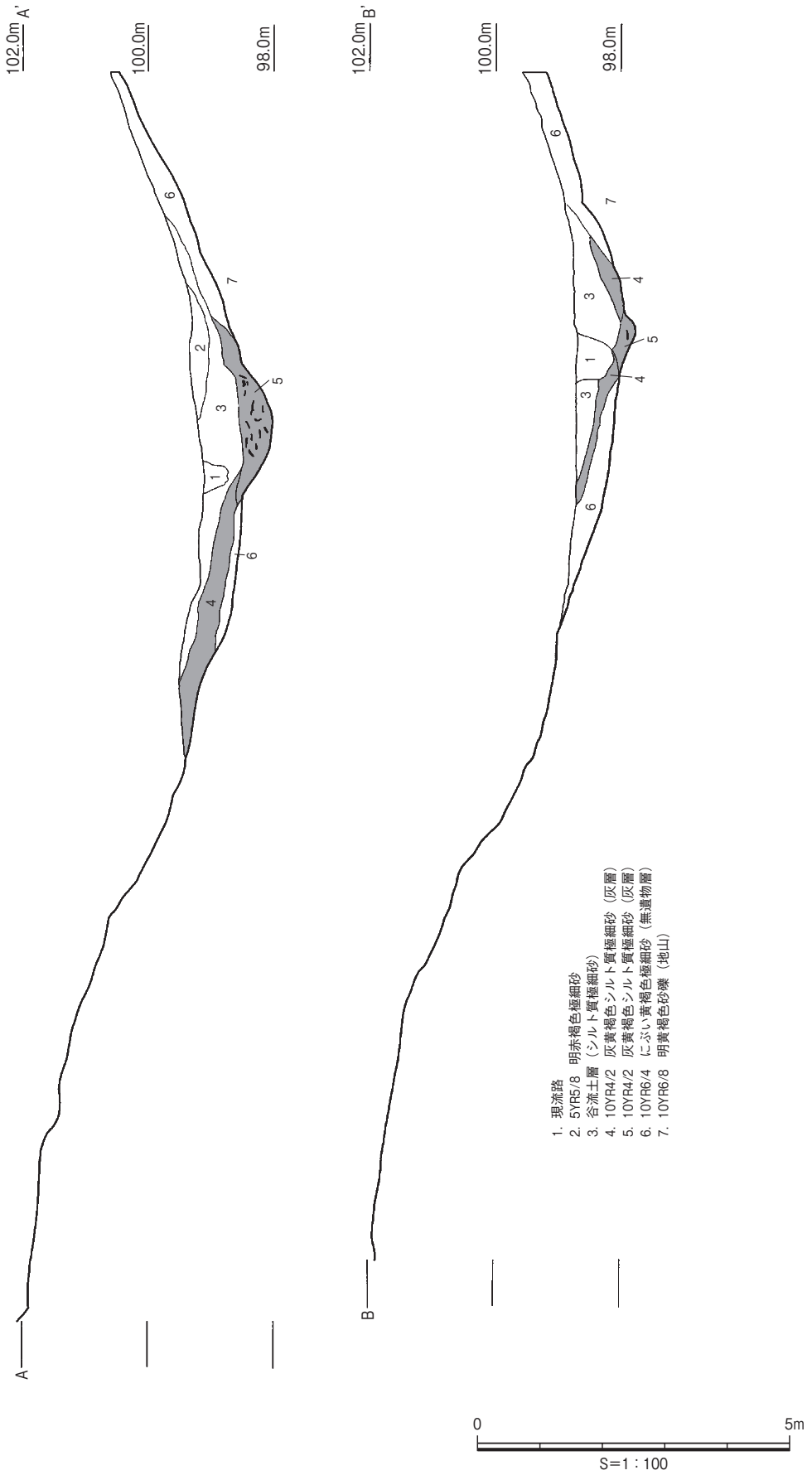
SD01 横断セクション1
1. 10YR6/6　明黄褐色V・F・S（シルト質）
2. 10YR4/3　鈍い黄褐色V・F・S（シルト質）
3. 10YR4/2　灰黄褐色V・F・S（礫多く含む）



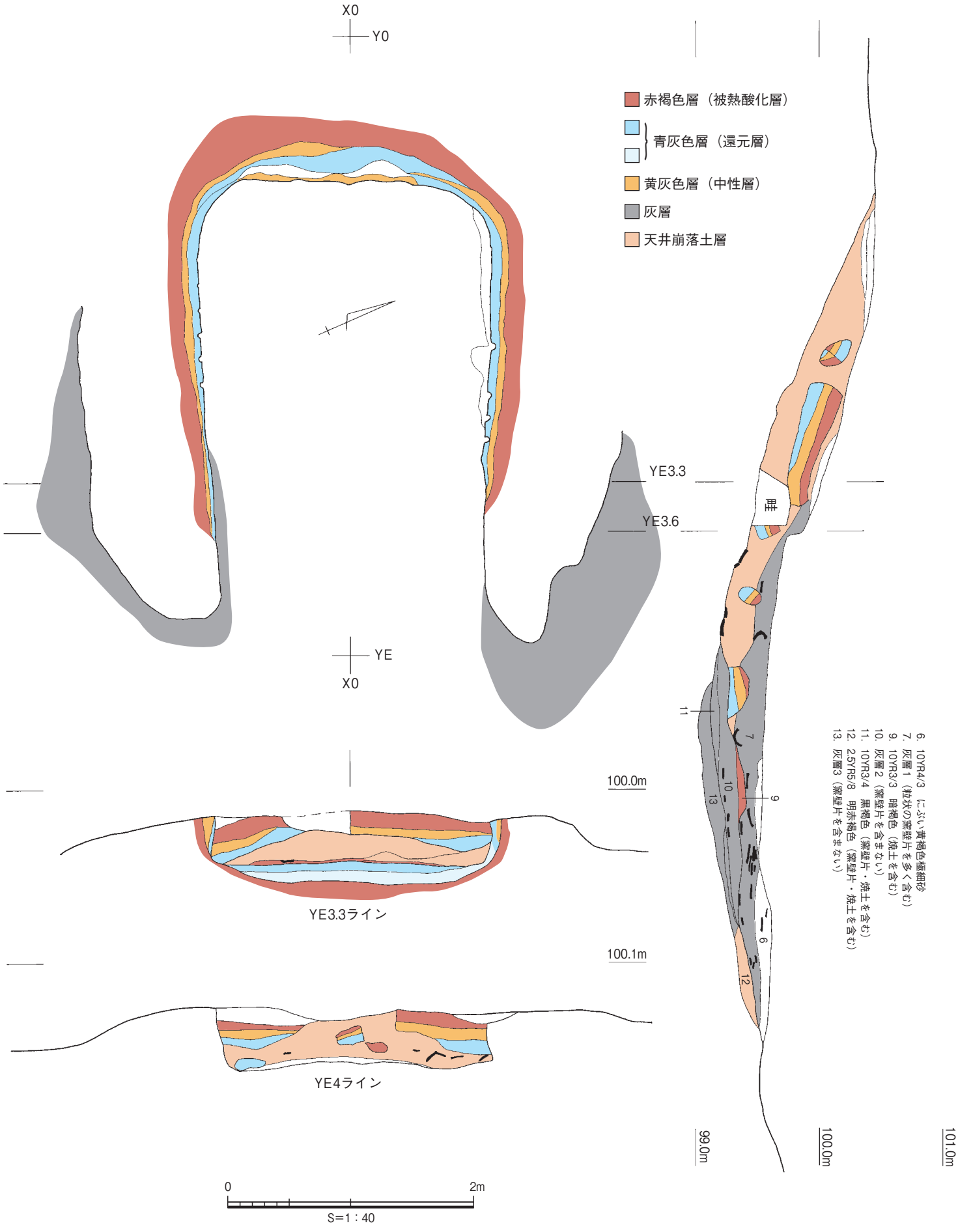
鴨谷２号窯　作業場跡


X=−138,040
X=−138,060
Y=59,200
Y=59,220
Y=59,240
鴨谷3号窯
作業場
A
A'
B
B'
100.0m
99.0m
98.0m
97.0m
102.0m
101.0m
100.0m
99.0m
98.0m
0
20m
S=1：250

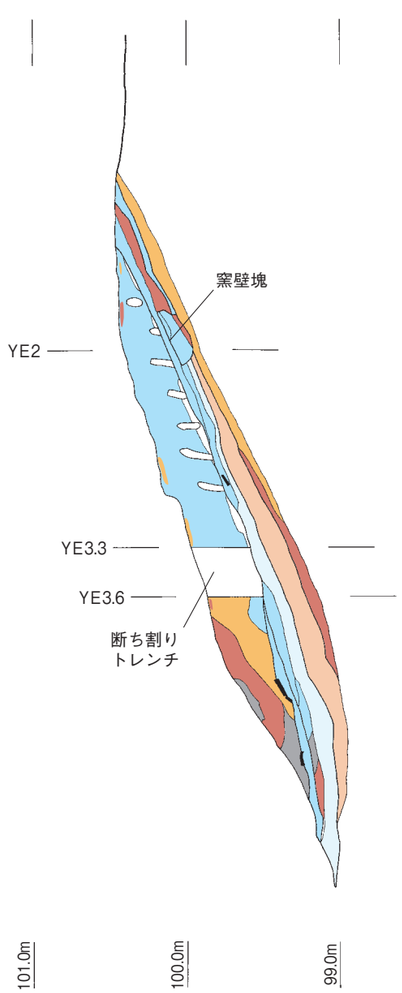
鴨谷 3 号窯　地形測量図

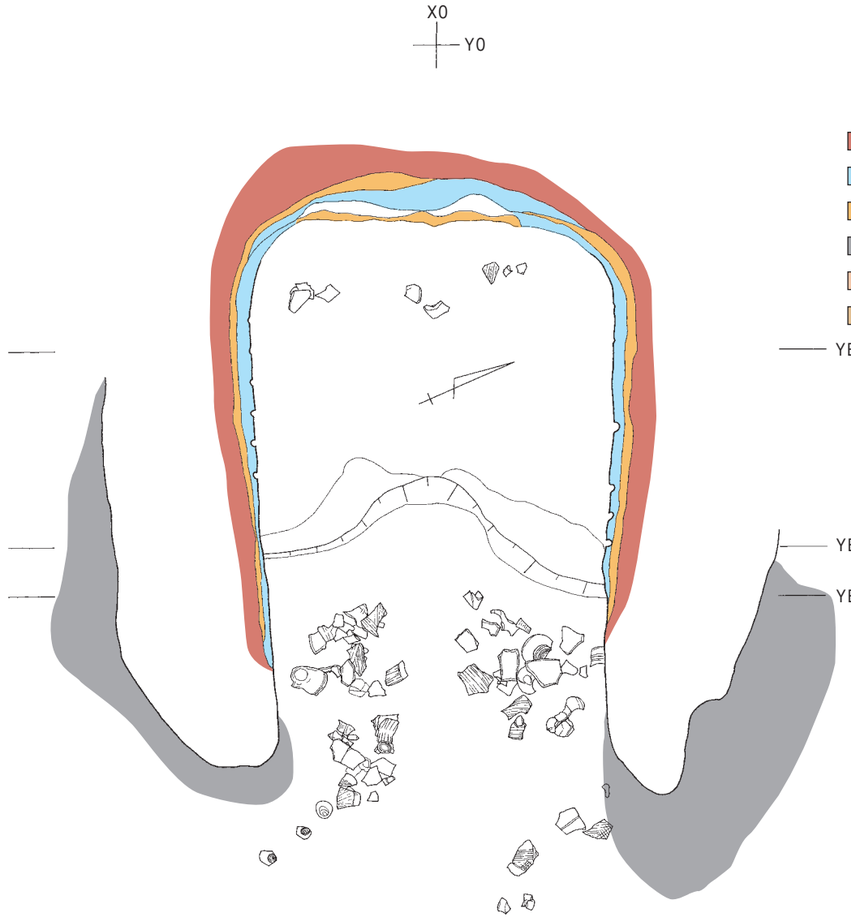

102.0m
A'
100.0m
98.0m
A
B
102.0m
B'
100.0m
98.0m
1. 現流路
2. 5YR5/8 明赤褐色極細砂
3. 谷流土層（シルト質極細砂）
4. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質極細砂（灰層）
5. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質極細砂（灰層）
6. 10YR6/4 にぶい黄褐色極細砂（無遺物層）
7. 10YR6/8 明黄褐色砂礫（地山）
0
5m
S=1：100

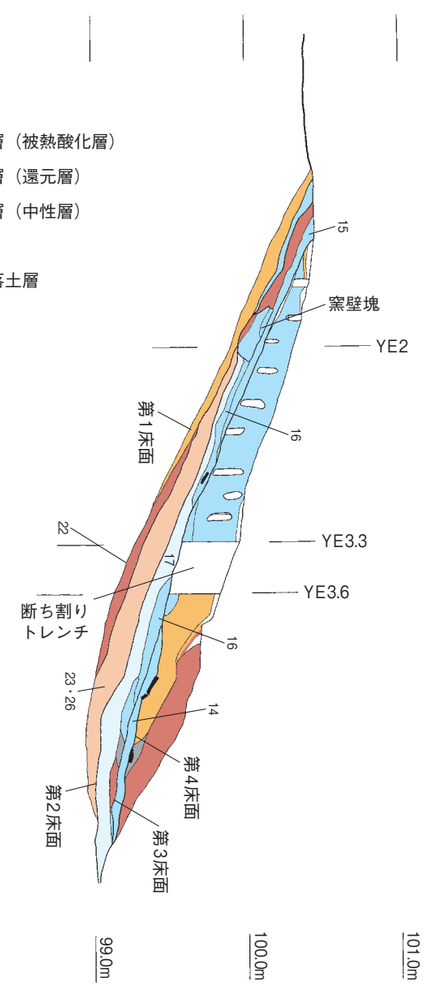
鴨谷3号窯　灰原横断図



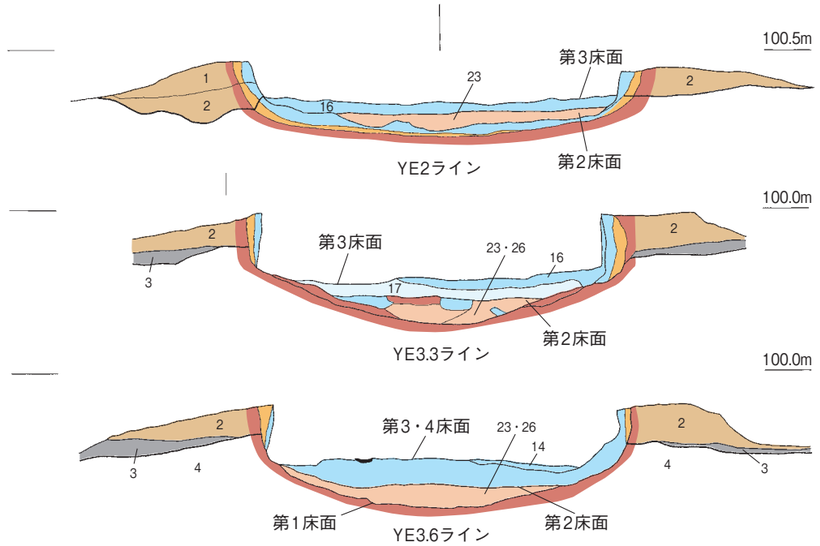
鴨谷3号窯　窯体埋土層断面図







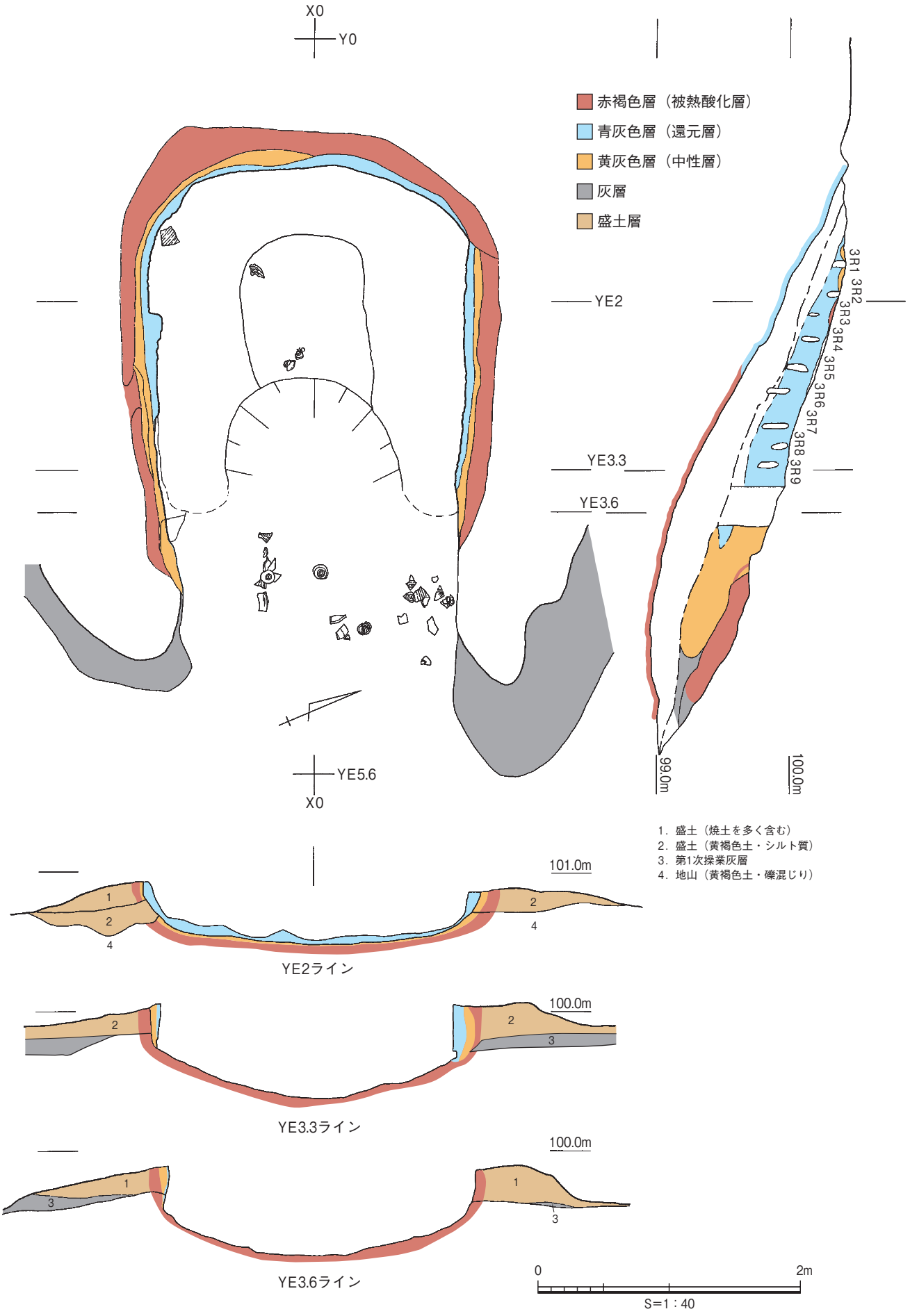
1．盛土（焼土を多く含む）
2．盛土（黄褐色土・シルト質）
3．第1次操業灰層
4．地山（黄褐色土・礫混じり）



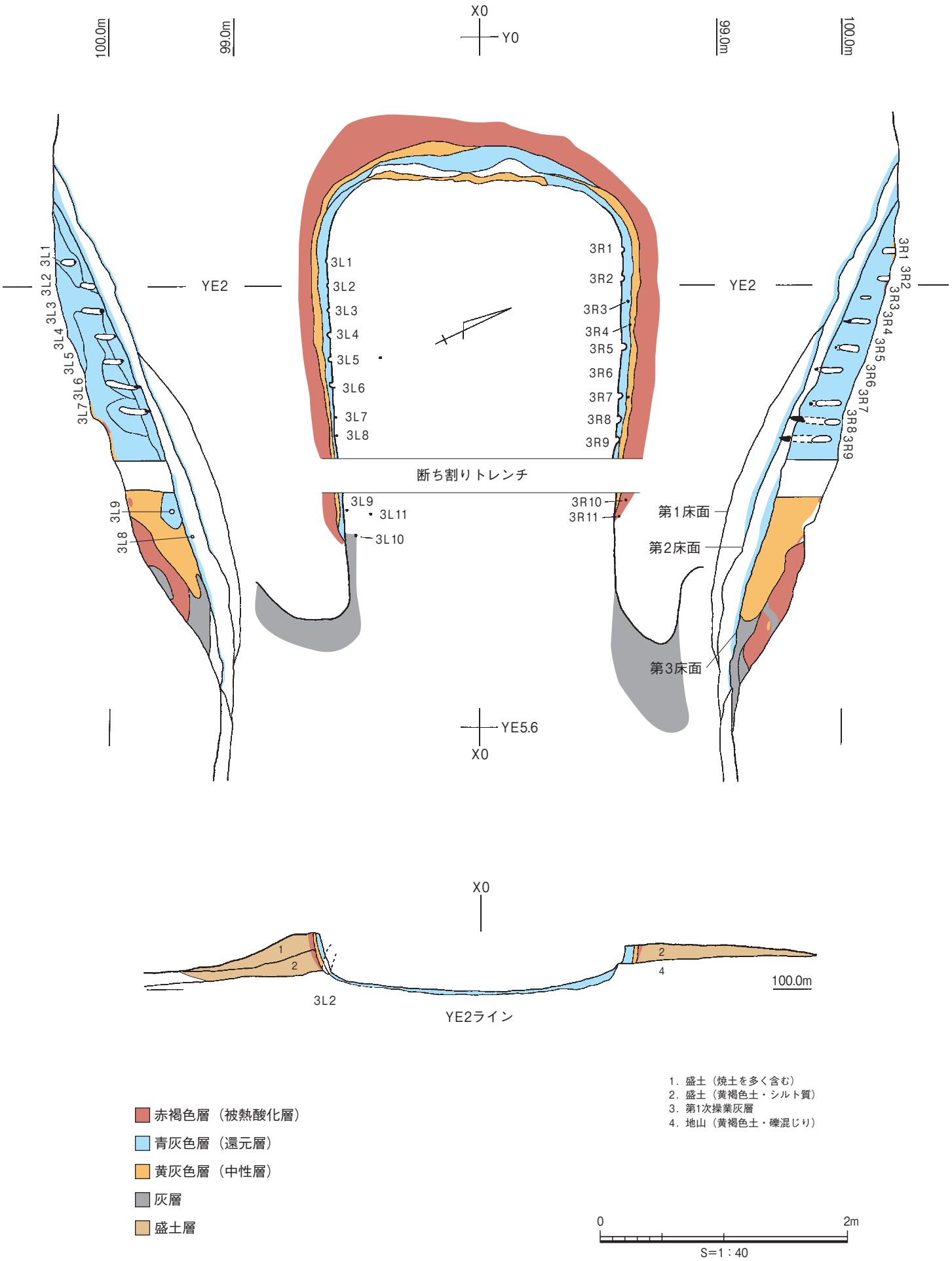
14．10YR2/3　黒褐色
15．5BC6/1　青灰色（粒状の窯壁片・須恵器含む）
16．10YR6/4　褐色（焼土・窯壁片・須恵器含む）
17．10YR4/3　にぶい黄褐色（砂質・窯壁片含む）
18．10YR3/2　黒褐色（炭・焼土含む）
19．10YR2/4　灰黄褐色
20．10YR5/6　黄褐色粘質土
21．10YR8/6　黄褐色VFS
22．5YR6/3　橙色VFS
23．7YR3/4　褐色
24．10YR3/8　明褐色
25．7.5YR4/4　褐色細砂
26．2.5YR4/2　暗灰黄色
10YR8/6　明黄褐色砂礫

0　2m
S=1：40

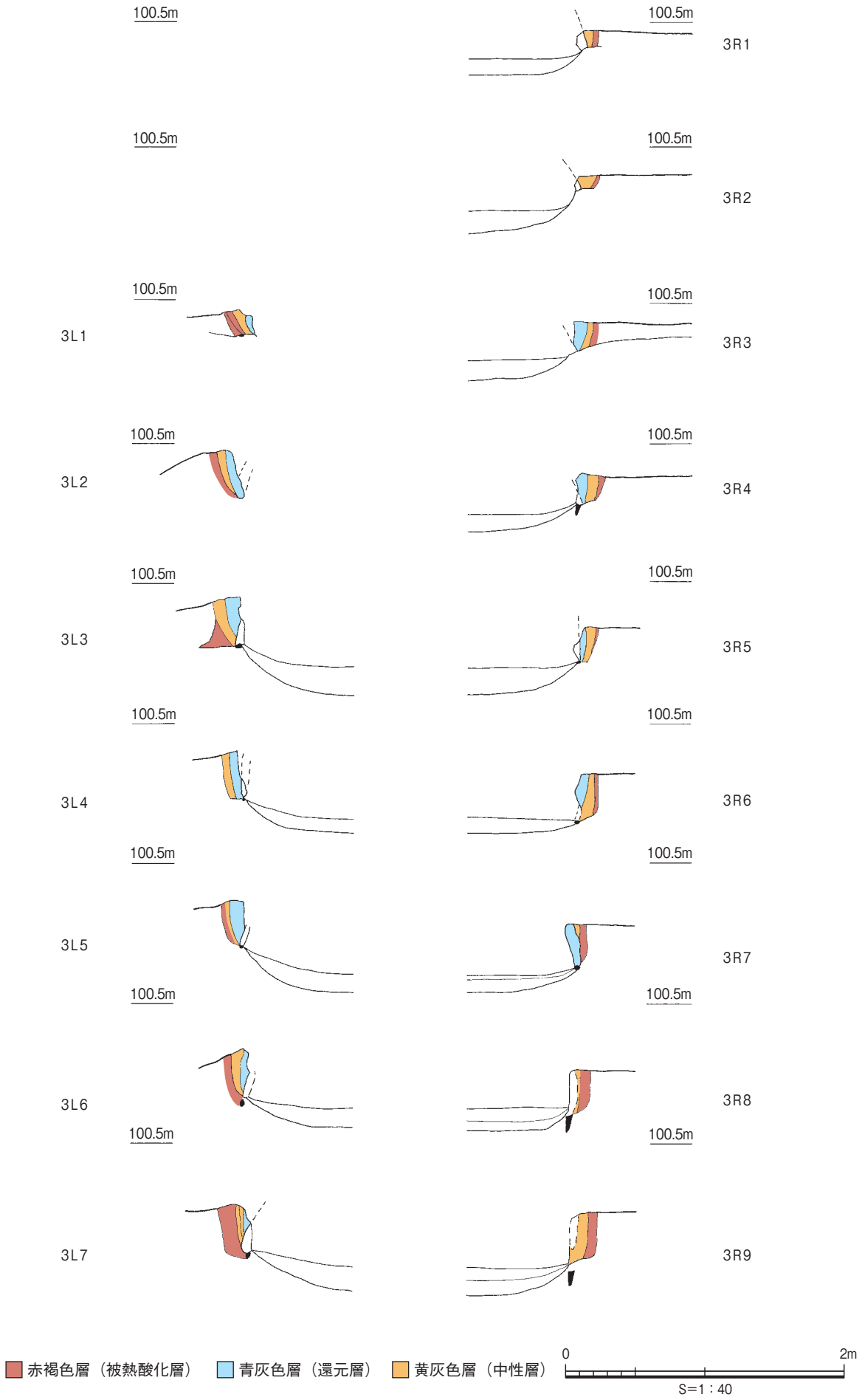
鴨谷３号窯　窯体図



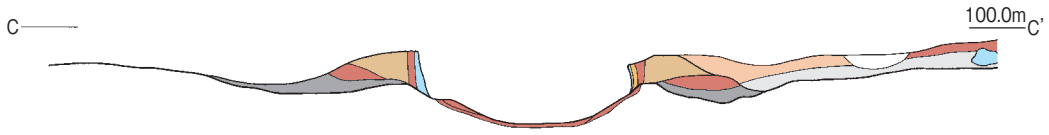
鴨谷３号窯　窯体（第１床面・第２床面）



鴨谷３号窯　架構痕跡全体図

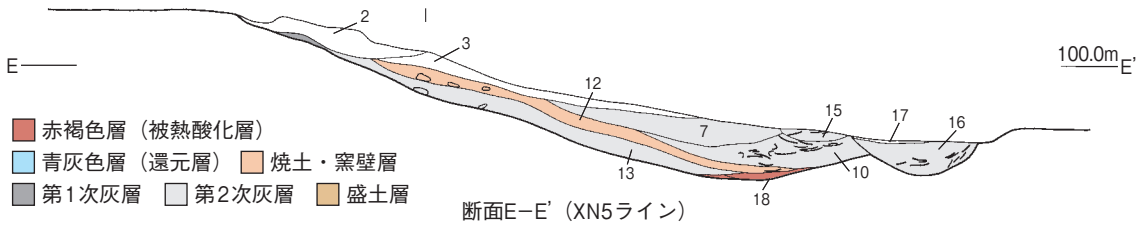


鴨谷 3 号窯　架構痕跡横断図



断面C−C'（YN4ライン）

断面D−D'（XS5ライン）



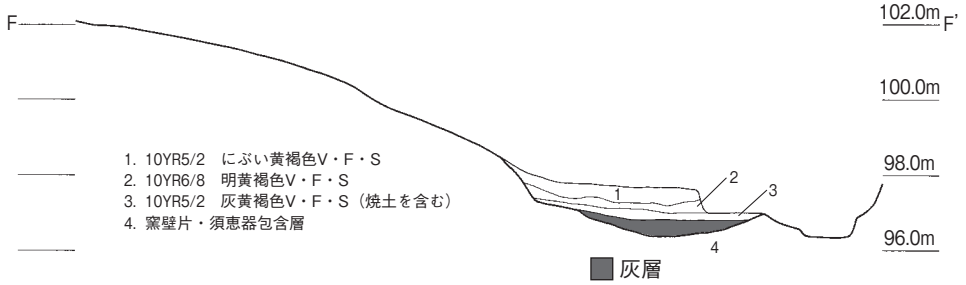
断面E−E'（XN5ライン）

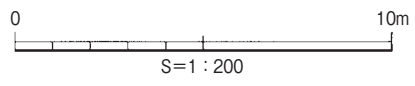
1. 10YR8/6　明黄褐色砂礫（地山）
2. 10YR5/6　黄褐色極細砂
3. 10YR2/3　暗褐色
6. 10YR4/3　黄褐色極細砂
7. 灰層1（須恵器・窯壁片を多く含む）
10. 灰層2（須恵器を多く含む）10YR2/1
12. 窯壁片・焼土層　2.5YR5/3　明赤褐色
13. 灰層3 10YR2/1（窯壁片・焼土を多く含む）
15. 10YR2/2　黒褐色
16. 10YR8/3　暗褐色
17. 10YR6/4　にぶい黄褐色砂礫
18. 10YR5/4　にぶい黄褐色質シルト（焼土を多く含む）

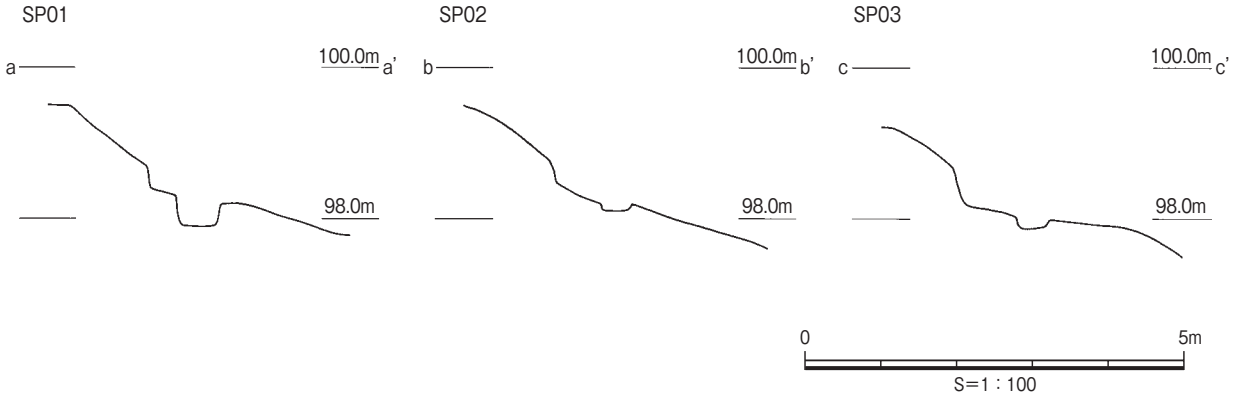
0　4m

S=1：80

鴨谷3号窯　窯体周辺灰原断面図

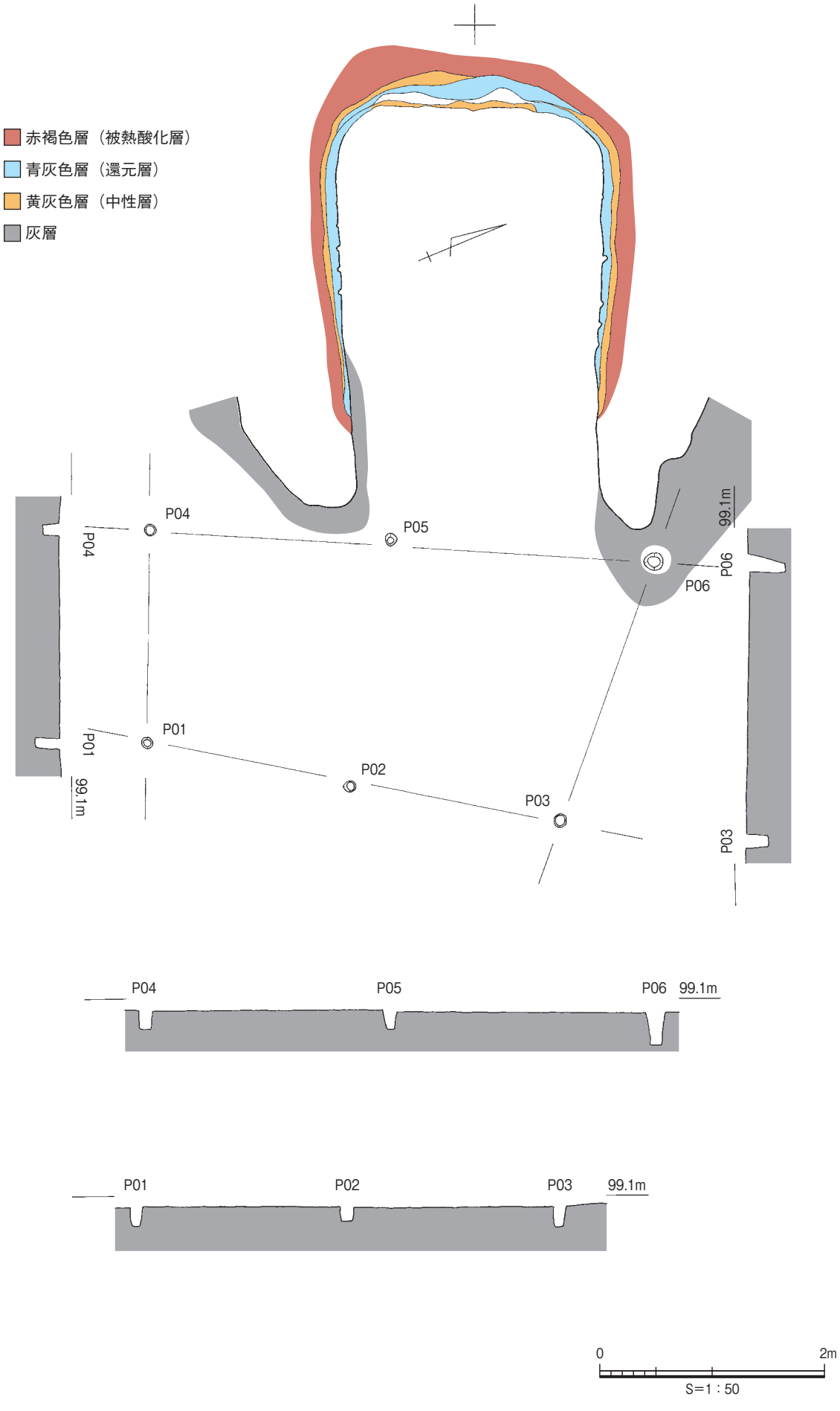




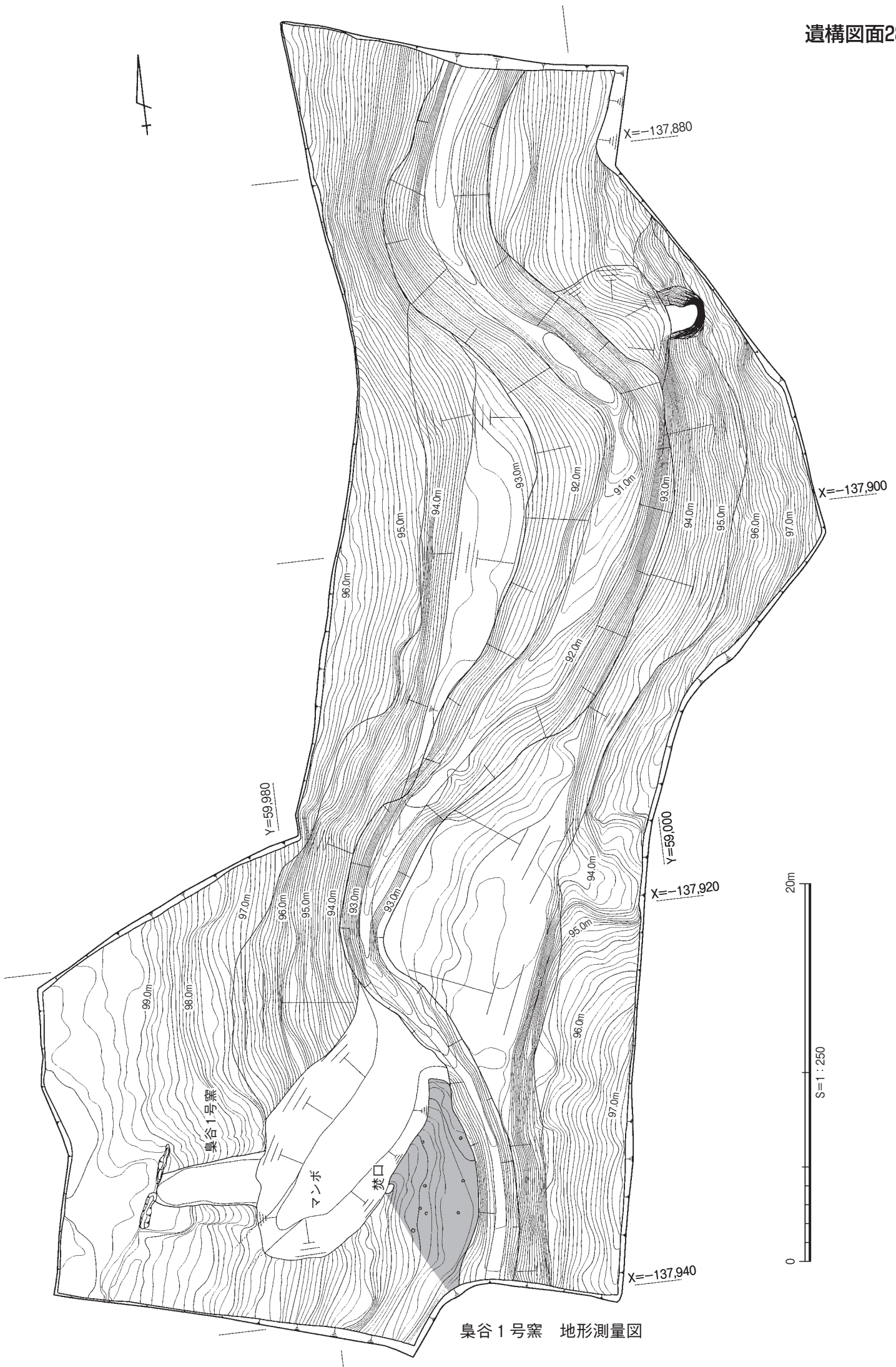


鴨谷 3 号窯　作業場平面図・横断図

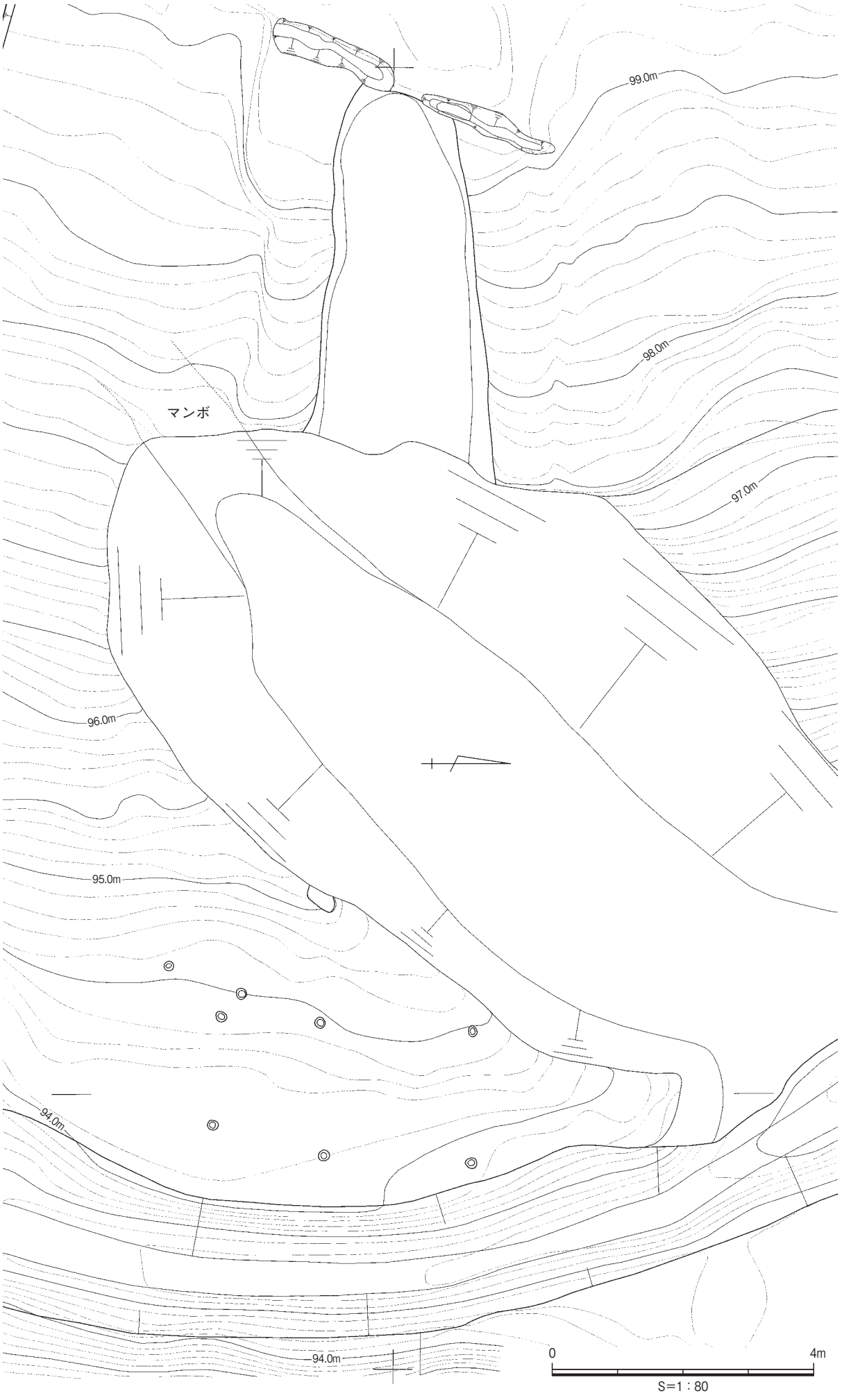
遺構図面27



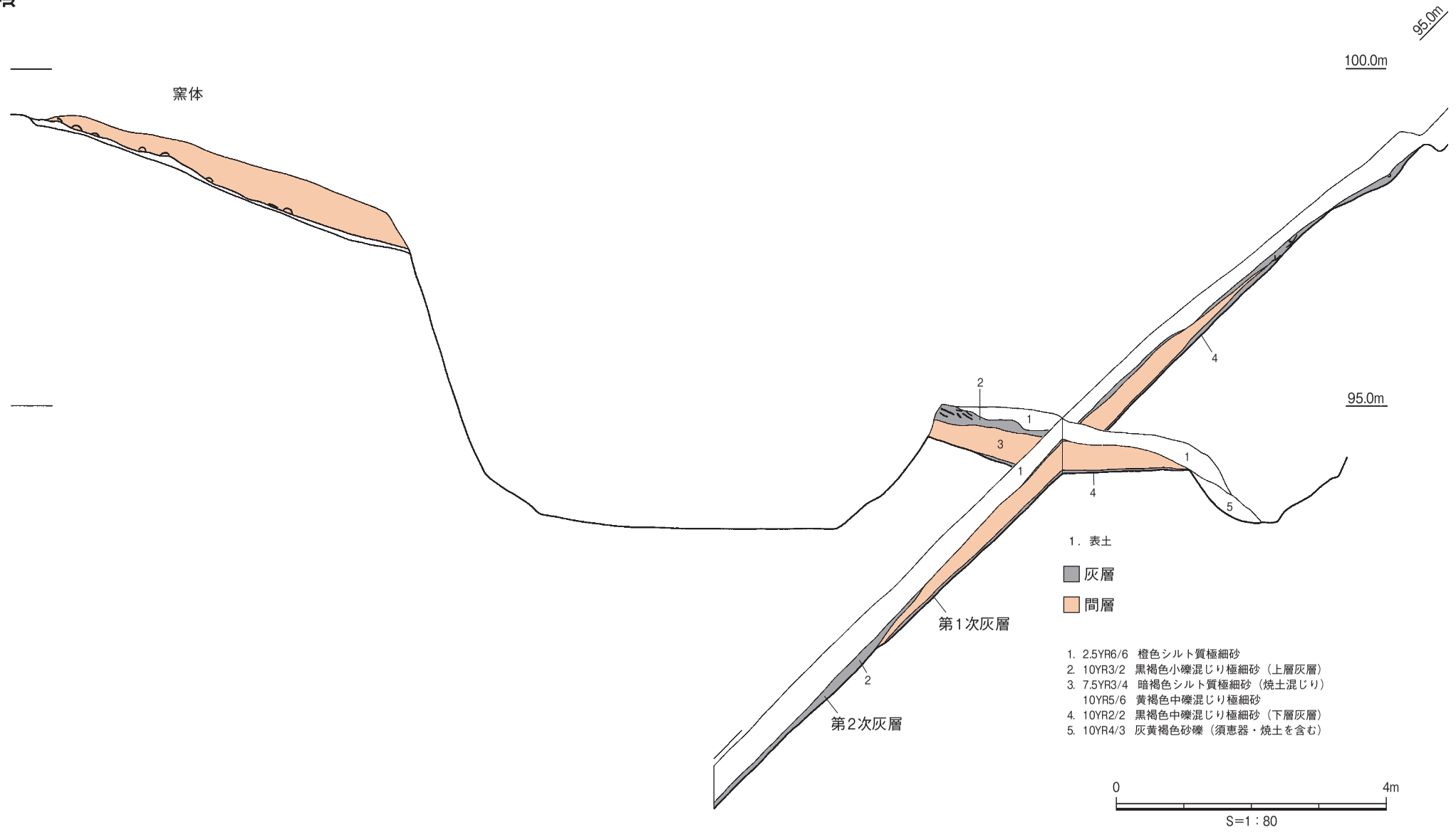
鴨谷 3 号窯　窯体焚口覆屋柱穴


X=−137,880
X=−137,900
X=−137,920
X=−137,940
Y=59,980
Y=59,000
99.0m
98.0m
97.0m
96.0m
95.0m
94.0m
93.0m
92.0m
91.0m
鳥谷1号窯
マンボ
焚口
20m
0
S=1：250

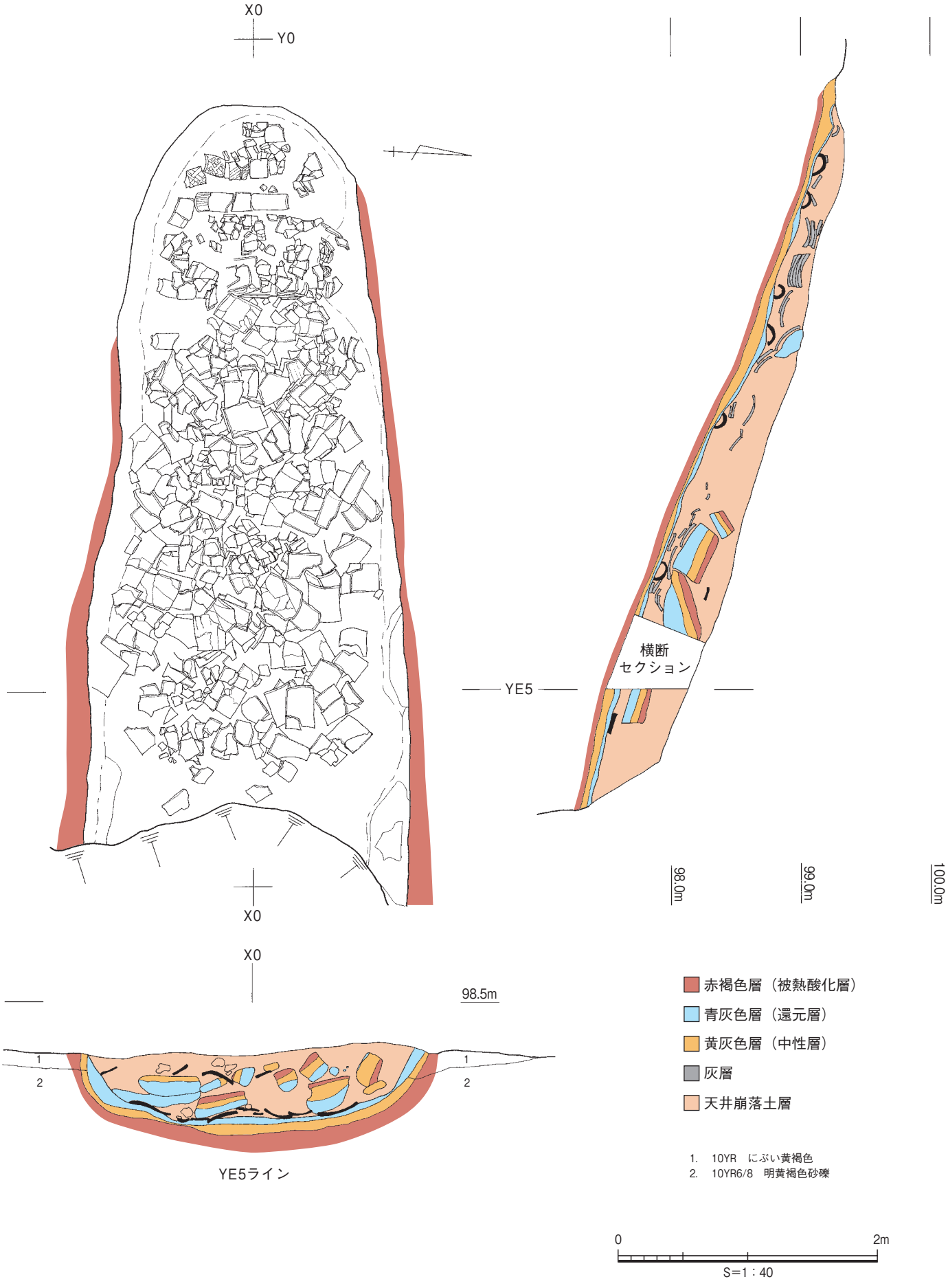
鳥谷 1 号窯　地形測量図



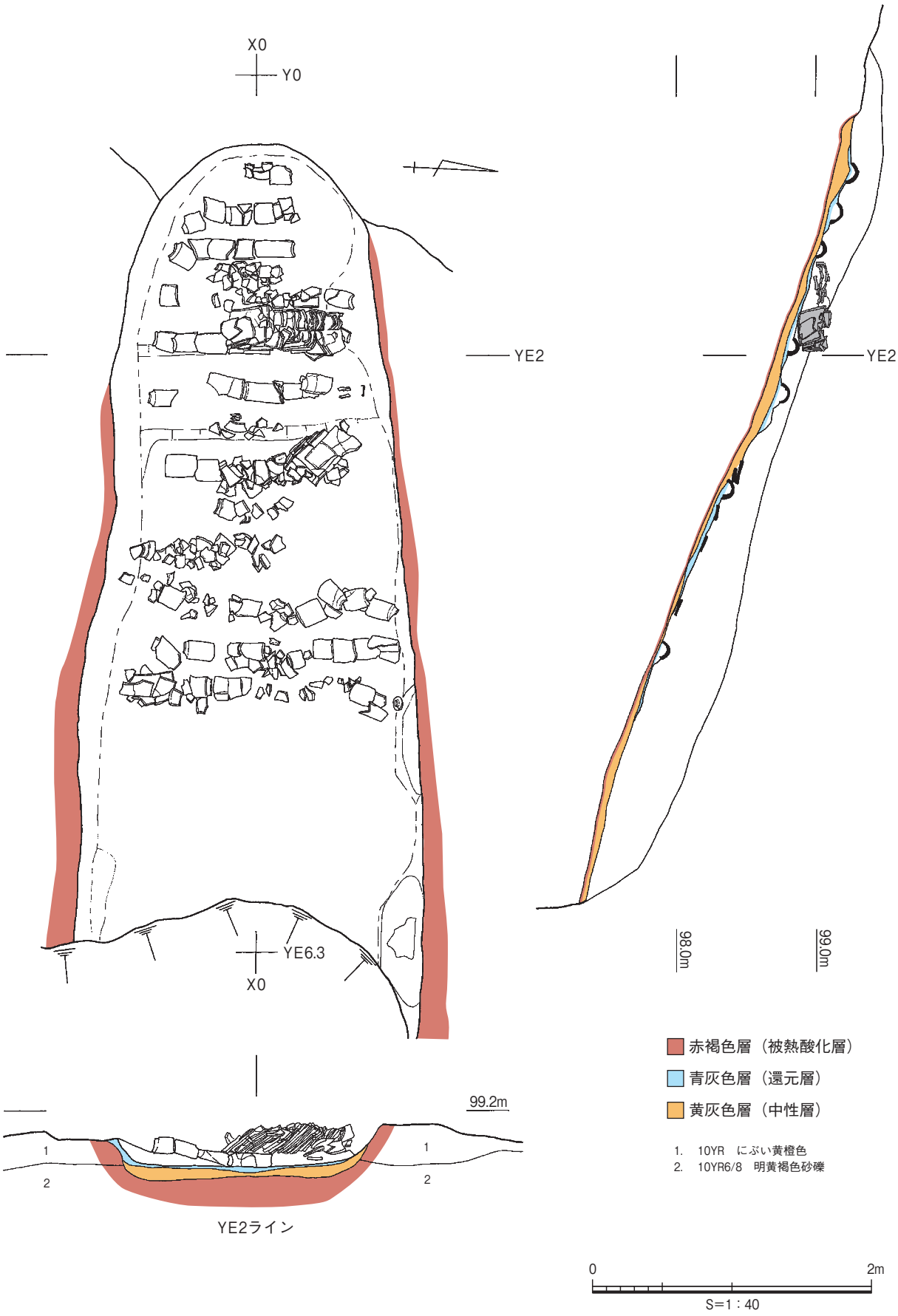
梟谷１号窯　窯体図


95.0m
100.0m
窯体
95.0m
2
1
3
1
4
1
4
5
第1次灰層
2
第2次灰層
1．表土
灰層
間層
1. 2.5YR6/6 橙色シルト質極細砂
2. 10YR3/2 黒褐色小礫混じり極細砂（上層灰層）
3. 7.5YR3/4 暗褐色シルト質極細砂（焼土混じり）
10YR5/6 黄褐色中礫混じり極細砂
4. 10YR2/2 黒褐色中礫混じり極細砂（下層灰層）
5. 10YR4/3 灰黄褐色砂礫（須恵器・焼土を含む）
0
4m
S=1：80

巣谷1号窯　灰原断面図



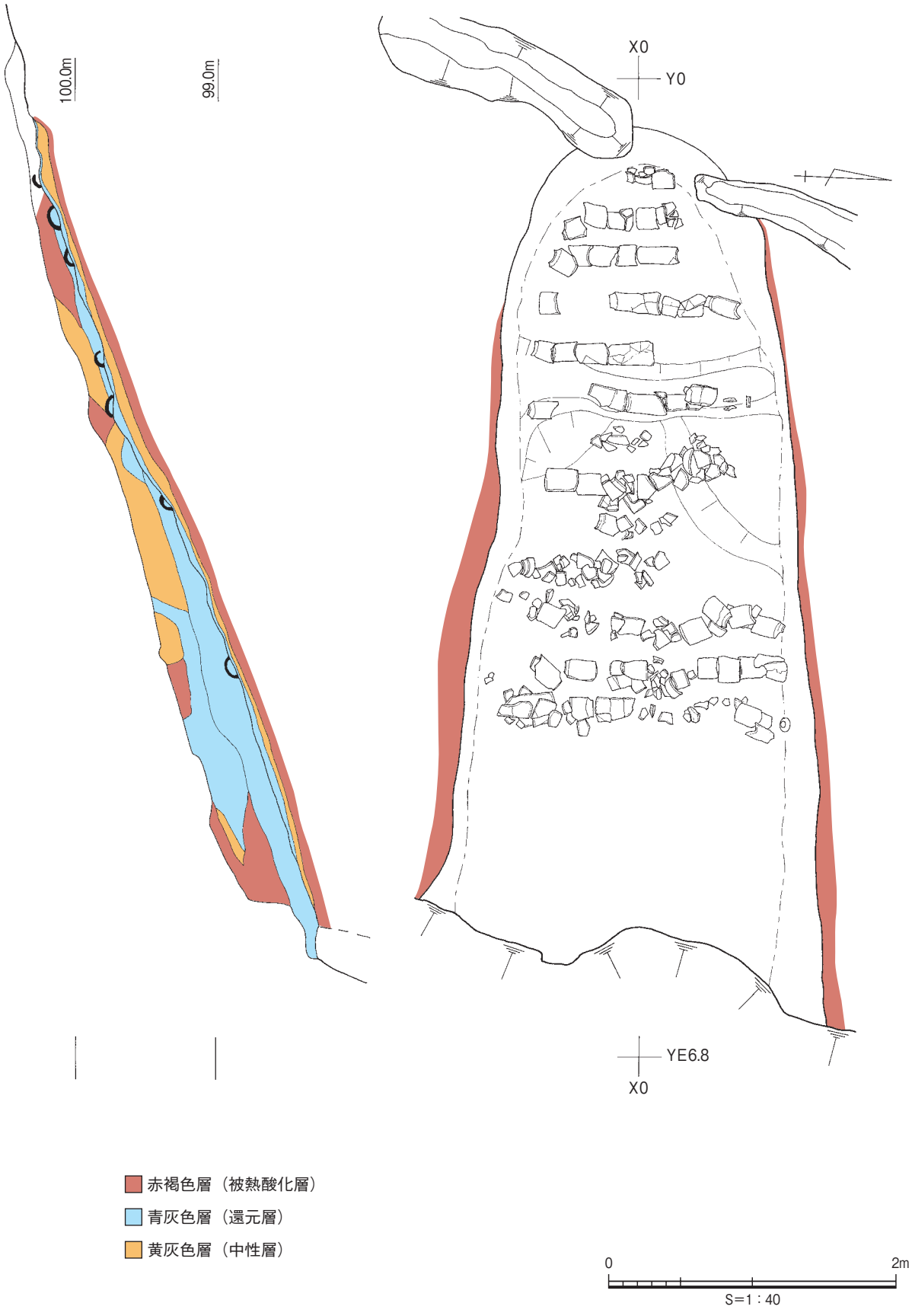
窯谷１号窯　瓦出土状況図・埋土層断面図



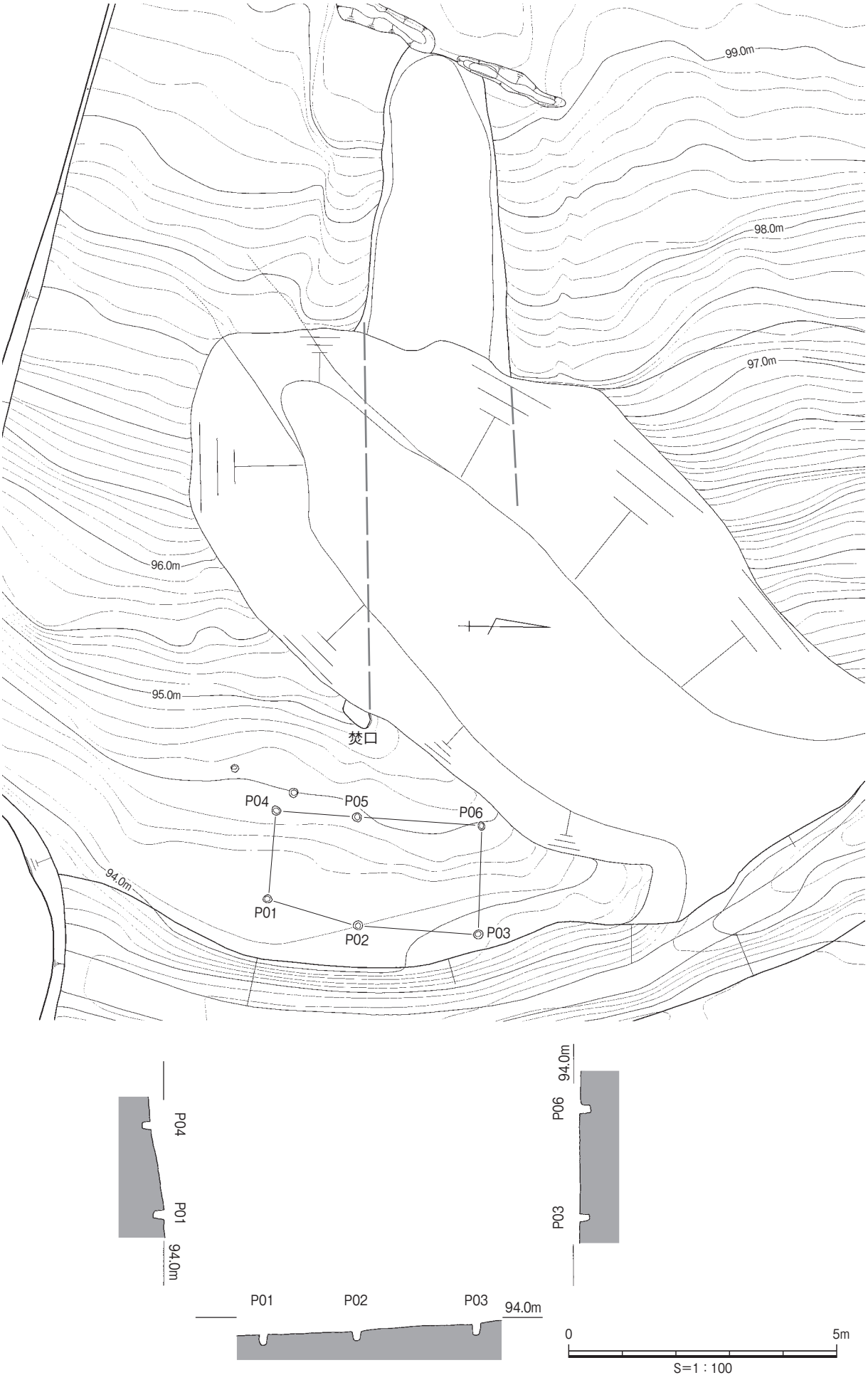
YE2ライン

巣谷１号窯　瓦列段および窯詰め状況図

遺構図面33

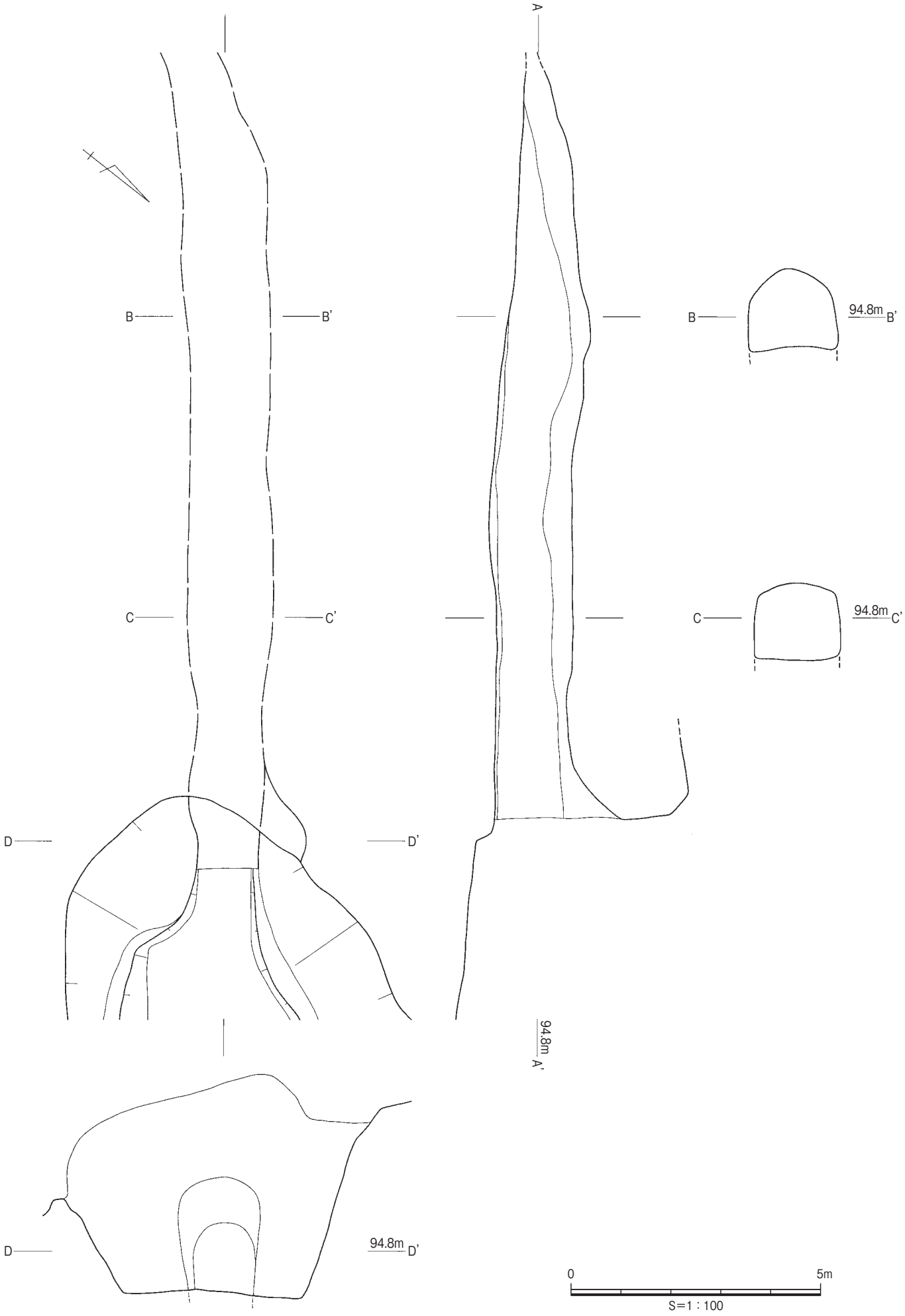


梟谷１号窯　瓦列段



梟谷 1 号窯　窯体焚口覆屋柱穴

遺構図面35



マンボ

遺構写真図版

神出窯跡群

a）調査区遠景（東から）

b）調査区遠景（西から）

神出窯跡群

調査区近接

神出窯跡群

鴨谷 1 ～ 3 号窯全景

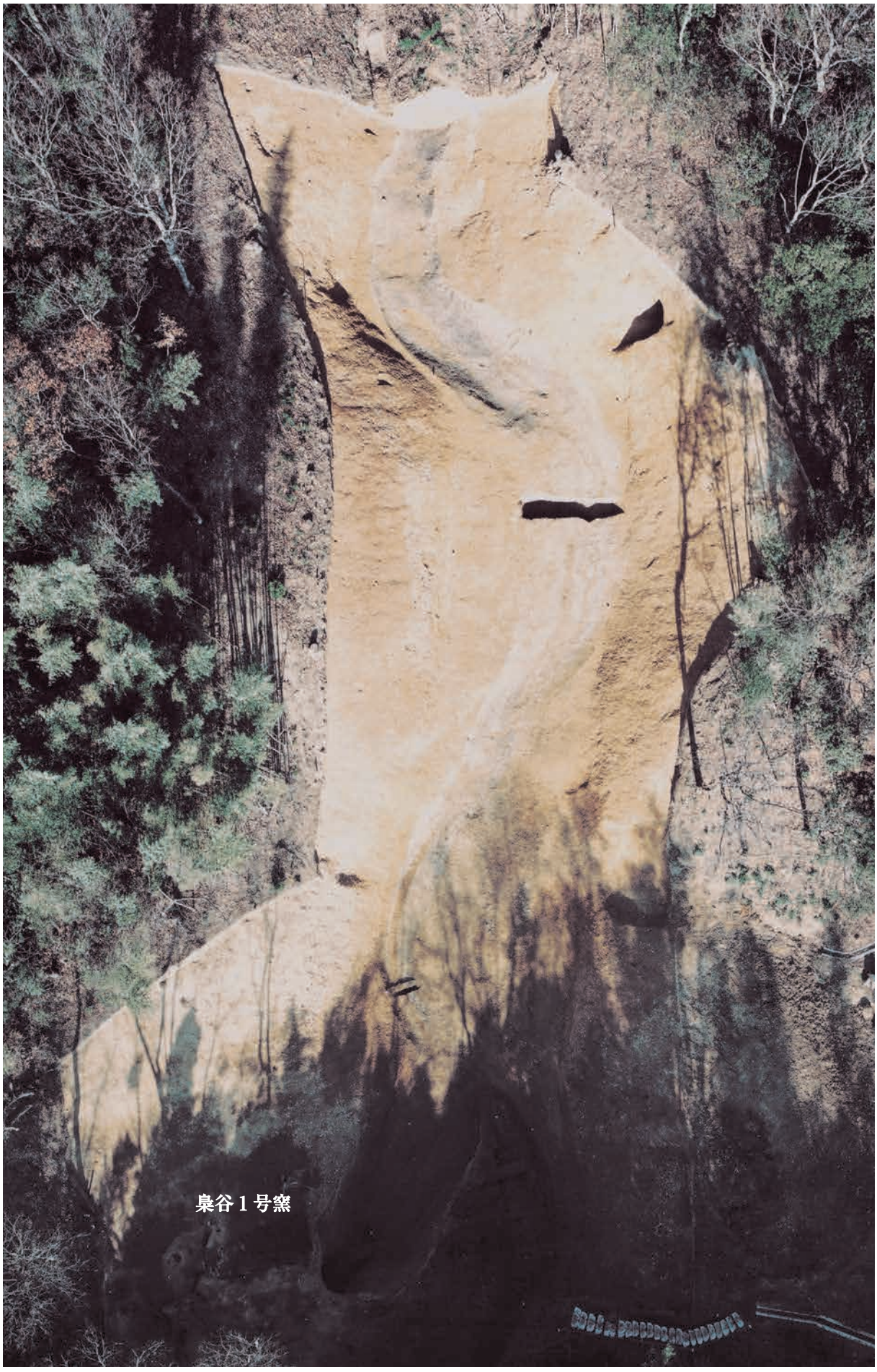
神出窯跡群

鴨谷 1 号窯・ 2 号窯全景

神出窯跡群

鴨谷 3 号窯全景

神出窯跡群



梟谷 1 号窯全景

神出・鴨谷支群

a）鴨谷 1・2 号窯
発掘調査前全景
（北東から）

b）鴨谷 3 号窯
発掘調査前全景
（東から）

c）鴨谷 3 号窯
作業場跡発掘調査前全景
（西から）

鴨谷 1 号窯

a） 1 号窯検出状況

b） 1 号窯・ 2 号窯検出状況

鴨谷 1 号窯

a）窯体横断セクション1・2

b）窯体横断セクション 1

c）窯体横断セクション 2

鴨谷１号窯

a）窯体・灰原全景（最終操業面）

b）窯体（最終操業面）

鴨谷１号窯

a）窯体排煙部
（最終操業時）

b）窯体焼成部～燃焼部
（最終操業時）

c）最終操業床面と当初床面

鴨谷１号窯

a）最終操業床面～当初床面
縦断セクション

b）最終操業床面～当初床面
横断セクション１

c）操業当初窯体床面

鴨谷１号窯

a）灰原遺物出土状況１
（北から）

b）灰原遺物出土状況２
（北から）

c）灰原遺物出土状況３
（北から）

鴨谷１号窯・２号窯

a） １号窯・２号窯検出状況

b） １号窯・２号窯完掘状況

鴨谷１号窯・２号窯

a） １号窯・２号窯全景

b） １号窯・２号窯・作業場跡全景

鴨谷２号窯

a）検出状況　北から

b）窯体完掘状況　北から

鴨谷 2 号窯

a）天井壁落盤状況

b）天井壁落盤状況

c）天井壁落盤状況

鴨谷 2 号窯

a）窯体横断セクション全体

b）窯体横断セクション 1

c）窯体横断セクション 1 ～ 3

鴨谷 2 号窯

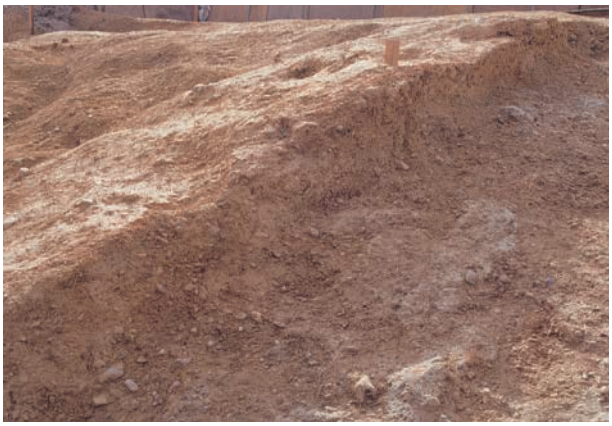
a）窯体全景

b）窯体全景

鴨谷 2 号窯

a）窯体全景（第 2 次床面）

b）窯体左側壁（焼成部下位）



c）窯体左側壁（焼成部上位）

d）窯体左側壁（焼成部中位）

e）窯体右側壁（焼成部上位）

鴨谷 2 号窯

a）第 2 次床面～第 1 次床面
横断セクション 4

b）第 2 次床面～第 1 次床面
横断セクション 5

c）第 2 次床面～第 1 次床面
縦横断セクション（燃焼部）

鴨谷 2 号窯

a）第 1 次床面

b）第 1 次床面

c）焚口覆屋柱穴

鴨谷 2 号窯

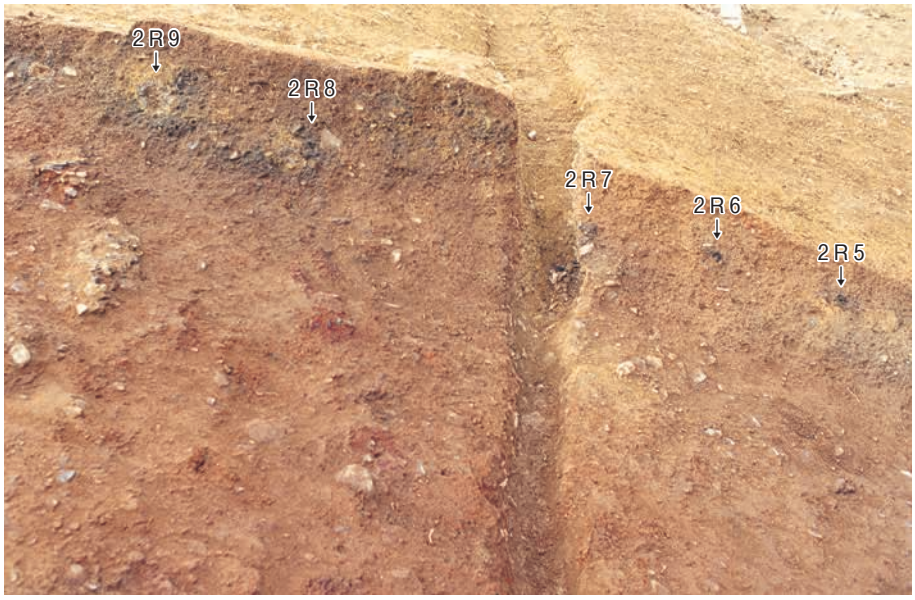
a）窯体還元面剥ぎ取り後全景

b）窯体断ち割り横断面 4
（左側壁）

c）窯体断ち割り横断面 4
（右側壁）

鴨谷 2 号窯

a）窯体右側壁
構築材検出状況



b）窯体右側壁
構築材列検出状況

c）窯体右側壁
構築材列検出状況

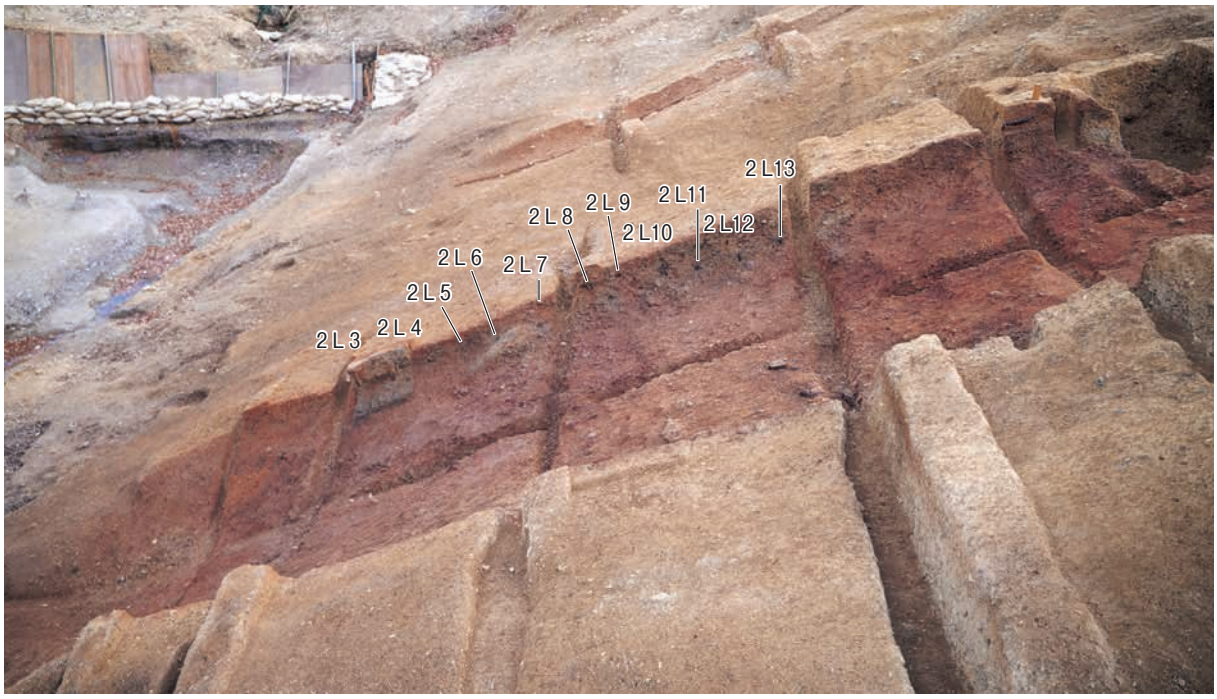
鴨谷 2 号窯

a）構築材 2R5

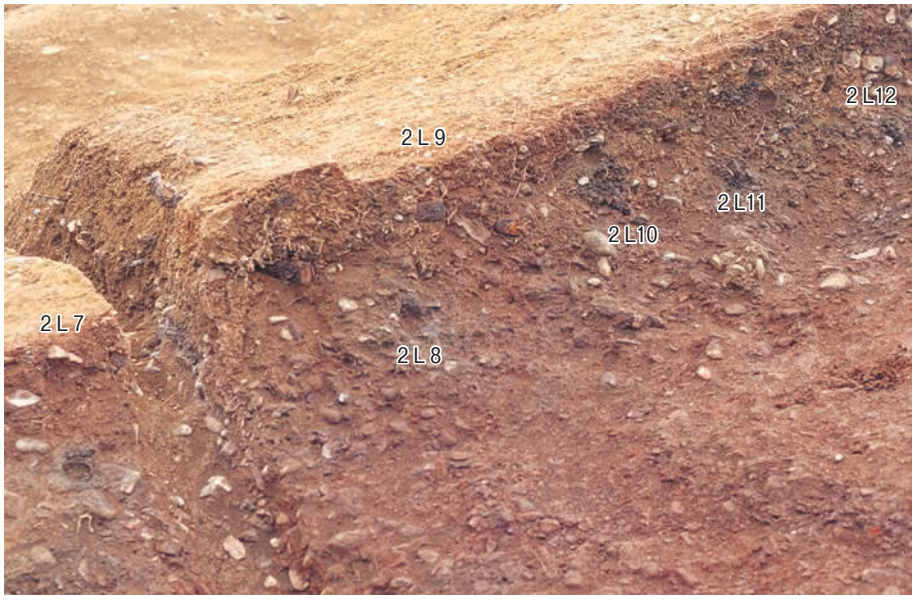
b）構築材 2R8

c）構築材 2R10

鴨谷２号窯



a）窯体左側壁
構築材検出状況



b）窯体左側壁
構築材列検出状況

c）窯体左側壁
構築材列検出状況

鴨谷２号窯

a）構築材 2L3・2L4

b）構築材 2L3・2L4

c）構築材 2L3

d）構築材 2L4

e）構築材 2L5

f）構築材 2L9・2L10

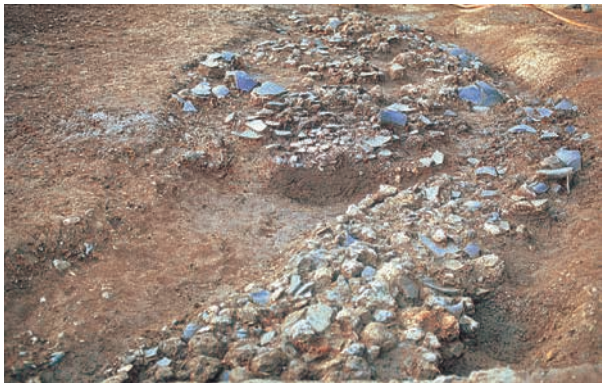
g）構築材 2L12

h）構築材 2L13

鴨谷２号窯

a） １号窯・２号窯灰原

b）灰原（SD01上面）（北西から）



c）灰原（SD01上面）（東から）

d）灰原（SD01上面）（西から）

鴨谷 2 号窯

a）作業場跡全景
（北東から）

b）作業場跡全景
（南から）

c）SX01・SD01
（東から）

鴨谷２号窯

a）SX01横断面
（西から）

b）SD01セクション１横断面
（西から）

c）SD01セクション２横断面
（東から）

鴨谷 3 号窯

a）検出状況（東から）

b）検出状況（南から）

鴨谷 3 号窯

a）窯体検出状況

b）窯体最終面検出状況

鴨谷 3 号窯

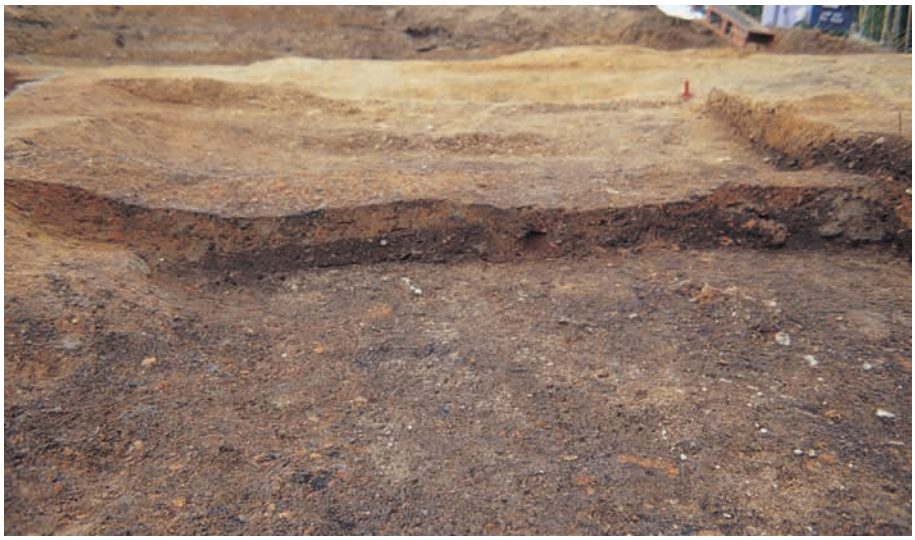
a）窯体・灰原
セクション 2（X 0）
（南から）

b）窯体埋土（天井部）
縦断セクション
（南から）

c）窯体埋土（天井部）
横断セクション
（東から）

鴨谷 3 号窯

a）窯体横断セクション全体



b）窯体右横断セクション

c）窯体右横断セクション・
灰原セクション 3

鴨谷 3 号窯

a）灰原セクション 3
（南から）

b）灰原セクション 1
（南から）

c）灰原遺物出土状況
（東から）

鴨谷 3 号窯

a）第 2 次操業窯体（全景）

b）第 2 次操業窯体床面

鴨谷 3 号窯

a）窯体第 1 ～最終床面間
縦横断セクション

b）窯体第 1 ～最終床面間
縦断セクション

c）窯体第 1 ～最終床面間
横断セクション

鴨谷 3 号窯

a）窯体第 1 床面俯瞰

b）窯体第 1 ・ 2 床面近接

鴨谷 3 号窯

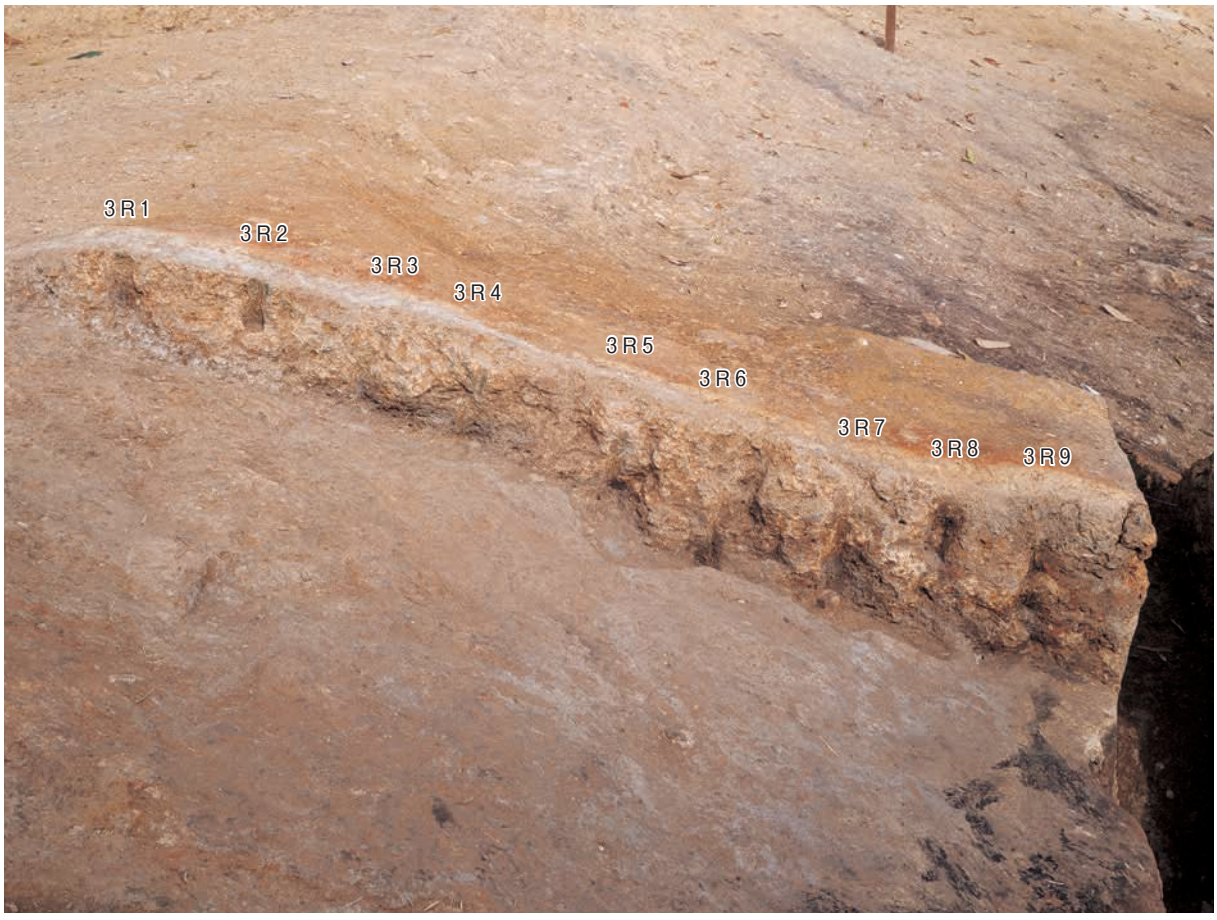
a）窯体
盛土断ち割り断面

b）窯体
盛土左側壁断ち割り断面

c）窯体
盛土右側壁断ち割り断面

鴨谷 3 号窯

a）窯体構築材列検出状況（左側壁）



b）窯体構築材列検出状況（右側壁）

鴨谷３号窯

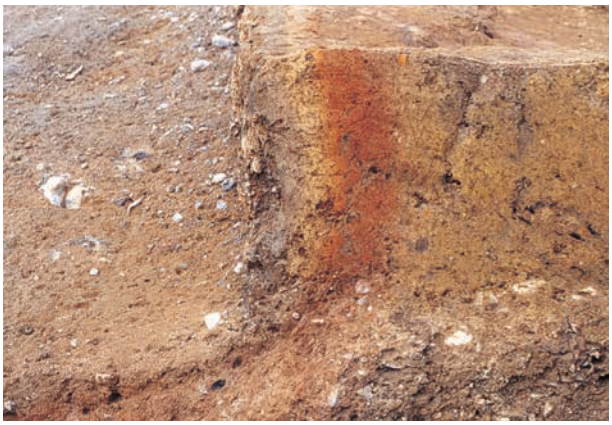
a）窯体左側壁
構築材列部分（３Ｌ４～３Ｌ７）

b）窯体右側壁
構築材列部分（３Ｒ２）

c）窯体右側壁と構築材列

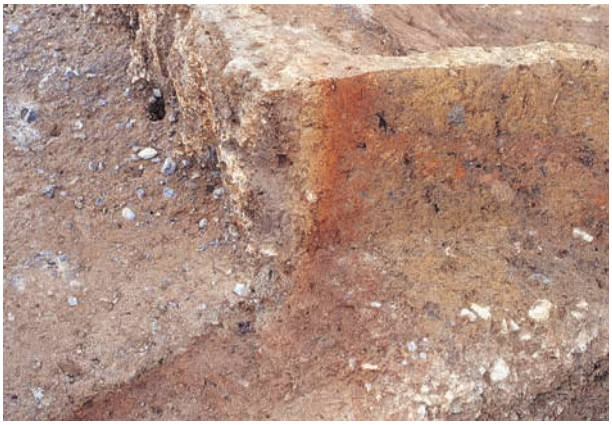
鴨谷 3 号窯

a）構築材 3L 7



b）構築材 3R 9

c）構築材 3L 6



d）構築材 3R 8

e）構築材 3L 5

f）構築材 3R 7

g）構築材 3L 4

h）構築材 3R 6

鴨谷 3 号窯

a）構築材 3L3

b）構築材 3R5

c）構築材 3L2

d）構築材 3R4

e）構築材 3L1

f）構築材 3R3

g）構築材 3R2

h）構築材 3R1

鴨谷 3 号窯

a）焚口覆屋柱穴（北から）

b）焚口覆屋柱穴（東から）

鴨谷 3 号窯

a）第 2 次操業窯体および
第 1 次操業作業場跡全景
（南西から）

b）作業場跡
（北東から）

c）作業場跡建物柱穴群
（北から）

鴨谷 3 号窯

a）第 1 次操業作業場跡
（西から）

b）第 1 次操業作業場跡
流路土器溜まり
（東から）

c）第 1 次操業作業場跡
流路土器溜まり
（東から）

梟谷１号窯

a）発掘調査前全景

b）窯体検出状況

c）検出状況全景

梟谷１号窯

a）窯体埋土横断セクション

b）窯体埋土縦断セクション

c）窯体埋土縦横断セクション

梟谷１号窯

a）完掘状況全景

b）窯体床面遺物検出状況

梟谷１号窯

a）窯体瓦列および窯詰め状況

b）窯体瓦列有段状況および瓦窯詰め状況

梟谷１号窯

a）窯詰め状況（全体）
（東から）

b）瓦間の挟み込み瓦小片
（南から）

c）窯詰め状況（部分）
（南から）

梟谷１号窯

a）窯体瓦列有段状況（近接）

b）窯体瓦列有段状況（全景）

臭谷１号窯

a）完掘後全景（正面）

b）完掘後全景（斜め）

梟谷１号窯

a）窯体床面

b）床面断ち割り（縦横断）

c）床面断ち割り（横断）

梟谷１号窯

a）灰原検出状況

b）灰原上層土断面

c）灰原縦断セクション

梟谷１号窯

a）窯体焚口

b）窯体焚口完掘状況

c）焚口覆屋柱穴
（東から）

梟谷１号窯

a）谷南壁断面

b）谷流路断面（南から）

c）谷北壁断面

梟谷１号窯

a）マンボ開口部
（北東から）

b）マンボ開口部
（北東から）

c）マンボ遠景
（北から）

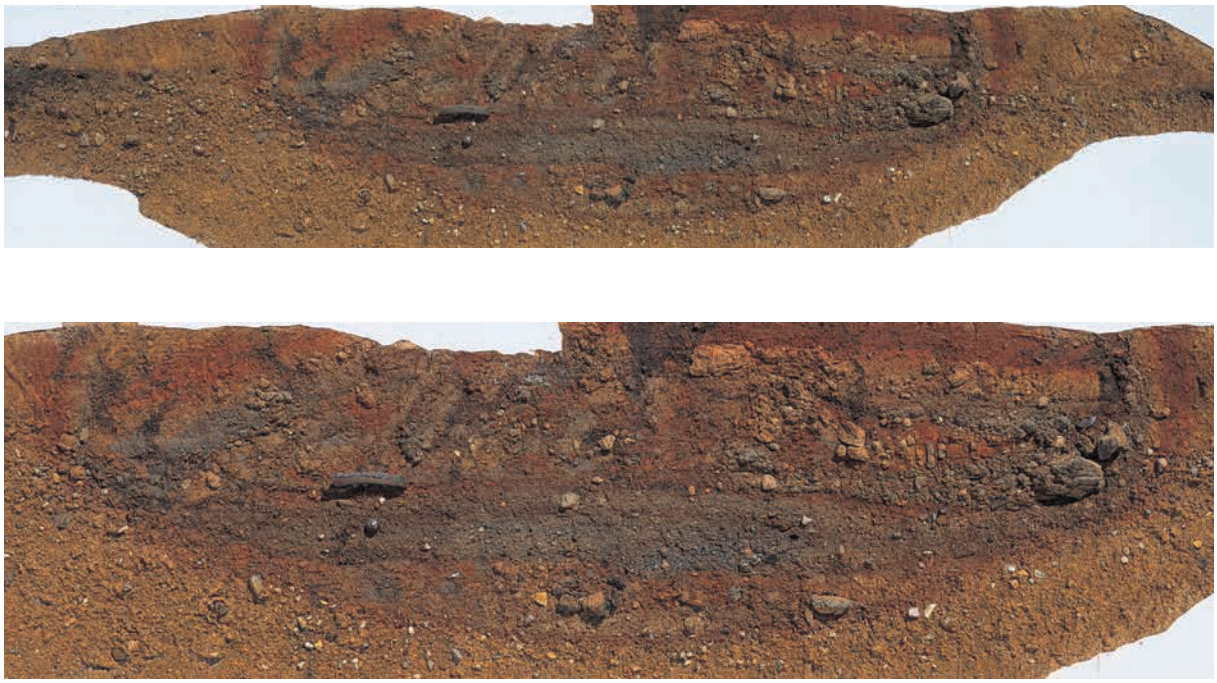
鴨谷 2 号窯

a）天井窯壁 1 （内壁面）

b）天井窯壁 1 （横断面）

c）天井窯壁 2 （内壁面）

鴨谷３号窯・梟谷１号窯



a）鴨谷３号窯　窯体剥ぎ取り断面　上：全体、下：拡大

b）鴨谷３号窯　天井窯壁１横断面（内壁面が上）

c）鴨谷３号窯　天井窯壁２（内壁面が上）

d）梟谷１号窯　天井窯壁２（内壁面）

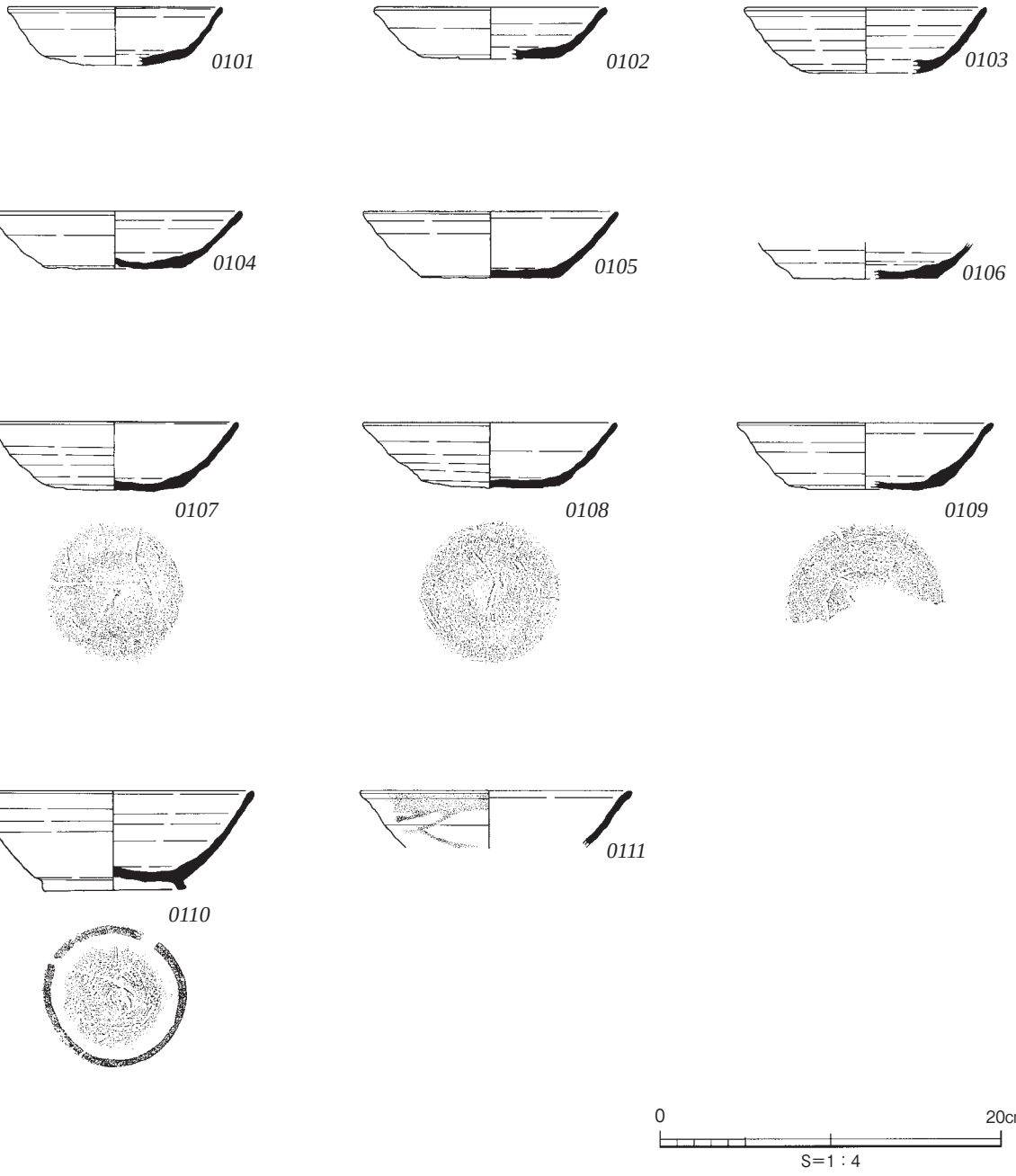
遺 物 図 面

凡　例

遺物の基本スケールは１／４スケールに統一しているが、刻書須恵器ならびに人形については、１／２スケールとし、大型甕の一部については１／５スケールとしている。

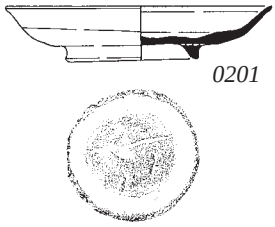
鴨谷１号窯

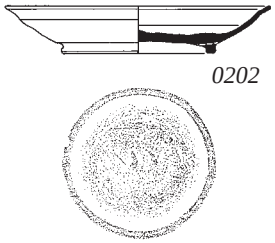
窯体出土須恵器

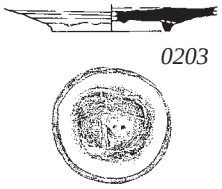


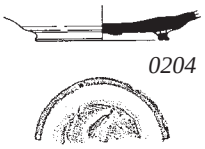
鴨谷 1 号窯

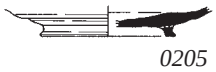
灰原出土須恵器 1


0201


0202


0203

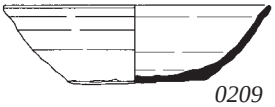

0204


0205

0206

0207

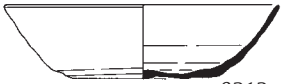
0208


0209

0210

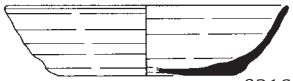
0211

0212


0213

0214

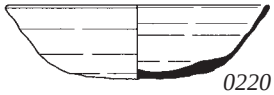
0215


0216

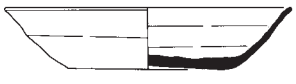
0217

0218

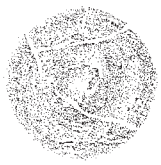
0219

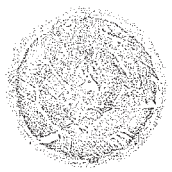

0220

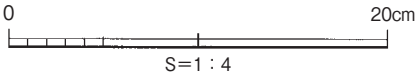
0221


0222

0223

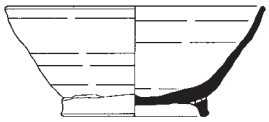


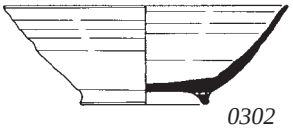


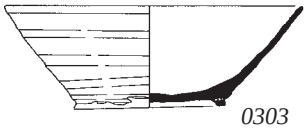


鴨谷 1 号窯

灰原出土須恵器 2


0301

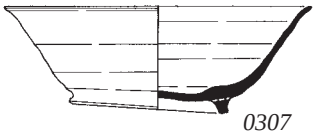

0302


0303

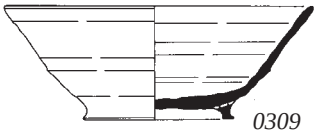
0304

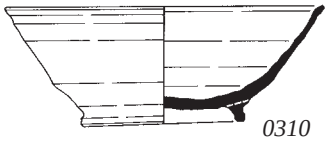
0305

0306

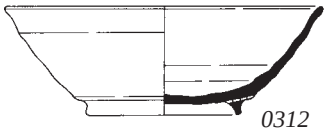

0307

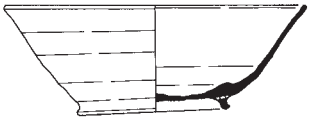
0308

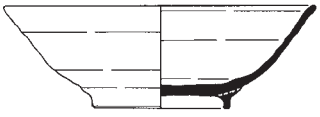

0309

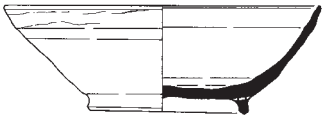

0310

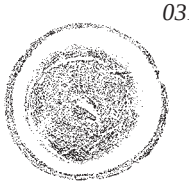
0311

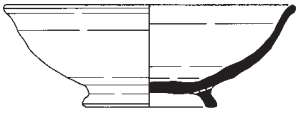

0312

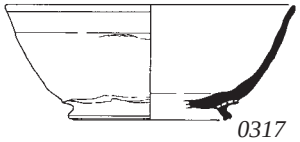

0313


0314


0315




0316

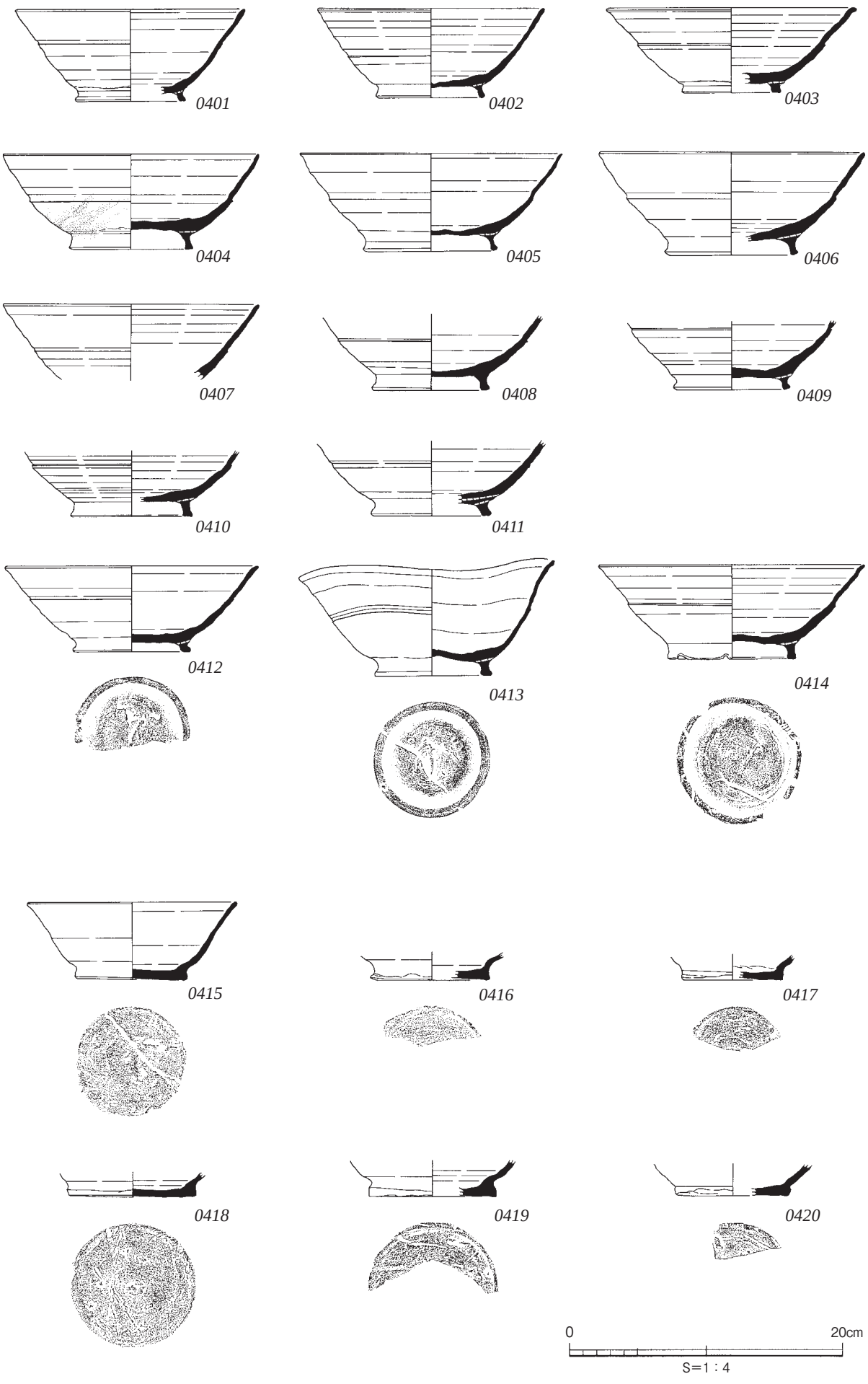

0317

0 20cm

S=1：4

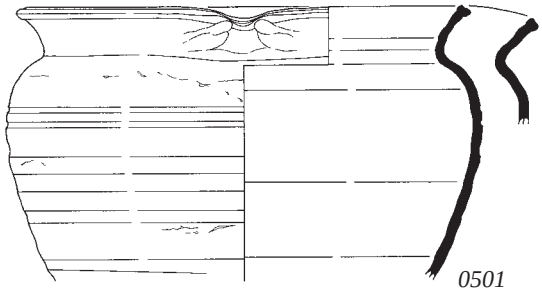
鴨谷 1 号窯

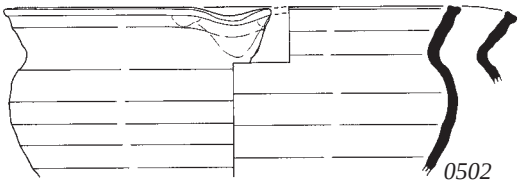
灰原出土須恵器 3



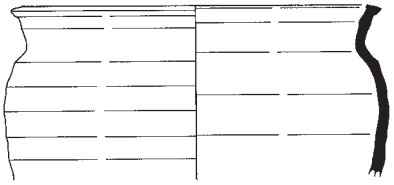
鴨谷 1 号窯

灰原出土須恵器 4


0501

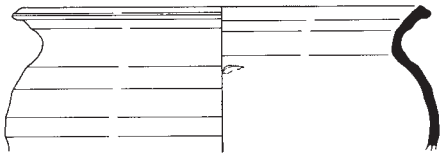

0502

0503

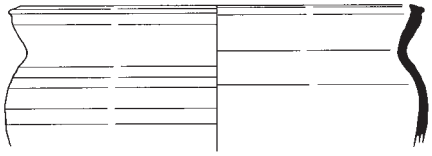

0504

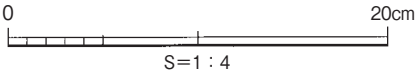
0505

0506


0507

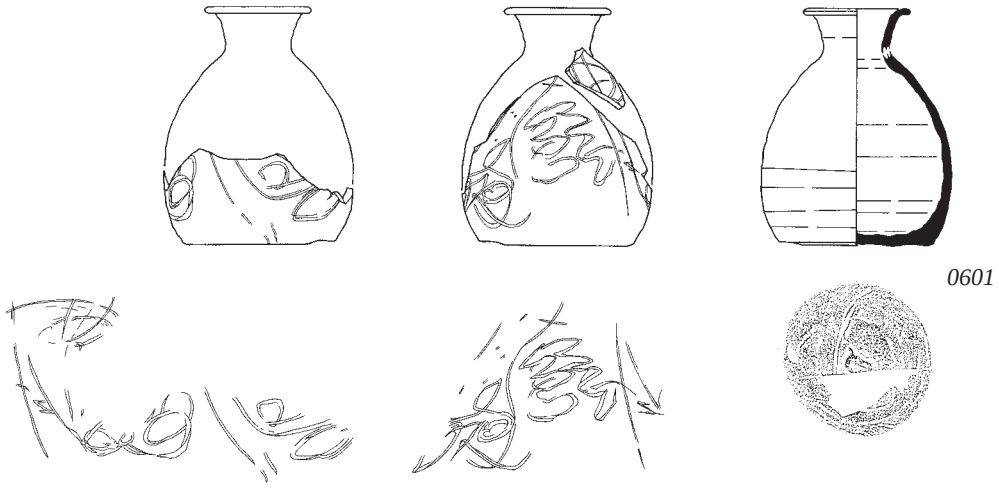
0508


0509

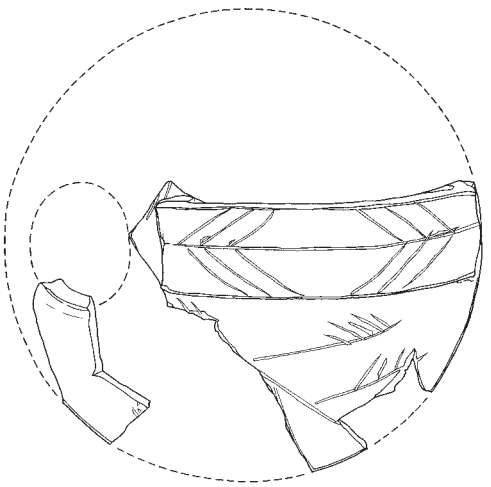


鴨谷 1 号窯

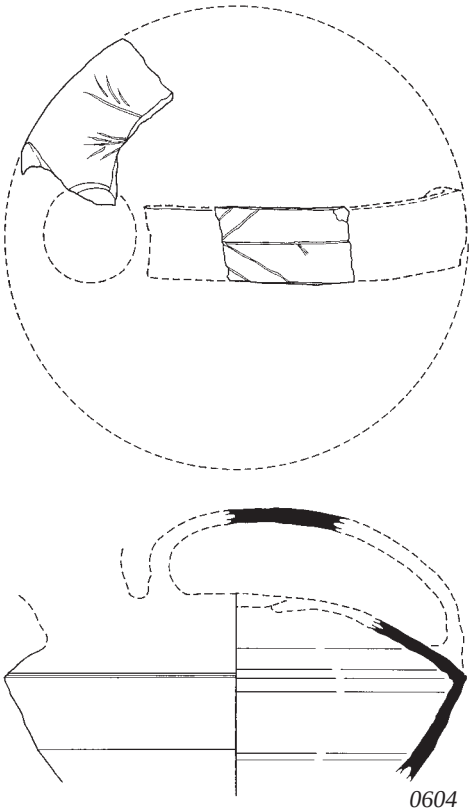
灰原出土須恵器 5



0601



0602



0604

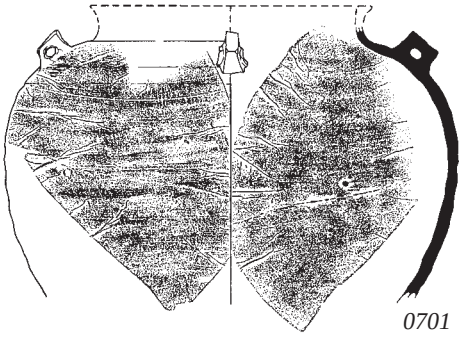
0603

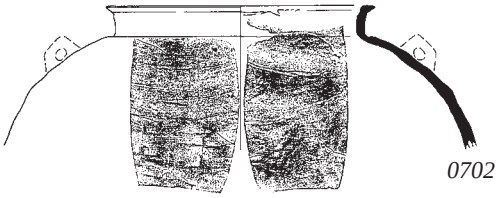
0 20cm

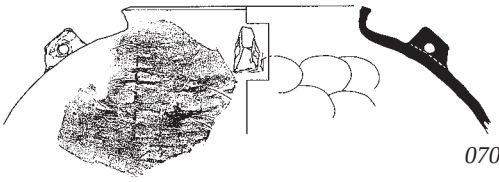
S=1：4

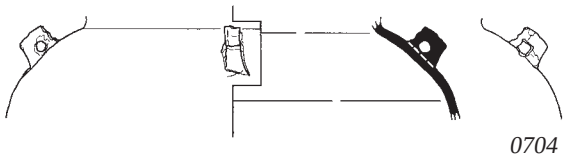
鴨谷 1 号窯

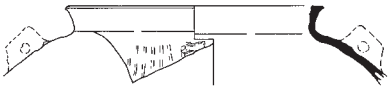
灰原出土須恵器 6

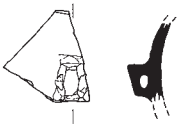

0701


0702

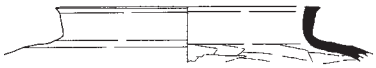

0703


0704

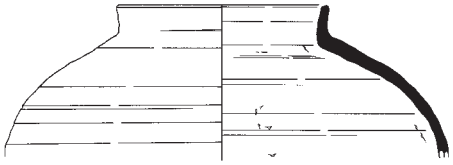

0705

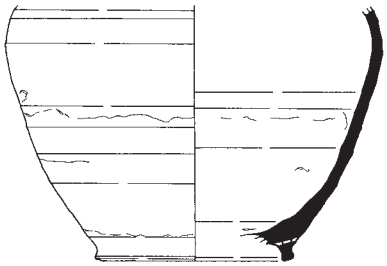

0707

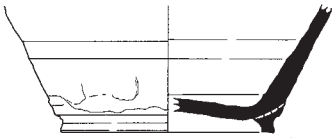
0708

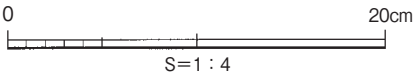

0706

0709


0710

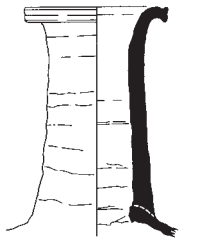

0711

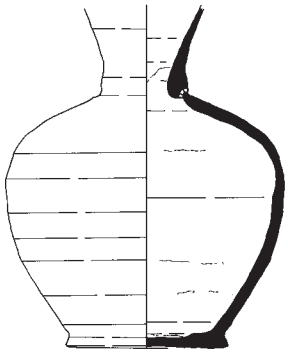

0712

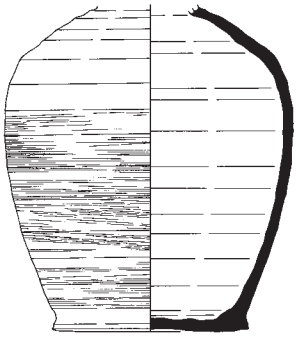


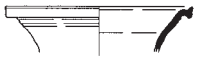
鴨谷 1 号窯

灰原出土須恵器 7

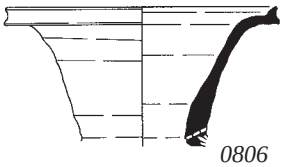

0801

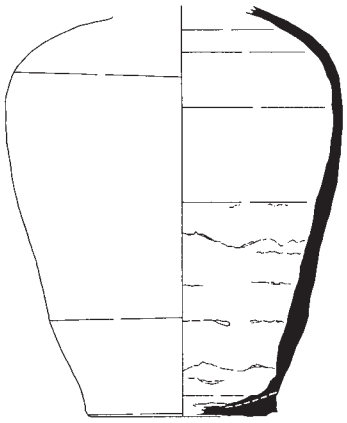

0802

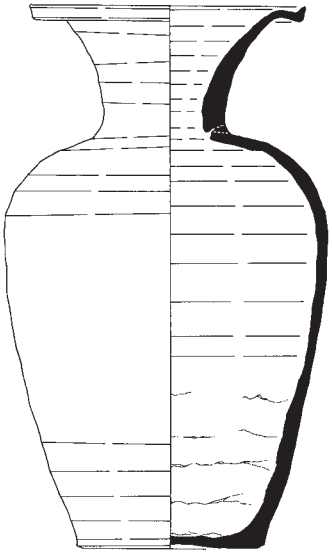

0803

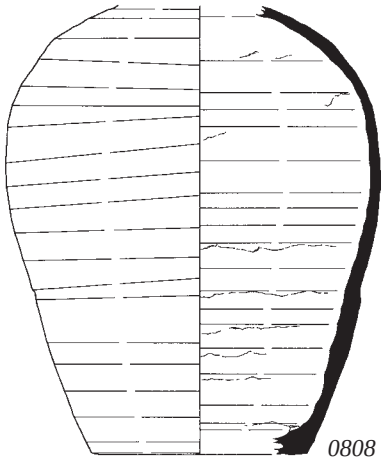

0804

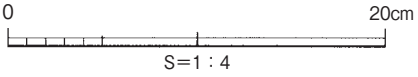
0805


0806


0807

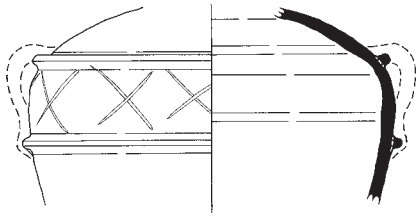

0809


0808

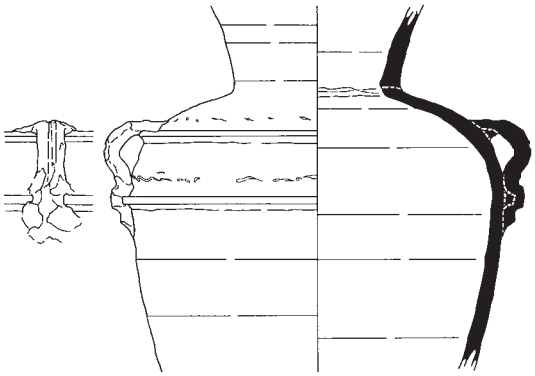


鴨谷 1 号窯

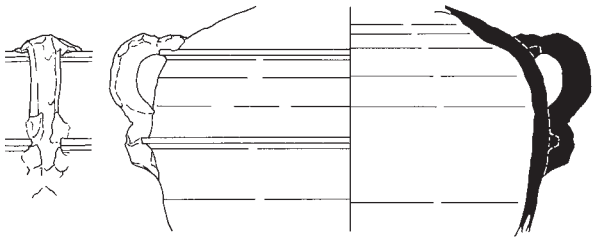
灰原出土須恵器 8



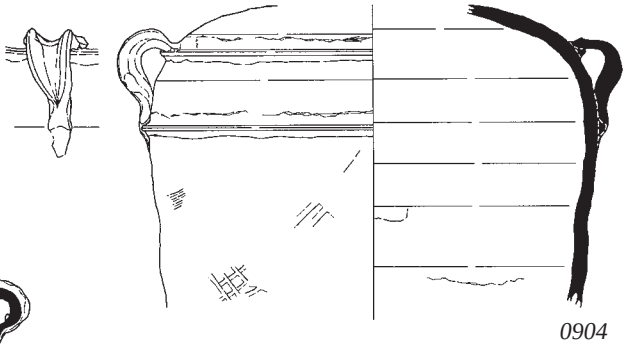
0901



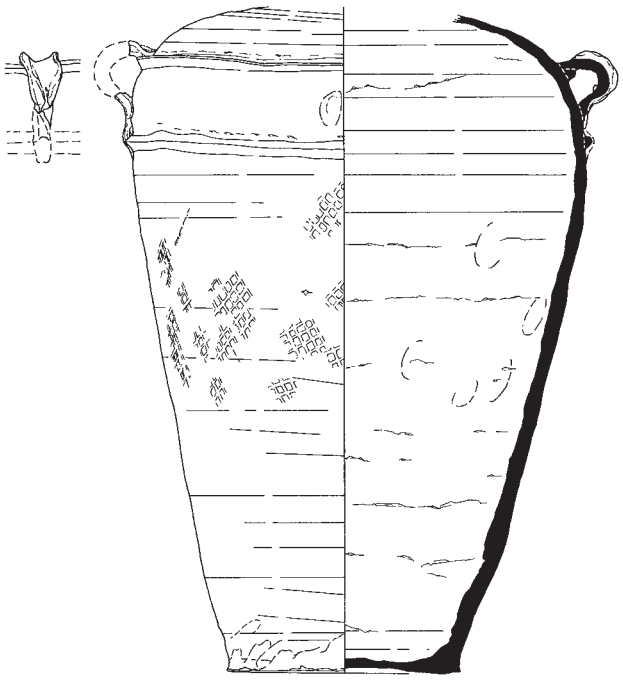
0902



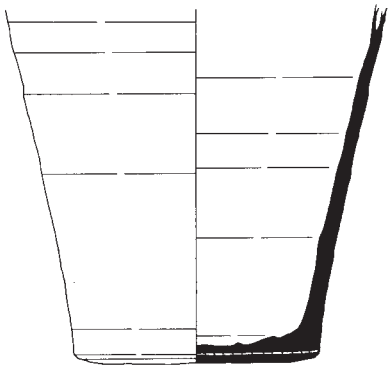
0903



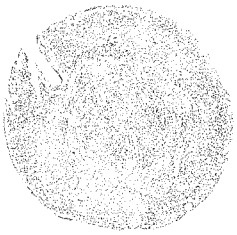
0904

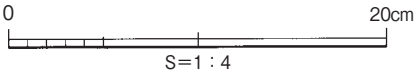


0905



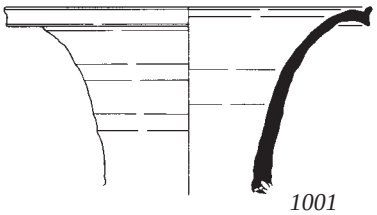
0906





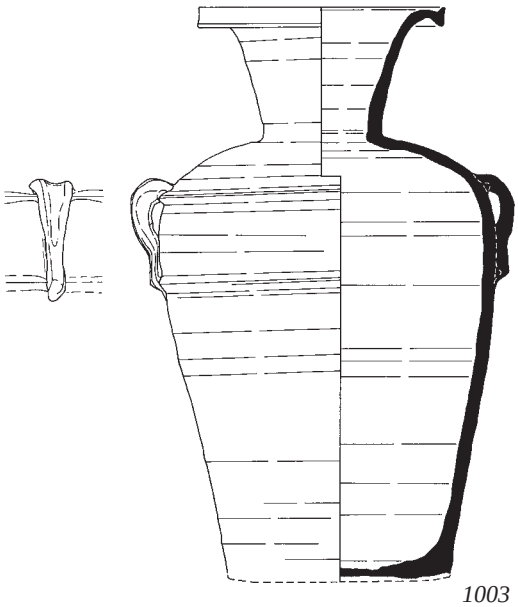
鴨谷１号窯

灰原出土須恵器 9

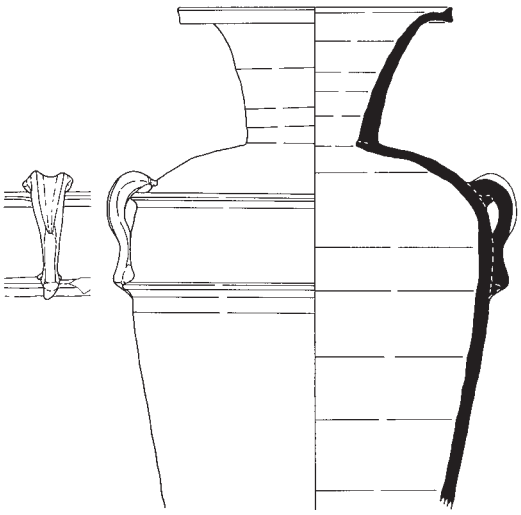


1001

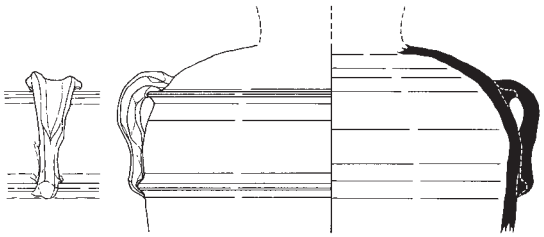
1002



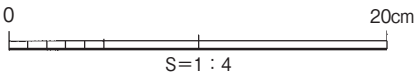
1003



1004

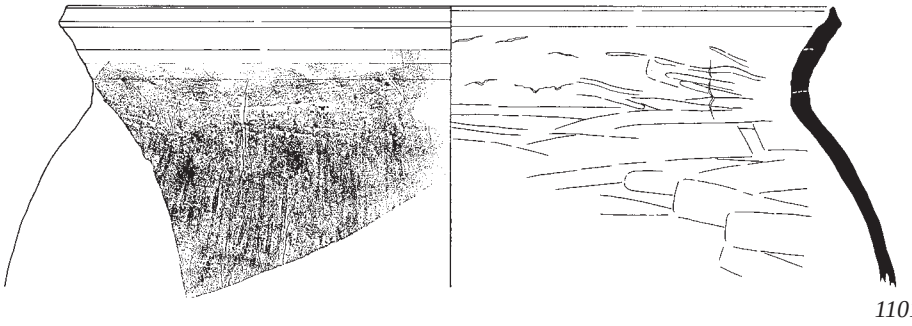


1005

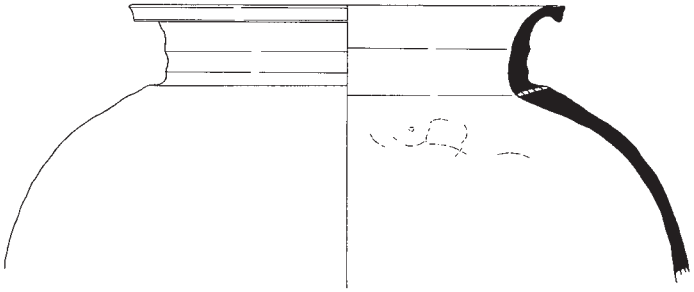


鴨谷１号窯

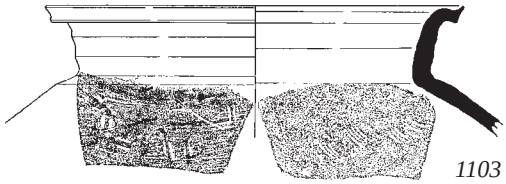
灰原出土須恵器 10



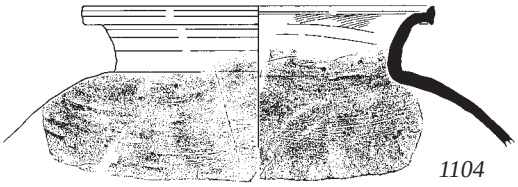
1101



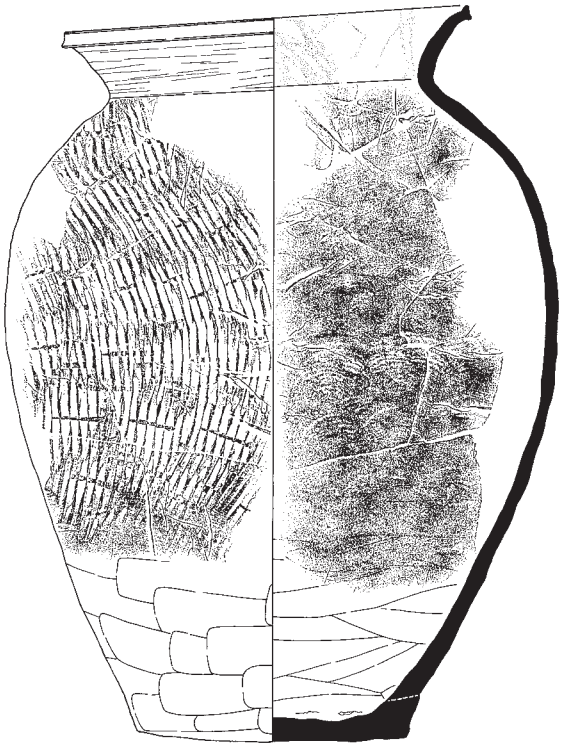
1102



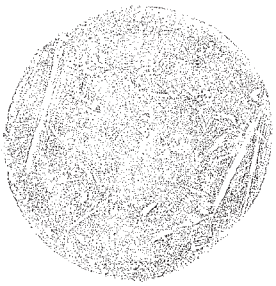
1103

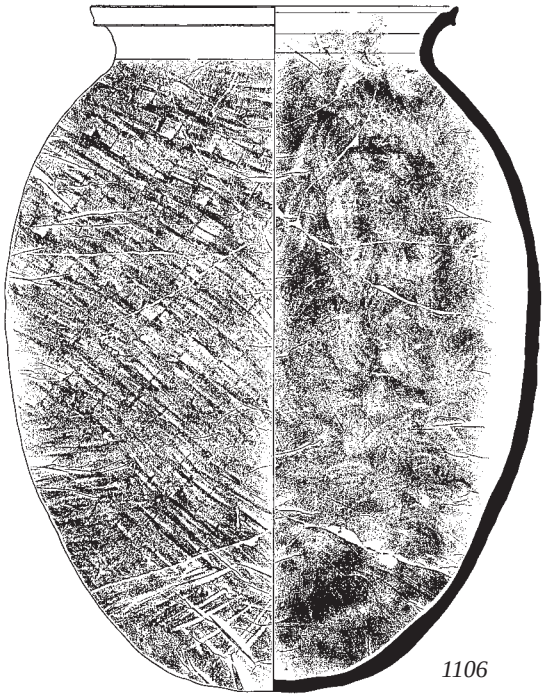


1104



1105





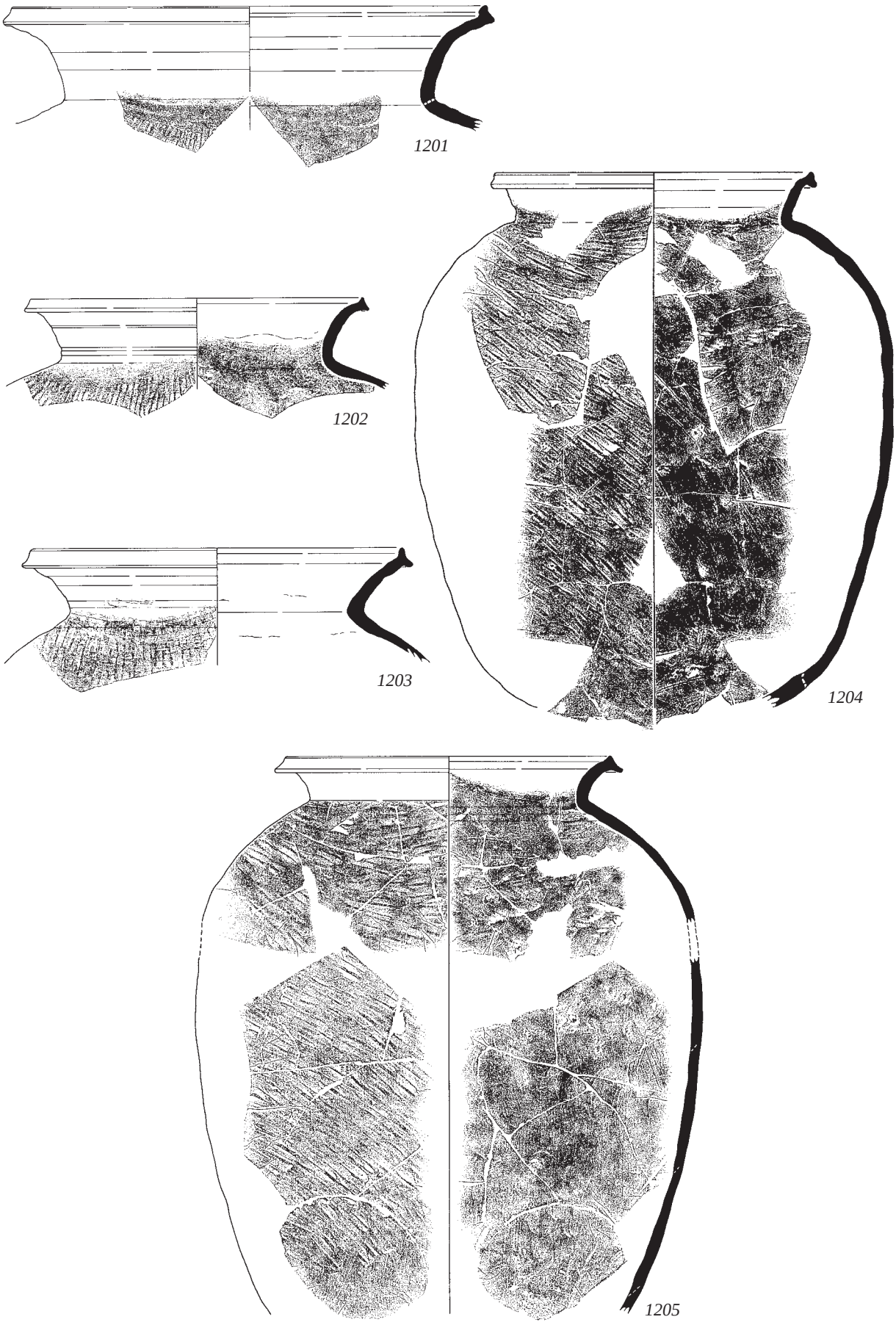
1106

0 20cm

S=1：4

鴨谷１号窯

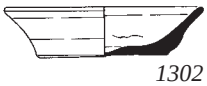
灰原出土須恵器 11



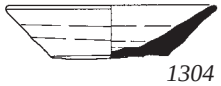
鴨谷 2 号窯

窯体出土須恵器 1

1301


1302

1303


1304

1305

1306

1307

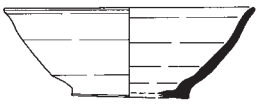
1308

1309

1310

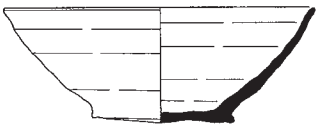
1311

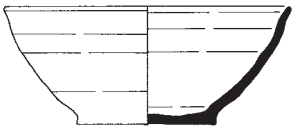
1312

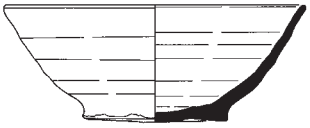

1313

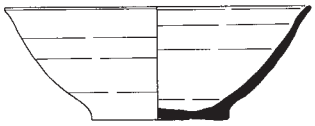
1314

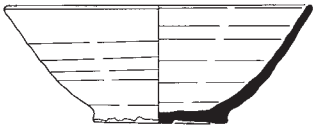
1315

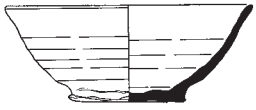

1316

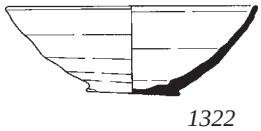

1317

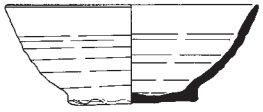

1318

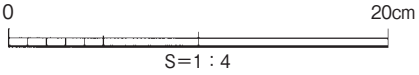

1319


1320


1321

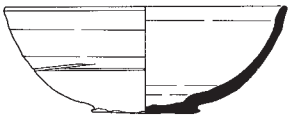

1322

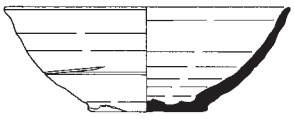

1323

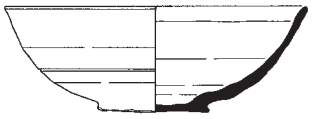


鴨谷 2 号窯

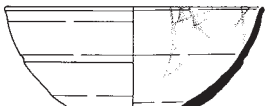
窯体出土須恵器 2


1401

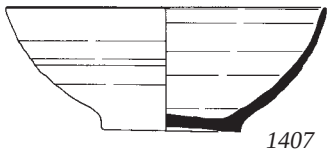

1402

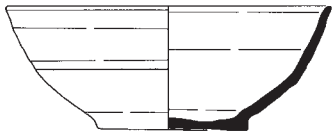

1403

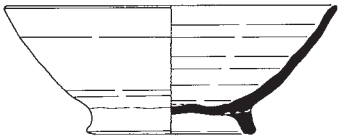
1404

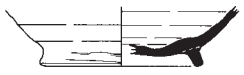

1405

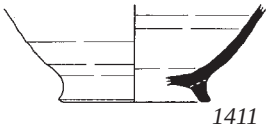
1406


1407


1408


1409


1410


1411

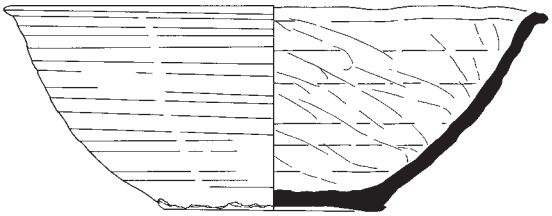
0 20cm

S=1：4

鴨谷 2 号窯

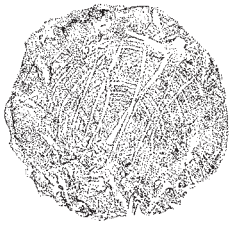
窯体出土須恵器 3

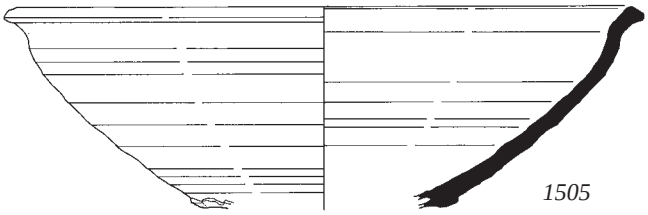
1501



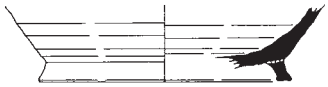
1504

1502

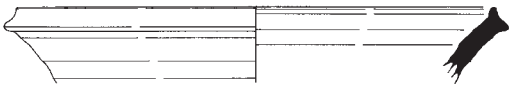




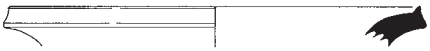
1505



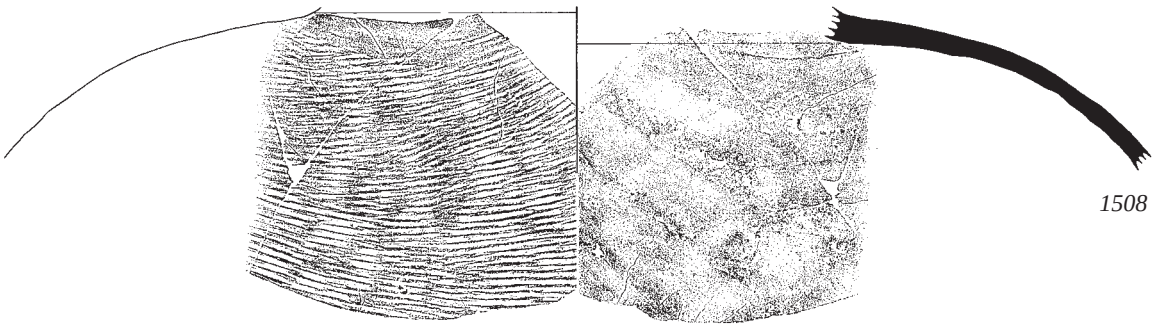
1503



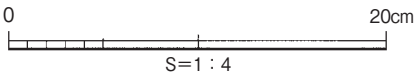
1506



1507

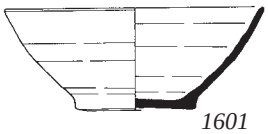


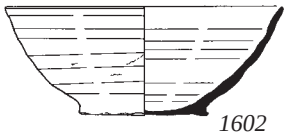
1508



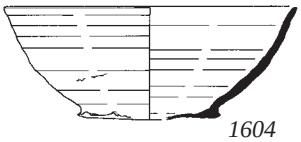
鴨谷２号窯

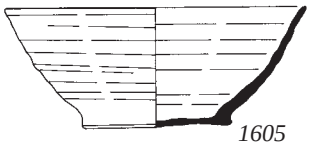
窯体出土須恵器 4

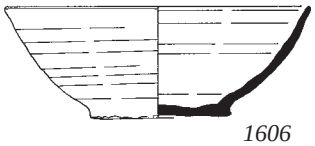

1601

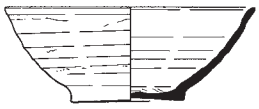

1602

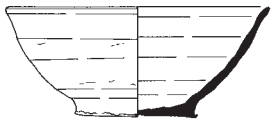
1603

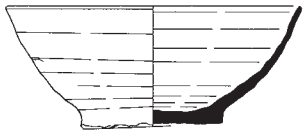

1604


1605

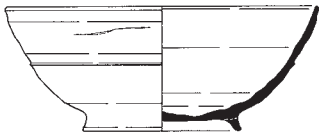

1606

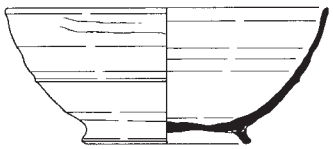

1607

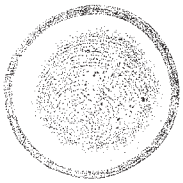

1608

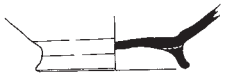

1609

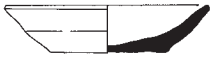
1610

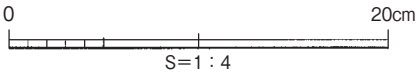

1611


1612



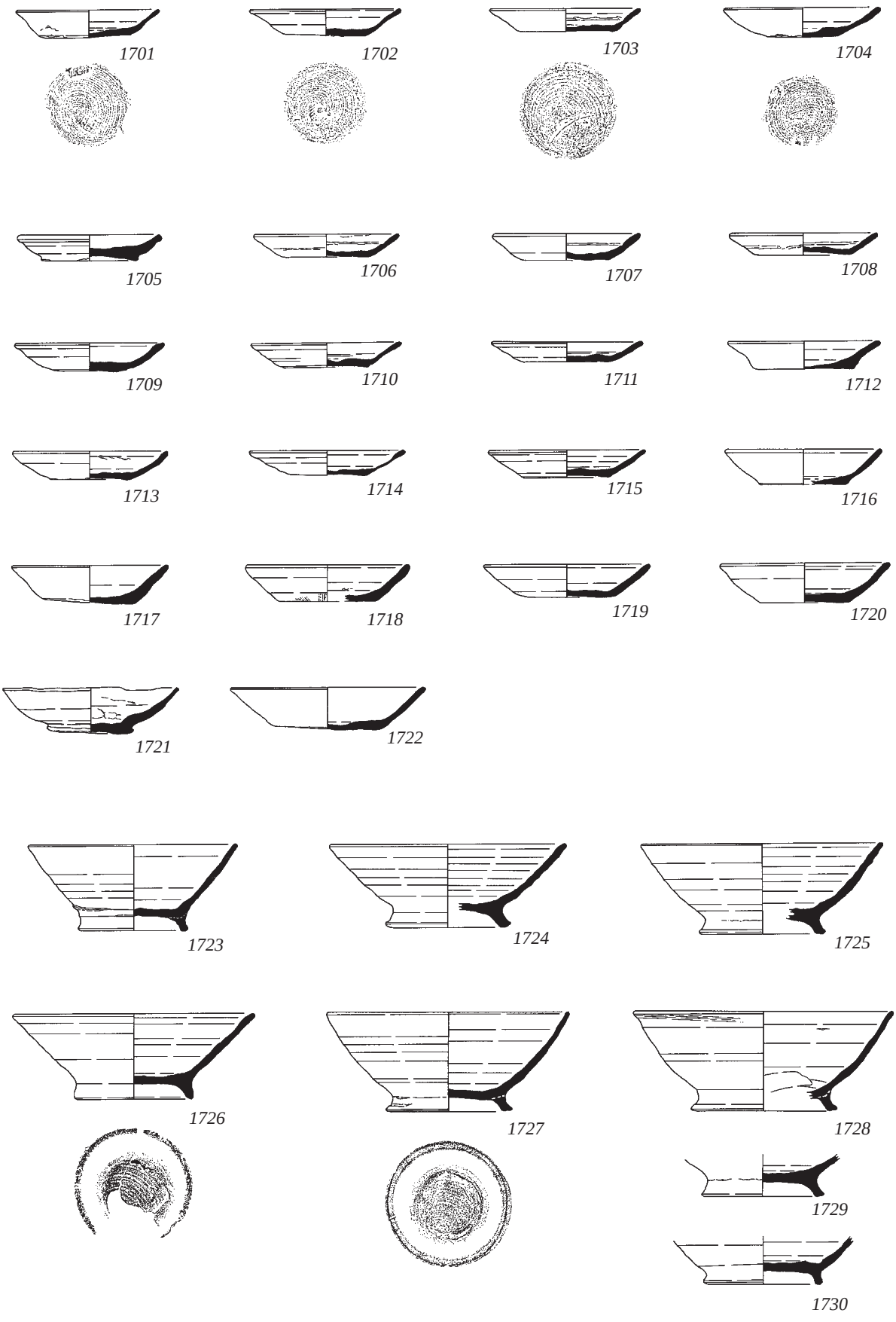

1613


1614



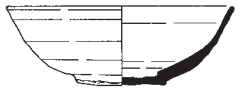
鴨谷 2 号窯

灰原出土須恵器 1



鴨谷 2 号窯

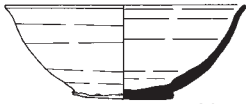
灰原出土須恵器 2

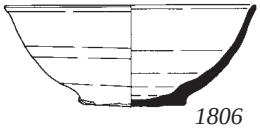

1801

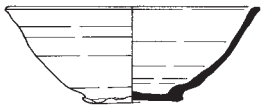
1802

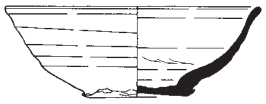
1803

1804

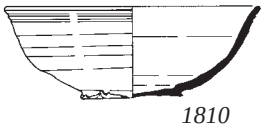

1805


1806


1807

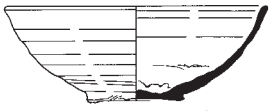

1808

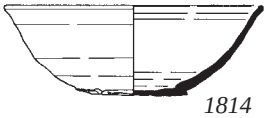
1809

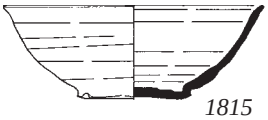

1810

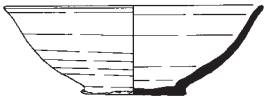
1811

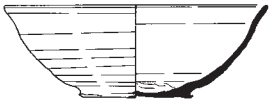
1812

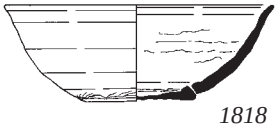

1813

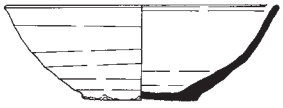

1814

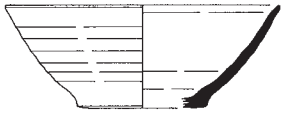

1815


1816


1817


1818


1819

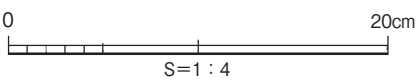

1820

1821

1822

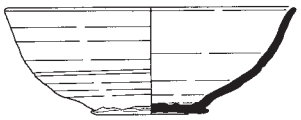
1823

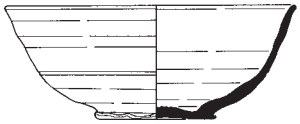
1824

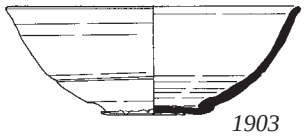


鴨谷 2 号窯

灰原出土須恵器 3

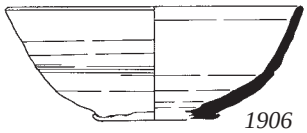

1901

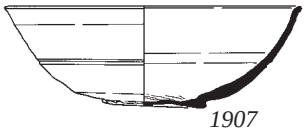

1902

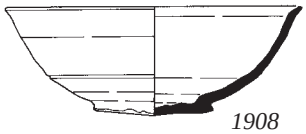

1903

1904

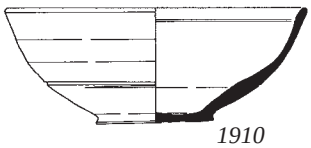
1905


1906


1907


1908

1909

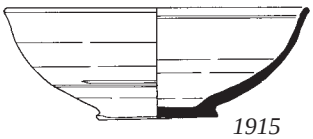

1910

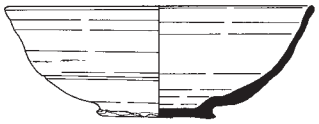
1911

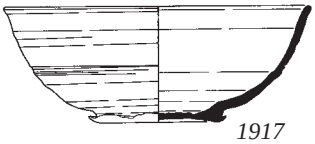
1912

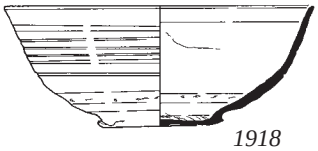
1913

1914

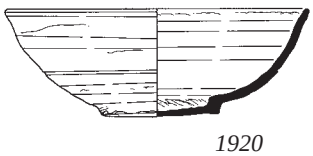

1915


1916

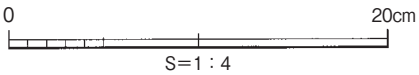

1917


1918

1919

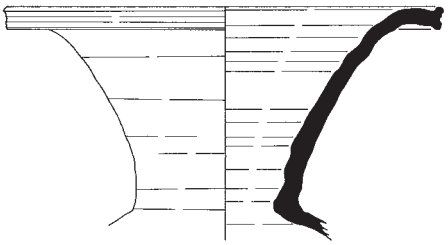

1920

1921

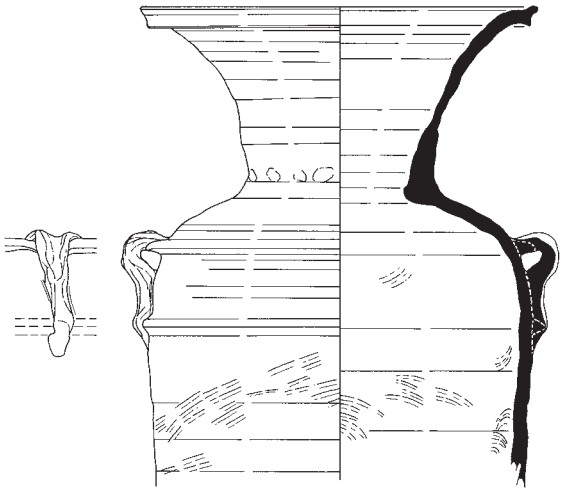


鴨谷 2 号窯

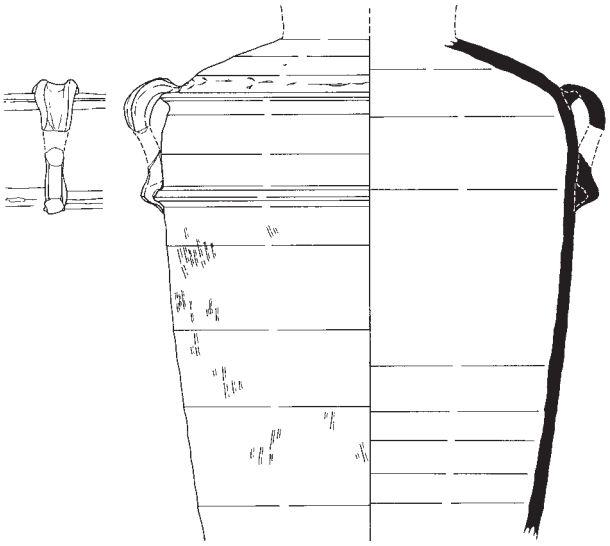
灰原出土須恵器 4



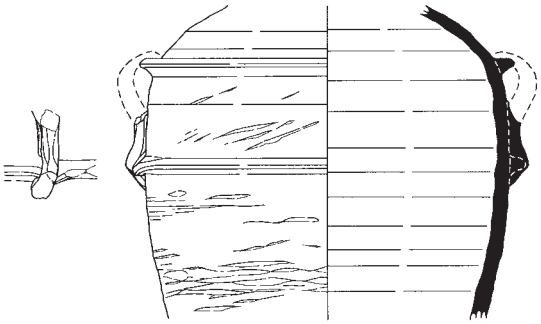
2001



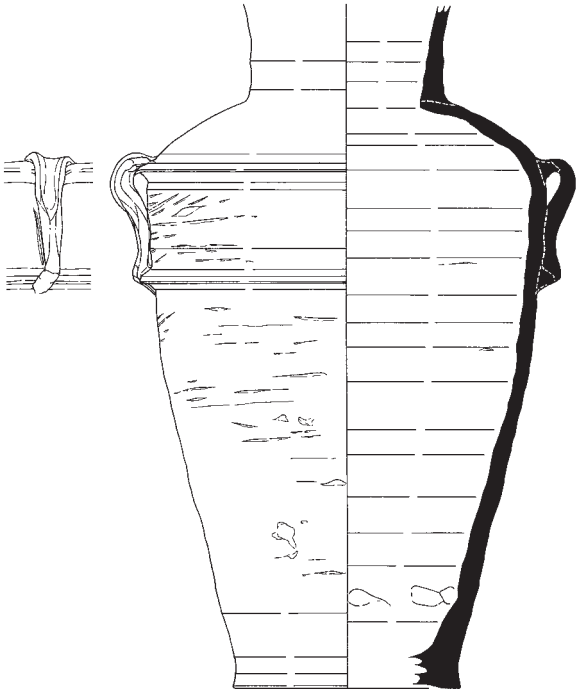
2002



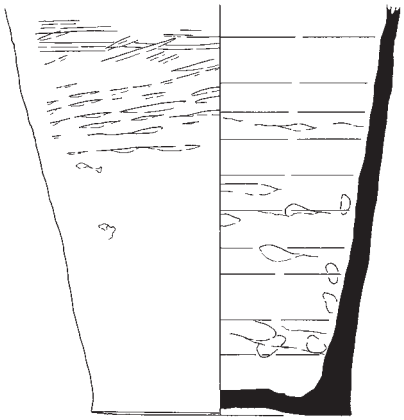
2003



2004



2005



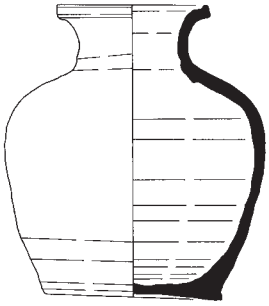
2006

0 20cm

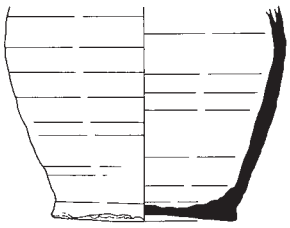
S=1：4

鴨谷 2 号窯

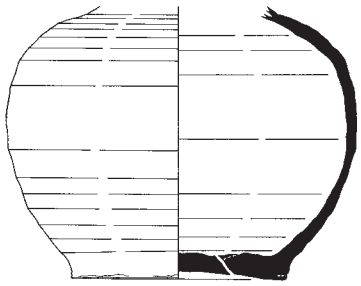
灰原出土須恵器 5



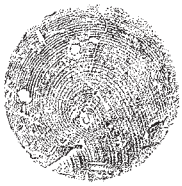
2101

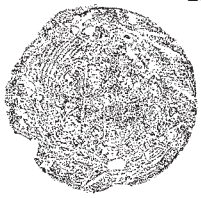


2102

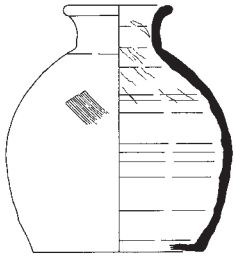


2103

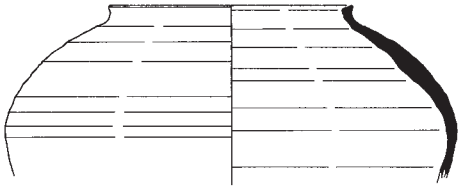




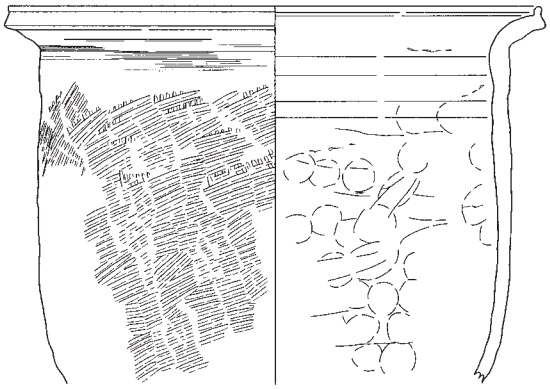
2104



2105

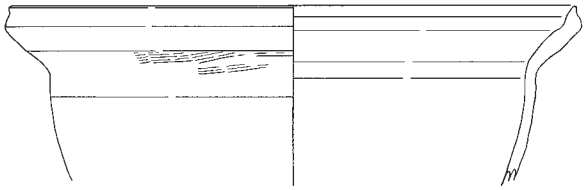


2106

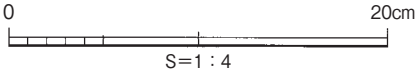


2107

2108

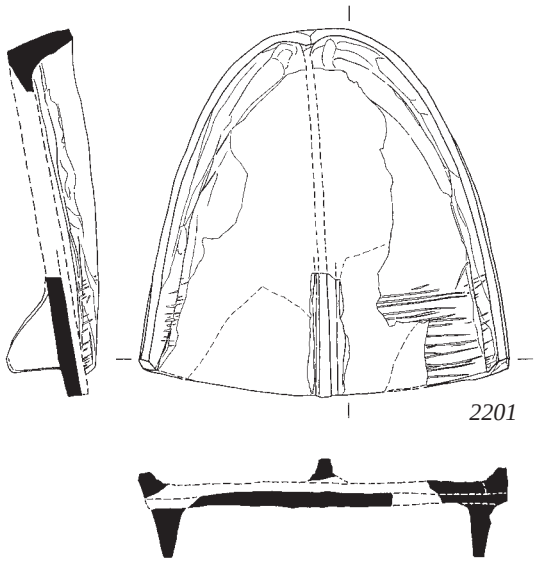


2109

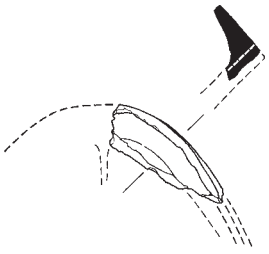


鴨谷 2 号窯

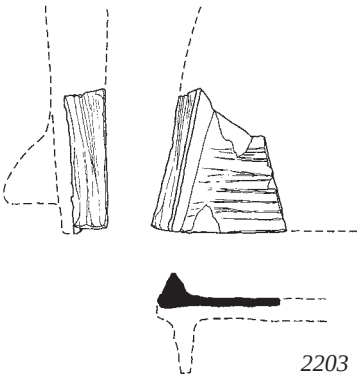
灰原出土須恵器 6



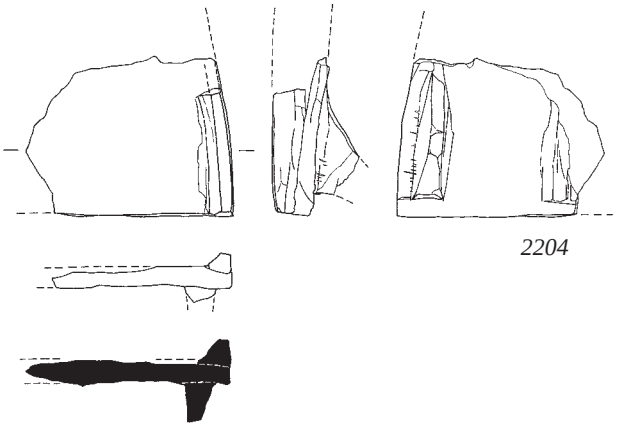
2201



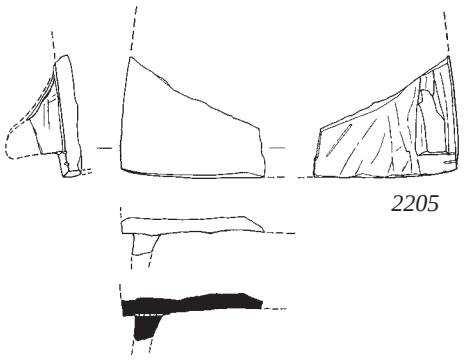
2202



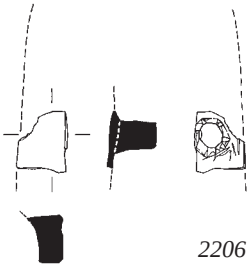
2203



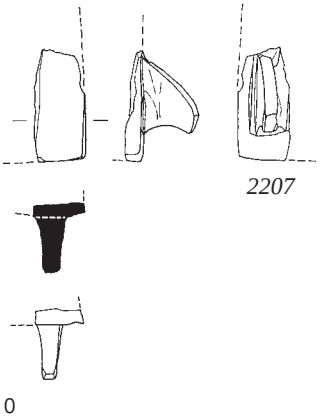
2204



2205



2206



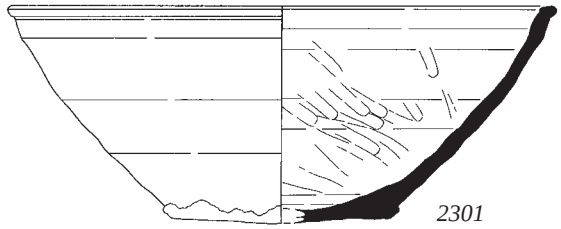
2207

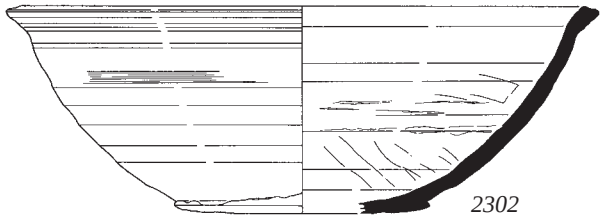
0 20cm

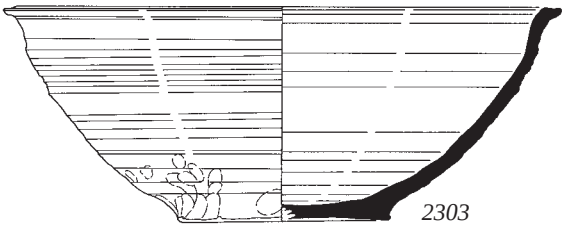
S=1：4

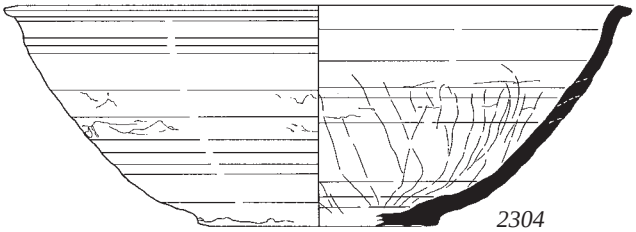
鴨谷 2 号窯

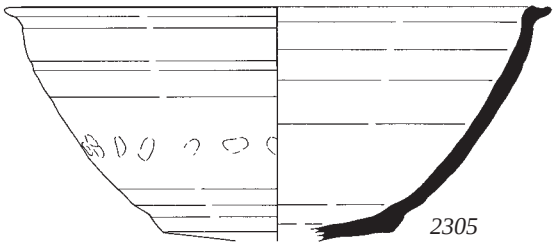
灰原出土須恵器 7

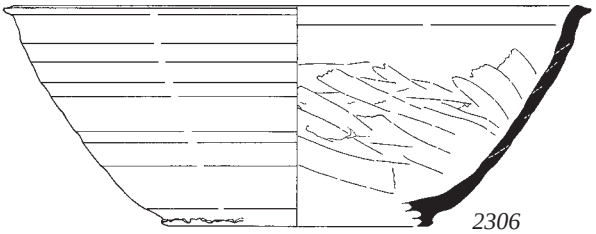

2301

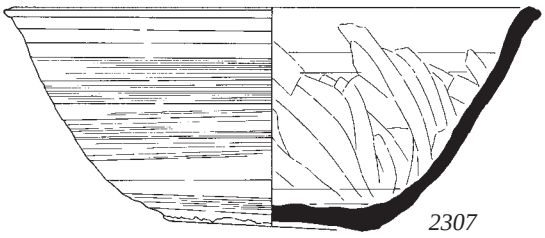

2302

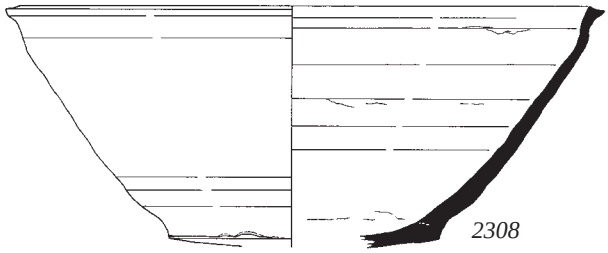

2303


2304


2305


2306


2307

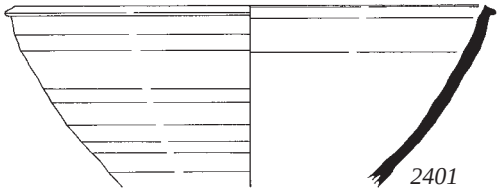

2308

0 20cm

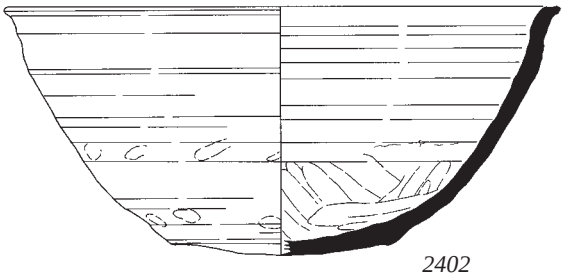
S=1：4

鴨谷 2 号窯

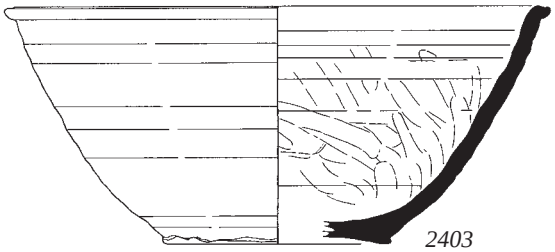
灰原出土須恵器 8



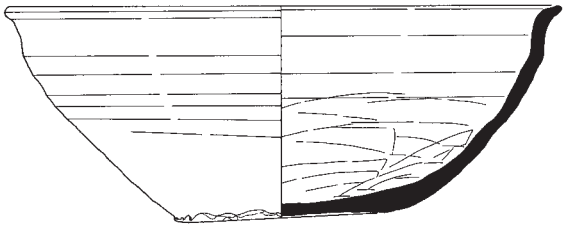
2401



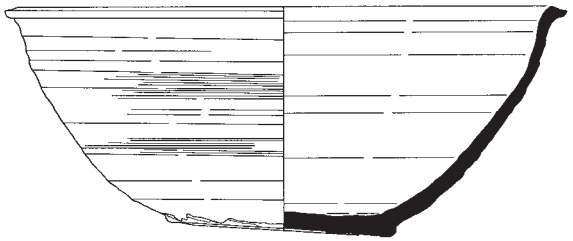
2402



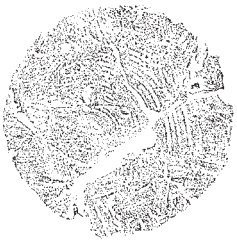
2403

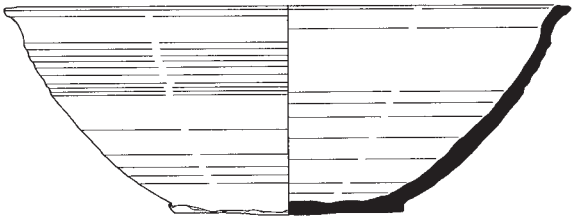


2404

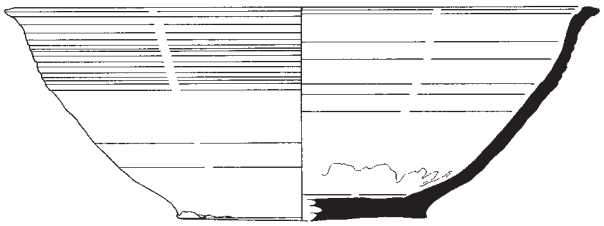


2405

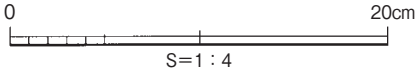




2406

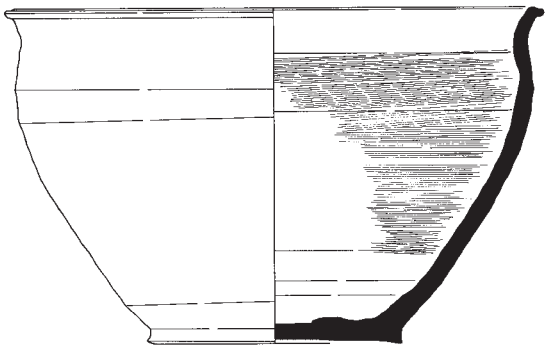


2407

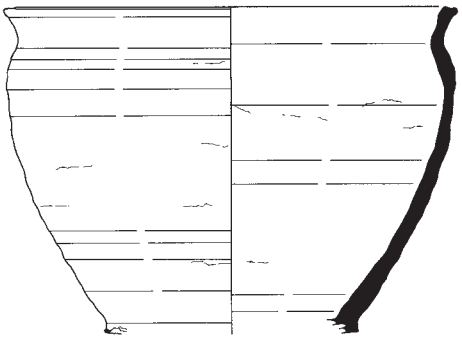


鴨谷 2 号窯

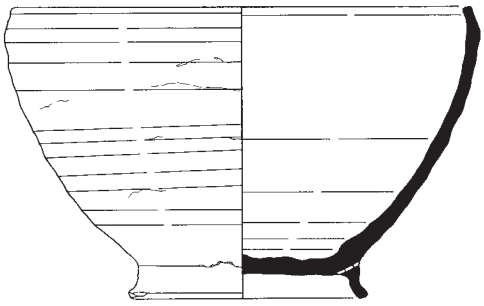
灰原出土須恵器 9



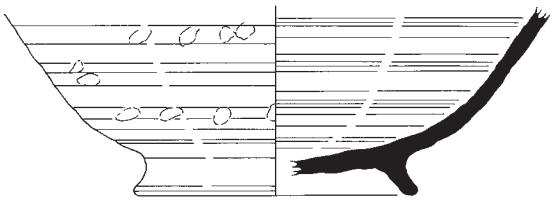
2501



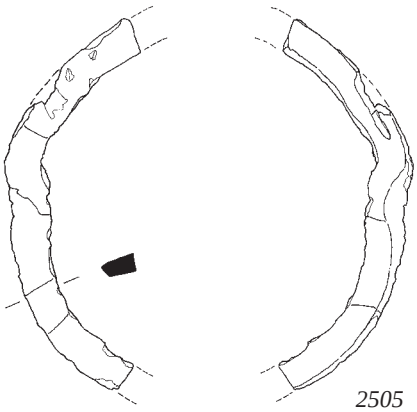
2502



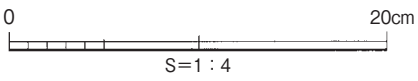
2503



2504

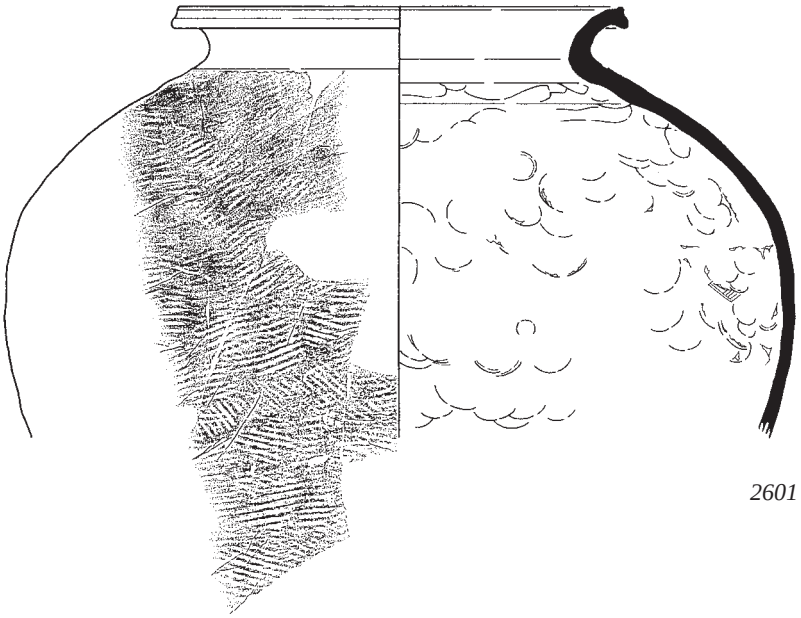


2505

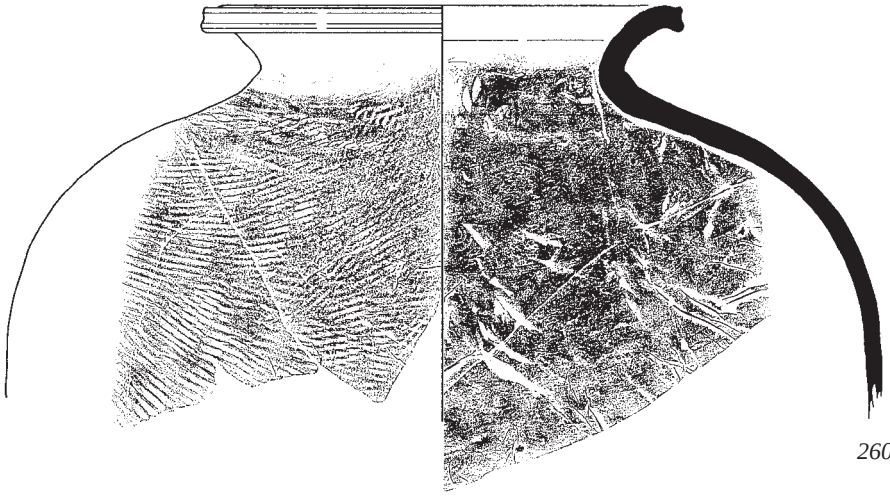


鴨谷 2 号窯

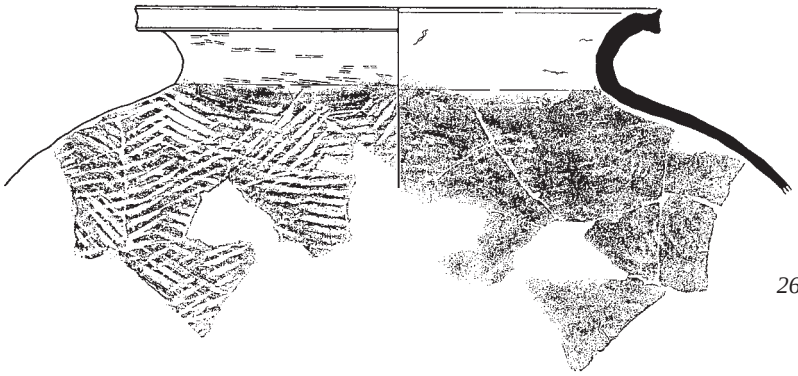
灰原出土須恵器 10



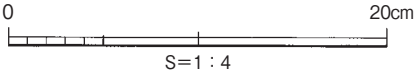
2601



2602

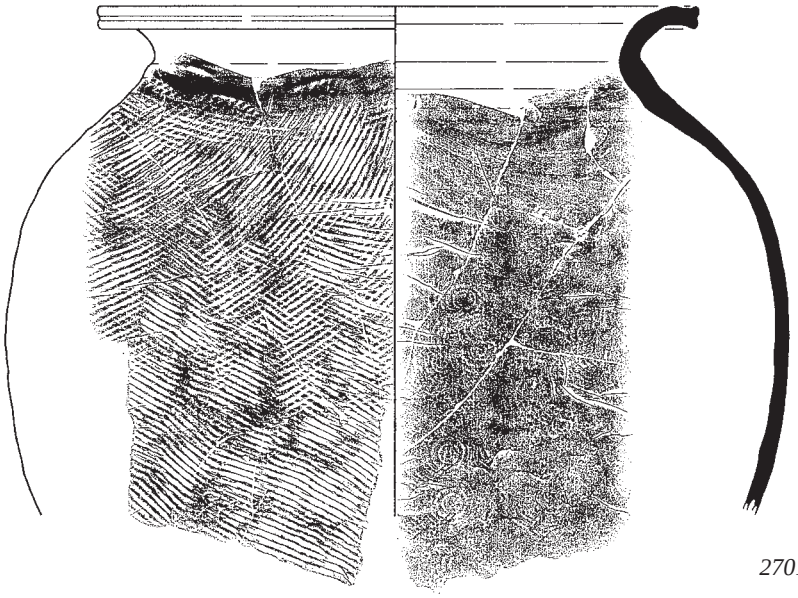


2603

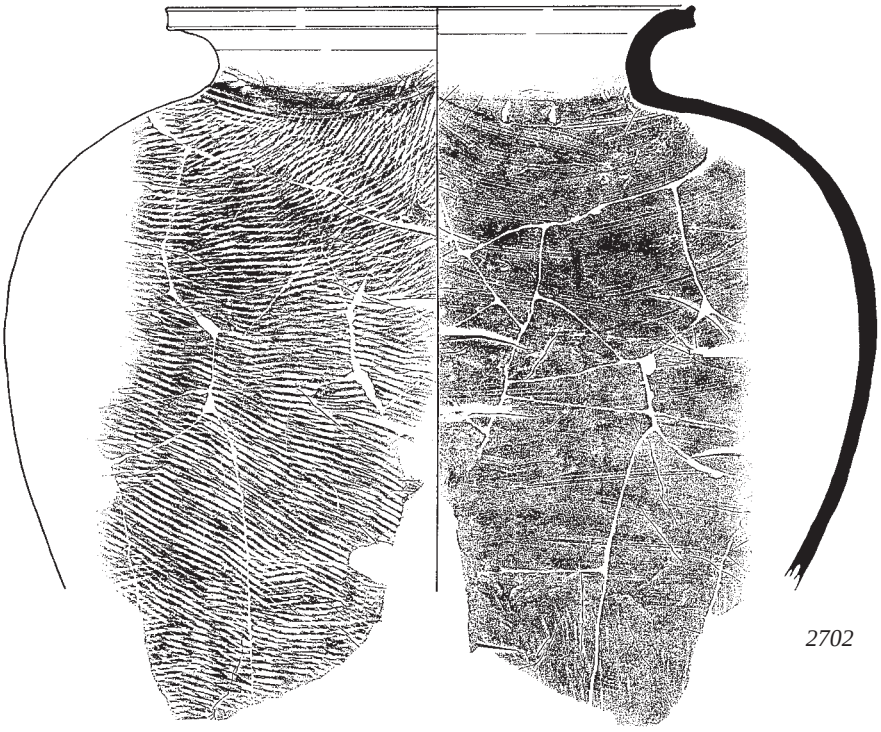


鴨谷 2 号窯

灰原出土須恵器 11



2701



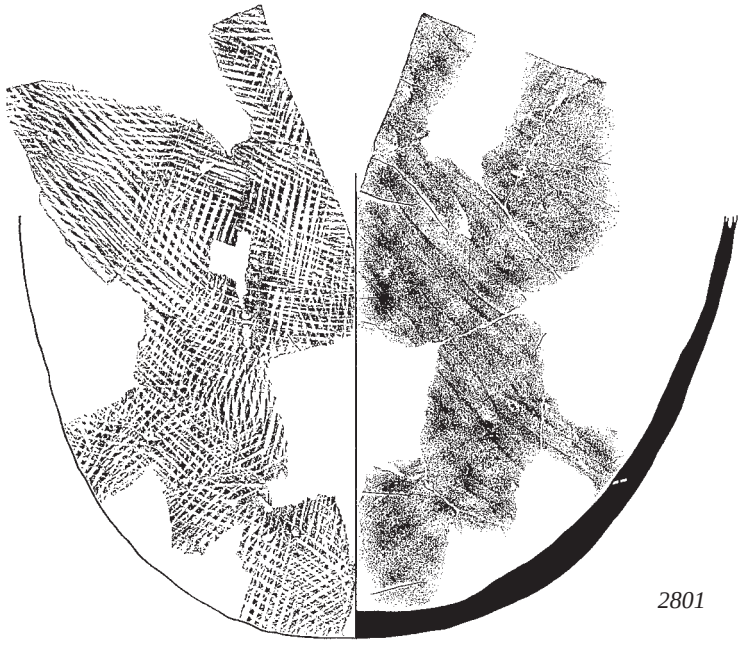
2702

0 20cm

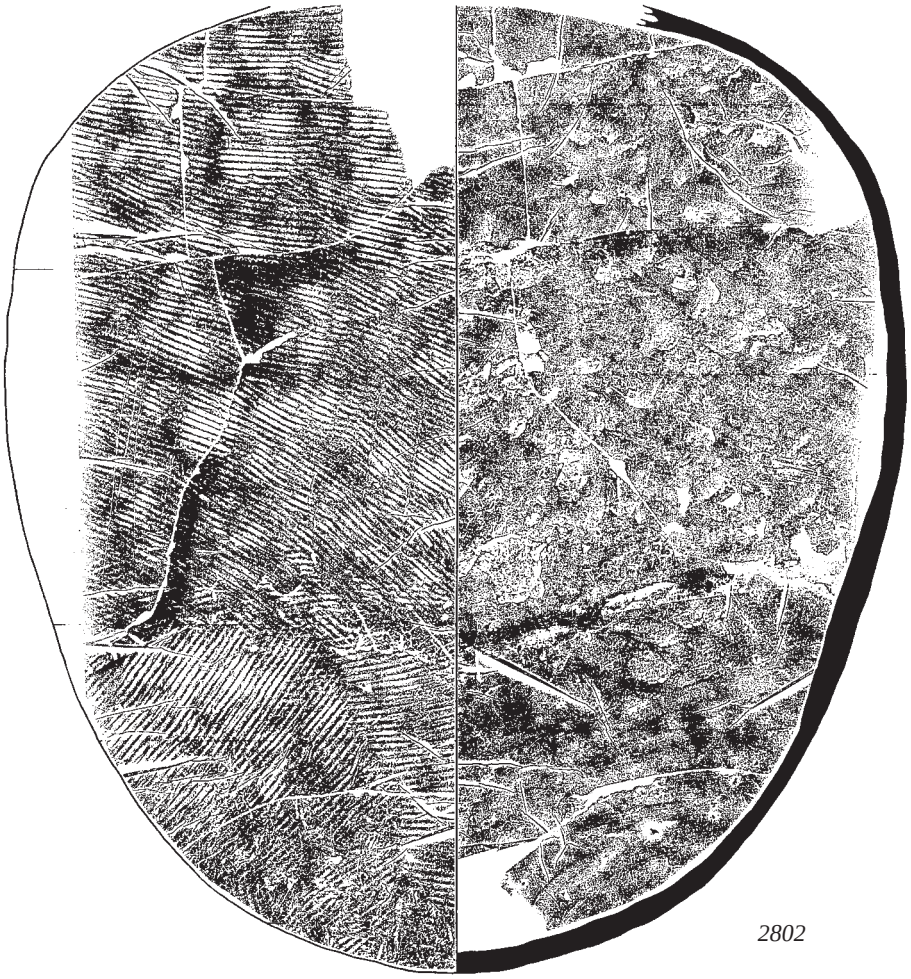
S=1：4

鴨谷 2 号窯

灰原出土須恵器 12



2801



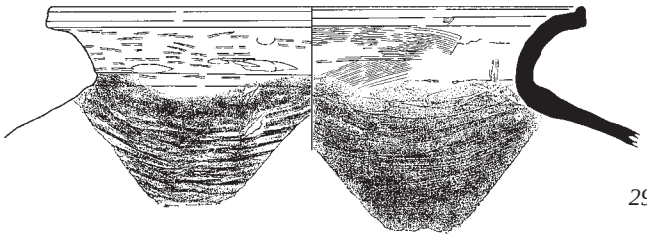
2802

0 20cm

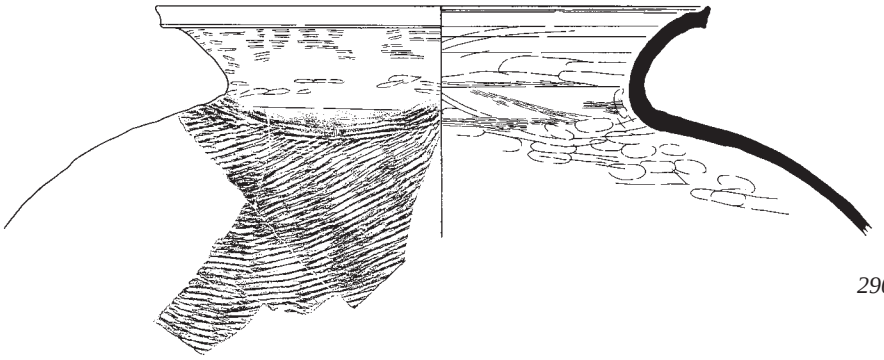
S=1：4

鴨谷 2 号窯

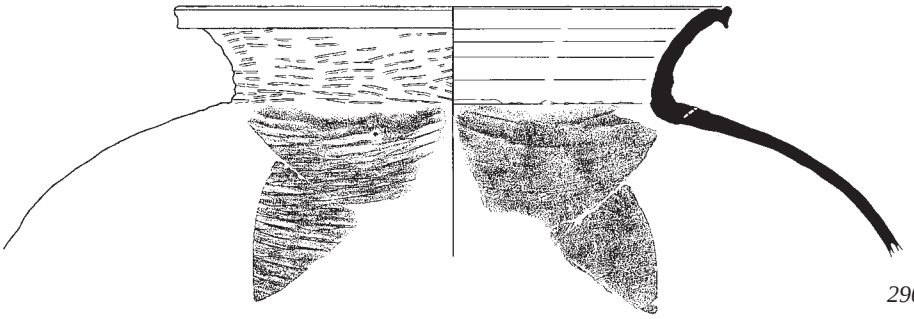
灰原出土須恵器 13



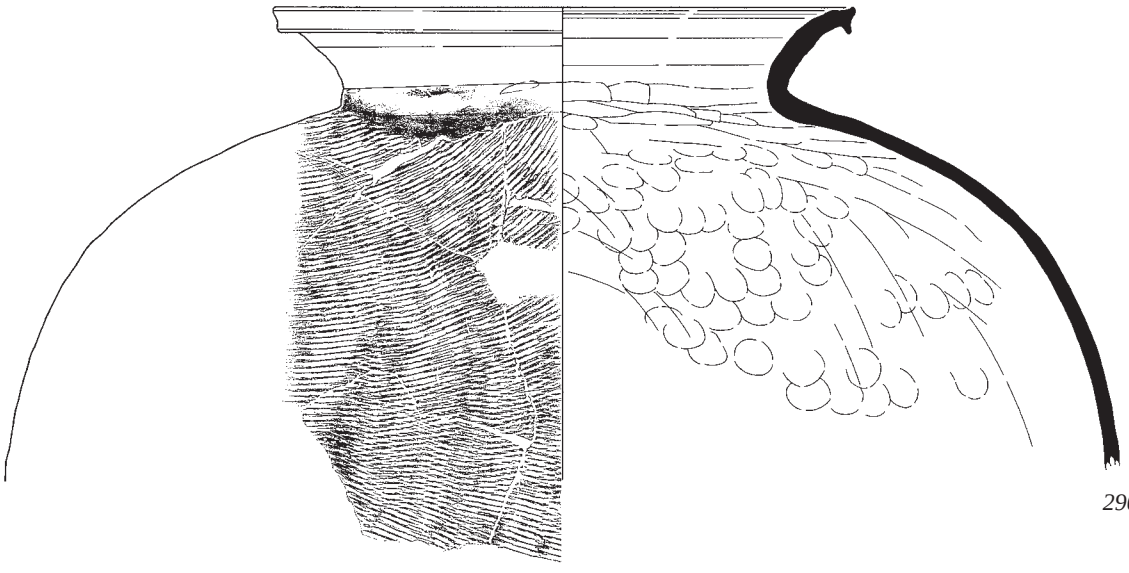
2901



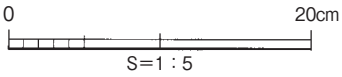
2902



2903

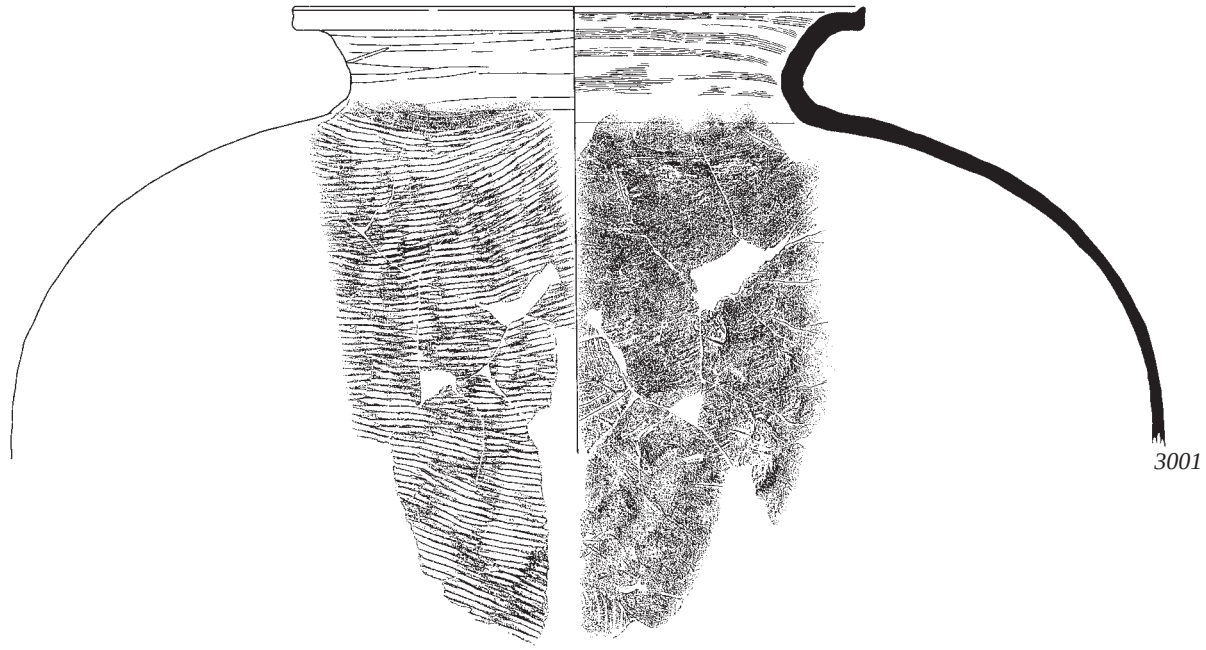


2904

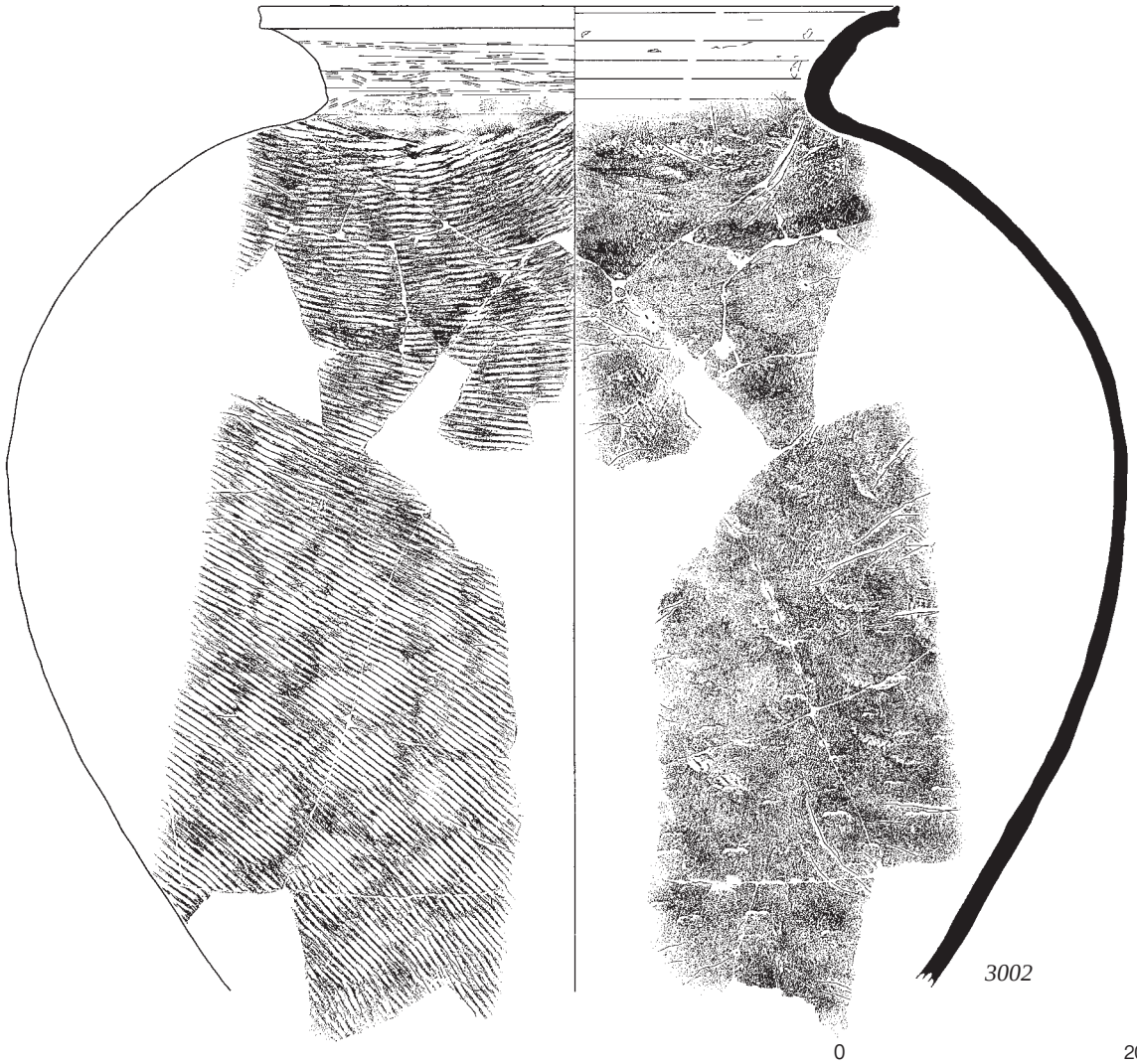


鴨谷 2 号窯

灰原出土須恵器 14



3001



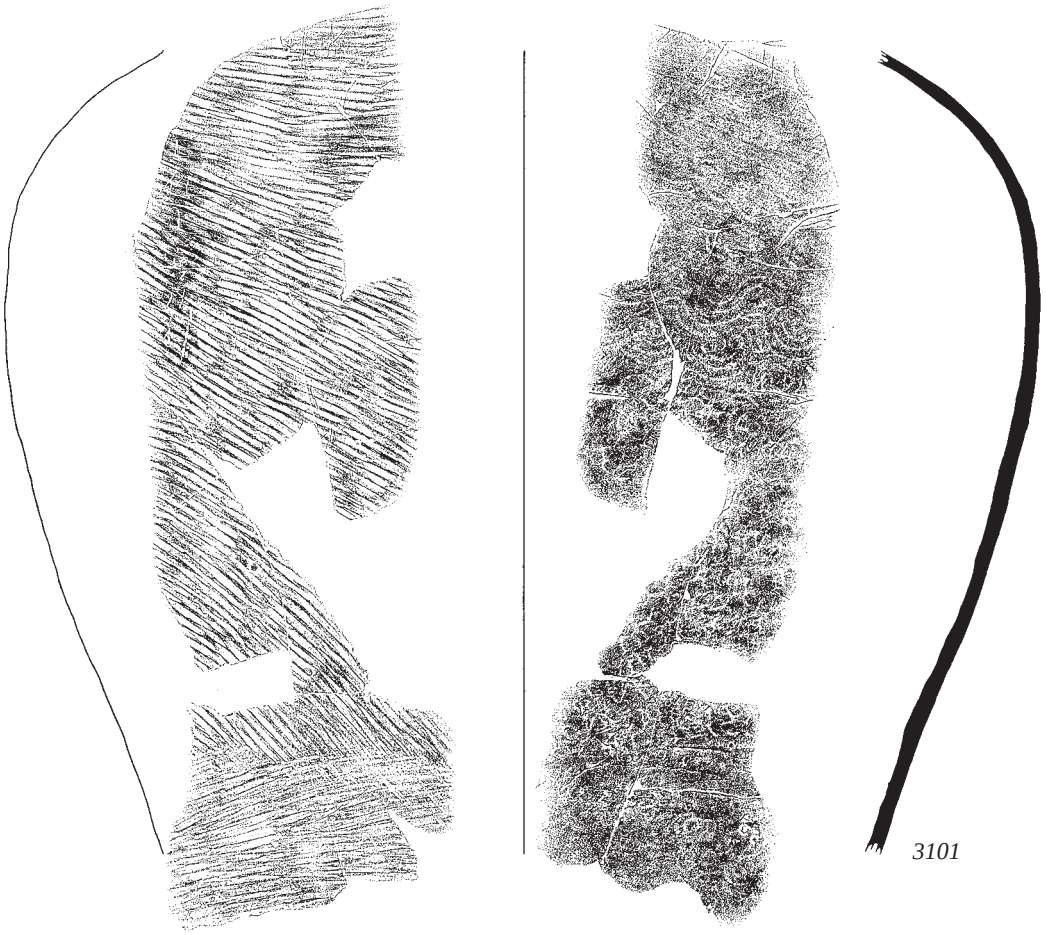
3002

0 20cm

S=1：5

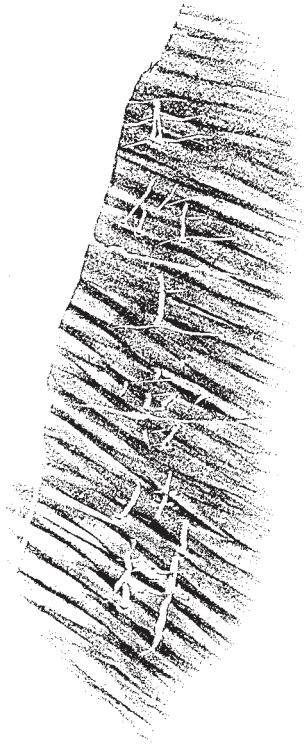
鴨谷 2 号窯

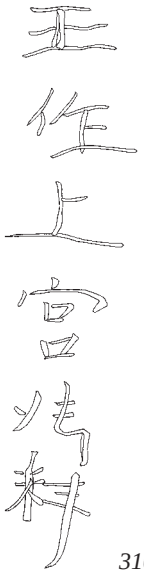
灰原出土須恵器 15



3101

0　20cm
S=1：5





3101 の刻書部分

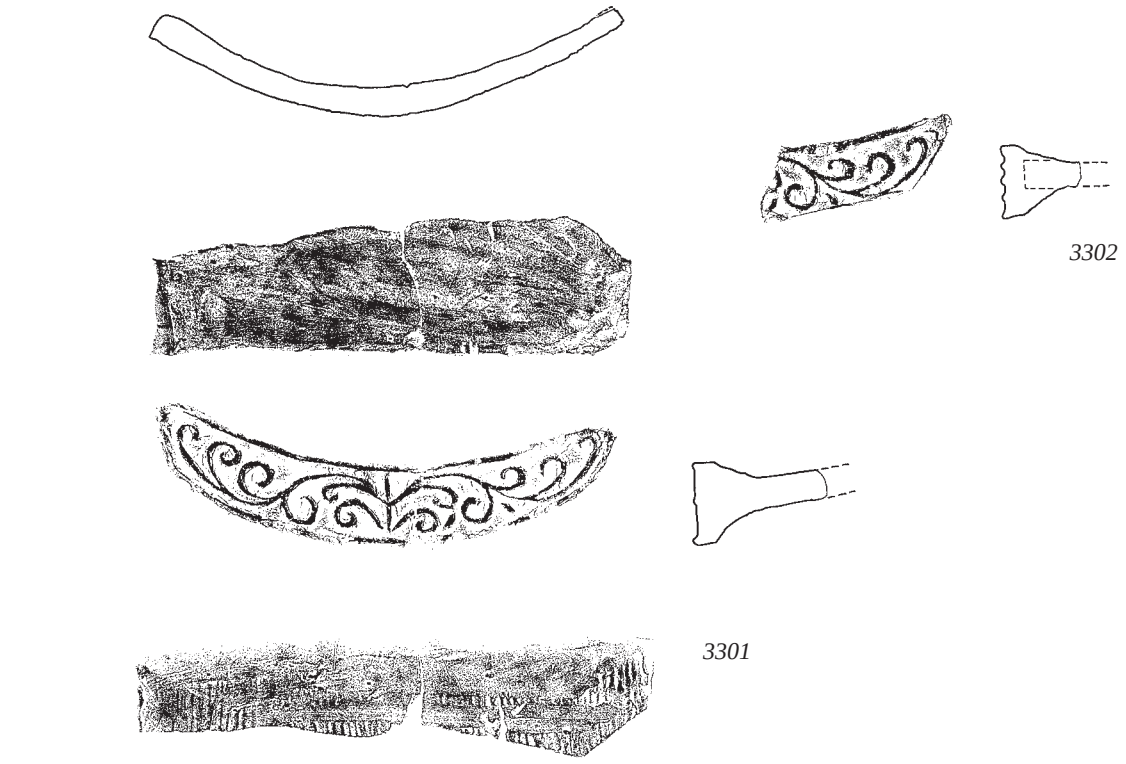
0　10cm
S=1：2

鴨谷 2 号窯

灰原出土須恵器 16

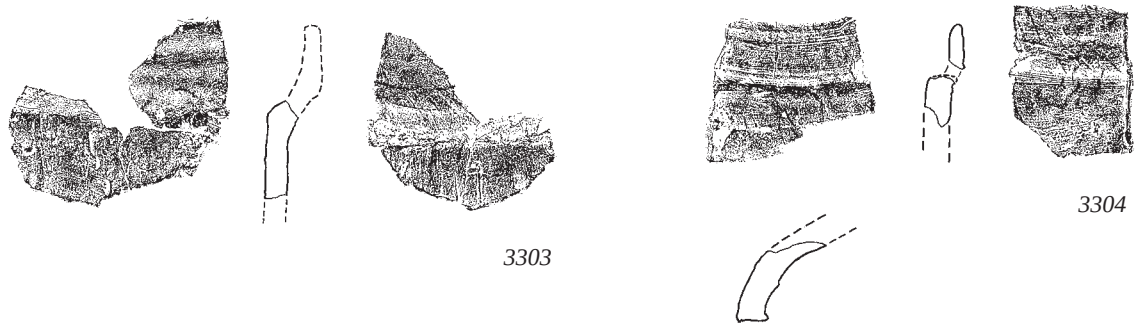
鴨谷 2 号窯

窯体・灰原出土軒瓦



3302

3301



3303

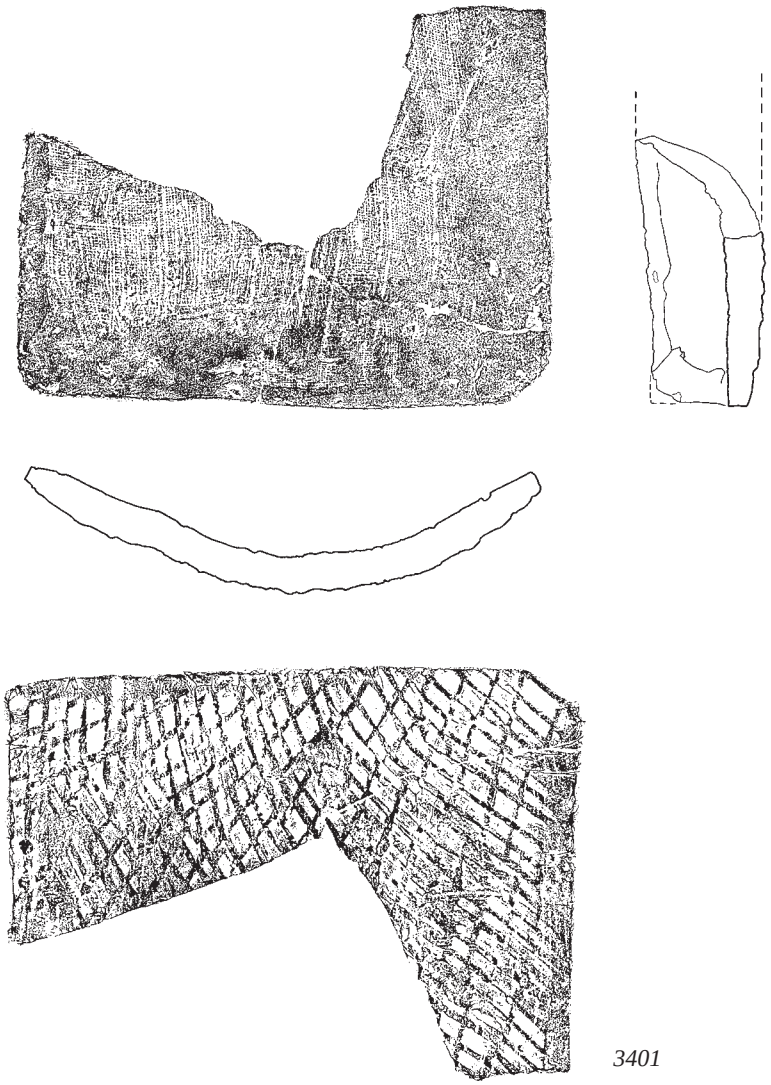
3304

0 20cm

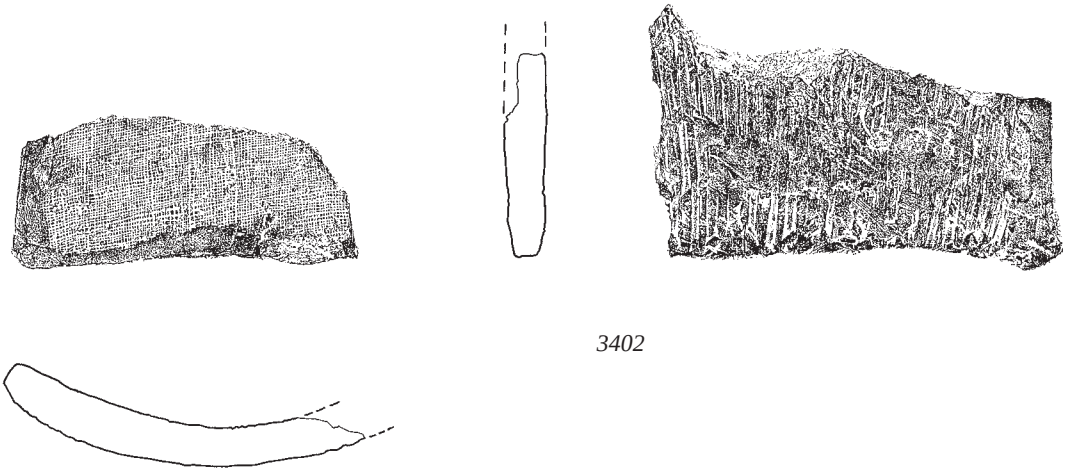
S=1：4

鴨谷 2 号窯

灰原出土平瓦 1



3401



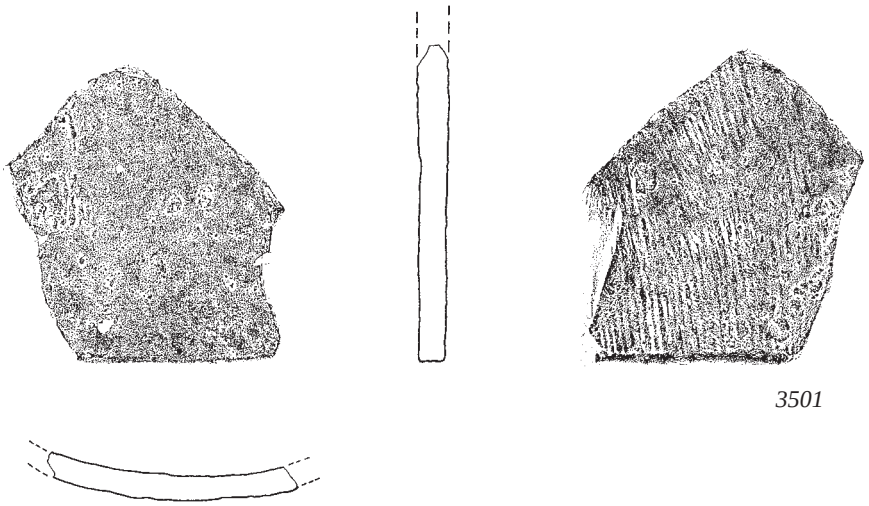
3402

0 20cm

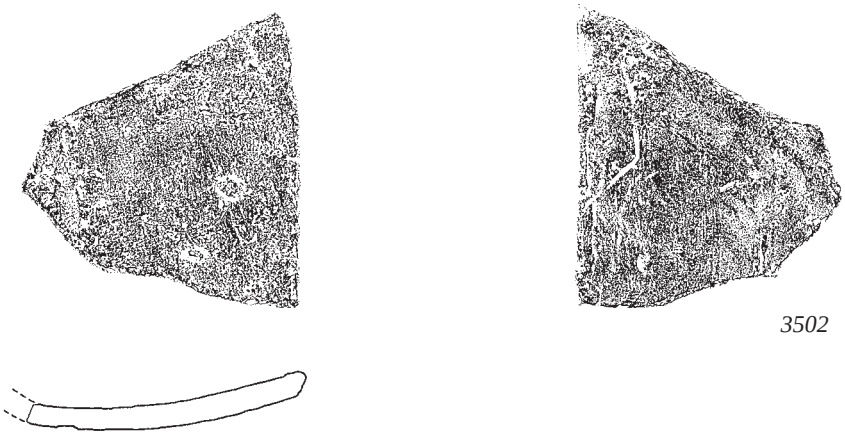
S=1：4

鴨谷 2 号窯

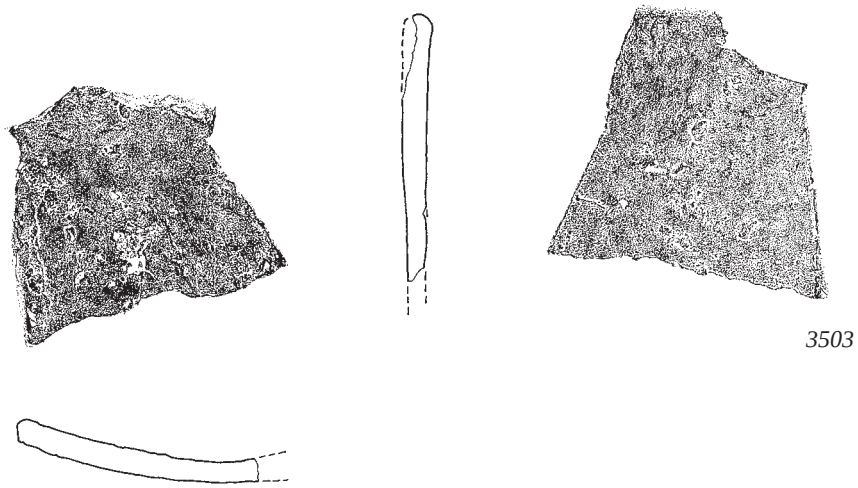
灰原出土平瓦 2



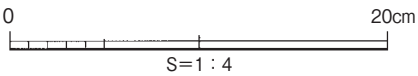
3501



3502

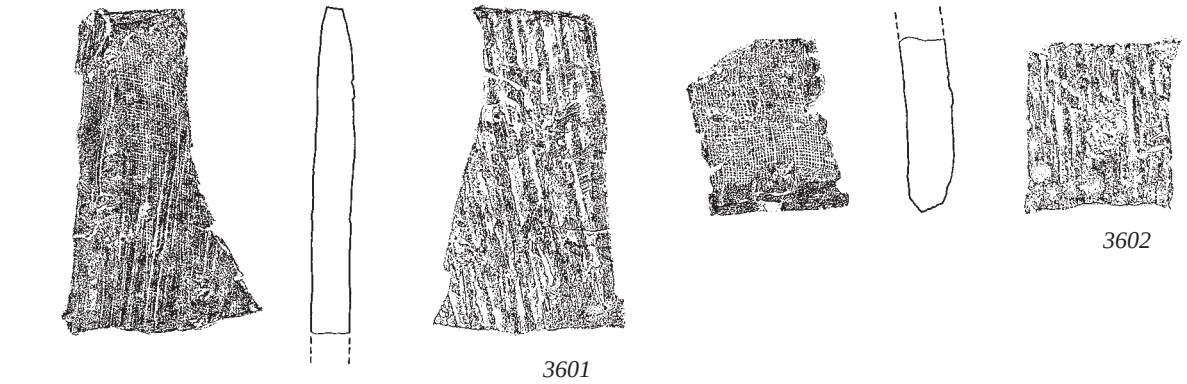


3503

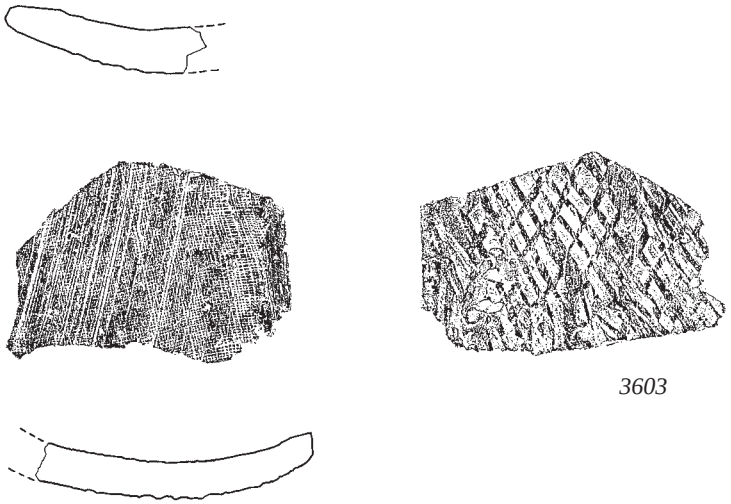


鴨谷２号窯

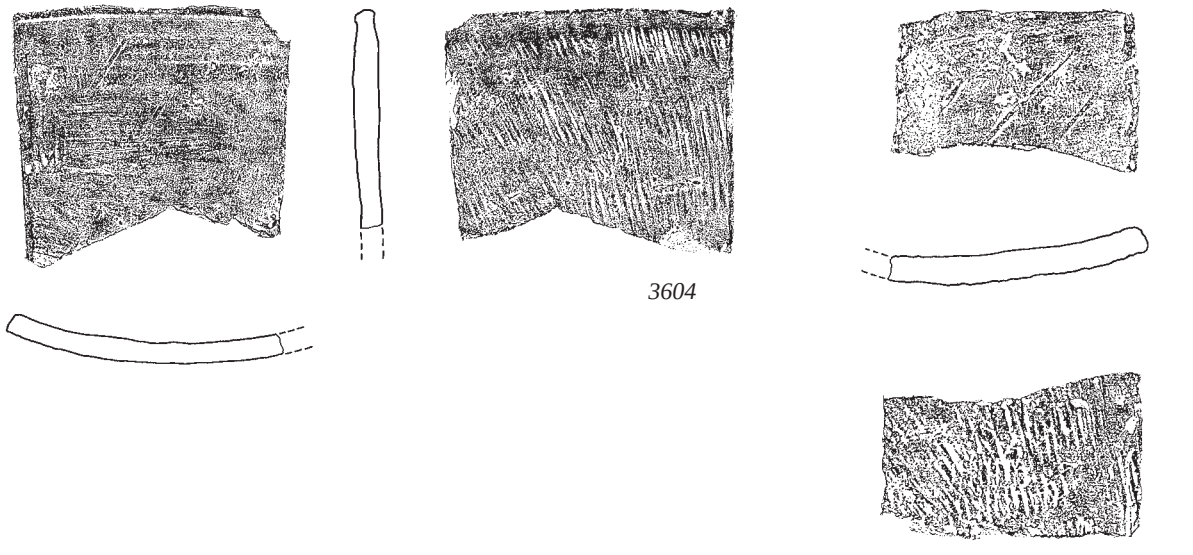
灰原出土平瓦 3



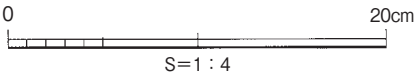
3601　3602



3603

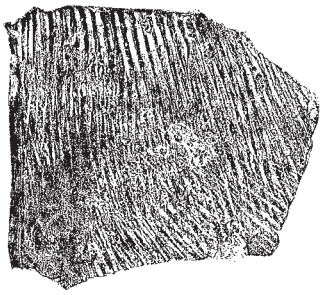


3604　3605

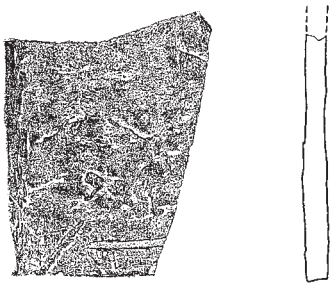


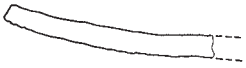
鴨谷２号窯

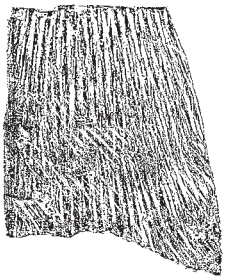
灰原出土平瓦 4



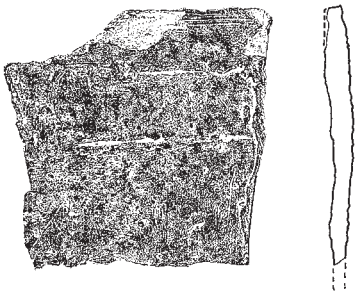
3701



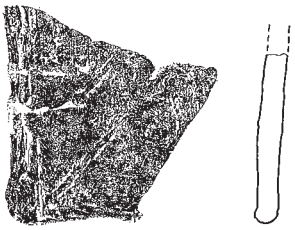


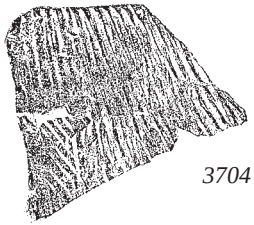


3702

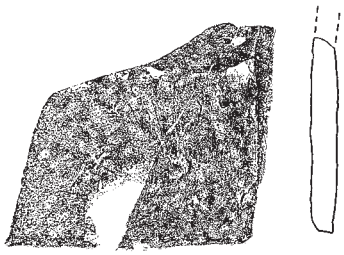


3703





3704



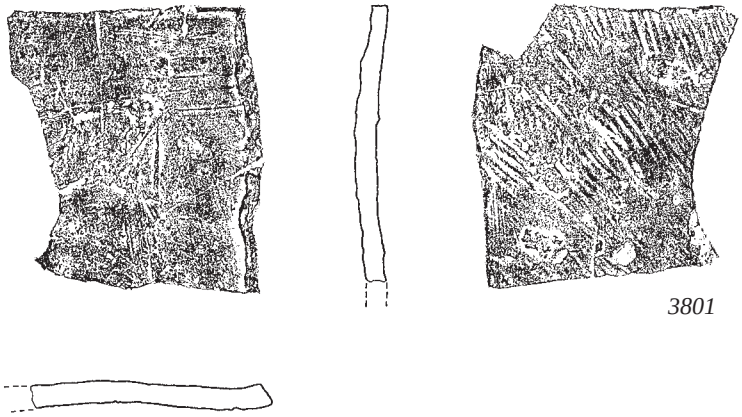
3705

0 20cm

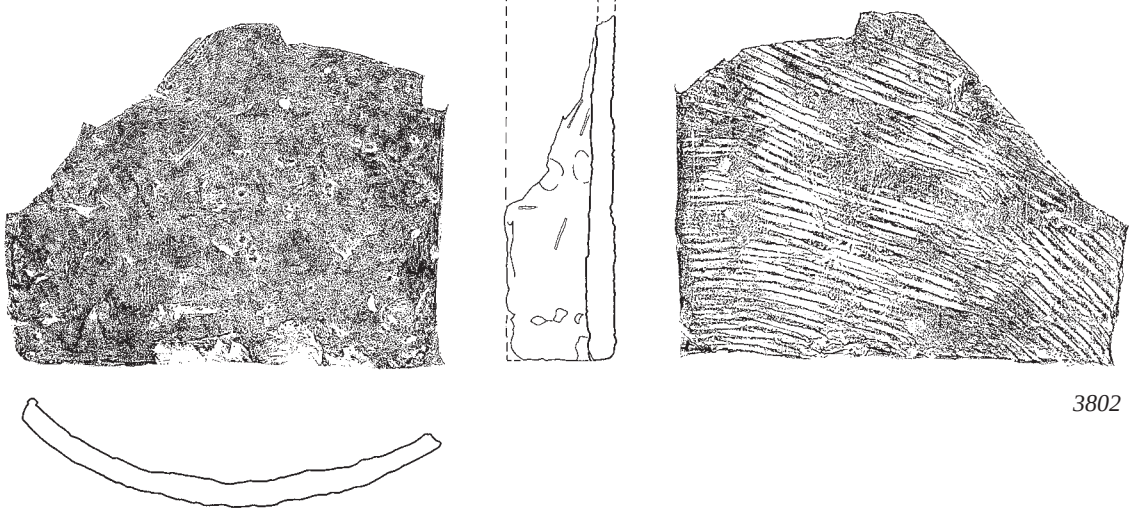
S=1：4

鴨谷 2 号窯

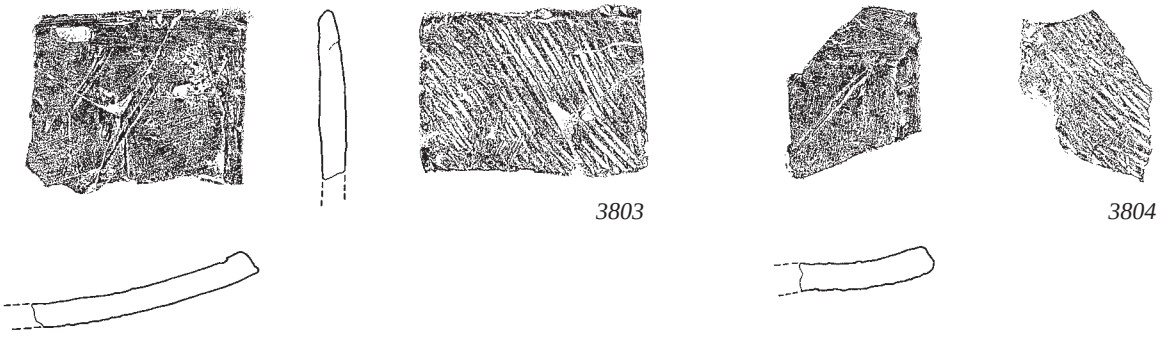
灰原出土平瓦 5



3801



3802



3803

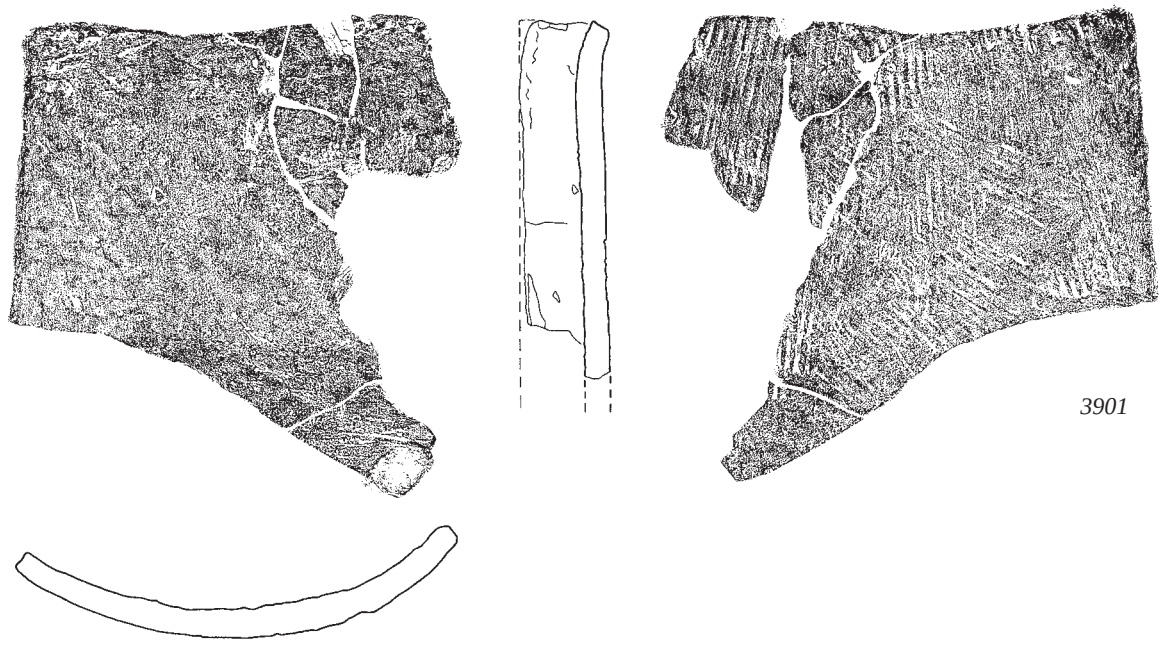
3804

0 20cm

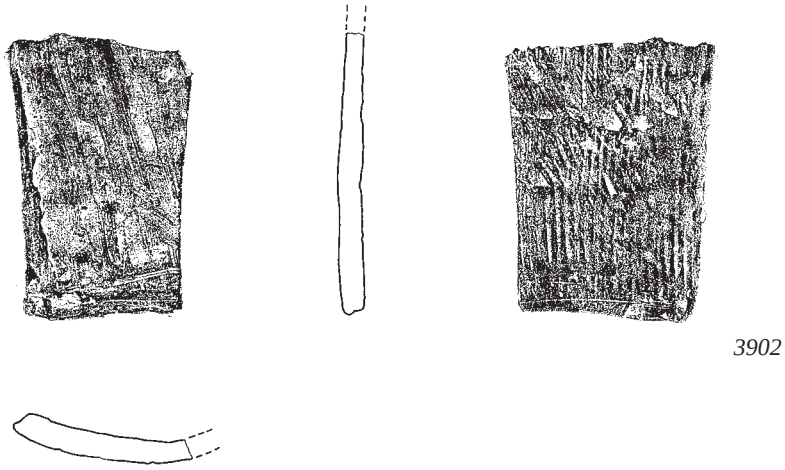
S=1：4

鴨谷 2 号窯

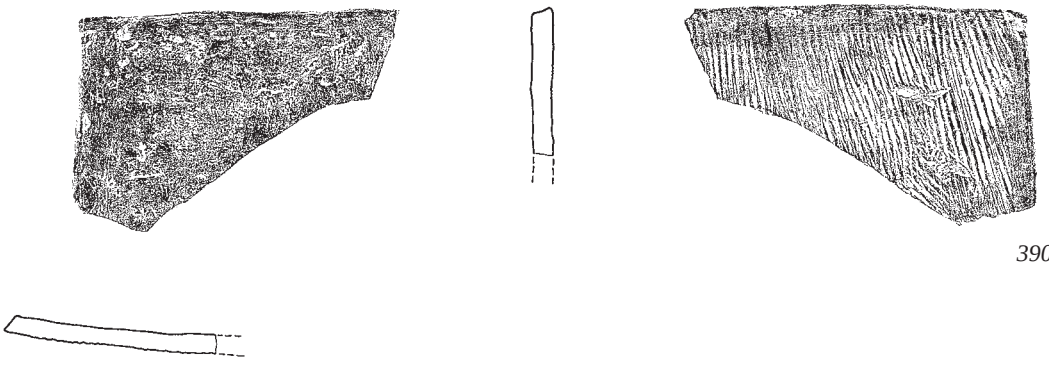
灰原出土平瓦 6



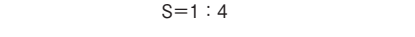
3901



3902



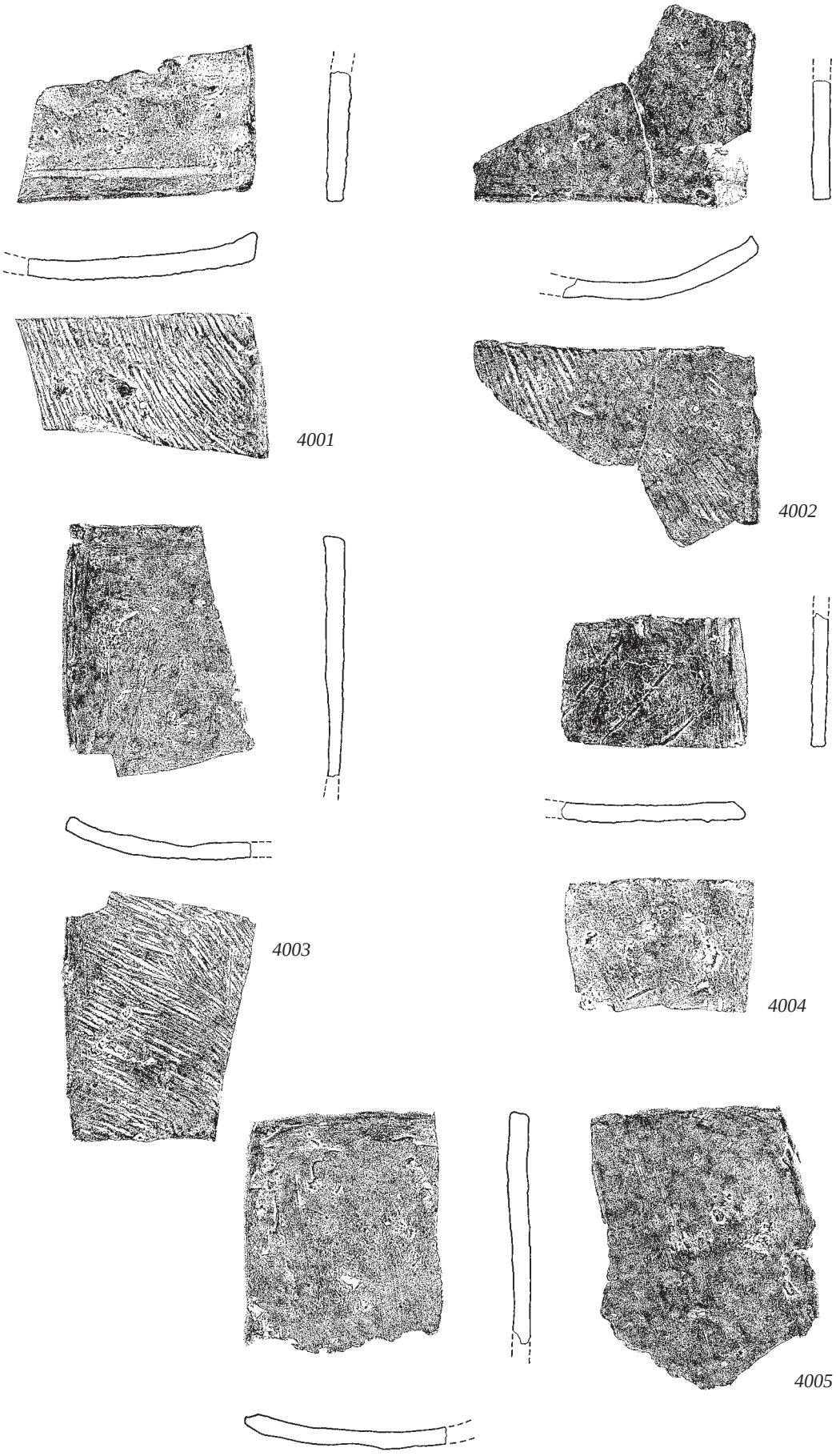
3903



S=1：4

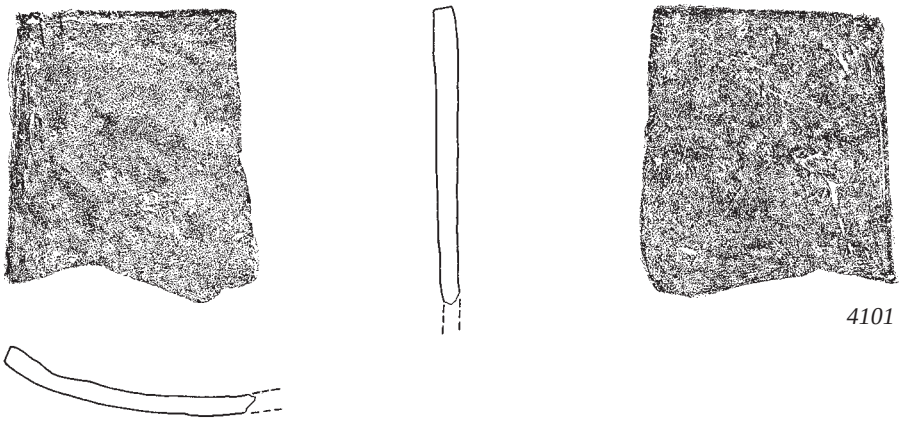
鴨谷 2 号窯

灰原出土平瓦 7

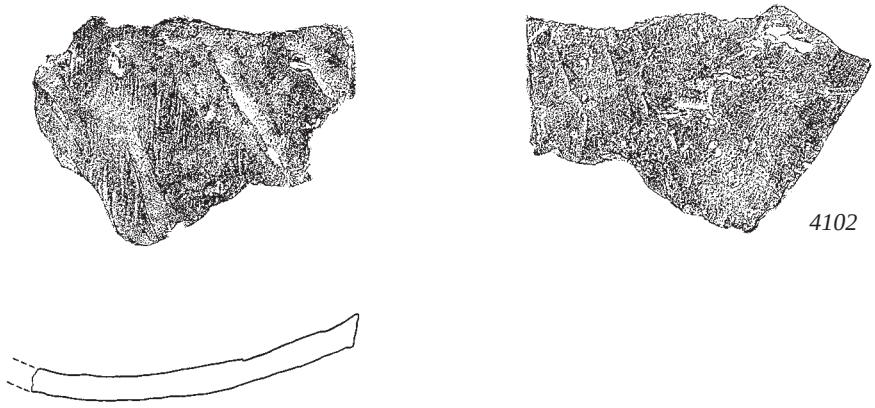


鴨谷 2 号窯

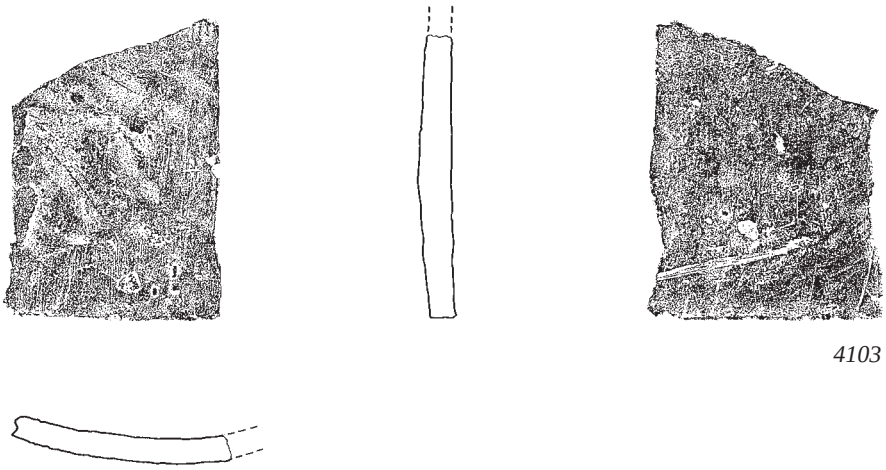
灰原出土平瓦 8



4101



4102



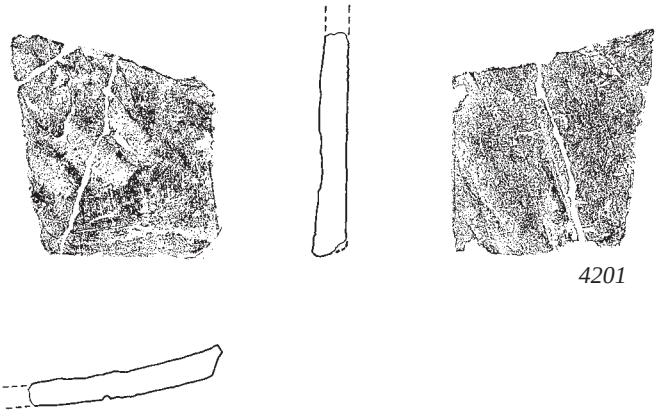
4103

0 20cm

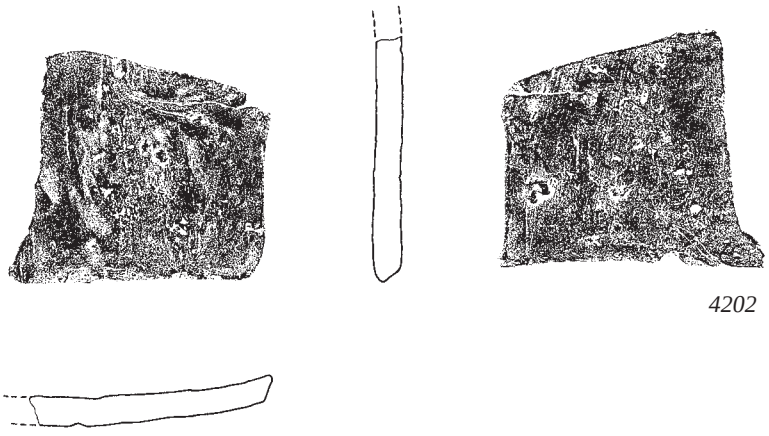
S=1：4

鴨谷 2 号窯

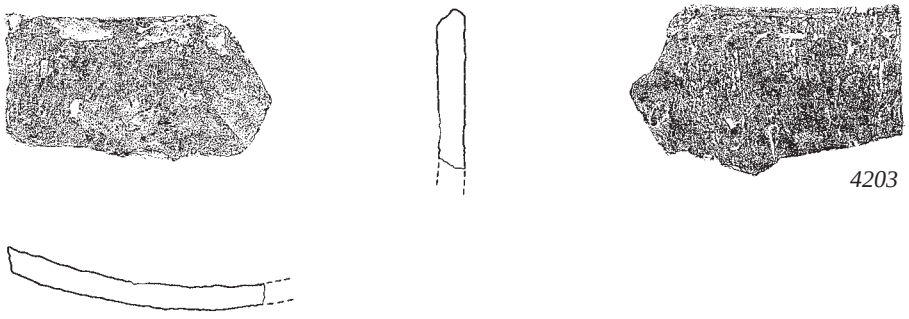
灰原出土平瓦 9



4201



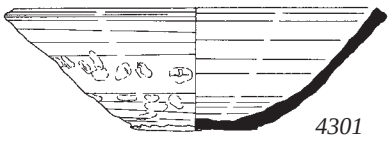
4202

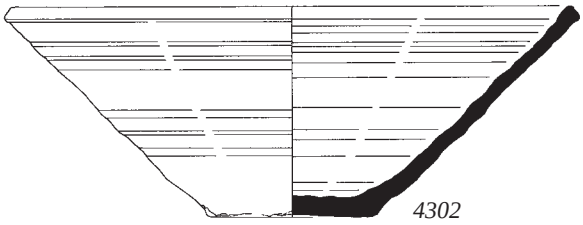


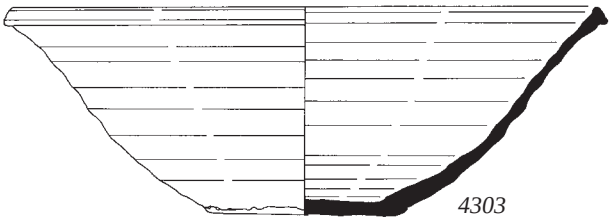
4203

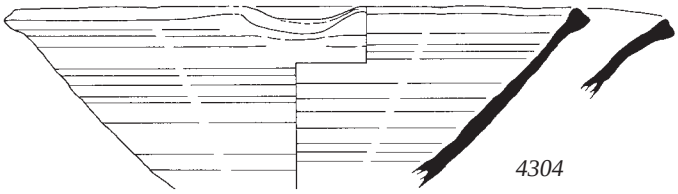
鴨谷 2 号窯

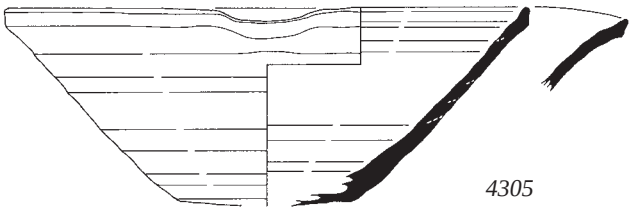
灰原 3 ・ 4 区出土鉢（混入）

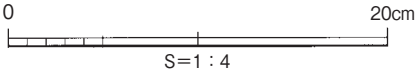

4301


4302


4303

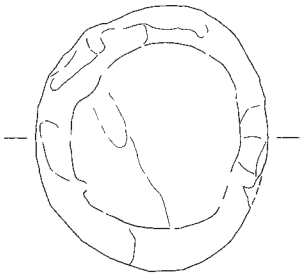

4304


4305

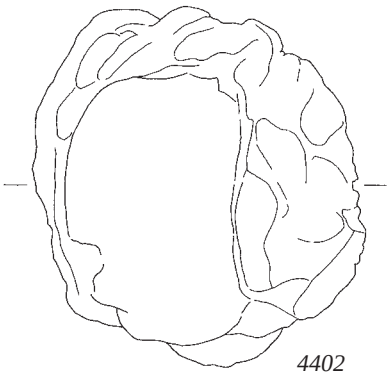


鴨谷 2 号窯

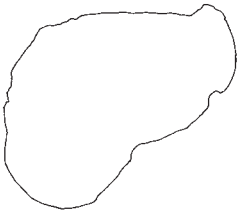
焼台 1

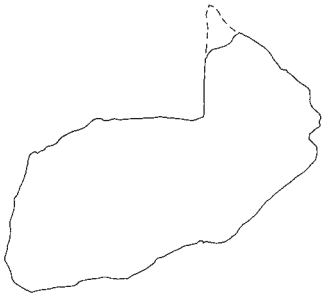


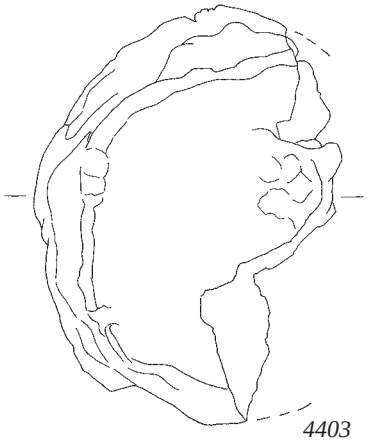
4401



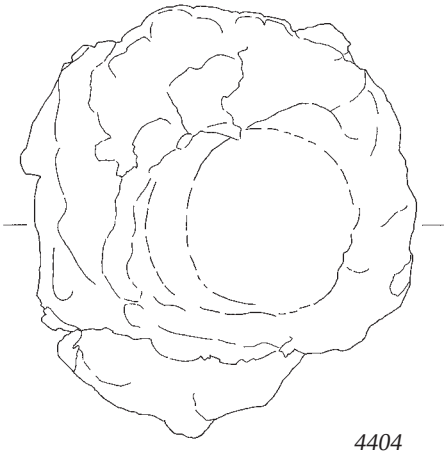
4402



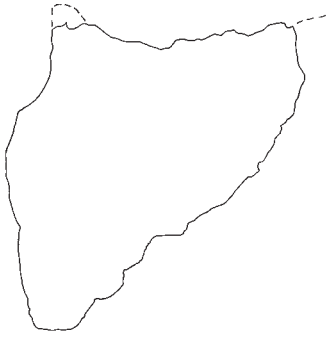


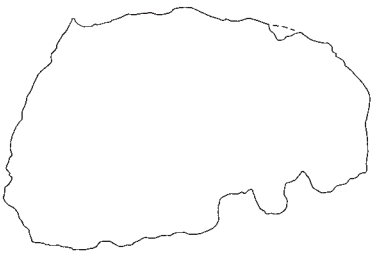


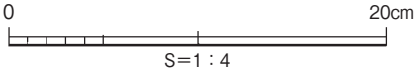
4403



4404

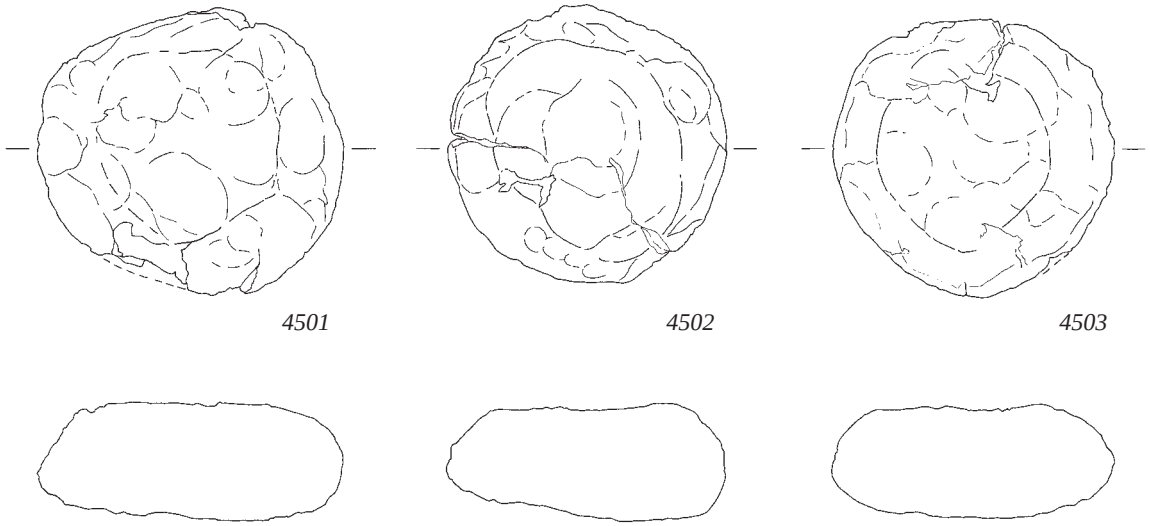


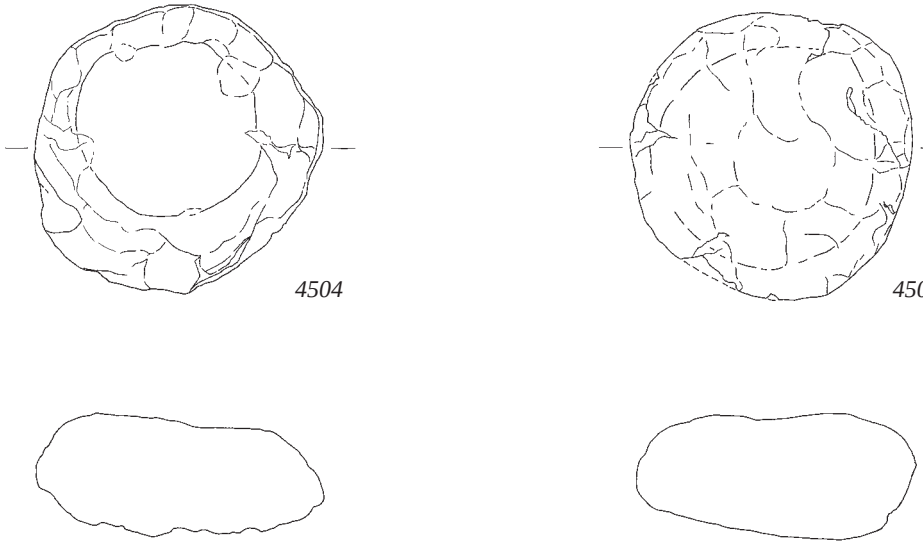


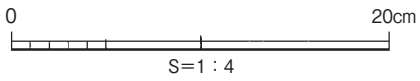


鴨谷 2 号窯

焼台 2

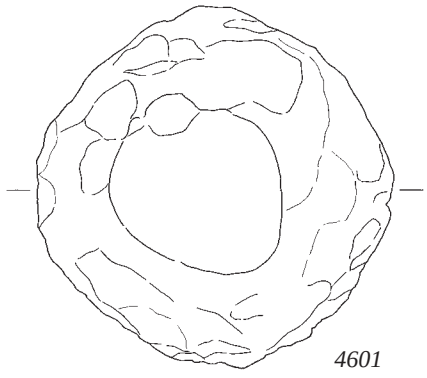




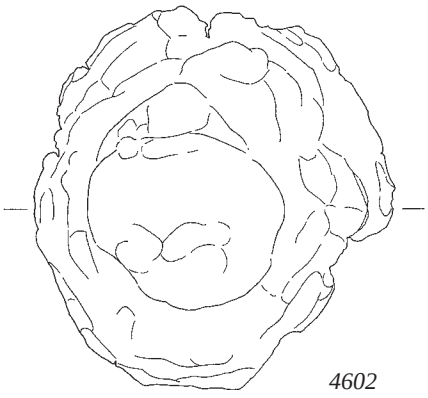


鴨谷 2 号窯

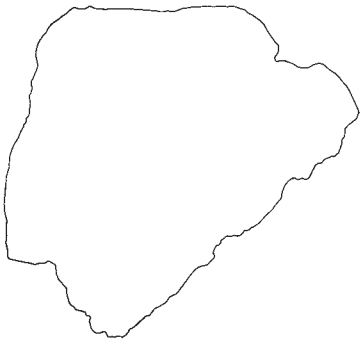
焼台 3

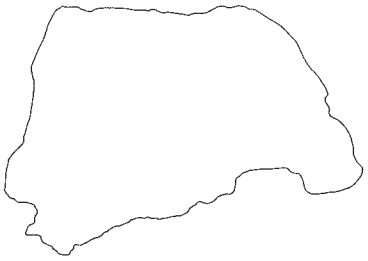


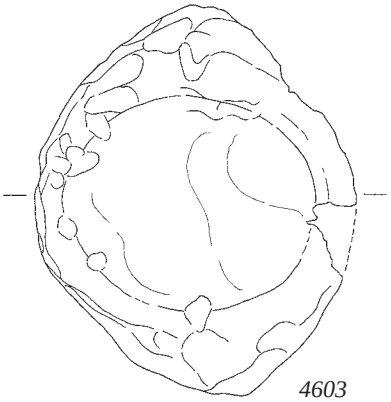
4601



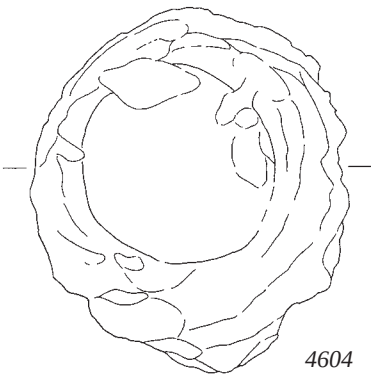
4602



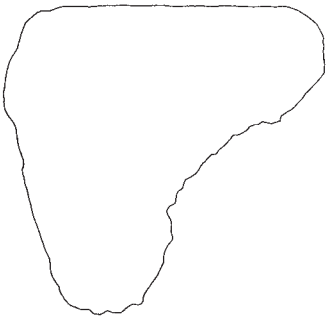


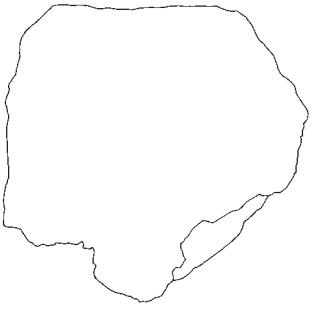


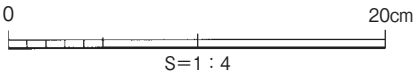
4603



4604

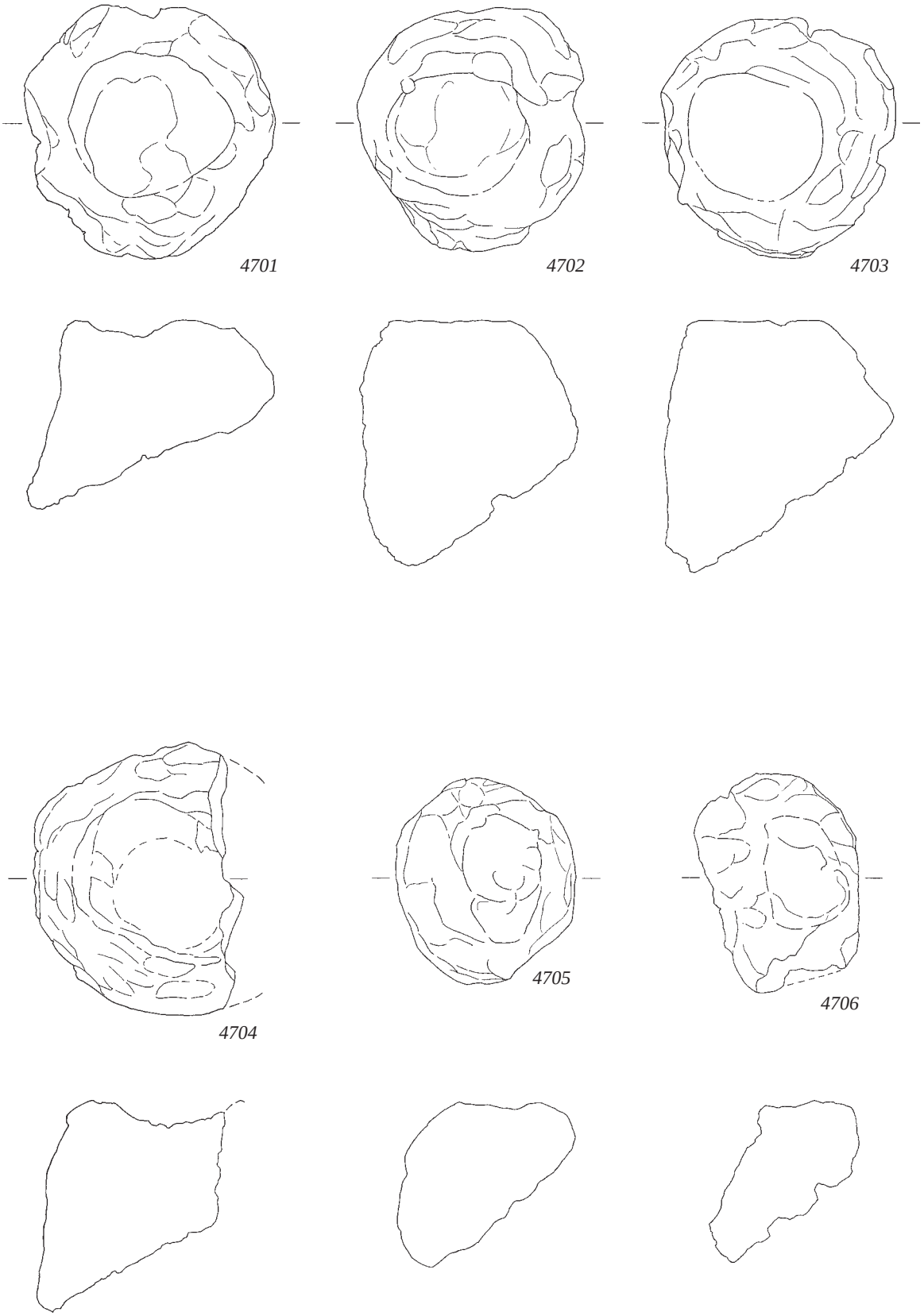






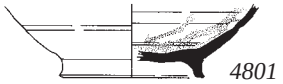
鴨谷 2 号窯

焼台 4



鴨谷 3 号窯

第 1 次操業　第 2 次窯体盛土層下灰層出土須恵器・瓦


4801

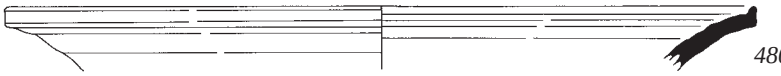
4802

4803

4804

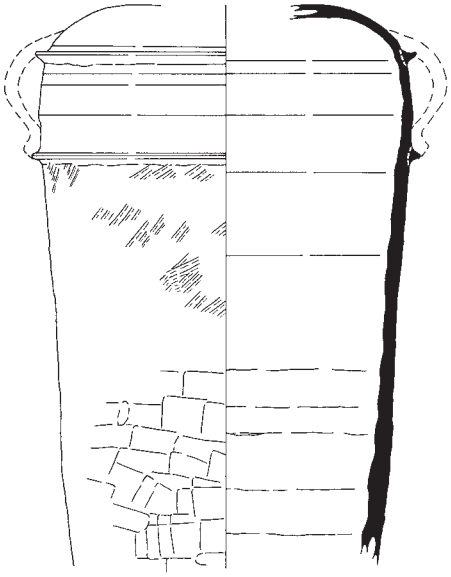
4805

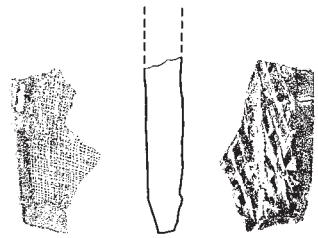
4806

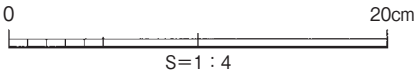

4807

4808

4809

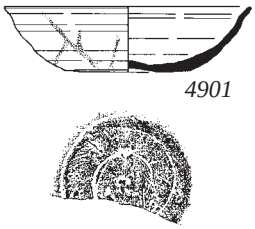

4810

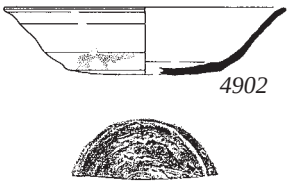

4811

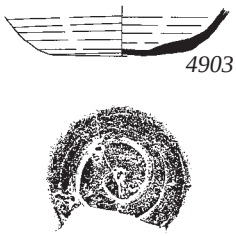


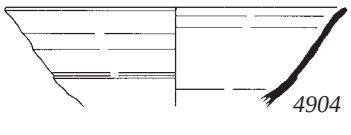
鴨谷 3 号窯

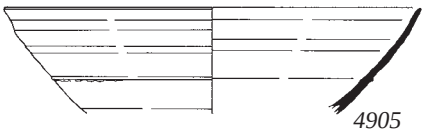
第 1 次操業灰層出土須恵器 1

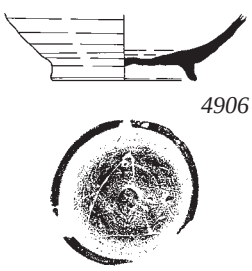

4901

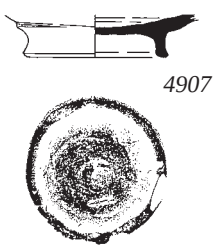

4902

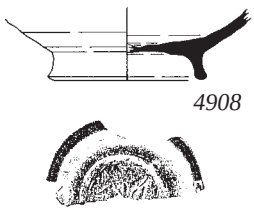

4903

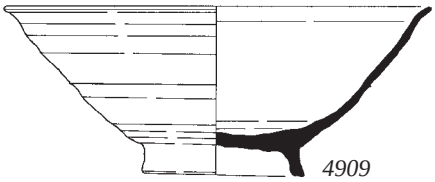

4904

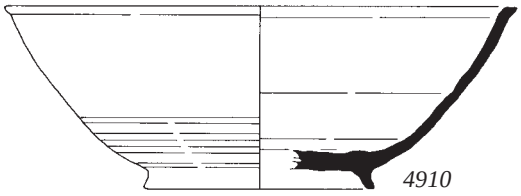

4905

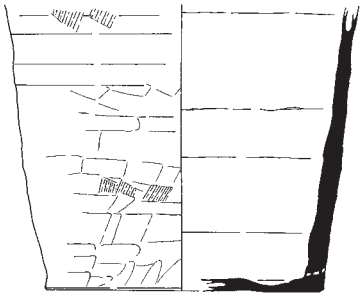

4906


4907


4908


4909


4910


4912

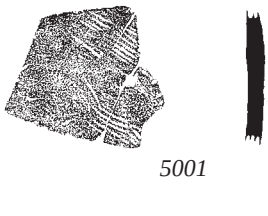
4911

0 20cm

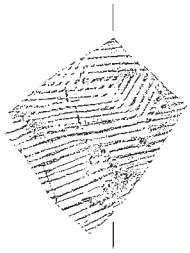
S=1：4

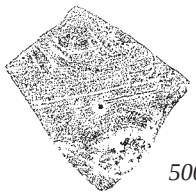
鴨谷 3 号窯

第 1 次操業灰層出土須恵器 2

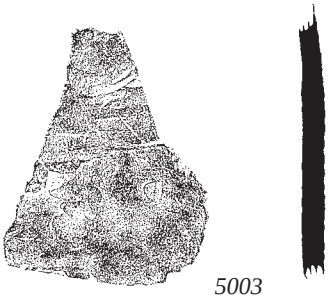


5001



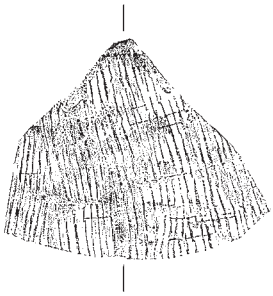


5002

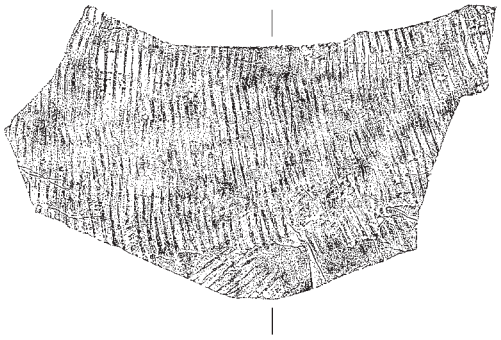


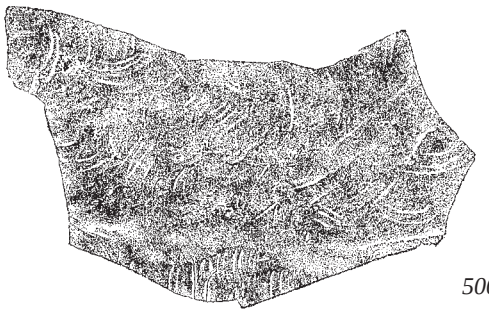
5003

5004



5005





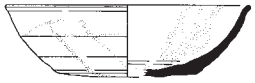
5006

0 20cm

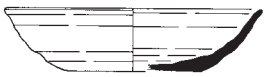
S=1 : 4

鴨谷 3 号窯

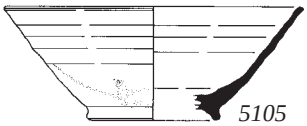
第 1 次操業　作業場跡出土須恵器 1

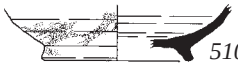

5101

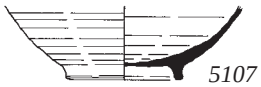
5102


5103

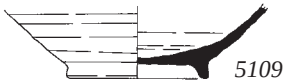
5104

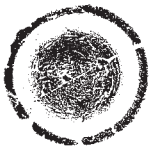

5105

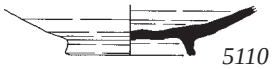

5106


5107

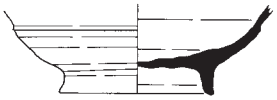
5108

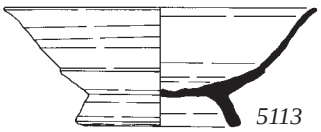

5109

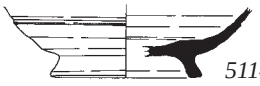


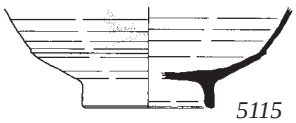

5110

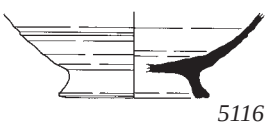
5111

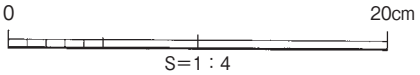

5112


5113


5114

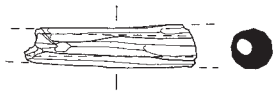

5115


5116

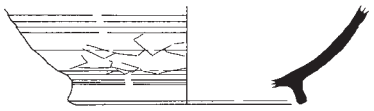


鴨谷 3 号窯

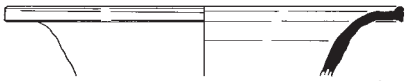
第 1 次操業　作業場跡出土須恵器 2



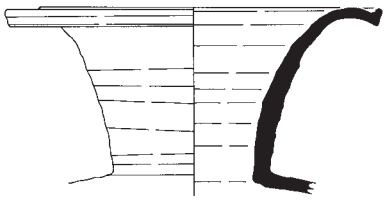
5201



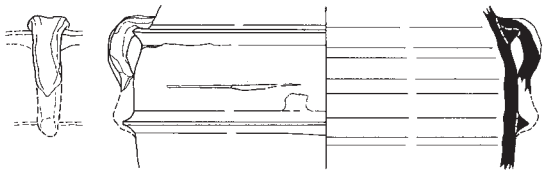
5202



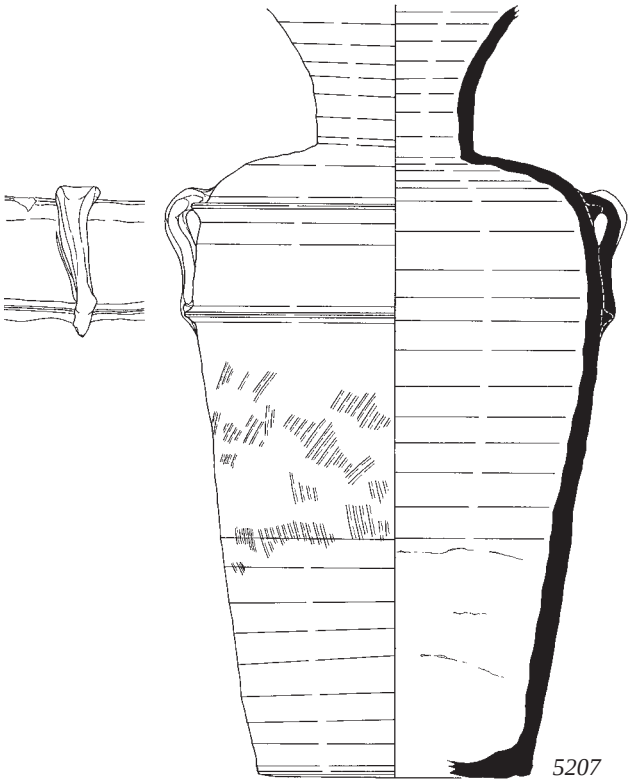
5203



5204

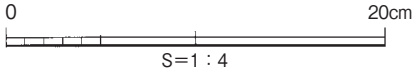


5205



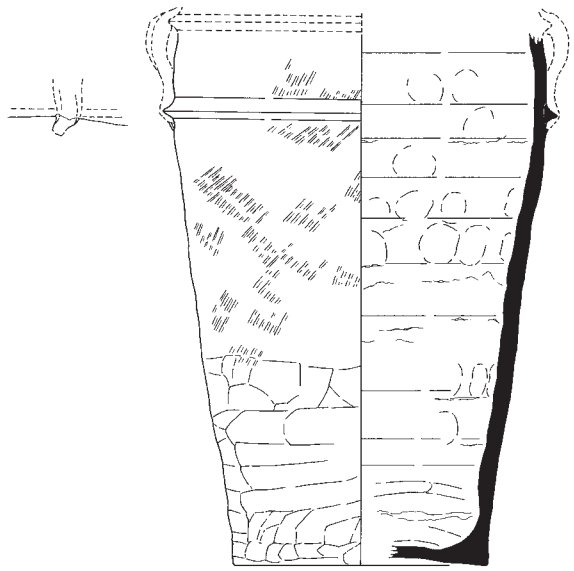
5206

5207

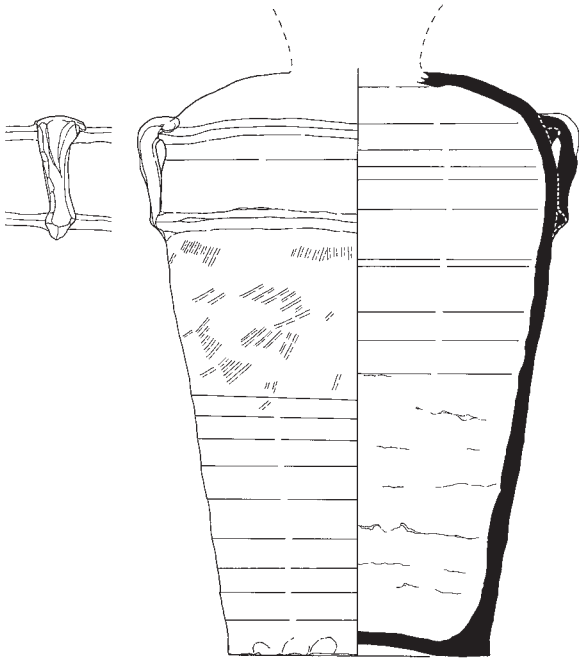


鴨谷 3 号窯

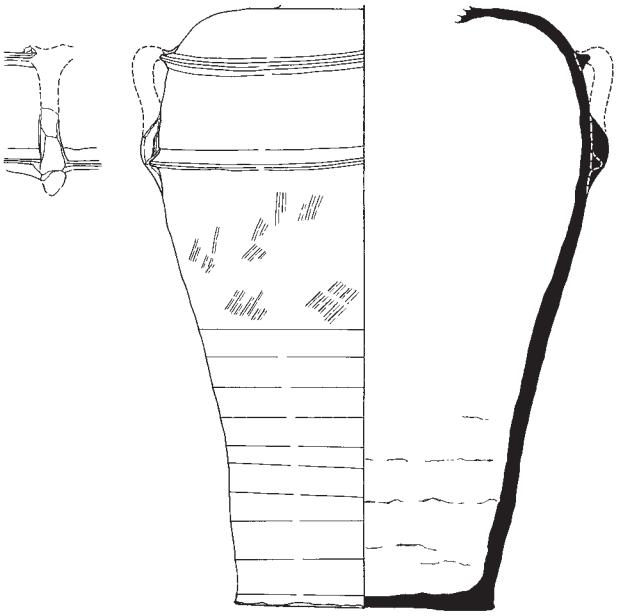
第 1 次操業　作業場跡出土須恵器 3



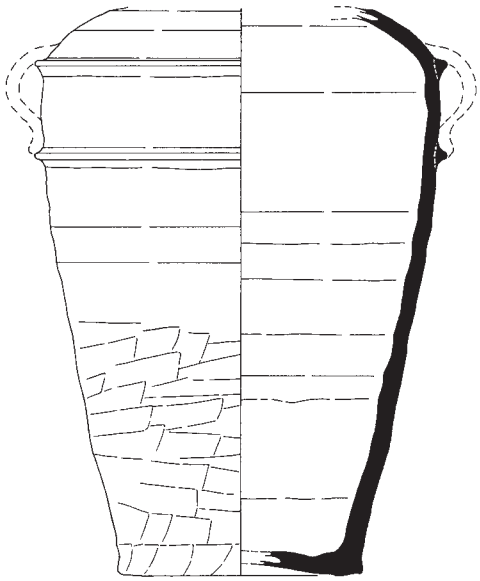
5301



5302



5303



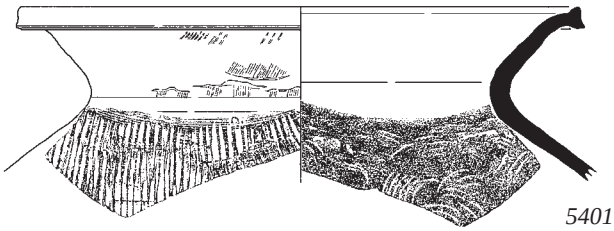
5304

0　20cm

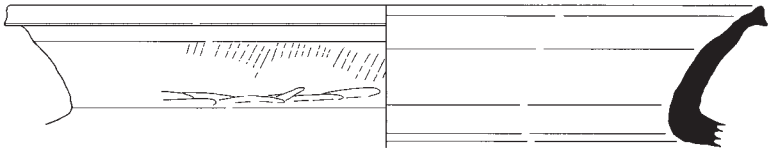
S=1：4

鴨谷 3 号窯

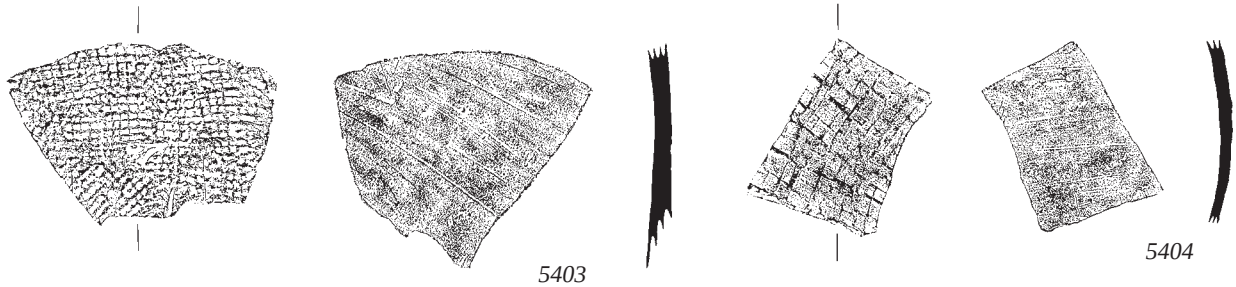
第 1 次操業　作業場跡出土須恵器 4



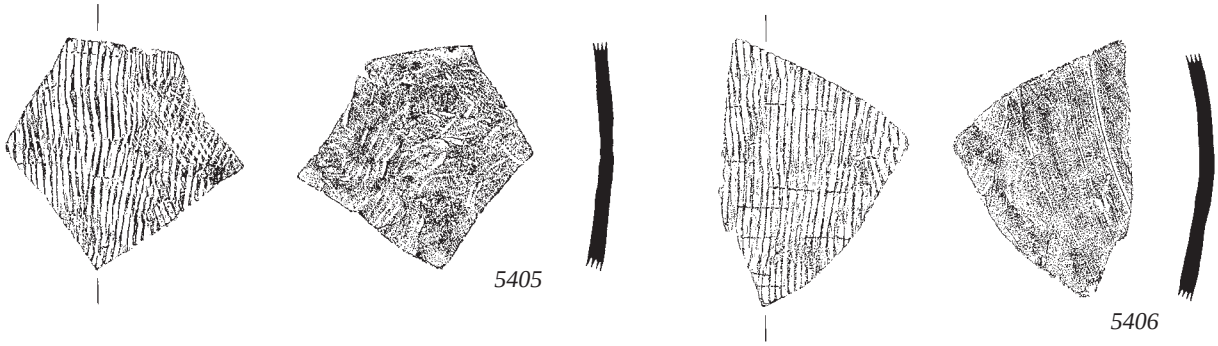
5401



5402



5403　5404



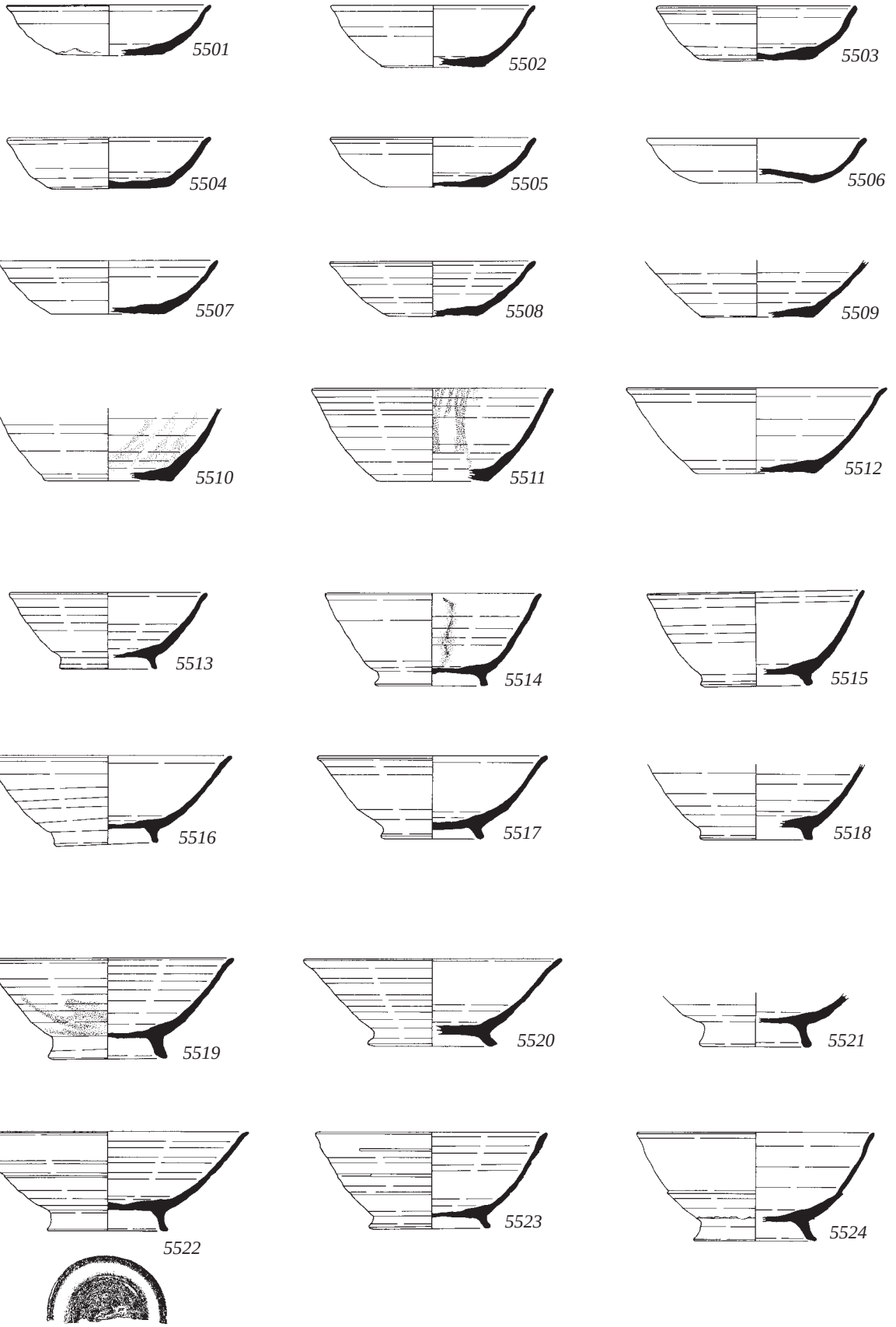
5405　5406

0　20cm

S=1：4

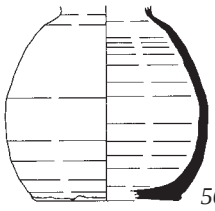
鴨谷 3 号窯

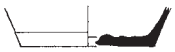
灰原出土第 1 次操業須恵器 1

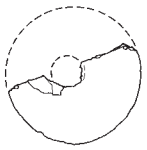


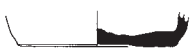
鴨谷 3 号窯

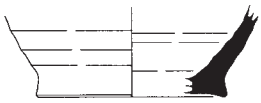
灰原出土第 1 次操業須恵器 2

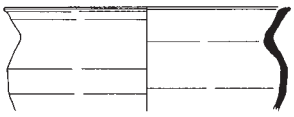

5601

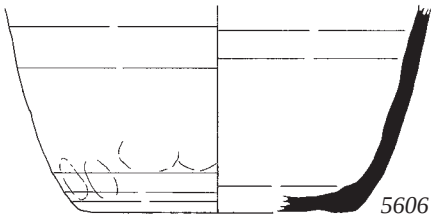

5602

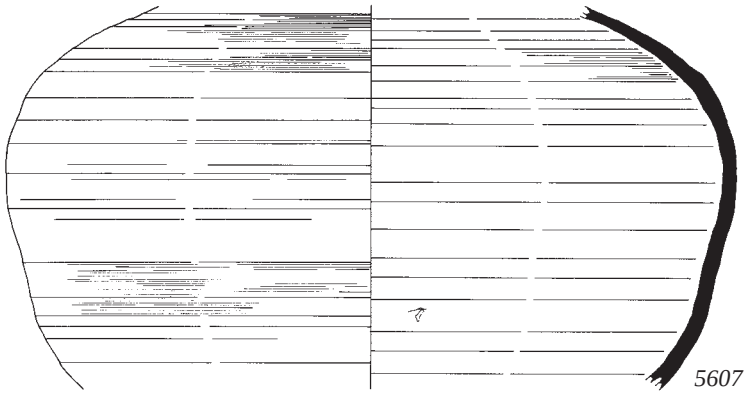


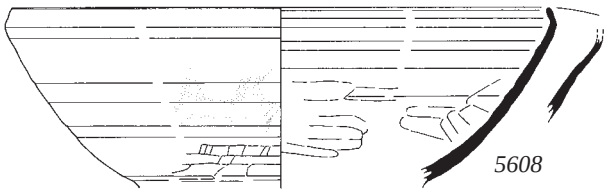

5603

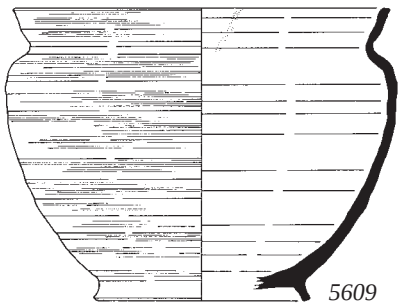

5604

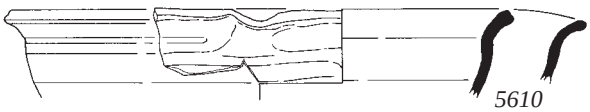

5605

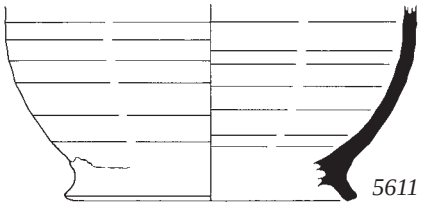

5606

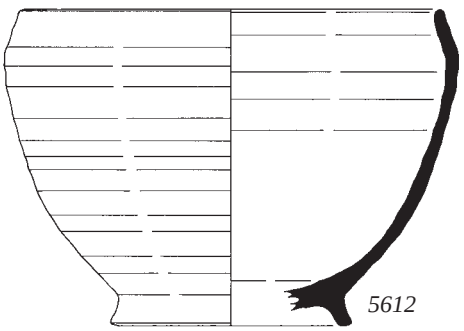

5607


5608


5609


5610


5611

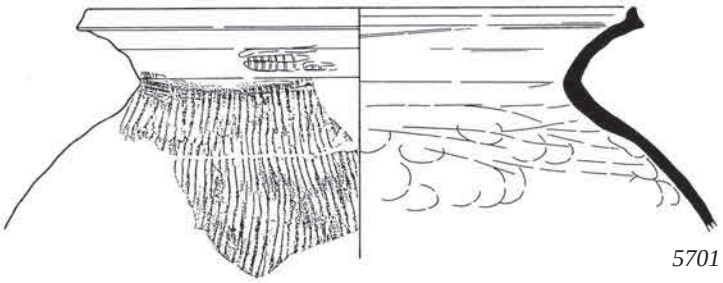

5612

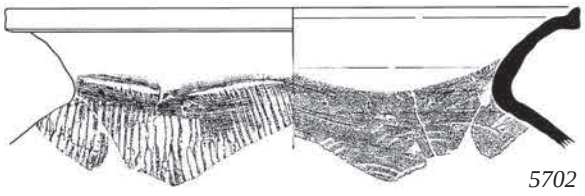
0 20cm

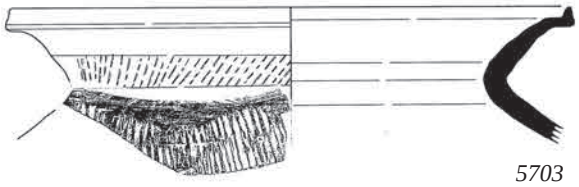
S=1：4

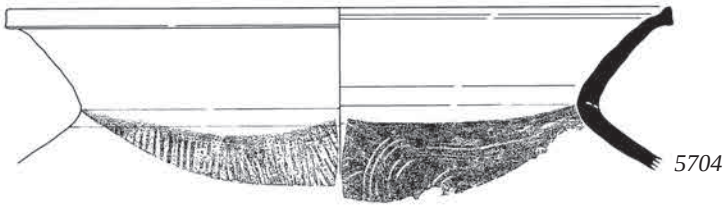
鴨谷 3 号窯

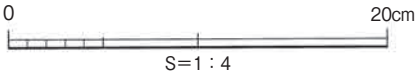
灰原出土第 1 次操業須恵器 3





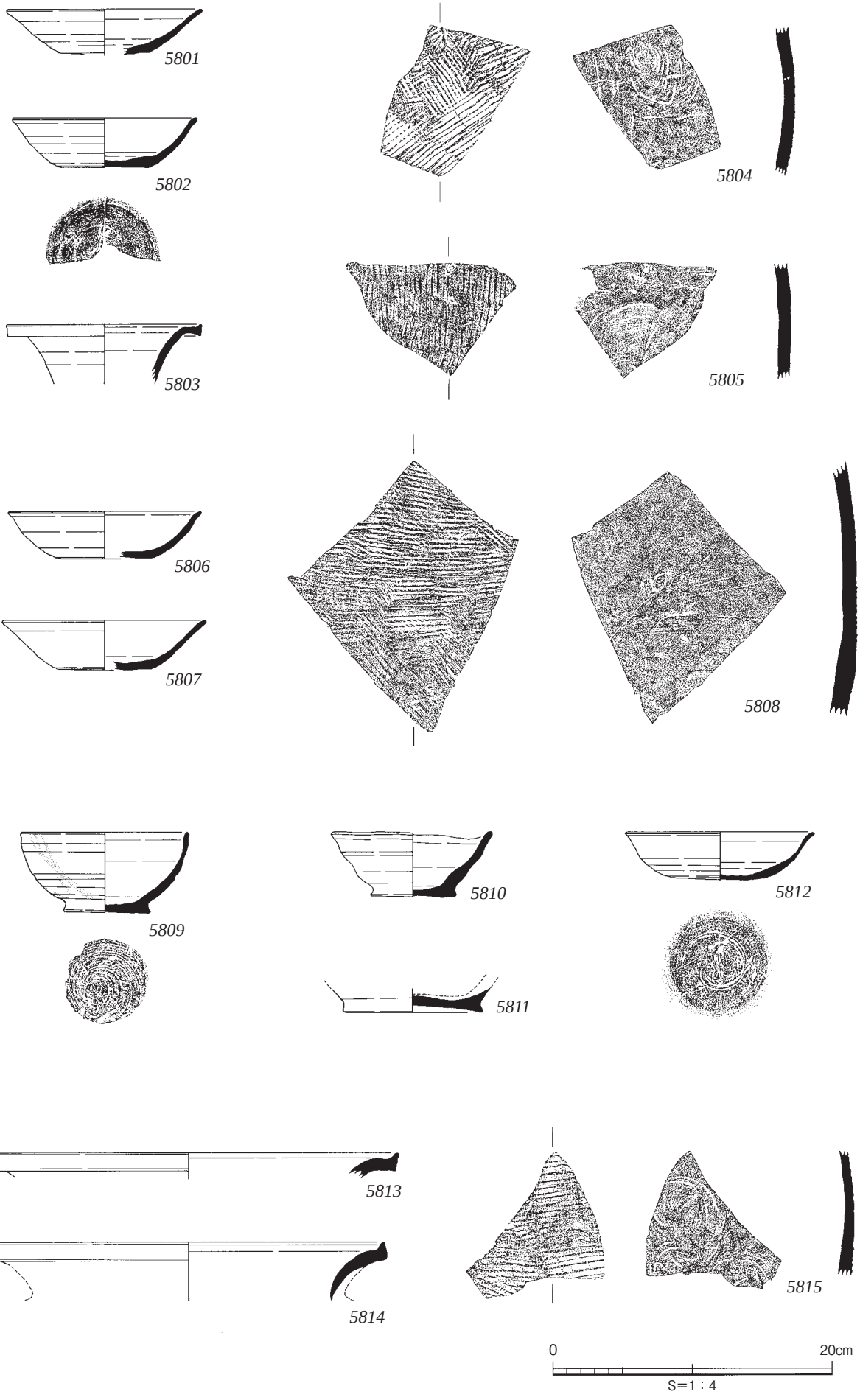






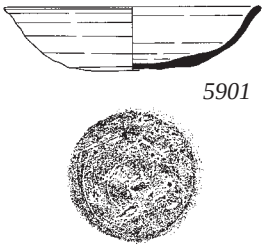
鴨谷 3 号窯

第 2 次操業窯体　第 1 床面出土須恵器



鴨谷 3 号窯

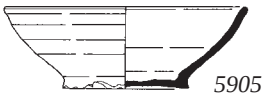
第 2 次操業窯体　第 1 ～第 2 床面間層出土須恵器 1

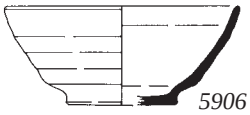

5901

5902

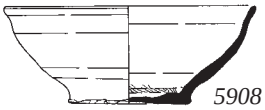
5903

5904

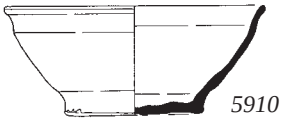

5905

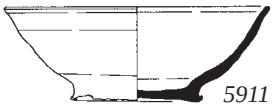

5906

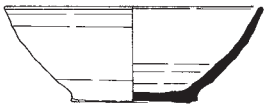
5907

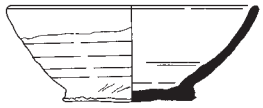

5908

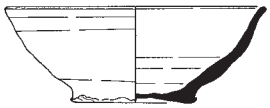
5909


5910


5911

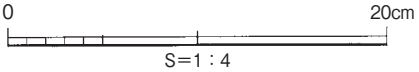

5912


5913


5914

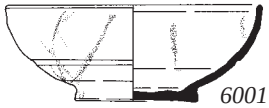
5915

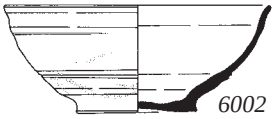
5916

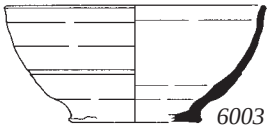


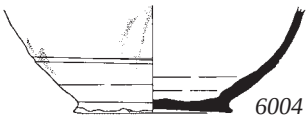
鴨谷 3 号窯

第 2 次操業窯体　第 1 ～第 2 床面間層出土須恵器 2

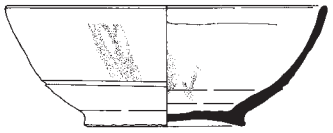

6001

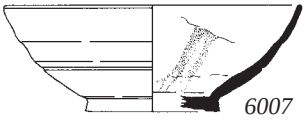

6002

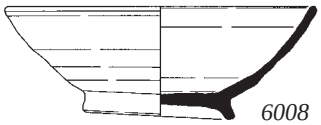

6003

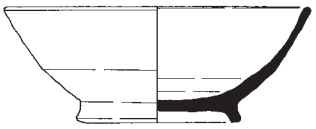

6004

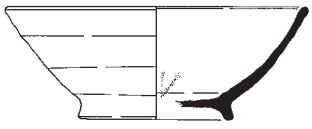
6005

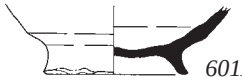

6006


6007

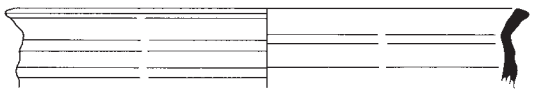

6008

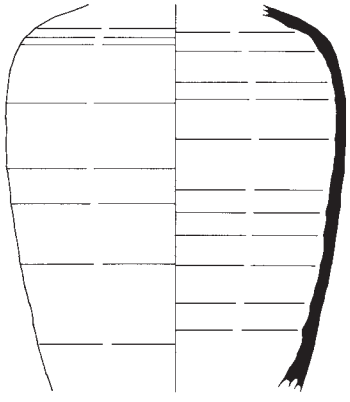

6009

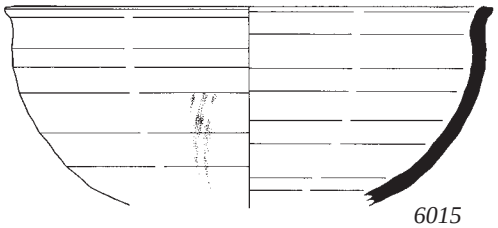

6010

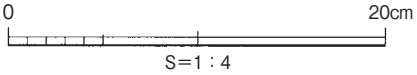

6011

6012


6014

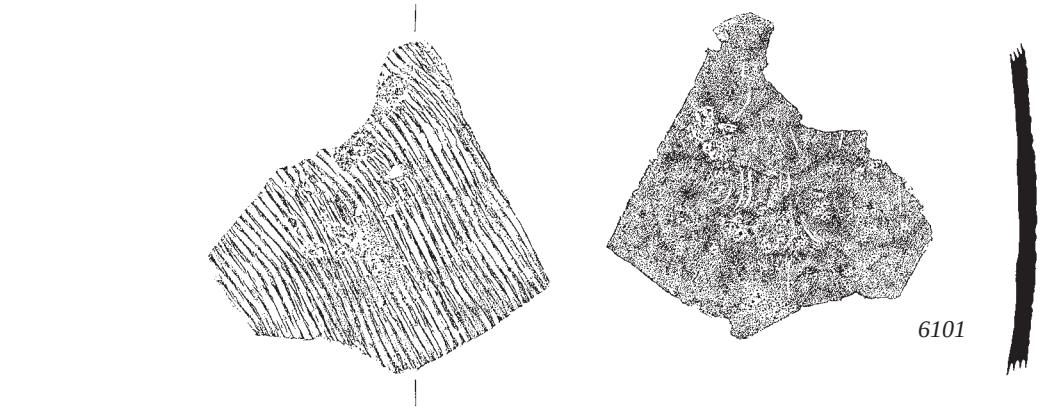

6013


6015

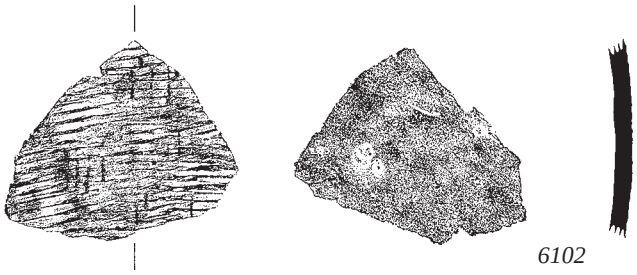


鴨谷 3 号窯

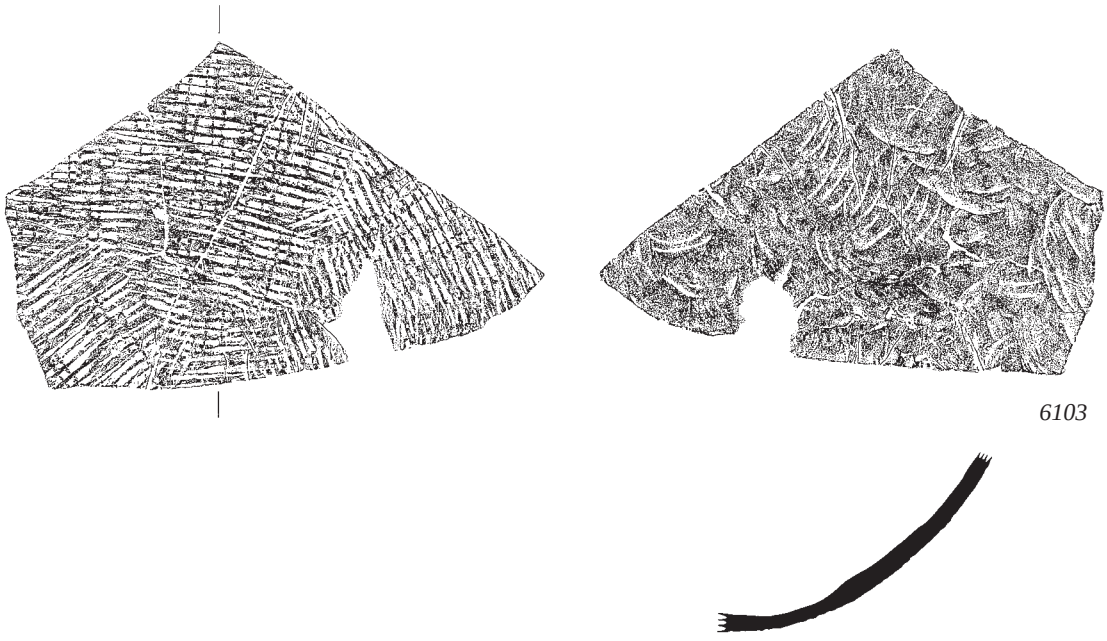
第 2 次操業窯体　第 1 ～第 2 床面間層出土須恵器 3



6101



6102



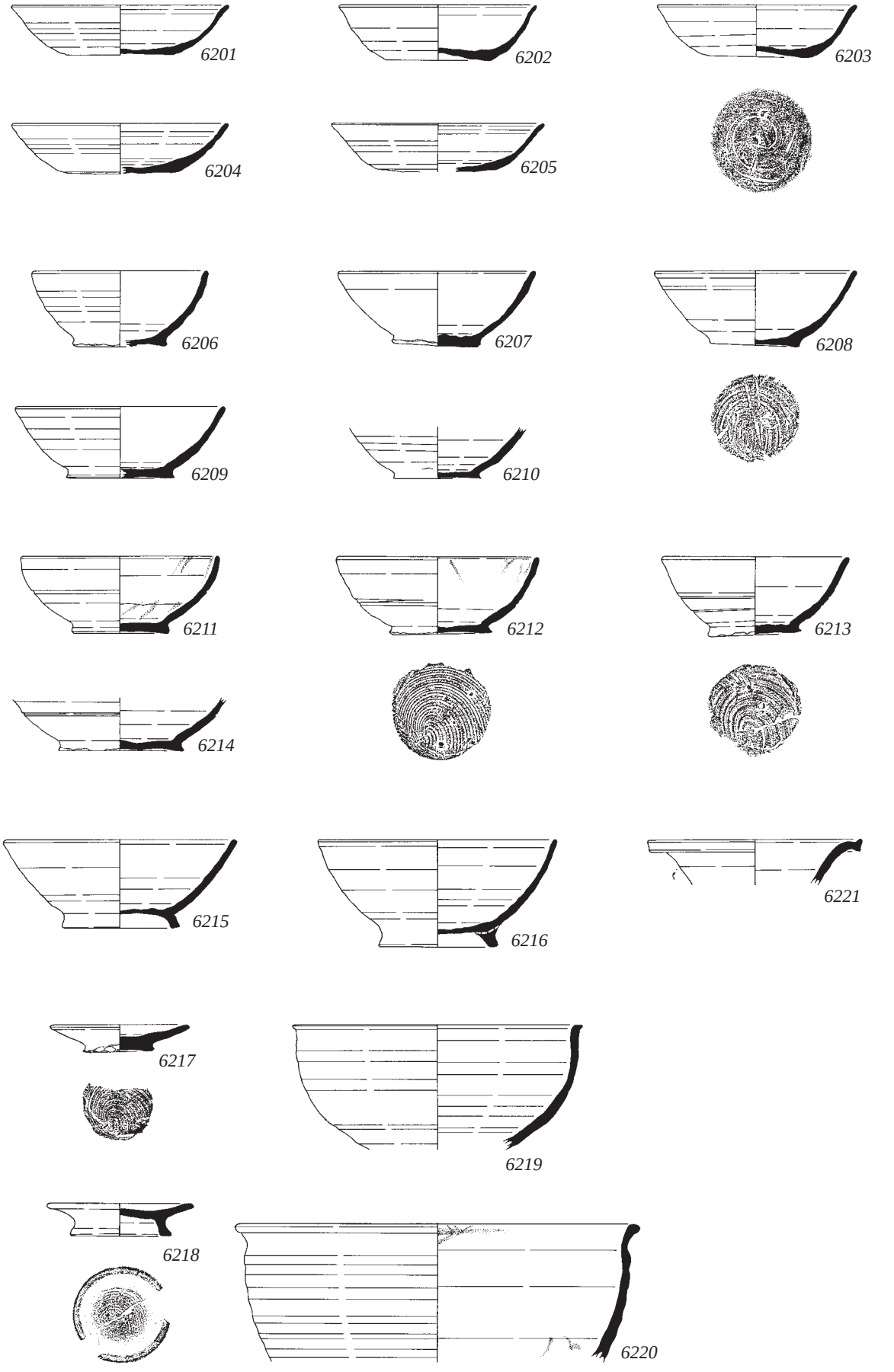
6103

0　20cm

S=1：4

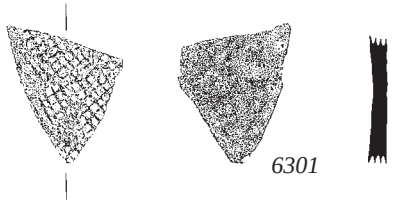
鴨谷 3 号窯

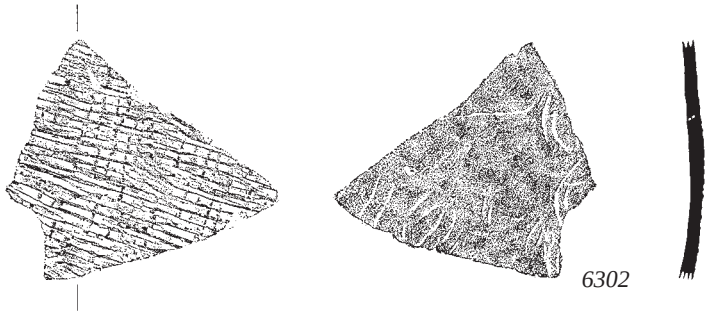
第 2 次操業窯体　第 2 ～第 3 床面間層出土須恵器 1

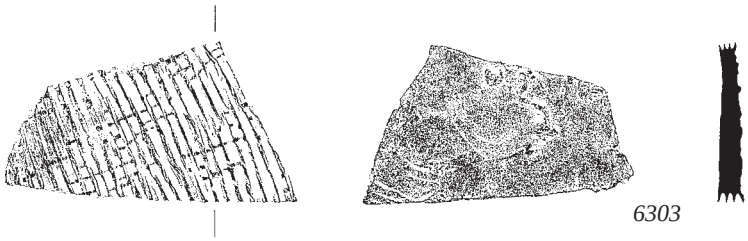


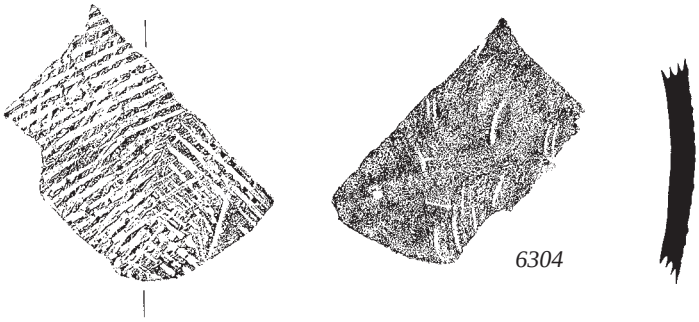
鴨谷 3 号窯

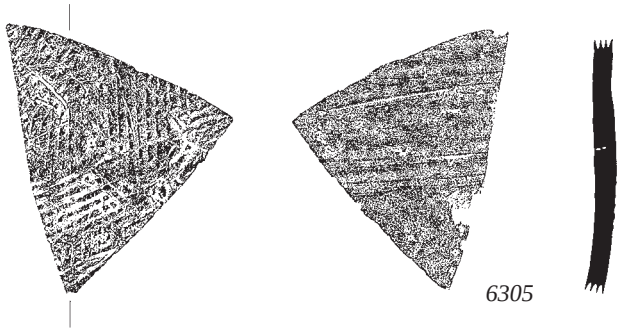
第 2 次操業窯体　第 2 ～第 3 床面間層出土須恵器 2


6301


6302


6303


6304

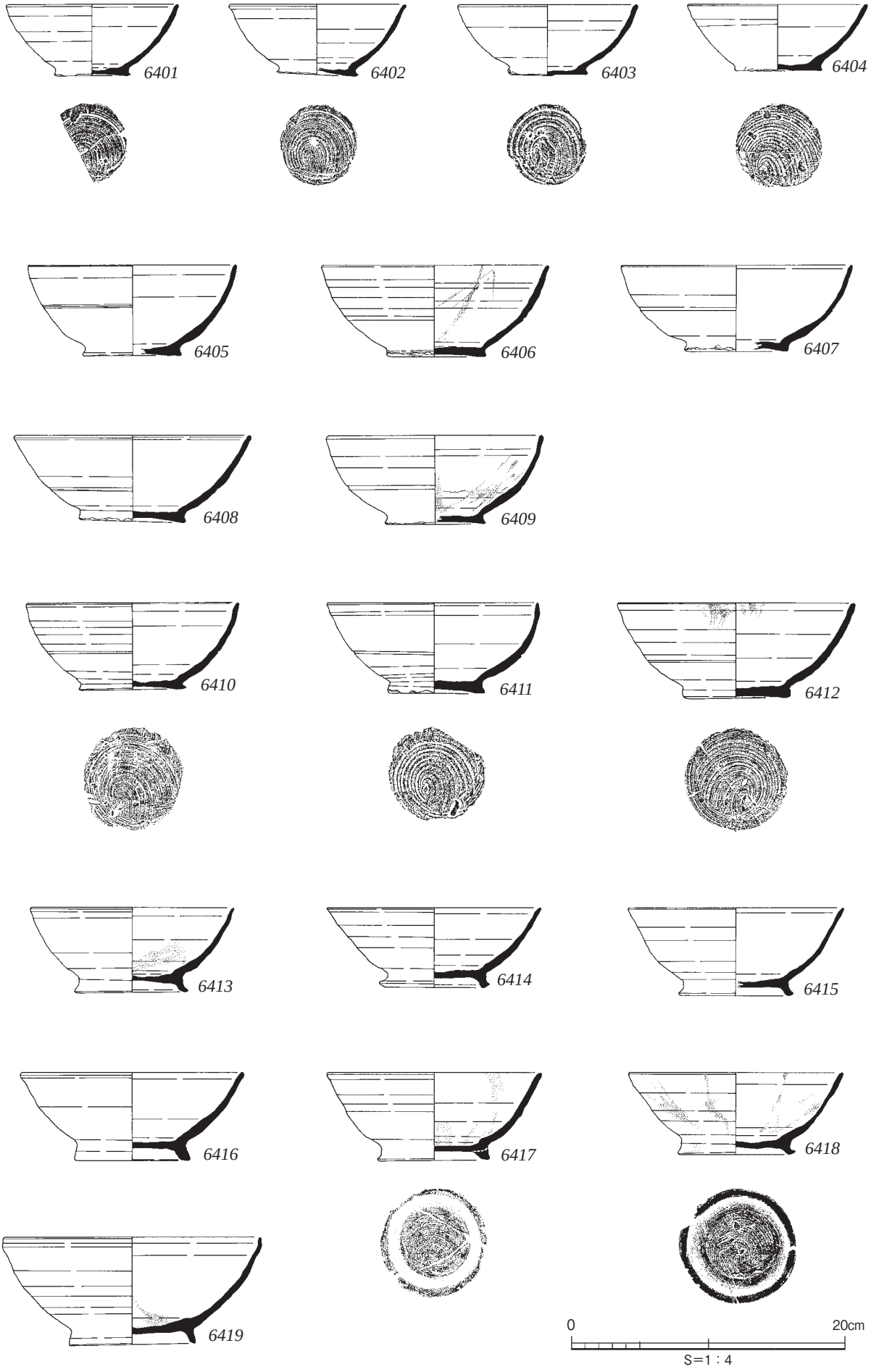

6305

0　20cm

S=1：4

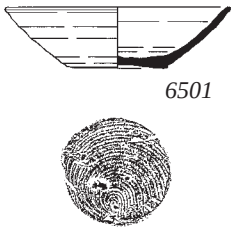
鴨谷 3 号窯

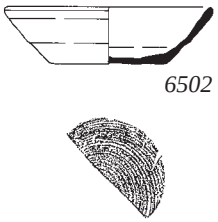
第 2 次操業窯体　第 3 ・ 4 床面出土須恵器 1

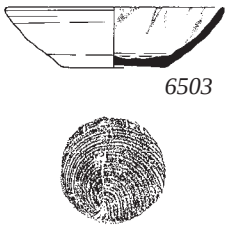


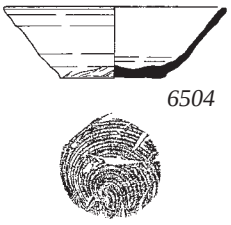
鴨谷 3 号窯

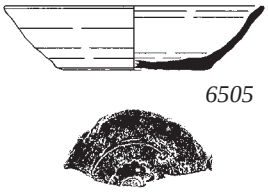
第 2 次操業窯体　第 3 ・ 4 床面出土須恵器 2

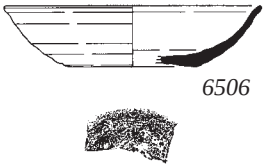

6501

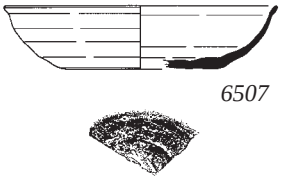

6502

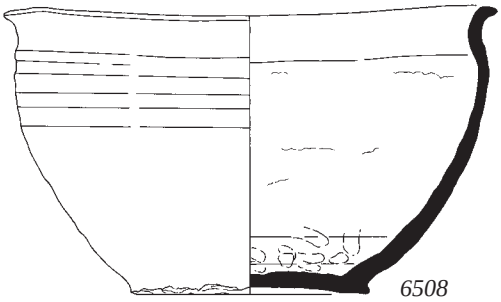

6503

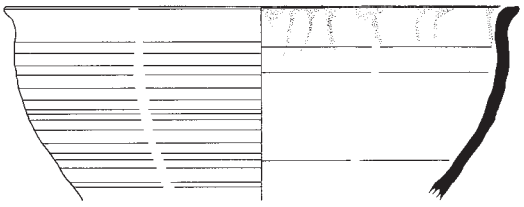

6504

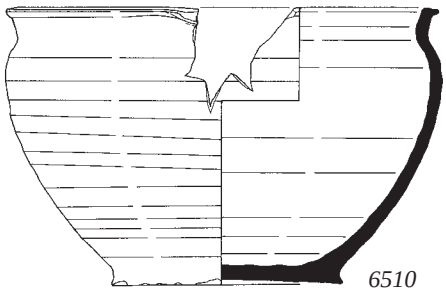

6505

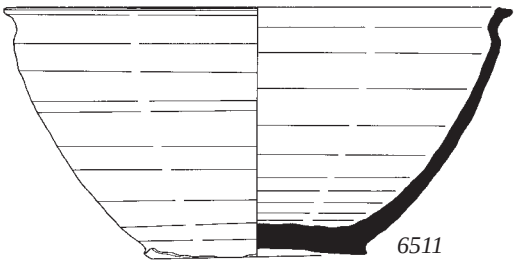

6506


6507


6508


6509


6510

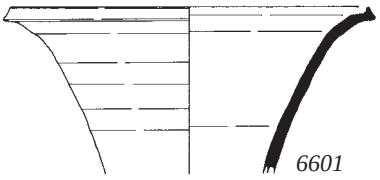

6511

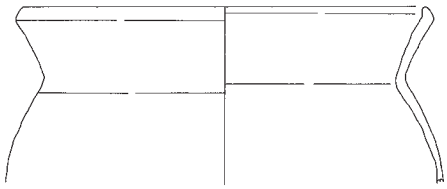
0　20cm

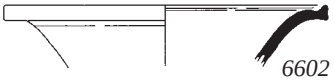
S=1：4

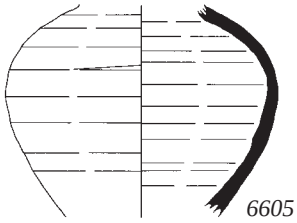
鴨谷 3 号窯

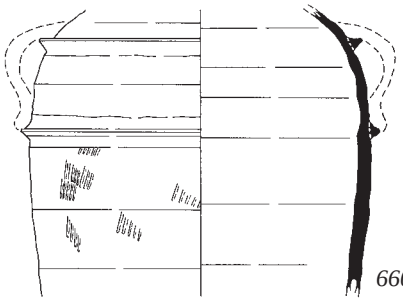
第 2 次操業窯体出土須恵器 1

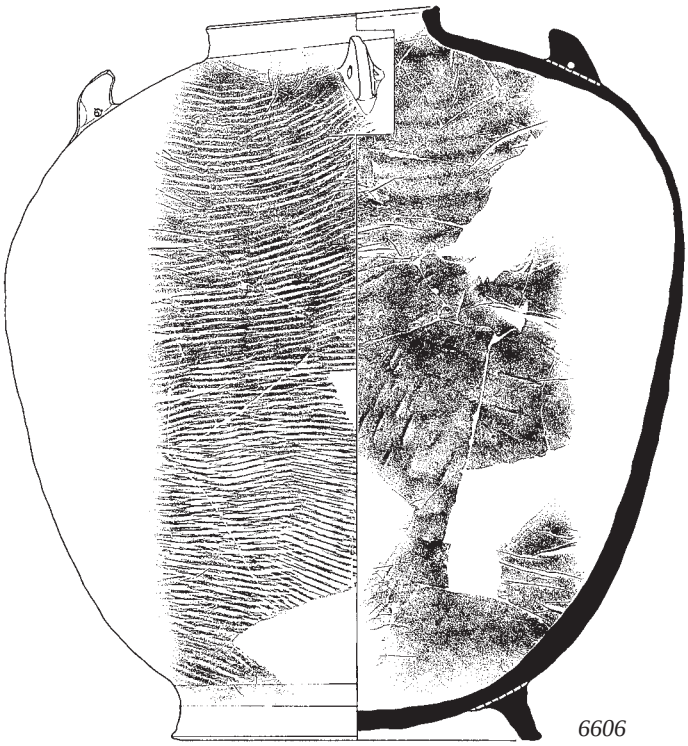

6601

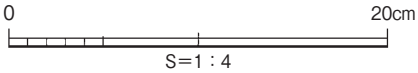

6604


6602


6605

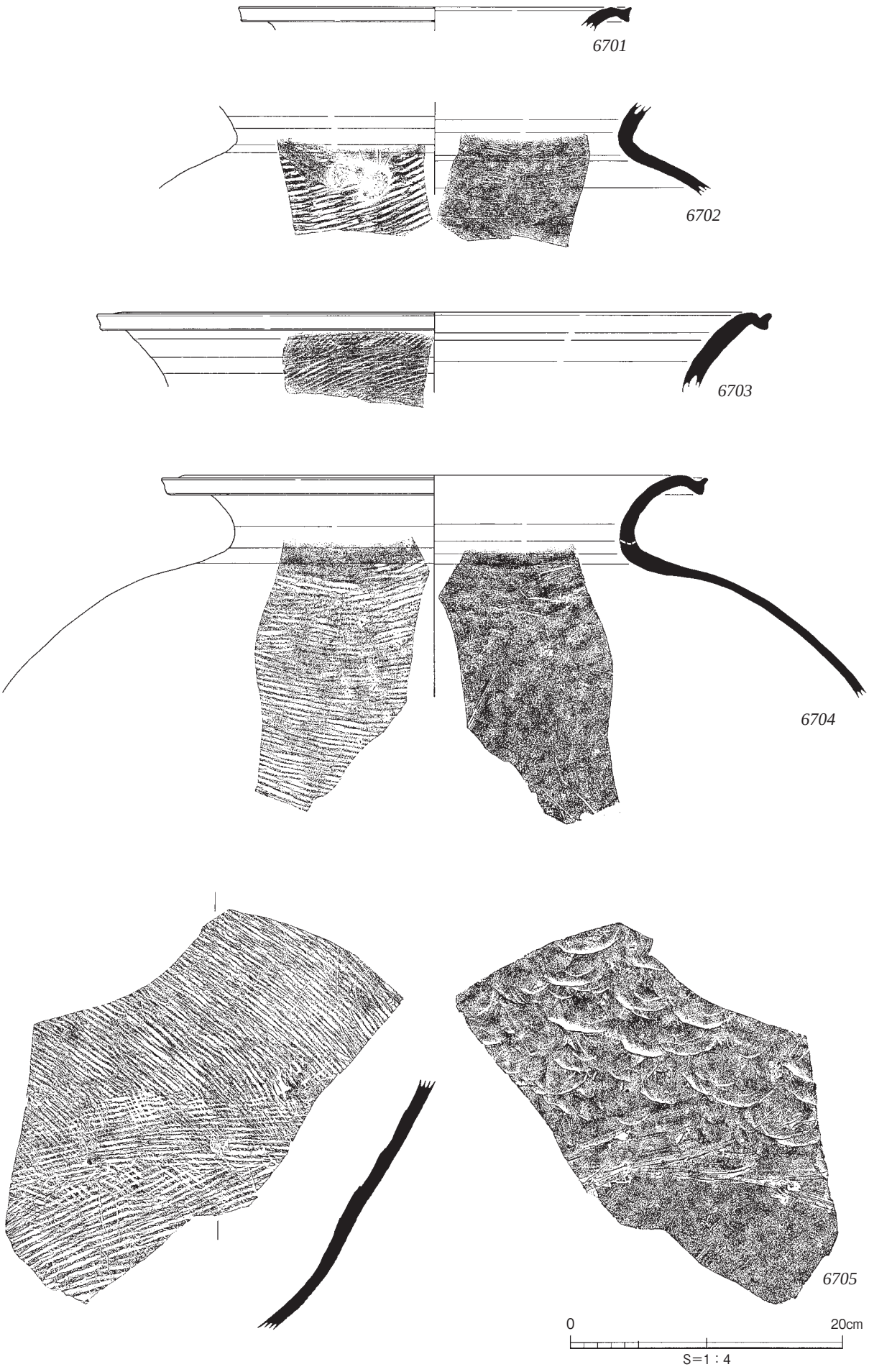

6603


6606



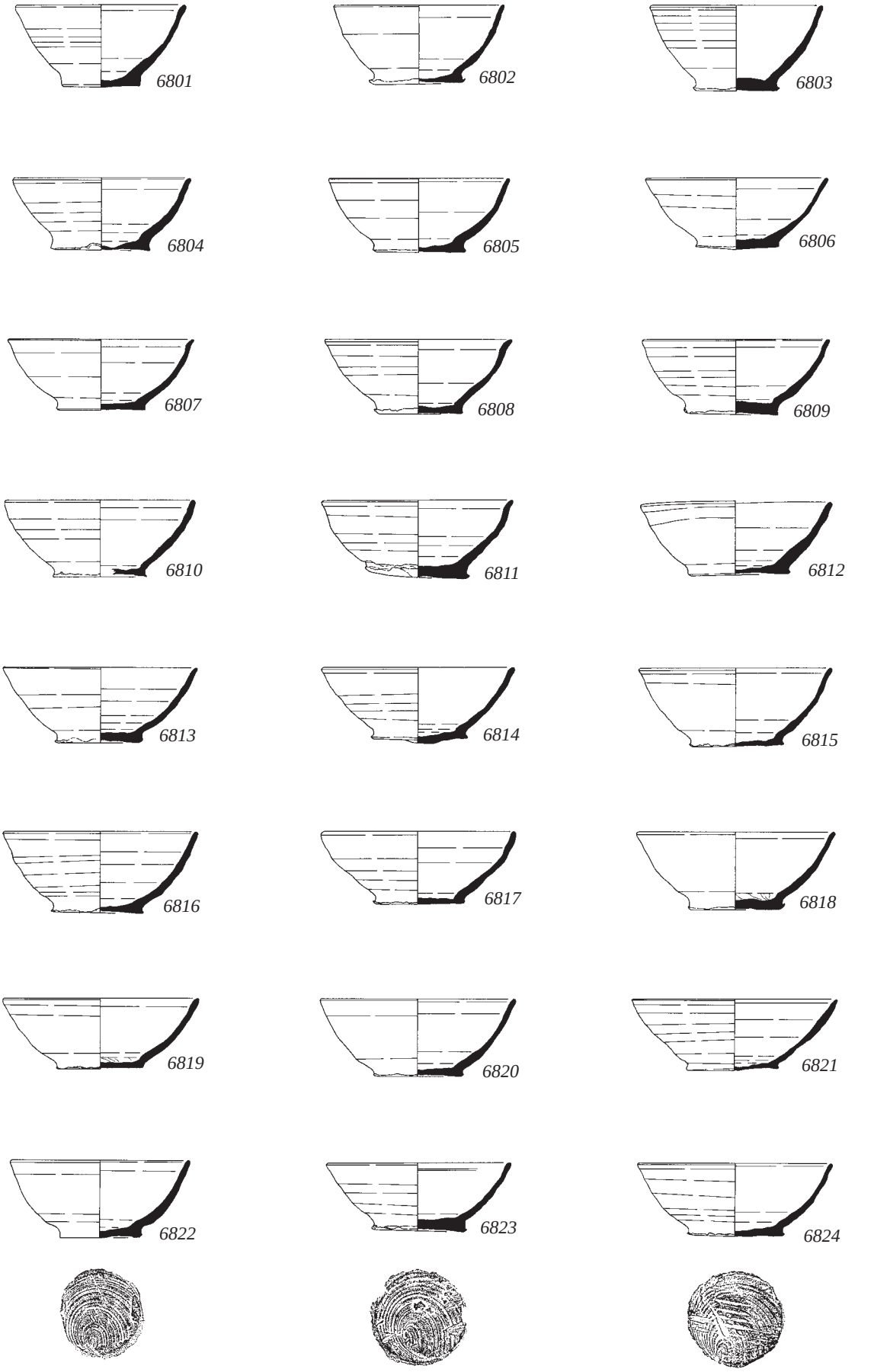
鴨谷 3 号窯

第 2 次操業窯体出土須恵器 2



鴨谷 3 号窯

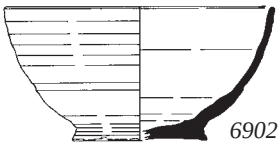
灰原出土第 2 次操業須恵器 1

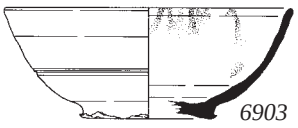


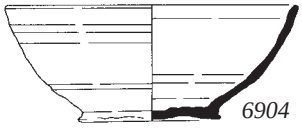
鴨谷 3 号窯

灰原出土第 2 次操業須恵器 2

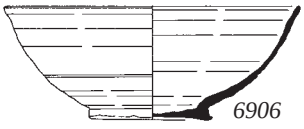
6901

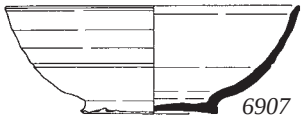

6902

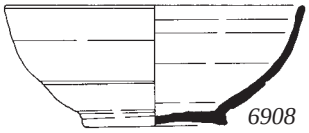

6903

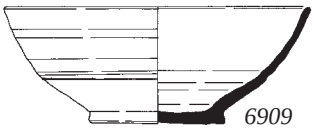

6904

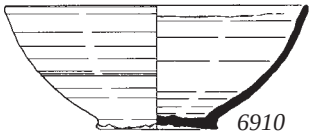
6905

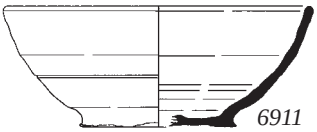

6906

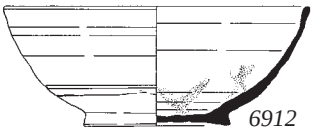

6907

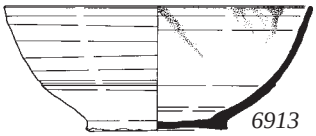

6908

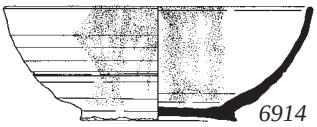

6909


6910

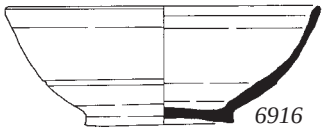

6911

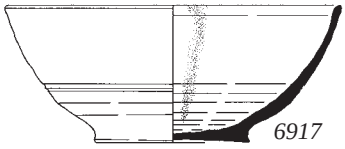

6912


6913


6914

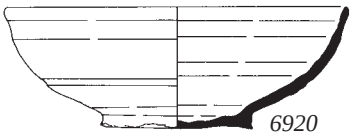
6915


6916


6917

6918

6919


6920

0 20cm

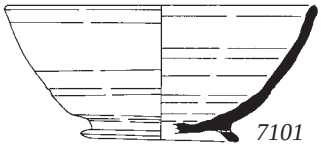
S=1：4

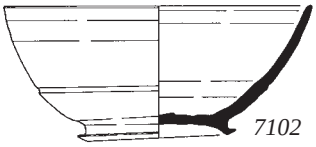
鴨谷 3 号窯

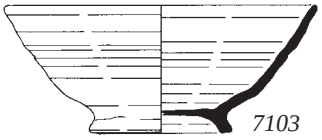
灰原出土第 2 次操業須恵器 3

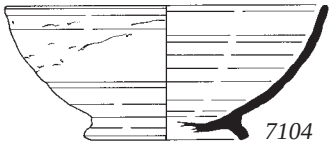
鴨谷 3 号窯

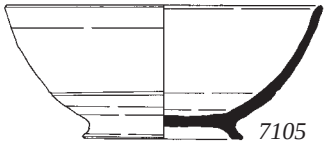
灰原出土第 2 次操業須恵器 4

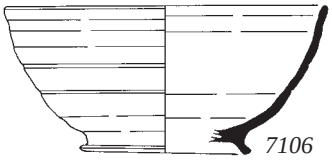

7101

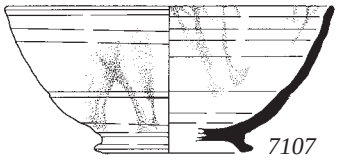

7102

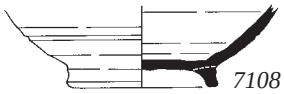

7103

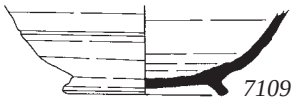

7104


7105

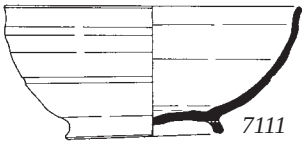

7106

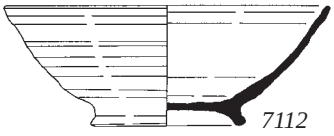

7107


7108

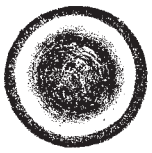

7109

7110


7111

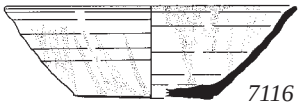

7112

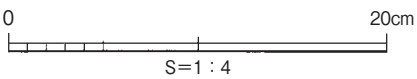
7113



7114

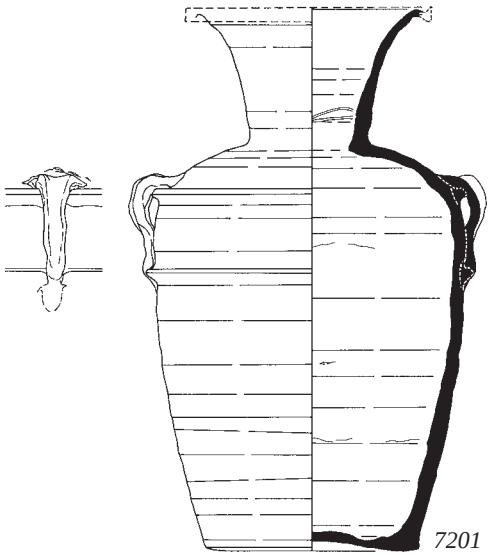
7115

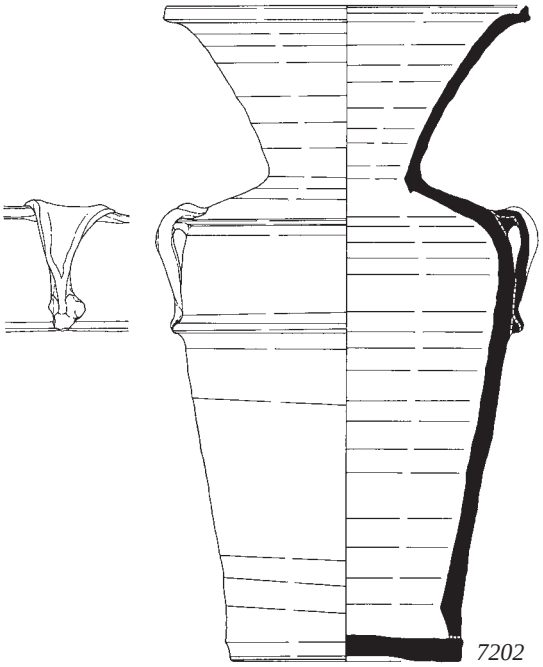

7116

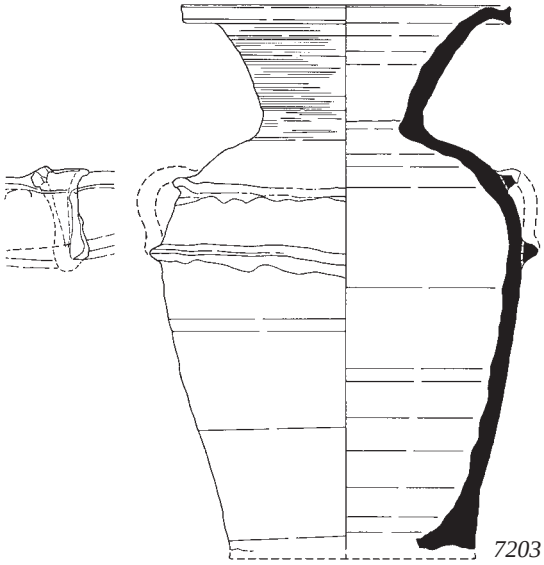


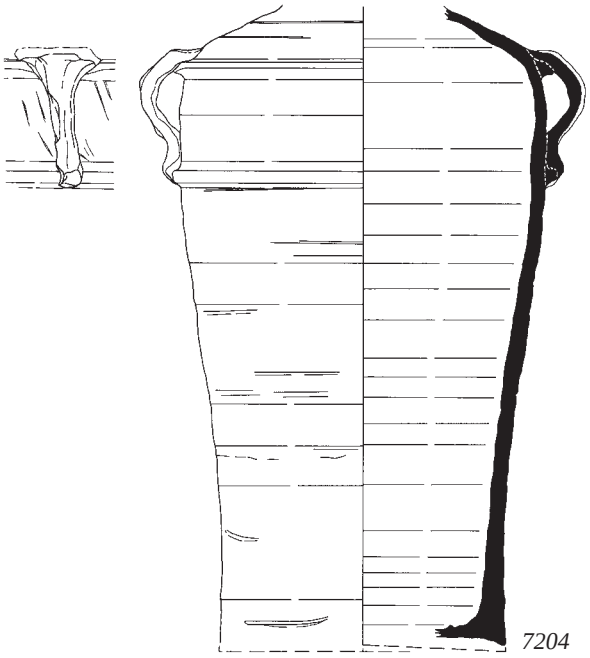
鴨谷 3 号窯

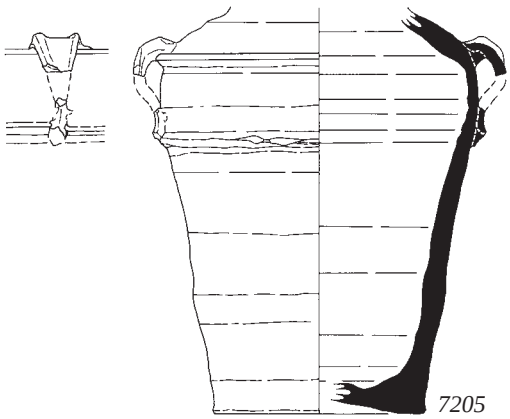
灰原出土第 2 次操業須恵器 5


7201


7202


7203


7204

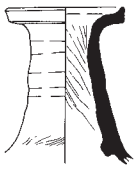

7205

0 20cm

S=1：4

鴨谷 3 号窯

灰原出土第 2 次操業須恵器 6


7301

7303

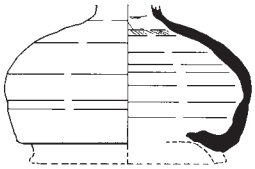
7304

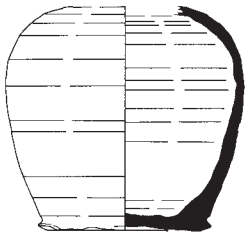
7302

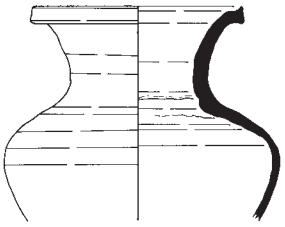
7305

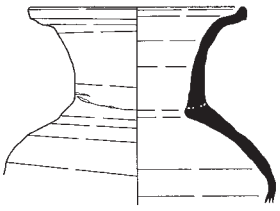
7306

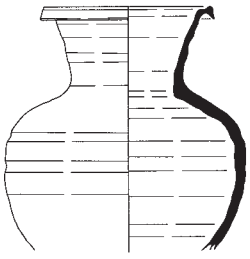
7307

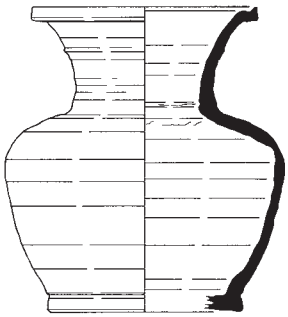

7308

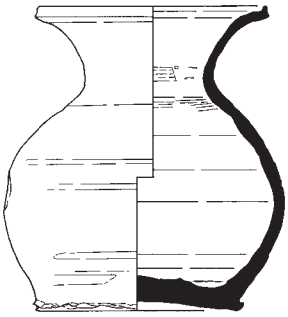

7309

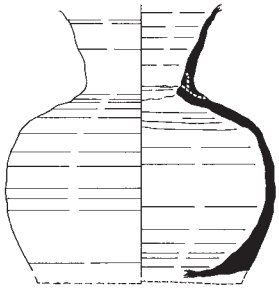

7310

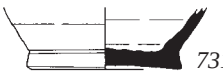

7311

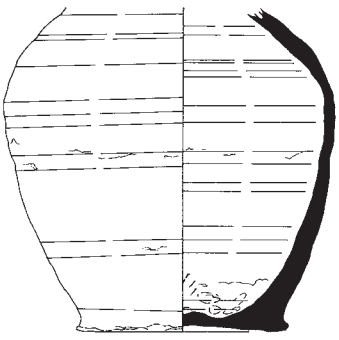

7312

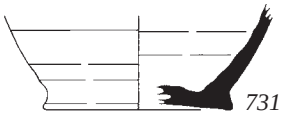

7313

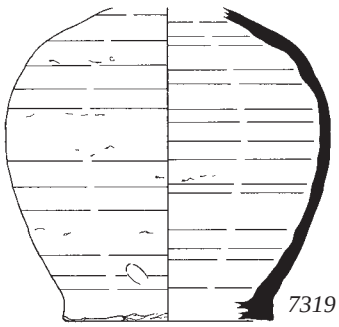

7314

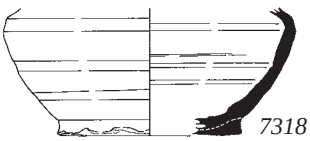

7315


7316


7320


7317

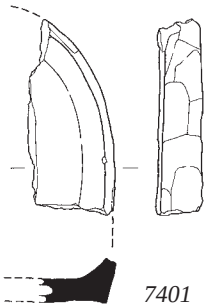

7319

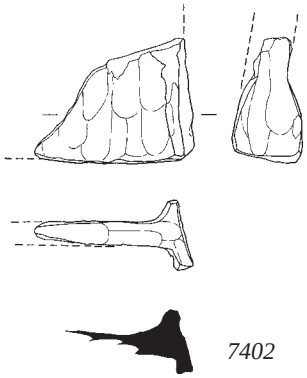

7318

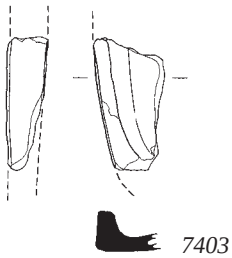
0 20cm
S=1：4

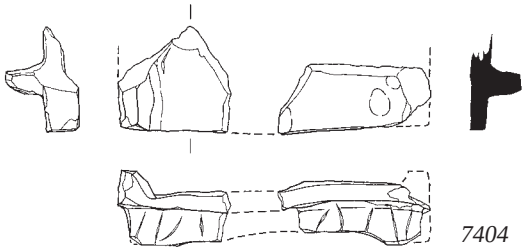
鴨谷 3 号窯

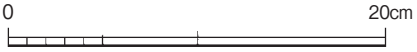
灰原出土第 2 次操業須恵器 7

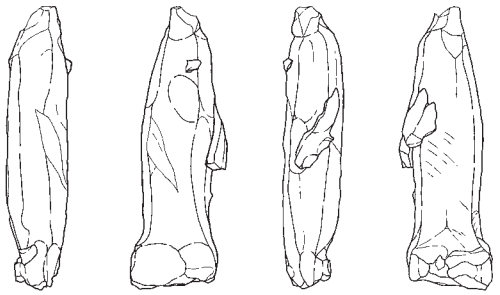

7401

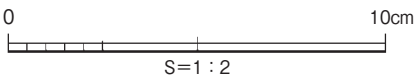

7402


7403


7404

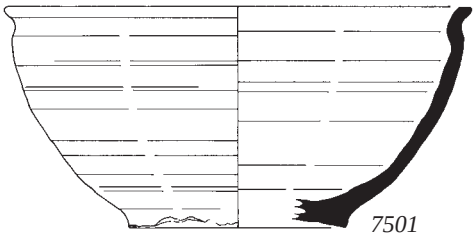


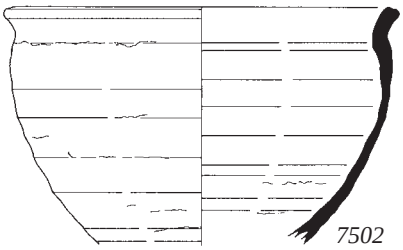

7405

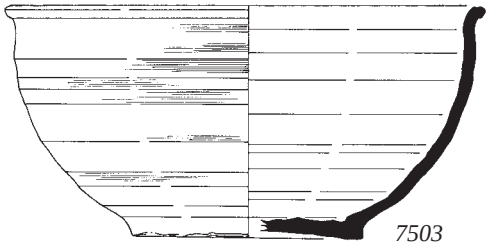


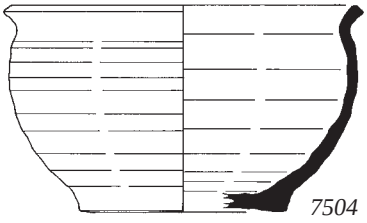
鴨谷 3 号窯

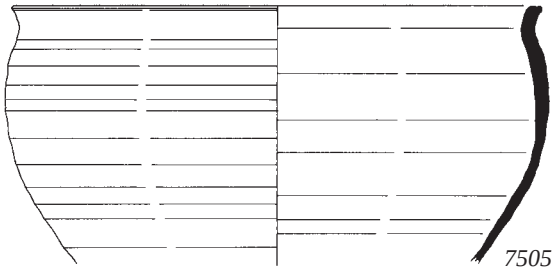
灰原出土第 2 次操業須恵器 8

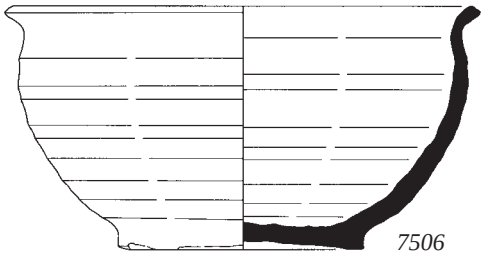

7501

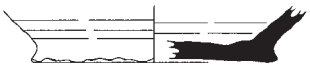

7502

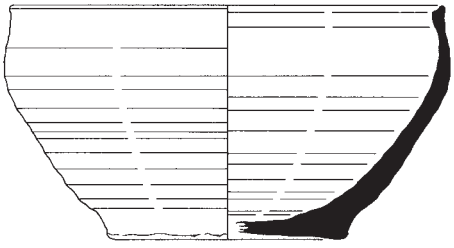

7503


7504

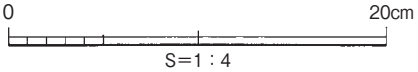

7505


7506


7507

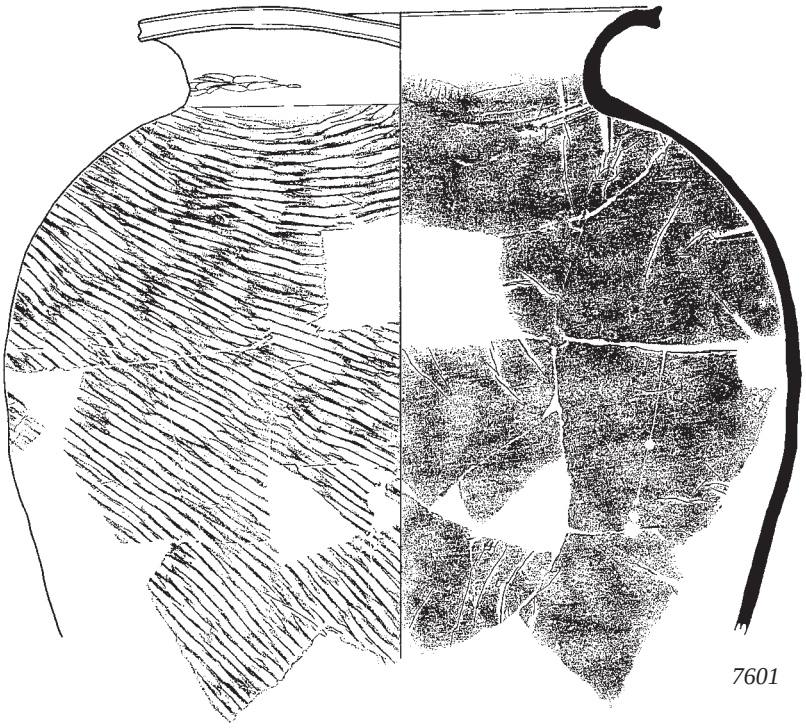

7509

7508

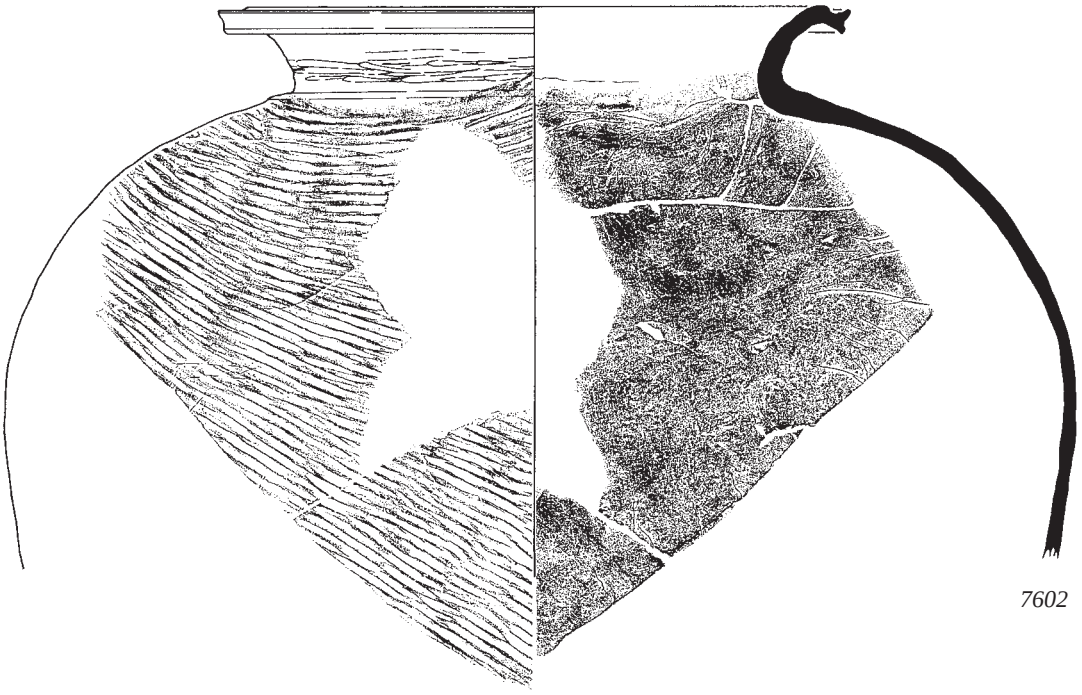


鴨谷 3 号窯

灰原出土第 2 次操業須恵器 9



7601



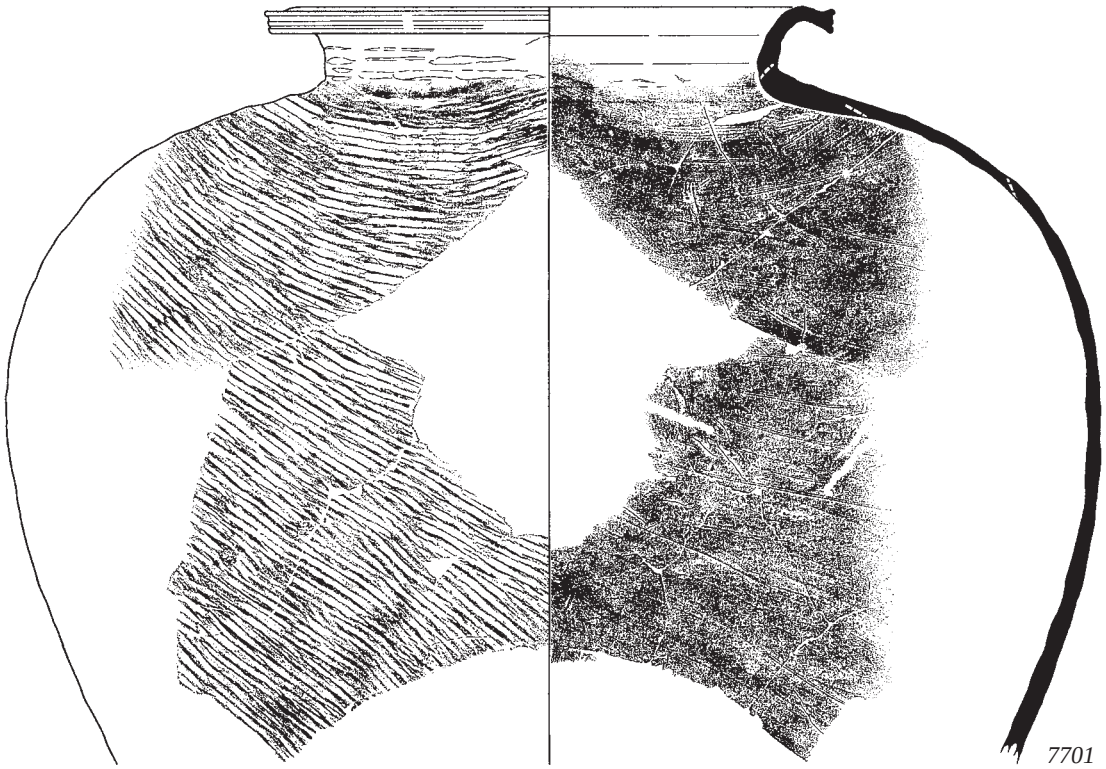
7602

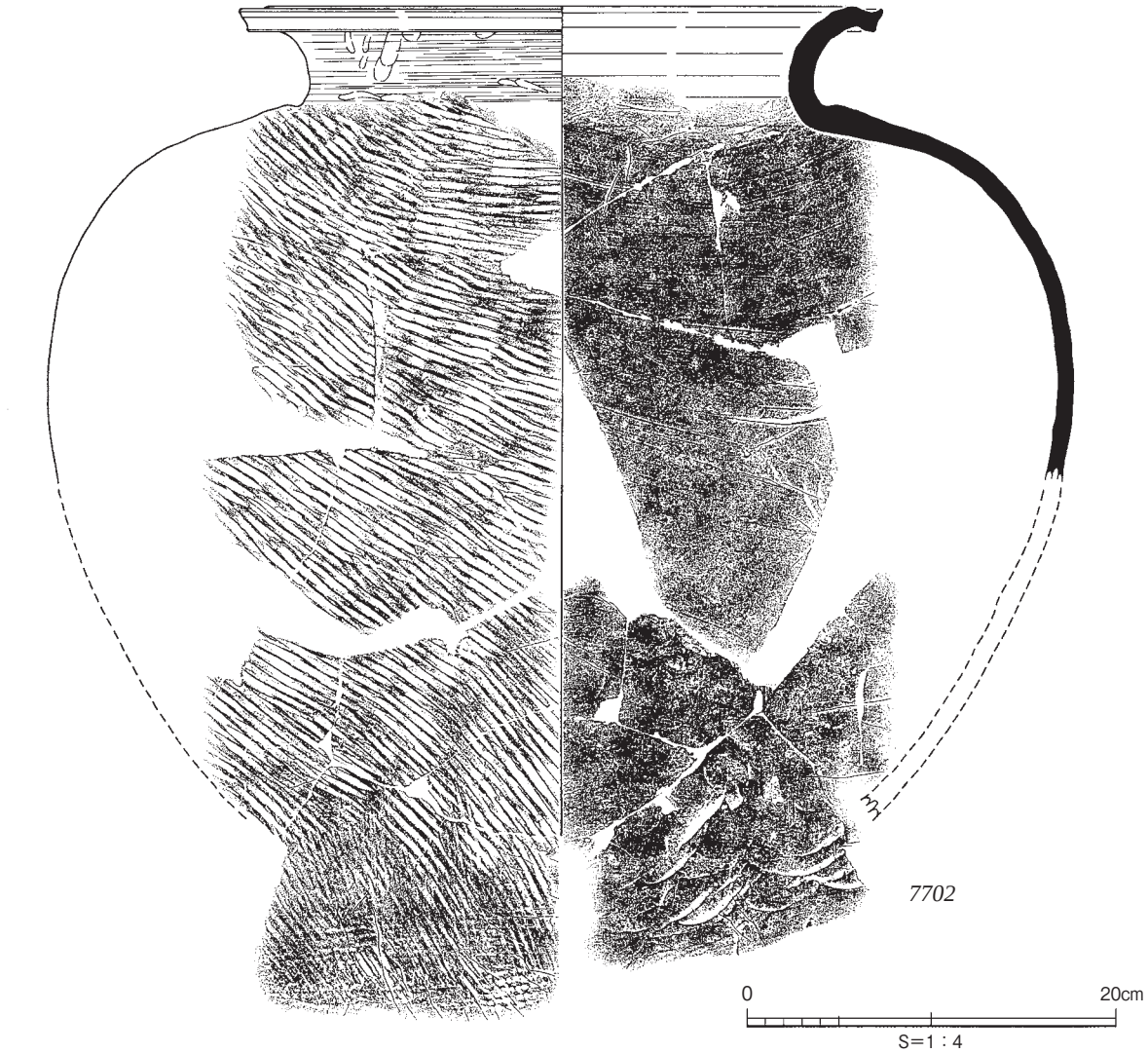
0 20cm

S=1：4

鴨谷 3 号窯

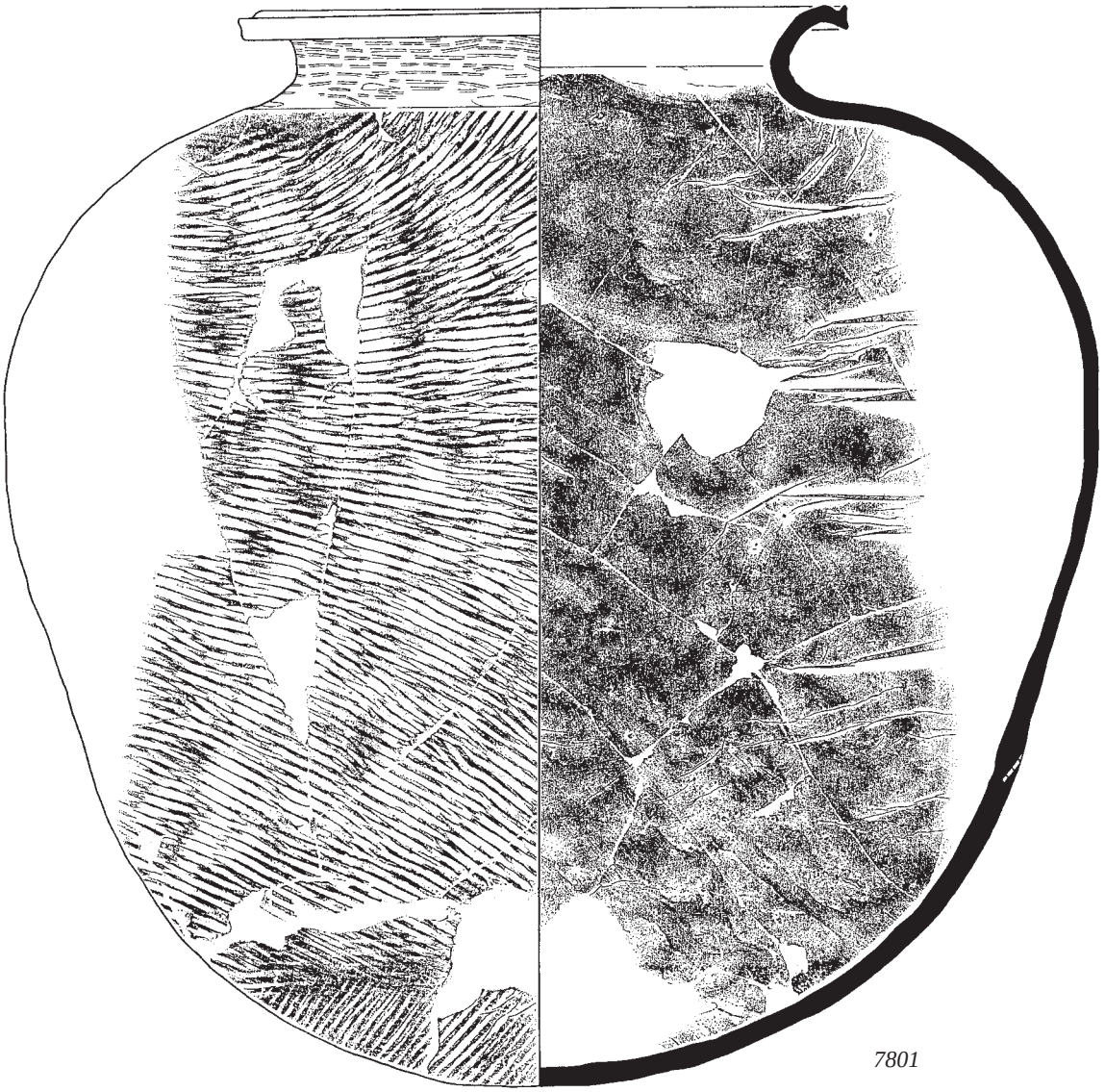
灰原出土第 2 次操業須恵器 10



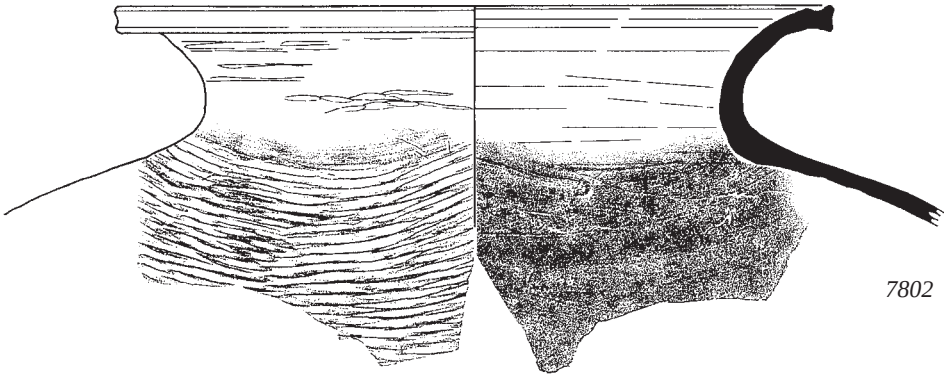


鴨谷 3 号窯

灰原出土第 2 次操業須恵器 11



7801



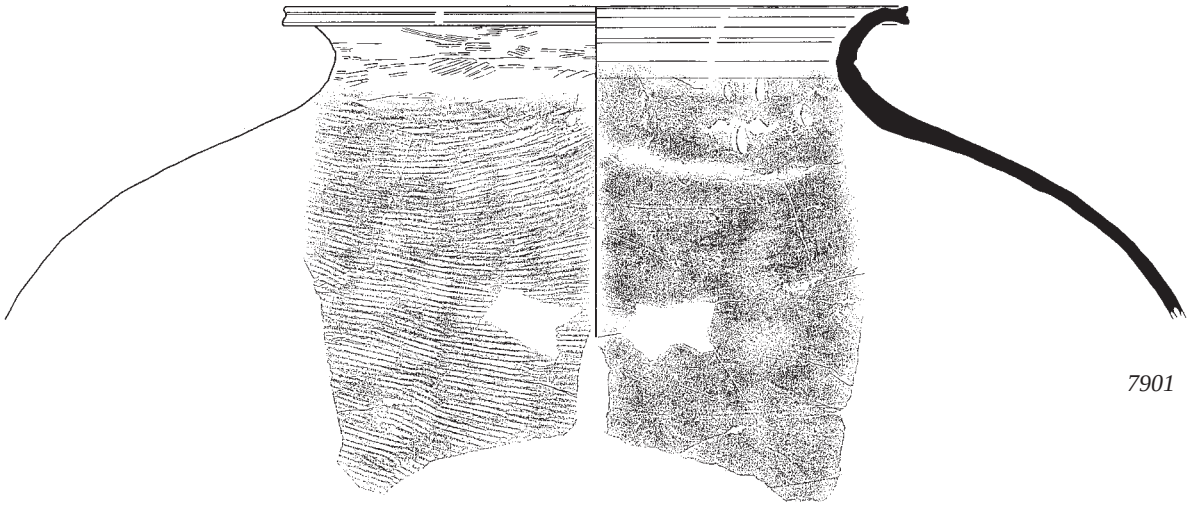
7802

0 20cm

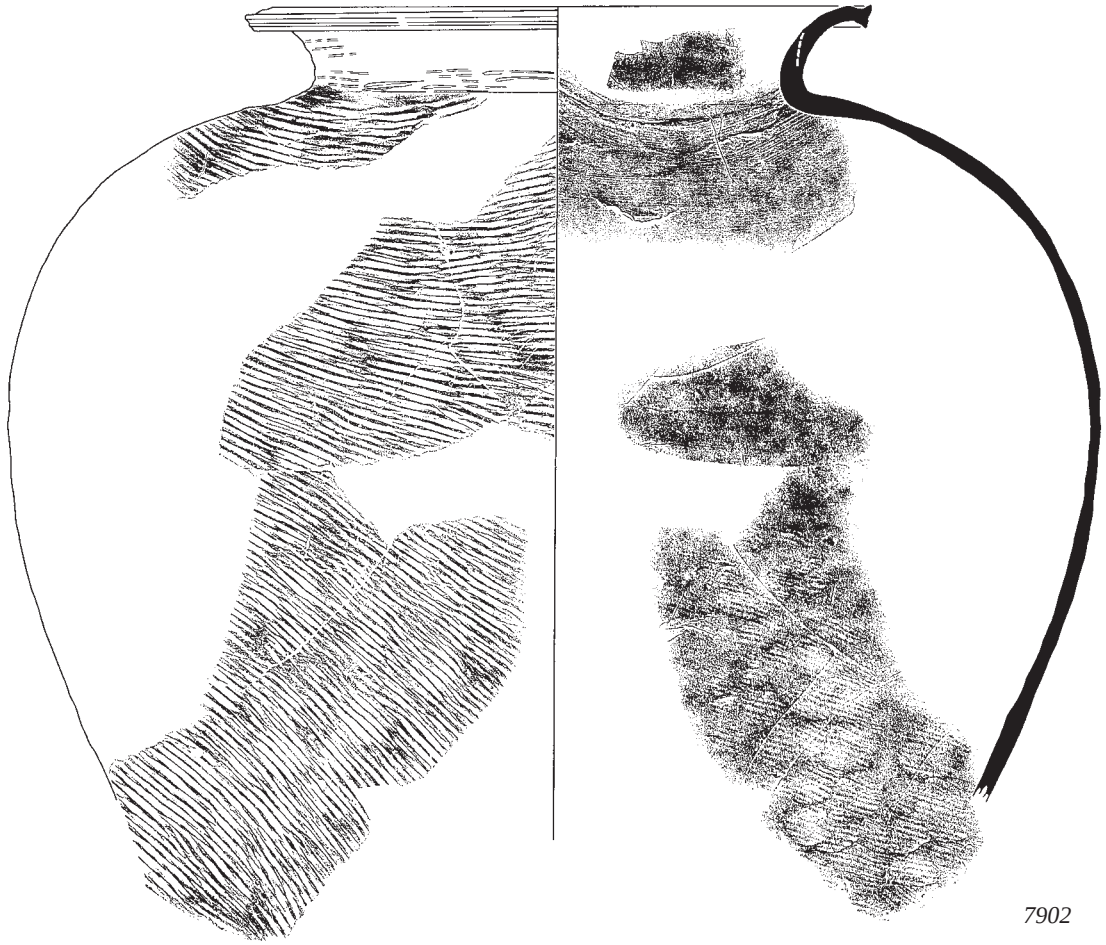
S=1：4

鴨谷 3 号窯

灰原出土第 2 次操業須恵器 12



7901



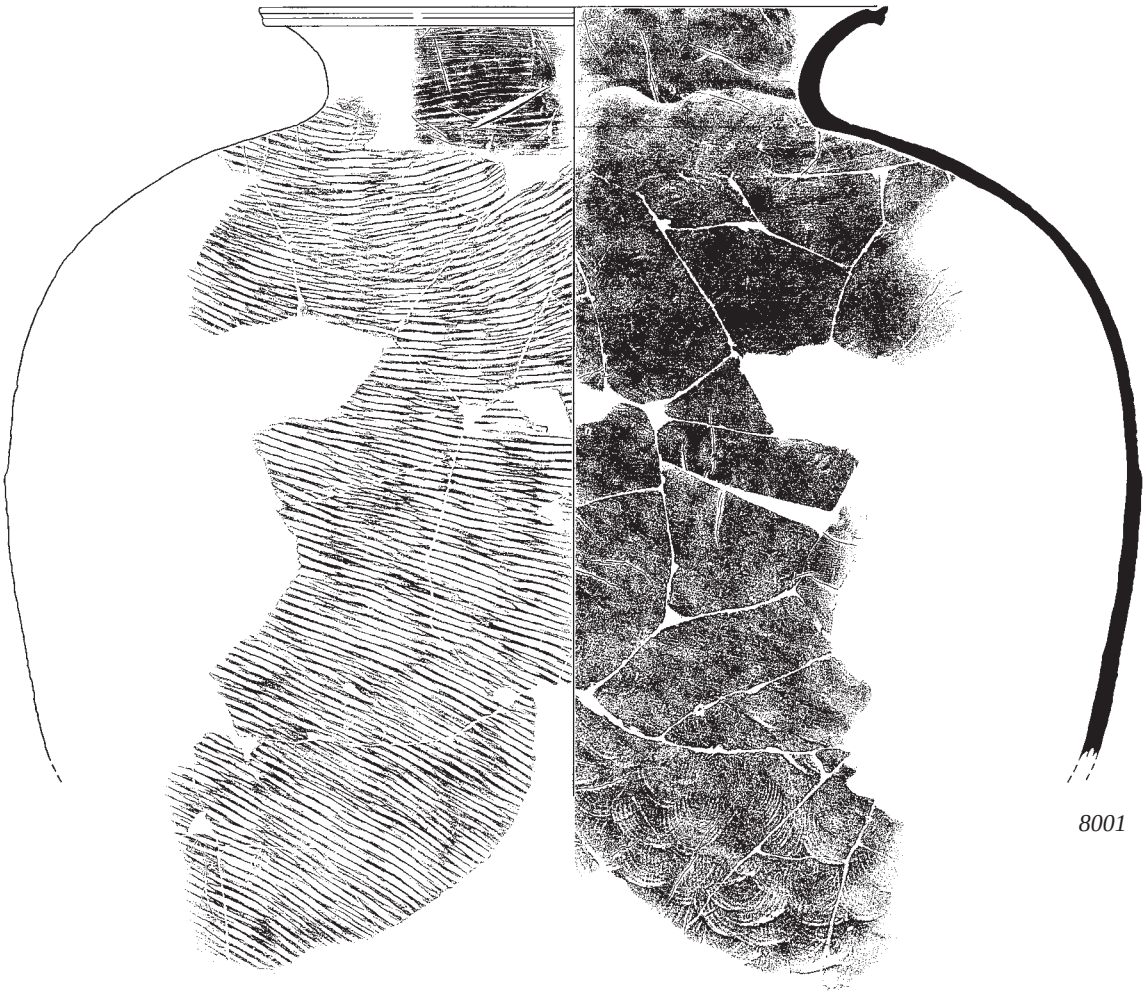
7902

0 20cm

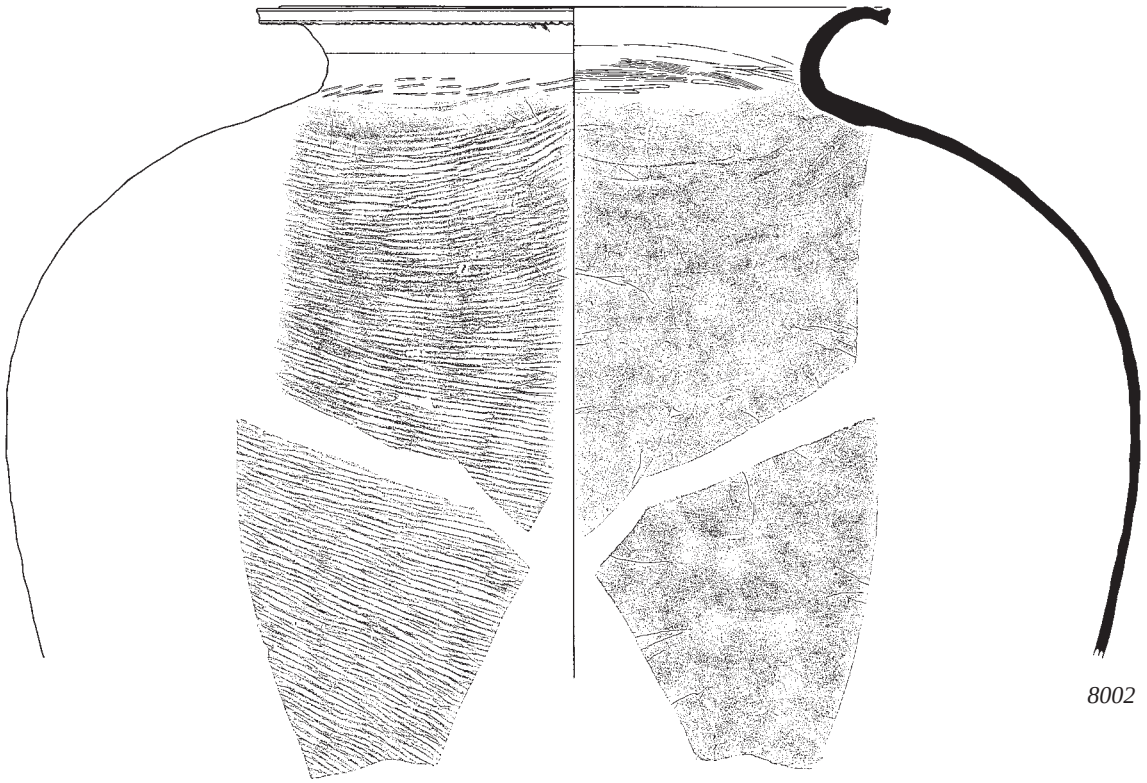
S=1：5

鴨谷 3 号窯

灰原出土第 2 次操業須恵器 13



8001



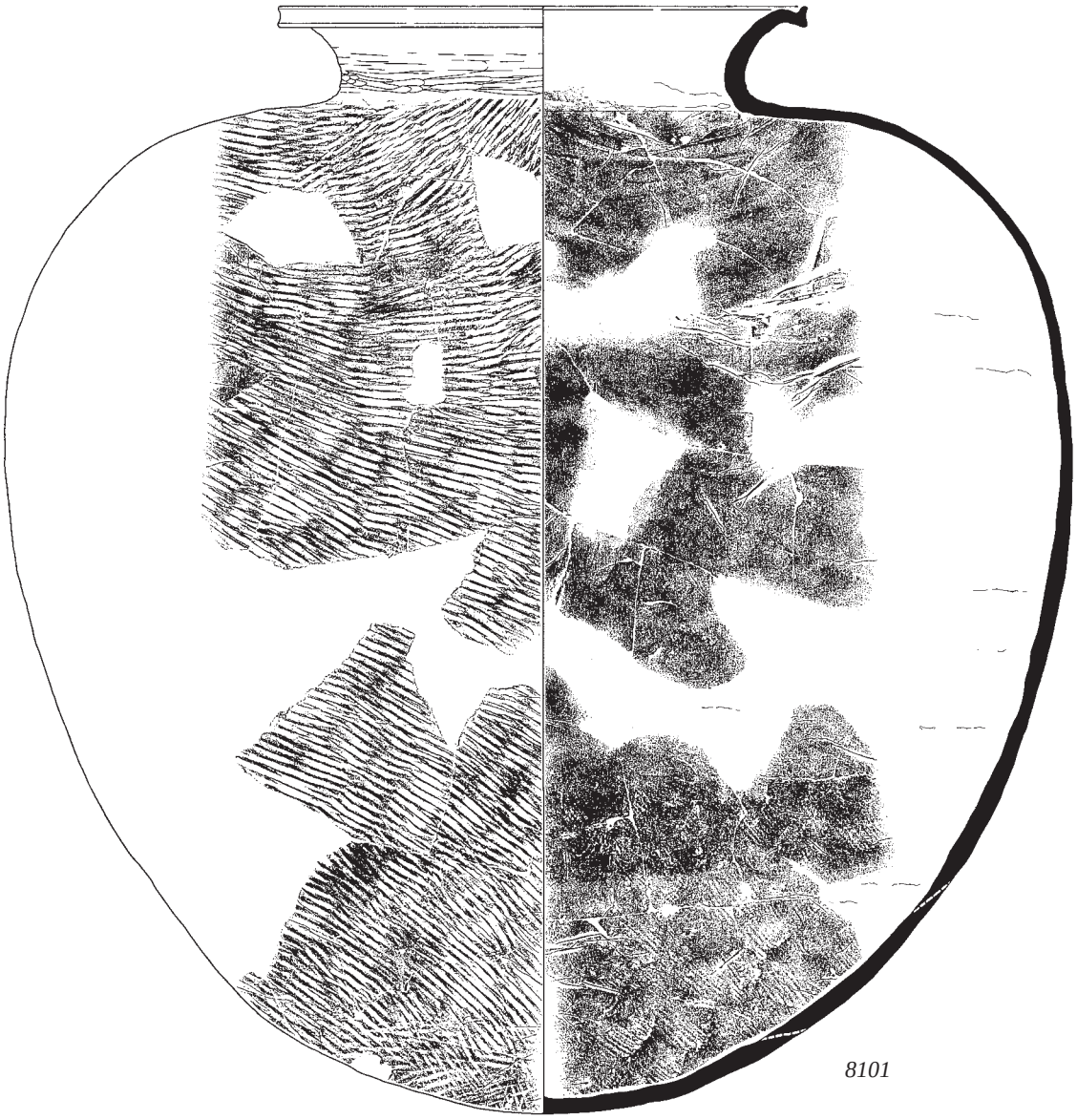
8002

0 20cm

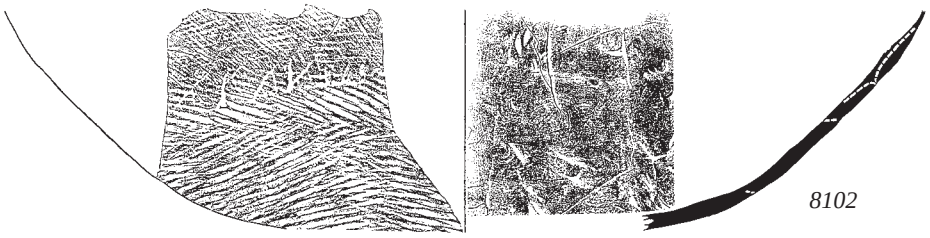
S=1：5

鴨谷 3 号窯

灰原出土第 2 次操業須恵器 14



8101



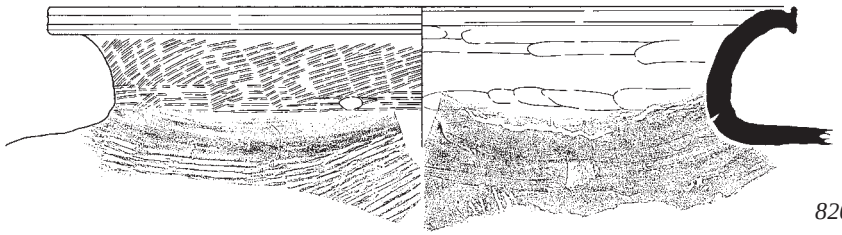
8102

0 20cm

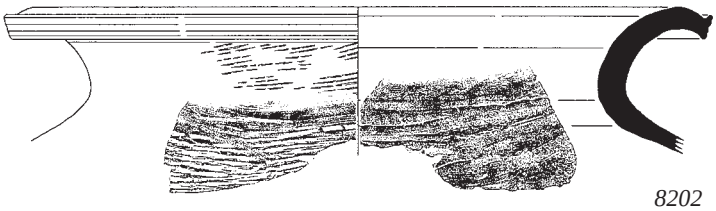
S=1 : 5

鴨谷 3 号窯

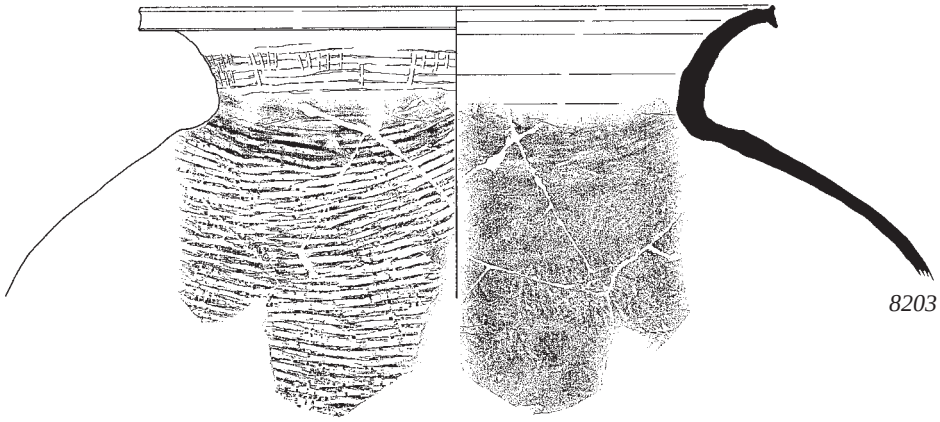
灰原出土第 2 次操業須恵器 15



8201



8202



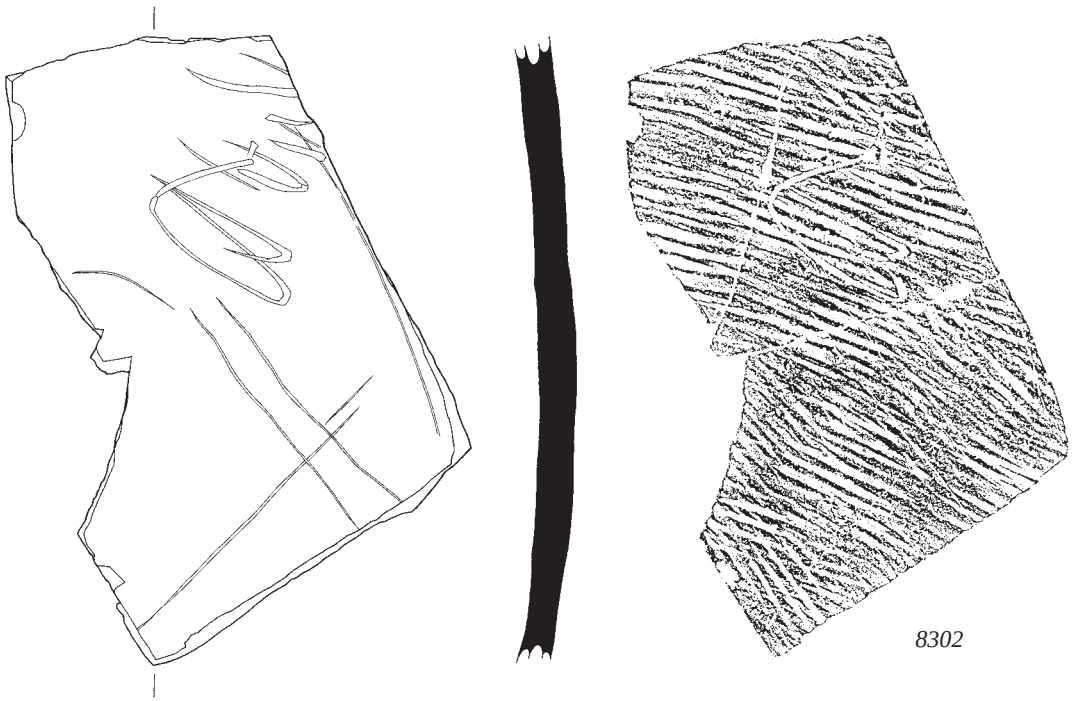
8203

0 20cm

S=1：5

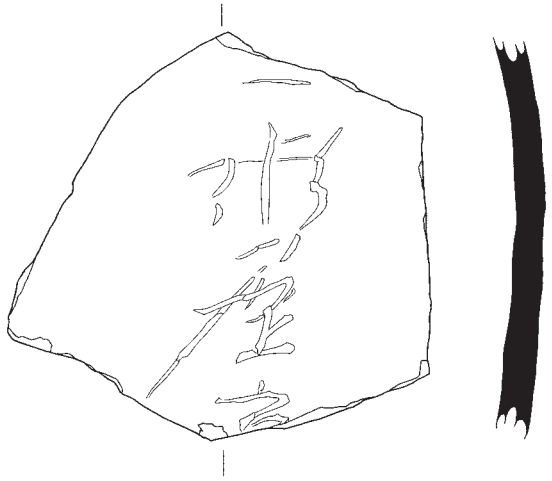
鴨谷 3 号窯

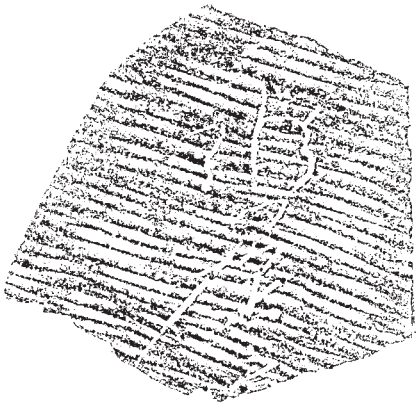
灰原出土第 2 次操業須恵器 16



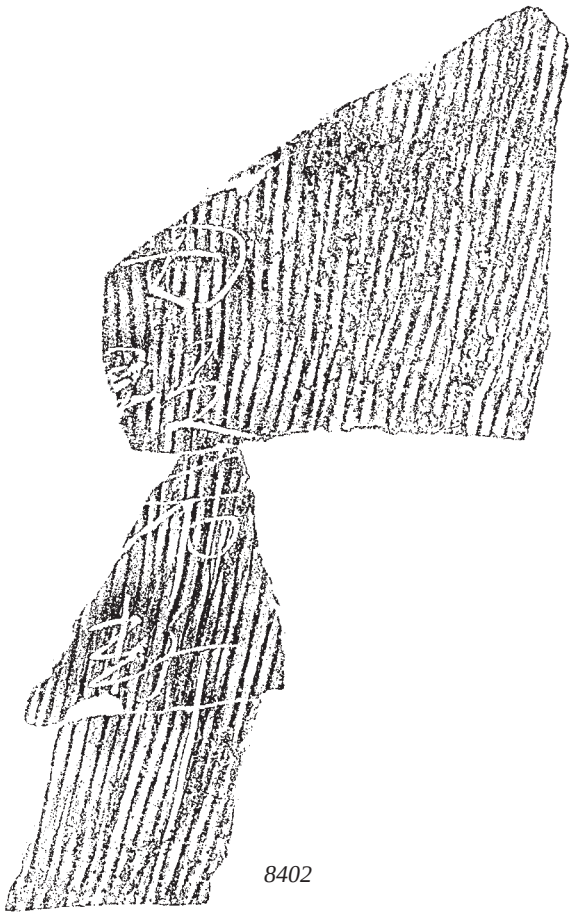
鴨谷 3 号窯

灰原出土第 2 次操業須恵器 17

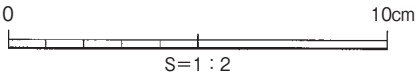




8401

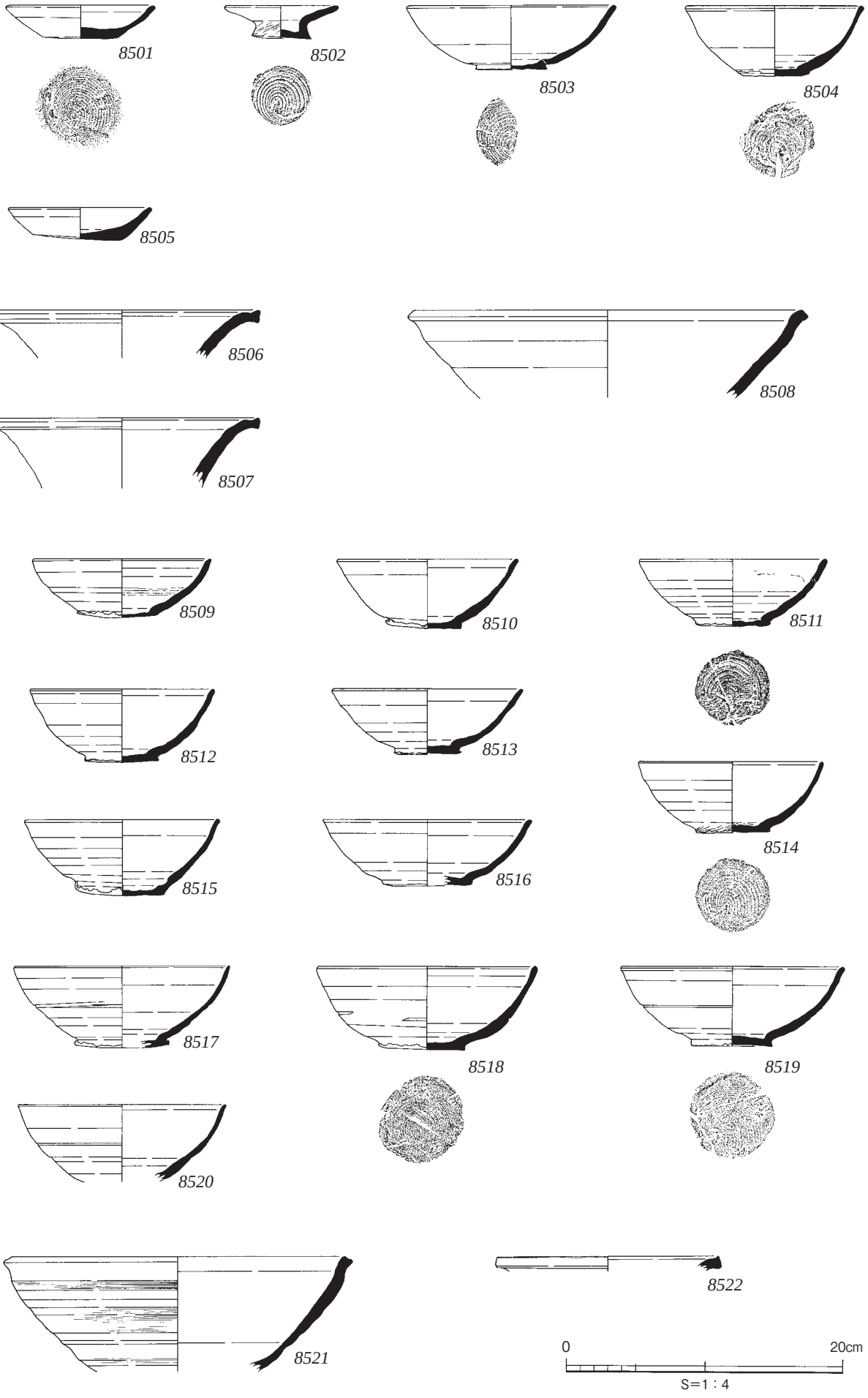


8402



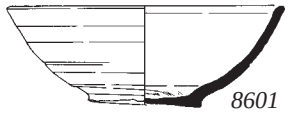
梟谷１号窯

窯体出土須恵器



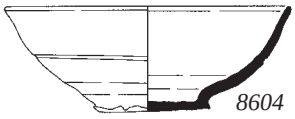
梟谷１号窯

灰原出土須恵器 1


8601

8602

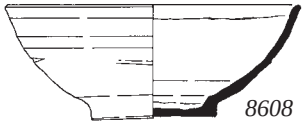
8603

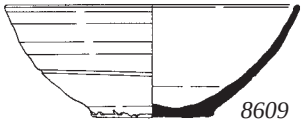

8604

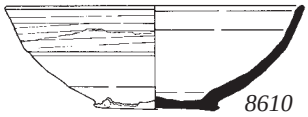
8605

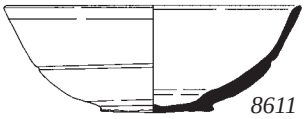
8606

8607


8608


8609


8610

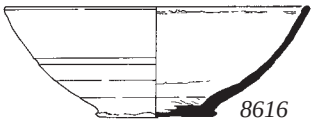

8611

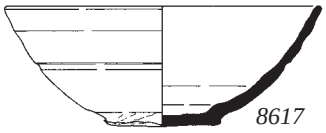
8612

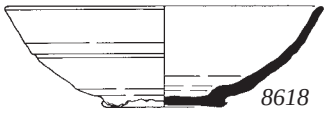
8613

8614

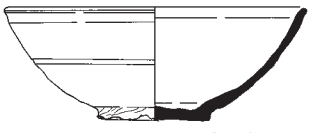
8615

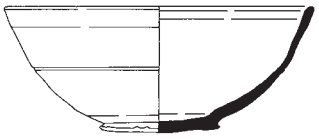

8616

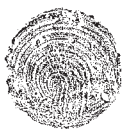

8617

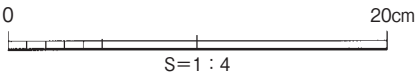

8618

8619


8620

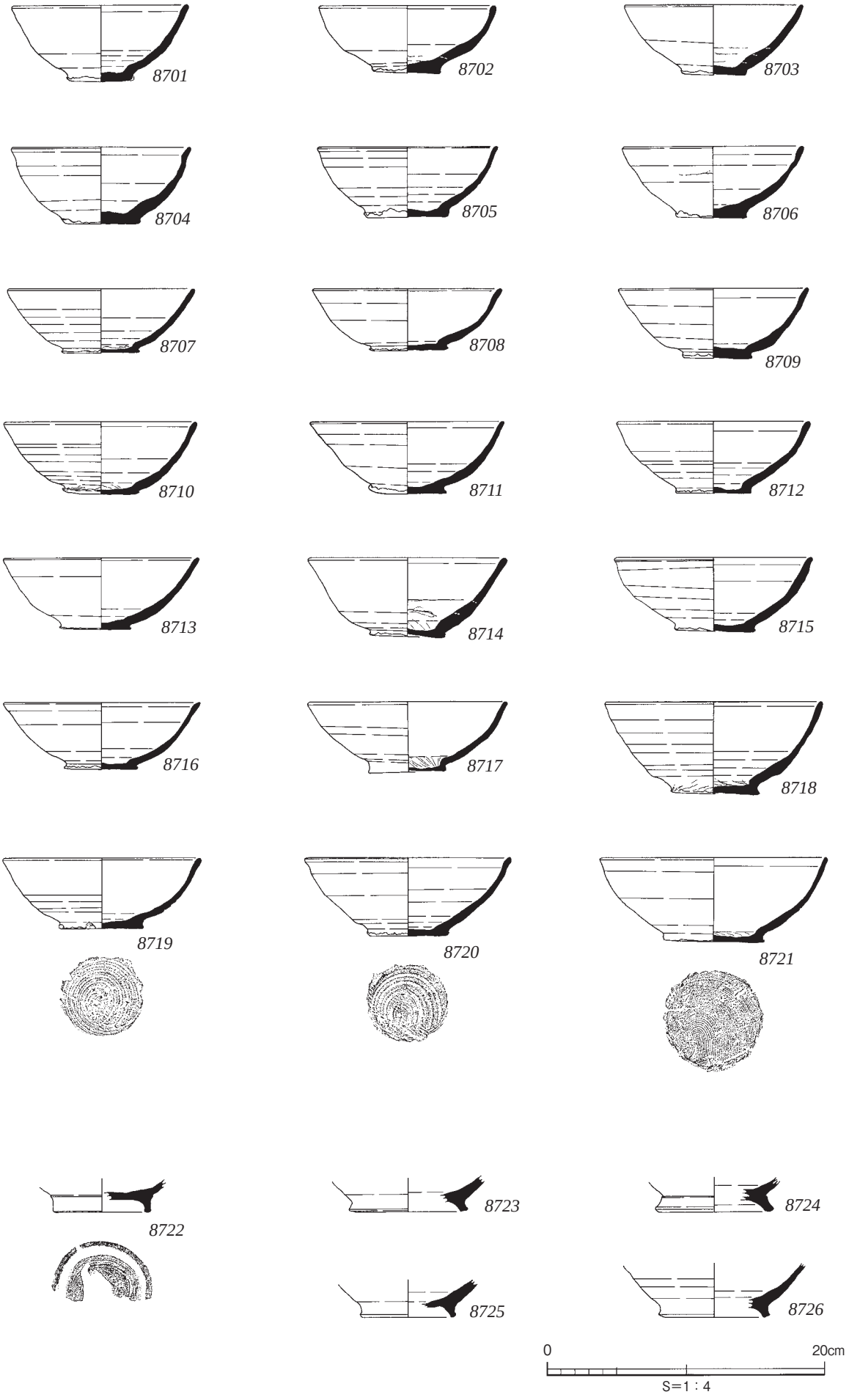

8621





梟谷１号窯

灰原出土須恵器 2

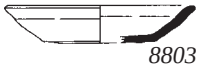


梟谷１号窯

灰原出土須恵器 3

8801

8802


8803

8804

8805

8806

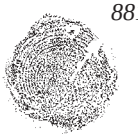
8807

8808

8809

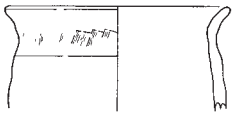
8810

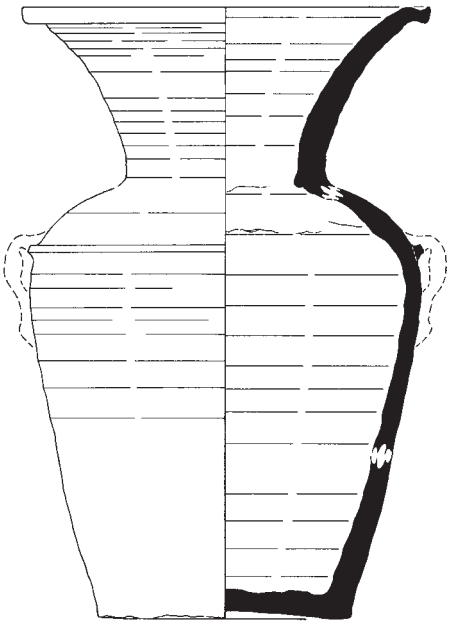
8811

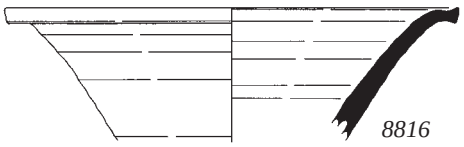


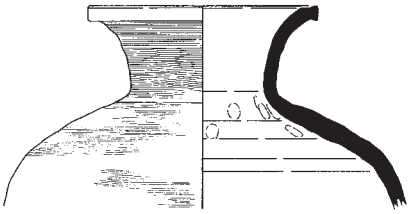
8812

8813

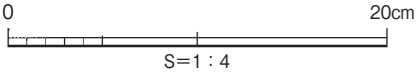

8814


8815


8816


8817

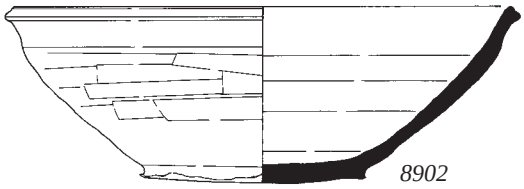
8818

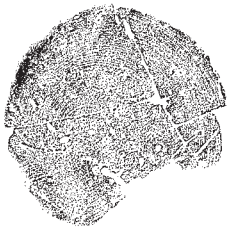


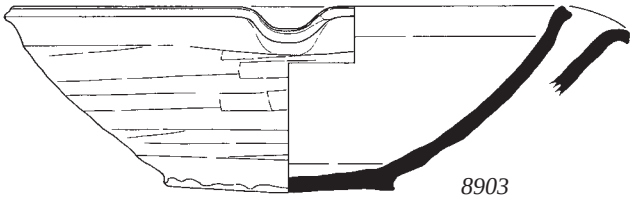
梟谷１号窯

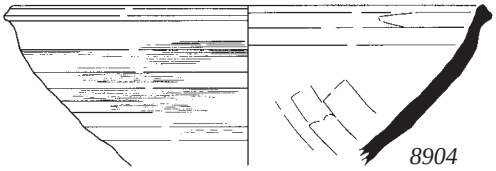
灰原出土須恵器 4

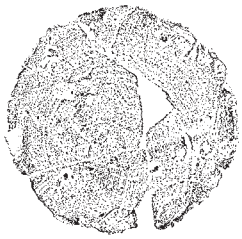
8901

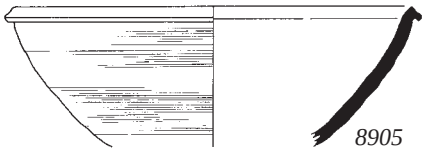

8902

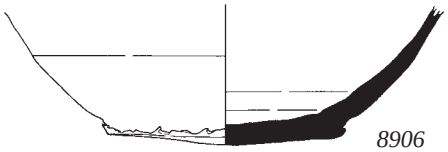


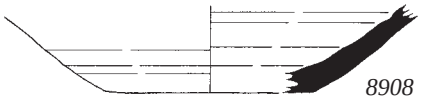

8903

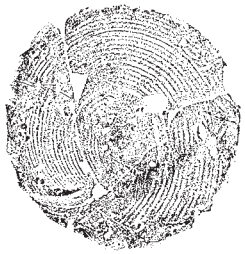

8904

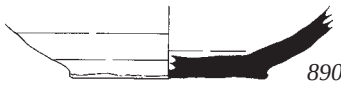



8905

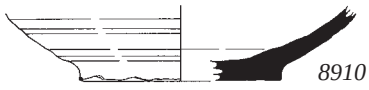

8906

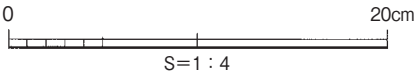

8908




8909

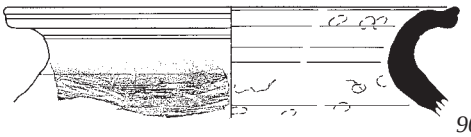
8907


8910



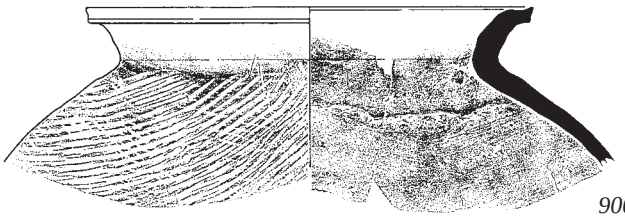
梟谷１号窯

灰原出土須恵器 5

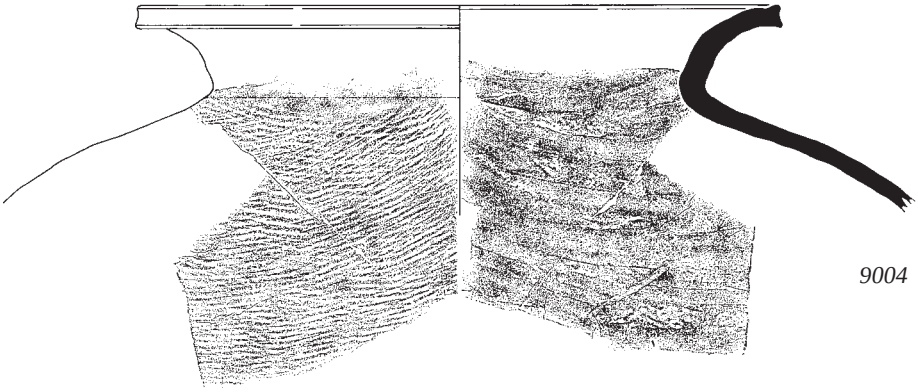


9001

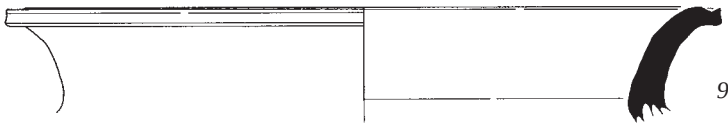
9002



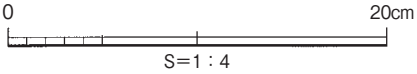
9003



9004

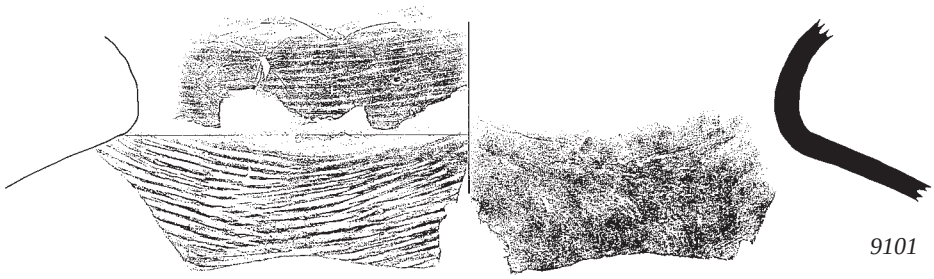


9005

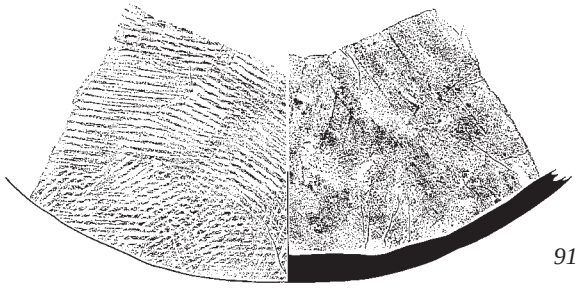


梟谷１号窯

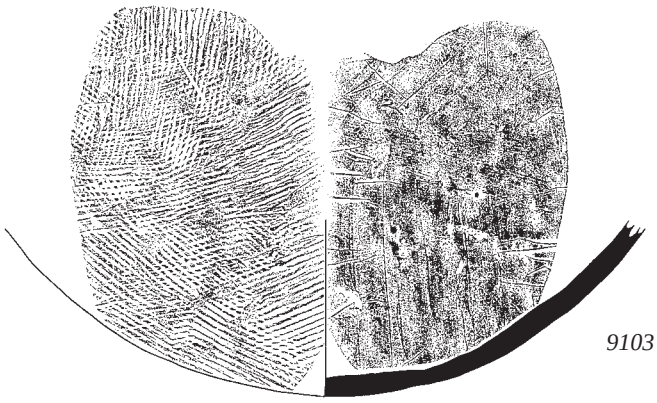
灰原出土須恵器 6



9101



9102



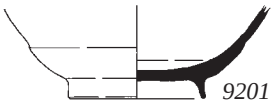
9103

0 20cm

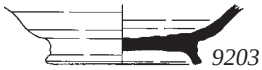
S=1：4

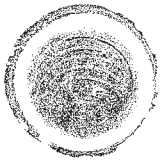
梟谷１号窯

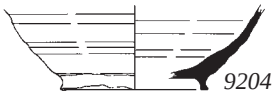
谷堆積土層出土須恵器 1

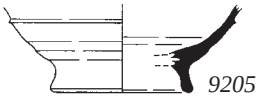

9201

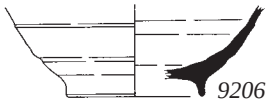
9202

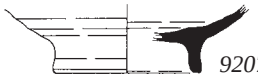

9203

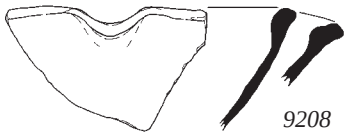


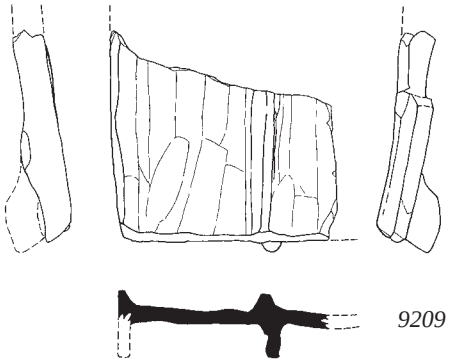

9204


9205

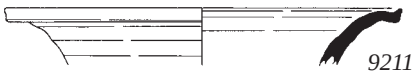

9206

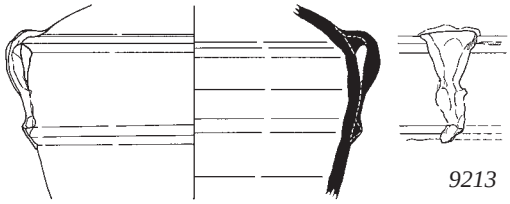

9207

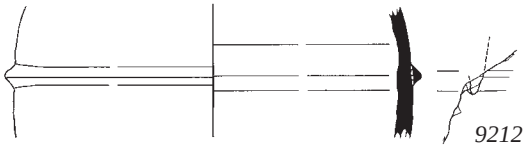

9208

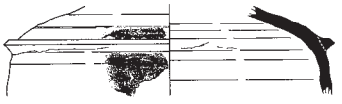

9209

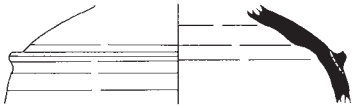
9210

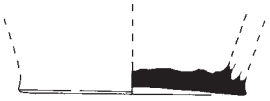

9211

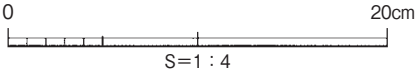

9213


9212


9214

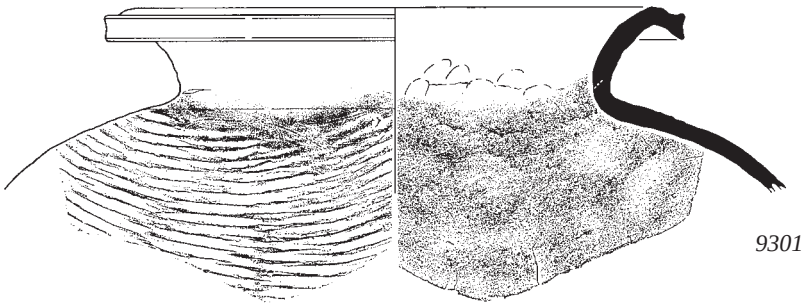

9215


9216

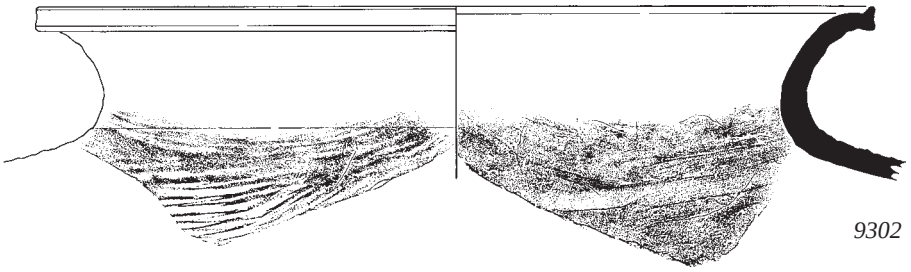


臭谷１号窯

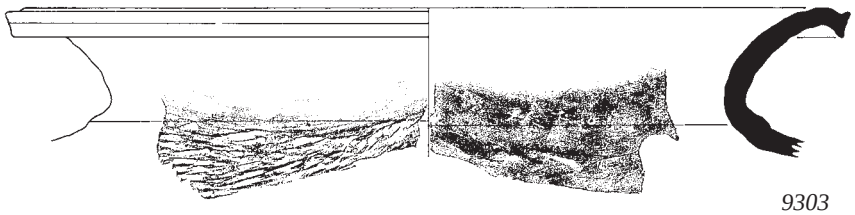
谷堆積土層出土須恵器 2



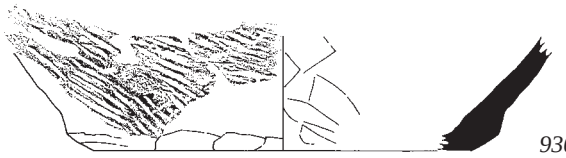
9301



9302



9303



9304

0 20cm

S=1：4

梟谷１号窯

窯体出土軒瓦

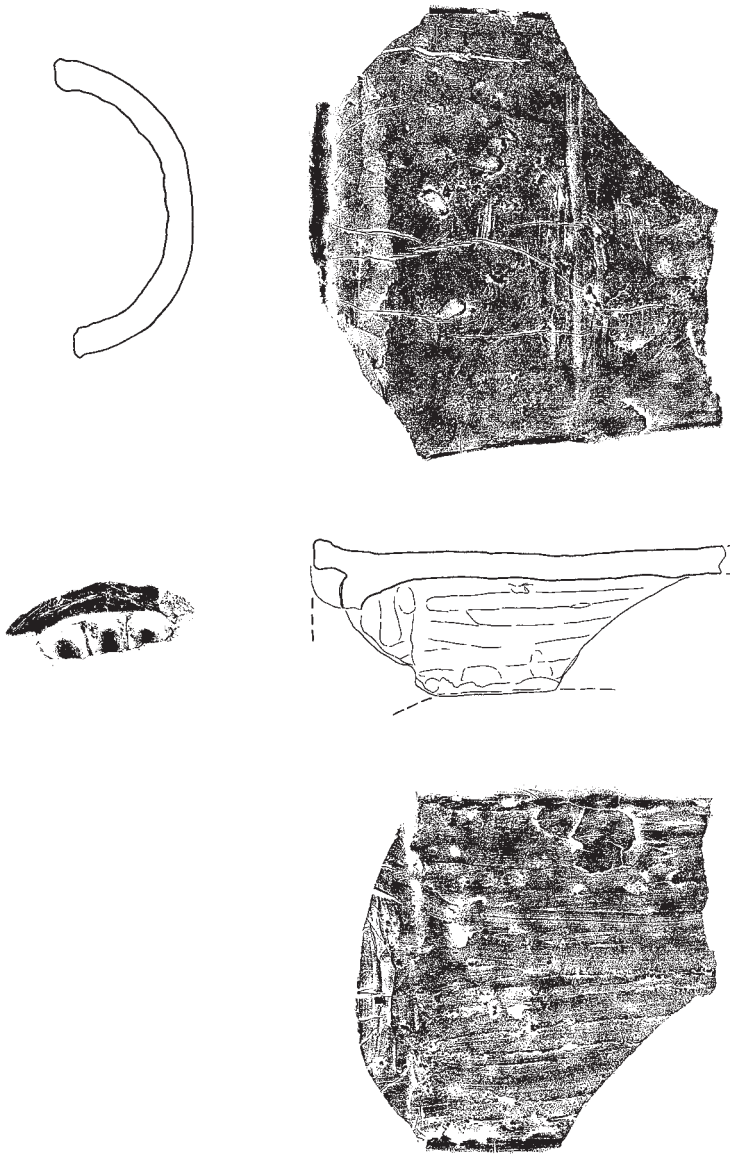
9401

0　20cm

S=1：4

梟谷１号窯

窯体・灰原出土軒瓦



9501

9503

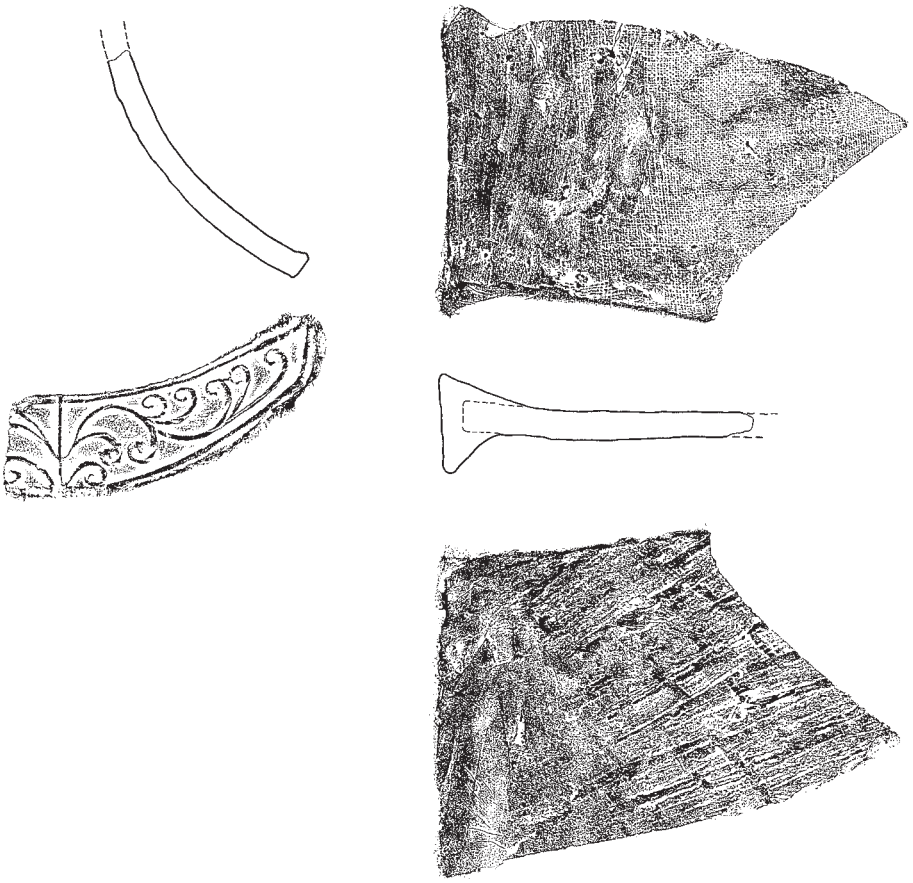
9502

0　20cm

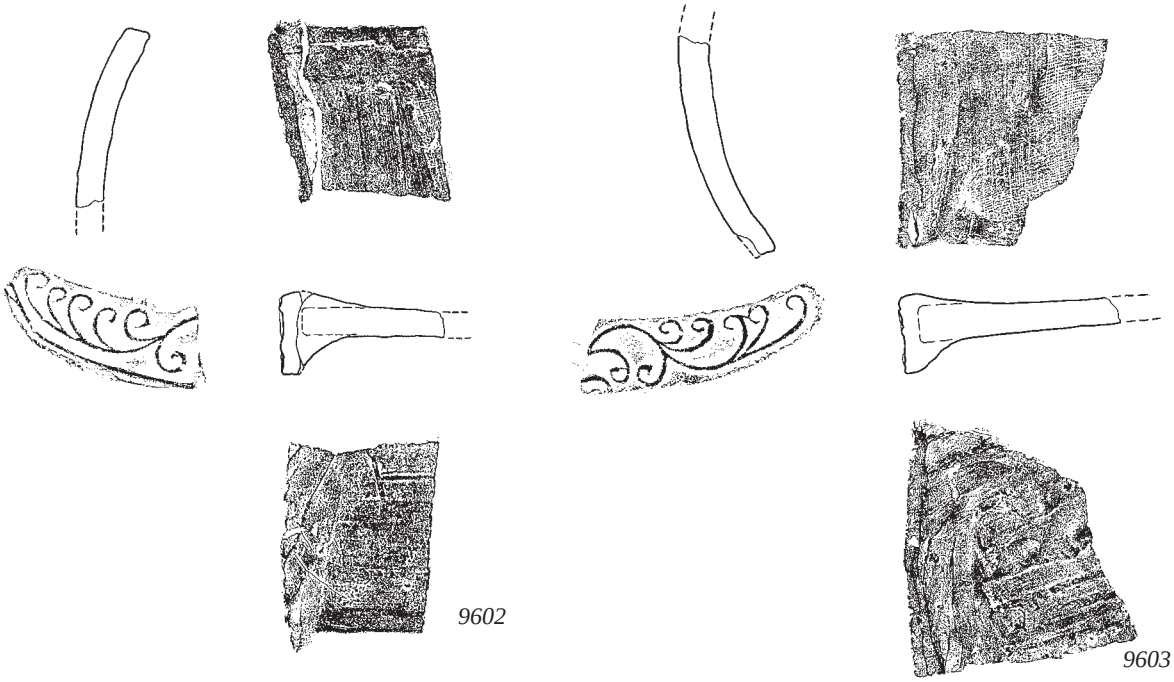
S=1：4

梟谷１号窯

灰原出土軒瓦



9601



9602

9603

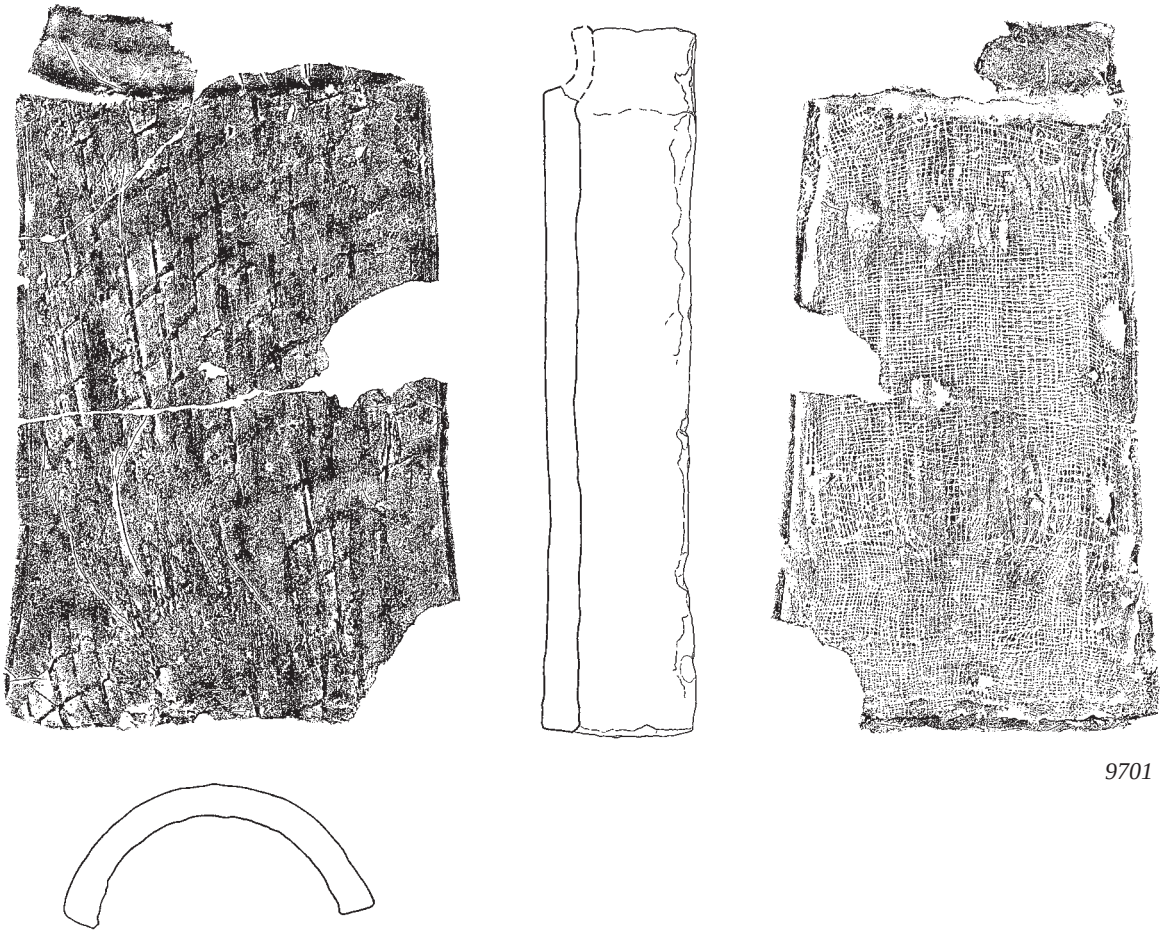
9604

0 20cm

S=1：4

梟谷１号窯

窯体出土丸瓦 1

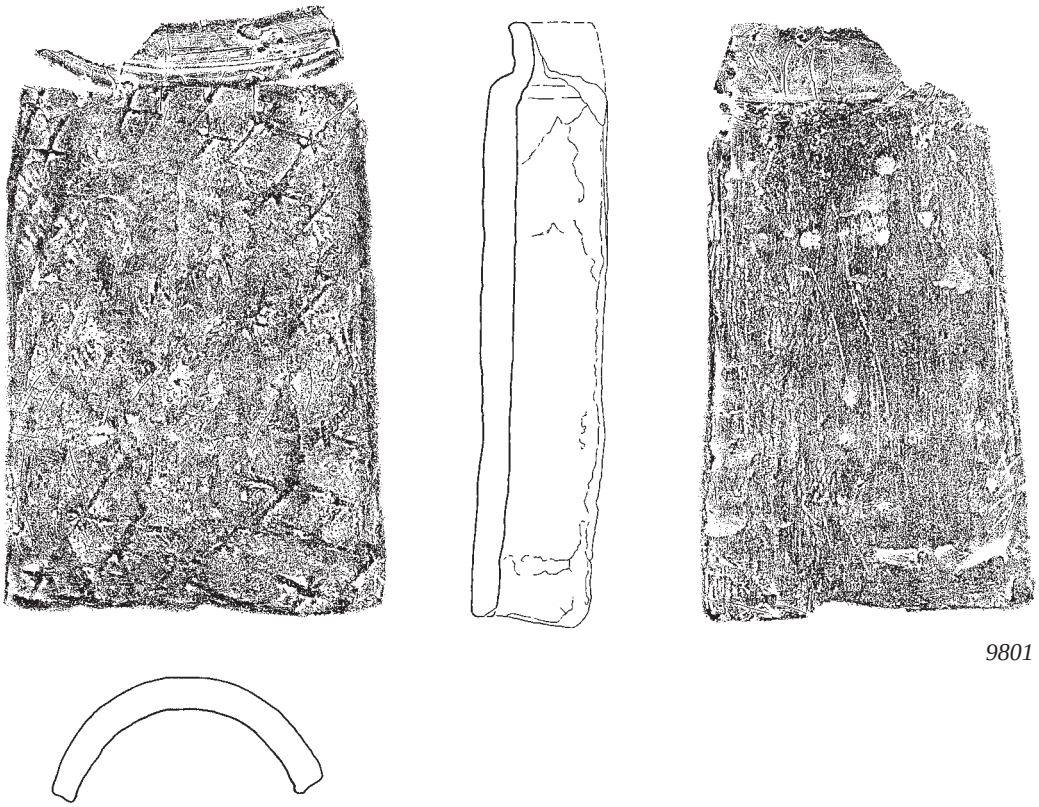


9701

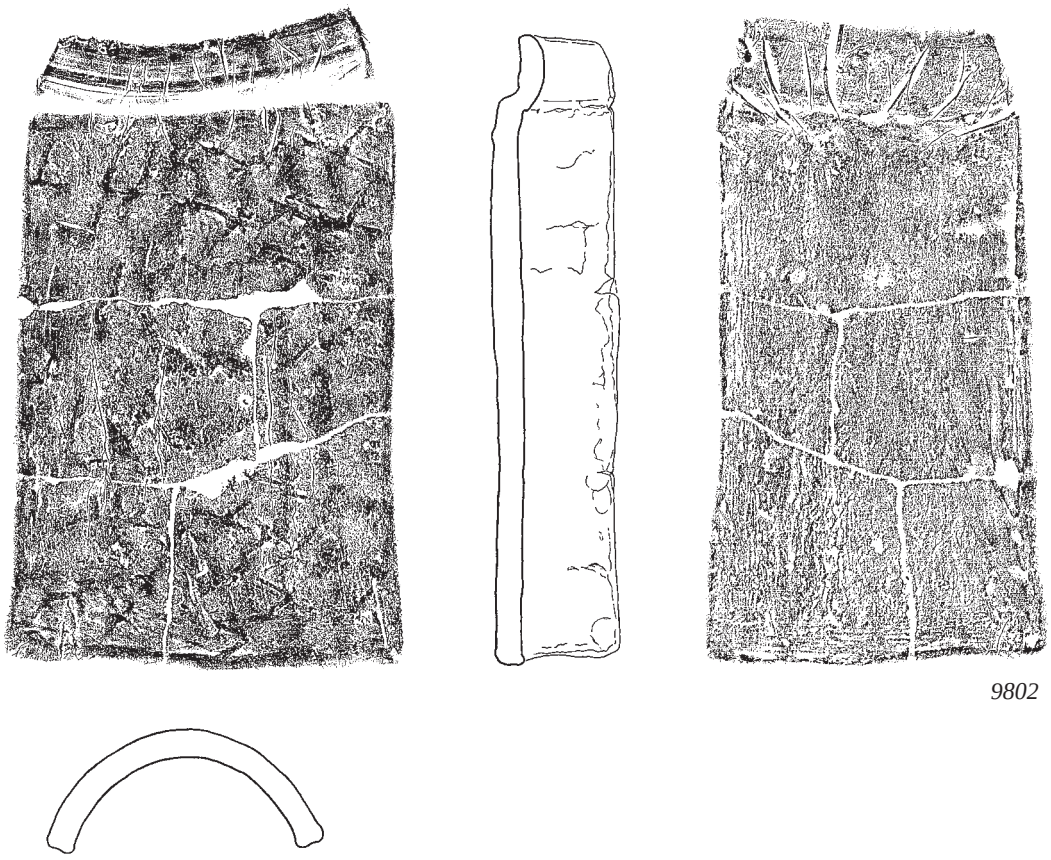
9702

梟谷１号窯

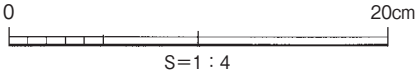
窯体出土丸瓦 2



9801

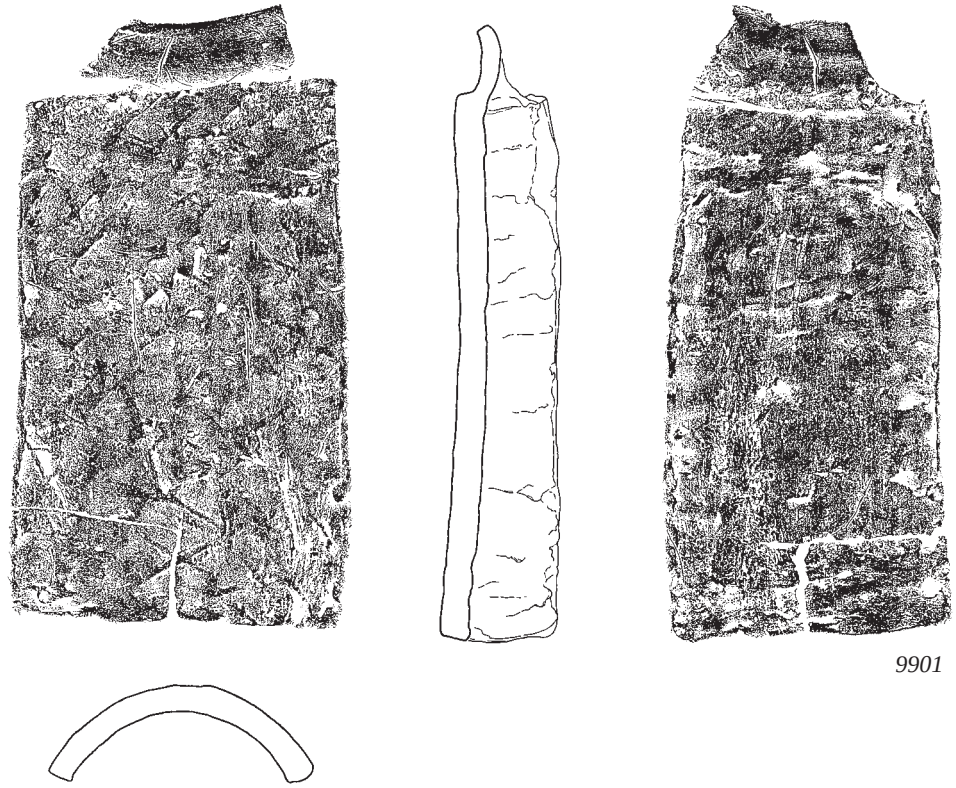


9802

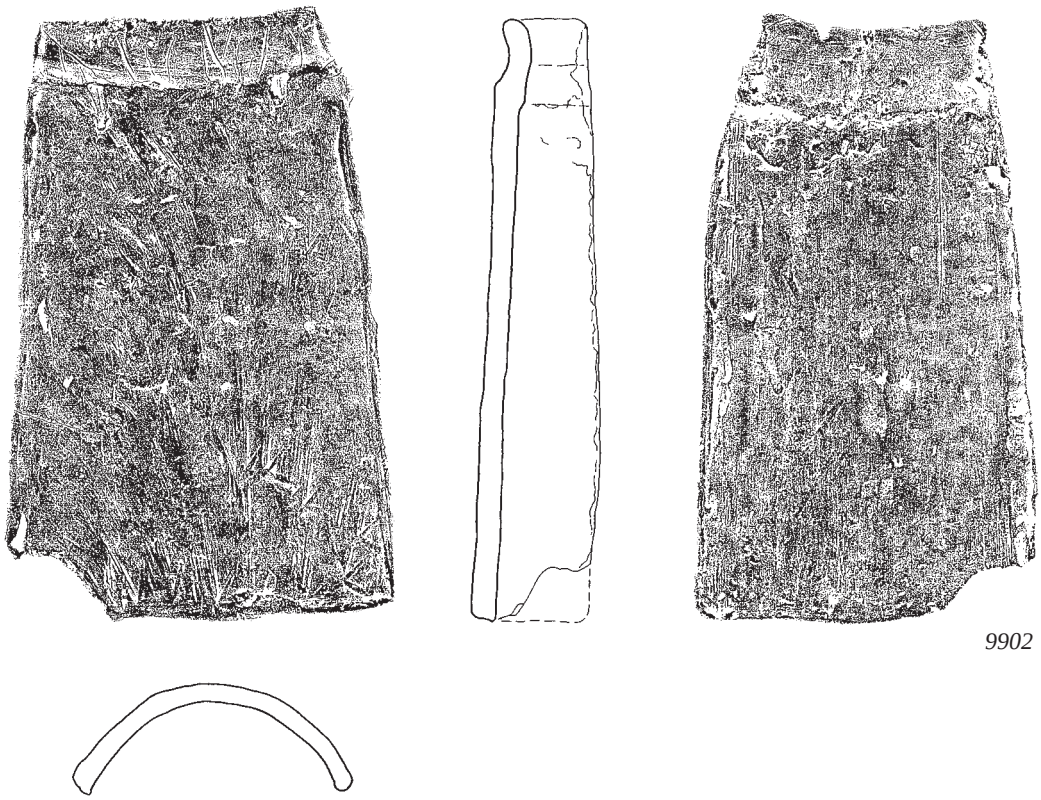


梟谷１号窯

窯体出土丸瓦 3



9901



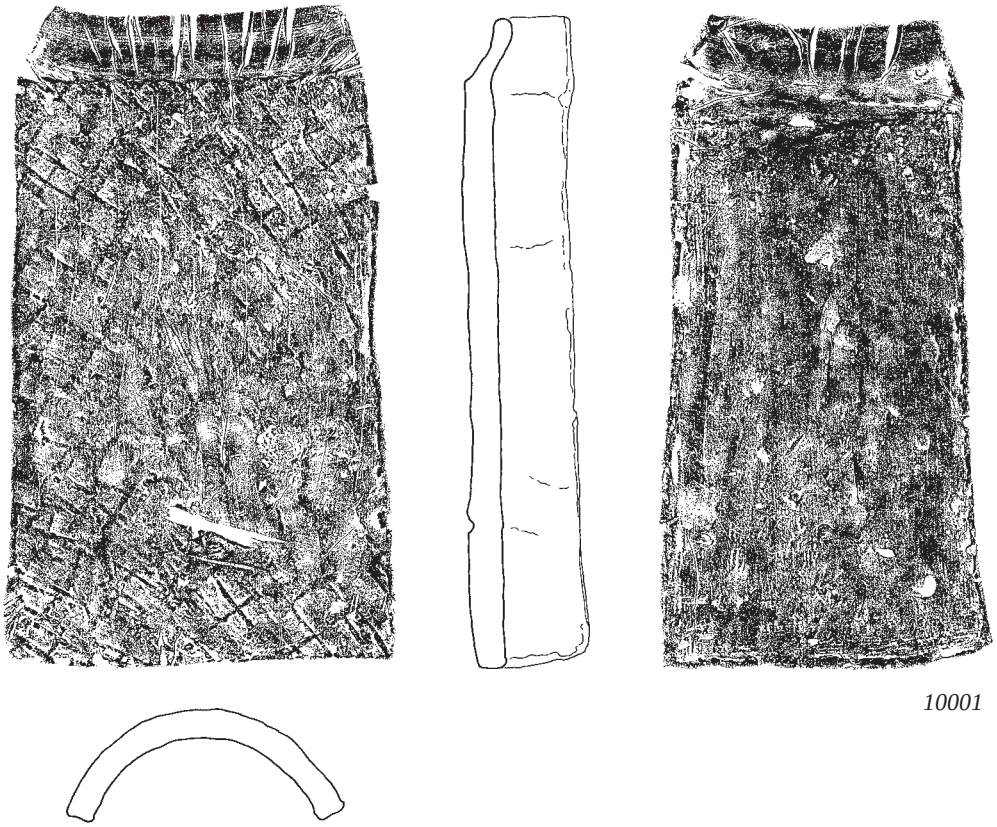
9902

0 20cm

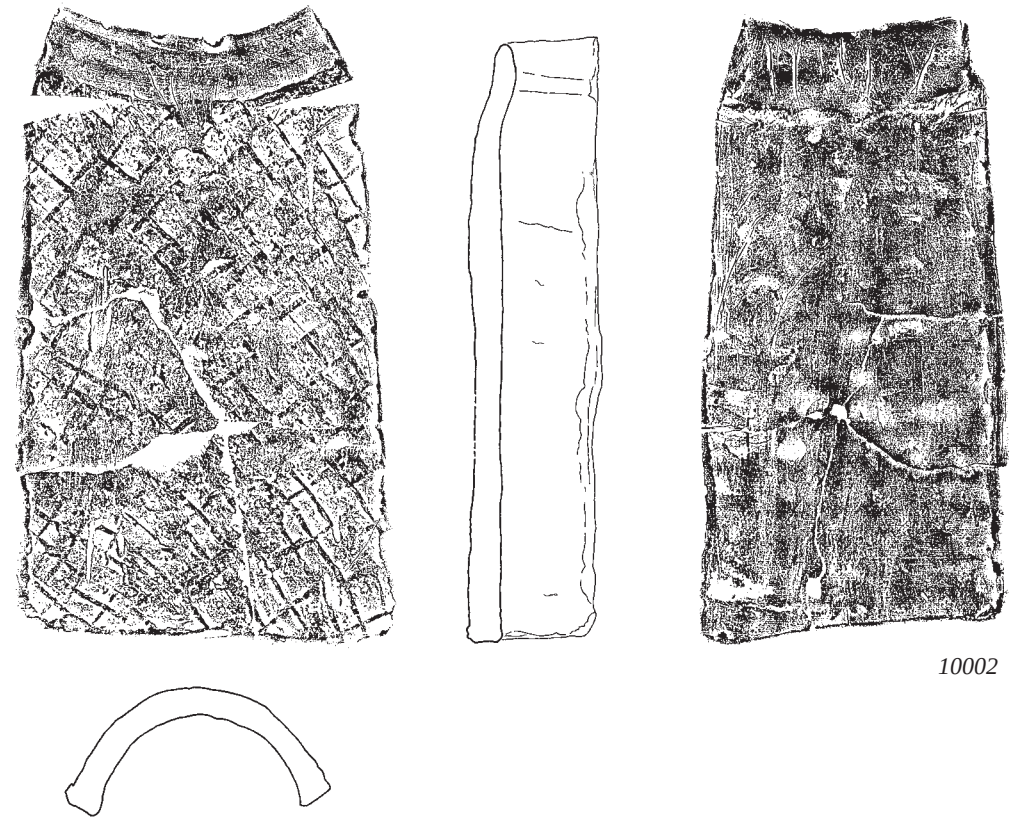
S=1：4

梟谷１号窯

窯体出土丸瓦 4



10001



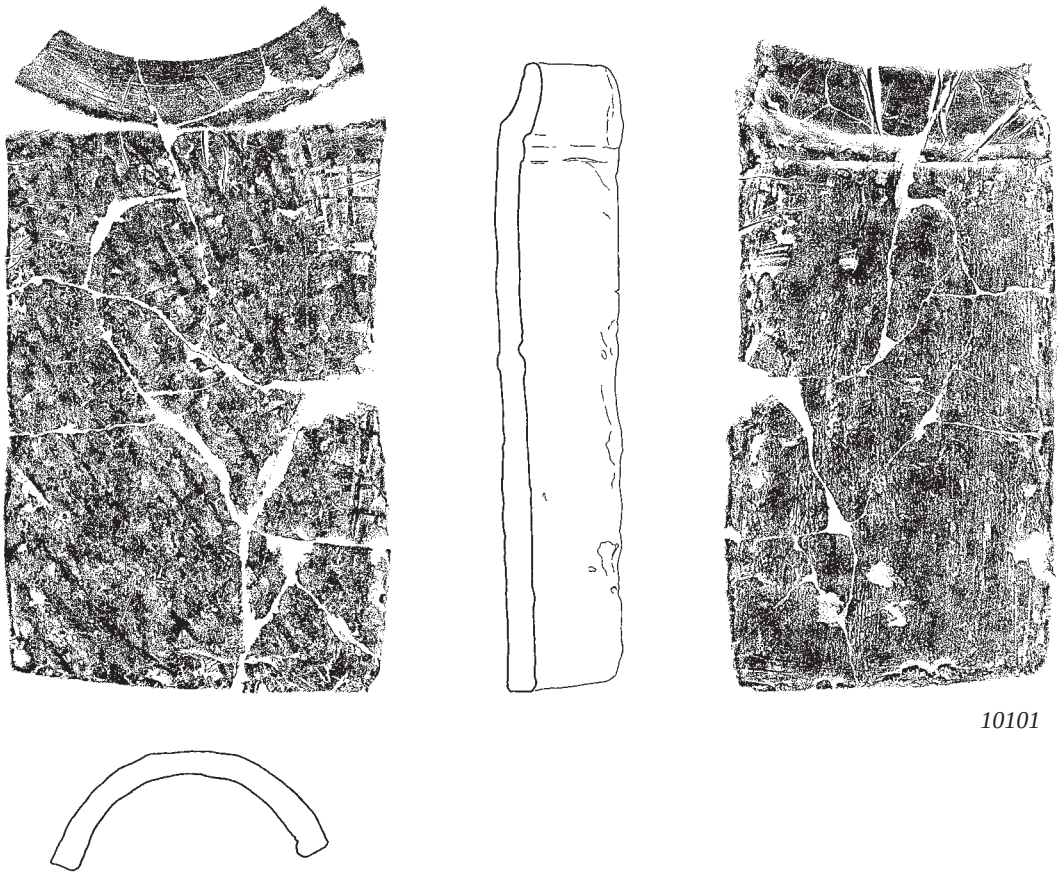
10002

0 20cm

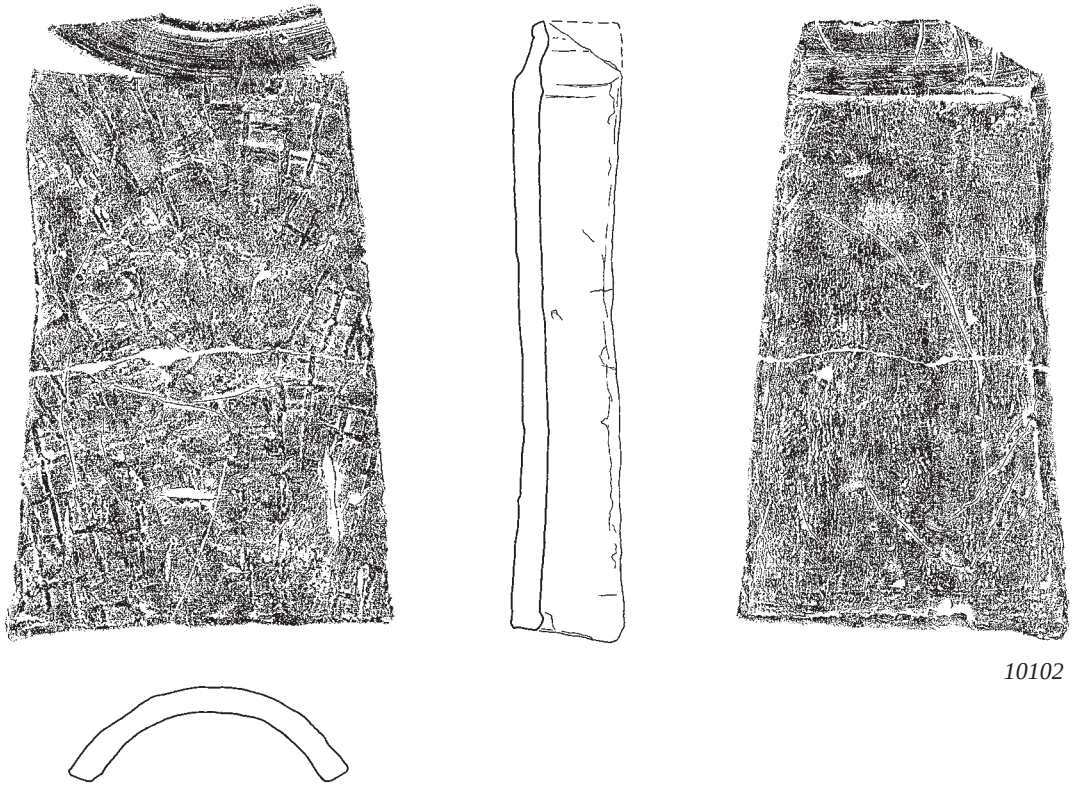
S=1：4

梟谷１号窯

窯体出土丸瓦 5



10101

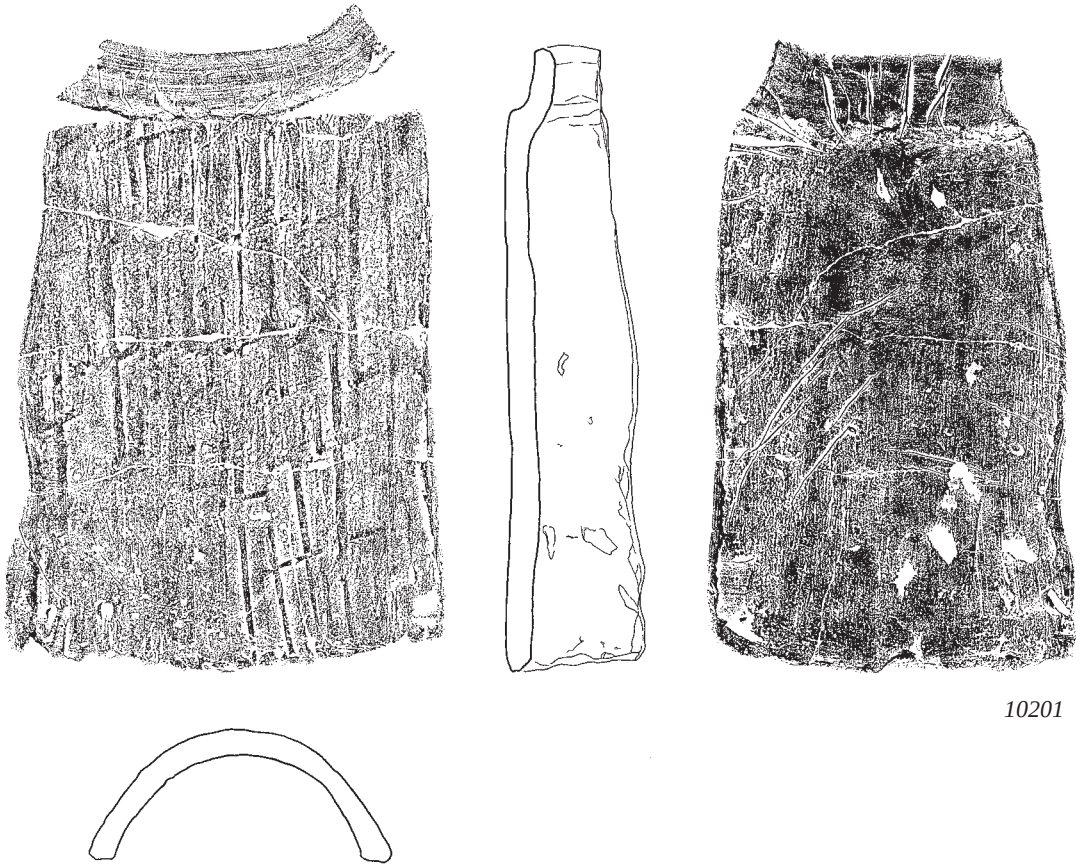


10102

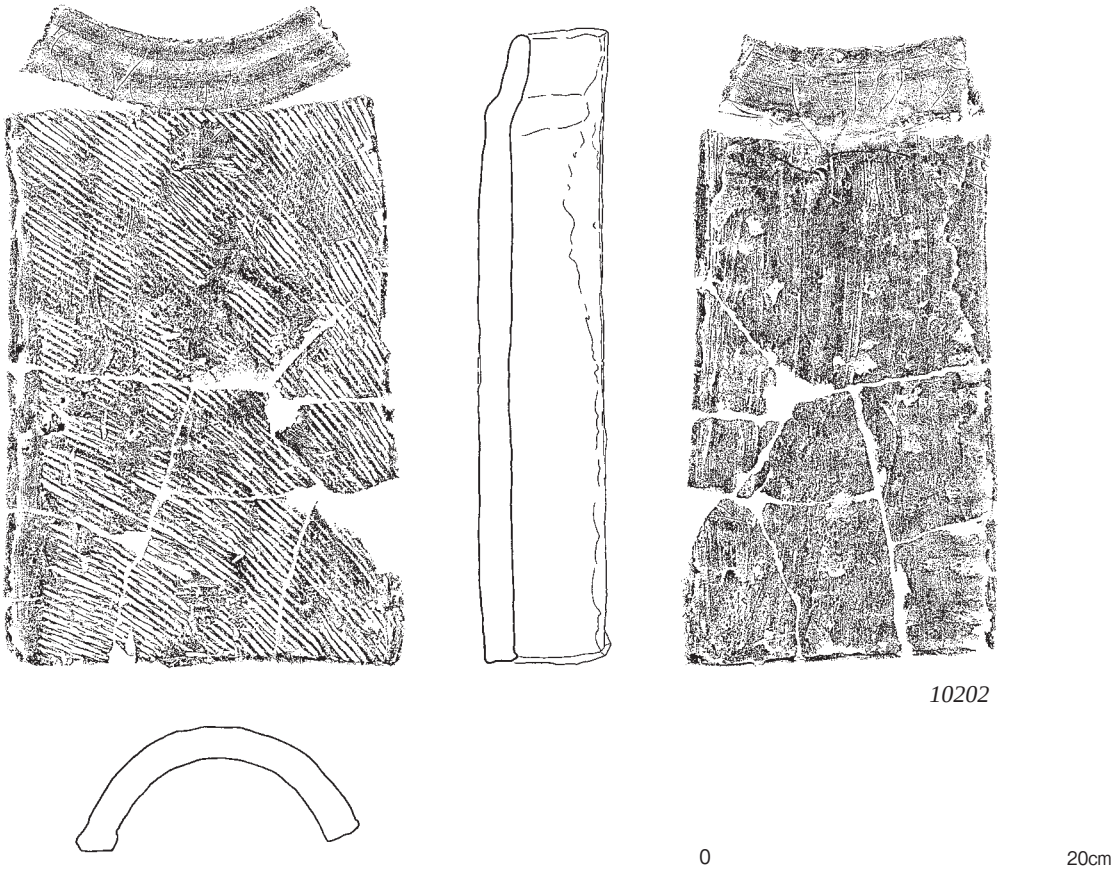
0 20cm
S=1：4

梟谷１号窯

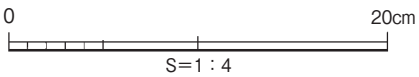
窯体出土丸瓦 6



10201

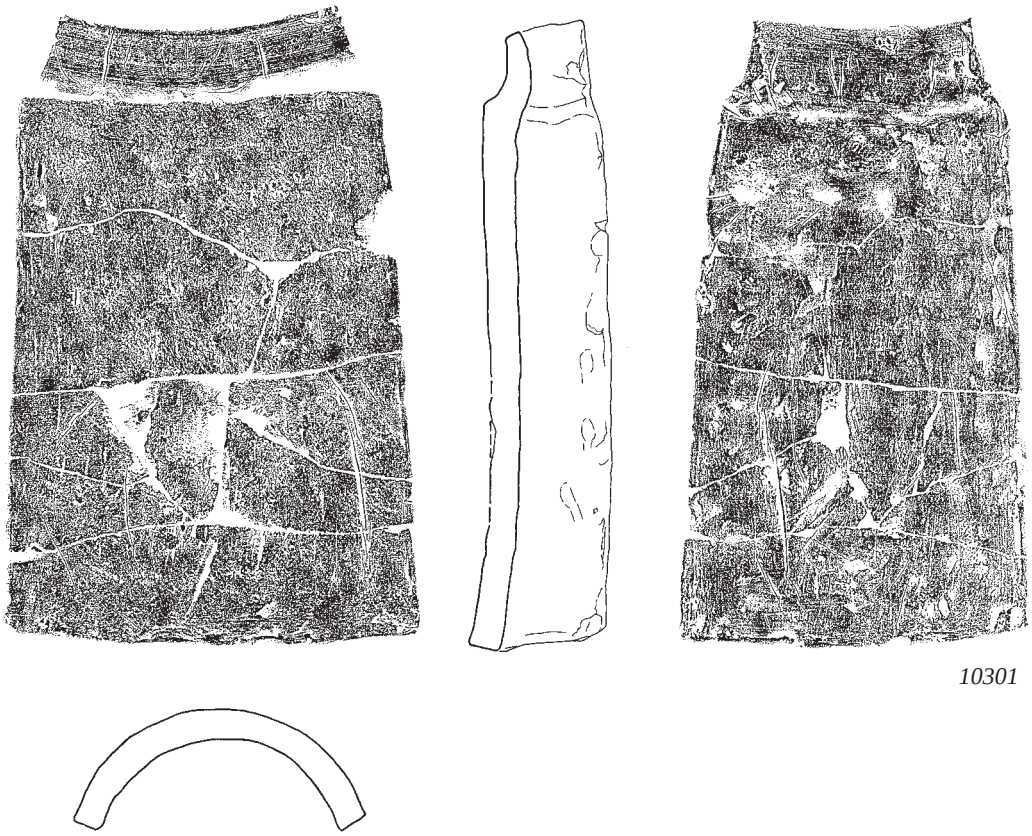


10202

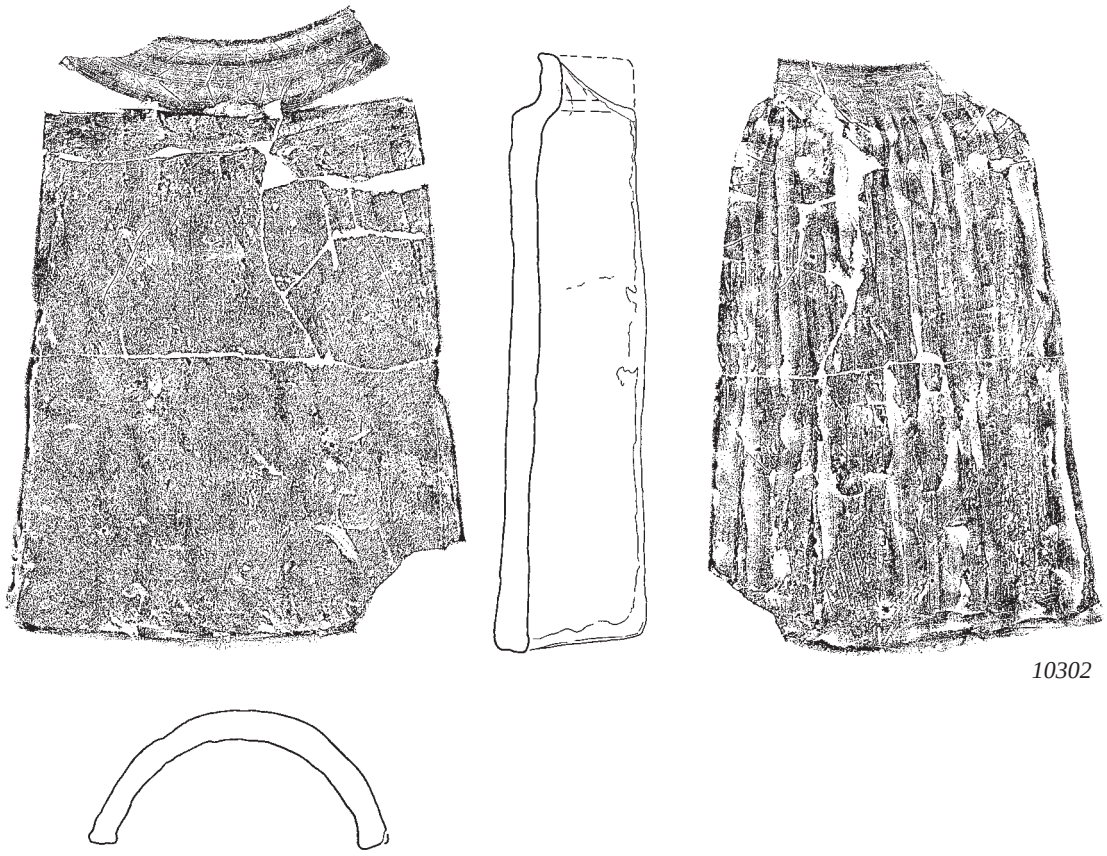


梟谷１号窯

窯体出土丸瓦 7



10301



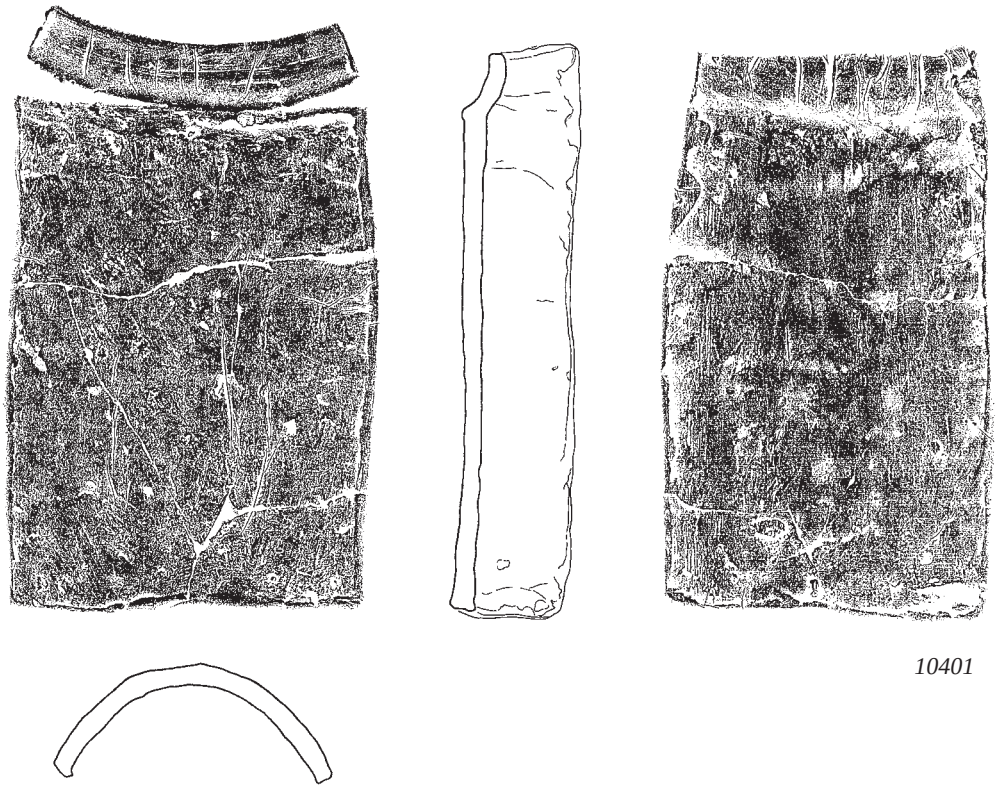
10302

0 20cm

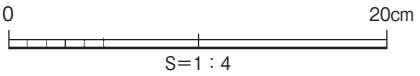
S=1：4

梟谷１号窯

窯体出土丸瓦 8

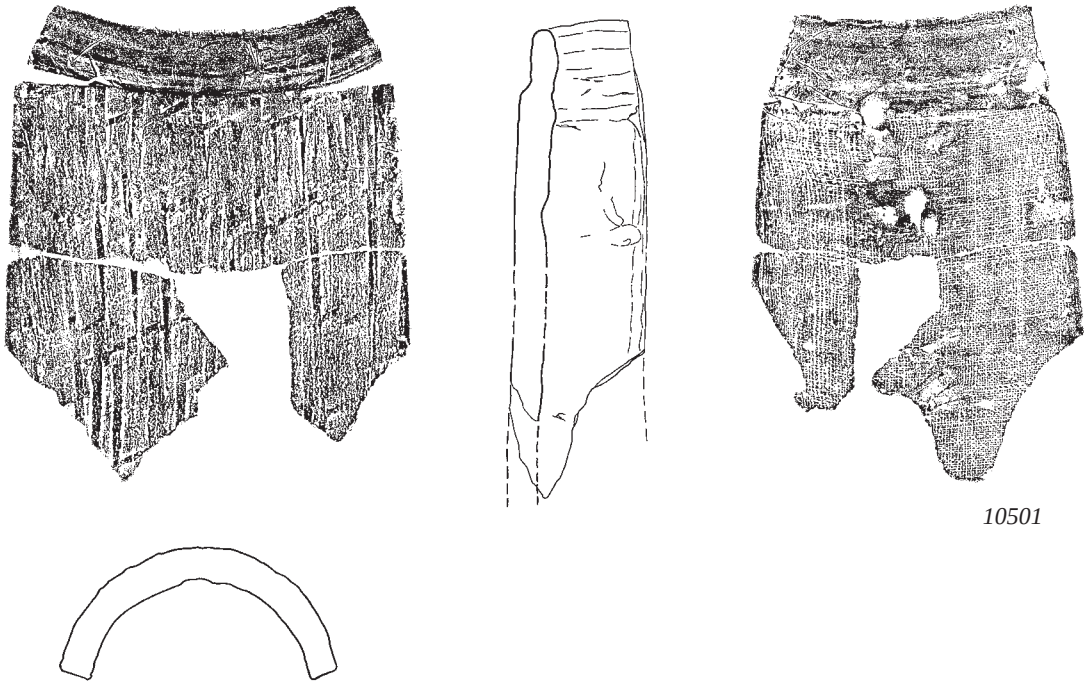


10401

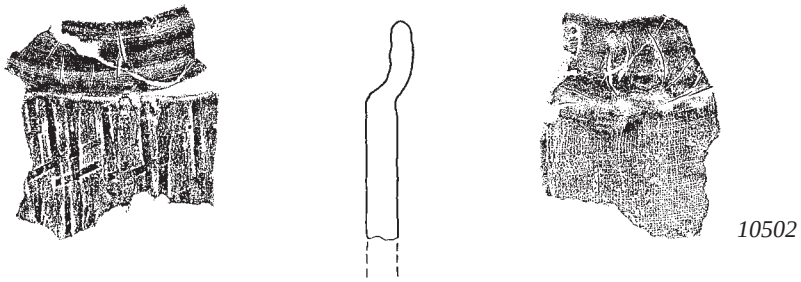


梟谷１号窯

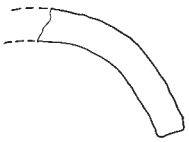
谷堆積土層出土丸瓦

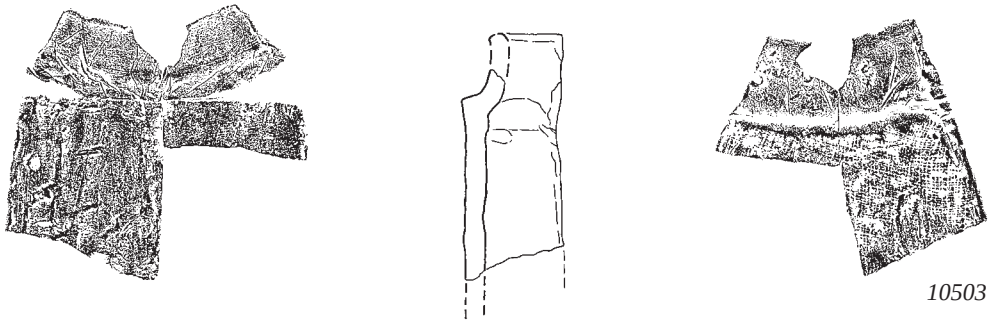


10501



10502





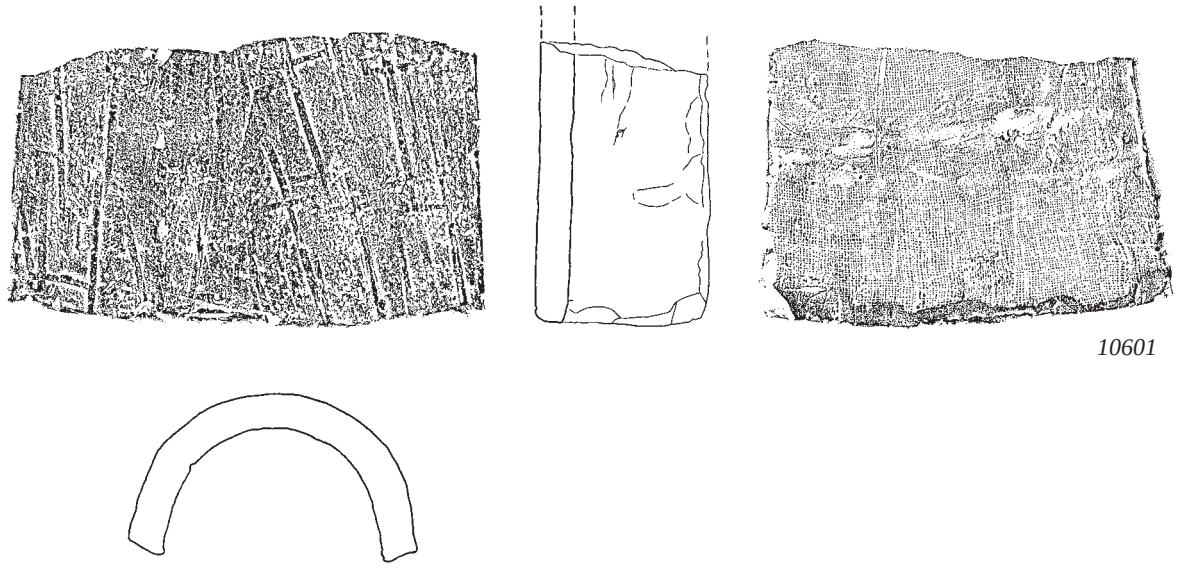
10503

0　20cm

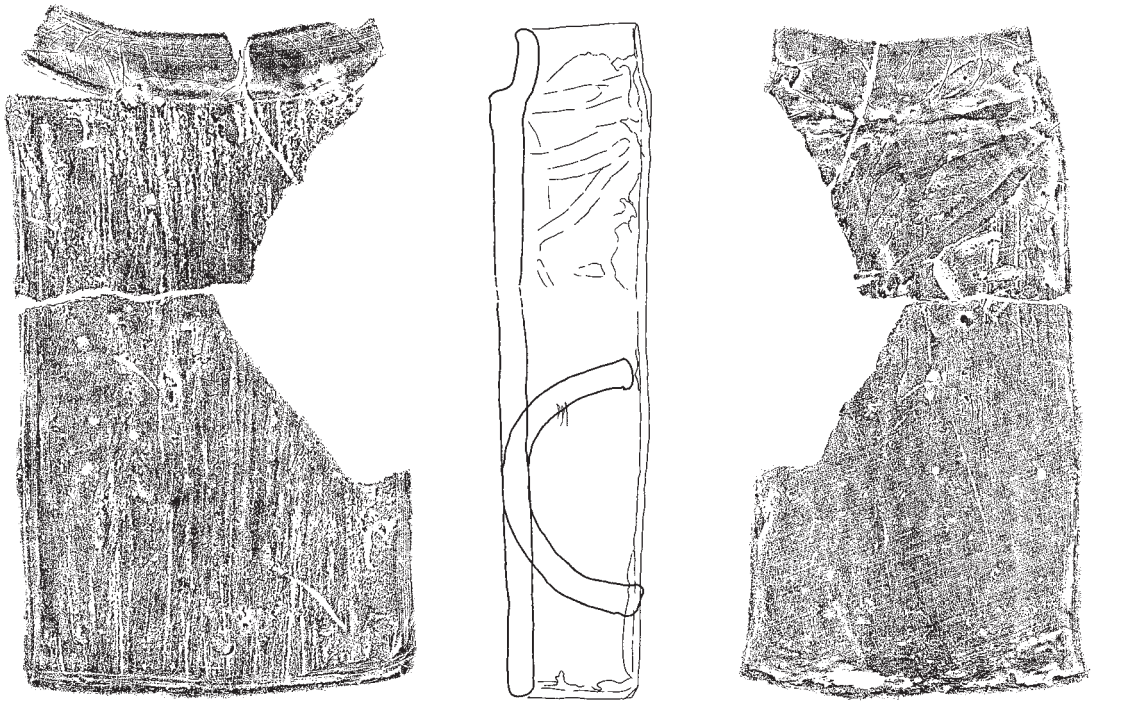
S=1：4

梟谷１号窯

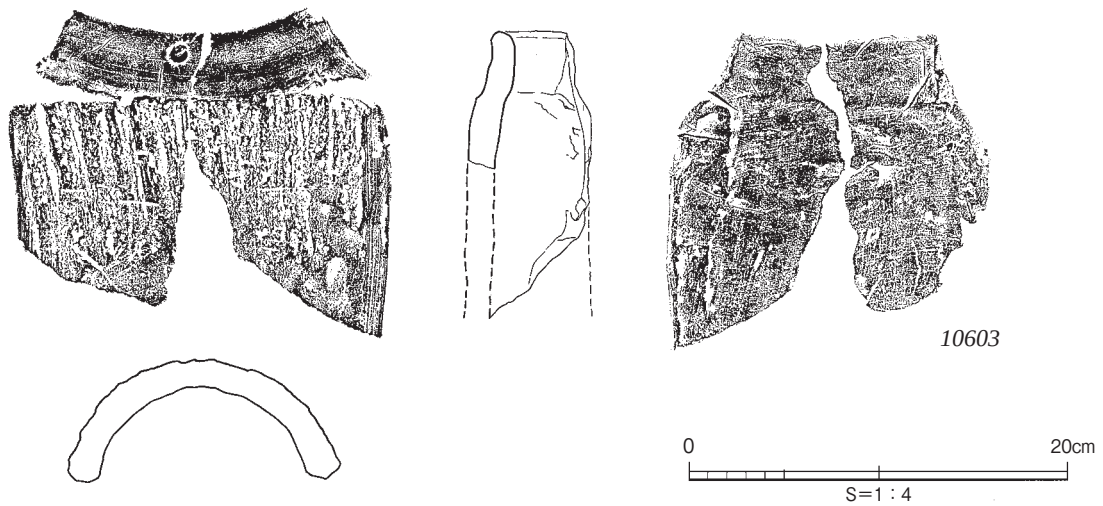
灰原出土丸瓦 1



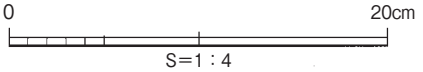
10601



10602

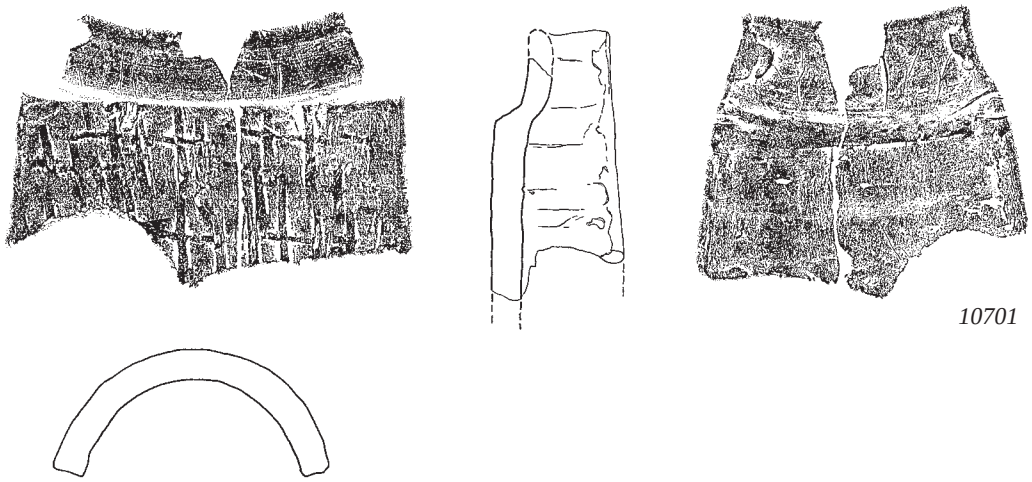


10603

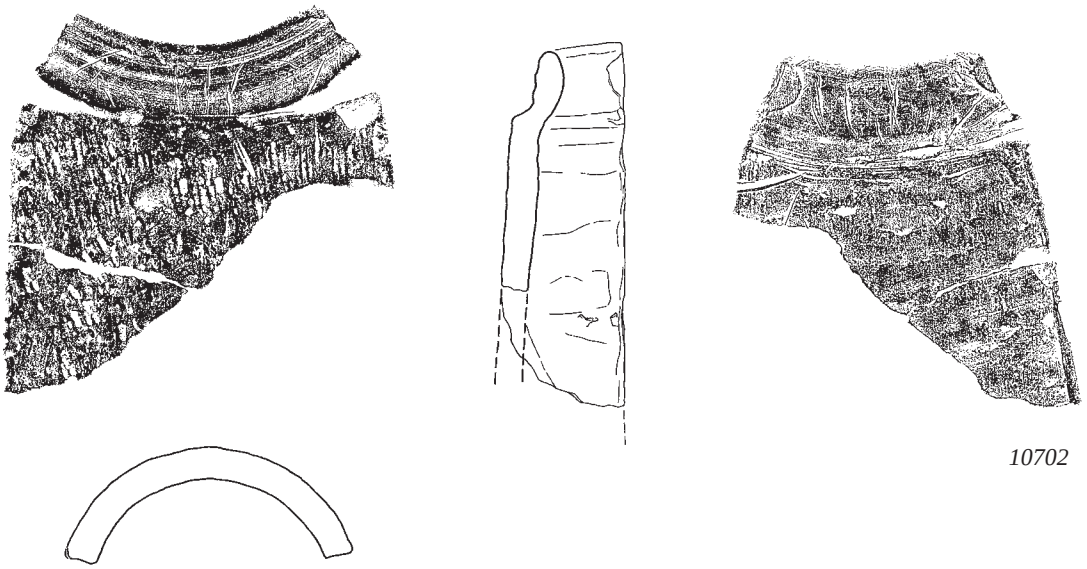


梟谷１号窯

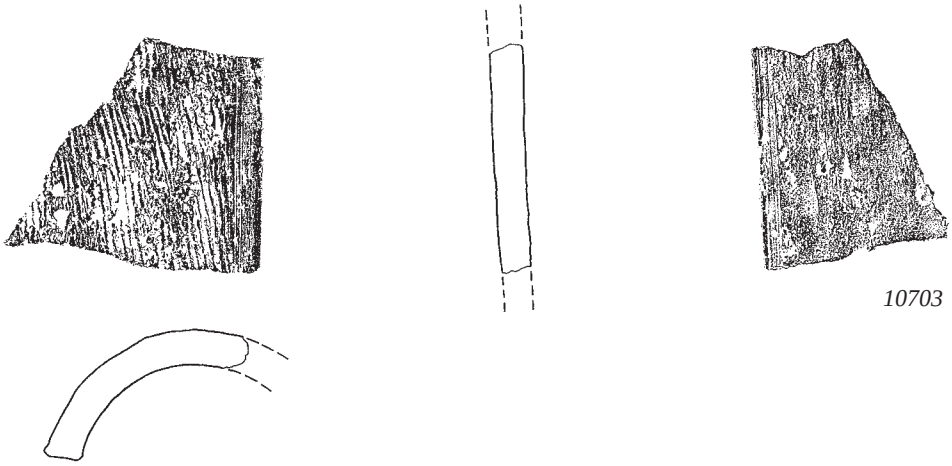
灰原出土丸瓦 2



10701



10702



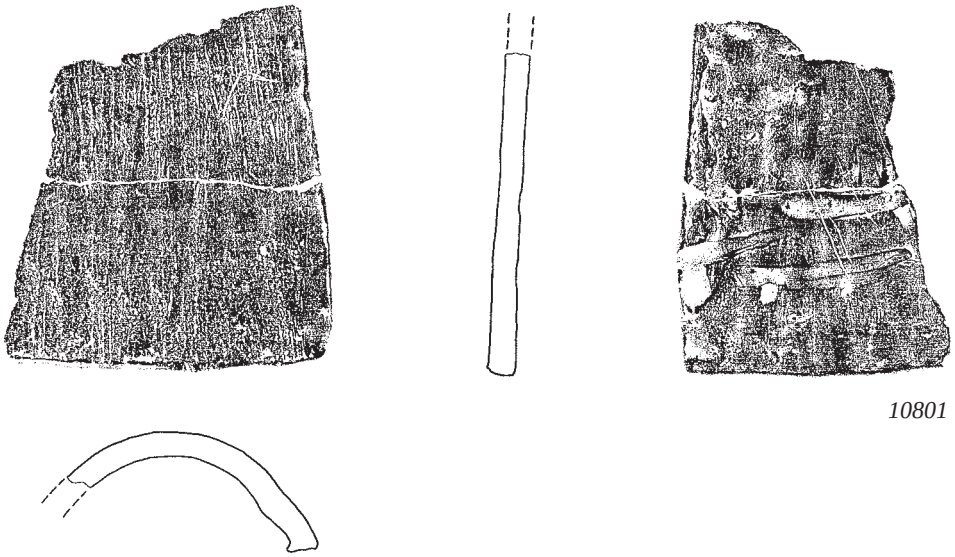
10703

0 20cm

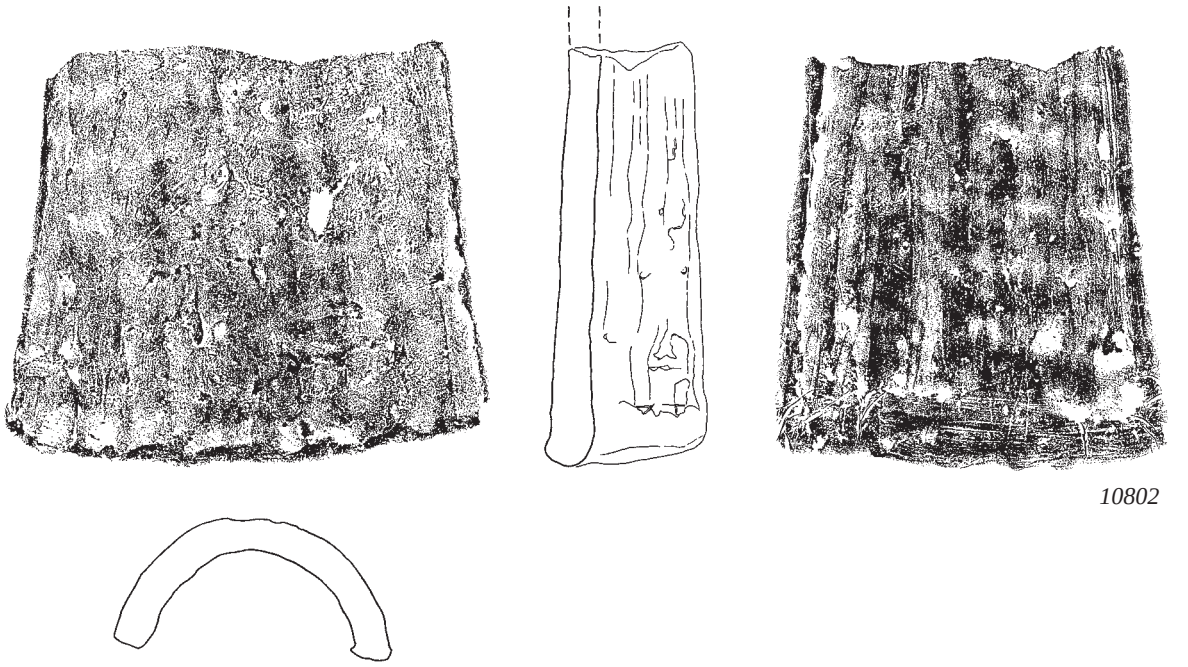
S=1：4

梟谷１号窯

灰原出土丸瓦 3



10801



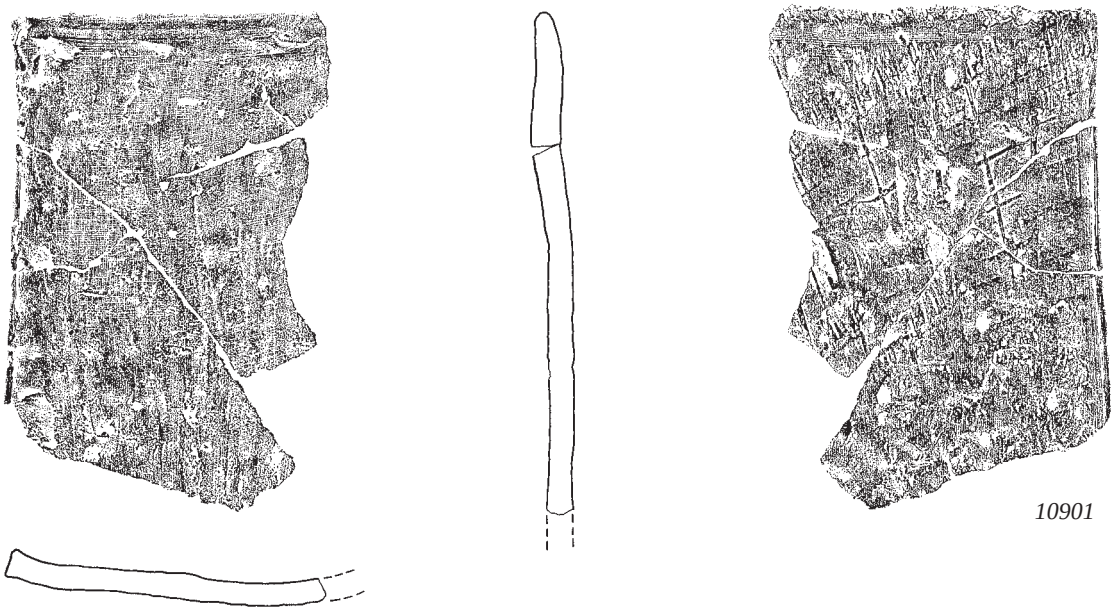
10802

0 20cm

S=1：4

梟谷１号窯

窯体出土平瓦 1

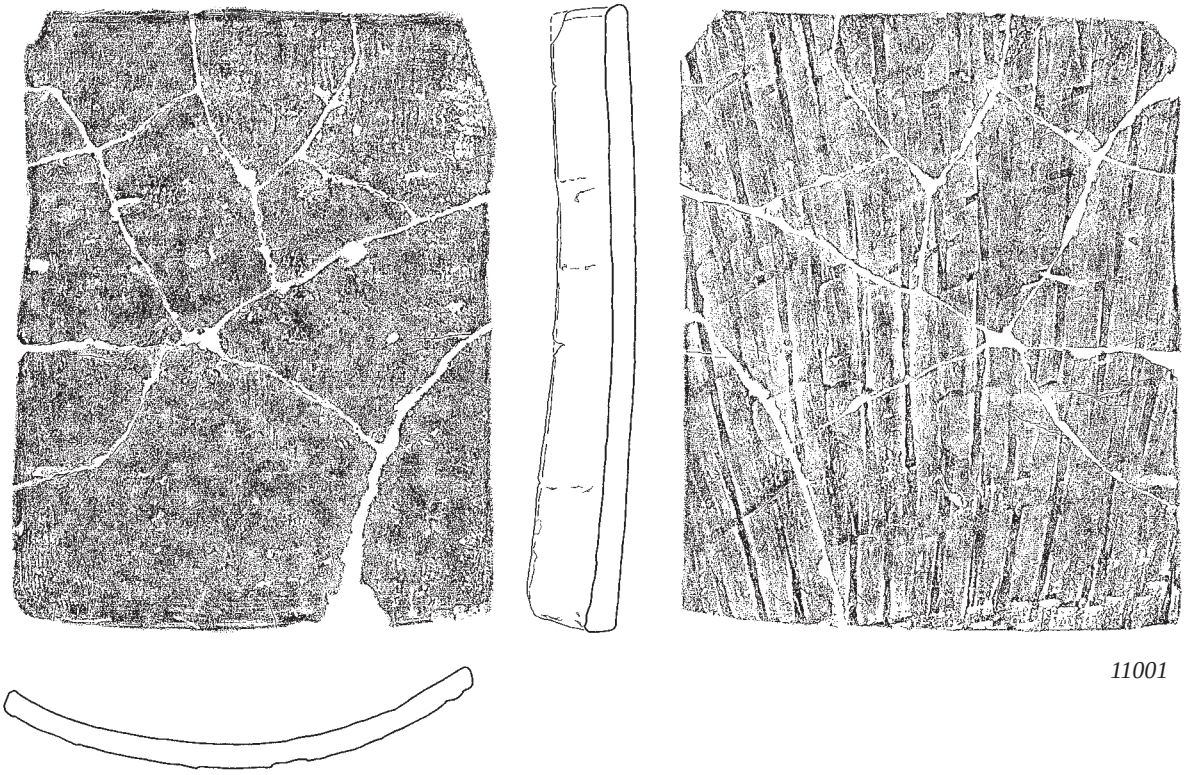


10901

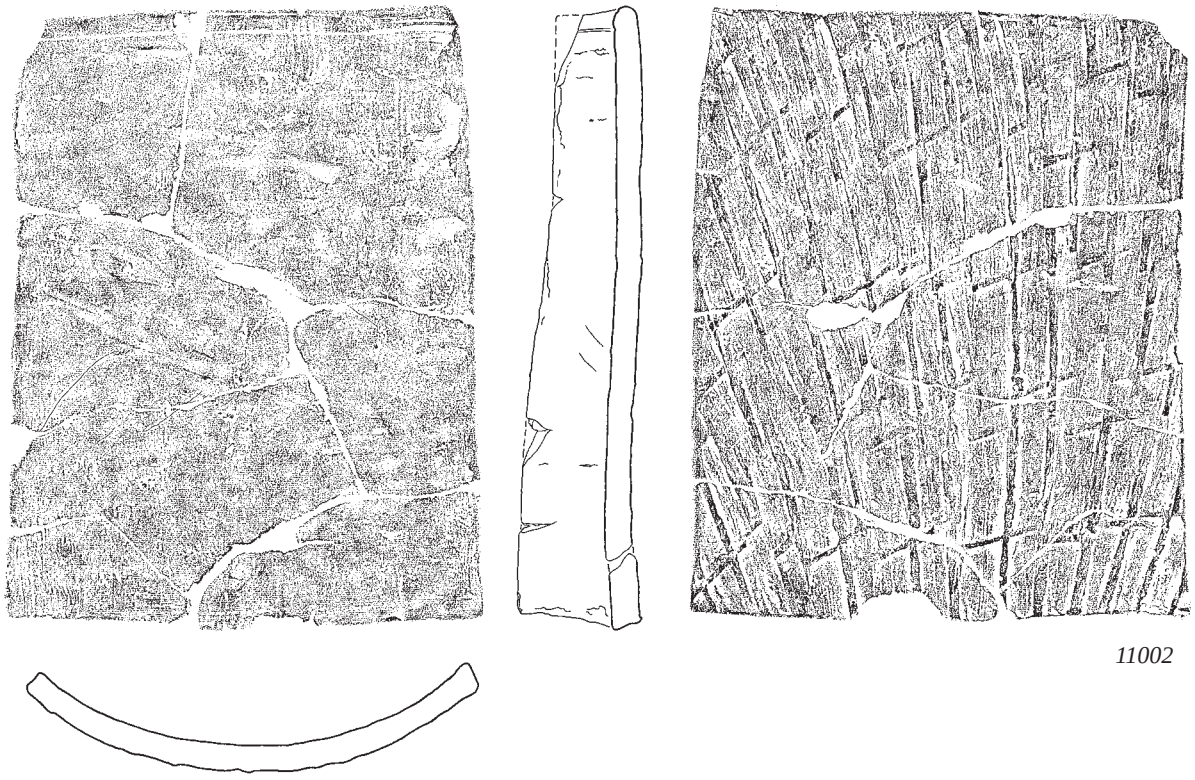
10902

梟谷１号窯

窯体出土平瓦 2



11001



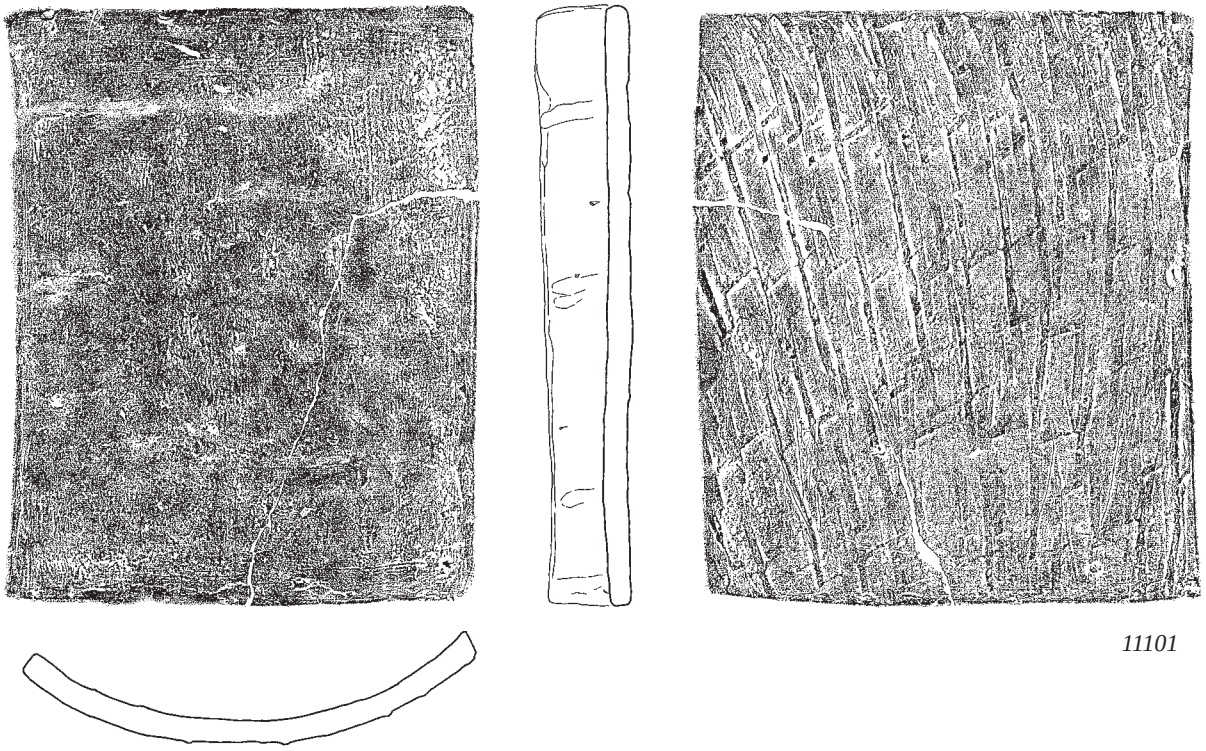
11002

0 20cm

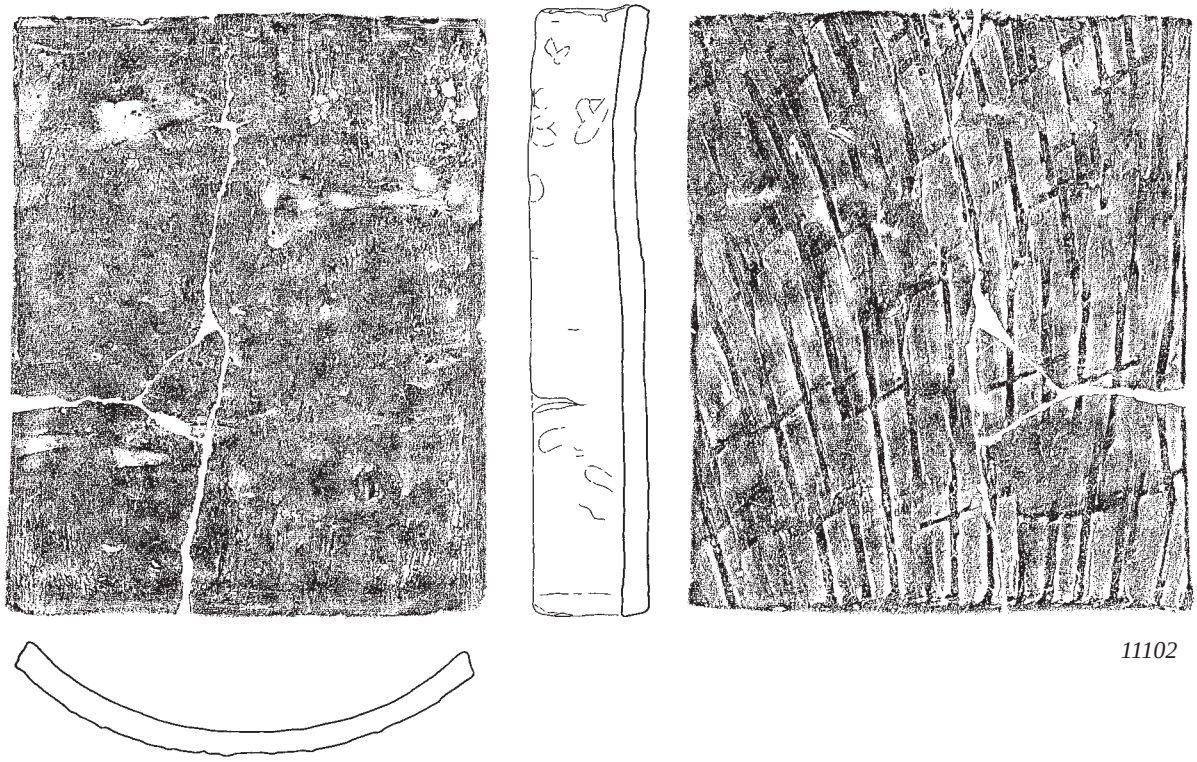
S=1：4

梟谷１号窯

窯体出土平瓦 3



11101



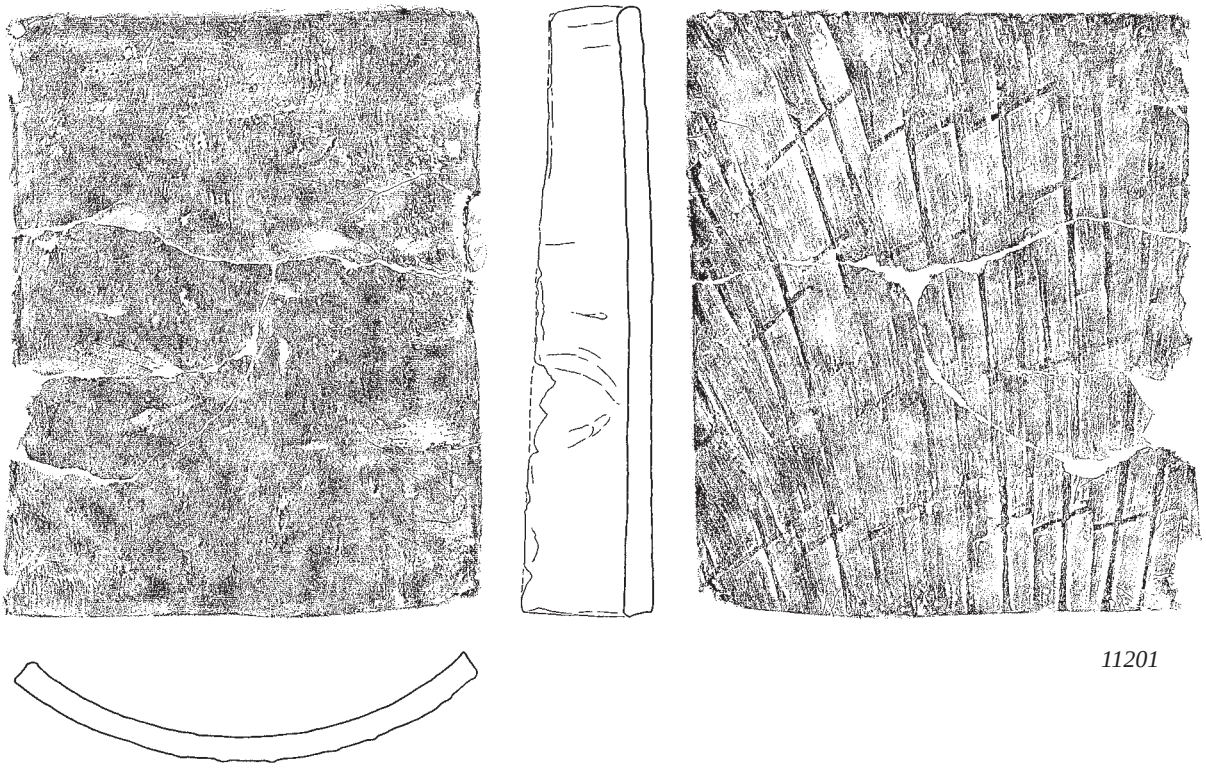
11102

0 20cm

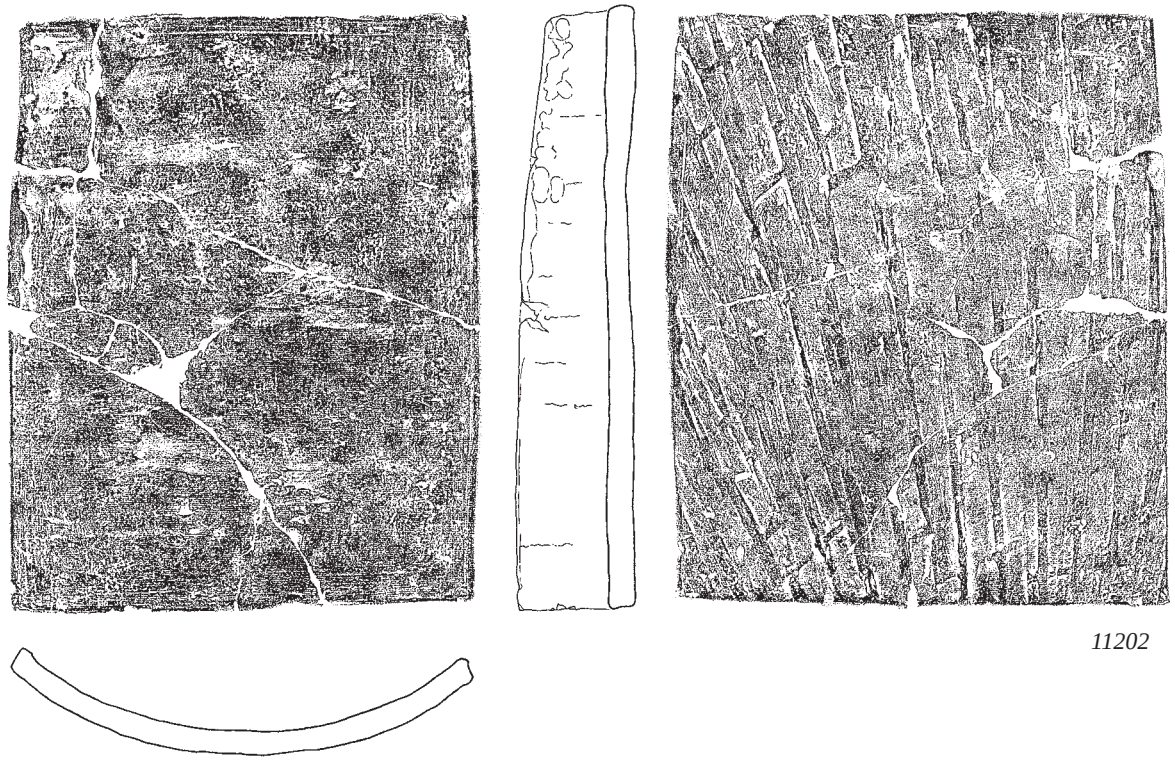
S=1：4

梟谷１号窯

窯体出土平瓦 4



11201



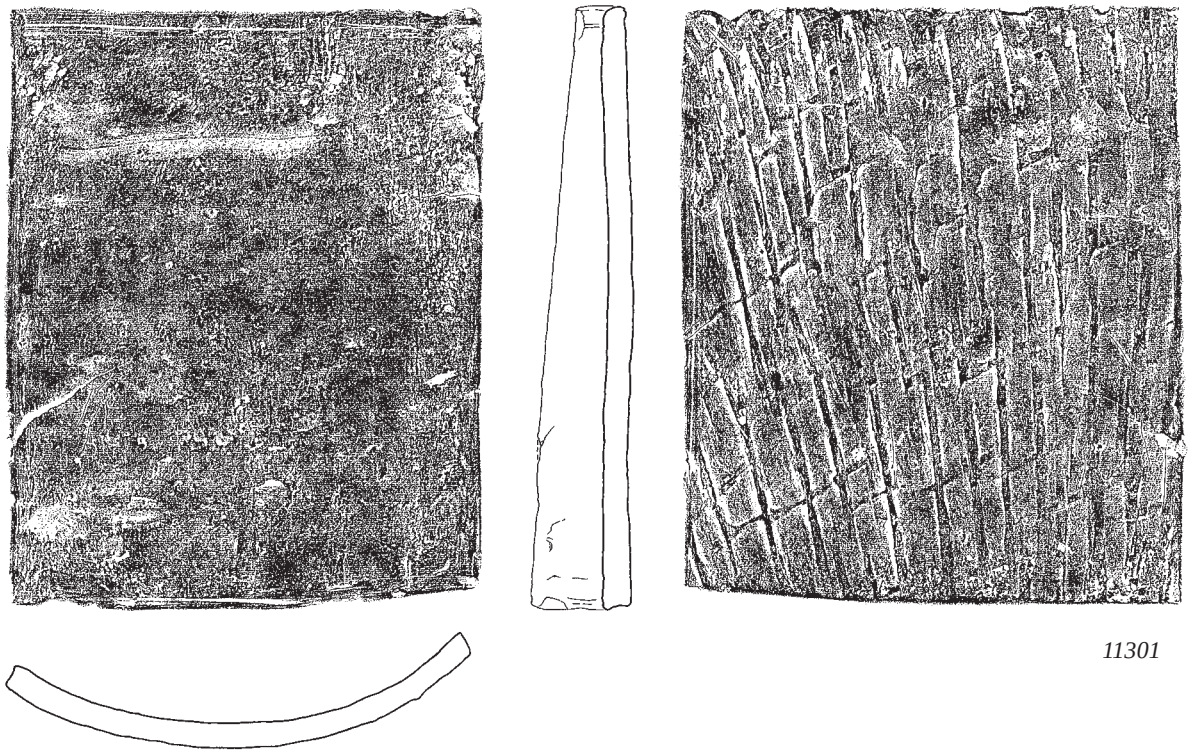
11202

0 20cm

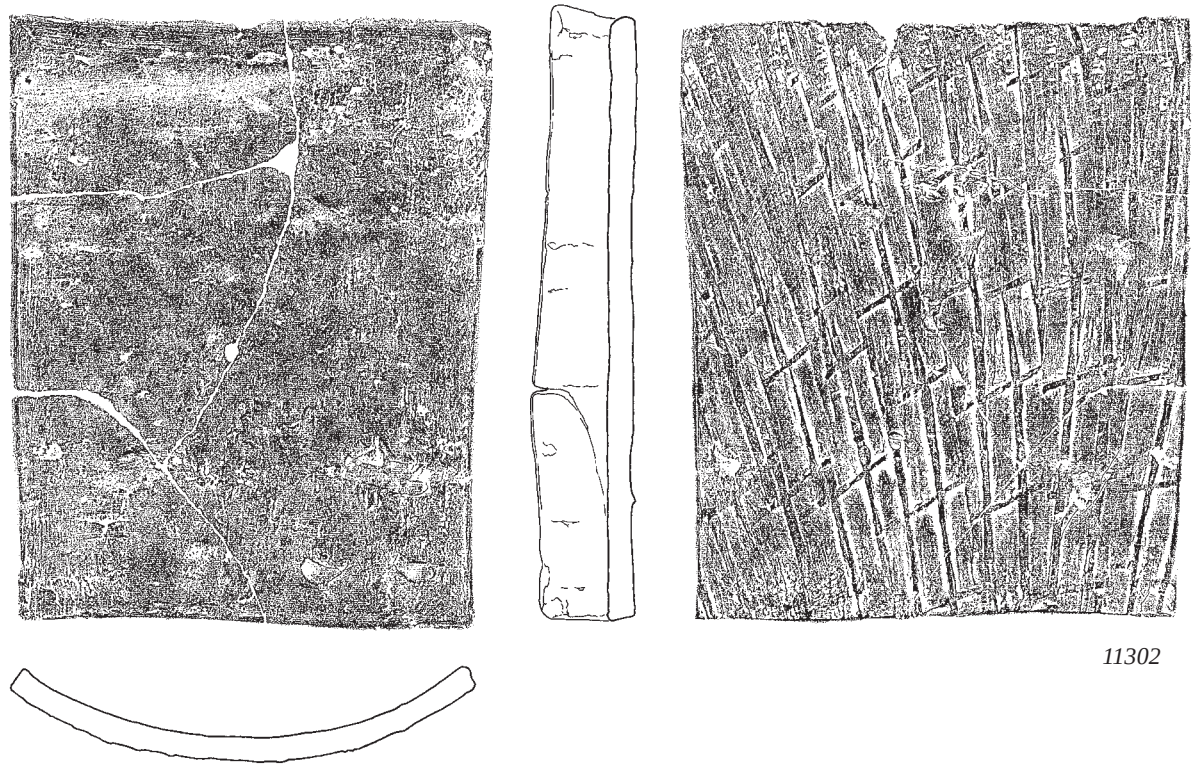
S=1：4

梟谷1号窯

窯体出土平瓦 5



11301



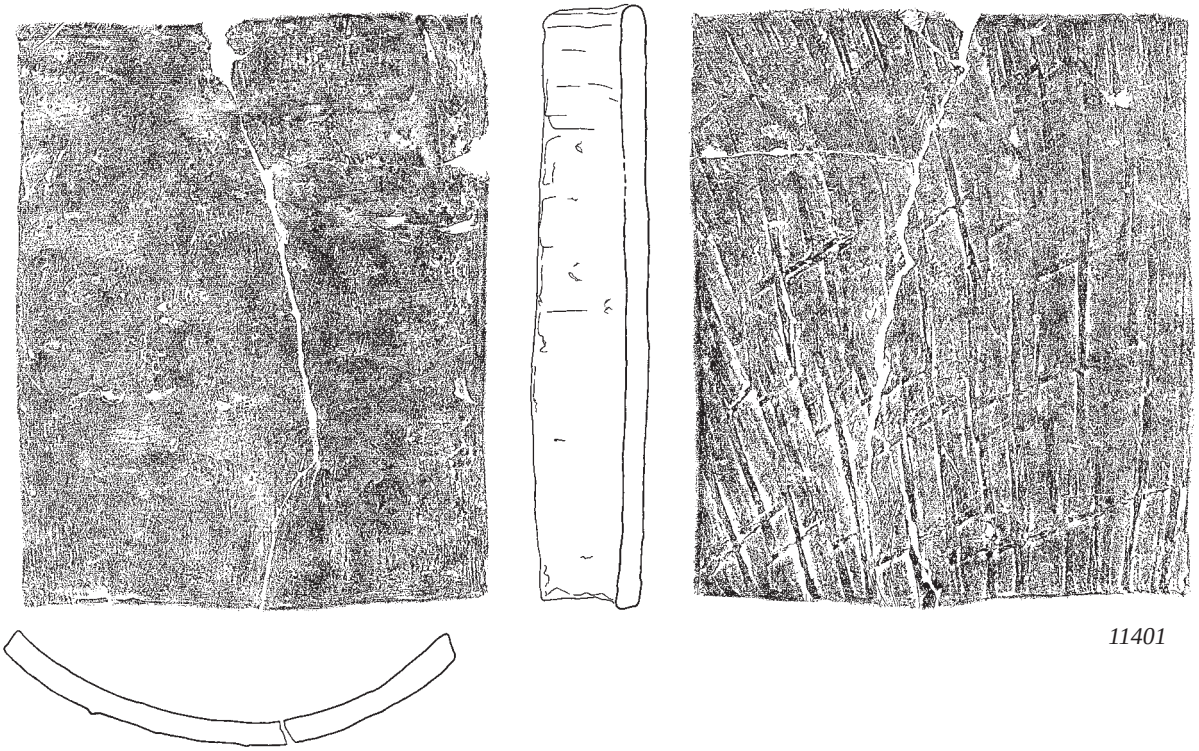
11302

0 20cm

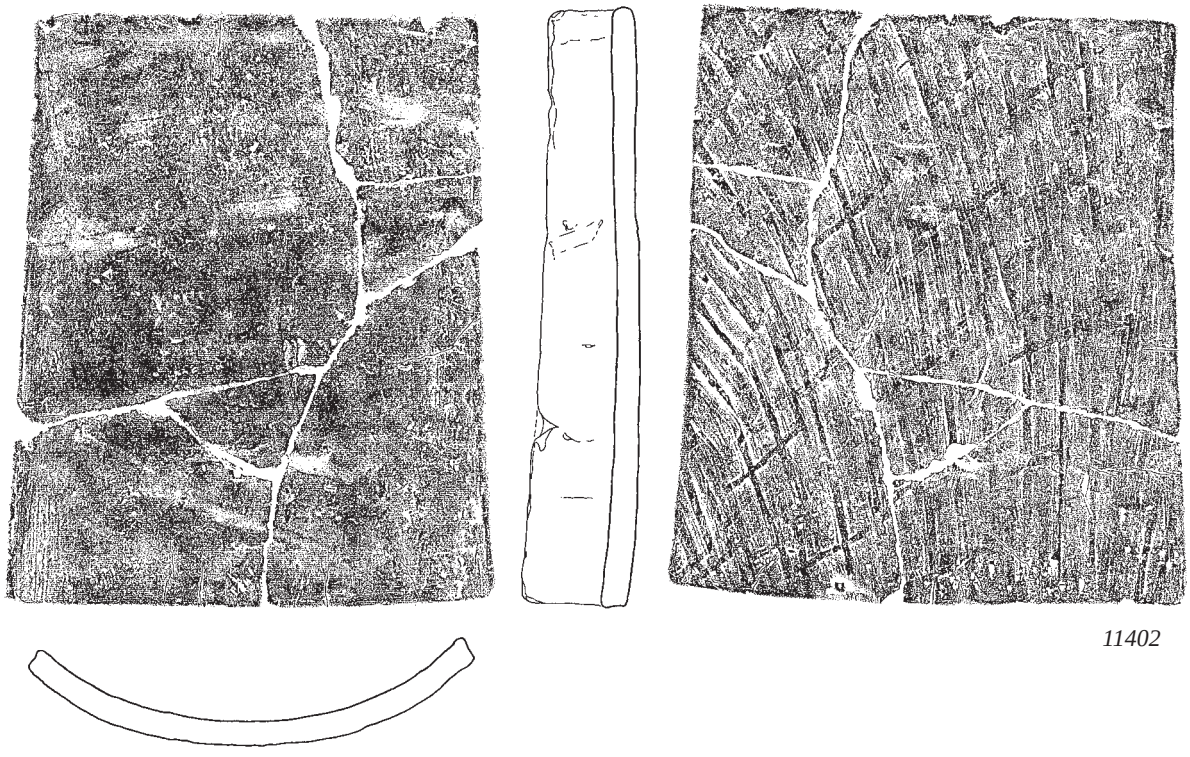
S=1：4

梟谷１号窯

窯体出土平瓦 6



11401



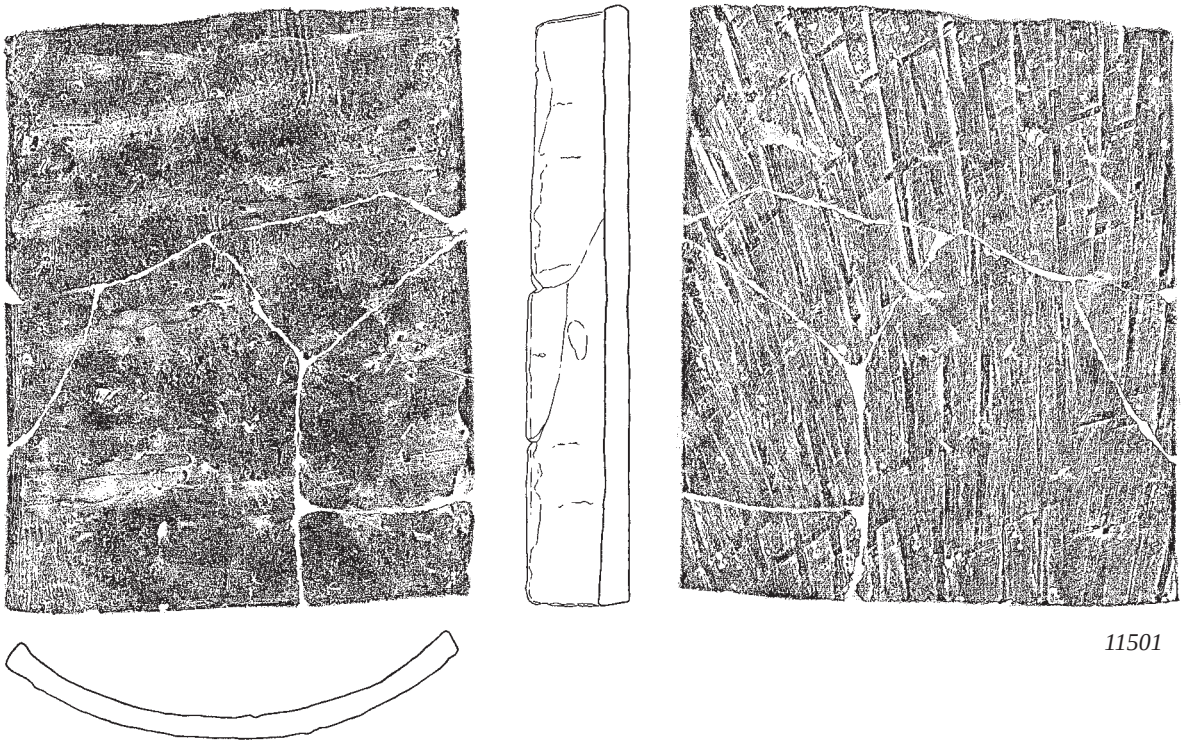
11402

0 20cm

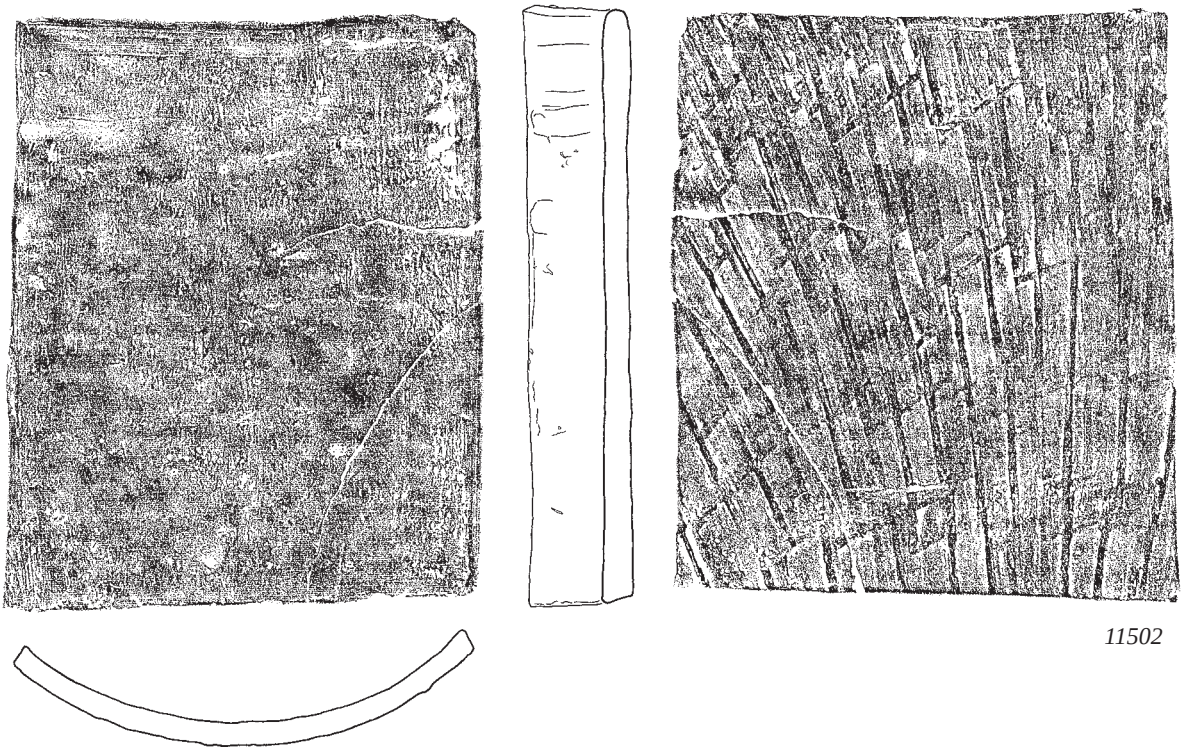
S=1：4

梟谷１号窯

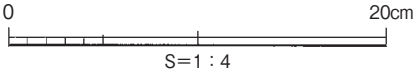
窯体出土平瓦 7



11501

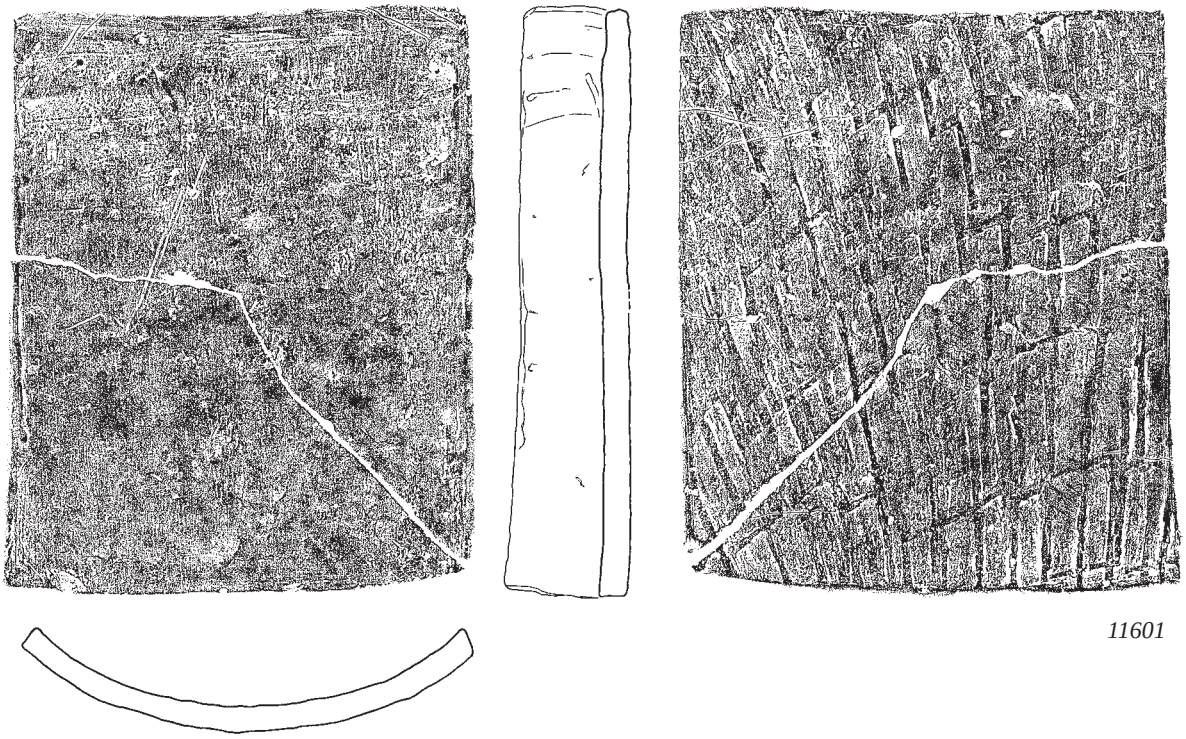


11502

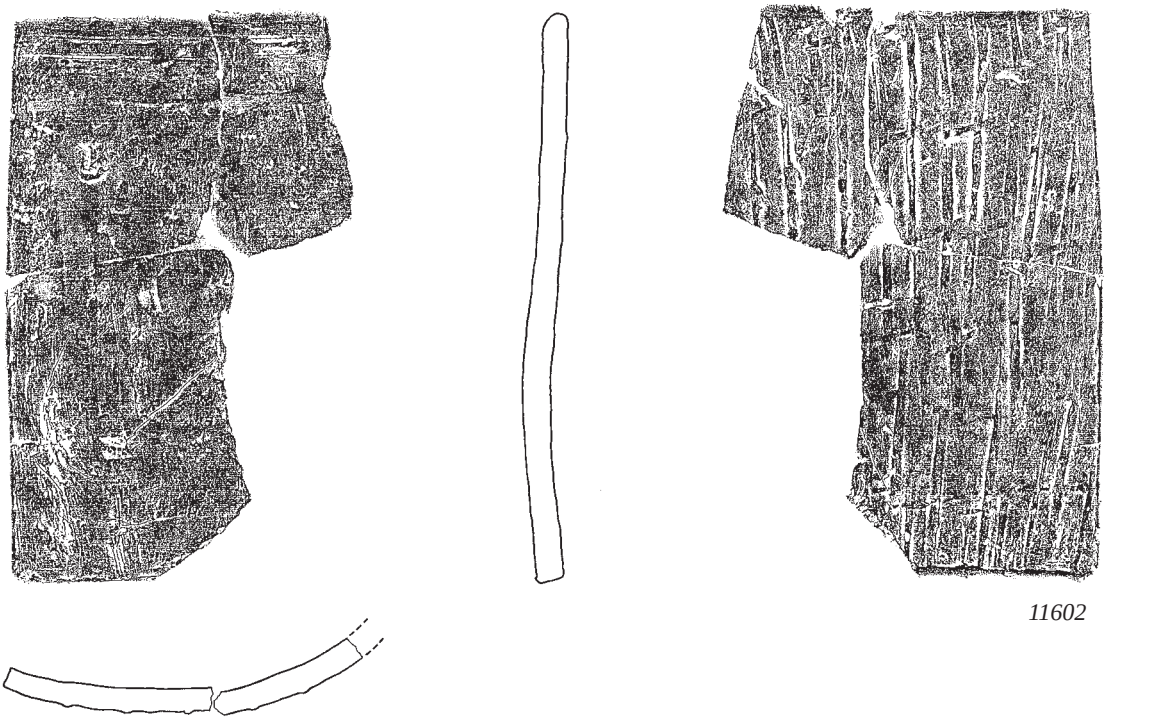


梟谷１号窯

窯体出土平瓦 8



11601



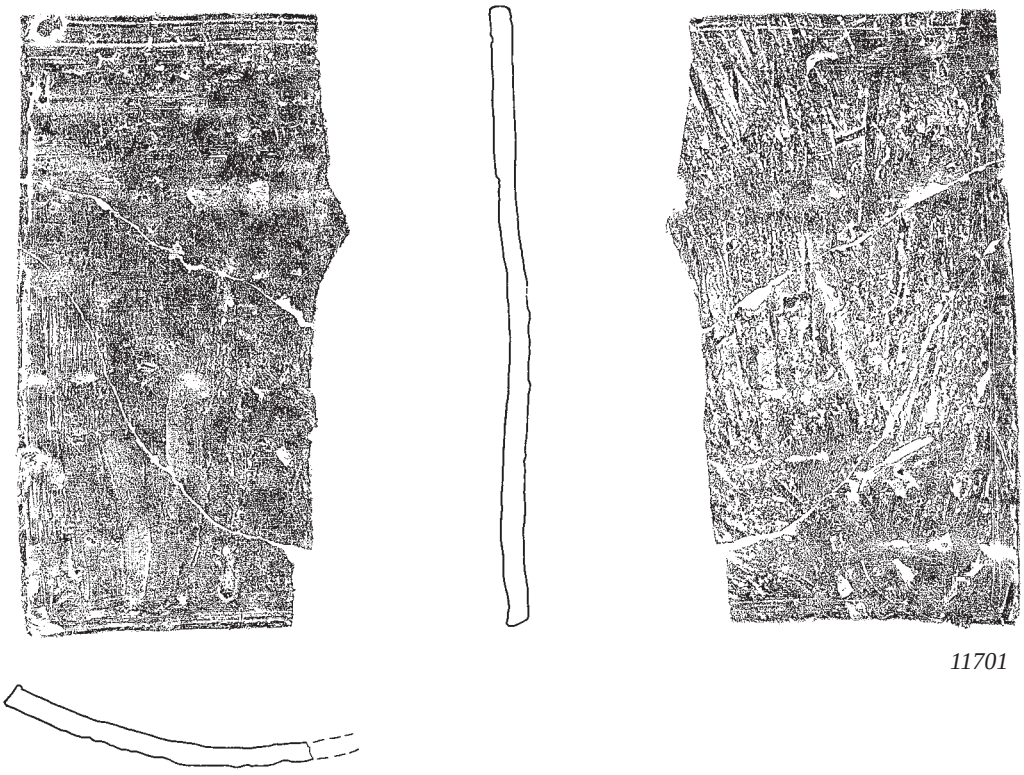
11602

0 20cm

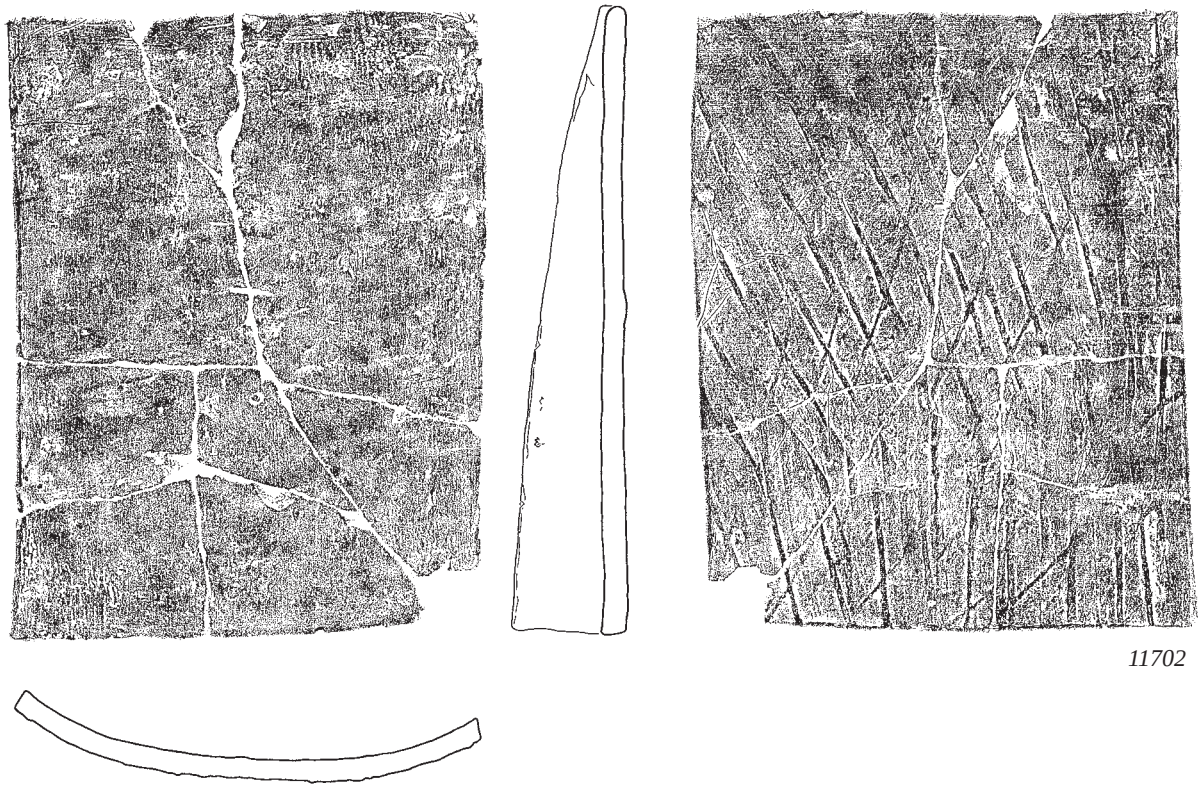
S=1：4

梟谷１号窯

窯体出土平瓦 9



11701



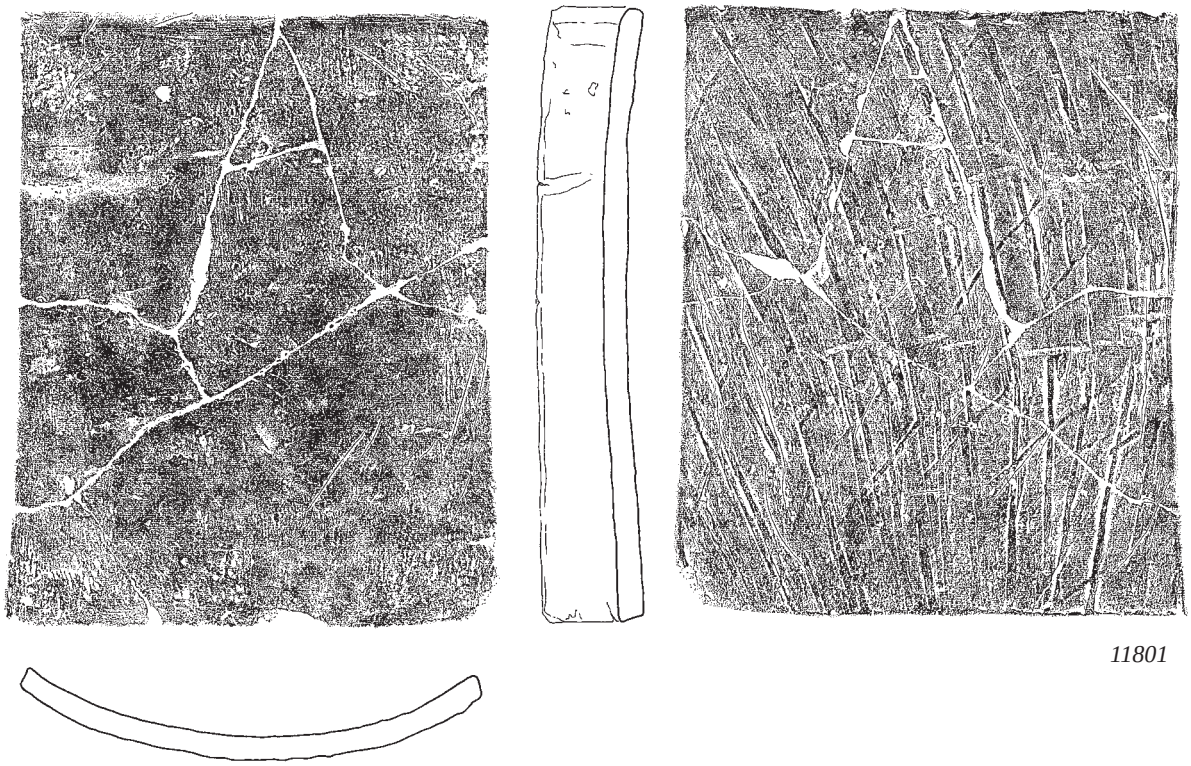
11702

0 20cm

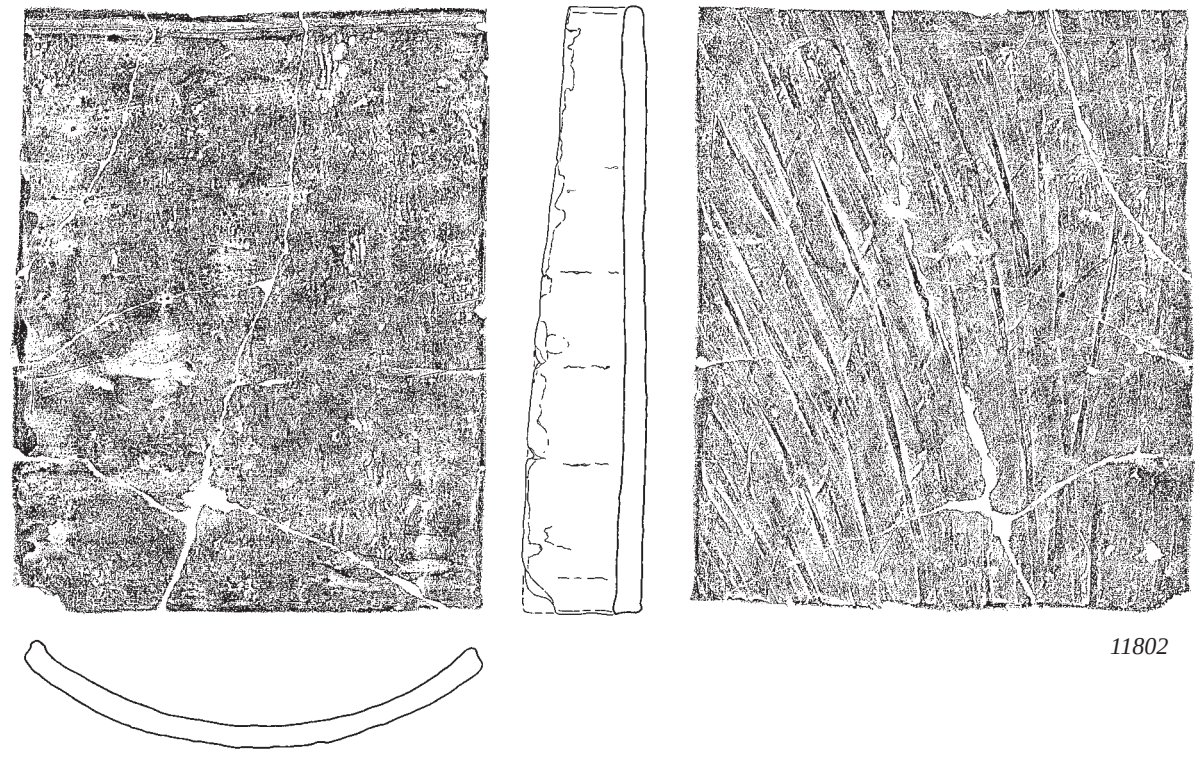
S=1：4

梟谷１号窯

窯体出土平瓦 10



11801



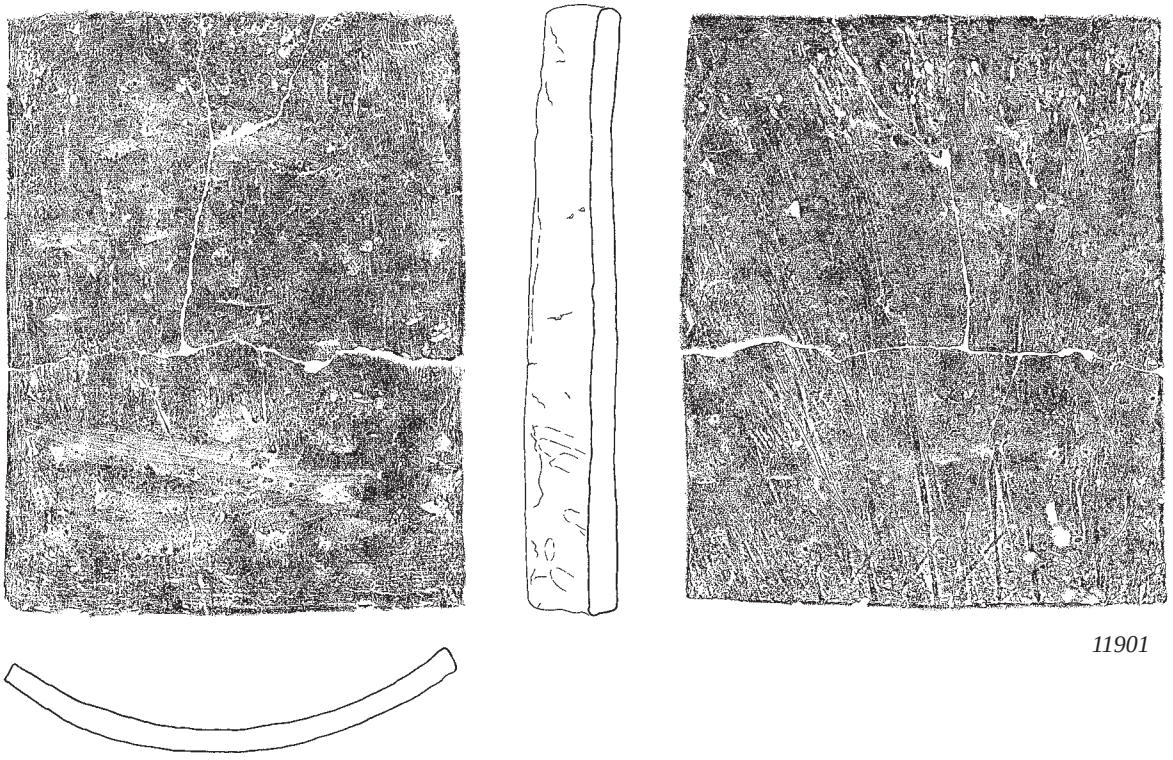
11802

0　20cm

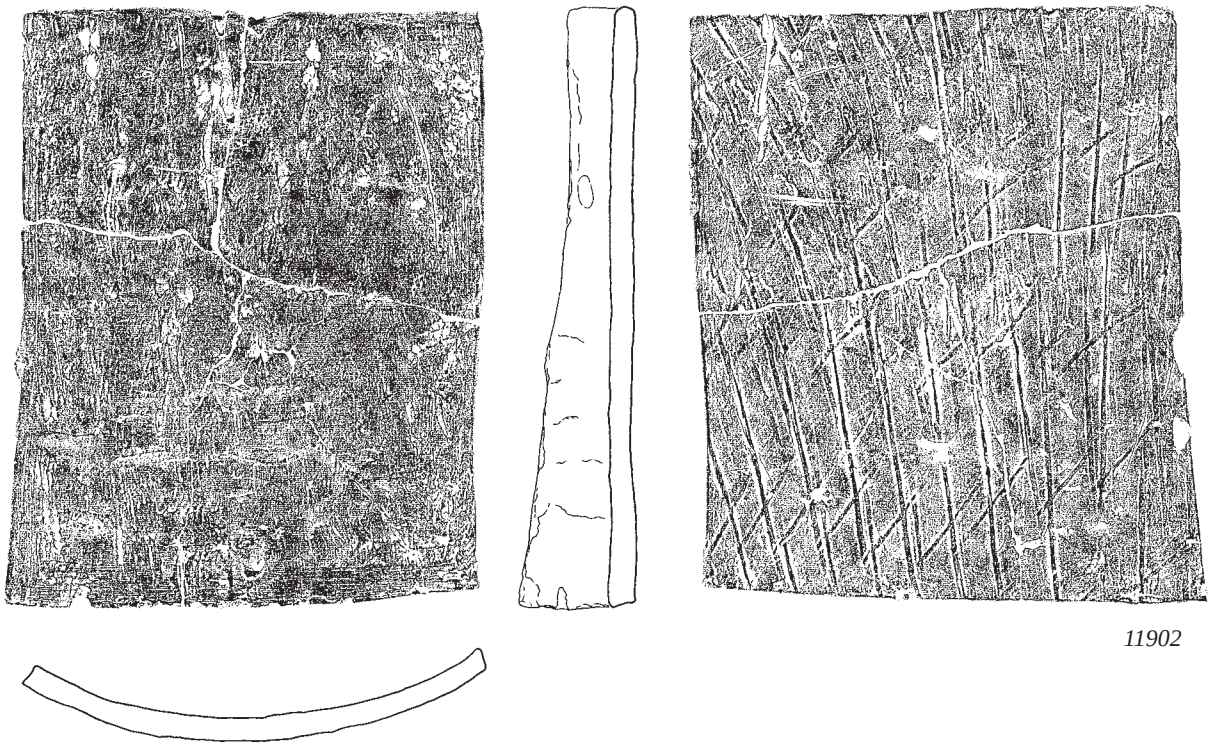
S=1：4

梟谷1号窯

窯体出土平瓦 11



11901



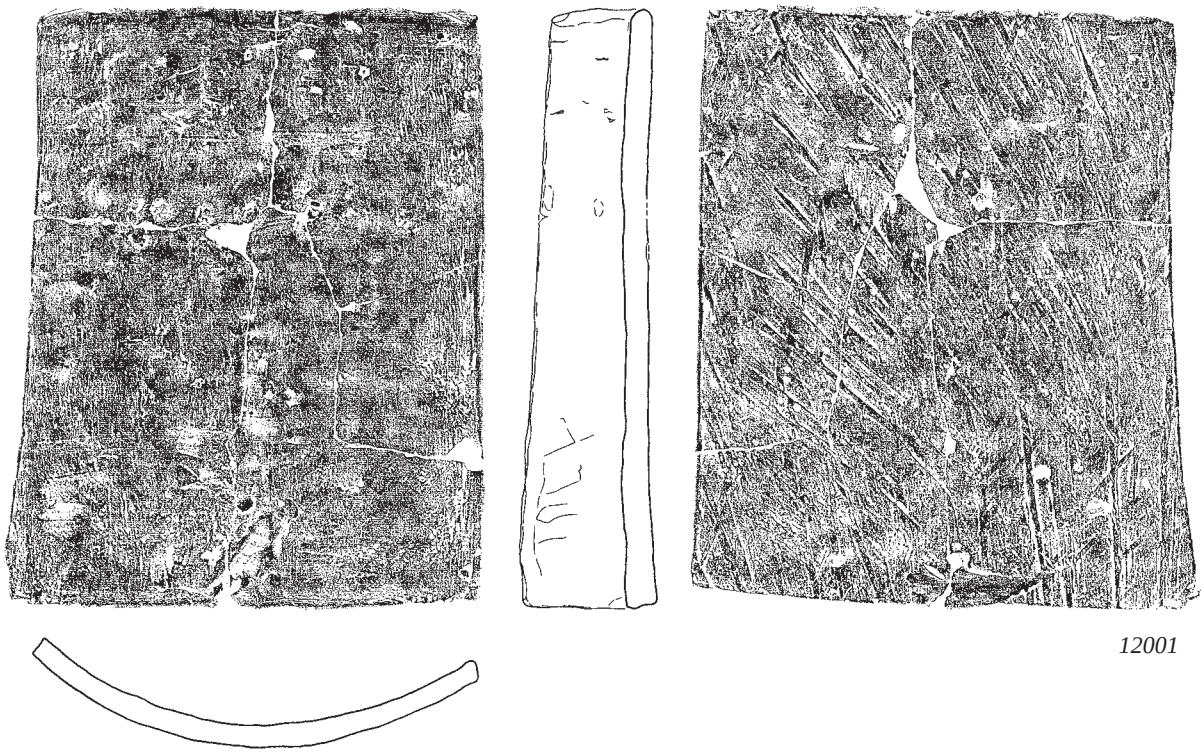
11902

0 20cm

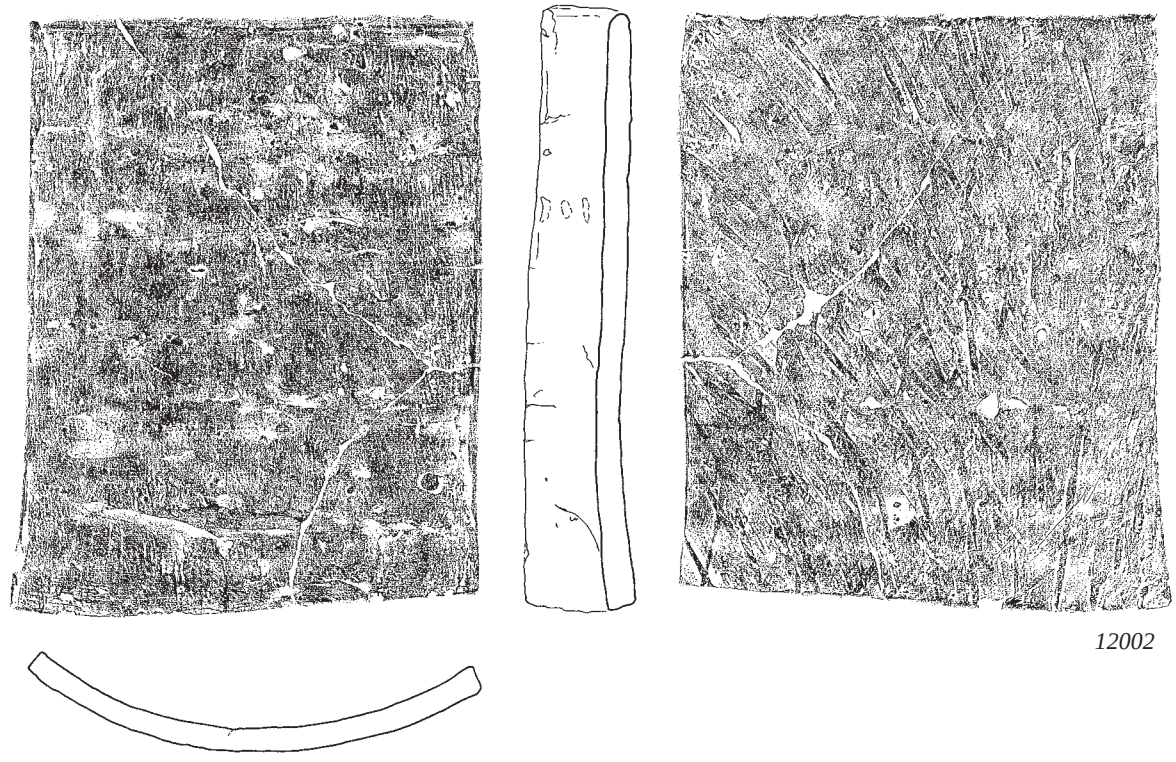
S=1：4

梟谷１号窯

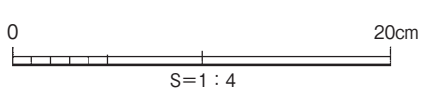
窯体出土平瓦 12



12001

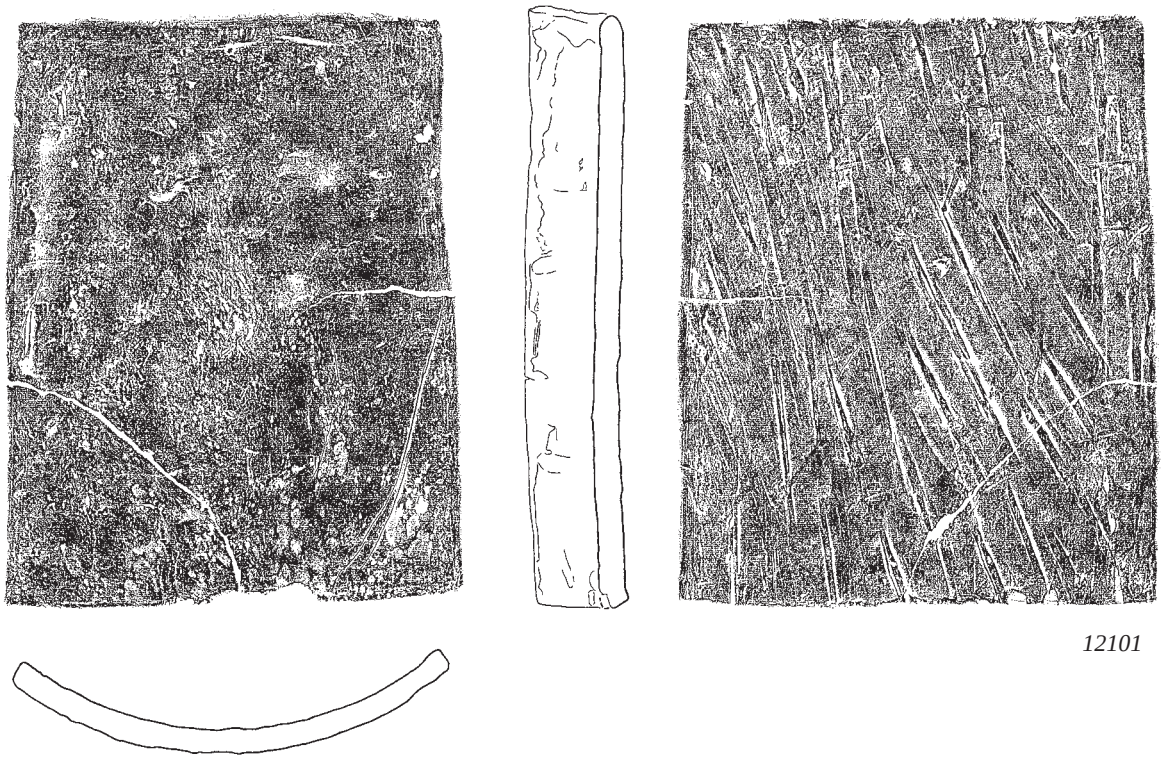


12002

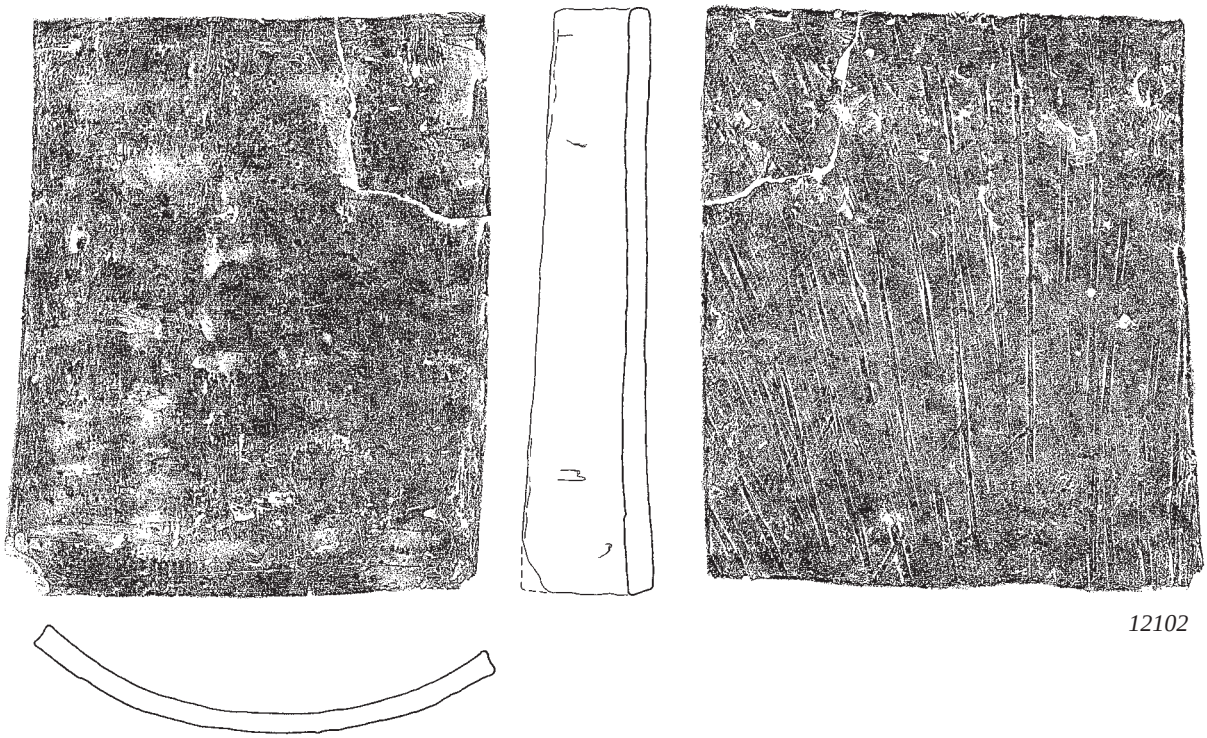


梟谷 1 号窯

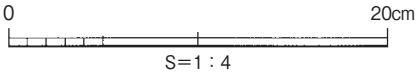
窯体出土平瓦 13



12101

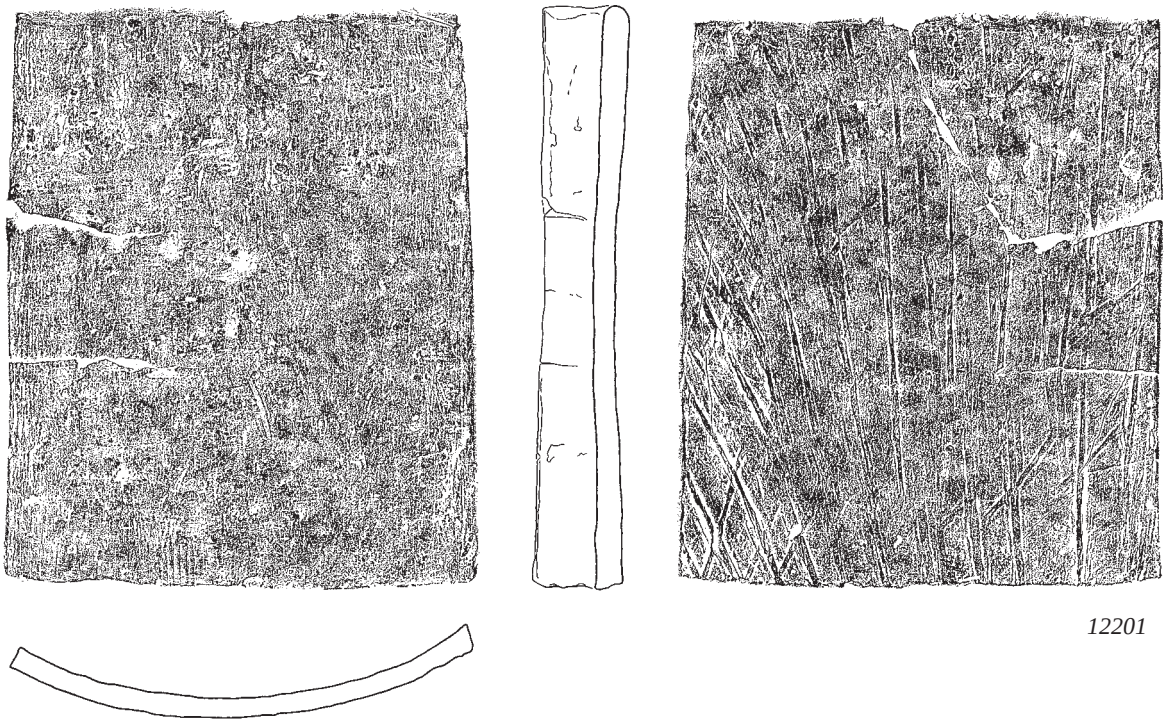


12102

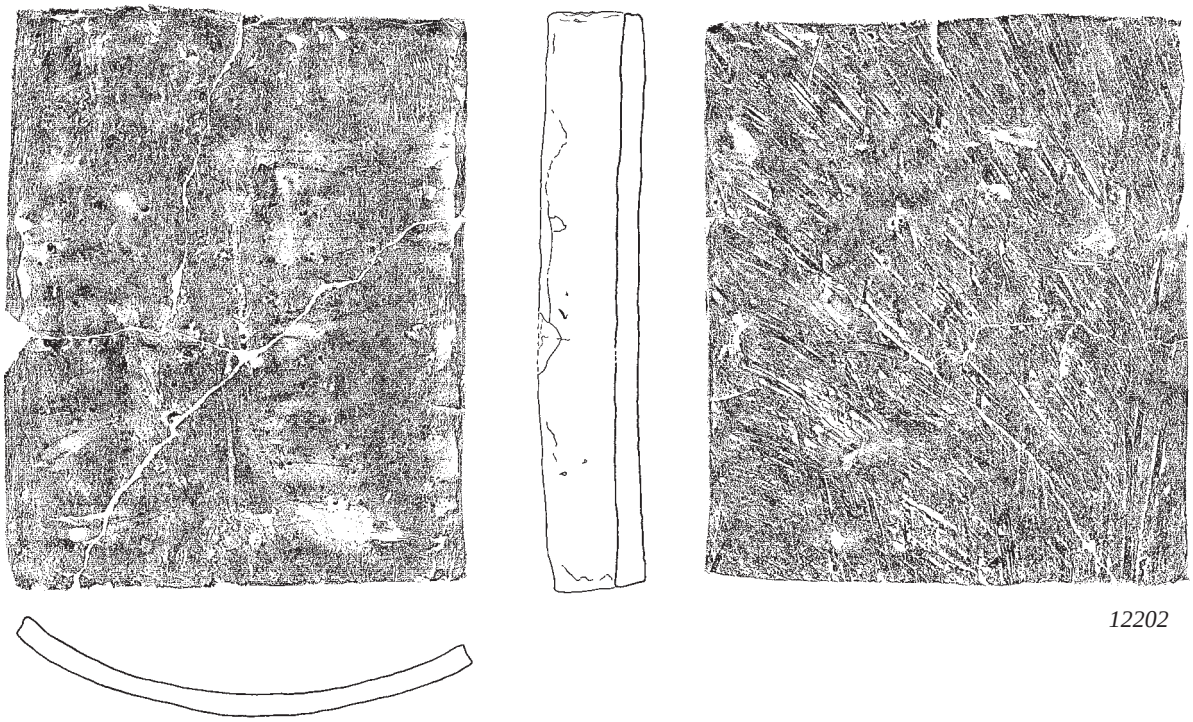


梟谷１号窯

窯体出土平瓦 14



12201



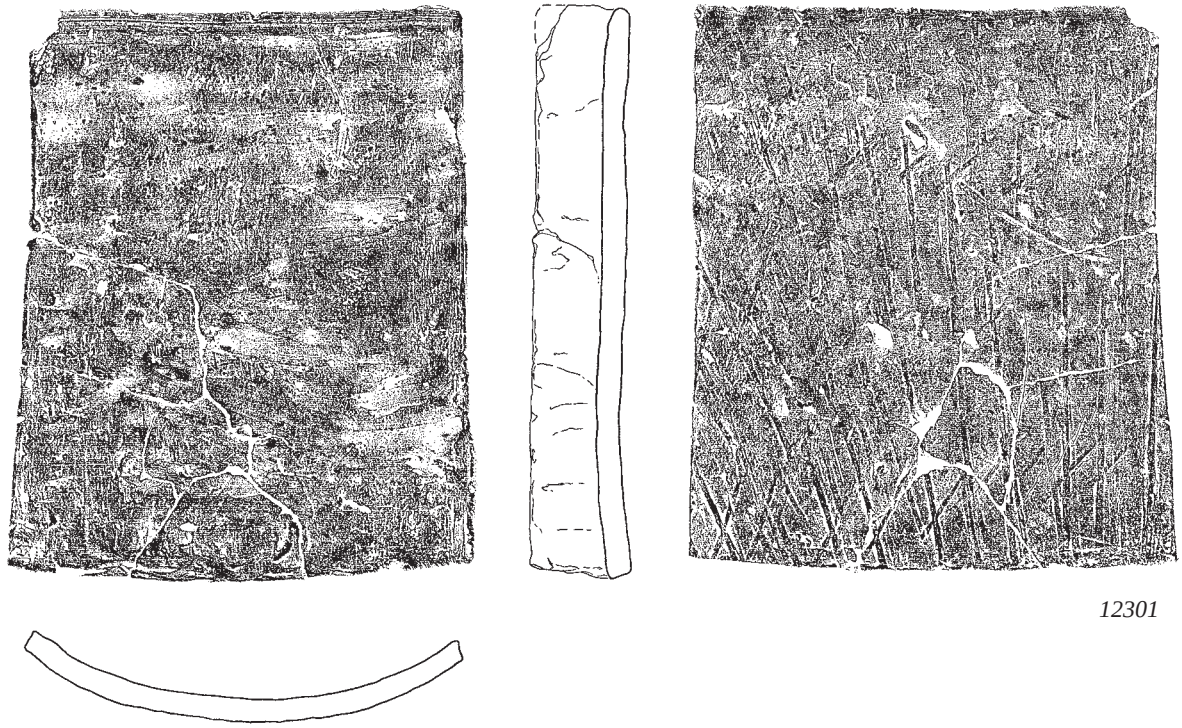
12202

0　20cm

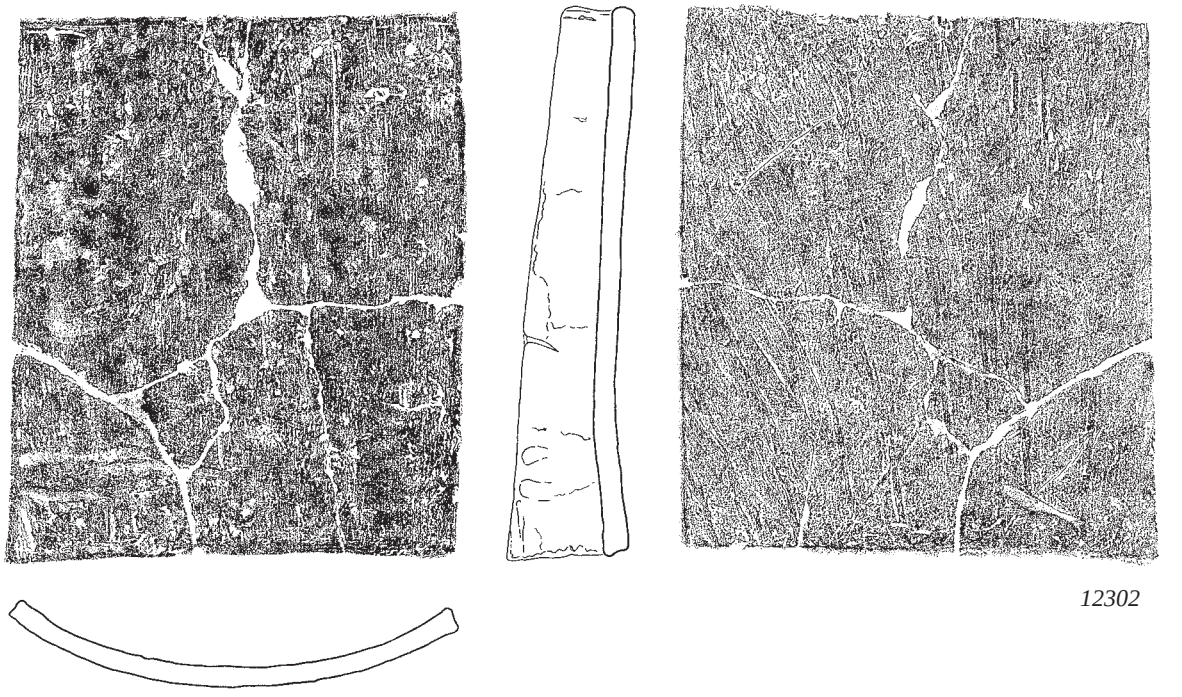
S=1：4

梟谷１号窯

窯体出土平瓦 15



12301



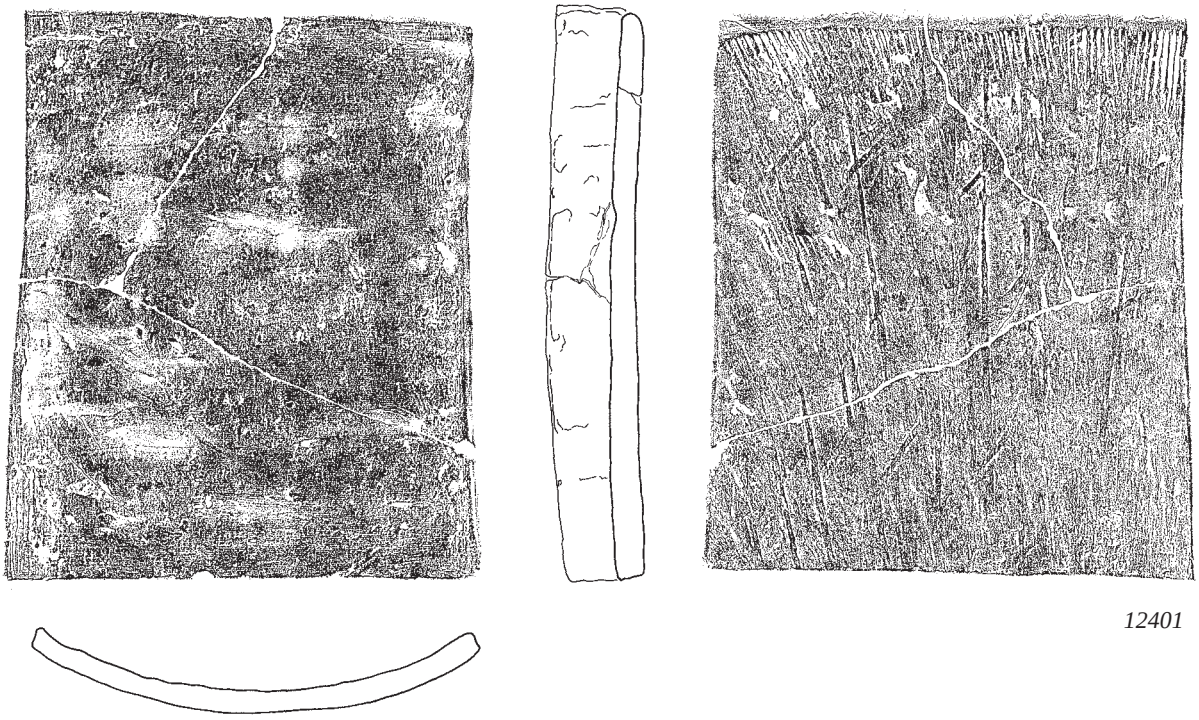
12302

0　20cm

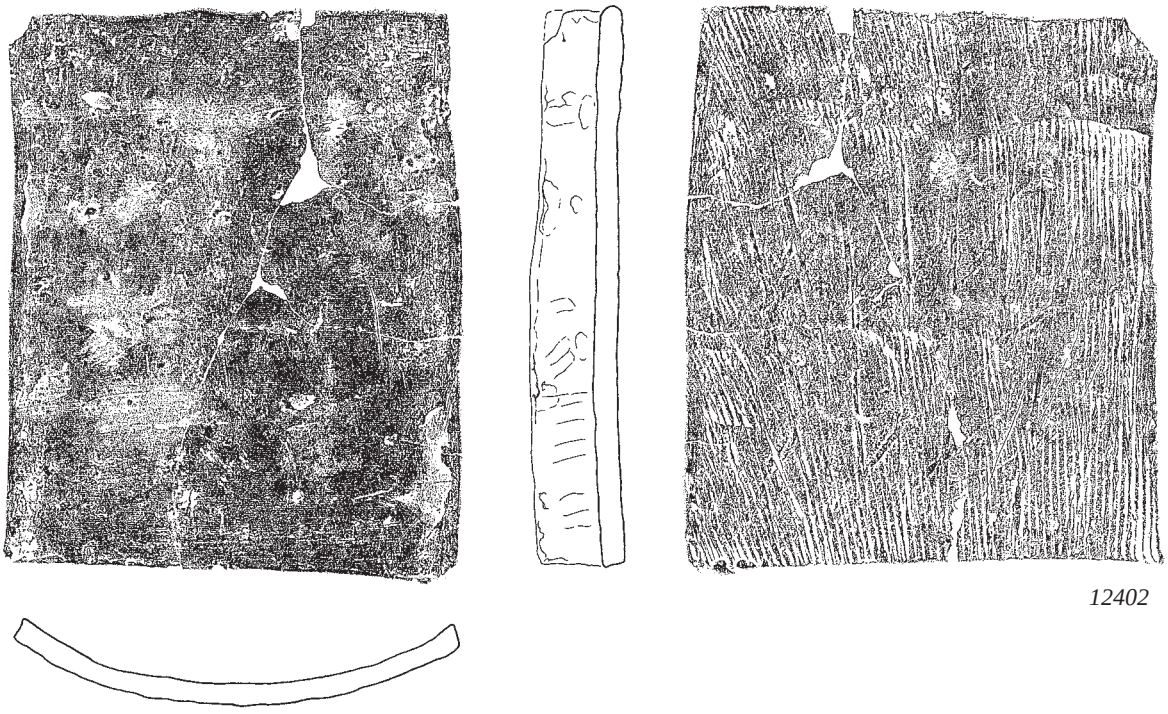
S=1：4

梟谷 1 号窯

窯体出土平瓦 16



12401



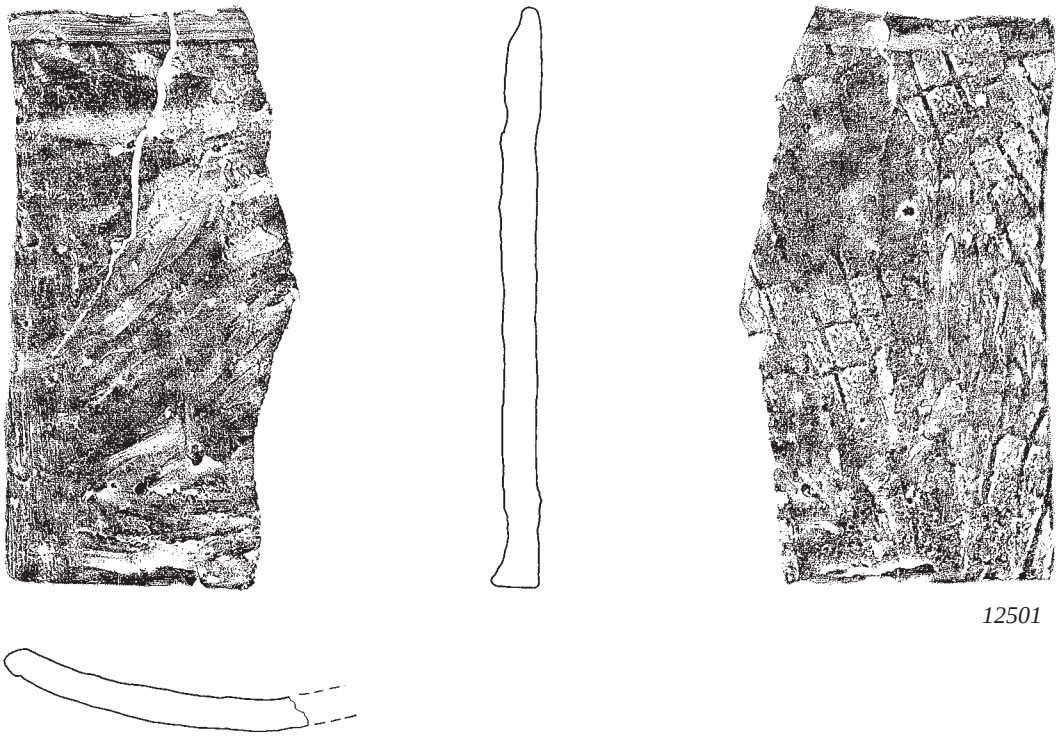
12402

0 20cm

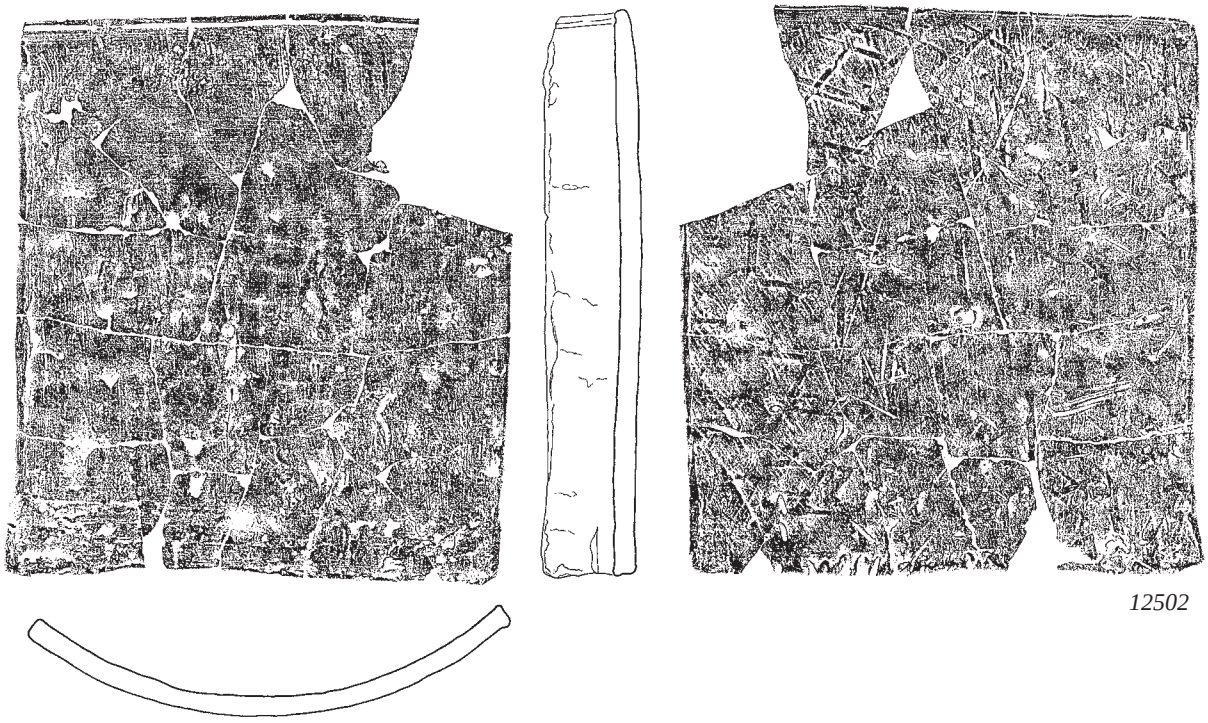
S=1：4

梟谷１号窯

窯体出土平瓦 17



12501



12502

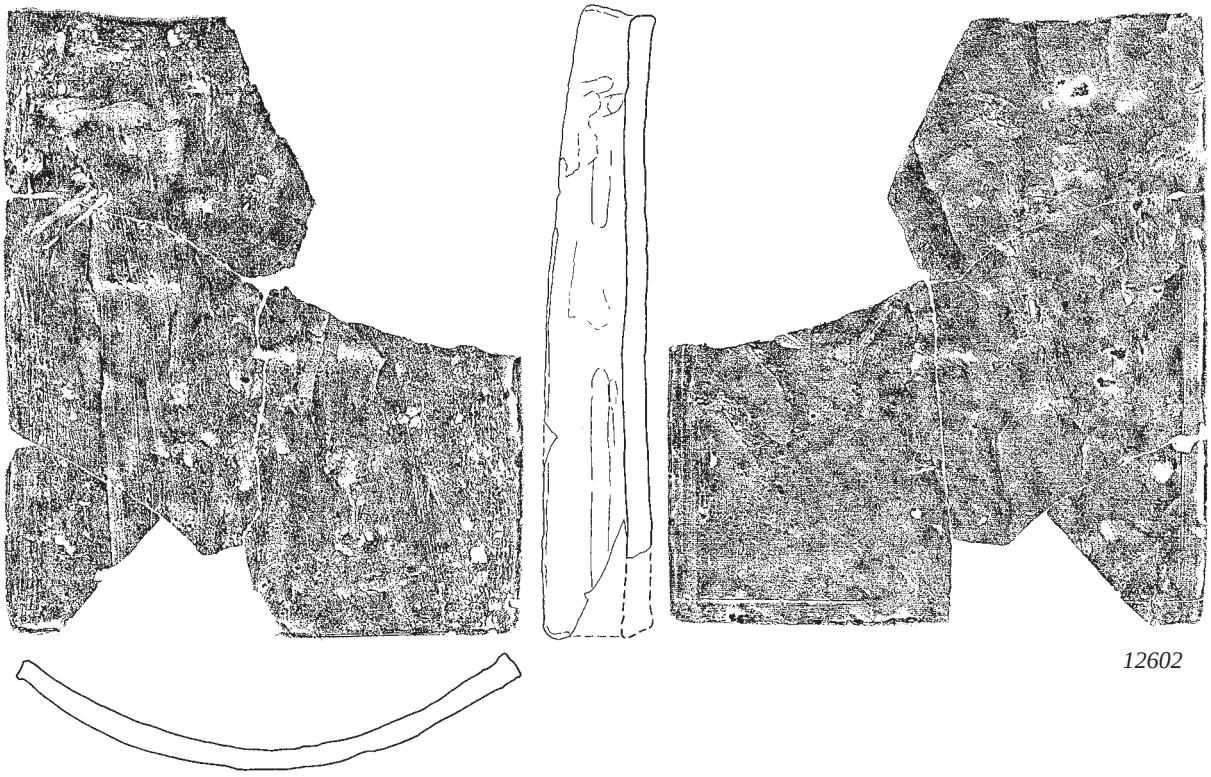
0　20cm

S=1：4

梟谷１号窯

窯体出土平瓦 18

12601



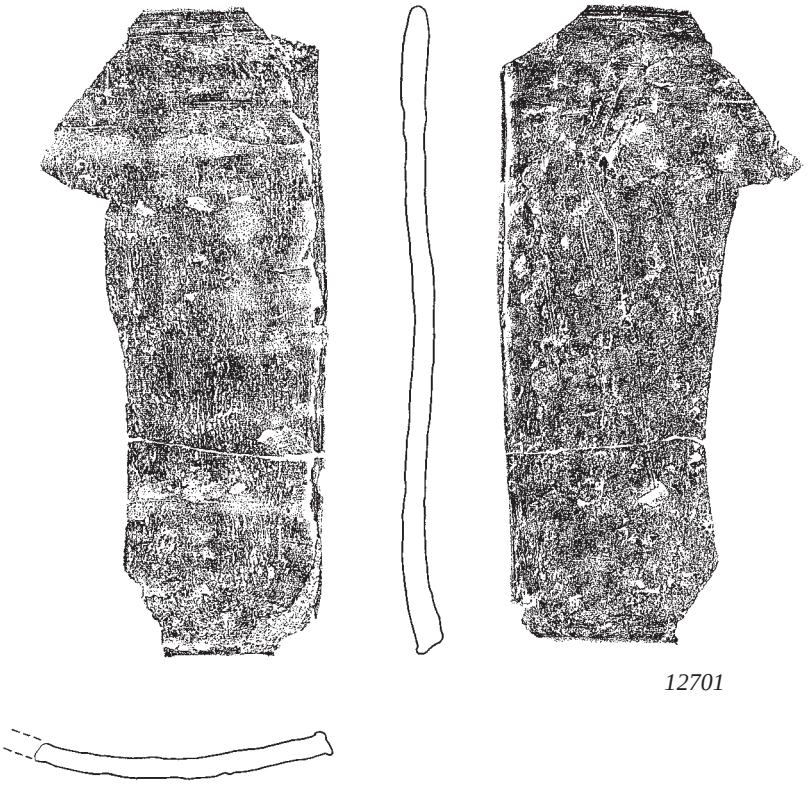
12602

0 20cm

S=1：4

梟谷1号窯

窯体出土平瓦 19



12701

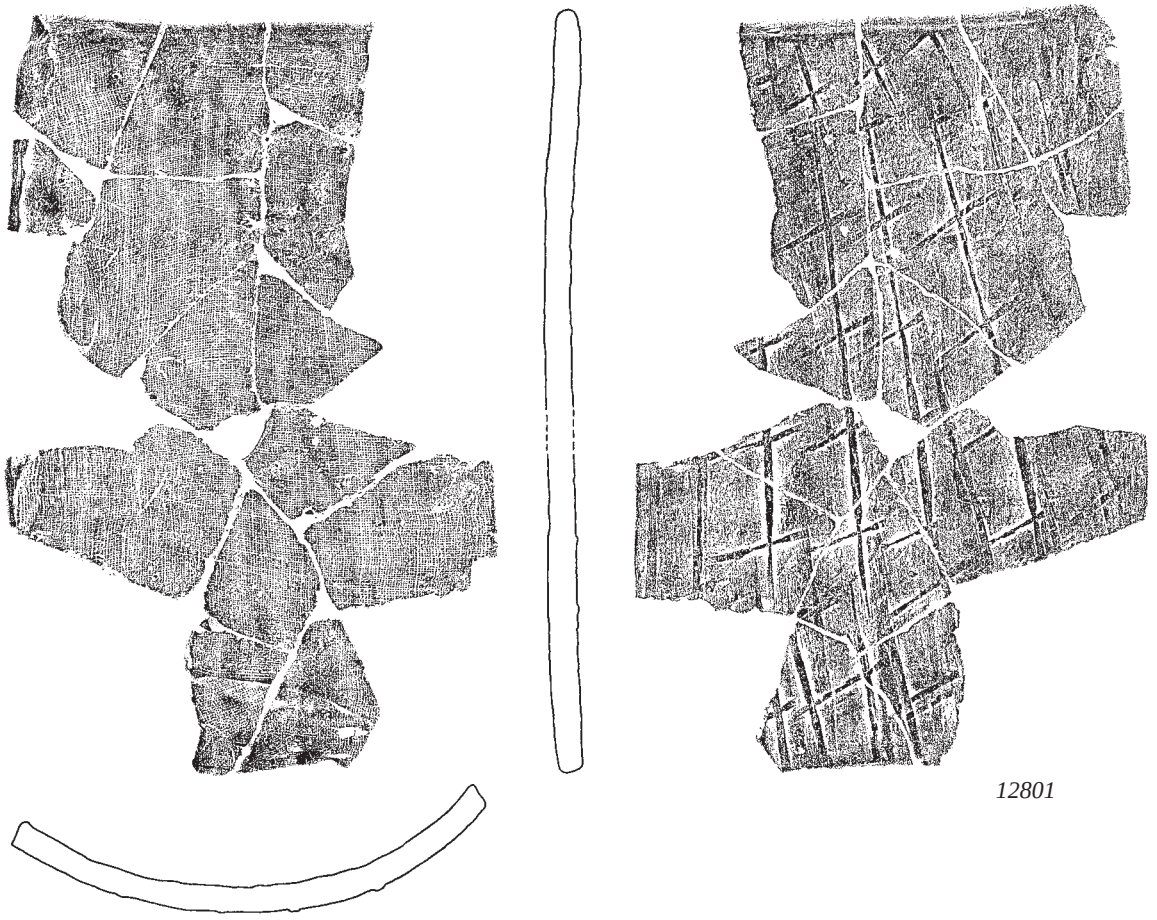
12702

0 20cm

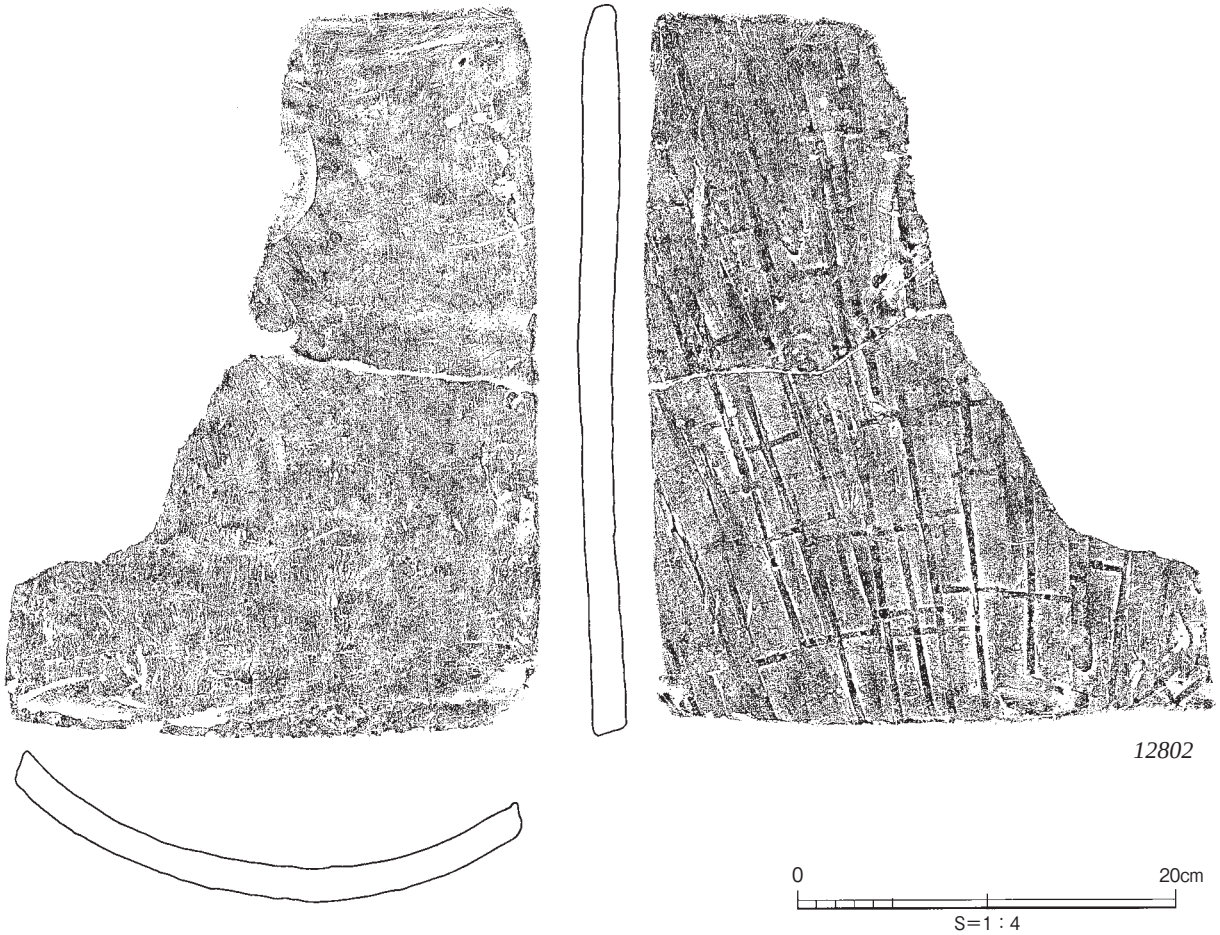
S=1：4

梟谷１号窯

灰原出土平瓦 1



12801



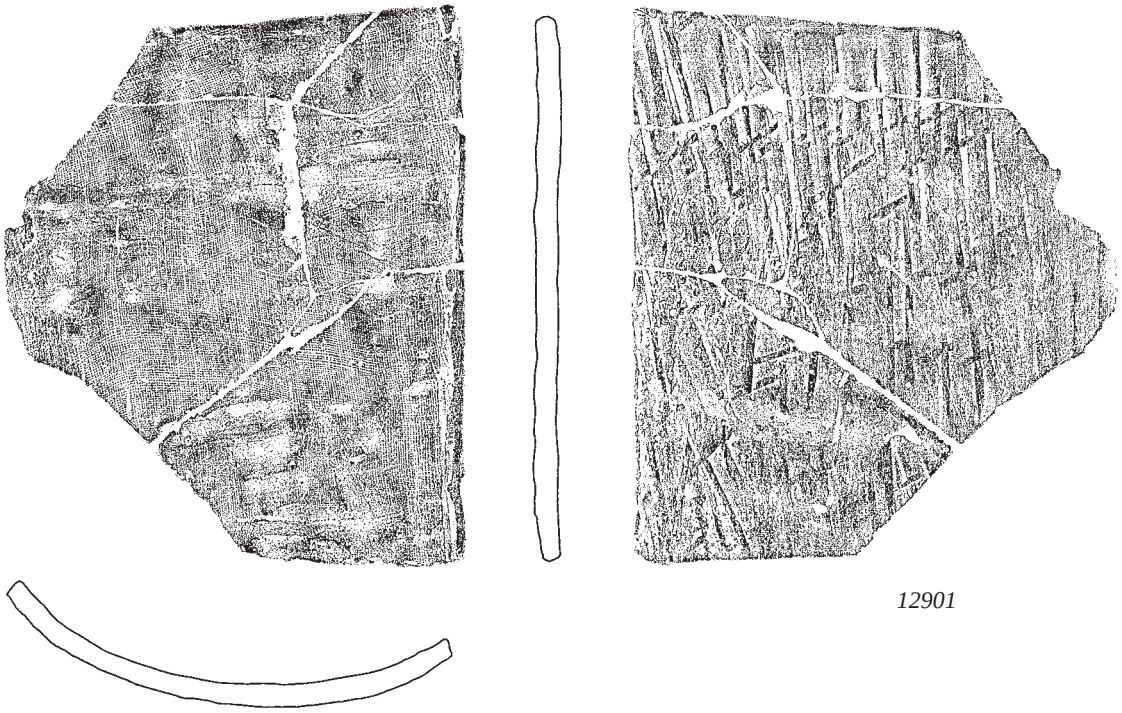
12802

0 20cm

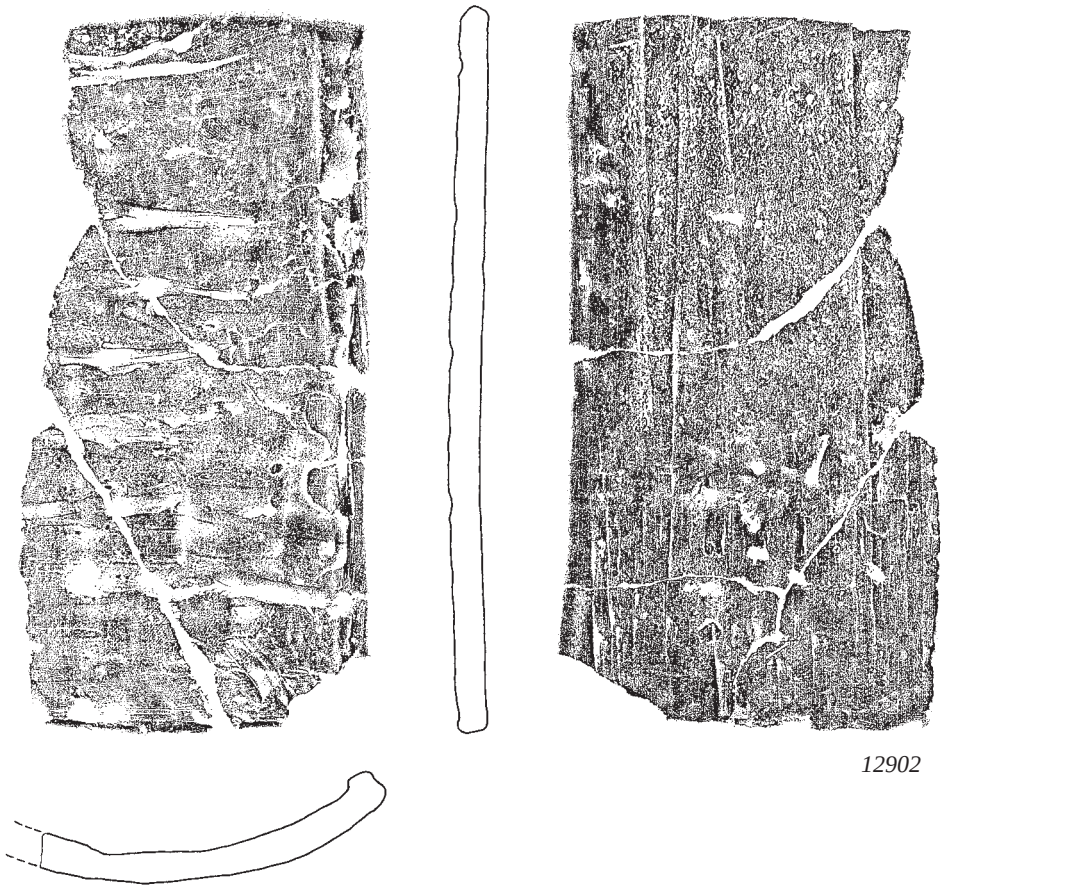
S=1：4

梟谷１号窯

灰原出土平瓦 2



12901



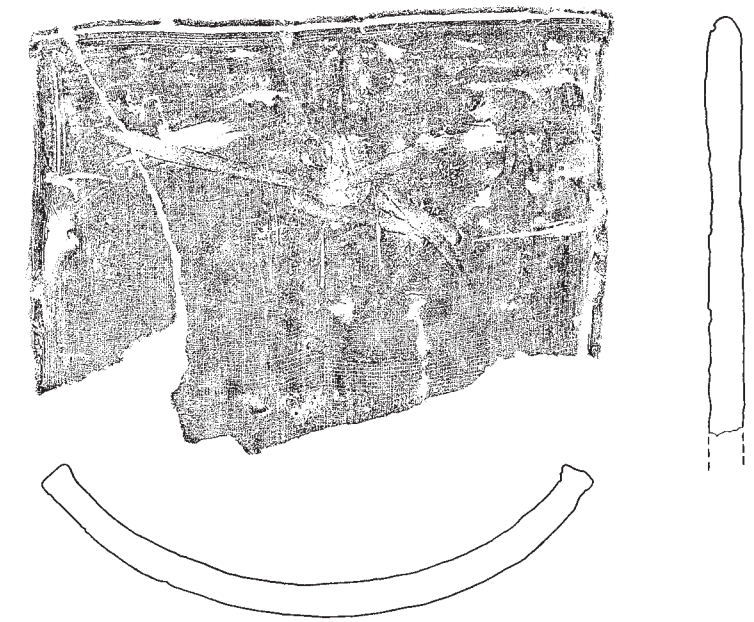
12902

0 20cm

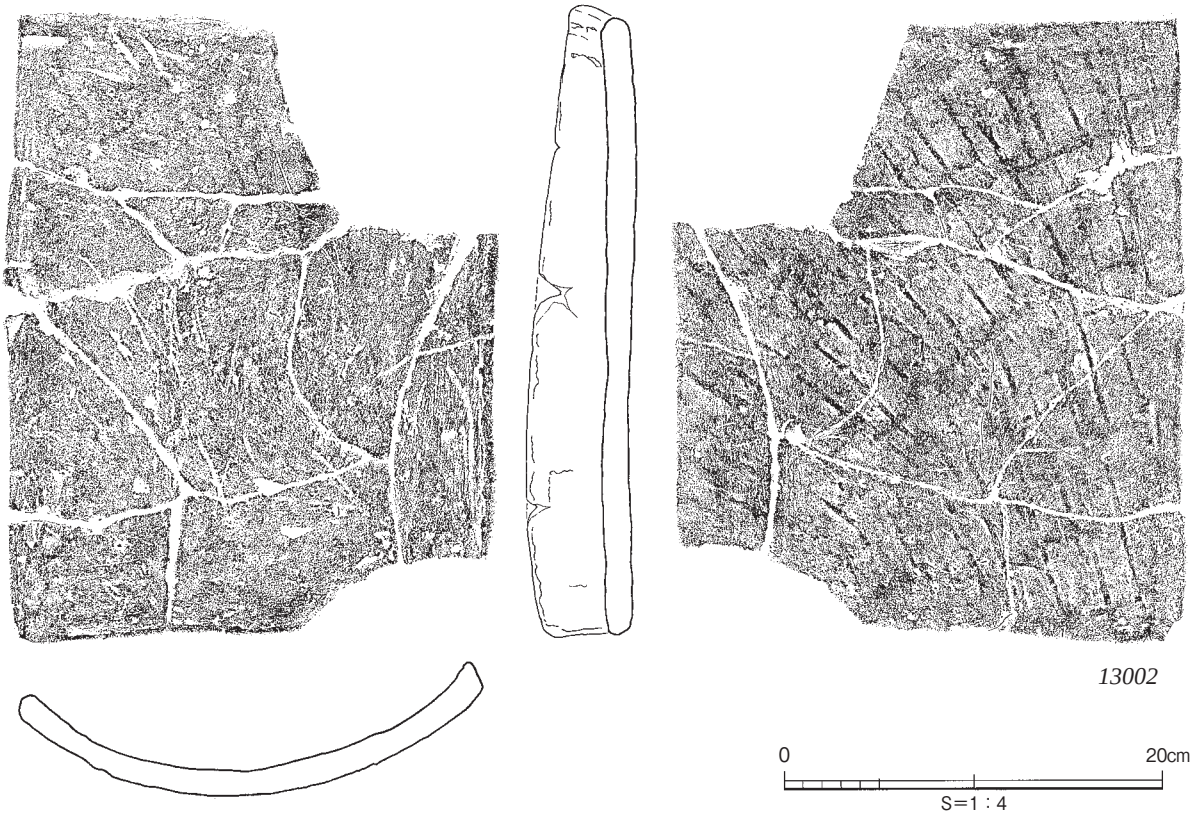
S=1：4

梟谷１号窯

灰原出土平瓦 3



13001



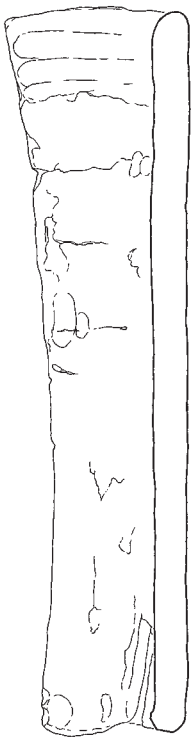
13002

0 20cm

S=1：4

梟谷１号窯

灰原出土平瓦 4



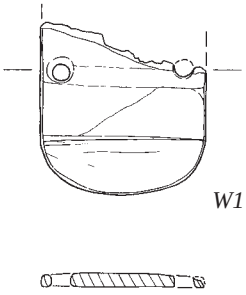
13101

0 20cm

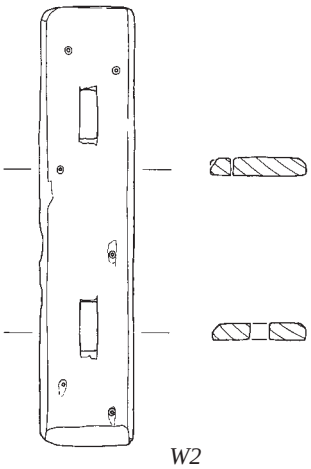
S=1：4

鴨谷１・２号窯地区

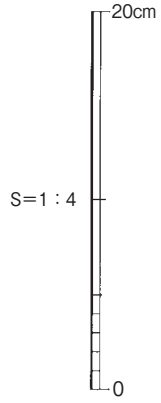
灰原出土木製品

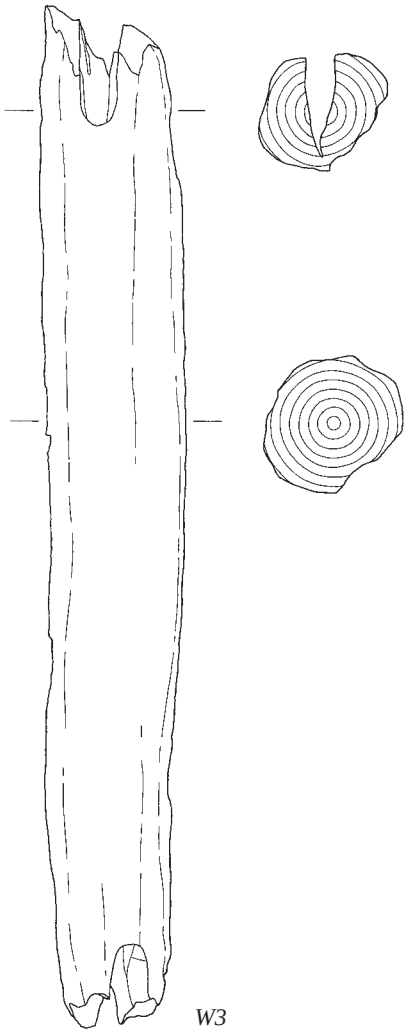


W1

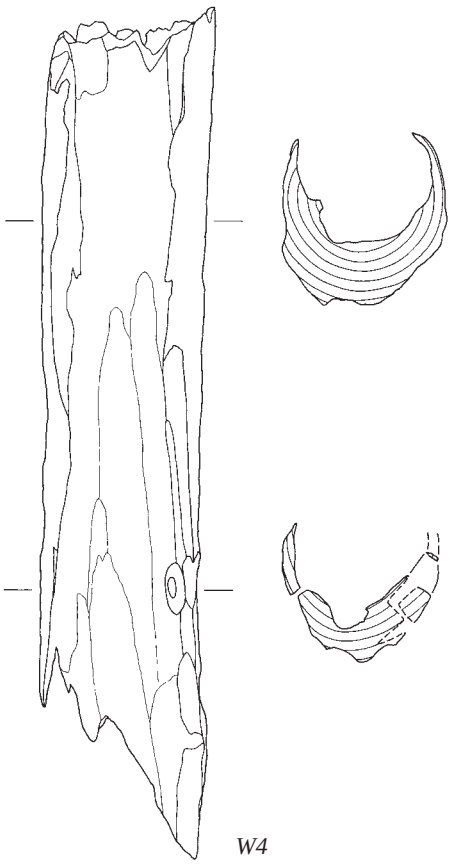


W2

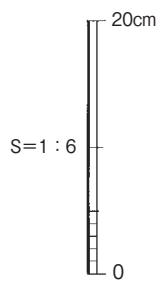




W3



W4



遺 物 写 真 図 版

a）鴨谷 1 号窯　出土須恵器

b）鴨谷 2 号窯　出土須恵器

a）鴨谷 3 号窯　出土須恵器

b）梟谷 1 号窯　出土須恵器・瓦

a）鴨谷 2 号窯　出土須恵器甕刻書

b）鴨谷 3 号窯　出土須恵器甕刻書 1

c）鴨谷 3 号窯　出土須恵器甕刻書 2

d）鴨谷 3 号窯　出土須恵器甕刻書 3

3301

9401

9501

9502

9503

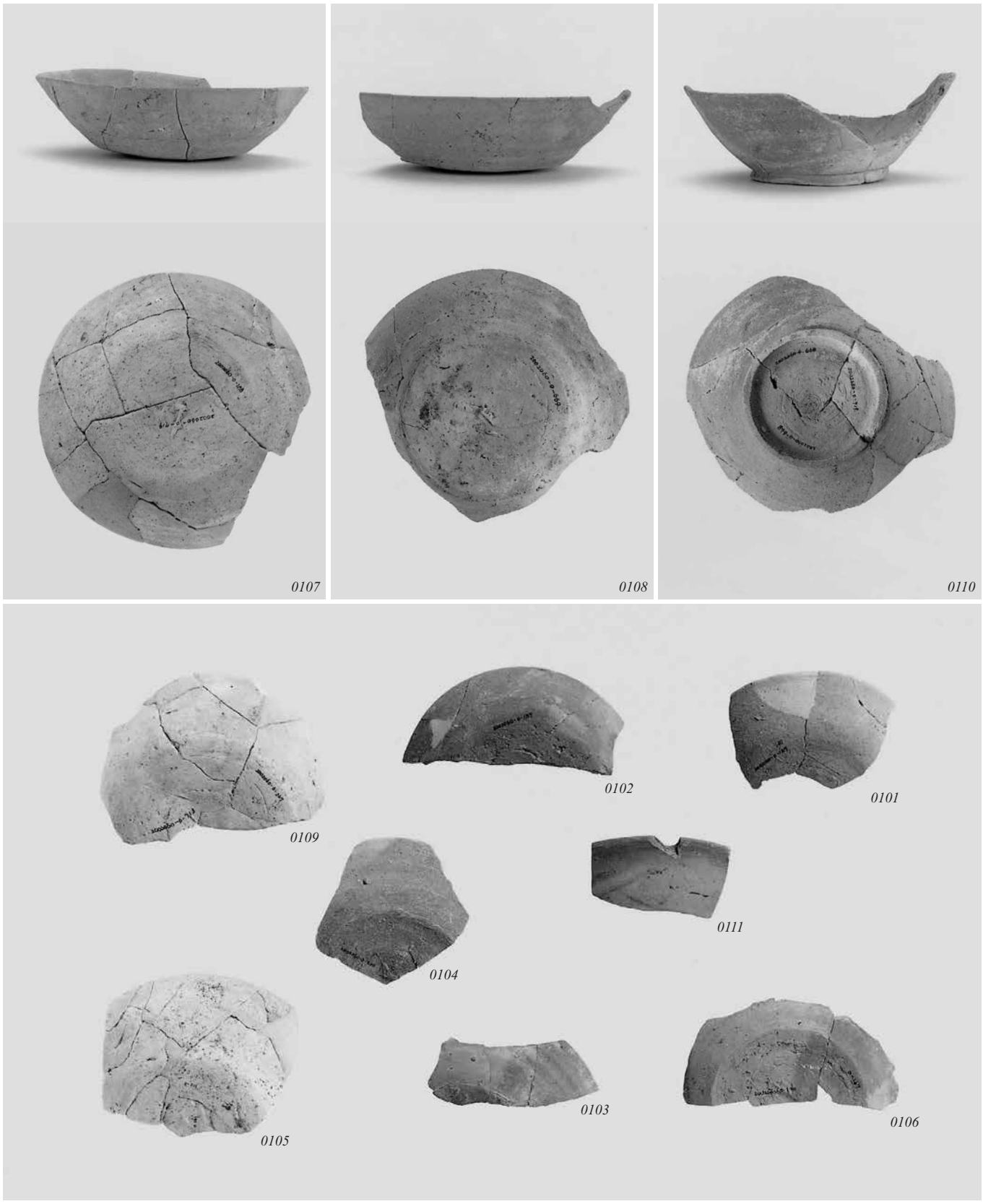
9602

9601

鴨谷 2 号窯・梟谷 1 号窯出土瓦

鴨谷 1 号窯

窯体出土須恵器

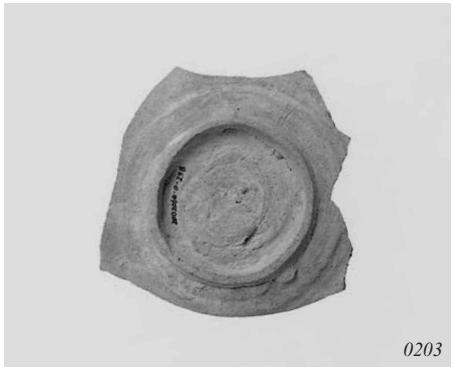


鴨谷 1 号窯

灰原出土須恵器 1

0201

0202


0203

0204

0205

0221

0222

0223

0211

0213

0215

0216

0219

0220

鴨谷 1 号窯

灰原出土須恵器 2

0311

0307

0309

0314

0315

0313

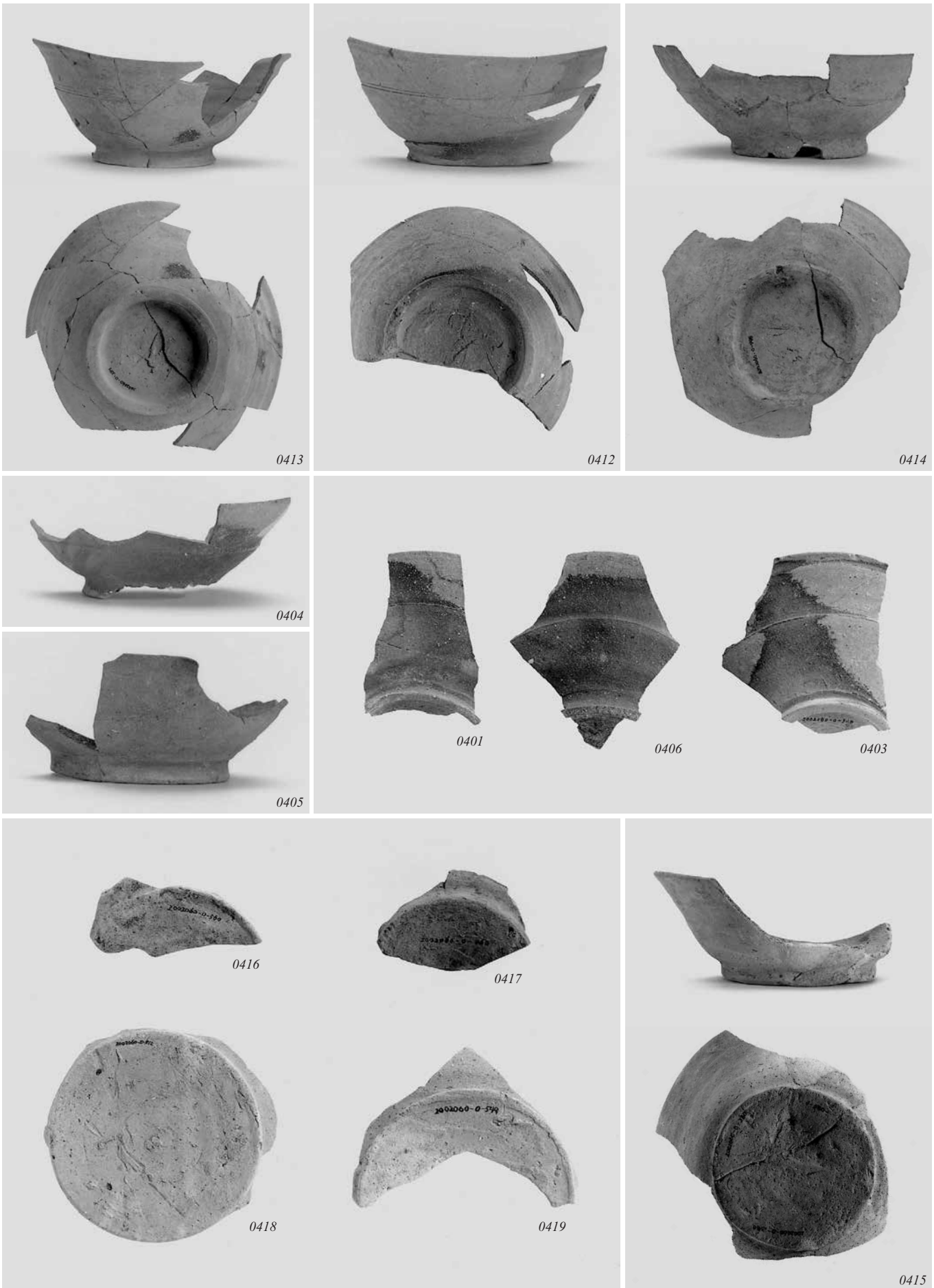
0303

0312

0310

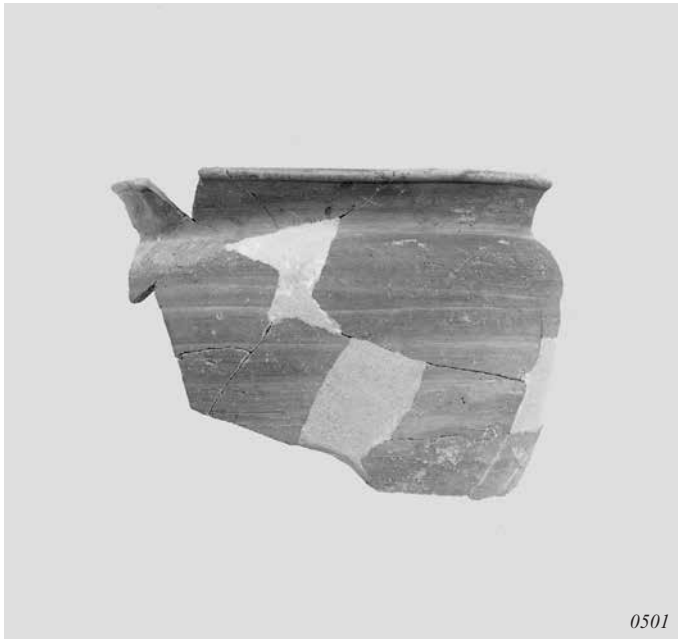
鴨谷 1 号窯

灰原出土須恵器 3



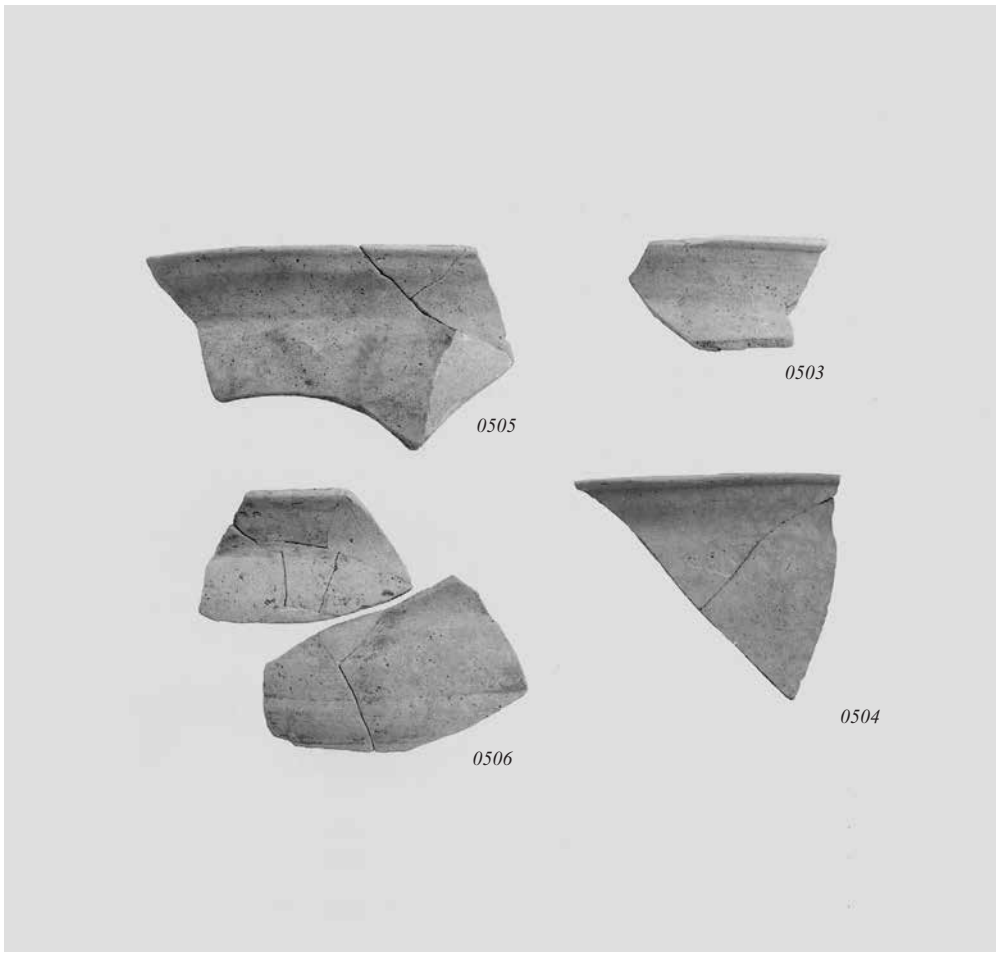
鴨谷 1 号窯

灰原出土須恵器 4


0501

0502

0507


0505

0503

0506

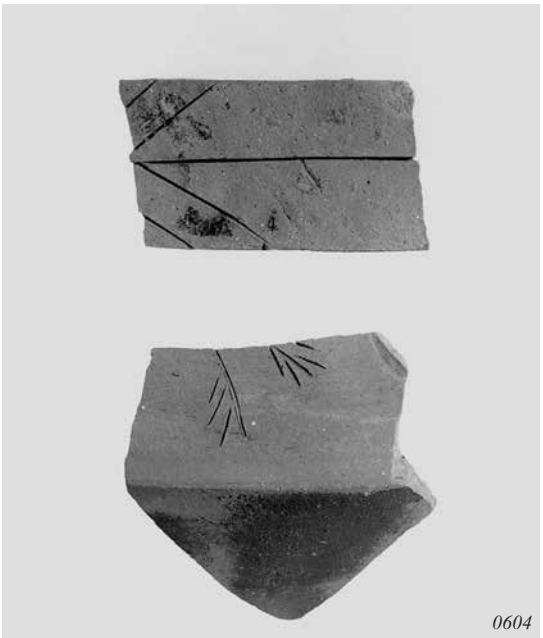
0504

鴨谷１号窯

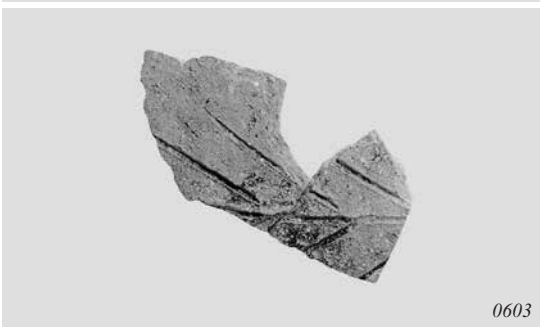
灰原出土須恵器 5

0601

0602



0604



0603

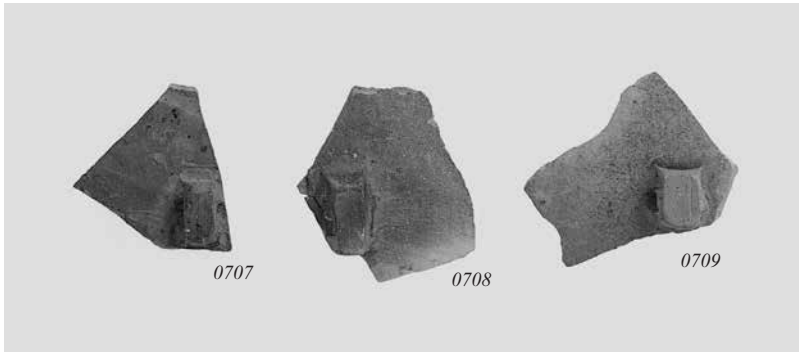
鴨谷１号窯

灰原出土須恵器 6

0701

0702

0704


0707 0708 0709

0712

0710

0711

鴨谷 1 号窯

灰原出土須恵器 7

0803

0802

0801

0809

0807

0808

鴨谷 1 号窯

灰原出土須恵器 8

1003

0905

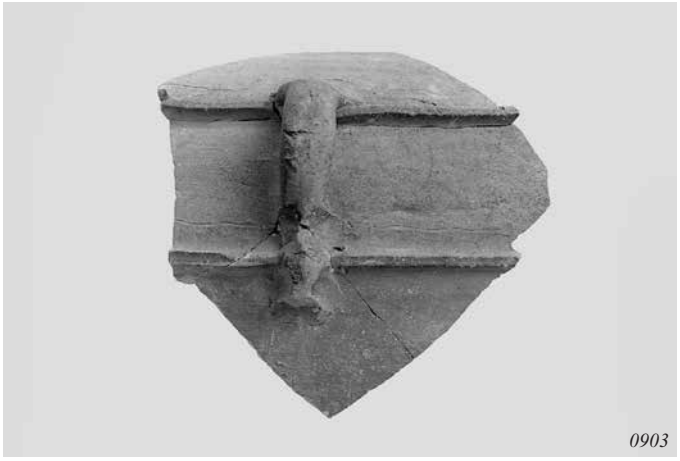
鴨谷１号窯

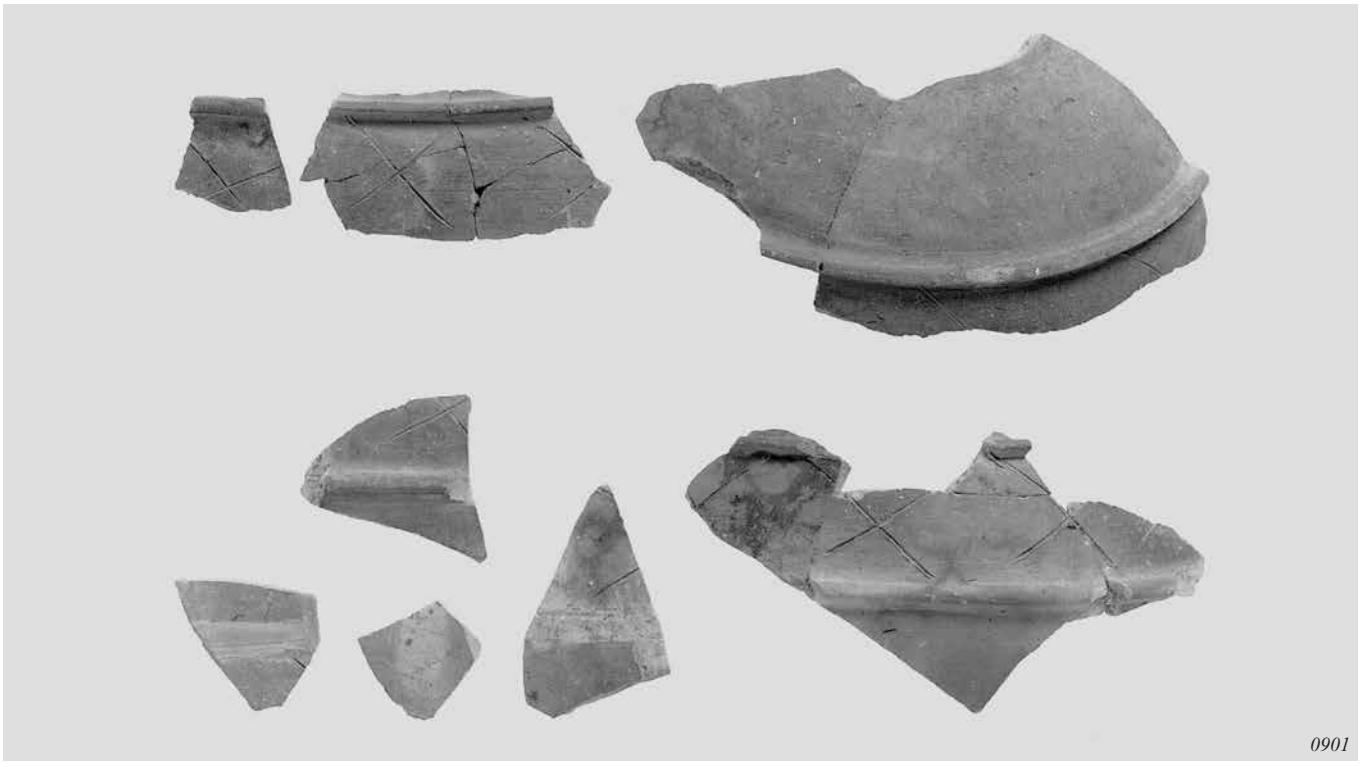
灰原出土須恵器 9

1004

0902

0904


0903


0901

鴨谷 1 号窯

灰原出土須恵器 10

1105

1101

1106

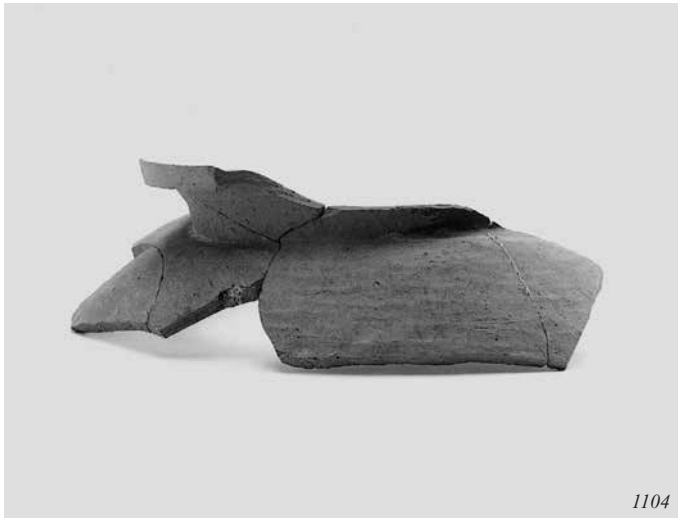
鴨谷 1 号窯

灰原出土須恵器 11

1203

1202

1102



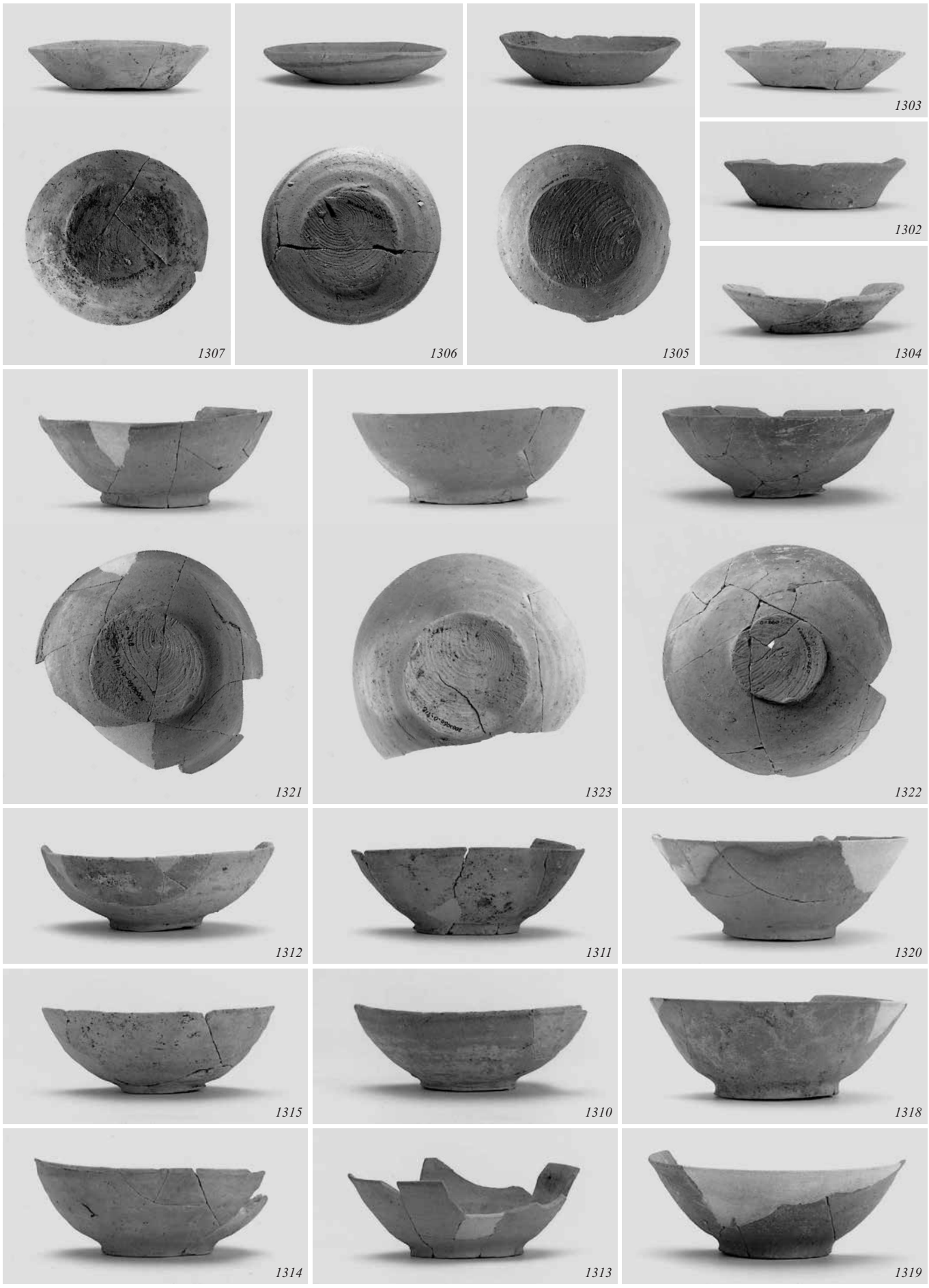
1104

1205

1204

鴨谷 2 号窯

窯体出土須恵器 1



鴨谷 2 号窯

窯体出土須恵器 2

1402

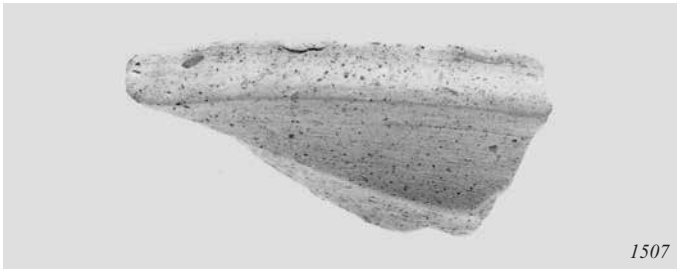
1403

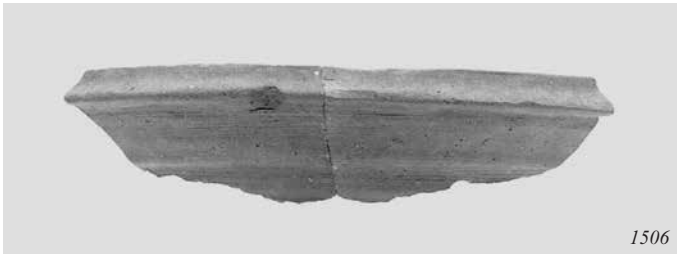
1401

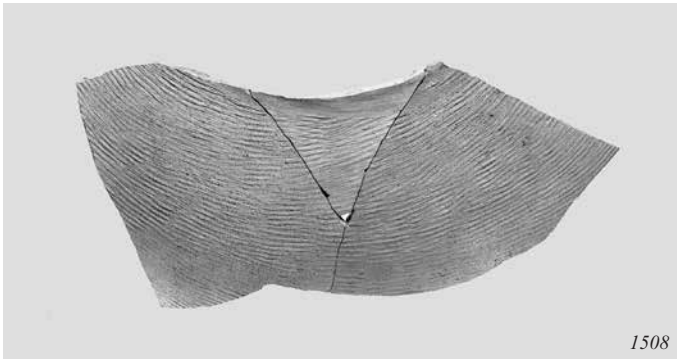
1404

1405

1409


1507

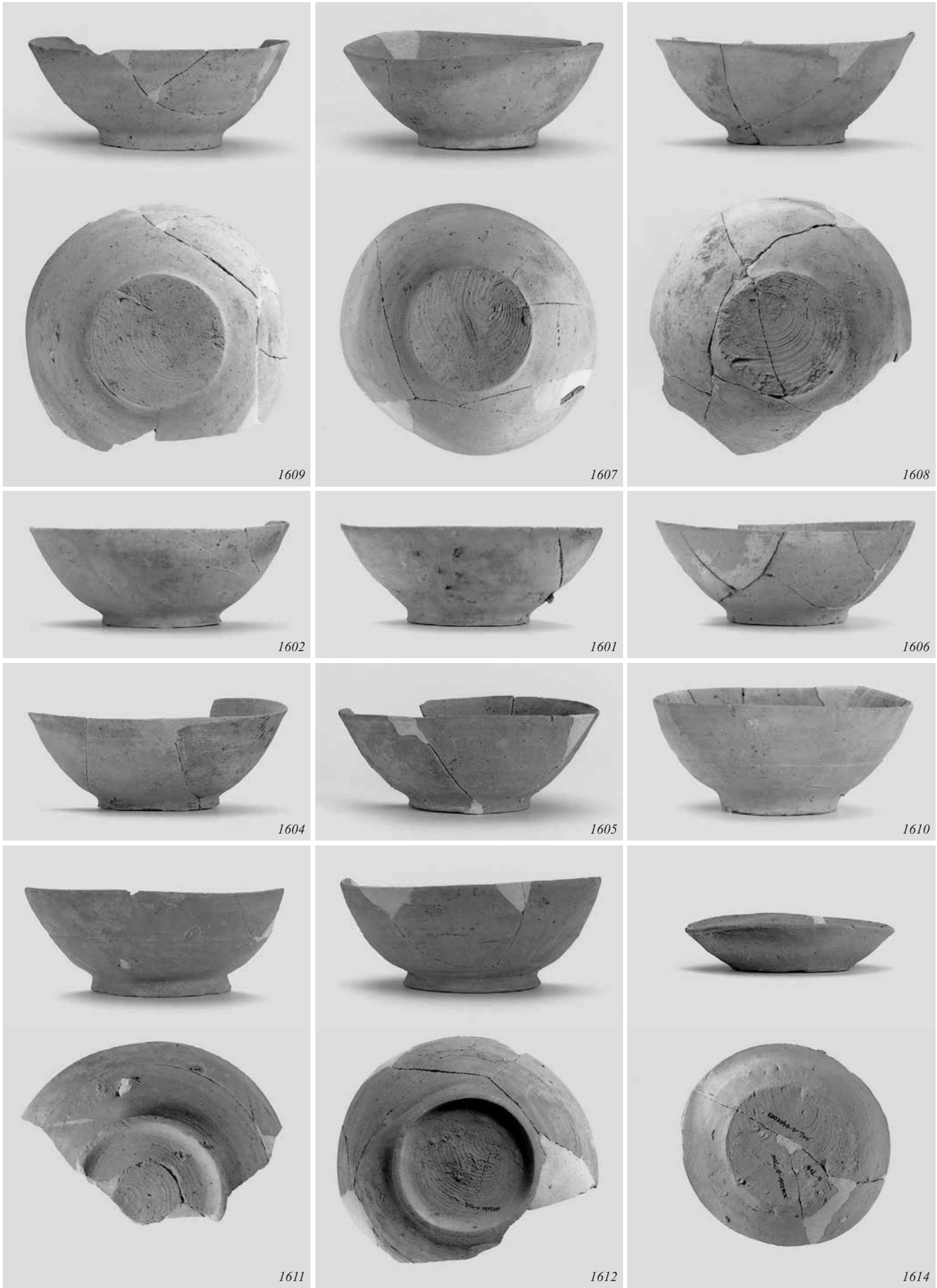

1506


1508

1504

鴨谷 2 号窯

窯体出土須恵器 3



鴨谷 2 号窯

灰原出土須恵器 1

1703

1701

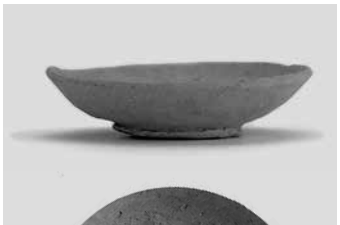
1704

1702

1713

1708

1709



1705

1717

1719

1721

1722

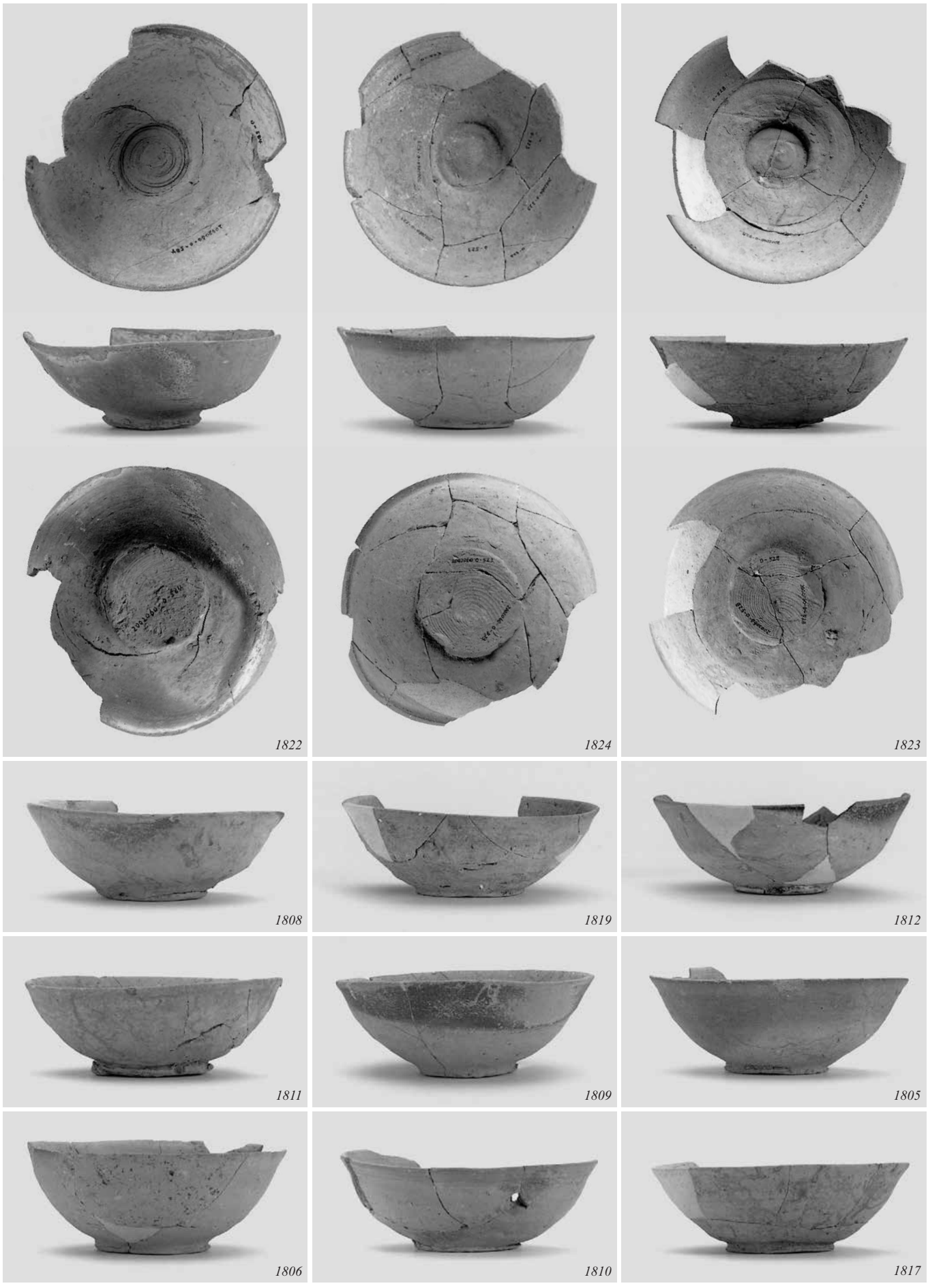
1730

1726

1727

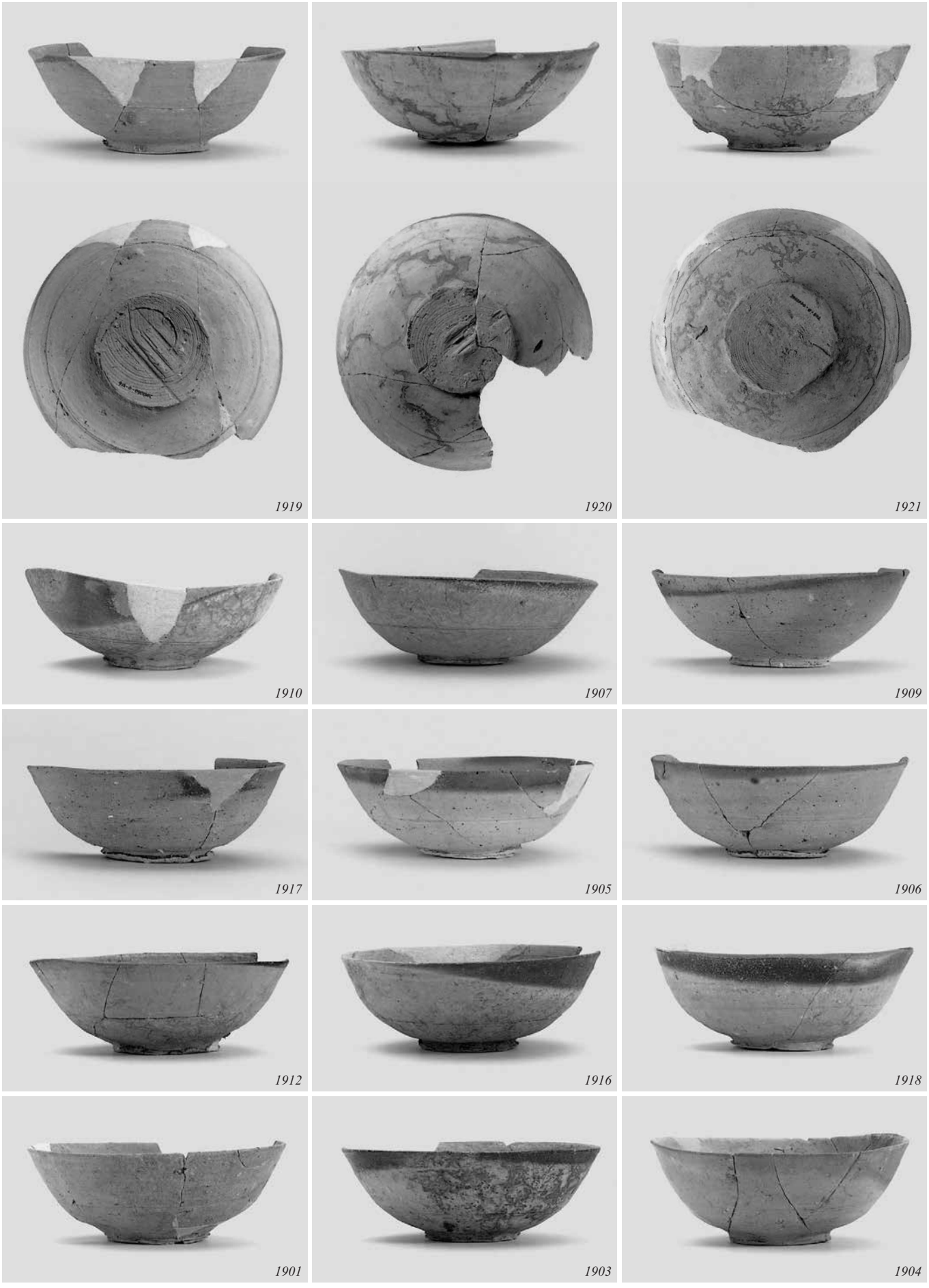
鴨谷 2 号窯

灰原出土須恵器 2



鴨谷 2 号窯

灰原出土須恵器 3



鴨谷 2 号窯

灰原出土須恵器 4

2002

2001

2005

2006

鴨谷 2 号窯

灰原出土須恵器 5

2105

2102

2101

2107

2108

鴨谷 2 号窯

灰原出土須恵器 6

2201

2203

2204

2205

2207

2206

鴨谷 2 号窯

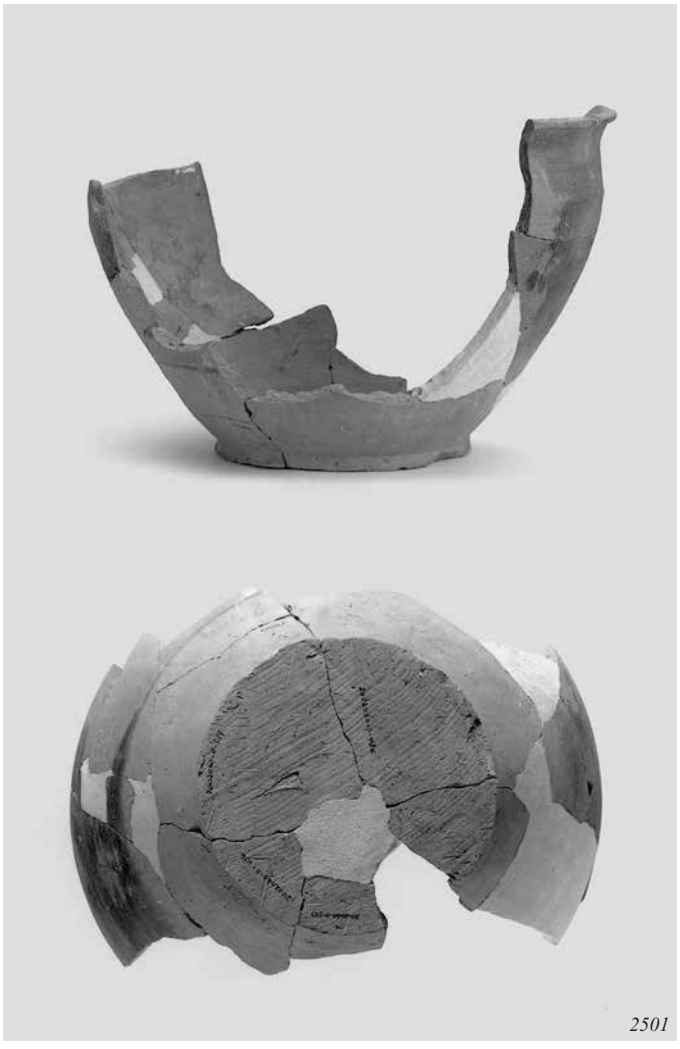
灰原出土須恵器 7

2305

2302

2307

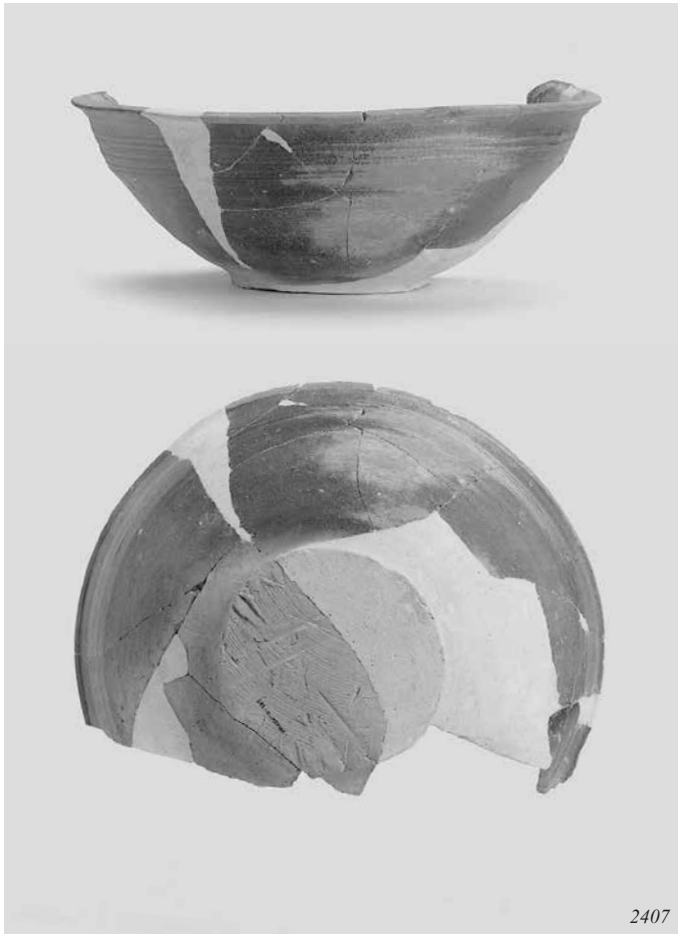
2308


2501

2503

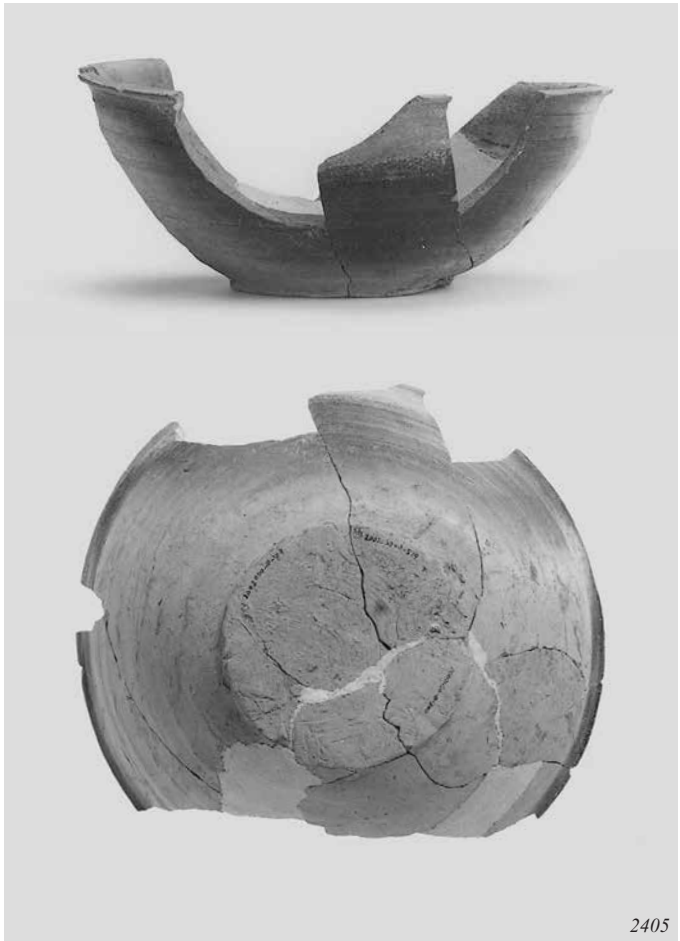
鴨谷 2 号窯

灰原出土須恵器 8



2407

2404



2405

2402

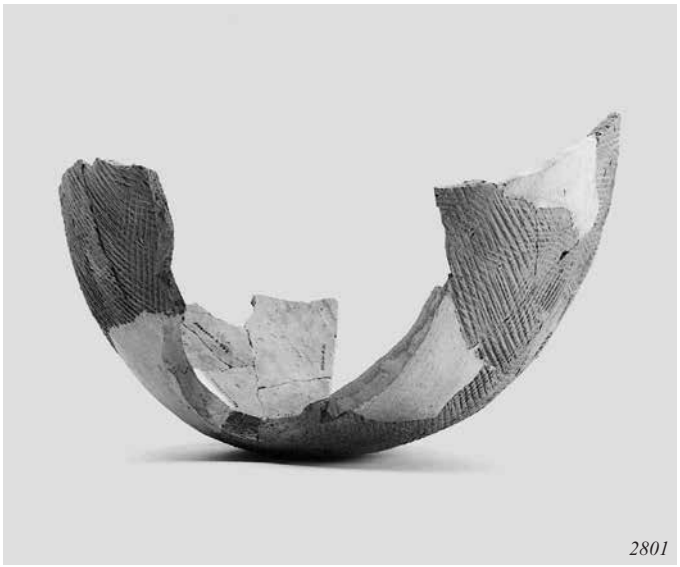
鴨谷 2 号窯

灰原出土須恵器 9

2602

2601

2702


2801

2701

2802

鴨谷 2 号窯

灰原出土須恵器 10

3001

3002

鴨谷 2 号窯

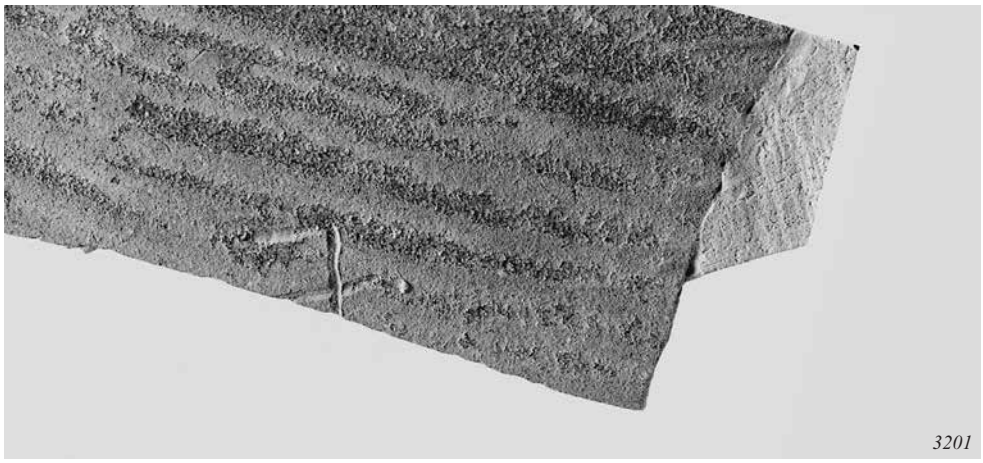
灰原出土須恵器 11

2904

3101

鴨谷 2 号窯

須恵器甕刻書



3201

3101

鴨谷 2 号窯

窯体・灰原出土軒平瓦

3301

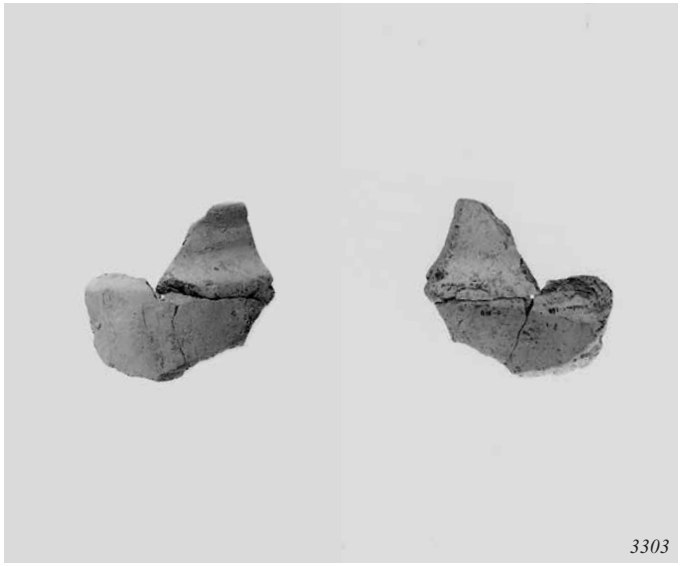
3302

3301

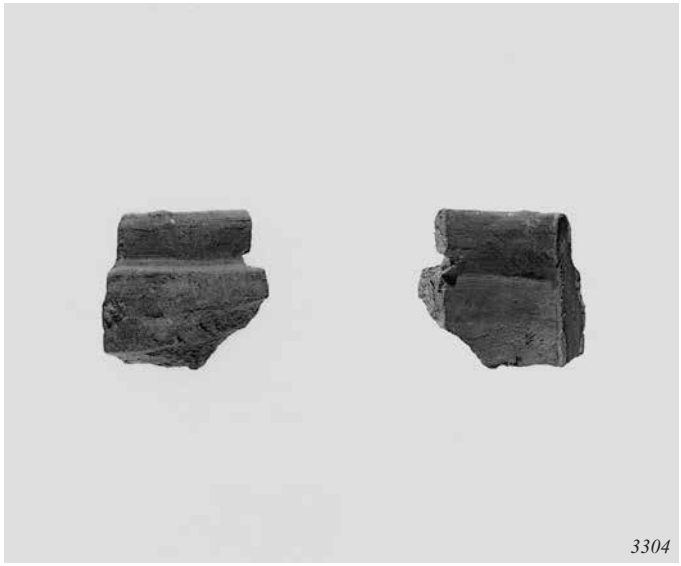
3302

鴨谷 2 号窯

灰原出土丸瓦・平瓦

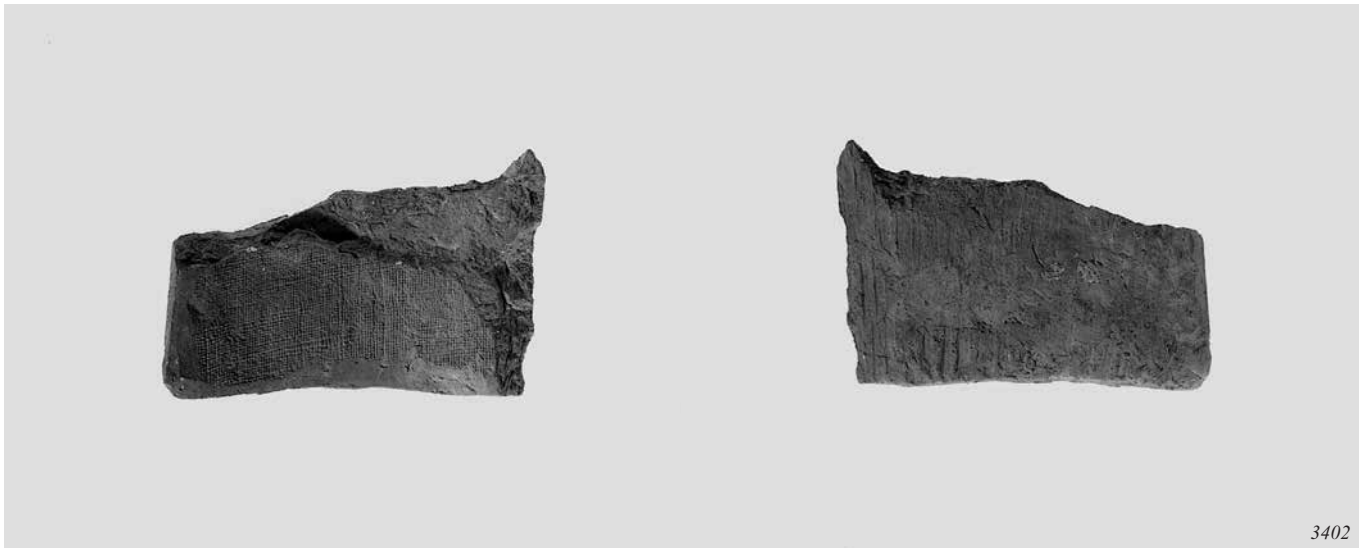


3303



3304

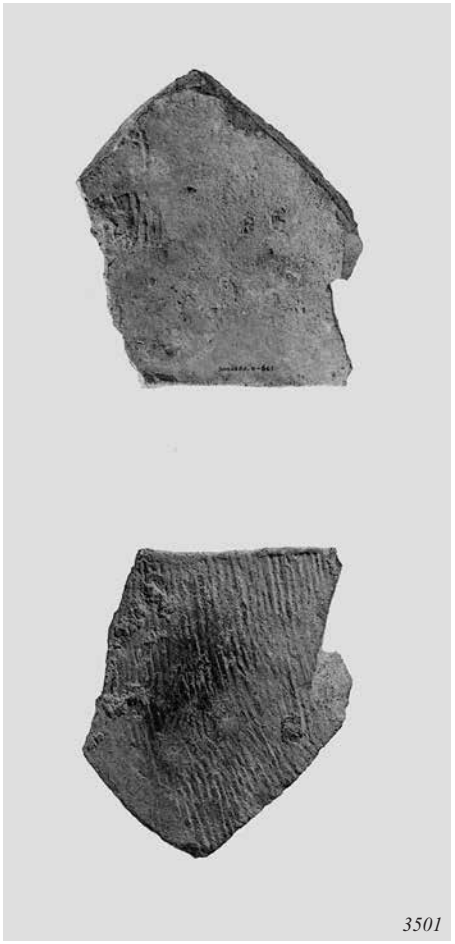
3401



3402

鴨谷 2 号窯

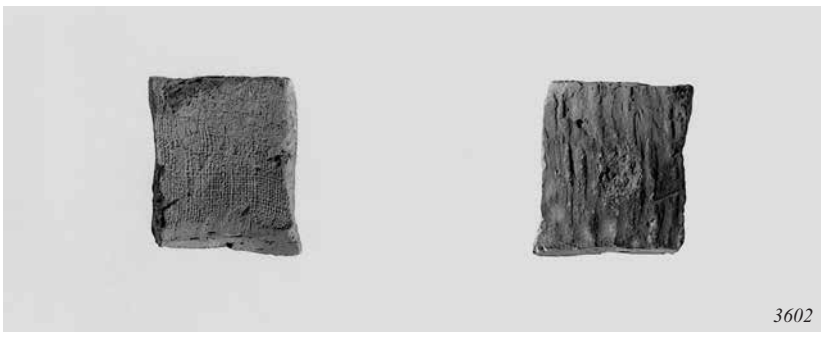
灰原出土平瓦 1


3501

3502

3503

3601


3602

3603

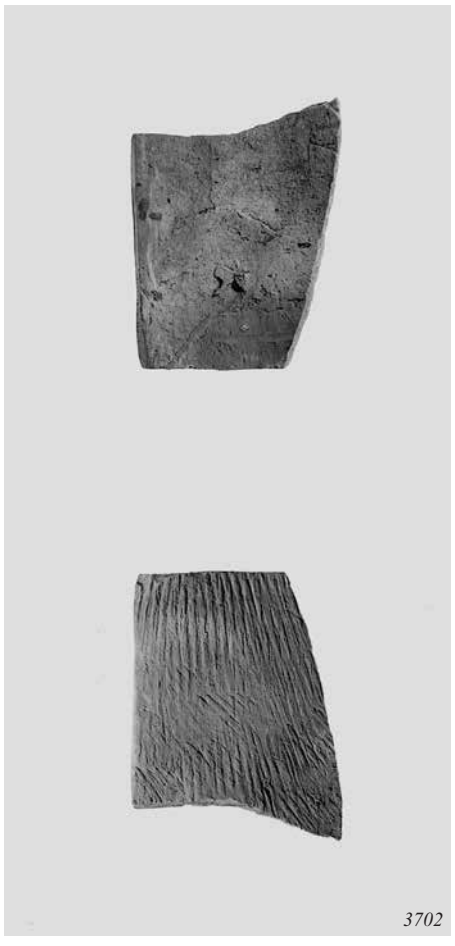
鴨谷 2 号窯

灰原出土平瓦 2

3604

3605

3701


3702

3703

3704

鴨谷 2 号窯

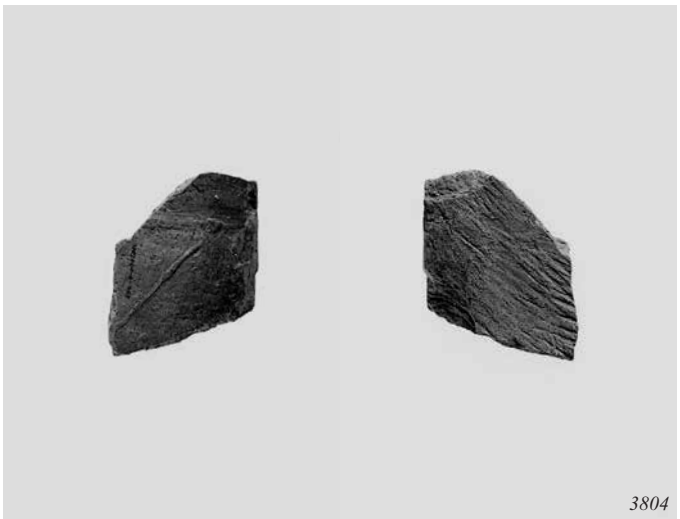
灰原出土平瓦 3

3705

3801

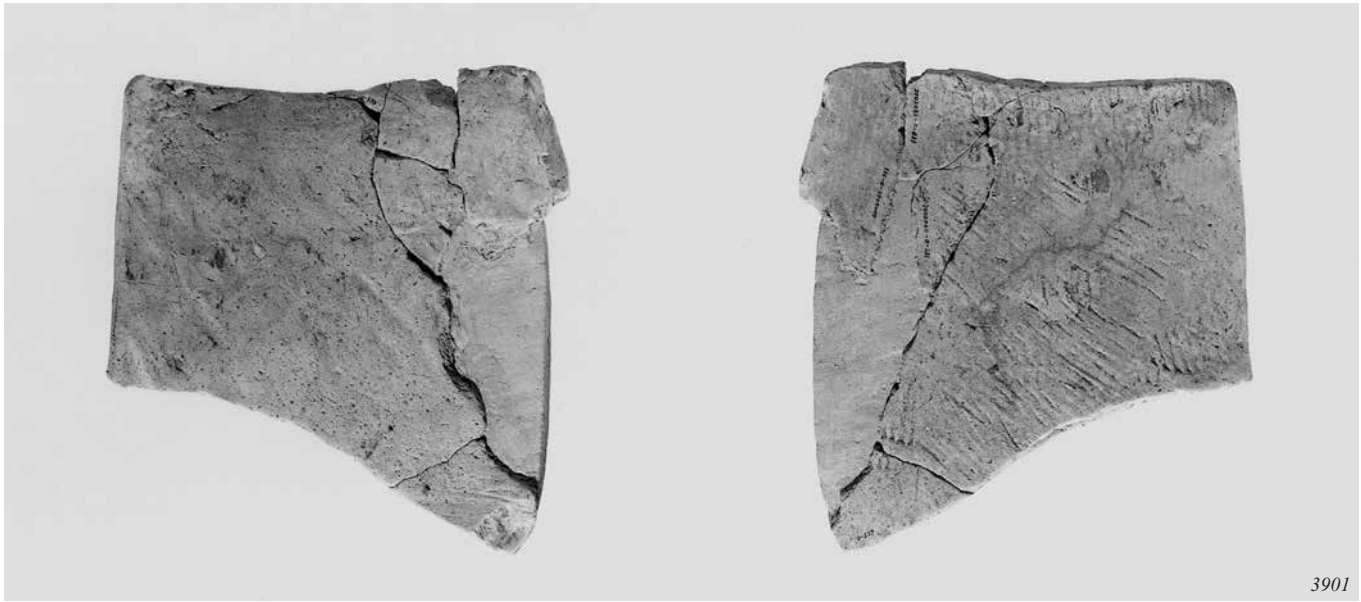
3802

3803

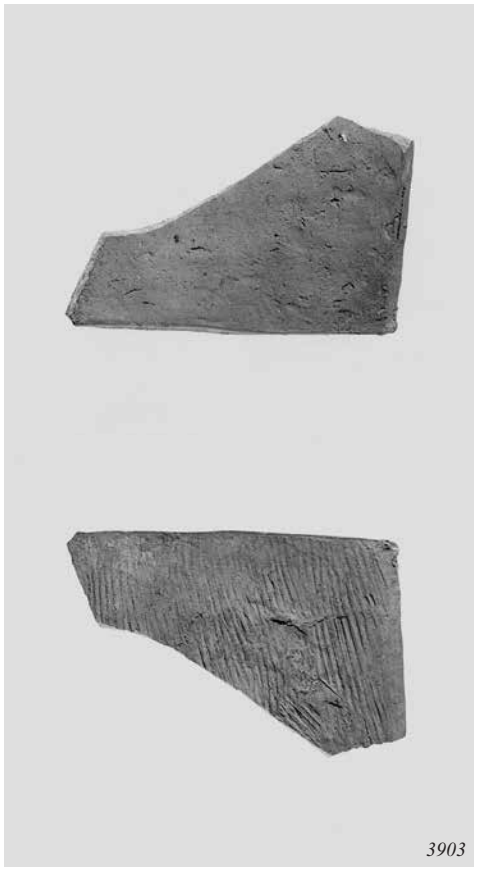

3804

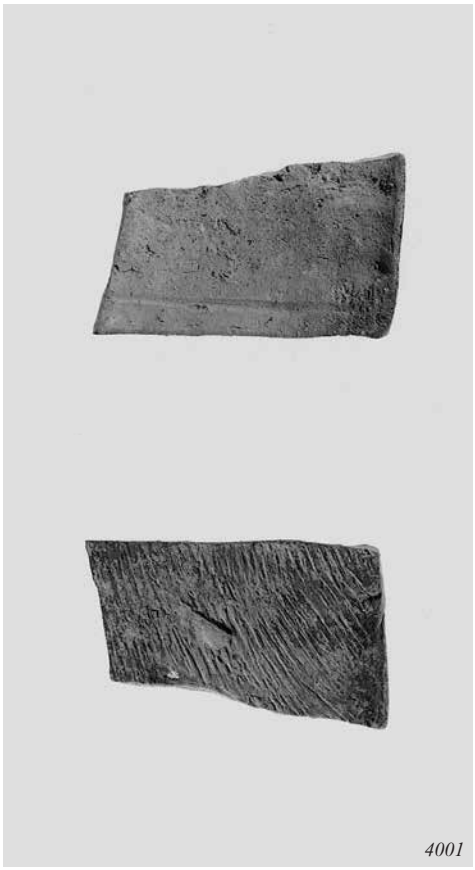
鴨谷 2 号窯

灰原出土平瓦 4


3901

3902

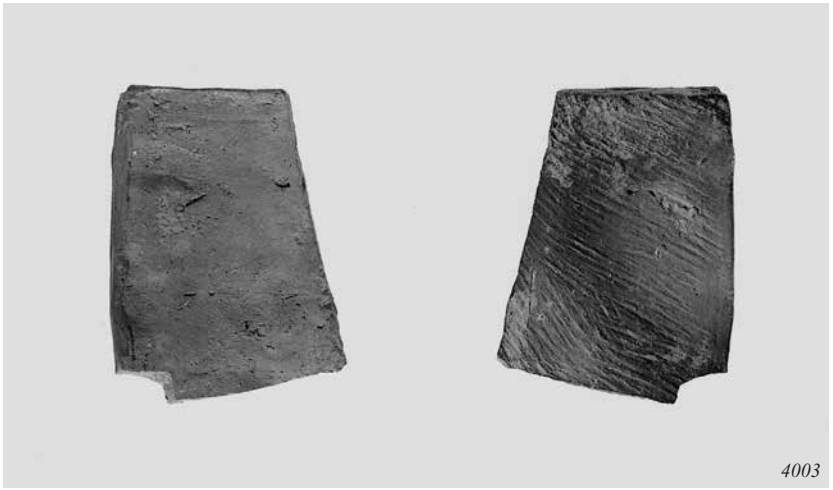

3903

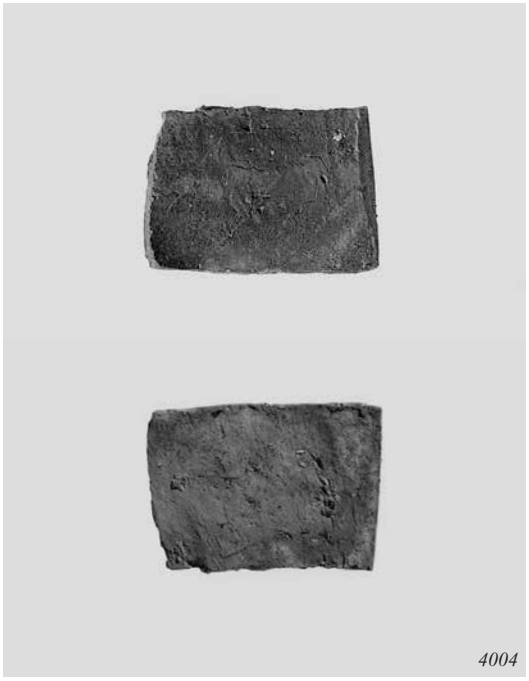

4001

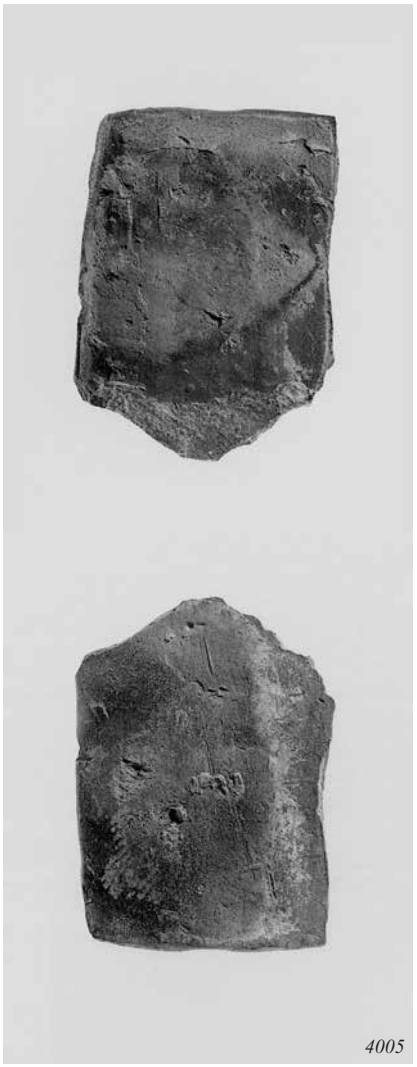
4002

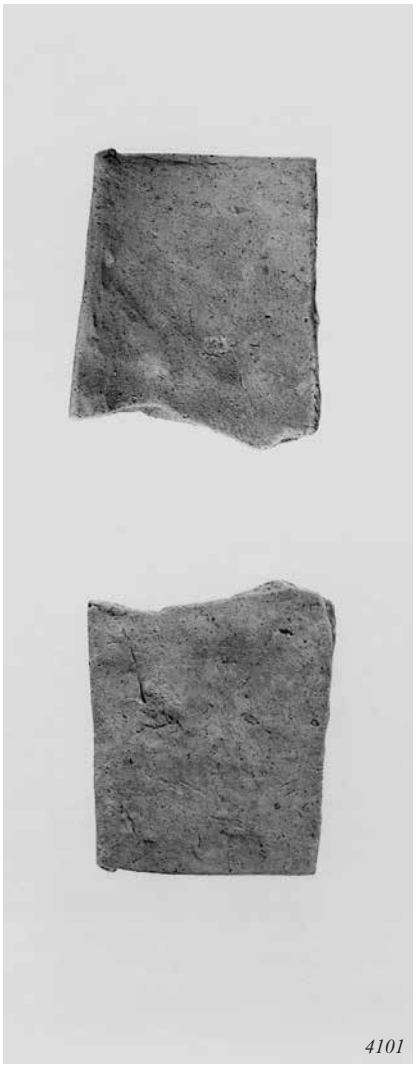
鴨谷 2 号窯

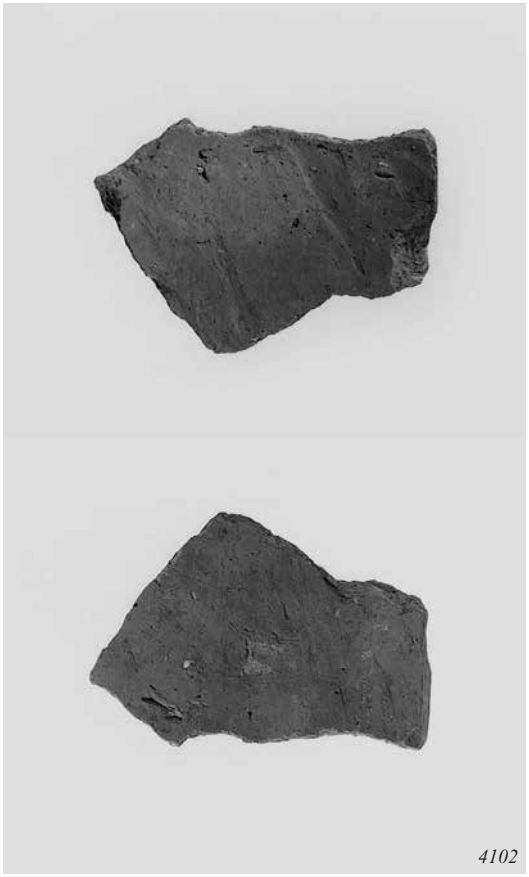
灰原出土平瓦 5


4003


4004

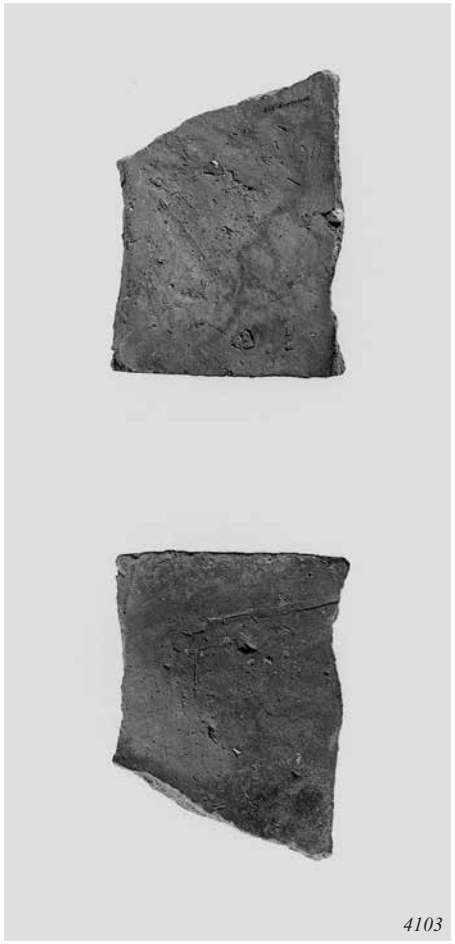

4005

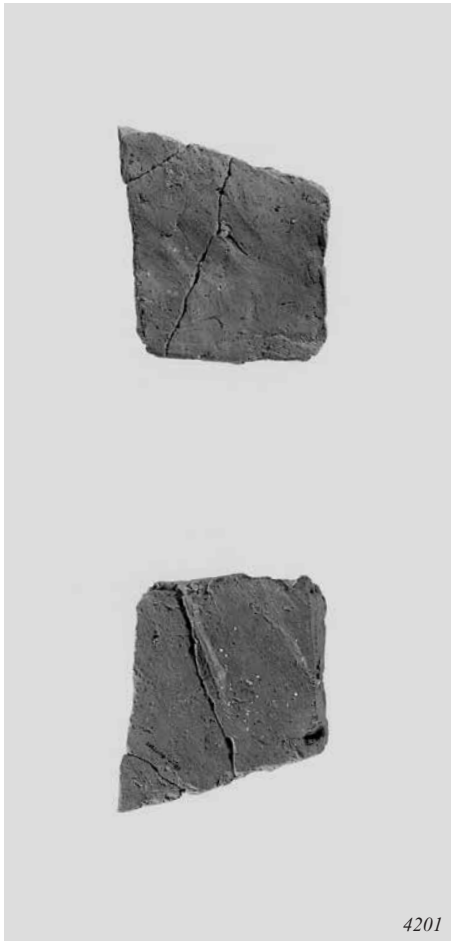

4101


4102

鴨谷 2 号窯

灰原出土平瓦 6


4103


4201

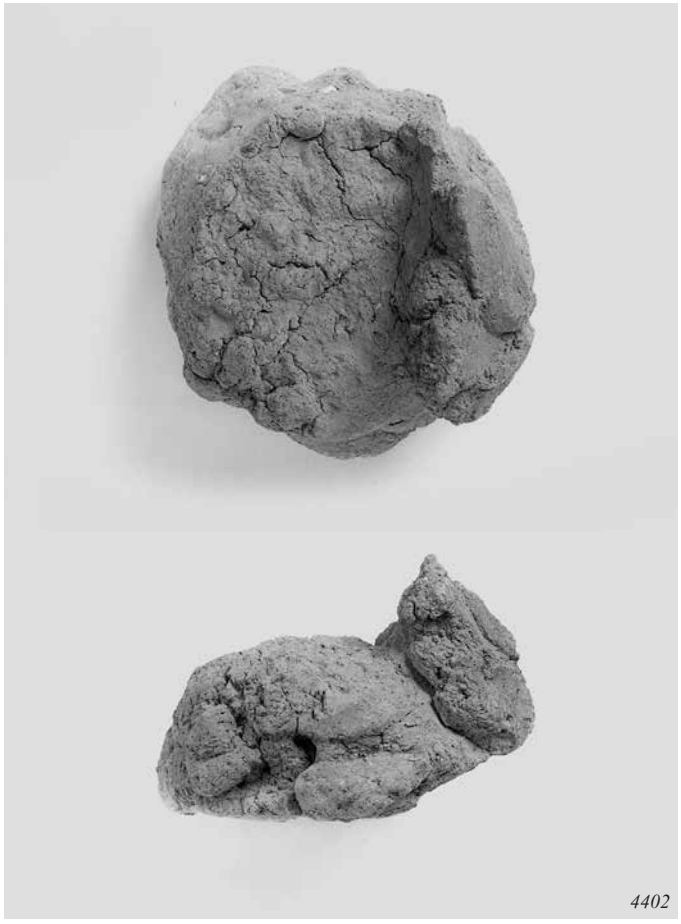
4202

4203

鴨谷 2 号窯

焼台 1

4401

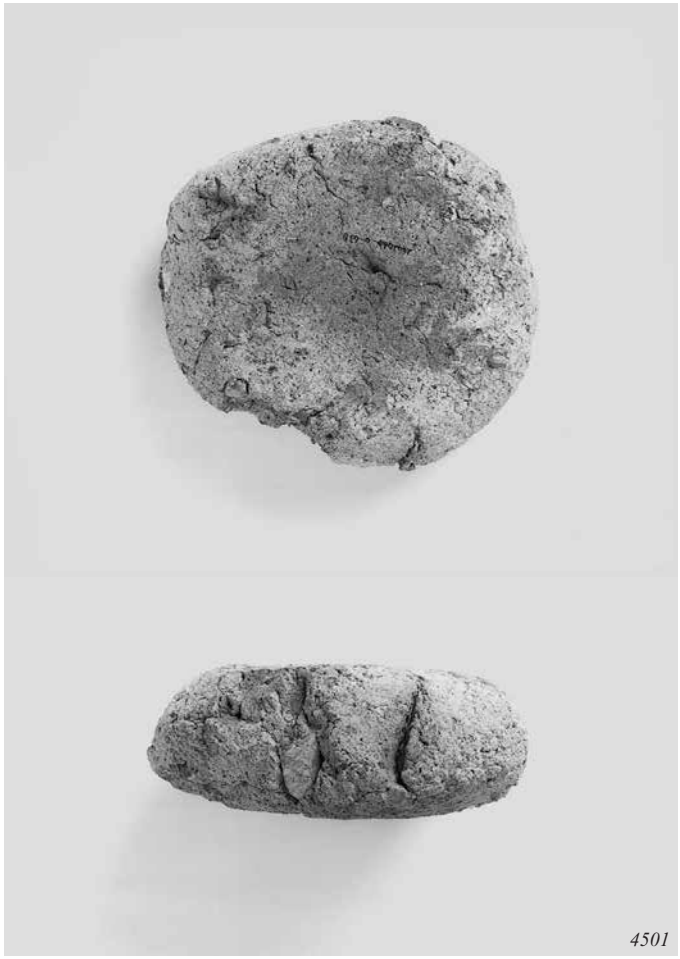

4402

4403

4404

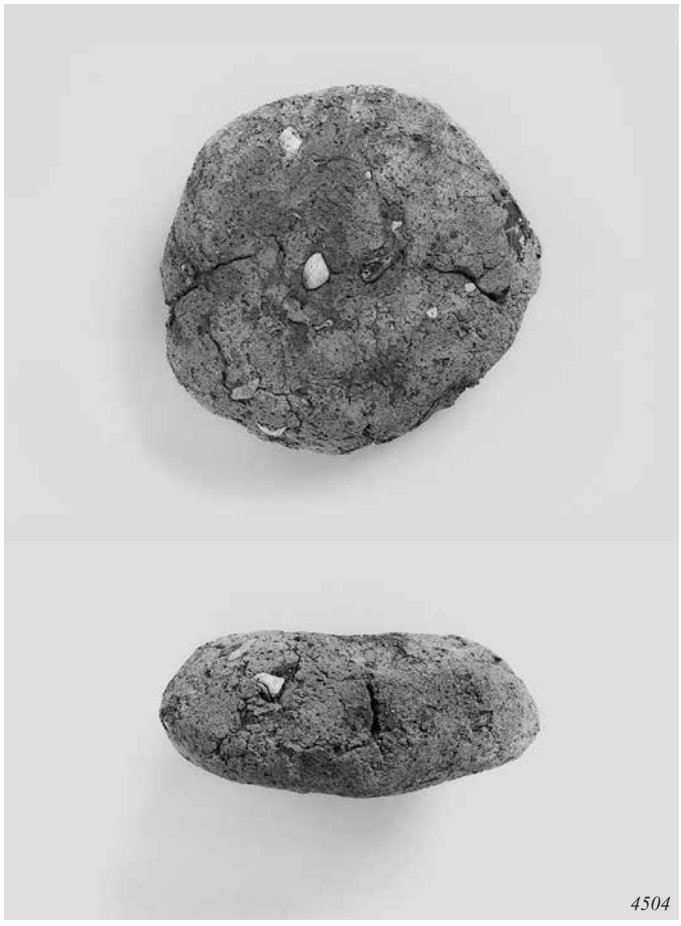
鴨谷 2 号窯

焼台 2


4501

4502

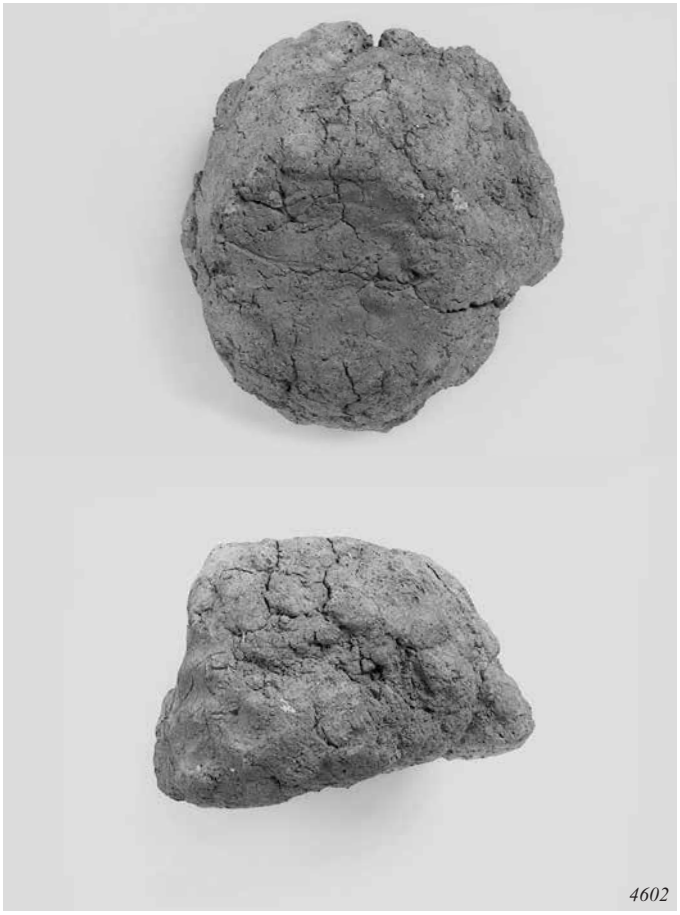
4503


4504

鴨谷 2 号窯

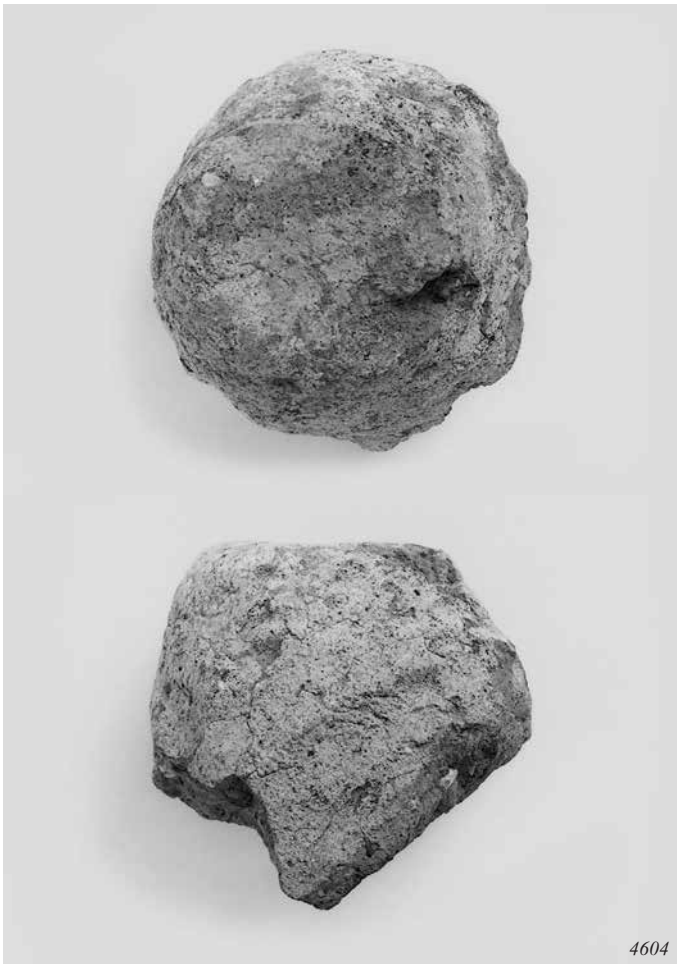
焼台 3

4601



4602

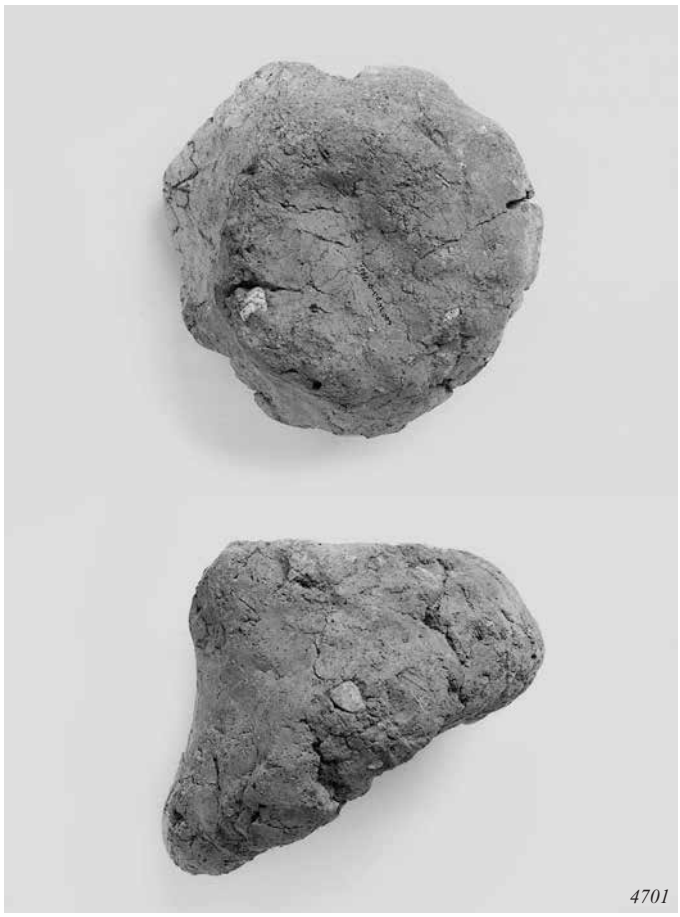
4603

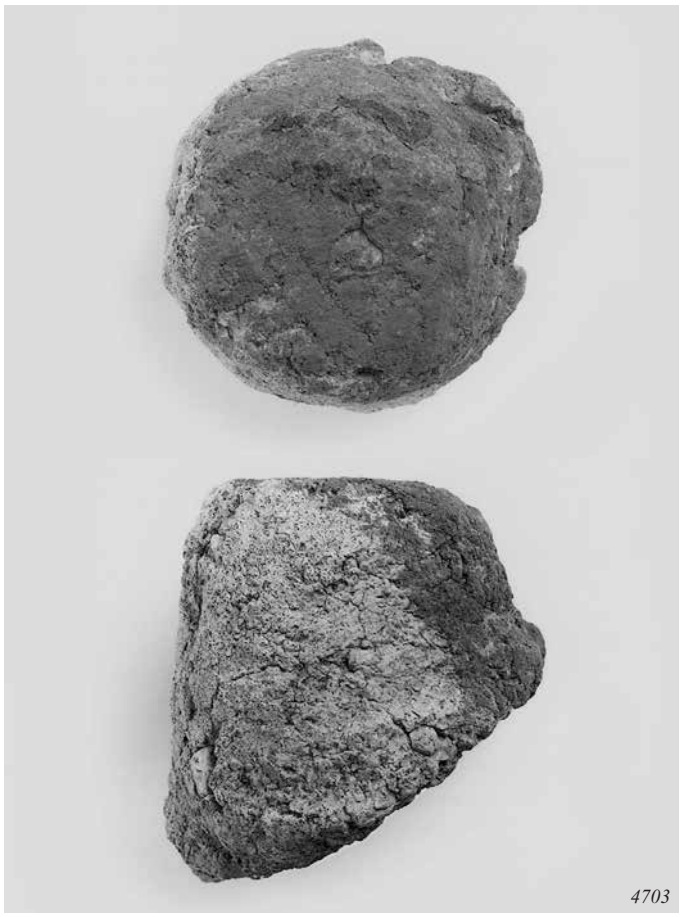


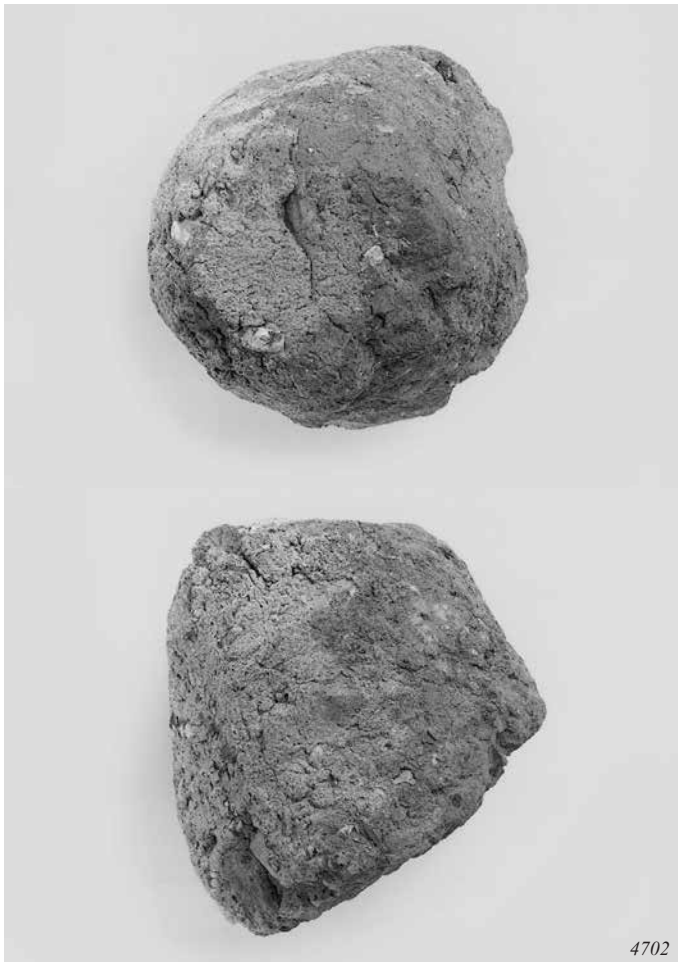
4604

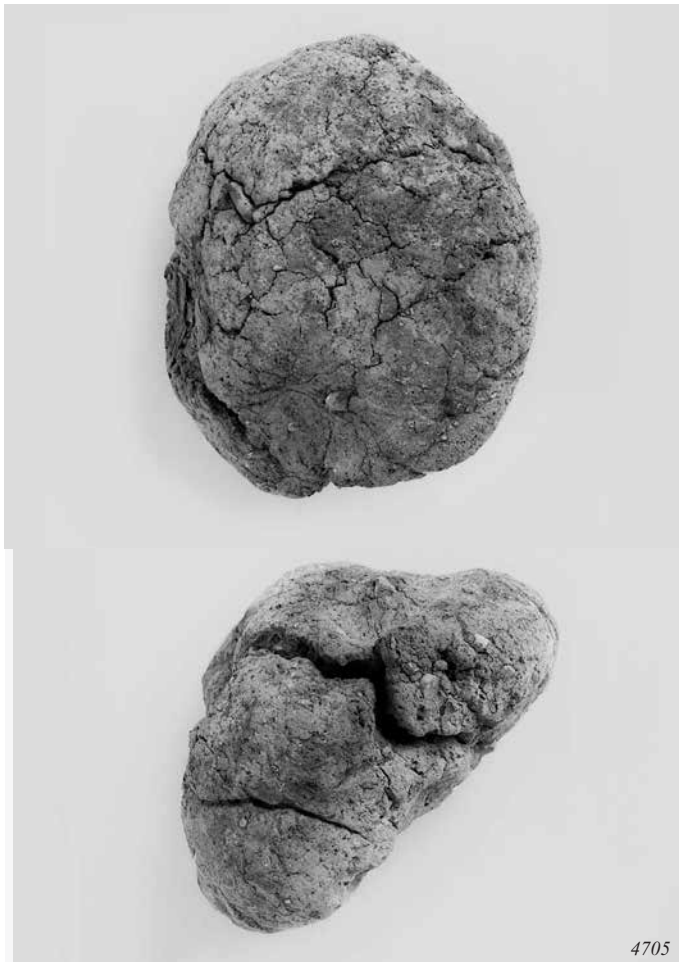
鴨谷 2 号窯

焼台 4


4701


4703

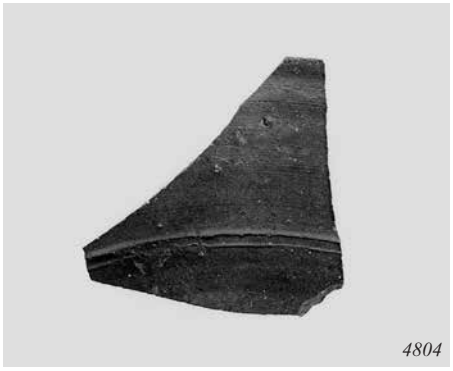

4702

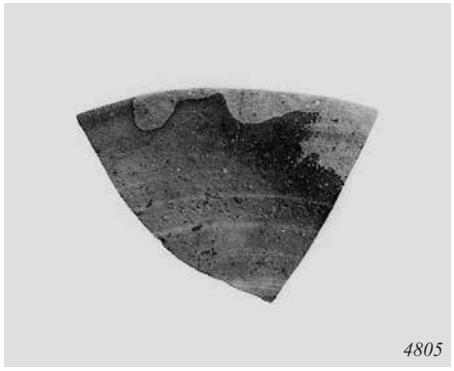

4705

鴨谷 3 号窯

第 1 次操業　灰層出土須恵器・瓦

4802


4804


4805

4801

4803

4808

4809

4810

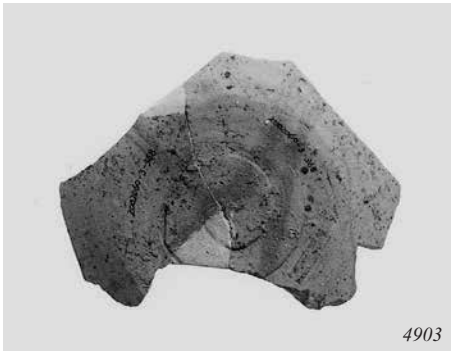
4811

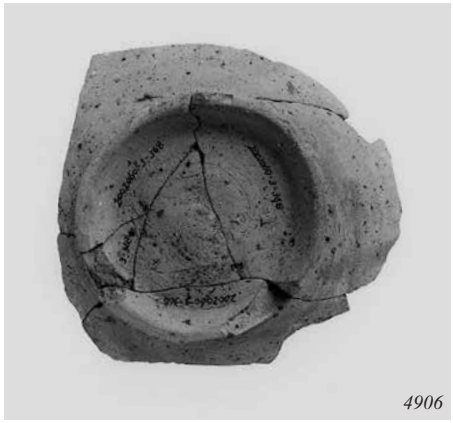
鴨谷 3 号窯

第 1 次操業灰層出土須恵器

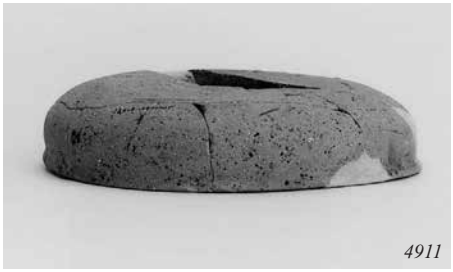
4901

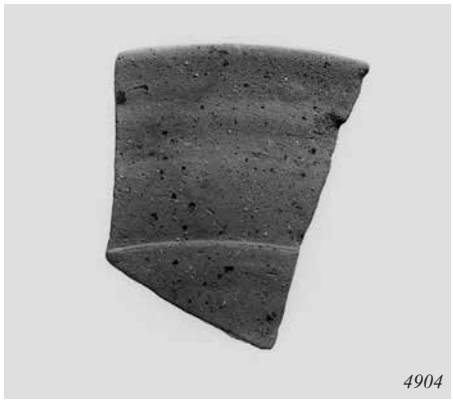
4902


4903


4906

4907

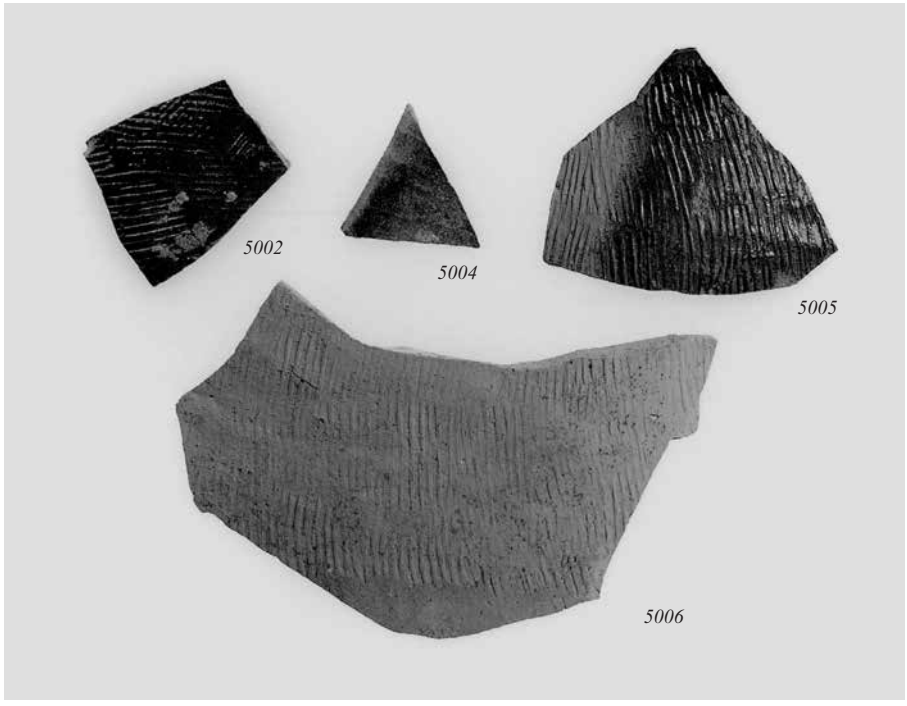

4911


4904

4910

4912

4909


5002
5004
5005
5006

鴨谷 3 号窯

第 1 次操業　作業場跡出土須恵器 1

5101

5102

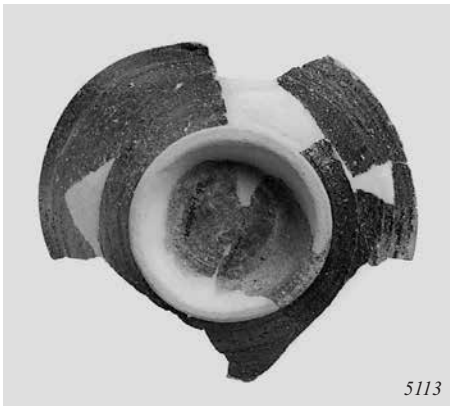
5103

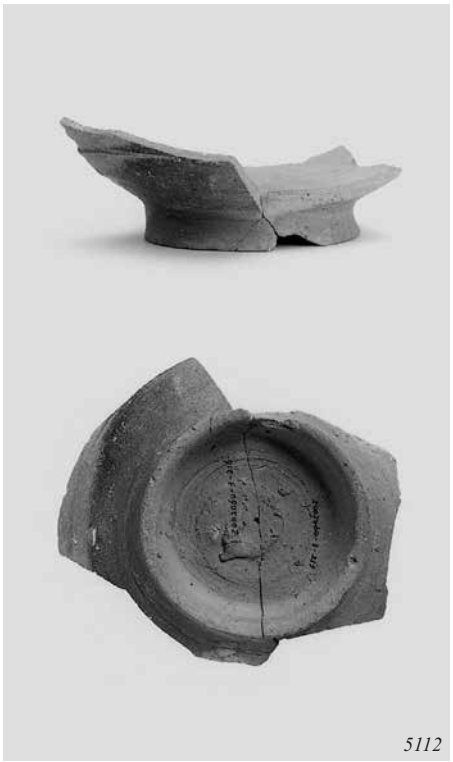
5107

5109

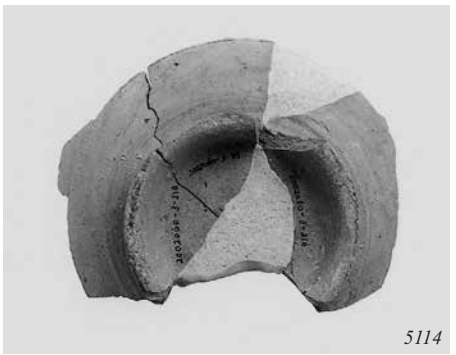
5111

5106


5113


5112

5116


5114

5104

5105

5110

鴨谷 3 号窯

第 1 次操業　作業場跡出土須恵器 2

5201

5204

5304

5303

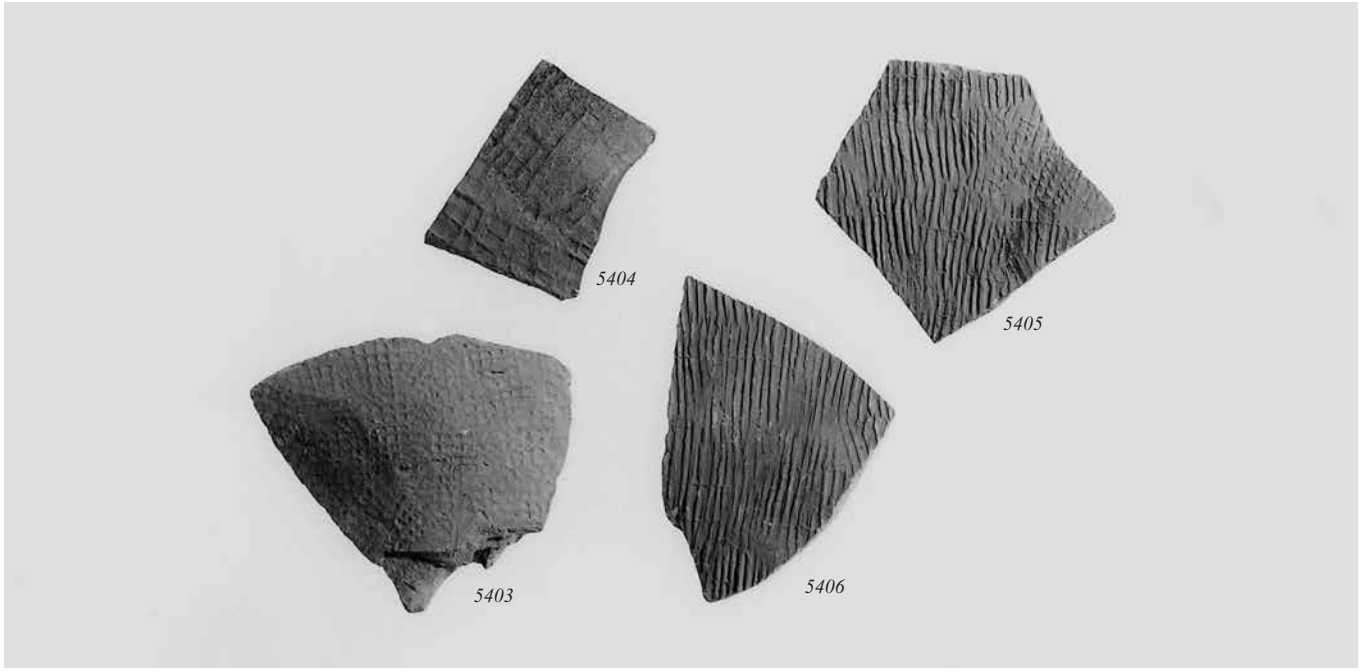
5207

鴨谷 3 号窯

第 1 次操業　作業場跡出土須恵器 3

5302

5206



5404

5405

5403

5406

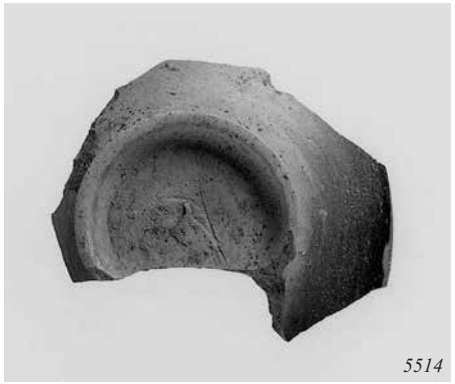
鴨谷 3 号窯

灰原出土第 1 次操業須恵器 1

5503

5501

5504


5514

5515

5517

5519

5520

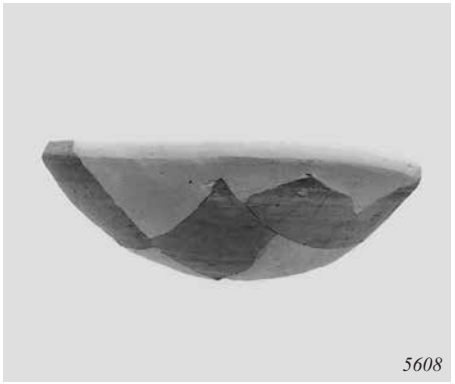
5603

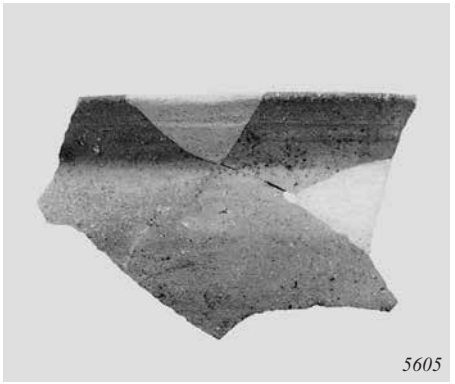
5604

5602

鴨谷 3 号窯

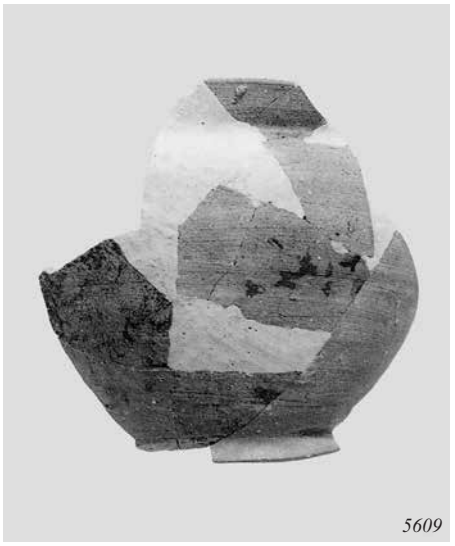
灰原出土第 1 次操業須恵器 2


5608


5605

5610

5601


5609

5612

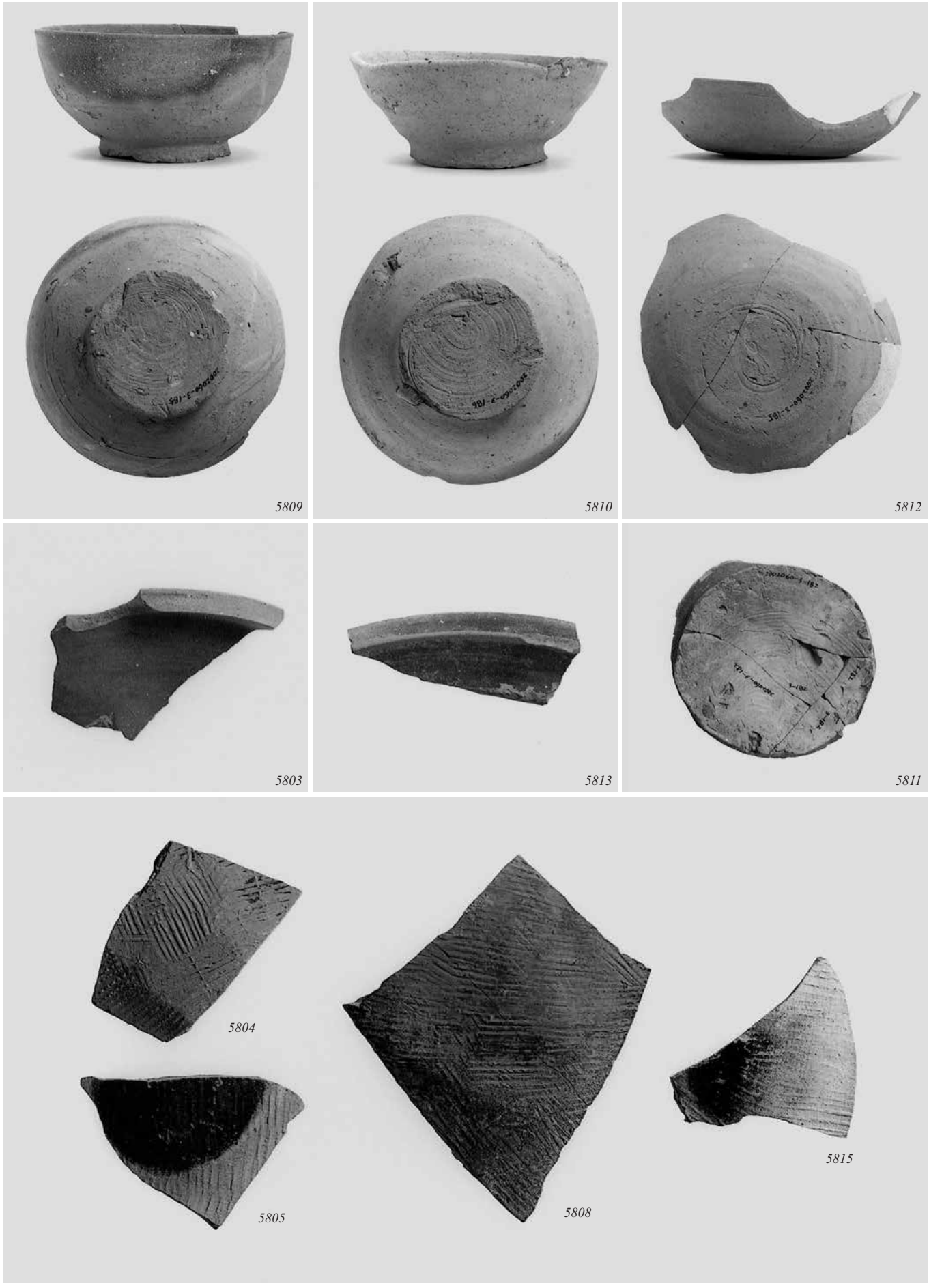
5611

5607

5701

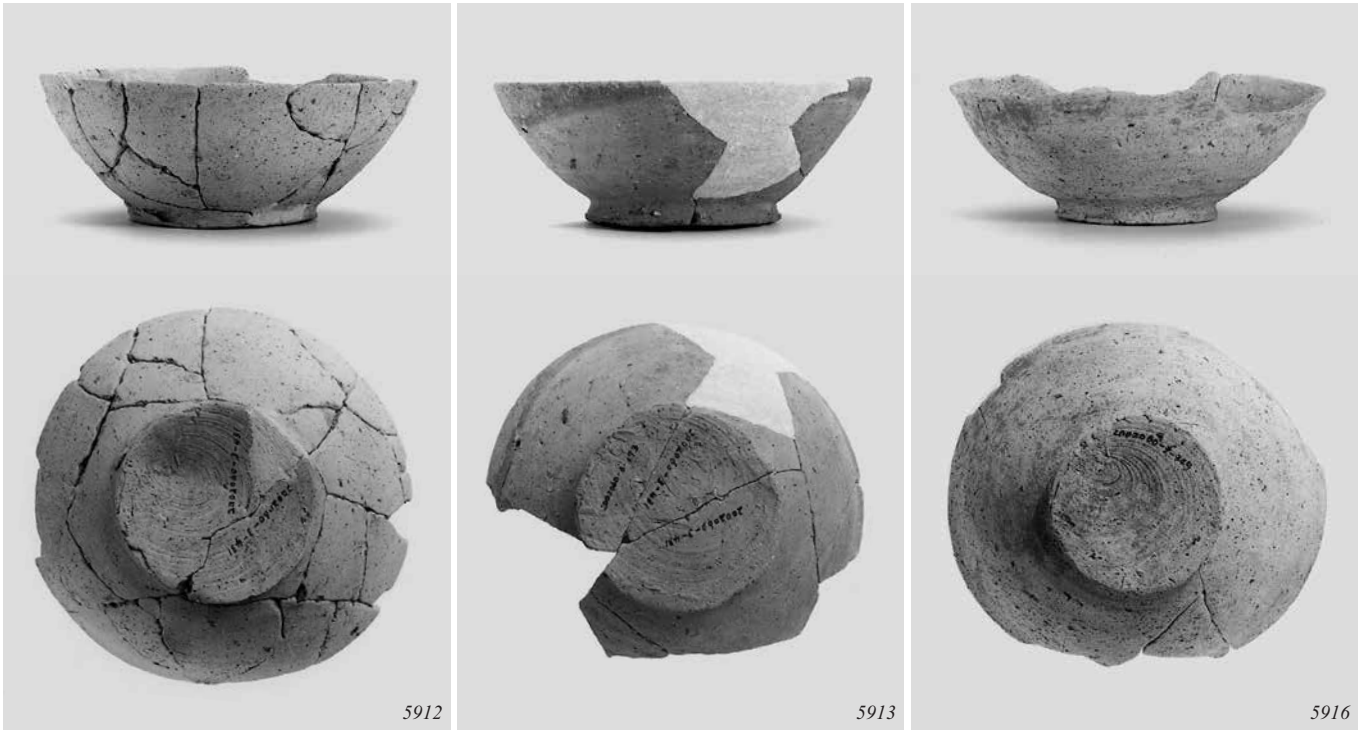
鴨谷 3 号窯

第 2 次操業窯体　第 1 床面（当初）出土須恵器

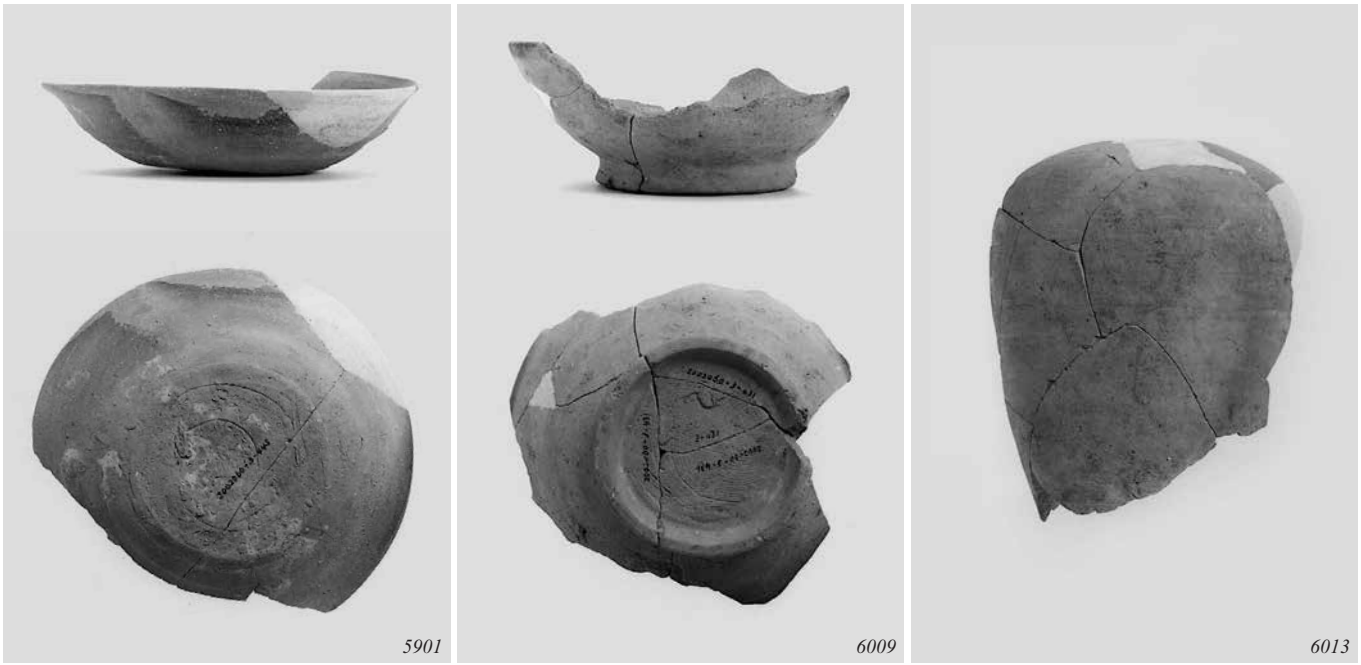


鴨谷 3 号窯

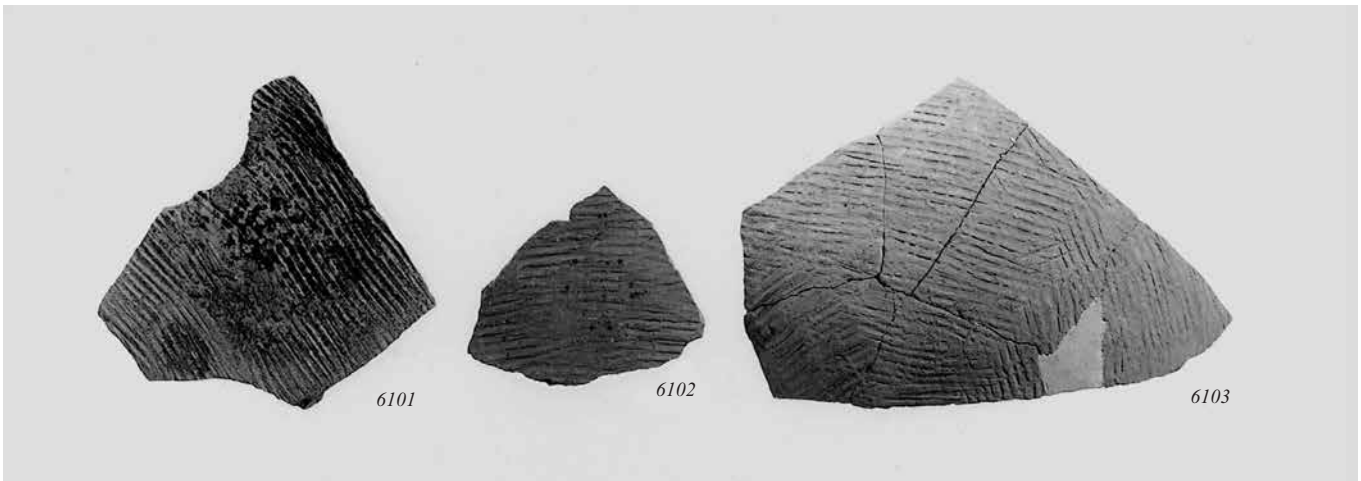
第 2 次操業窯体　第 1 ～第 2 床面間層出土須恵器



5912　5913　5916



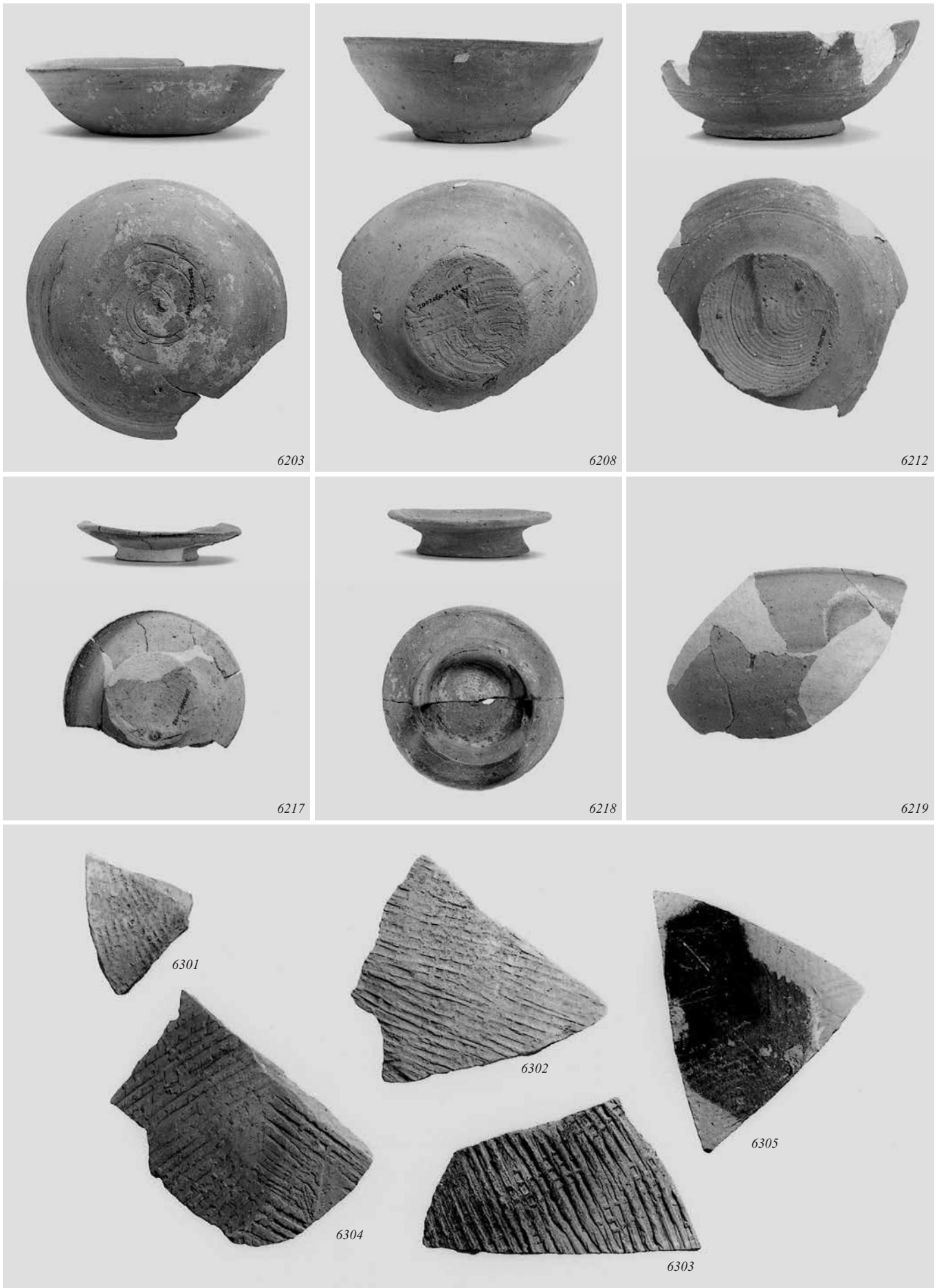
5901　6009　6013



6101　6102　6103

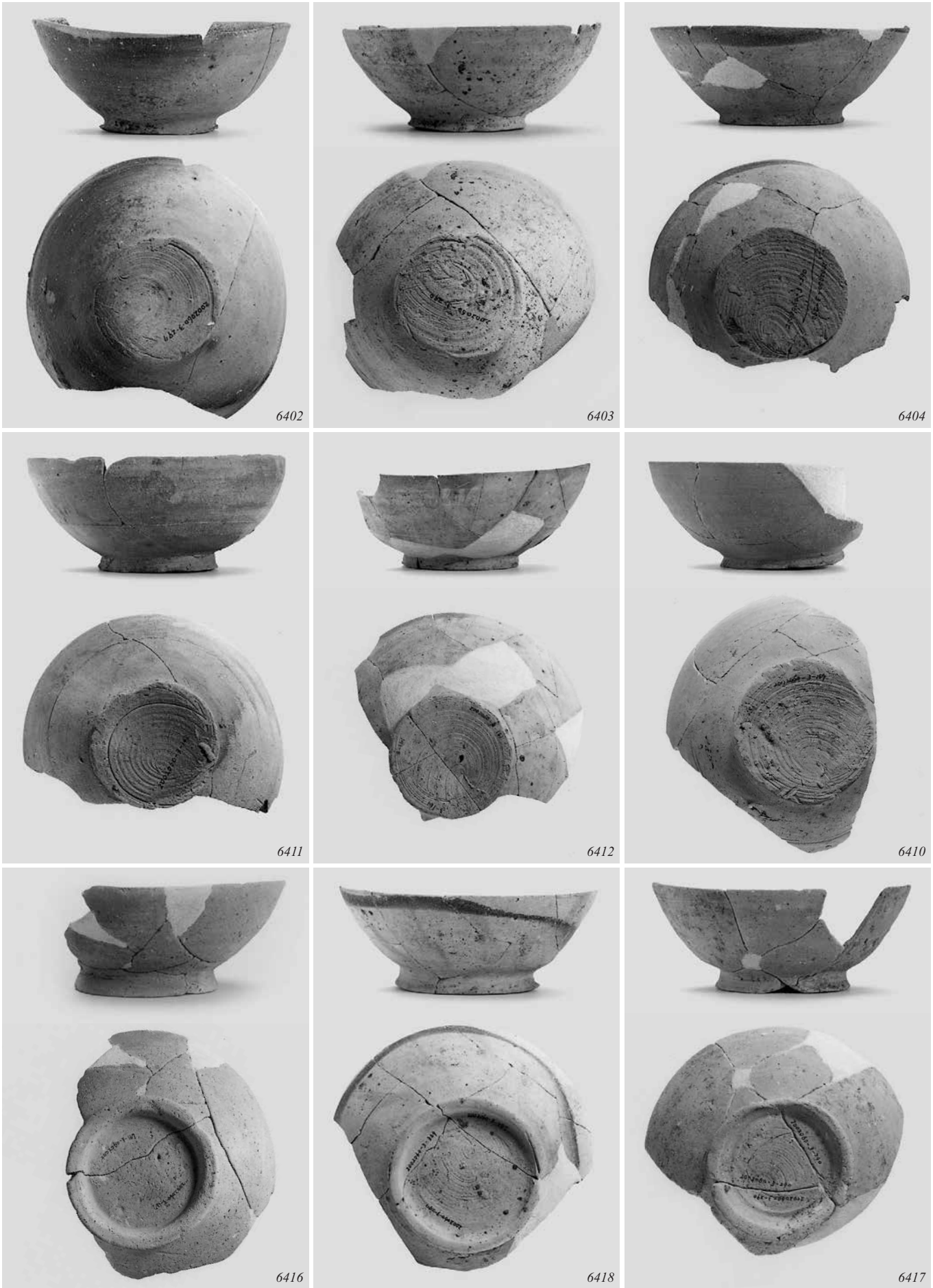
鴨谷 3 号窯

第 2 次操業窯体　第 2 ～第 3 床面間層出土須恵器



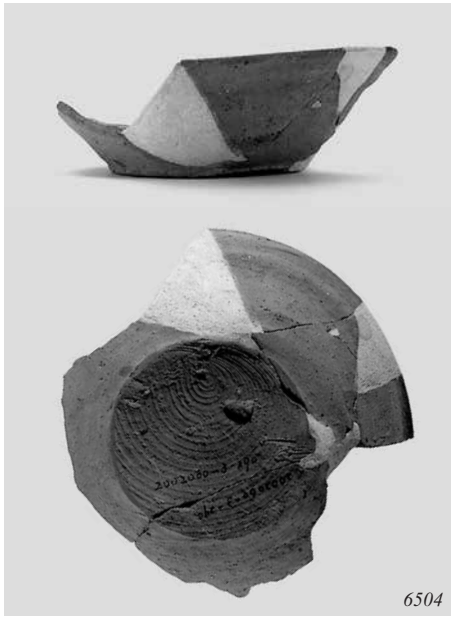
鴨谷 3 号窯

第 2 次操業窯体　第 3 ・ 4 床面出土須恵器 1



鴨谷 3 号窯

第 2 次操業窯体　第 3 ・ 4 床面出土須恵器 2


6504

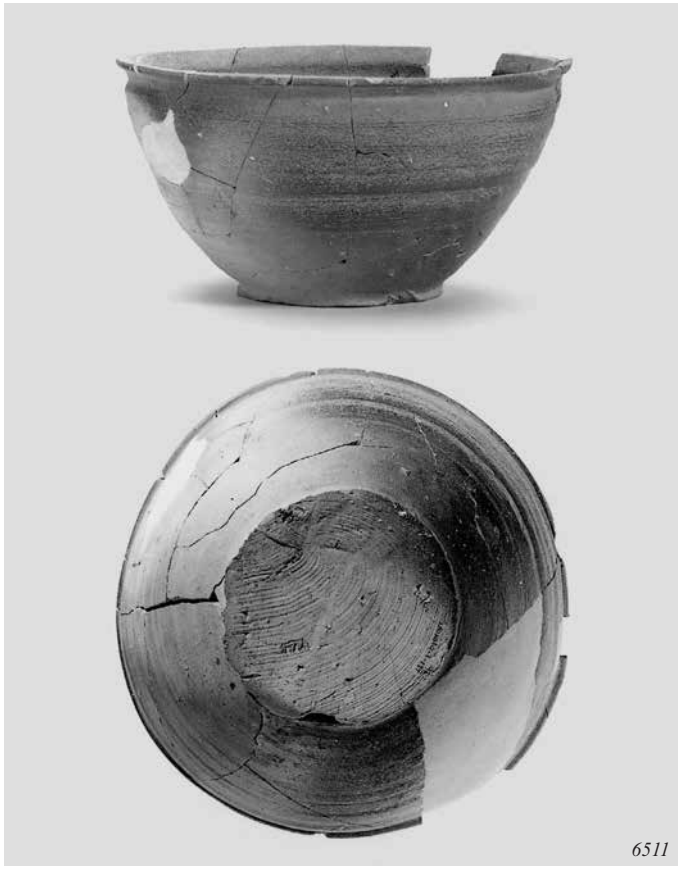
6501

6503

6505

6506

6507


6511

6508

6510

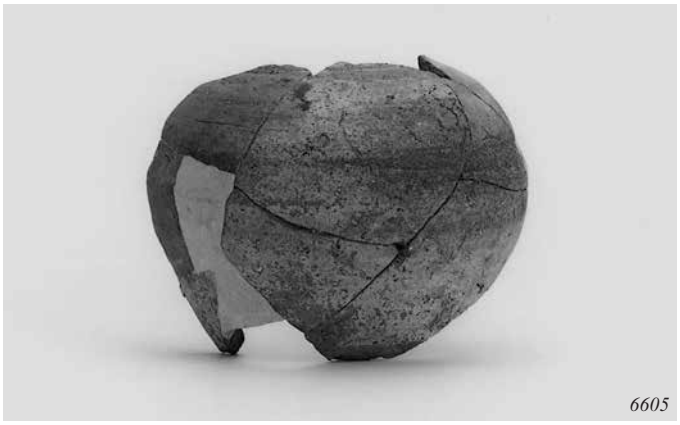
鴨谷 3 号窯

第 2 次操業窯体　第 3 ・ 4 床面出土須恵器 3

6601

6606

6603

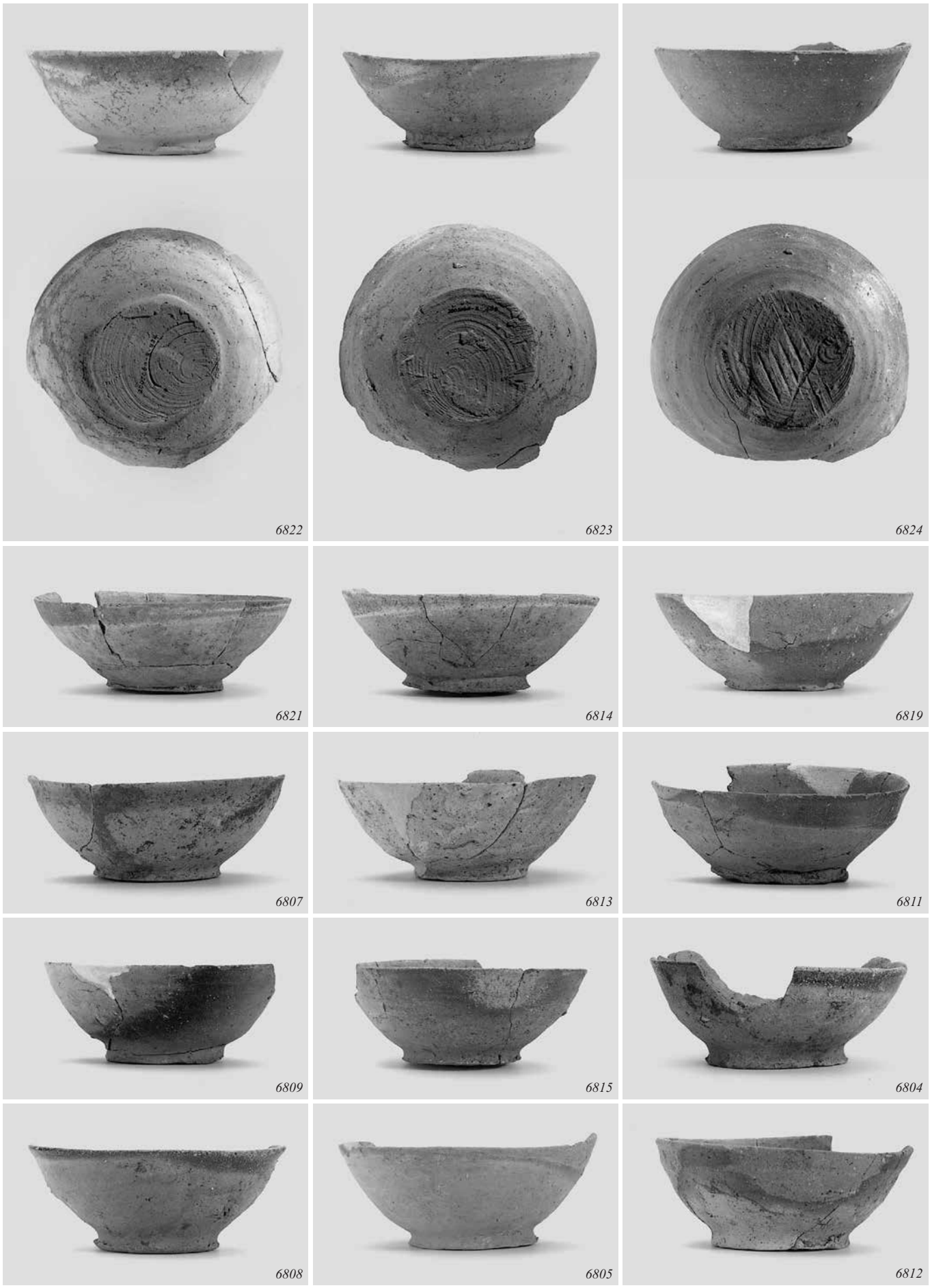

6605

6704

6705

鴨谷 3 号窯

灰原出土第 2 次操業須恵器 1

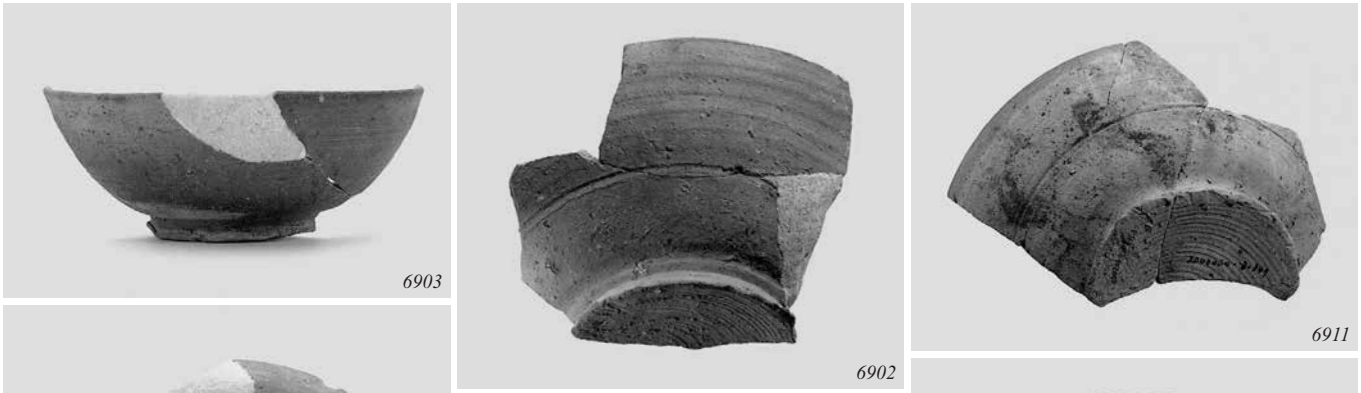


鴨谷 3 号窯

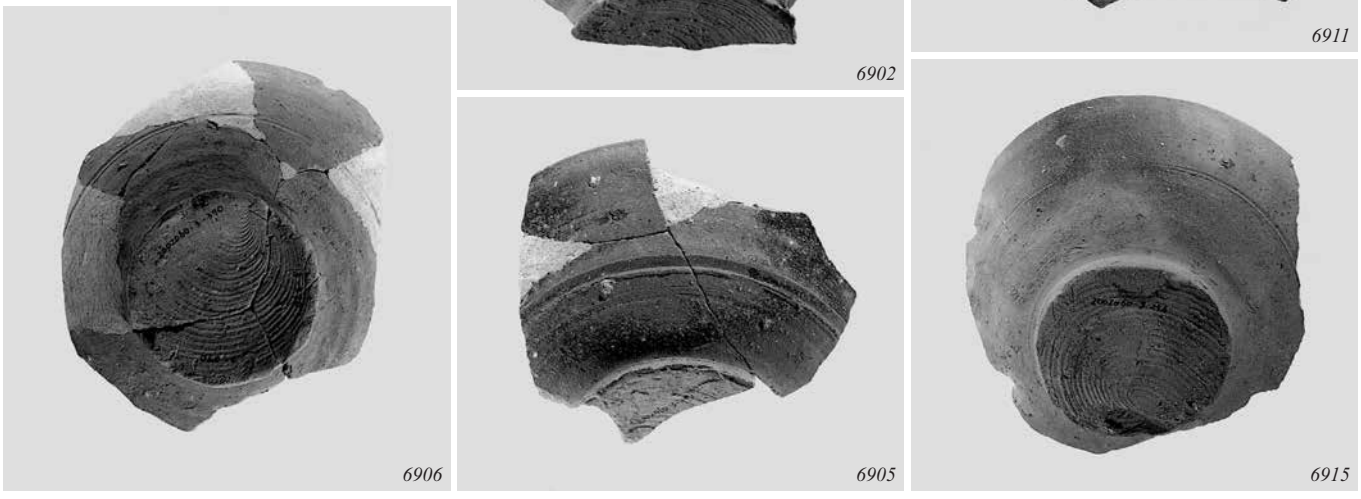
灰原出土第 2 次操業須恵器 2

6918 6919 6920

6904 6908 6909



6903 6902 6911

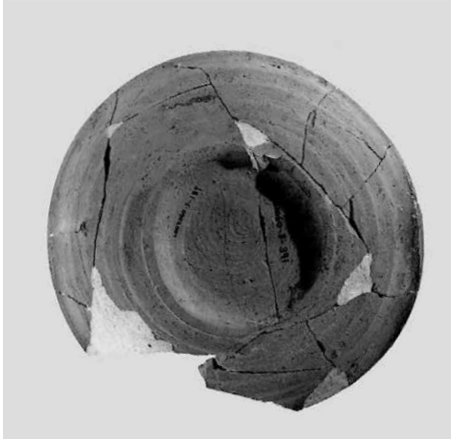


6906 6905 6915

鴨谷 3 号窯

灰原出土第 2 次操業須恵器 3

7022

7023

7024

7005

7010

7011

7014

7002

7006

7004

7001

7018

7007

7003

7009

鴨谷 3 号窯

灰原出土第 2 次操業須恵器 4

7111

7103

7110

7107

7105

7113

7104

7101

7114

7115

7116

鴨谷 3 号窯

灰原出土第 2 次操業須恵器 5

7201

7205

7204

鴨谷 3 号窯

灰原出土第 2 次操業須恵器 6

7202

7203

鴨谷 3 号窯

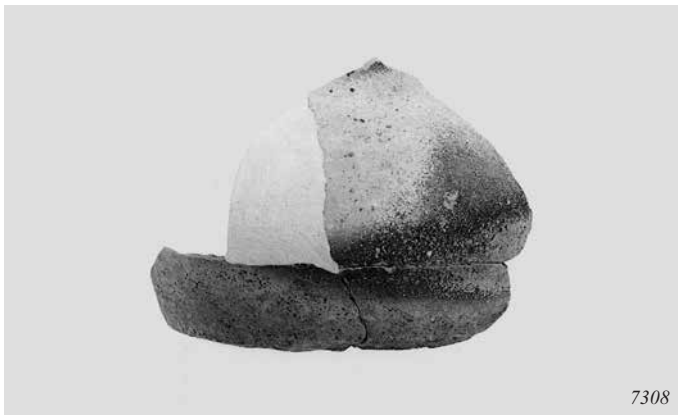
灰原出土第 2 次操業須恵器 7

7301

7304

7305

7312


7308

7318

7309

7320

鴨谷 3 号窯

灰原出土第 2 次操業須恵器 8

7314

7310

7315

7313

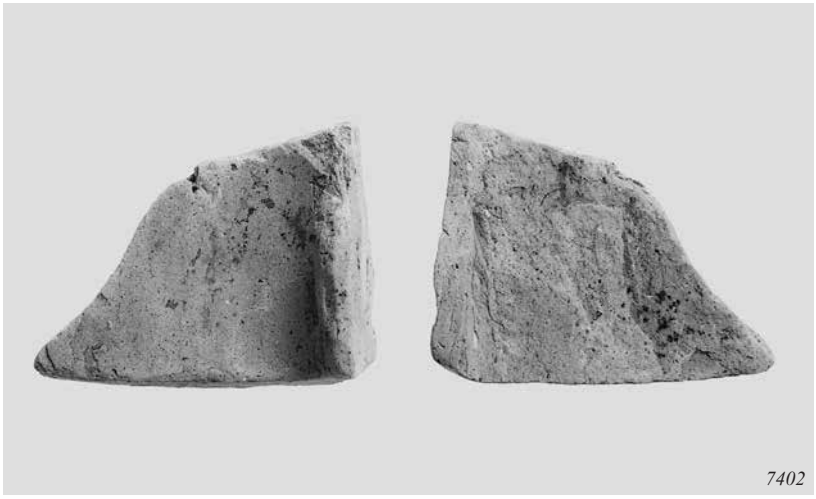
7311

鴨谷 3 号窯

灰原出土第 2 次操業須恵器 9

7401

7403


7402

7404

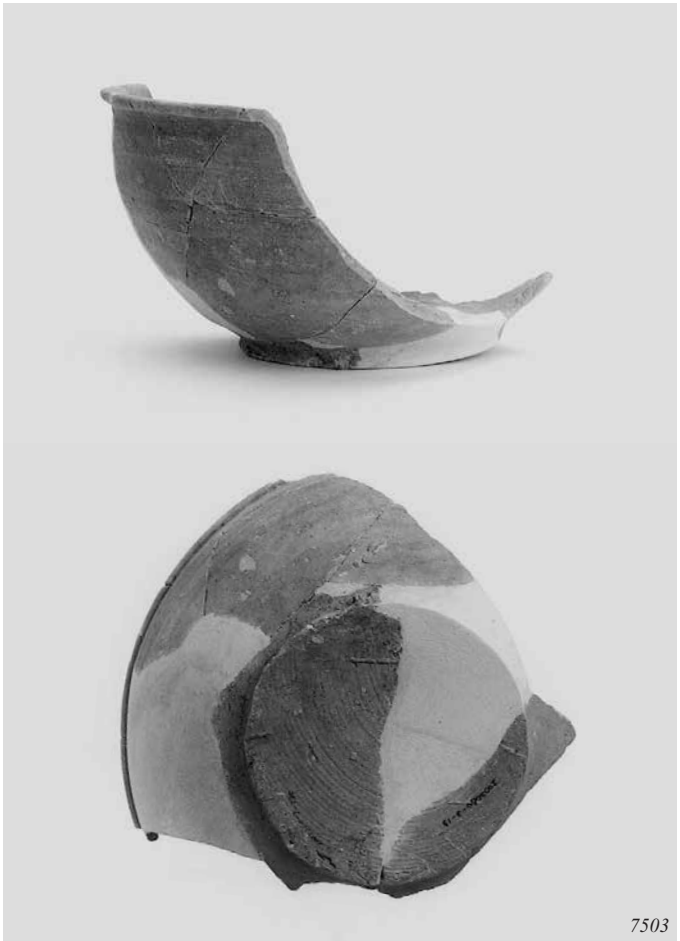
7405

鴨谷 3 号窯

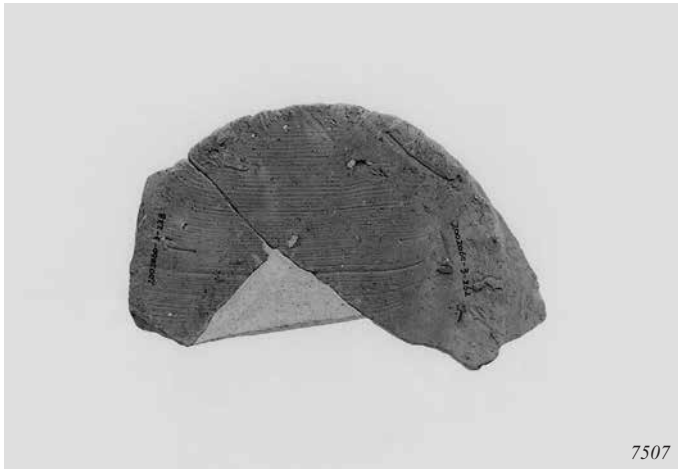
灰原出土第 2 次操業須恵器 10

7506

7509



7503



7507

7508

鴨谷 3 号窯

灰原出土第 2 次操業須恵器 11

7601

7602

7701

鴨谷 3 号窯

灰原出土第 2 次操業須恵器 12

7702

7801

鴨谷 3 号窯

灰原出土第 2 次操業須恵器 13

7902

8001

鴨谷 3 号窯

灰原出土第 2 次操業須恵器 14

8101

8002

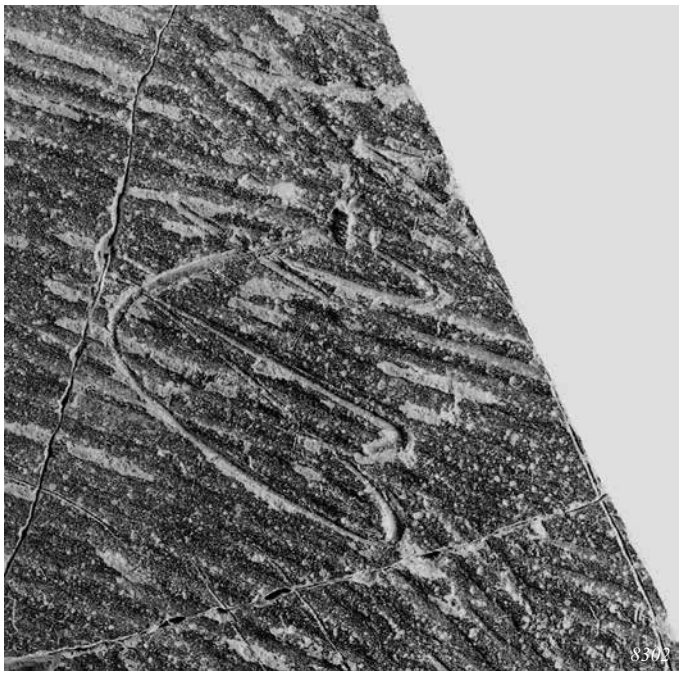
8201

8001

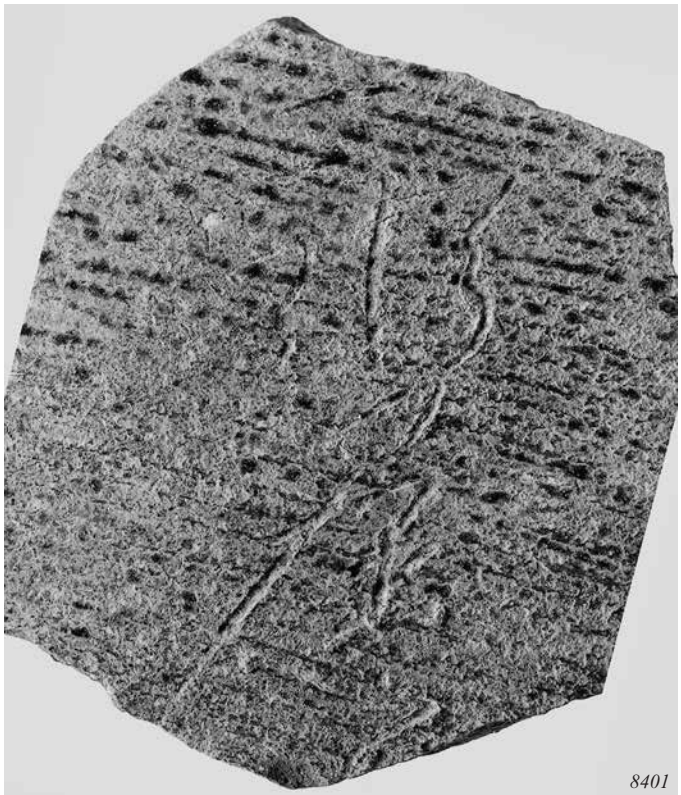
鴨谷 3 号窯

須恵器甕刻書

8301


8303

8402


8401

梟谷１号窯

窯体出土須恵器

8505

8501

8502

8503

8504

8514

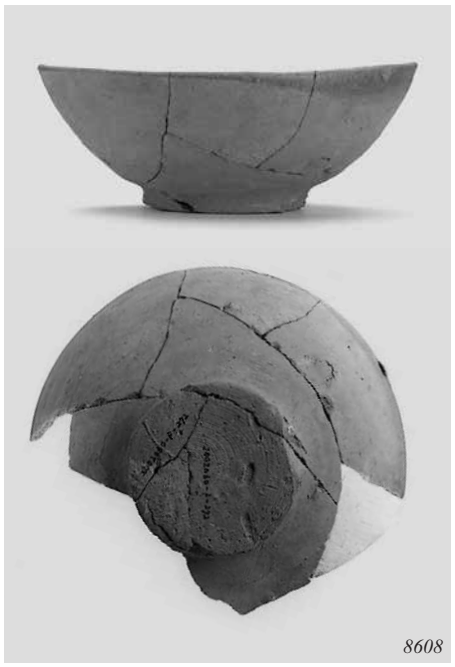
8517

8518

8519

梟谷１号窯

灰原出土須恵器 1


8608

8604

8619

8620

8612

8621

8603

8611

8618

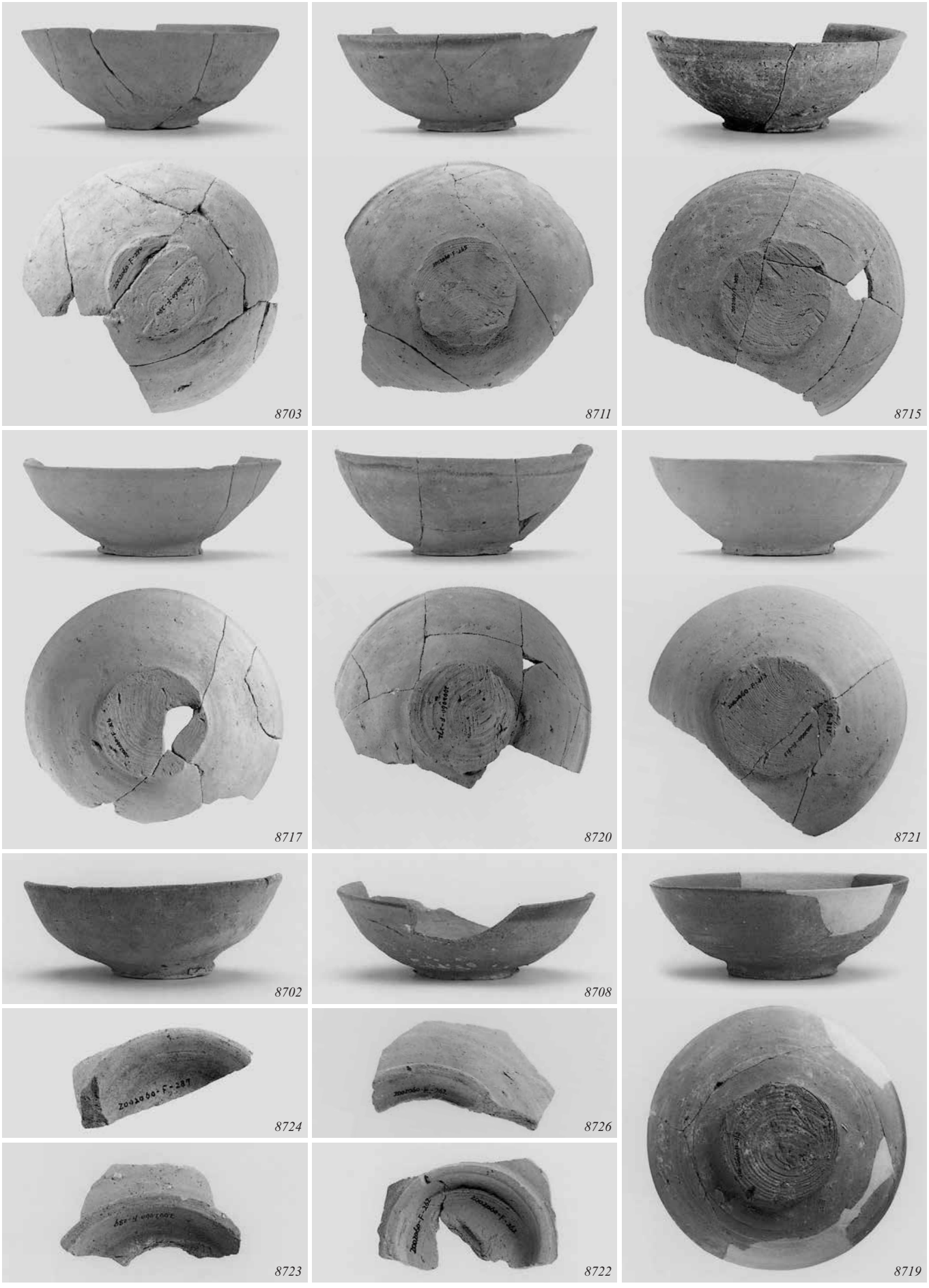
8607

8615

8613

梟谷１号窯

灰原出土須恵器 2



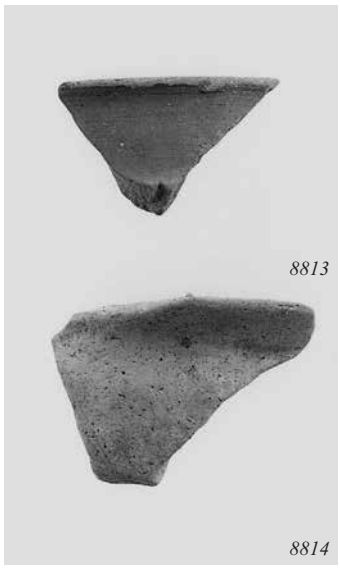
梟谷１号窯

灰原出土須恵器 3

8810

8811

8812


8813 8814

8815

8817

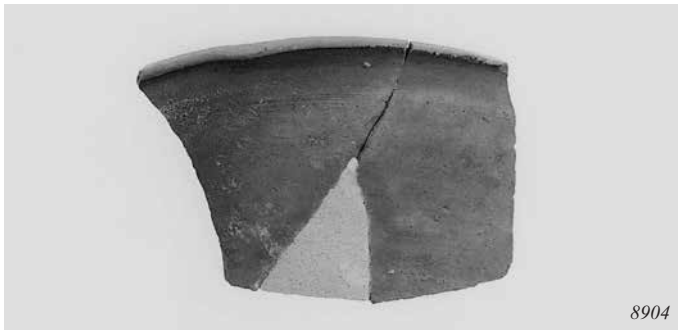
梟谷１号窯

灰原出土須恵器 4

8903

8902

8901


8904

8905

8906

8907

梟谷１号窯

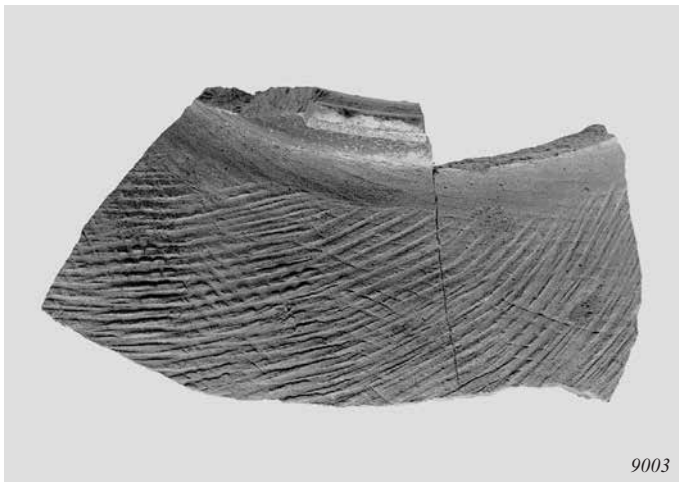
灰原出土須恵器 5

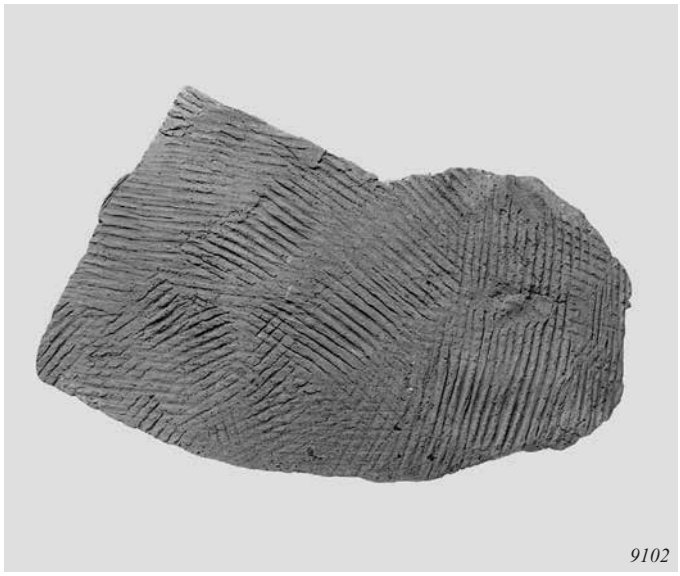
9004

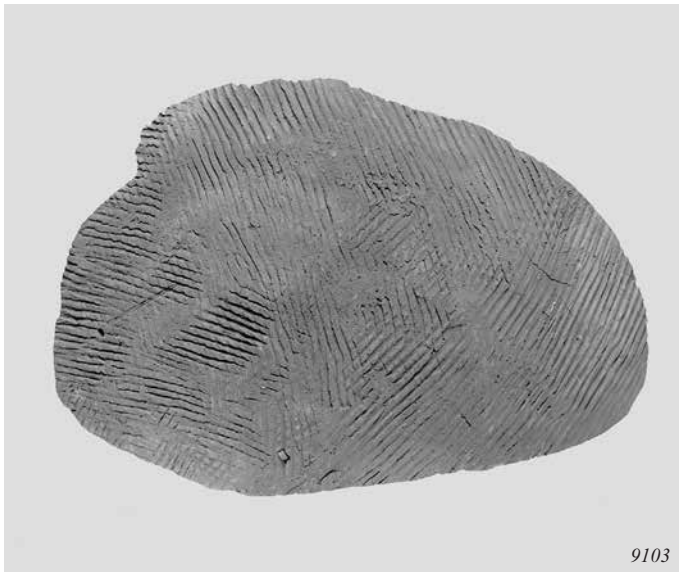
9002

9001

9101


9003


9102


9103

梟谷１号窯

谷堆積土層出土須恵器 1

9204

9206

9201

9205

9202

9207

9210

9211

9212

9213

9214

9215

9208

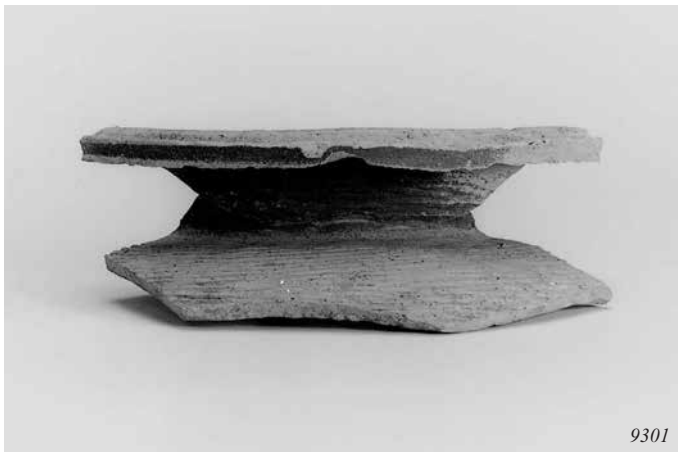
9209

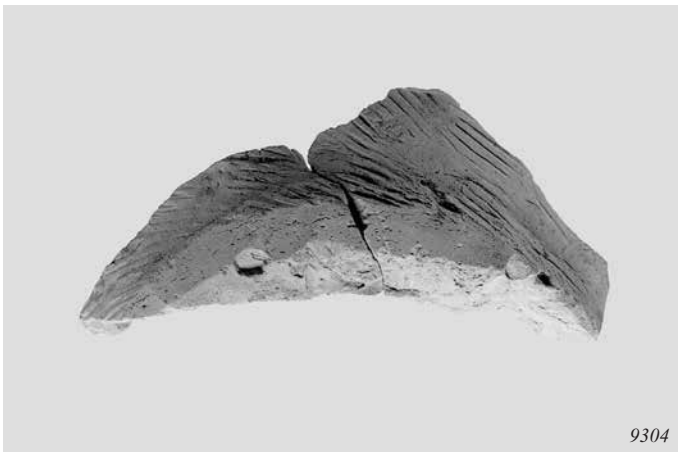
臭谷 1 号窯

谷堆積土層出土須恵器 2

9302

9303


9301


9304

梟谷１号窯

窯体・灰原出土軒丸瓦・軒平瓦

9401

9501

9502

9503

9602

9601

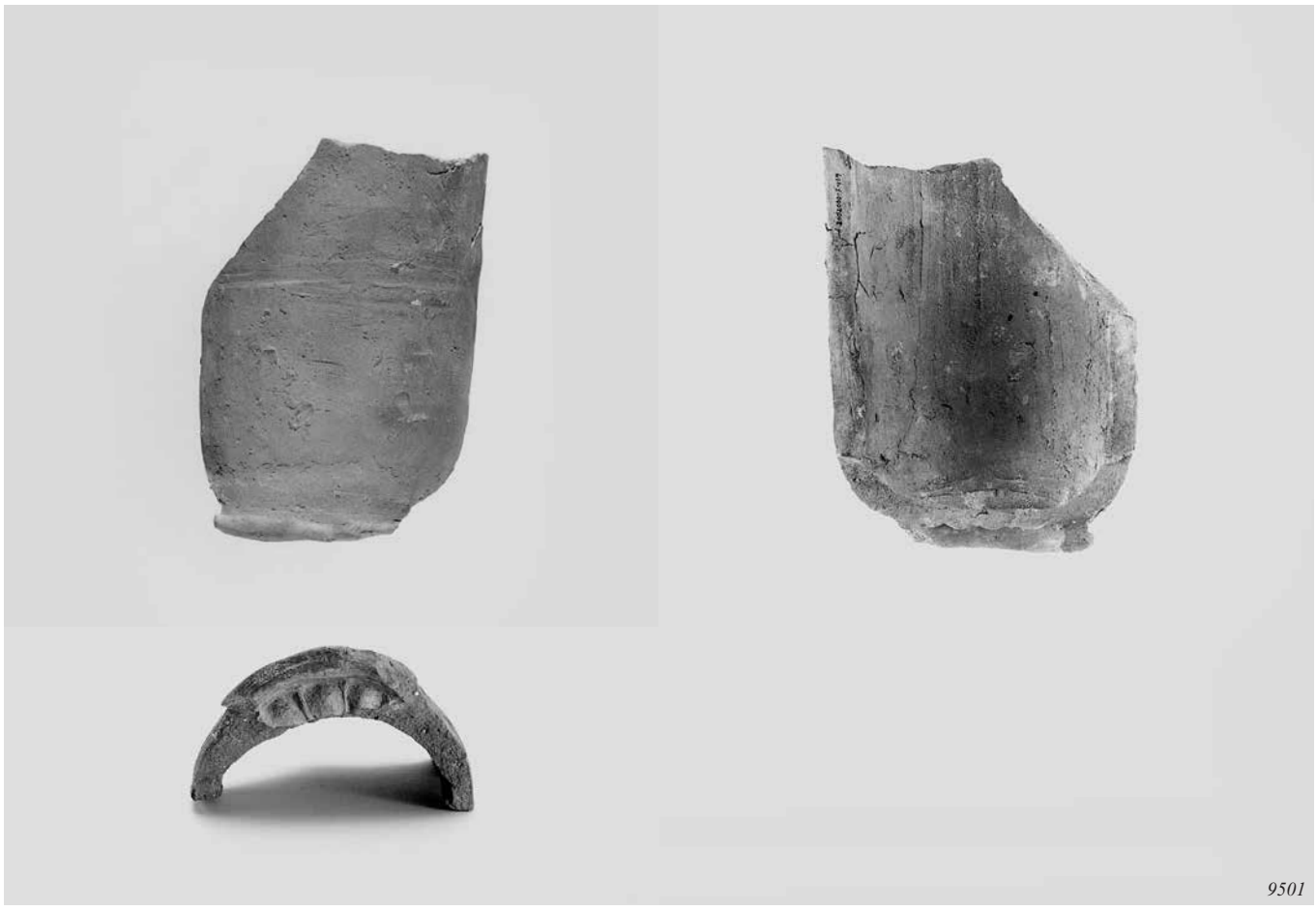
9603

9604

梟谷１号窯

窯体出土軒丸瓦

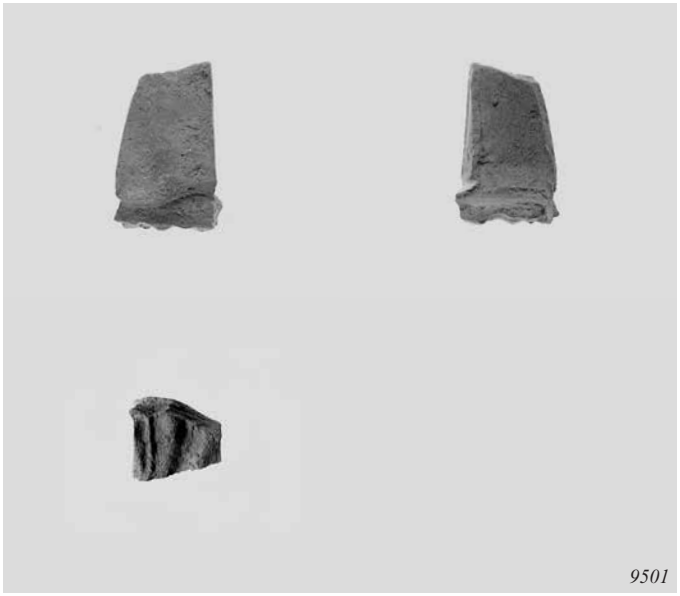
9401

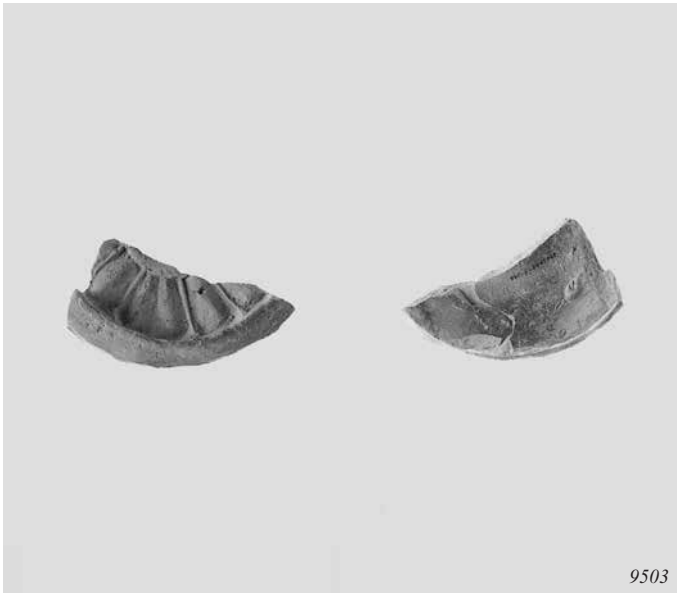


9501

梟谷１号窯

灰原他出土軒丸瓦・軒平瓦


9501


9503

9601

梟谷１号窯

灰原他出土軒平瓦

9602

9603

9604

梟谷１号窯

窯体出土丸瓦 1

9701

9702

梟谷１号窯

窯体出土丸瓦 2

9801

9802

梟谷１号窯

窯体出土丸瓦 3

9901

9902

梟谷１号窯

窯体出土丸瓦 4

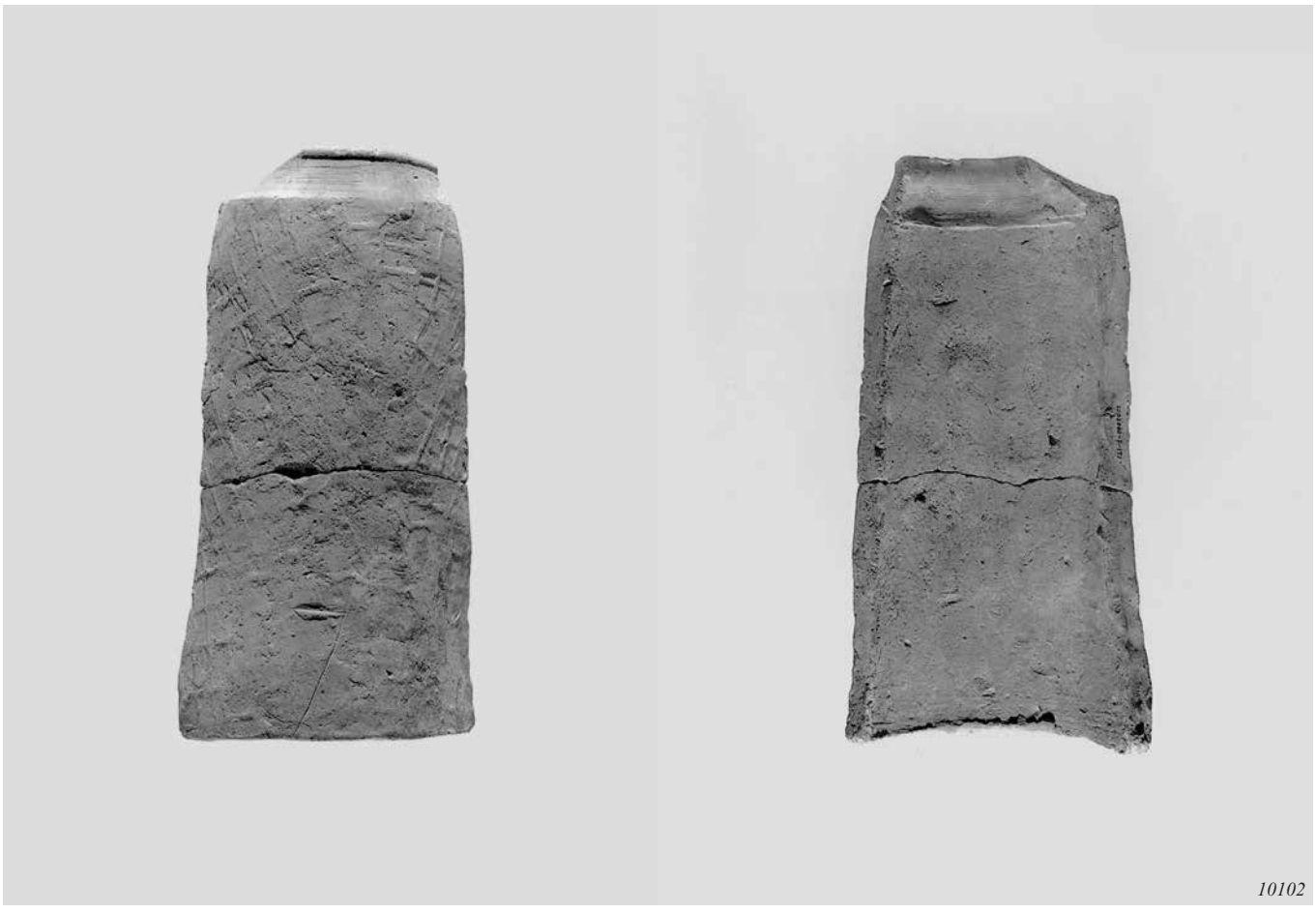
10001

10002

梟谷１号窯

窯体出土丸瓦 5

10101



10102

梟谷１号窯

窯体出土丸瓦 6

10201

10202

梟谷１号窯

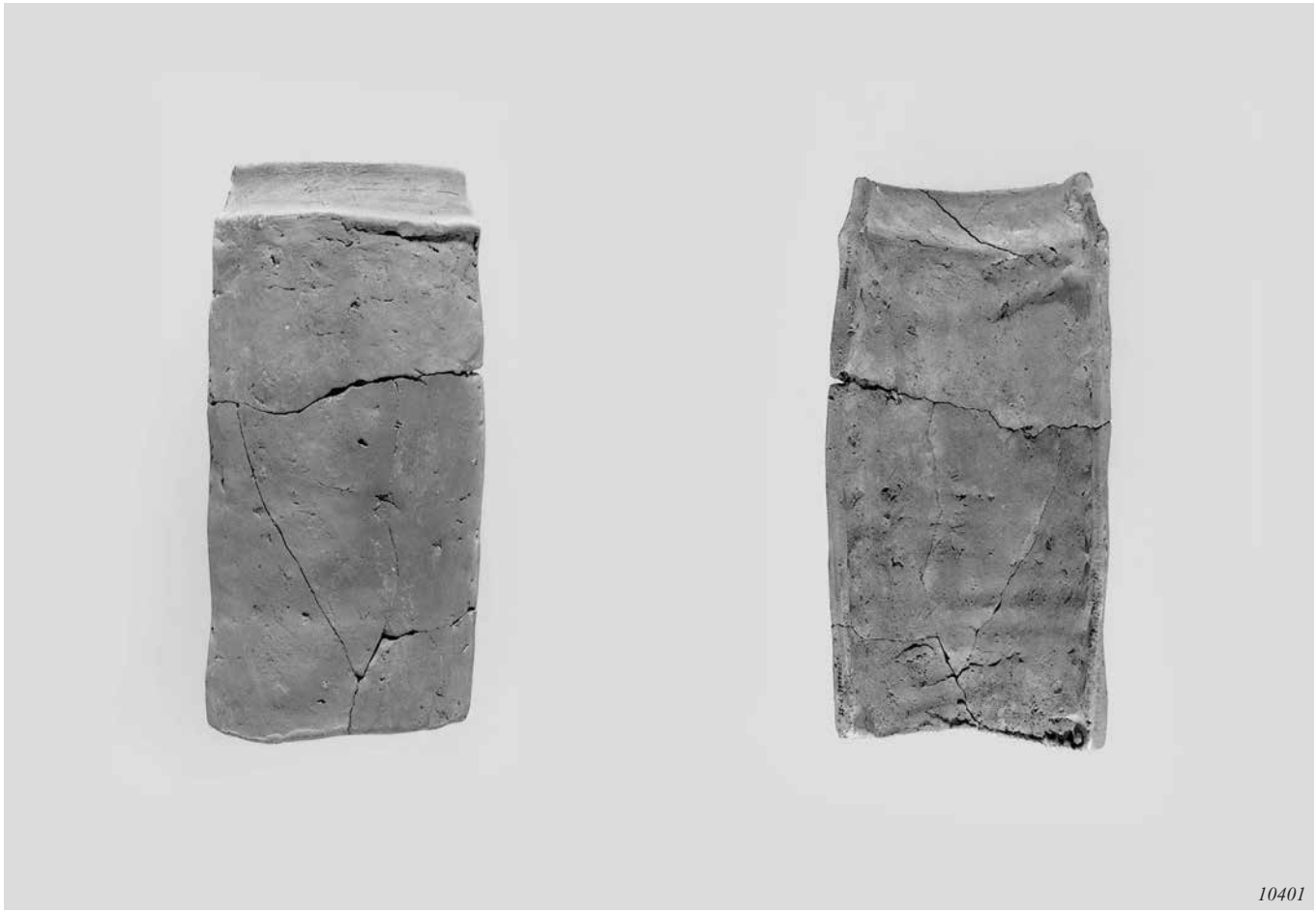
窯体出土丸瓦 7

10301

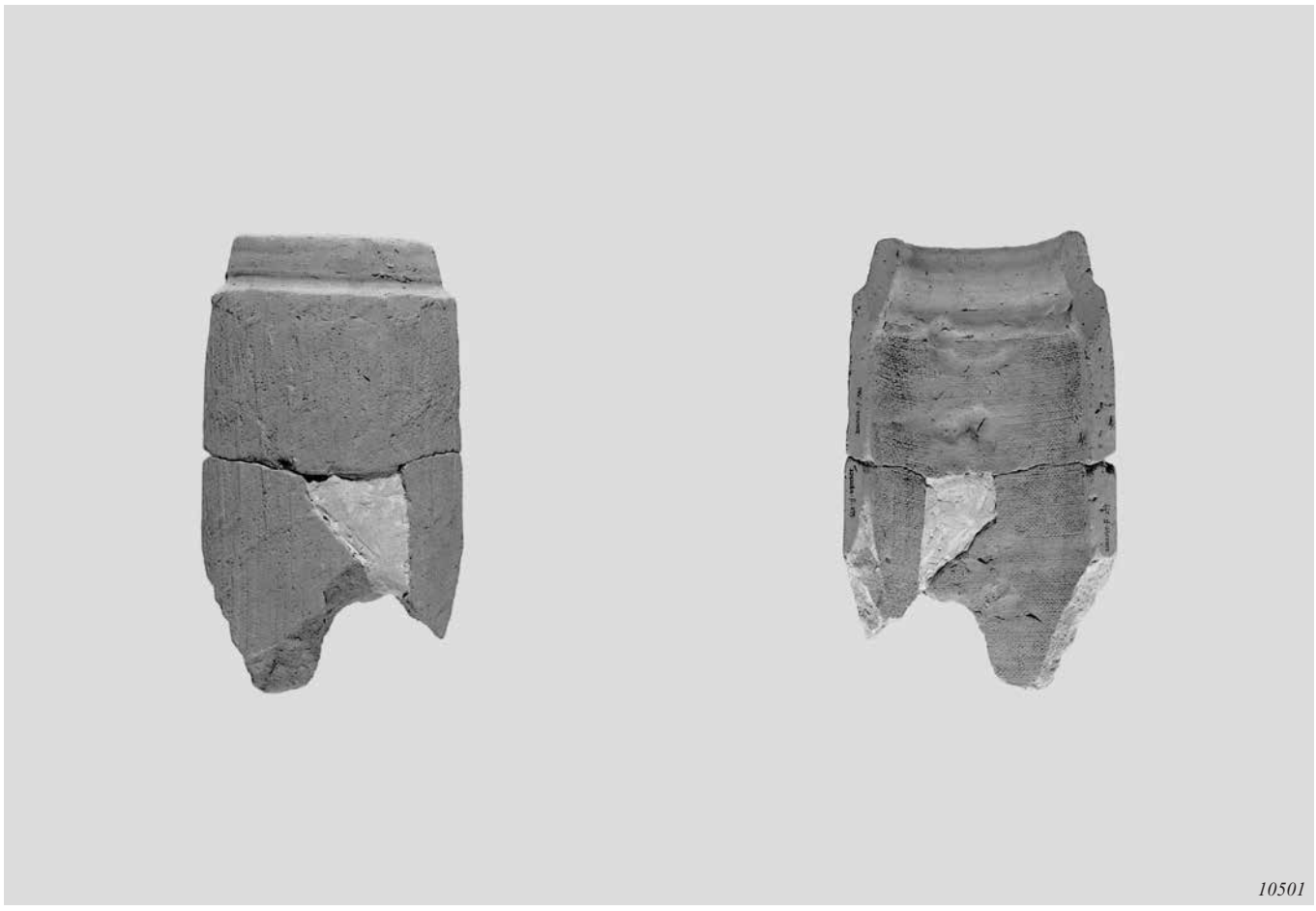
10302

梟谷１号窯

灰原出土丸瓦 1



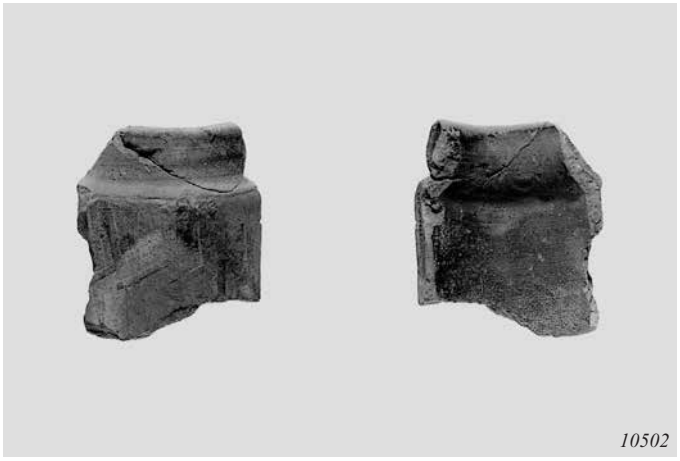
10401



10501

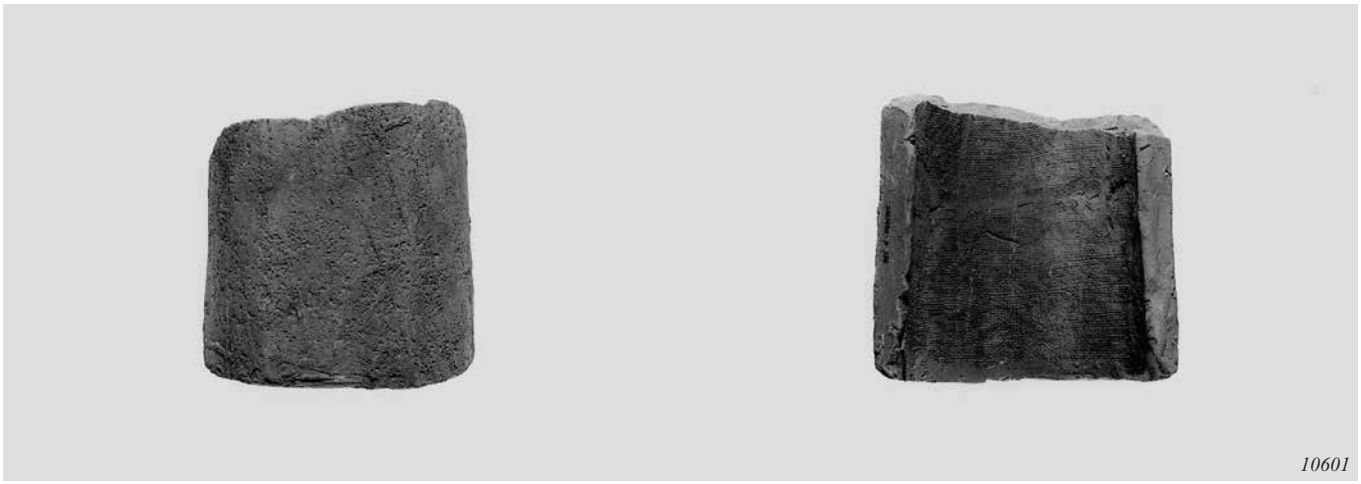
梟谷１号窯

灰原出土丸瓦 2



10502

10503

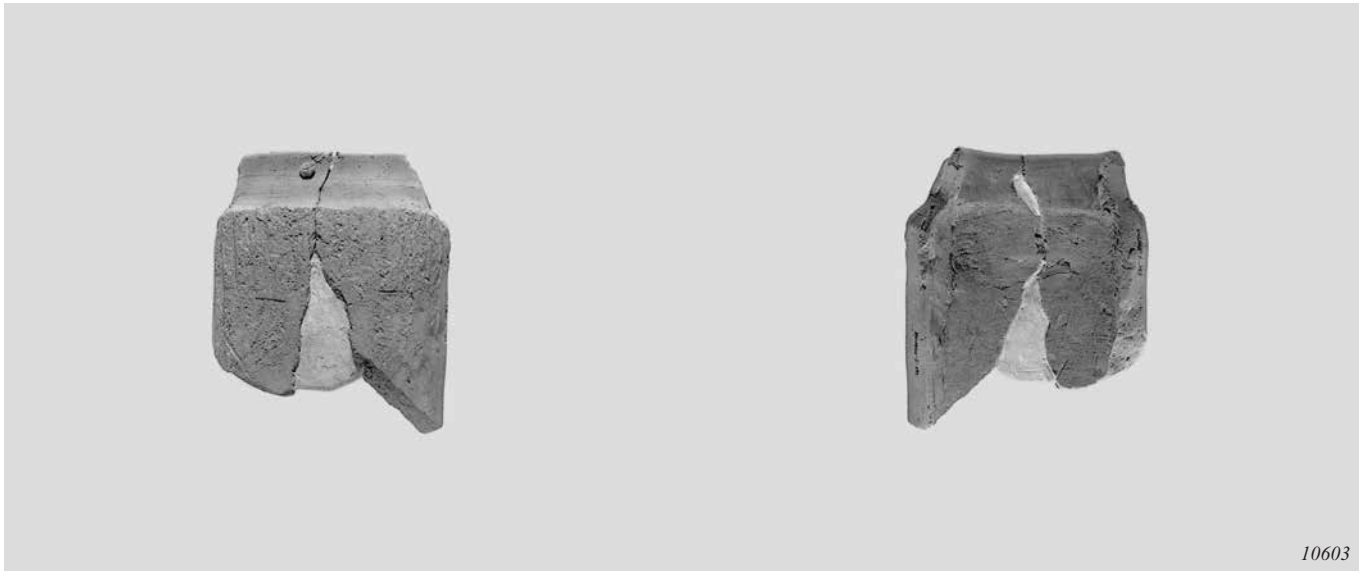


10601

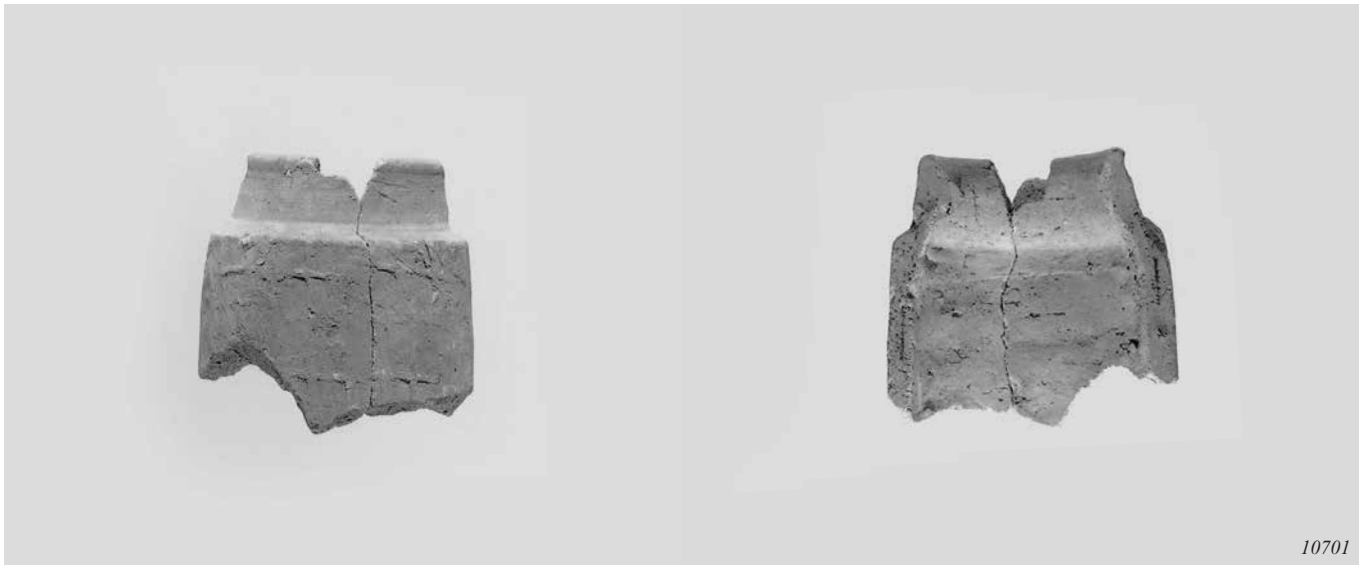
10602

梟谷１号窯

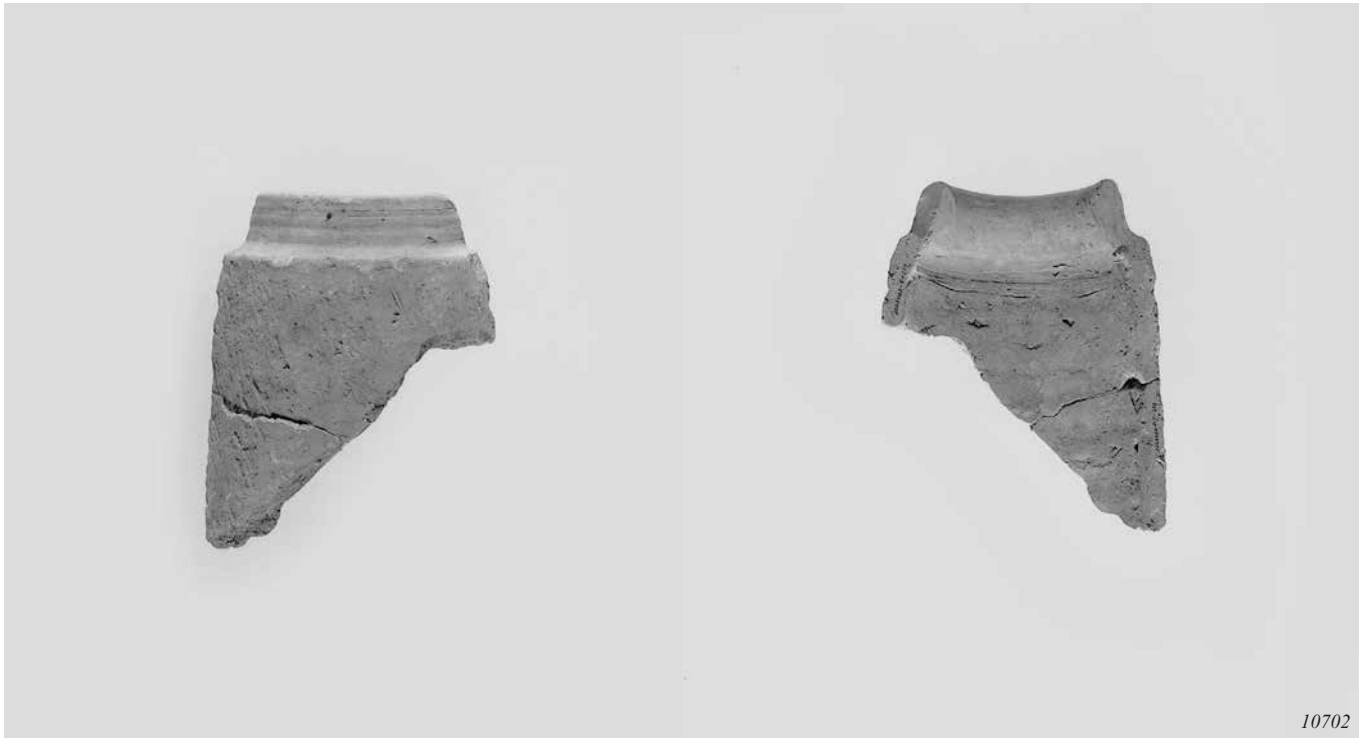
灰原出土丸瓦 3



10603



10701



10702

梟谷１号窯

灰原出土丸瓦 4

10801

10703

10802

梟谷１号窯

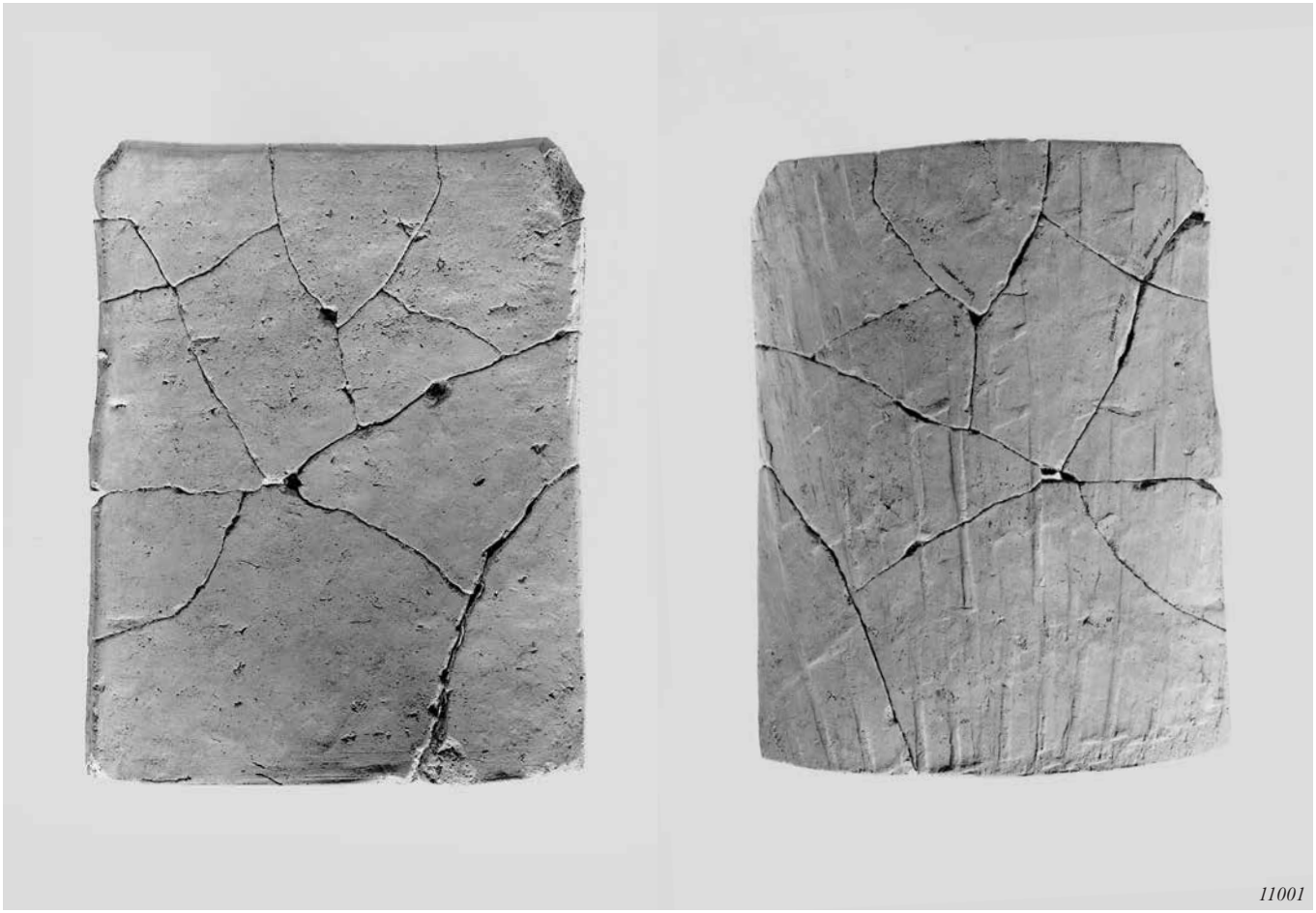
窯体出土平瓦 1

10901

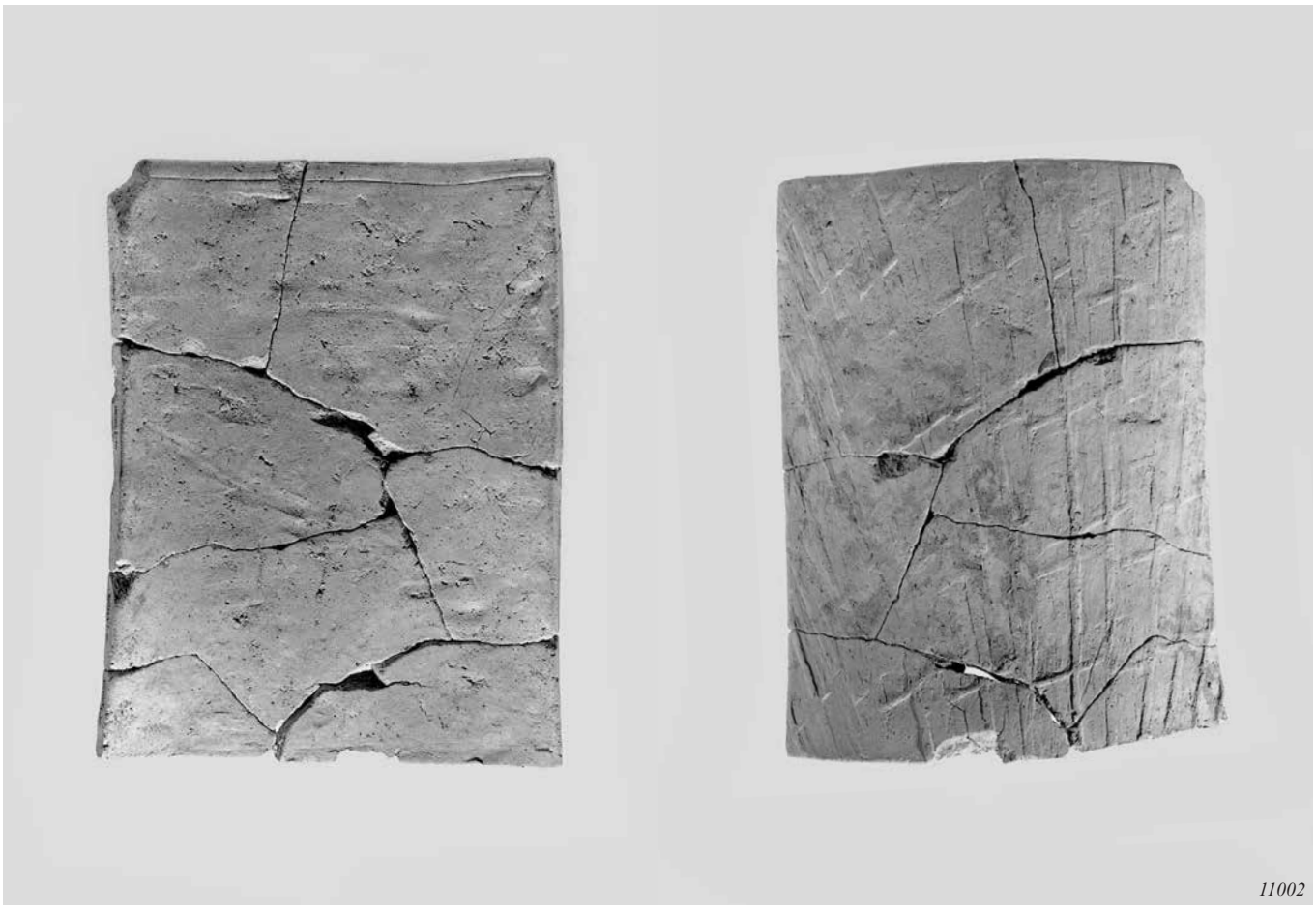
10902

梟谷１号窯

窯体出土平瓦 2



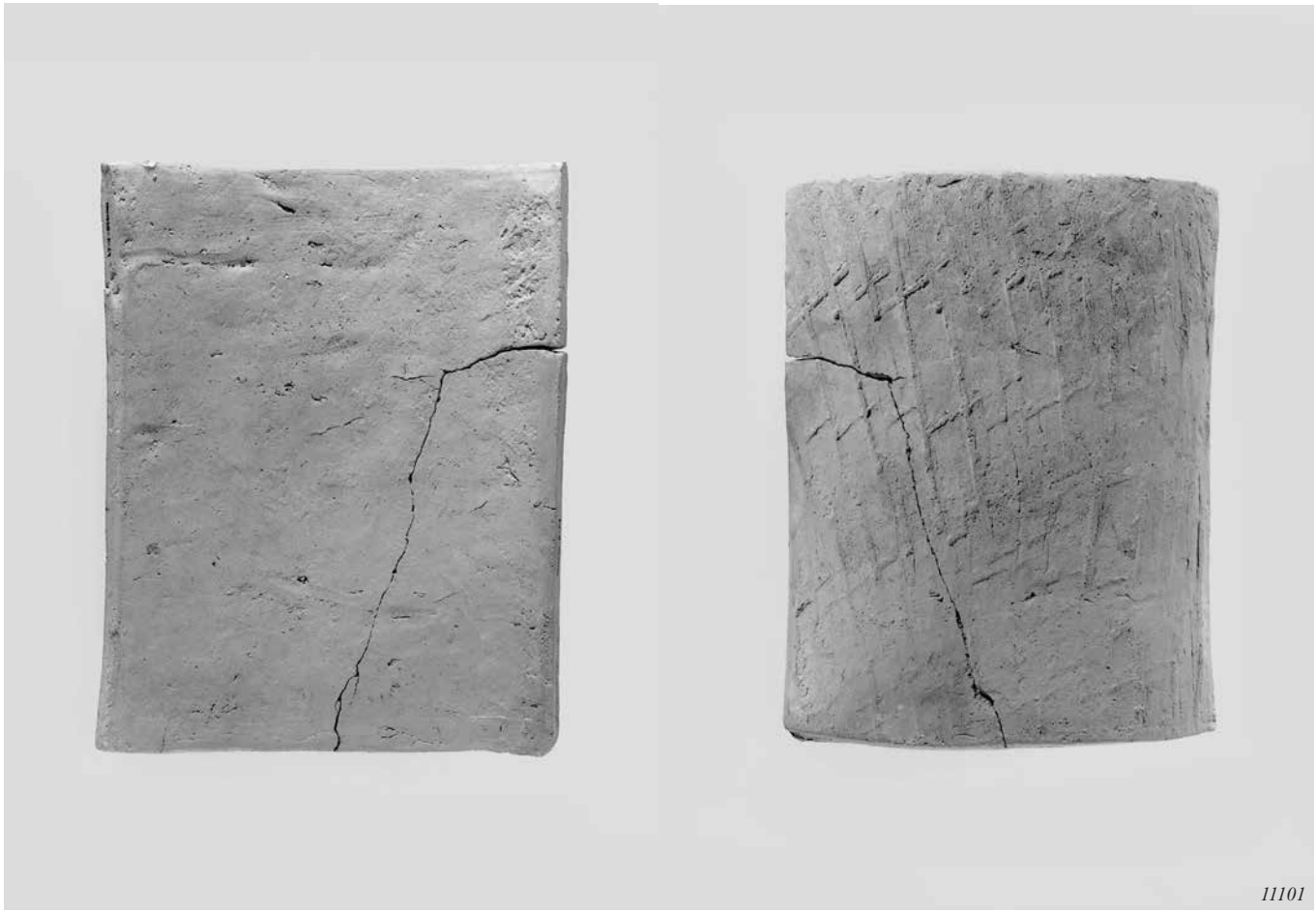
11001



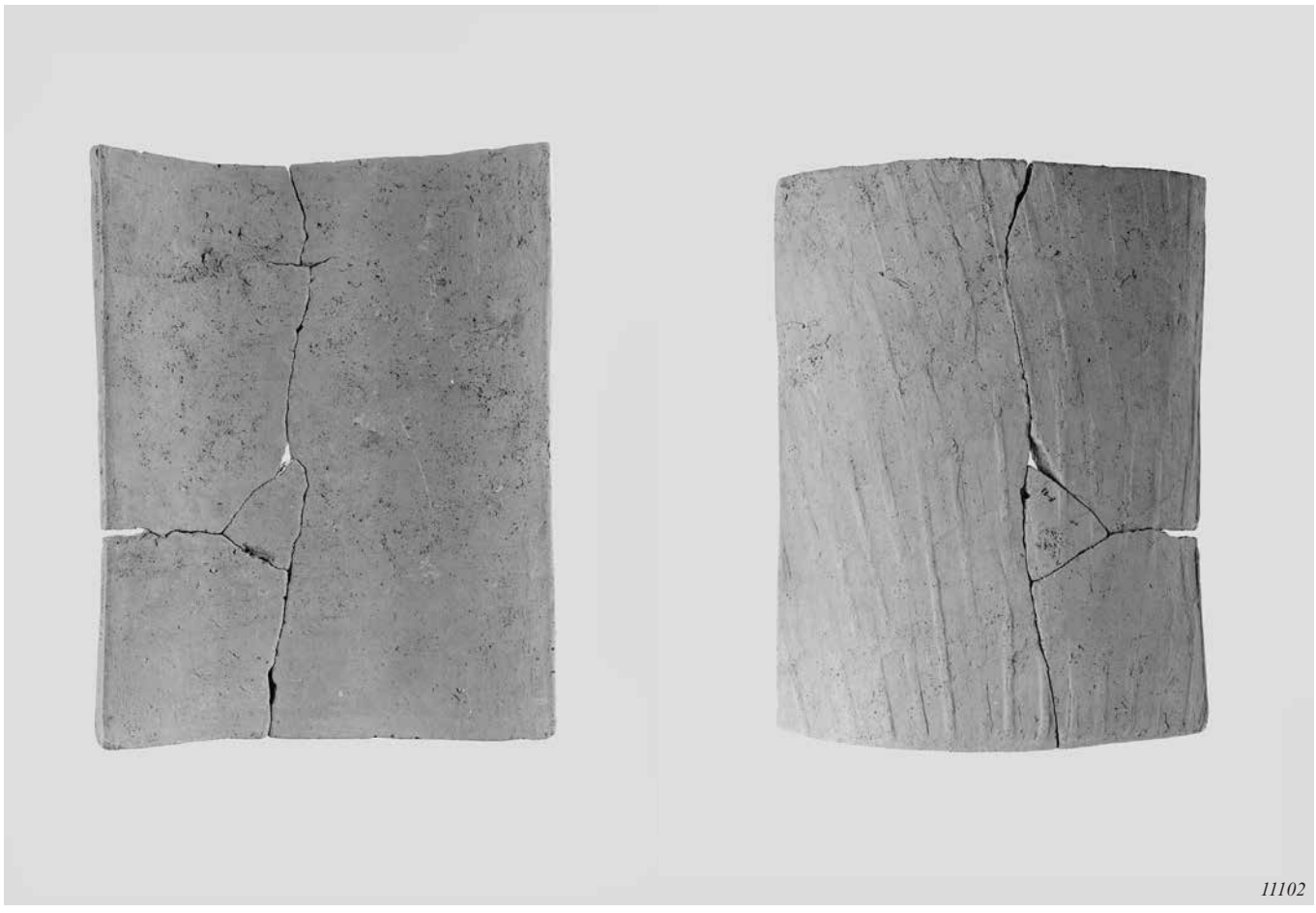
11002

梟谷１号窯

窯体出土平瓦 3



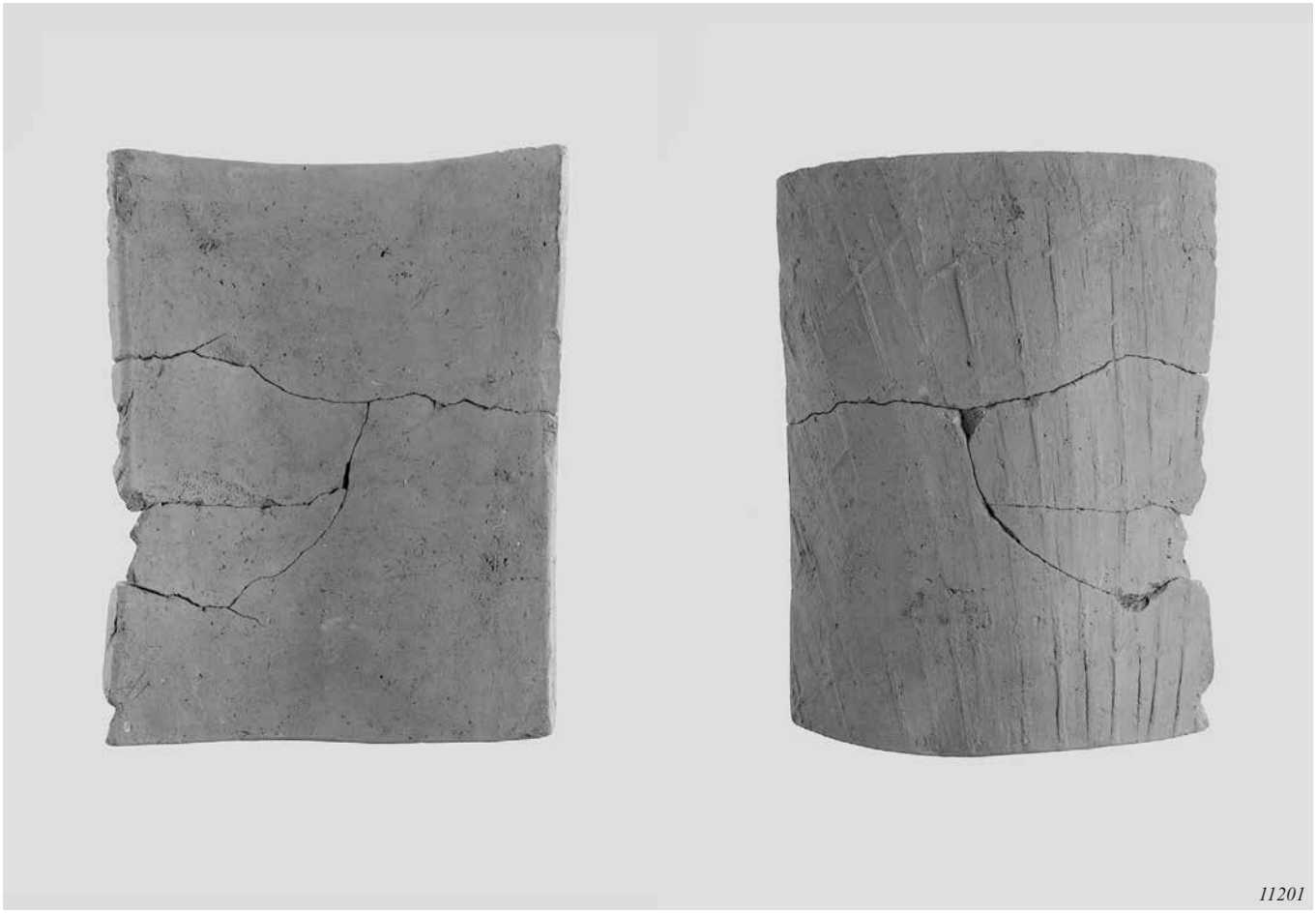
11101



11102

梟谷１号窯

窯体出土平瓦 4



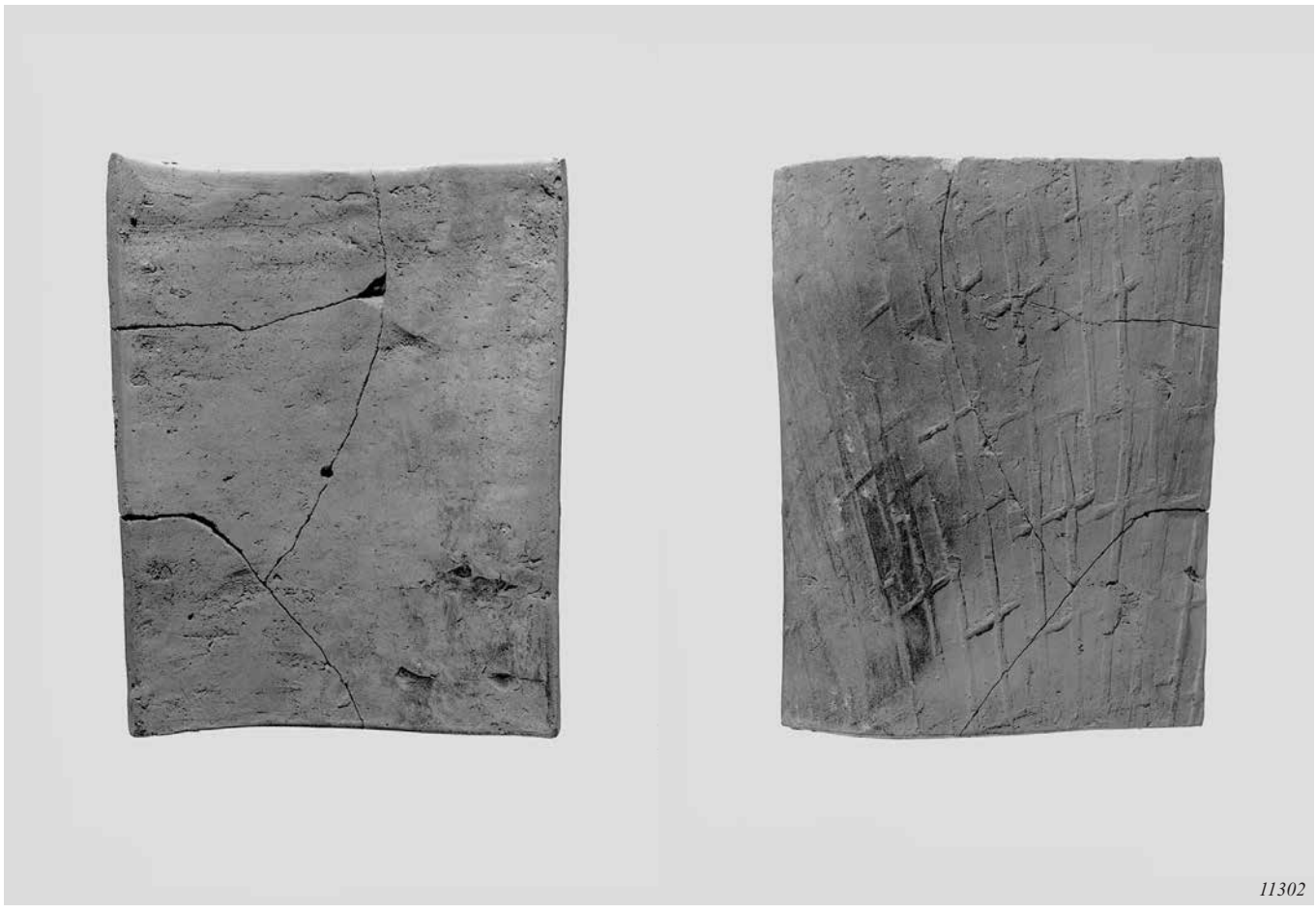
11201

11202

梟谷１号窯

窯体出土平瓦 5

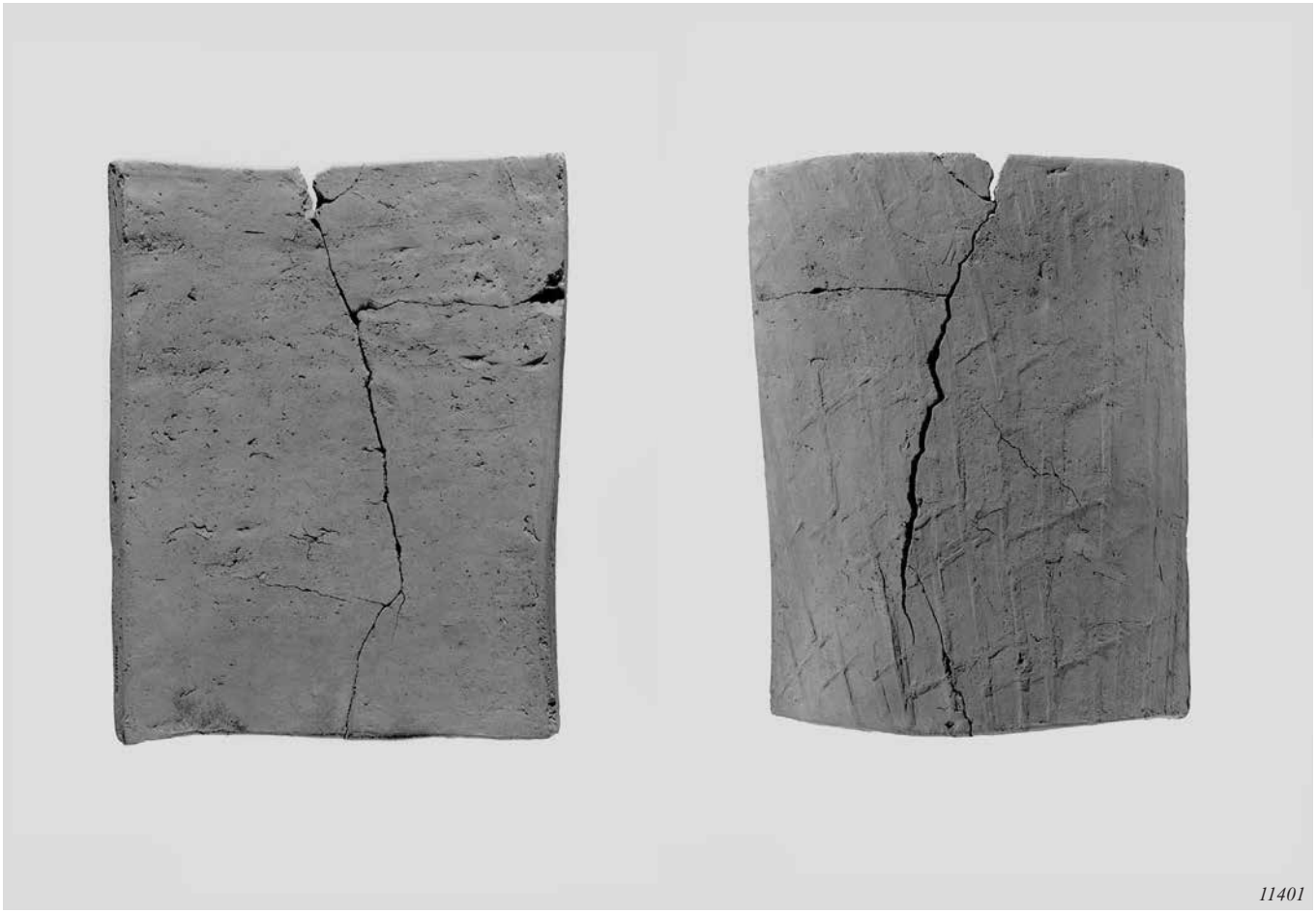
11301



11302

梟谷１号窯

窯体出土平瓦 6



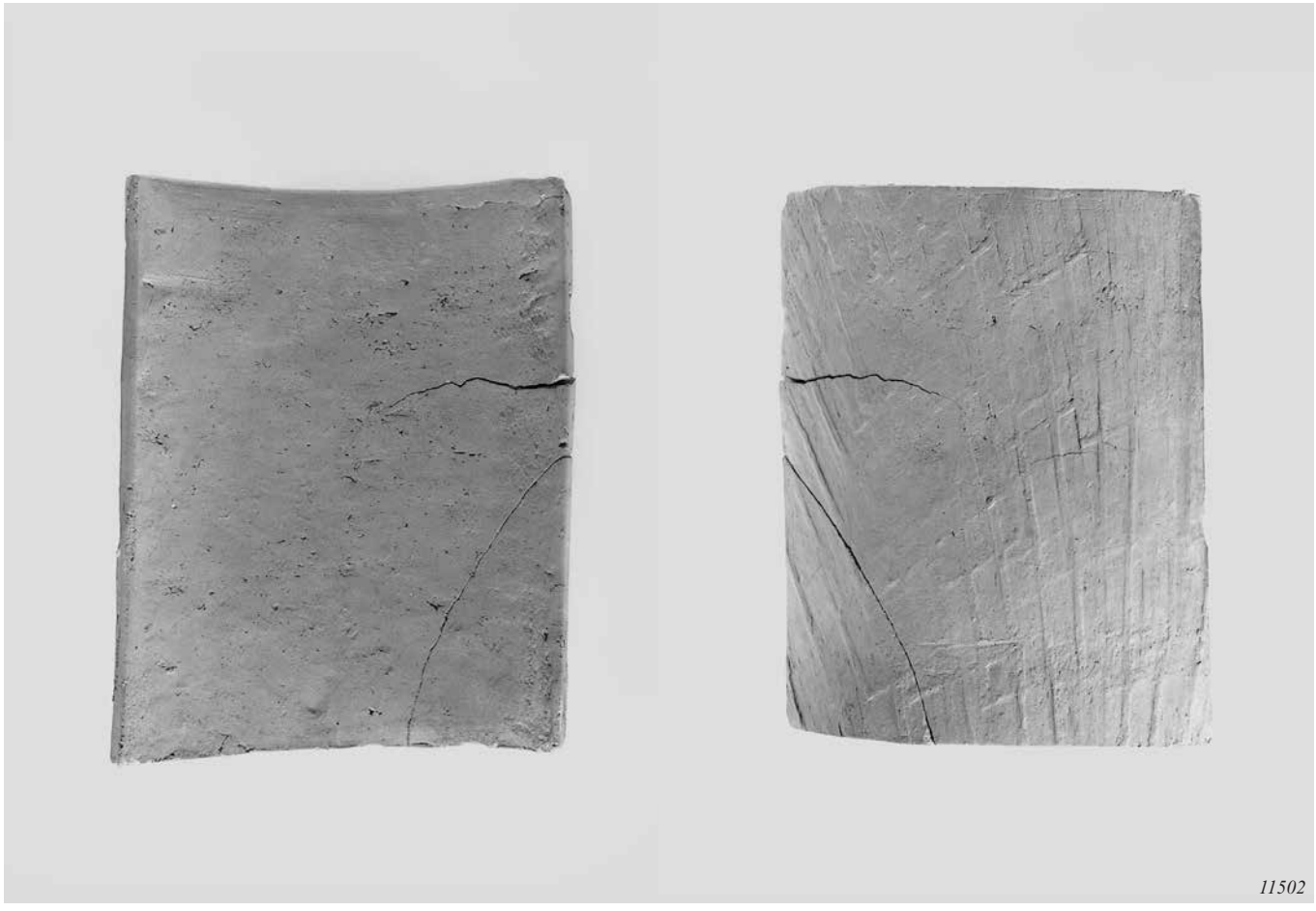
11401

11402

梟谷１号窯

窯体出土平瓦 7

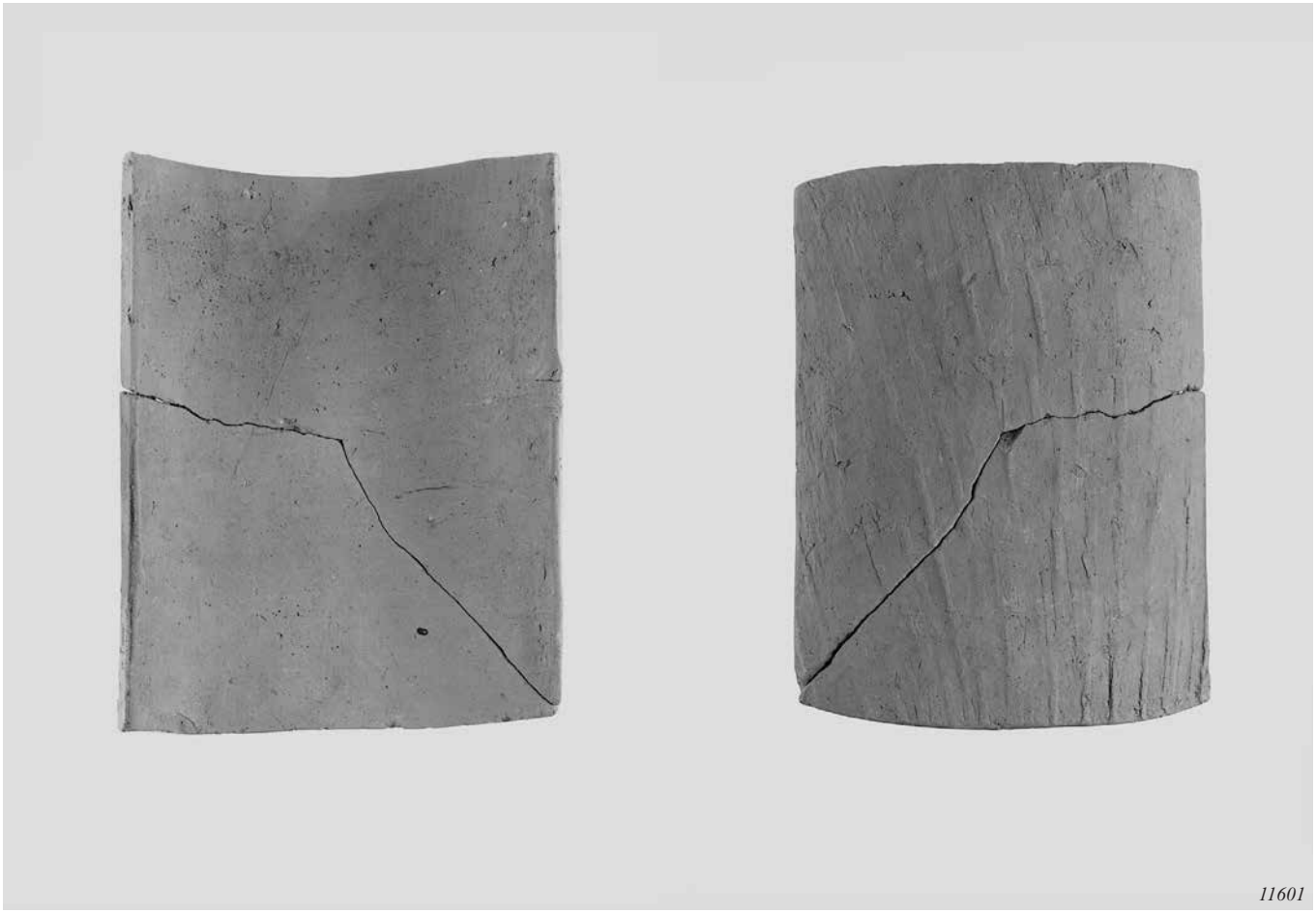
11501



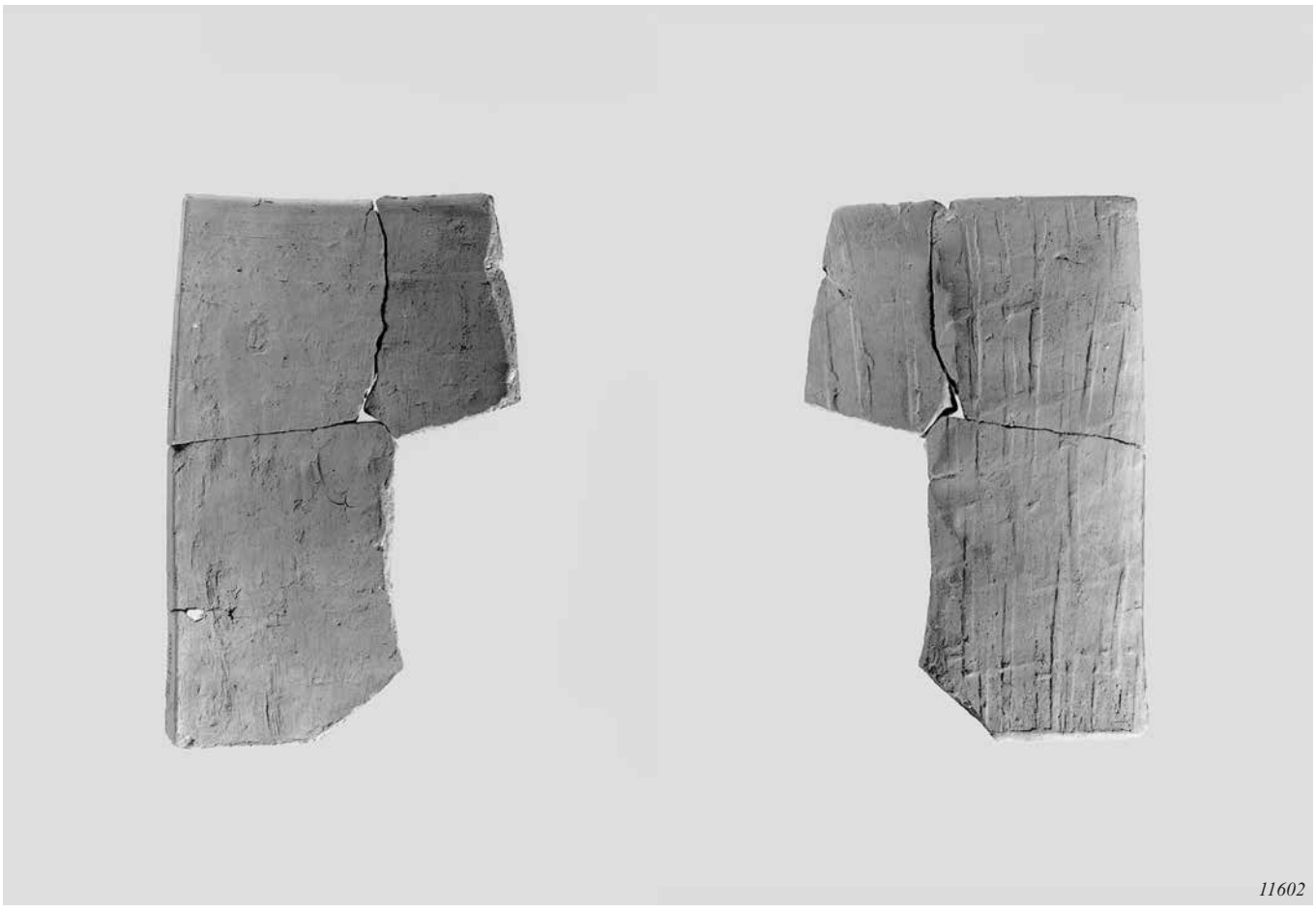
11502

梟谷１号窯

窯体出土平瓦 8



11601

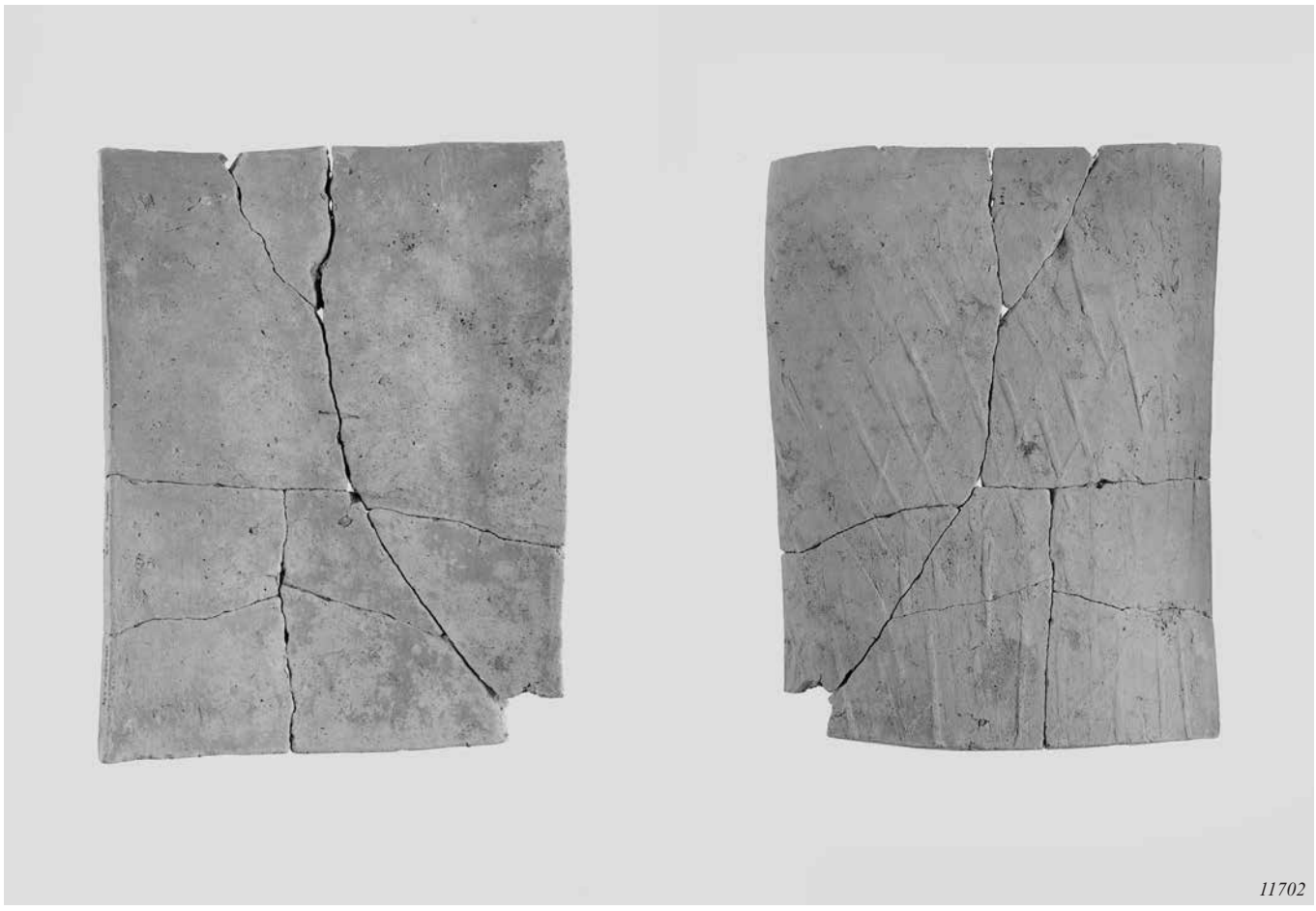


11602

梟谷１号窯

窯体出土平瓦 9

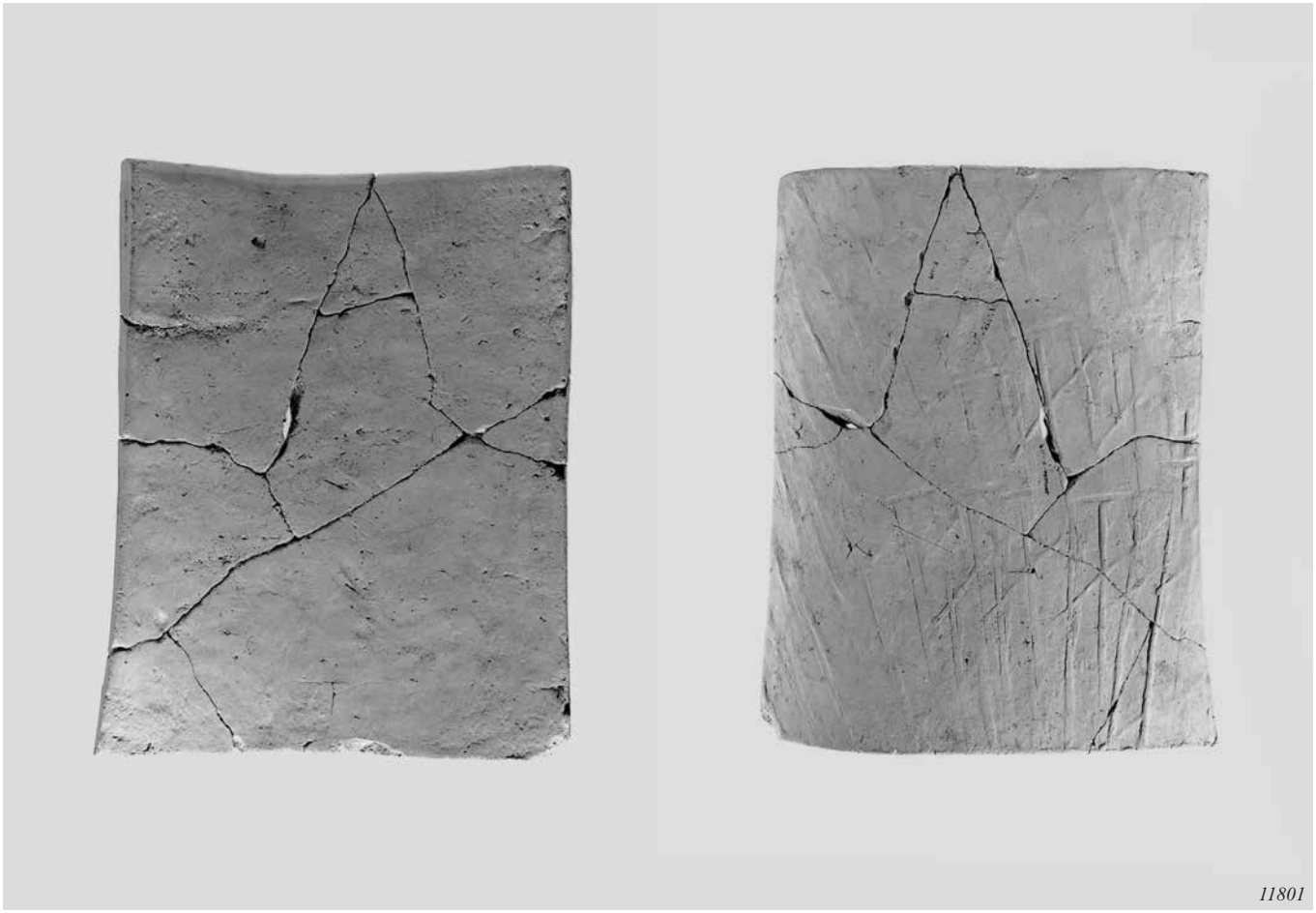
11701



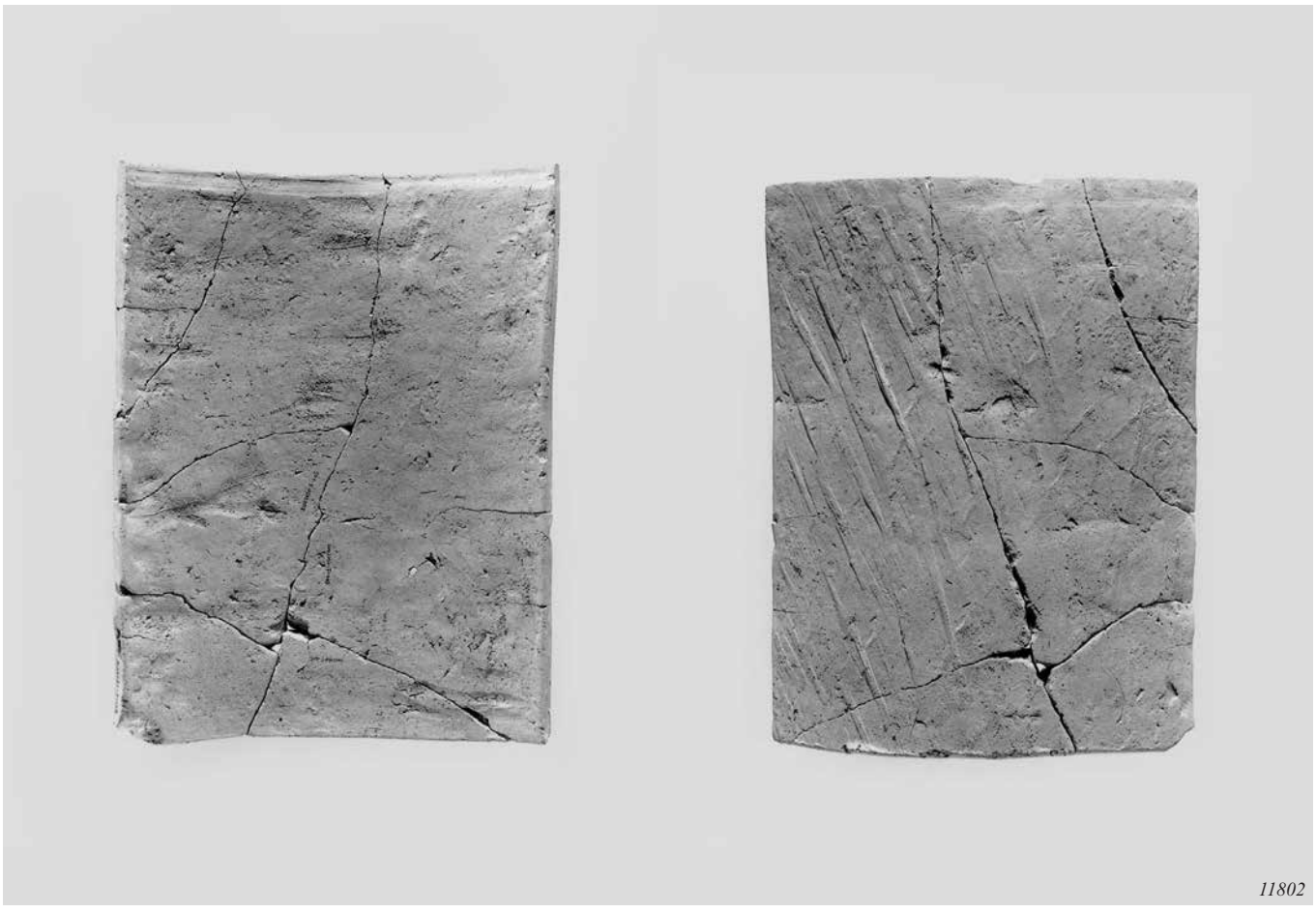
11702

梟谷１号窯

窯体出土平瓦 10



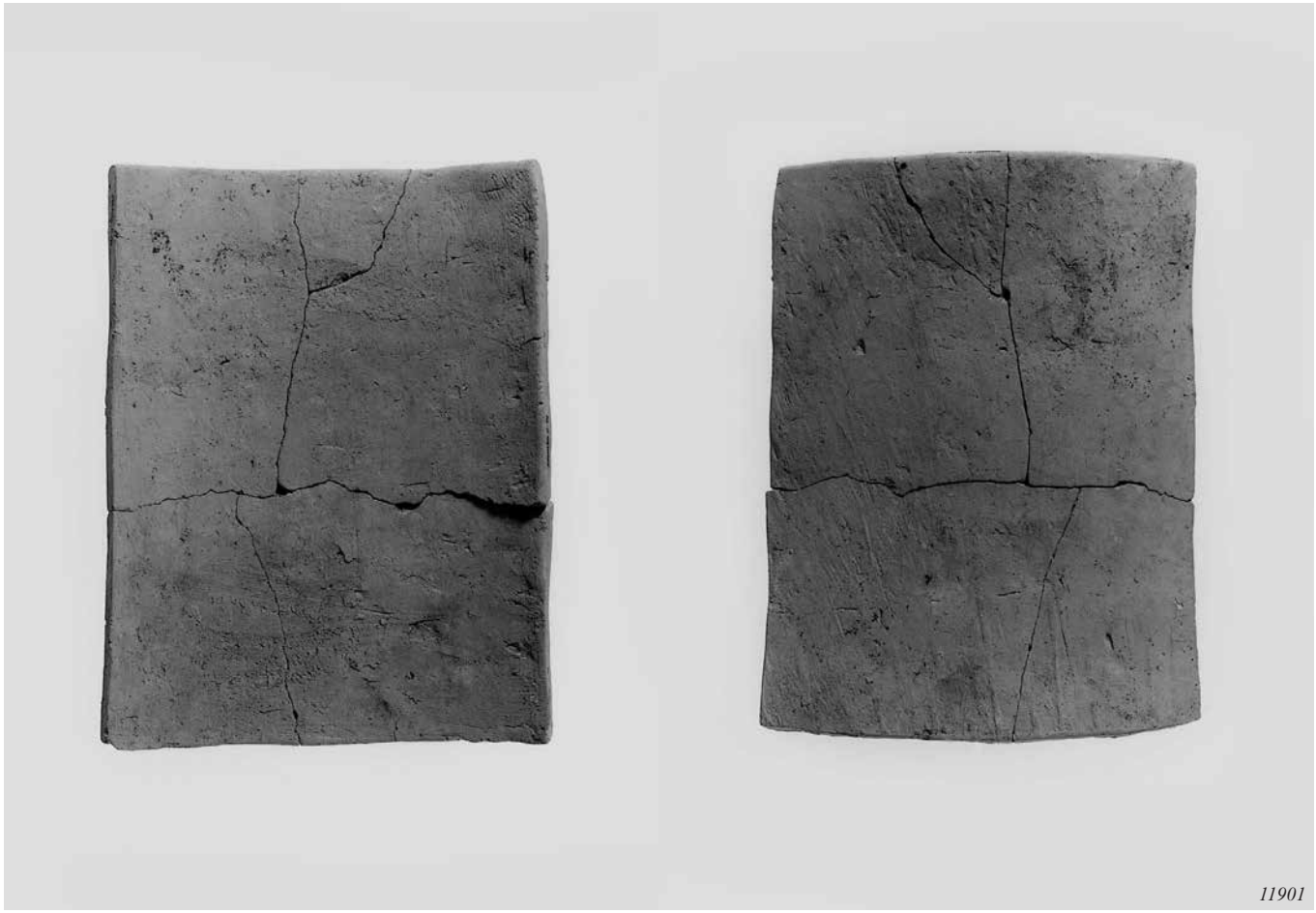
11801



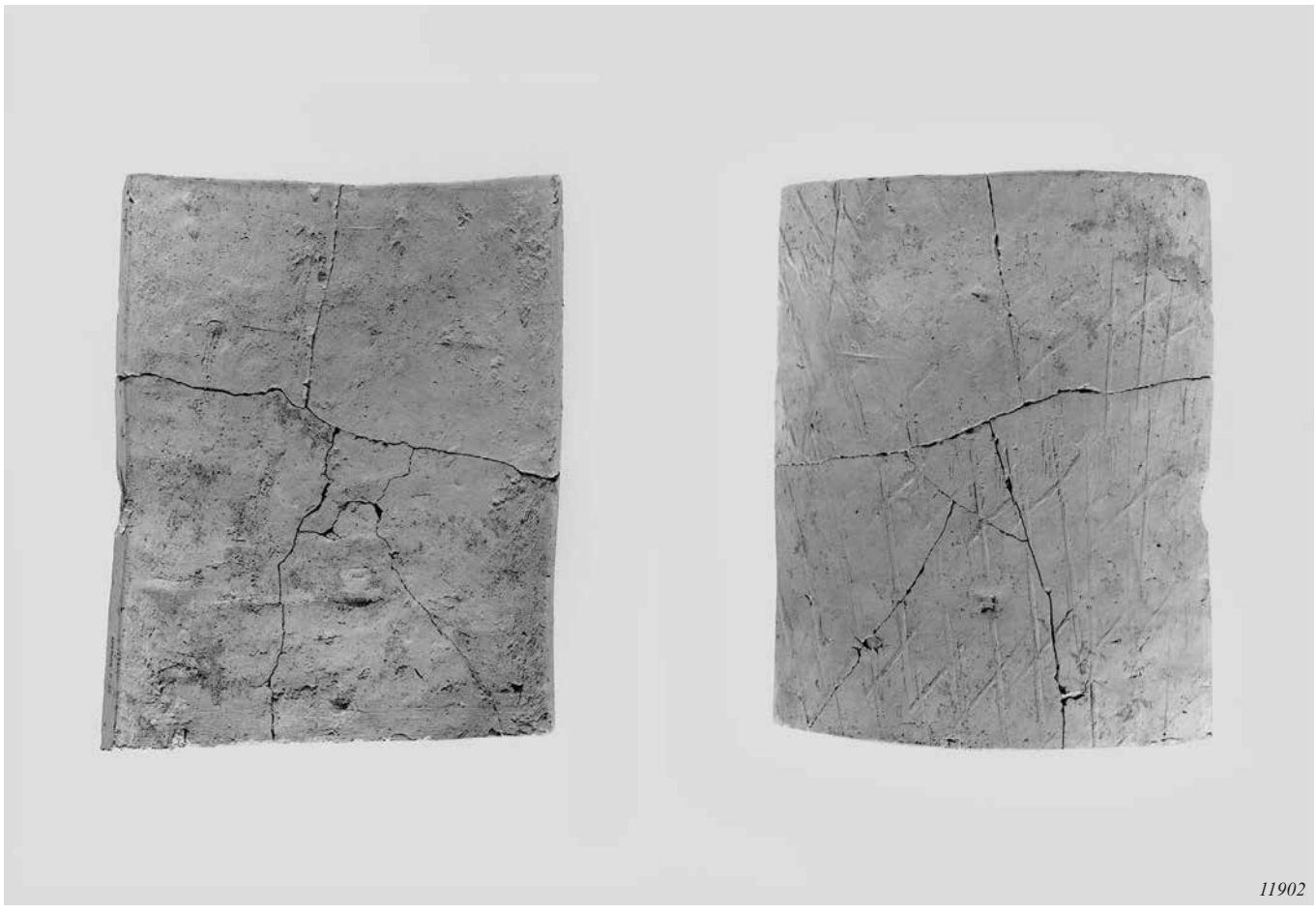
11802

臭谷 1 号窯

窯体出土平瓦 11



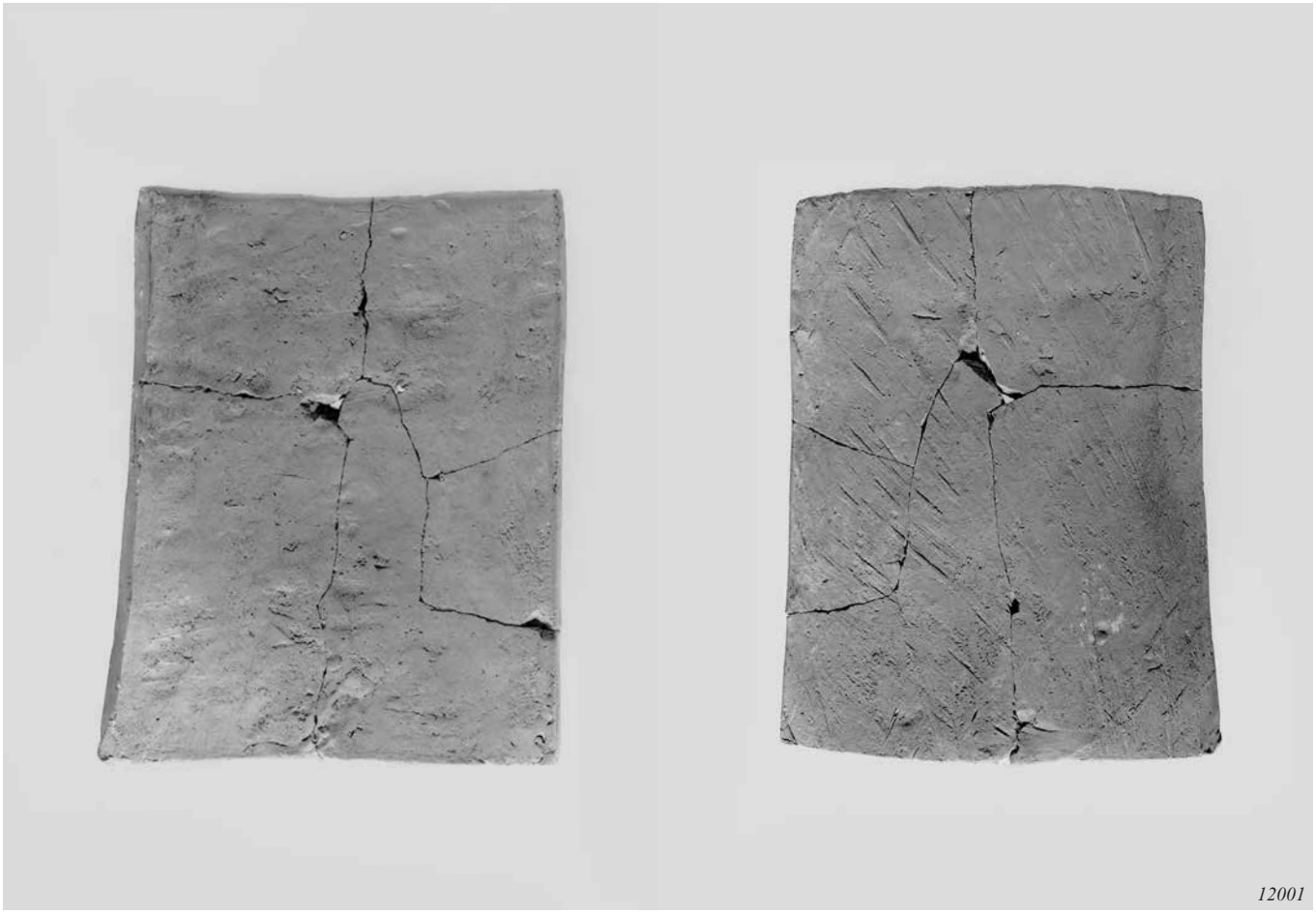
11901



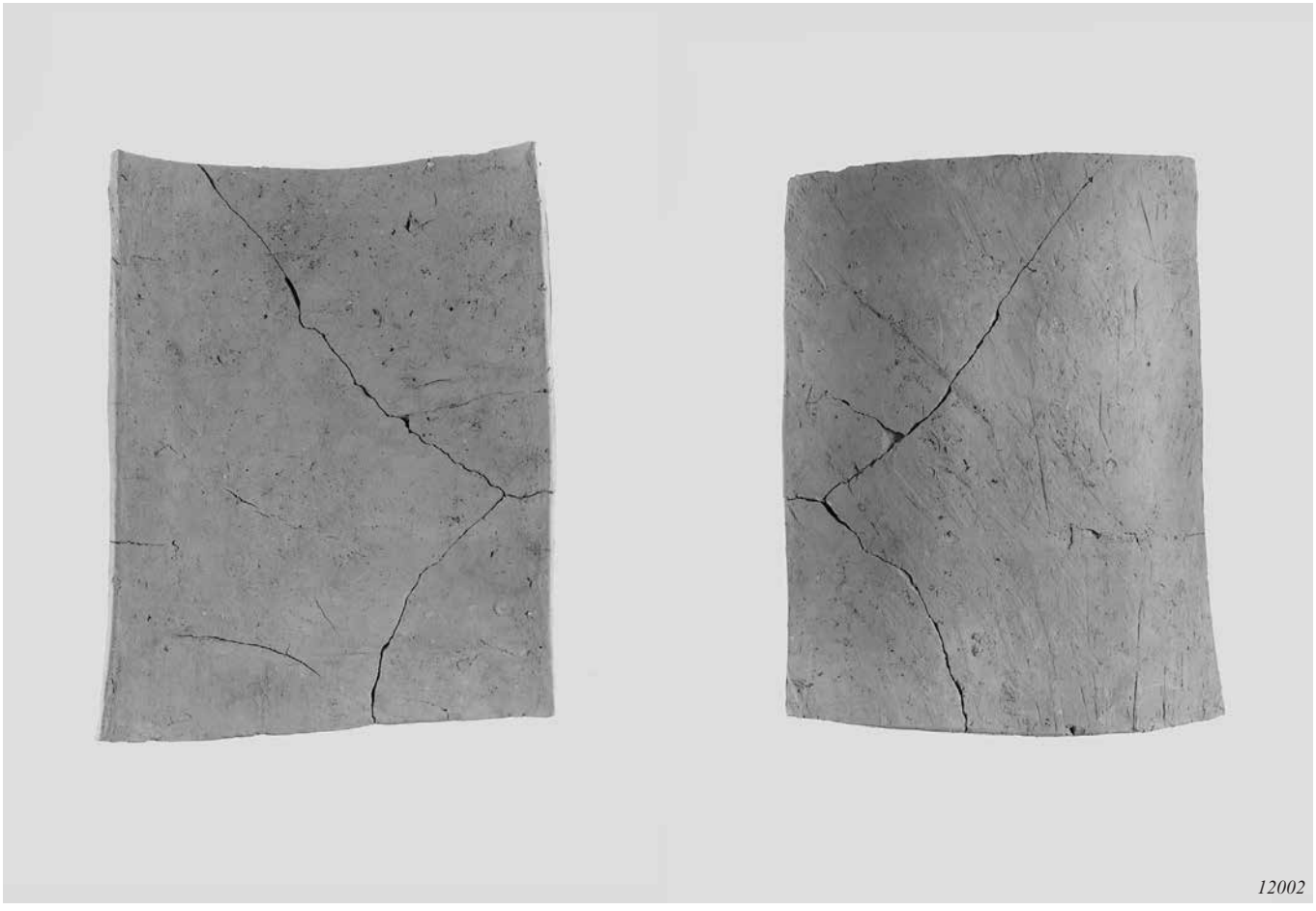
11902

梟谷 1 号窯

窯体出土平瓦 12



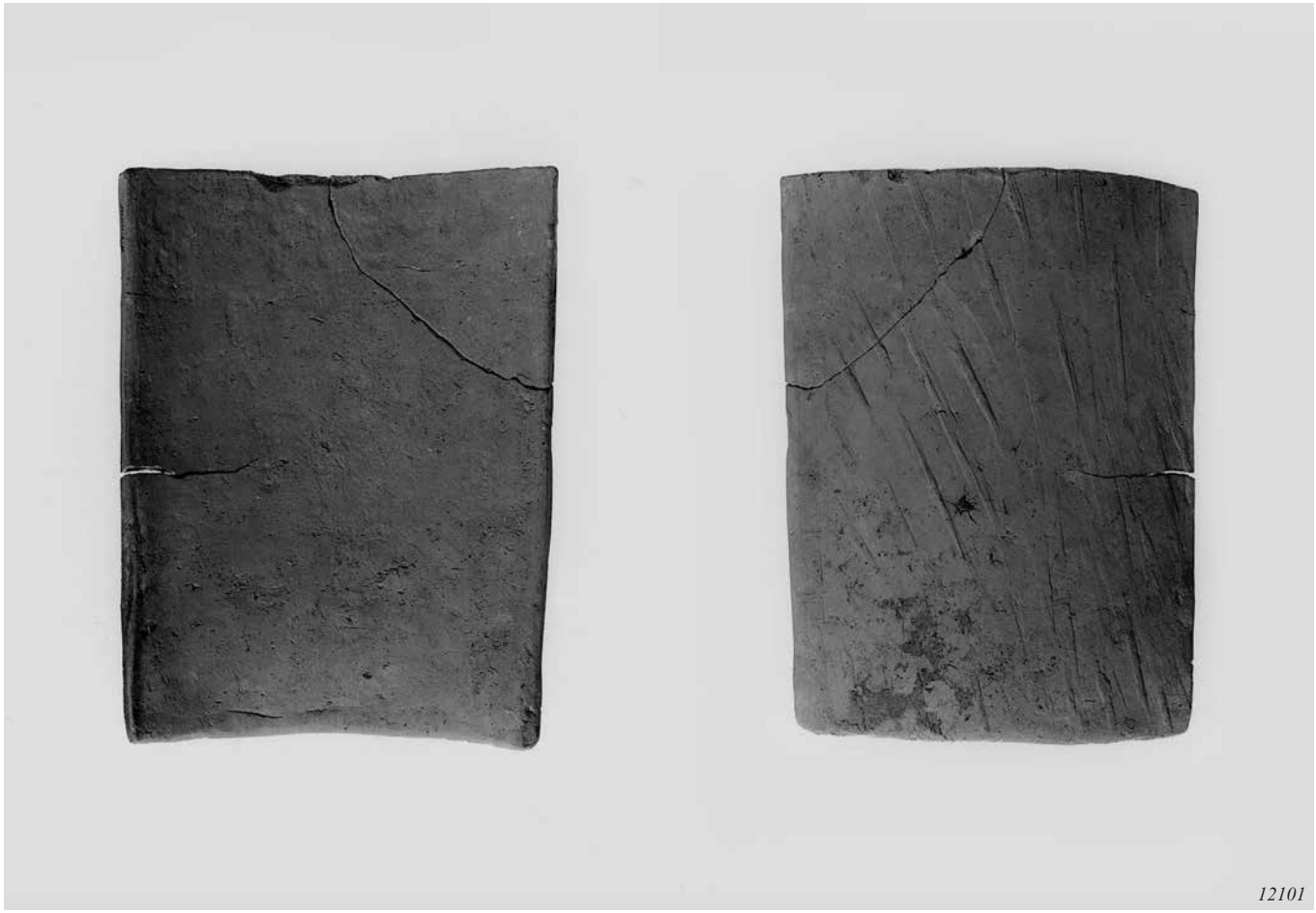
12001



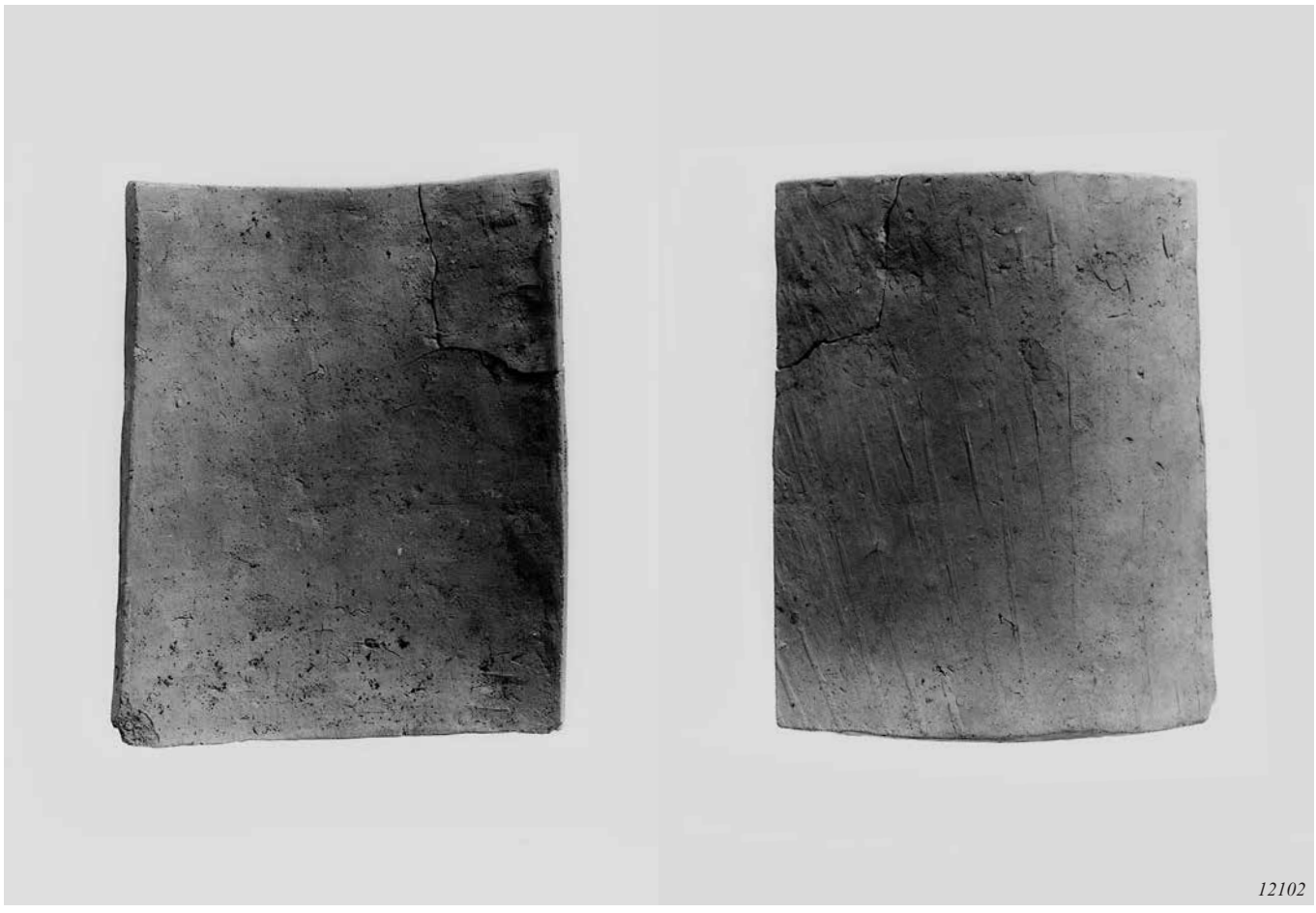
12002

梟谷1号窯

窯体出土平瓦 13



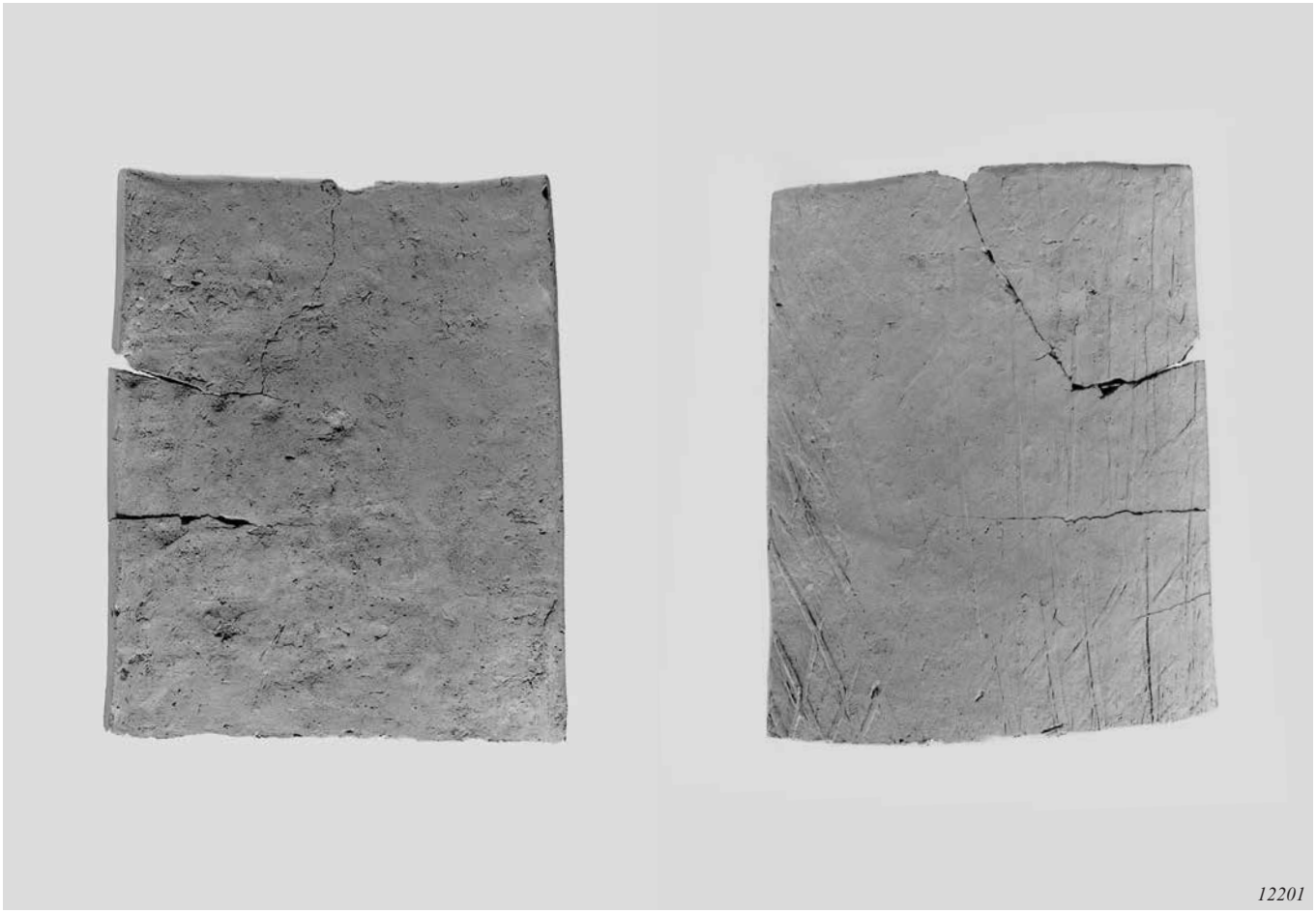
12101



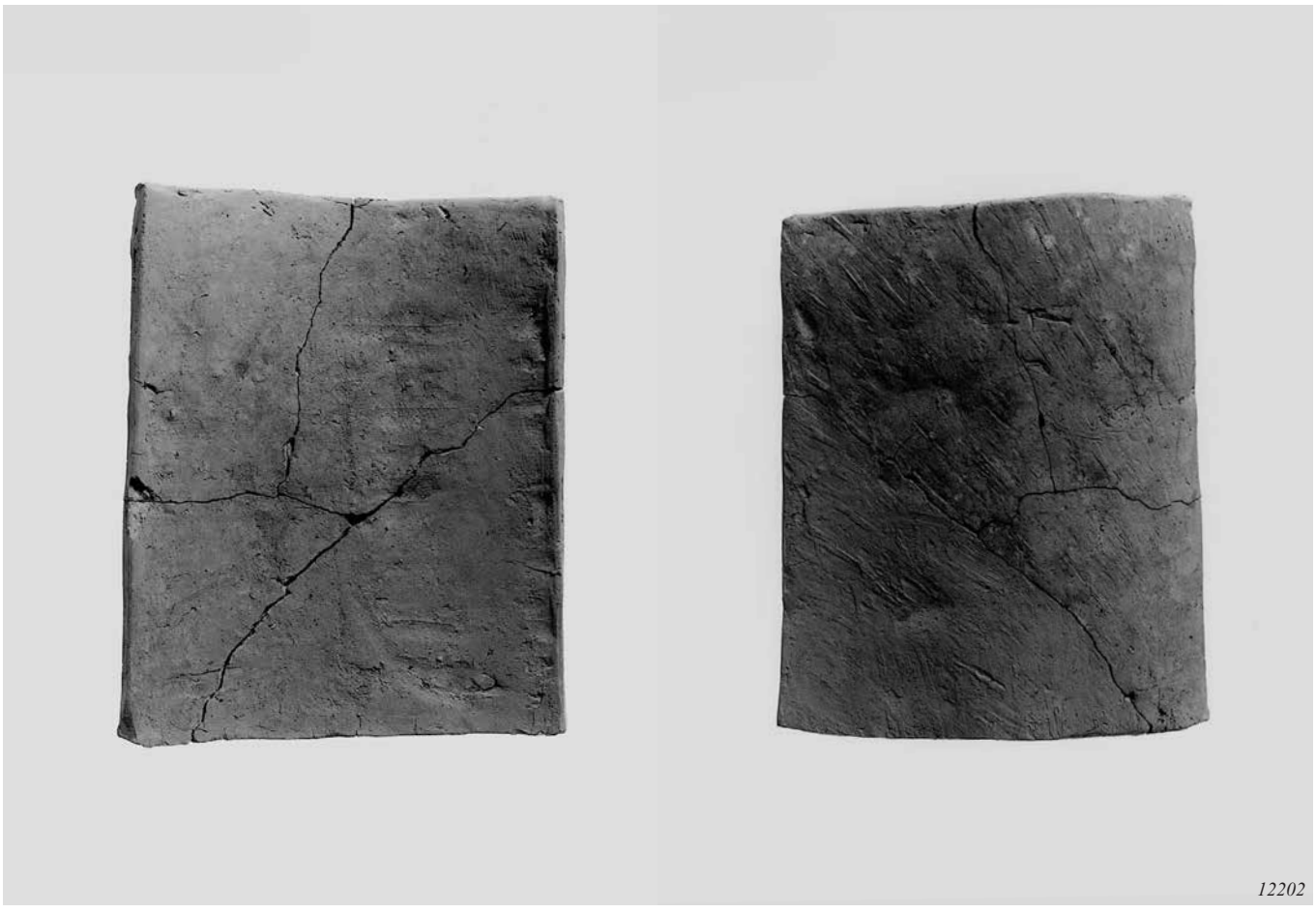
12102

梟谷１号窯

窯体出土平瓦 14



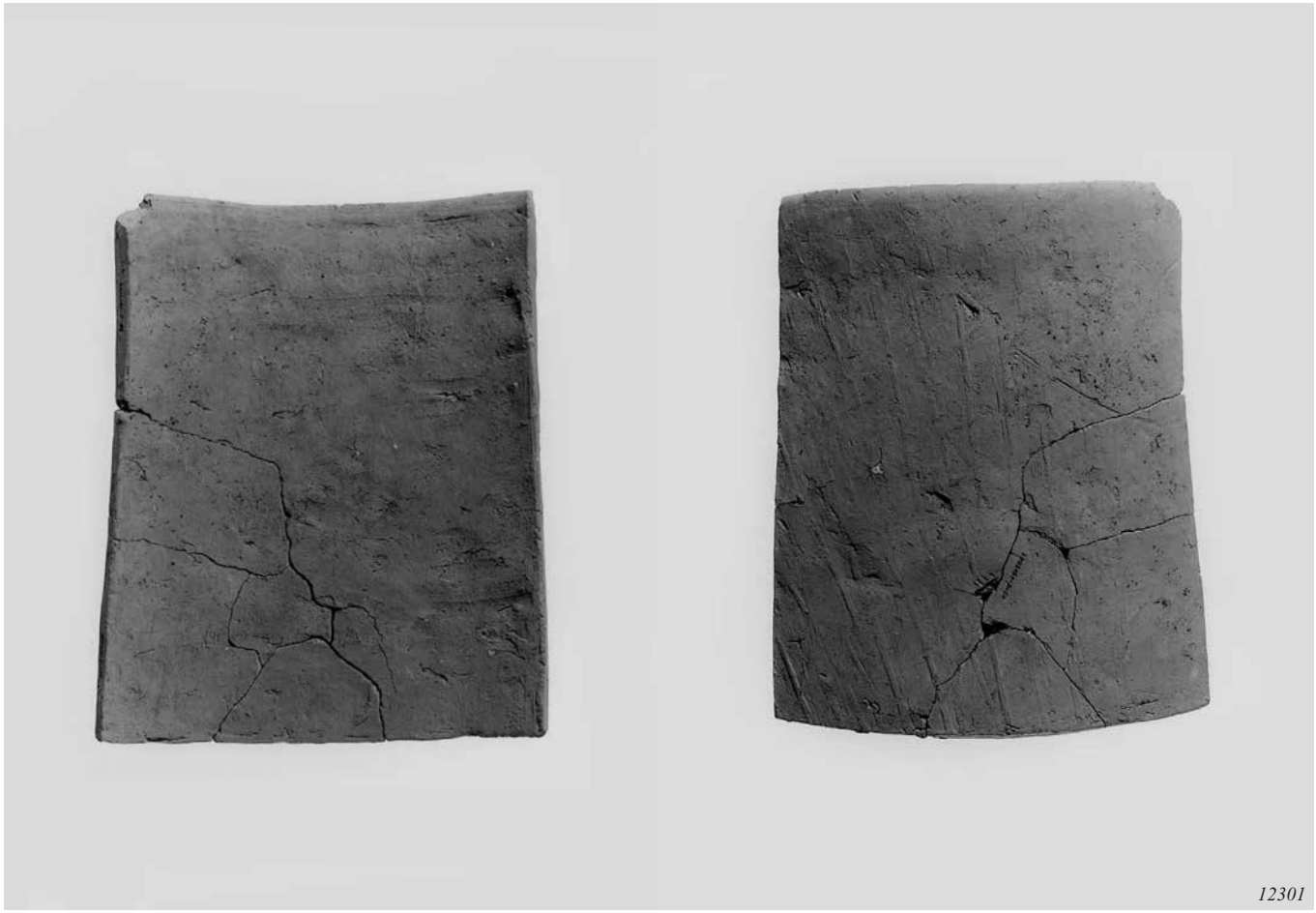
12201



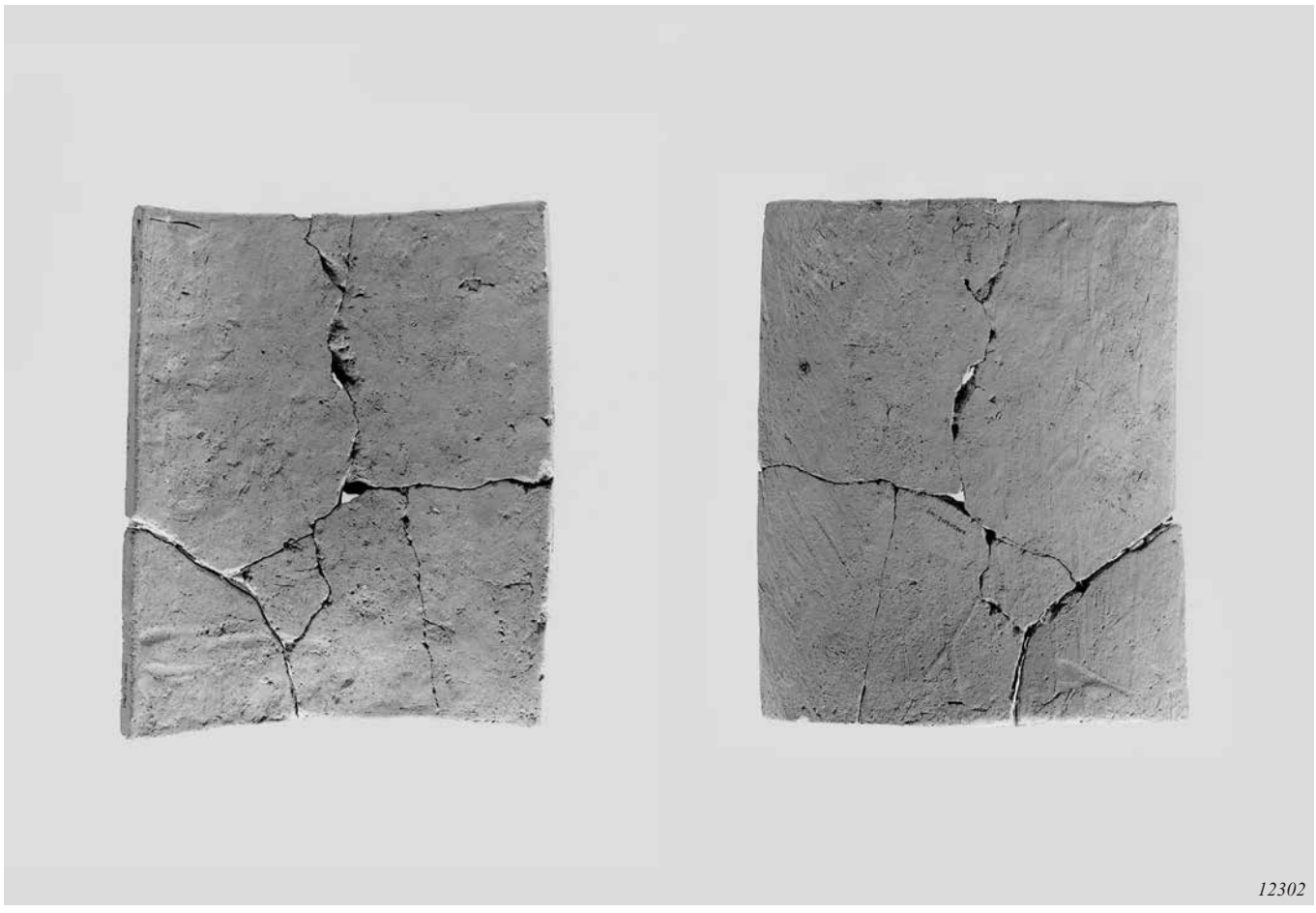
12202

梟谷 1 号窯

窯体出土平瓦 15



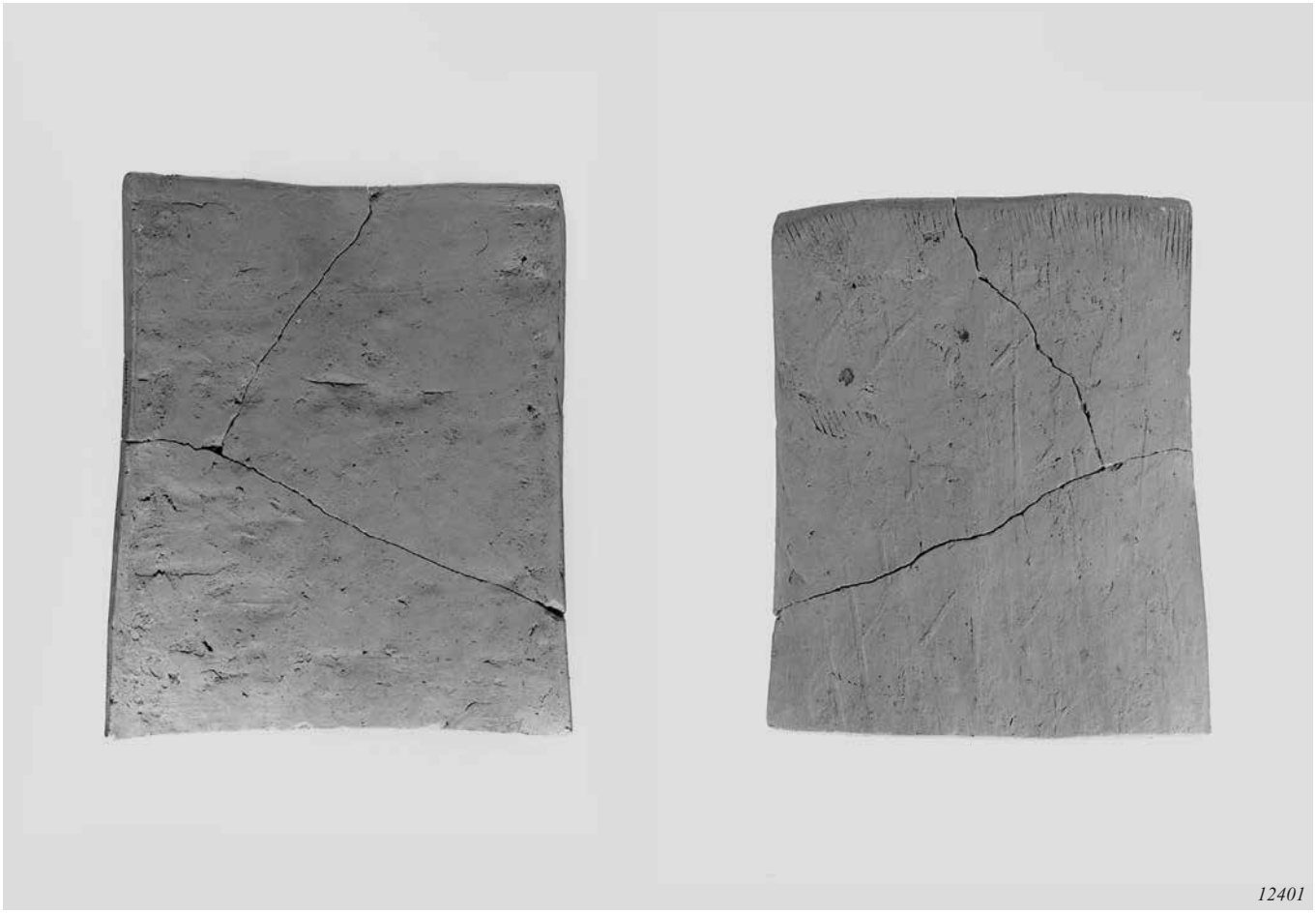
12301



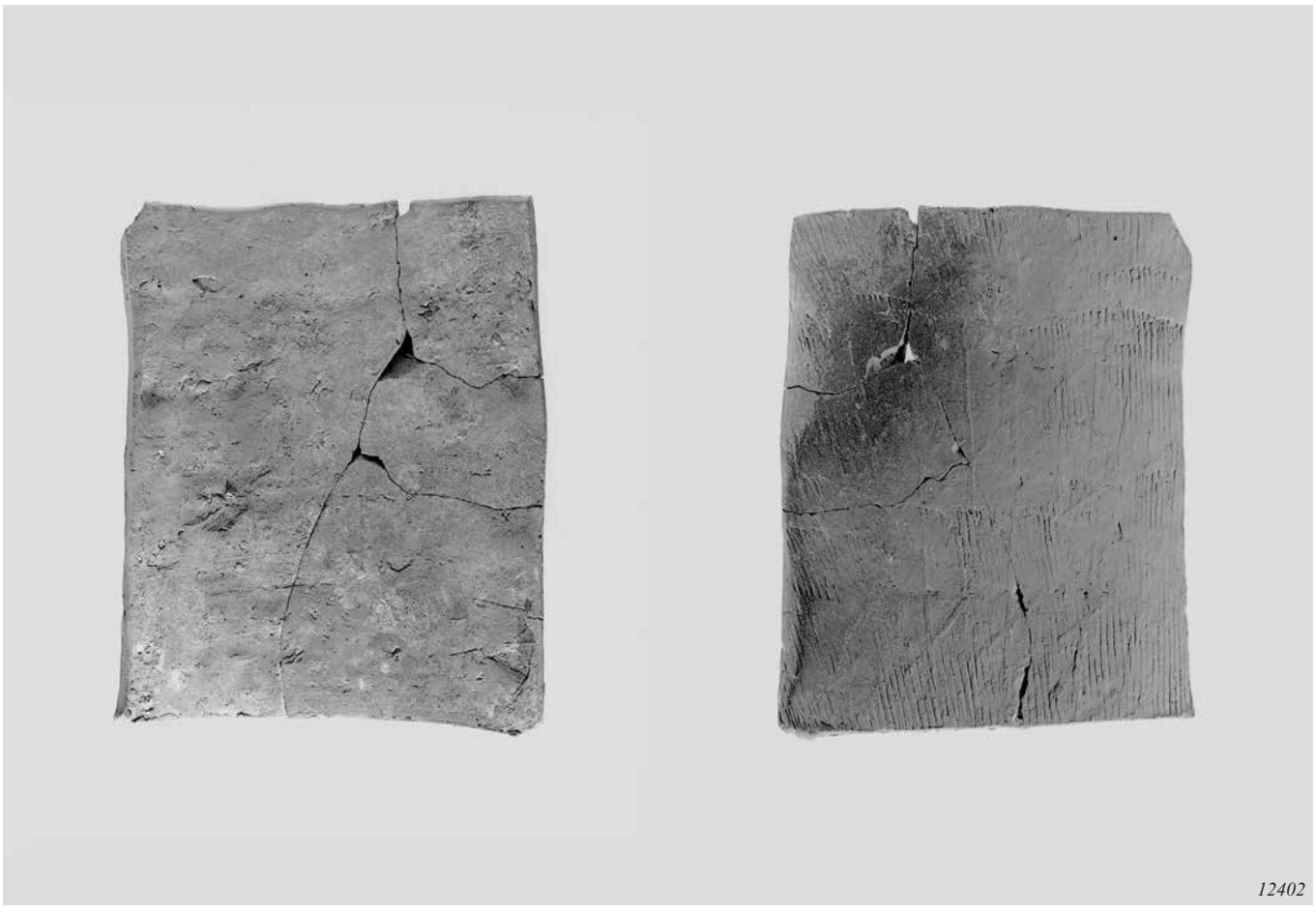
12302

梟谷１号窯

窯体出土平瓦 16



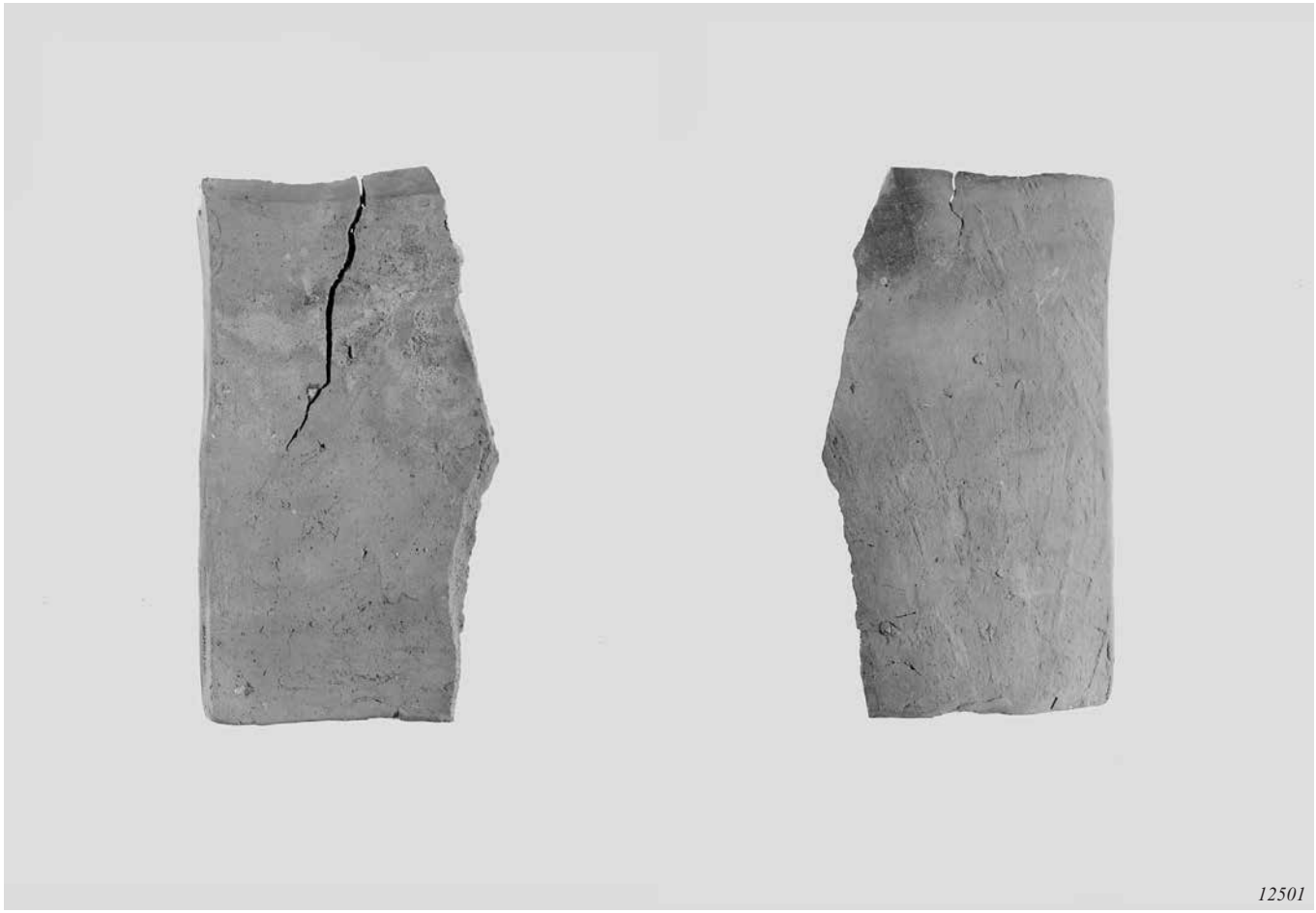
12401



12402

梟谷 1 号窯

窯体出土平瓦 17



12501

12502

梟谷１号窯

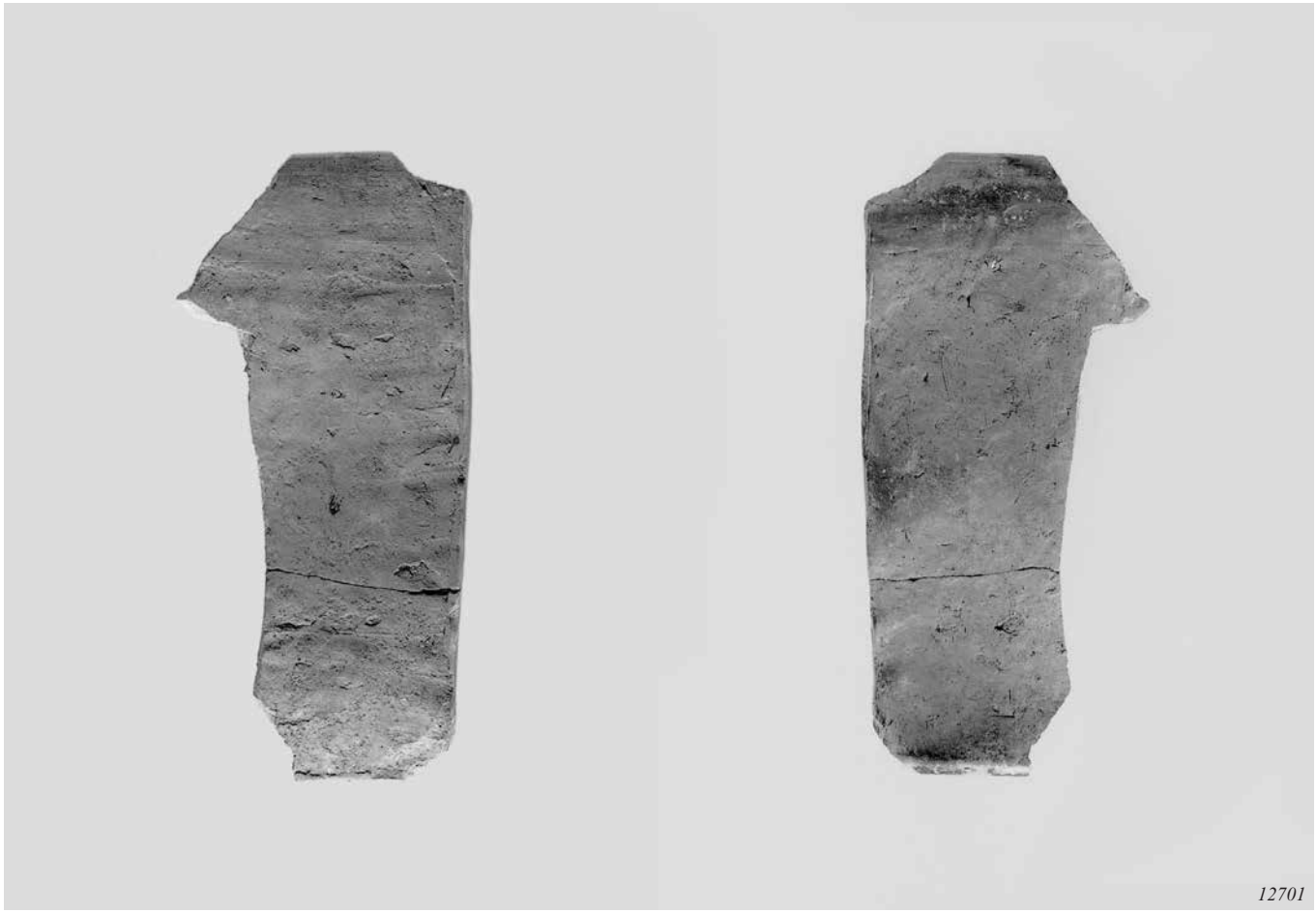
窯体出土平瓦 18

12601

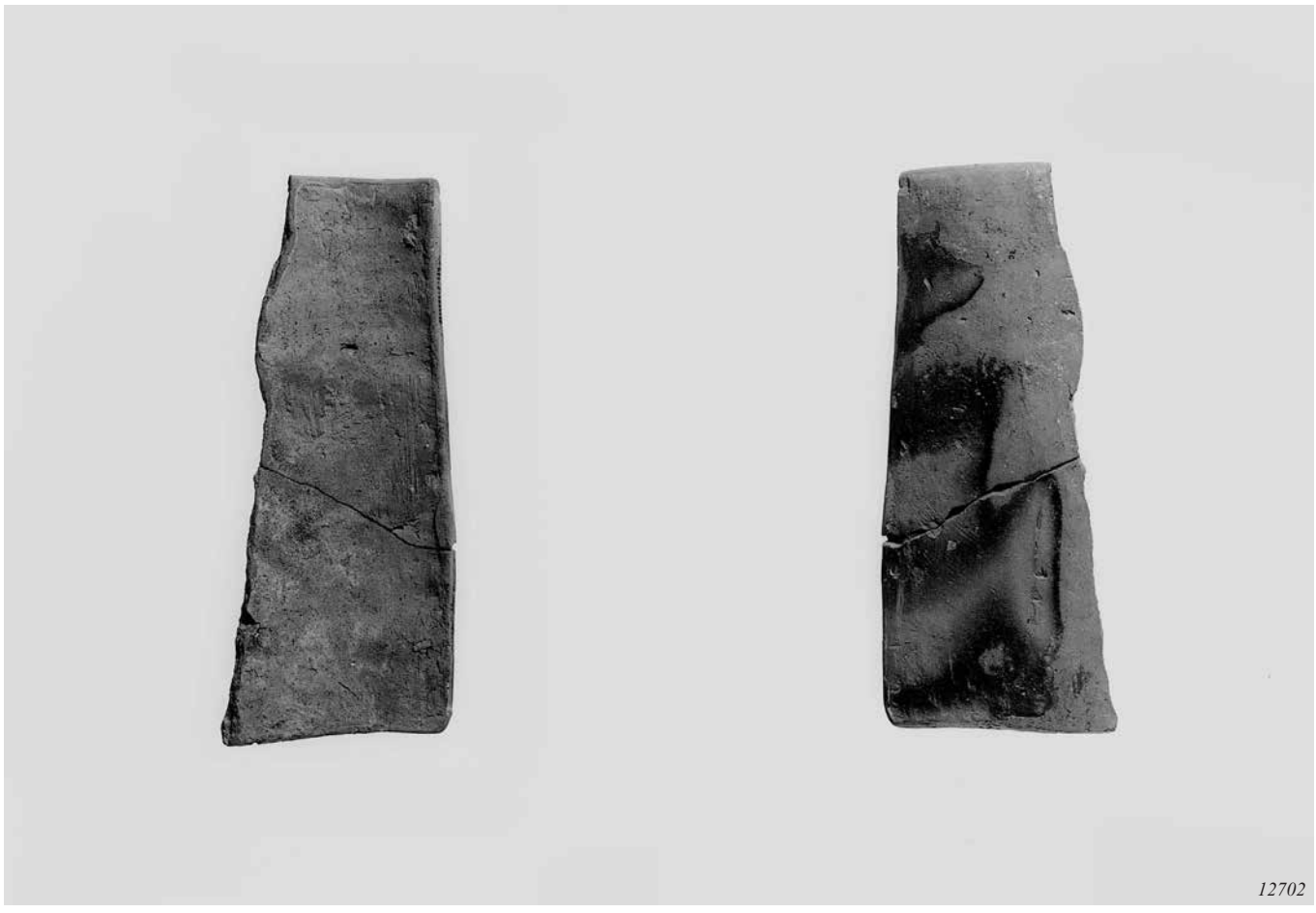
12602

梟谷1号窯

窯体出土平瓦 19



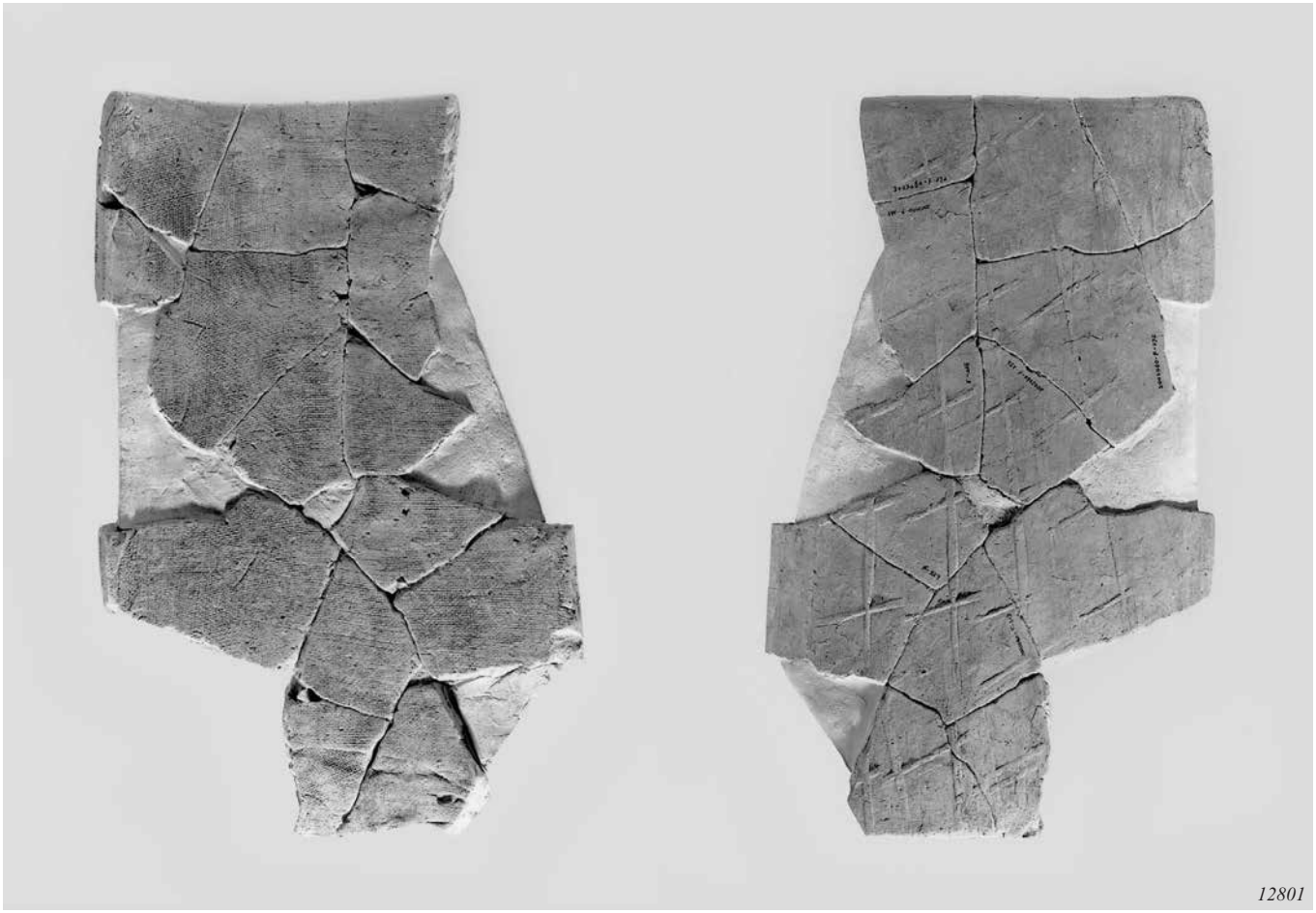
12701



12702

梟谷 1 号窯

窯体出土平瓦 20

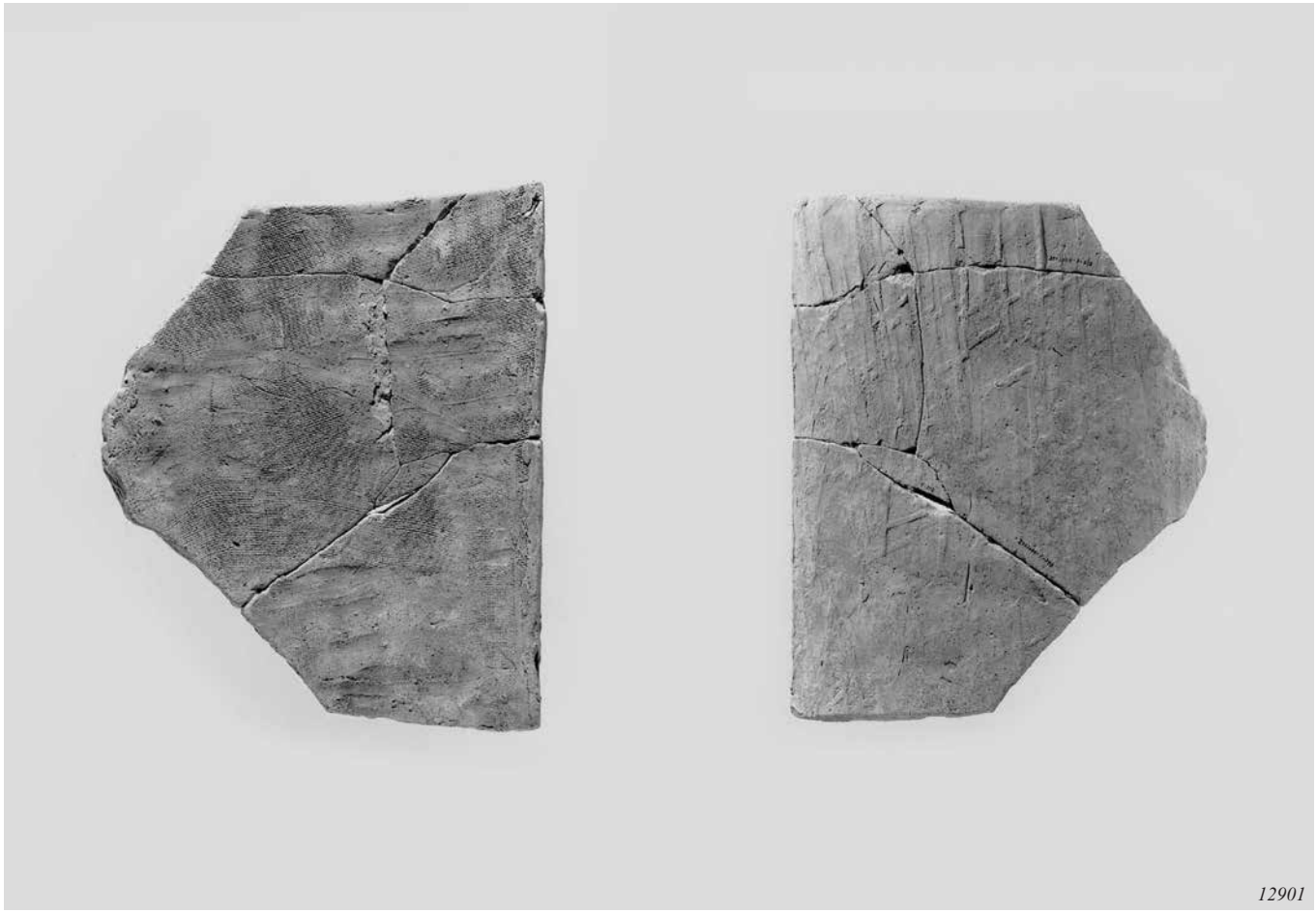


12801

12802

梟谷１号窯

灰原出土平瓦 1



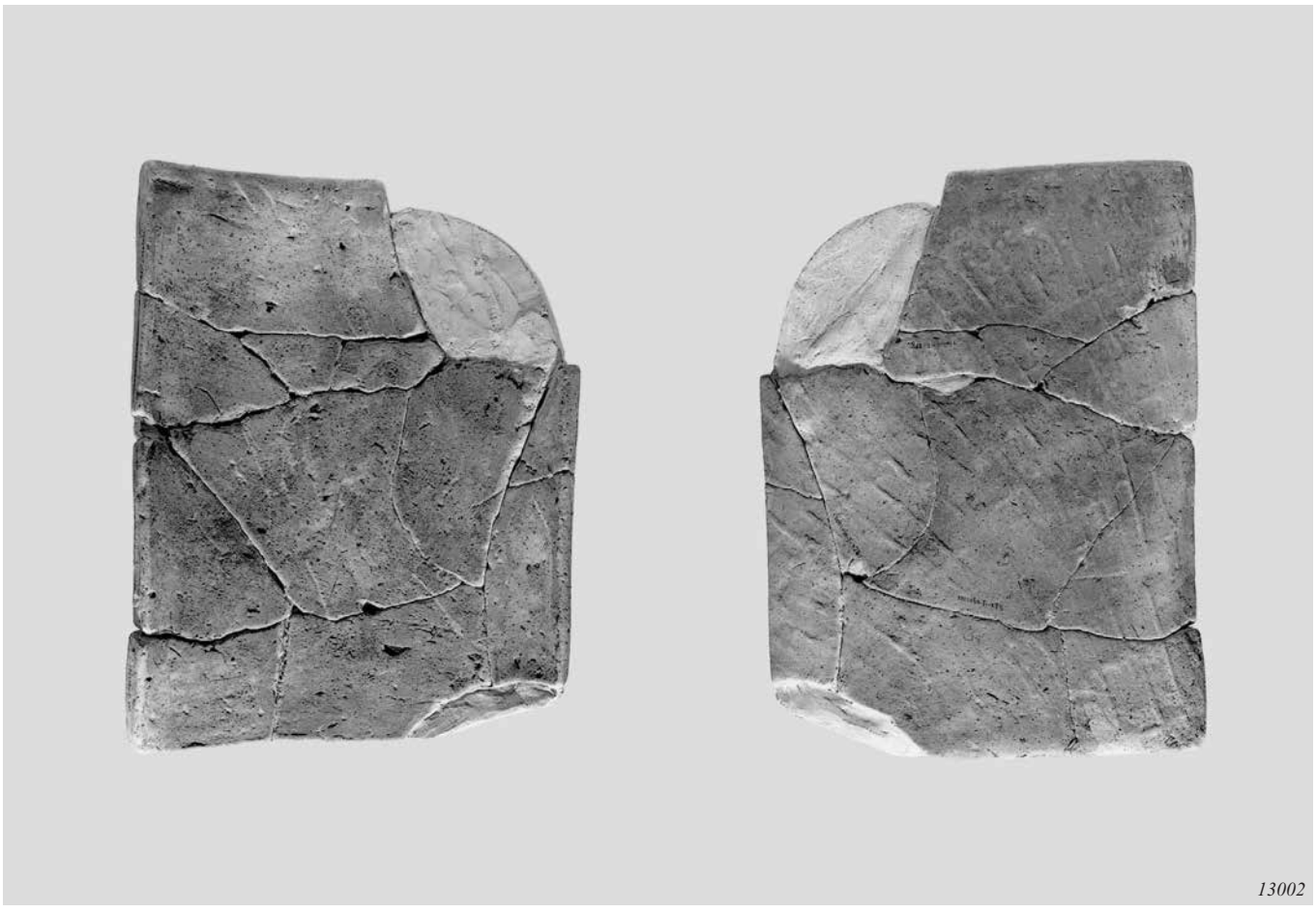
12901

12902

梟谷１号窯

灰原出土平瓦 2

13001



13002

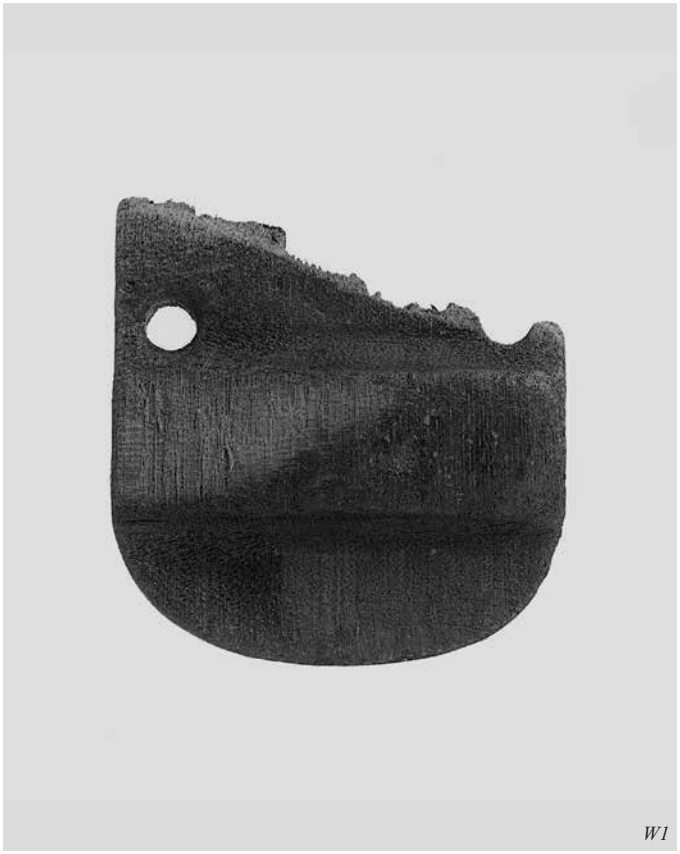
梟谷１号窯

灰原出土平瓦 3

13101

鴨谷１・２号窯地区

灰原出土木製品



W1

W2

W3

W4

報　告　書　抄　録

ふりがな	かんでかまあとぐん　さん
書　　名	神出窯跡群　Ⅲ
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第407冊
編著者名	森内秀造・別府洋二・池田征弘・岡本一秀・小林克也
編集機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675－0142　兵庫県加古郡播磨町大中１－１－１　　ＴＥＬ　079－437－5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650－8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号　　ＴＥＬ　078－341－7711
発行年月日	2011年（平成23年）２月25日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
鴨谷１号窯	神戸市西区 神出町北字 鴨谷773－４他	28111	019004	34度45分 ３秒	134度58分 50秒	平成14年８月19日 ～平成15年１月17日	鴨谷地区 2712㎡ 梟谷地区 1514㎡ 計4226㎡	一般国道 175号 神出 バイパス 建設事業
鴨谷２号窯	神戸市西区 神出町北字 鴨谷	28111	019004	34度45分 ３秒	134度58分 50秒			
鴨谷３号窯	神戸市西区 神出町北字 鴨谷741－１	28111	019004	34度45分 14秒	134度58分 48秒			
梟谷１号窯	神戸市西区 神出町北字 梟谷998-13他	28111	019004	34度45分 18秒	134度58分 39秒			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神出窯跡群 鴨谷支群 梟谷支群	須恵器窯跡群	平安時代	窯跡４基・作業場	須恵器・瓦	刻書須恵器

要約	調査を実施した４基の須恵器窯跡は、いわゆる中世神出窯の成立以前の窯跡群である。このうち鴨谷１号窯は神出窯跡群で最も古い10世紀前葉まで遡る窯跡で、神出窯の成立が10世紀段階まで遡ることが明らかになった。また、鉢・甕を中心とした中世須恵器の成立過程についてもその一端を示す資料が得られた。

兵庫県文化財調査報告　第407冊

神 出 窯 跡 群 Ⅲ

平成23年2月25日　発行

編　集　兵庫県立考古博物館
〒675－0142　加古郡播磨町大中1－1－1番地
TEL　079－437－5589

発　行　兵庫県教育委員会
〒650－8567　神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
TEL　078－341－7711

印　刷　福田印刷工業株式会社
〒658－0026　神戸市東灘区魚崎西町4丁目6－3